小泉八雲全集

第二巻

東京

第一書房

小泉八雲（ラフカデオ・ヘルン）

佛領西印度の二年間

譯者　大谷正信

小泉八雲全集第二卷目次

熱帶への旅

マルティニーク・スケッチ

『その國の風いかにも氣持ちよく、その氣候いかにも良く、また人は誠實なる自由のうちに住み居ることとて、その國より歸り來りし者にて、その地へ歸り行かんとの熱望を有するを余が認めざるものに、男にも女にも、一人として會ひたる事無し』――ル ペール ドュテルトル（一六六七年）

マルティニーク、サン　ピエールの公證人たる

我が親友

レオポルド　アルノー　へ

二人の散歩の――二人の旅行の――二人の談笑の――取り換はしたる同情の――不變にしてまた忘るること能はざる友情のあらゆる魅力の――樂しき檢り來る者の國の靈を語る總てのものの――記念として。

はしがき

千八百八十七年の夏、レッサー　アンティールへの旅行中に、これから後の頁の筆者は、マルティニークへ上陸すると、その島がいつも外國人に施す、そしてその爲めその詩的な――『歸り來る者の國(ル・ペイ・デ・レヴナン)』といふ――名を得て居る、あの不思議な魅力を蒙つた。彼以前の幾多の人が正(まさ)しくさうであつたやうに、魔力あるその海岸を去つた時は、その土地からさまよひ出る總ての人にその土地が與へる魅力たる――他の如何なる殘惜さとも異つた――彼(あ)の抵抗の出來ぬ殘惜さの念に附き纏はれて居る、といふことを知るだけのことであつた。だから彼は、數箇月居とどまらうと思つて、歸つて來た。だが、その魔力に左右されて、二箇年滯在した。

その滯留の文學的結果の或る物が本書の大部分を成して居る。そのうち幾多の文は、ま

た幾多の文の一部分は、前にハーパース　マガジンに載つたのであつたが、スケッチの大多數は今度初めて活字になつて世に出るものである。

『熱帶への眞夏旅』といふ題の、緒言の用を爲す文は、其大部分は、二箇月足らずで成し遂げた、約三千哩の旅行中書き留めた心覺え(ノート)から成つて居る。そんな卒急な旅行中、自分が受けた個人的經驗のただの反影以上の眞面目なことは、どんなことも筆者には殆ど企て得られぬことである。で、單純な心覺え書き留めといふ仕事からして、是認してもよいやうな横道草食ひを色々と試みて居りはするけれども、この文をば自分は、その刹那々々の映眼的また感情的印象を記錄しようとの一努力としてのみ、世に提供するのである。

本書插繪製作に使用した、氏自ら撮影の美しい寫眞數々に對して、サン　ピエール駐在英國領事キリアム　ローレス氏に感謝をしなければならぬ。

一八八九年フイラデルフイアにて　　L・　H・

熱帯への旅

熱帶への眞夏旅

一

……船は優美な、幅の狹い、長い鋼鐵製汽船で、帆柱二本、橙黃色の煙突一本、——イースト リヴー四十九號棧橋で貨物を積み込んで居る。わんぐり開けて居る艙口から、山と積み上げられて居る樽が下に見える。——荷物を下ろすので、汽力捲揚機のガラガラガタガタ、動臂起重機下桁のミシミシキーキー、滑車のギーギーて、隨分の八釜しさだ。時は七月の無風の朝、素敵な暑さで——既に八十七度。

一等船客甲板は過ぎしまた來たらん航海を偲ばせるものがある。白い日蔽の下に、此處其處に長い寢椅子が蹲うて居て、——その何れにも、無言て煙草を吹かして居るか、一方へ頭を凭らせて假寢して居るか、占有者が居る。自分が自分の船室へ行かうとして橫を通ると、或る青年が目を覺まして、特殊の光を有つた黑い眼を、——クリーオール眼を——

自分へ向ける。確に西印度人である。……

朝はまだ灰色である、が太陽は靄を解かしつつある。徐々とその灰色は消えて、美しい、淡い、氣狀の一種の青が――靈化された北國の青が――水と空とを彩る。一發の砲聲が突然重い空氣を震るはす。それは亞米利加海岸への、我々の船の告別なのである。――船は動く。埠頭は浮かみ退つて、青味を帶びて濛となる。透明な霞が空の色を得たやうに思はれる。それて其處の赤色の倉庫さへ、遠のくにつれて仄かな青味を帶びる。水平線は、今は綠がかつた輝きを有つて居る。他は到る處、極めて淡青い眼鏡で、物を見て居る感じてある……

船はあの巨大な橋の素晴らしく大きな徑間の下を潜る。それから暫くの間『自由』が我我の進路に高く聳えて居る、――初は我々の方に向いて居るやうに思はれ、それから我々の方からあちらへ向くやうに思はれる、唐金のあの冷靜な顏の莊嚴な美しさが。物の色合が冴えて來る。――天が前よりか少し青味を增しつつある。微風が吹き起こる。……

それから水が別な色合になる。淡綠の光がそれにちらつく。音を出しはじめる。小さな波が我々を見てもするやう、その頭を擡げて――船の横腹を打いたり、互に囁き合つたりする。

遙か沖は、水面に此處其處に、疾い白い閃きが見えそめて、我々の汽船は搖れ出す。……大西洋に近づきつつあるのである。日は早高く、殆ど頭上に、昇つて居る。色のおとなしい空に薄い雲が少し――眞綿のやうな、長く引き延ばした、白いのが……見える。水平線はその綠がかつた光を失つて、今は靈のやうな青になつて居る。帆柱、帆桁、綱索――白色の端艇と橙黃色の煙突――輝かしい甲板線と雪白の手摺――それがその色のある光を背景にして、殆ど眼の眩む許りの浮彫になつてくつきりと浮いて見える。日は暑く輝いて居るけれども、風は寒い。その强い不規則な煽りは人に睡氣を催させる。それにまた、機關の眠た氣な――ドド、ヘー！ ドド、ヘー！といふ……歌が眠を誘ふ。

……夕方近く、海の灰色がかつた綠の色合が消えて、――水が青になる。幾筋もの縫ひ目が白い一つの面の上て開いたり閉ぢたりするやうに、大きな閃きに充ちて居る。絕え間無しの霧雨を爲して飛沫を吐いて居る。時には、大きな赤手で打つやうな音を立てて、船の舷側へさつと上がつてピシヤリと打つ。風が募つて騷々しくなる。綱索の振り動く端が、鞭のやうにピチピチと鳴る。人の話し聲を消す程の非常なブンブンいふ音が――滑車のギーギー、綱索のヒユーヒユー、帆布のバタバタ、綱細工物のゴーゴー、そんな色んな音から成つたブンブンいふ音が――する。そして、段々聲高になつて來る、この響き渡る混合

音には節奏(リズム)が――船の規則正しい動搖に拍子を合はせての漸次強音(クレツセンド)と漸次弱音(ディミヌエンド)とが――ある。恰も或る偉大なる聲が『フォー・オー・オー！フォー・オー・オー！』と吼鳴つて居るやうである。我々は風と海流との生命中心に近づきつつあるのである。このいつも募つて行く氣息(いき)に逆らつて甲板を歩くことは殆ど出來ぬ。――が、もう全世界が青て、――極小さな雲すら眼に見えぬ。そして我々の身邊の、この全くの透明と空虚とが、眼に見えぬこの媒體の偉力をば、靈的なそして恐ろしい或る物のやうに思はしめる。……測程儀(ログ)が、廻轉毎に、正(まさ)しく小犬のやうにキーキー聲て鳴く。……こんな囂々の中にあつて、正四十呎離れた處で、それがきこえる。

……日沒に近い。日の全圓圈を横切つて我々は南へ向けて汽走してゐたのである。今や水平線は金線である。落ちなんとする日のあたり全體、その金線の光が絶大な展開をする。……丁度海の端に、日沒に向つて帆走しつつある、優しい姿の、丈の高い船が一艘居る。その氣體の火を浴びて、その船が幻になるやうに――金色の霧の船になるやうに――見える。その帆桁や帆が總てキラキラ光つて、夢の裡に見る物のやうな觀がある。

層一層深紅の色を增して、太陽は海へ落ちる。かの幻の船は太陽に近寄る、――その光り輝く顏の曲線へ觸れて、それを横ぎつて帆走する！嗚呼、その眺の靈的な見事さ！帆を

一パイに張つたその大きな船が、直ぐとその巨大な圓盤を背に、きつかりした陰繪を造り、――その朱色(ヴアミリヨン)の太陽の眞つただ中にじつとして居る。太陽の面は船の中檣の上高く深紅になり、――舳と艫との左右遠く廣がる。この不可思議な華麗なものを背にして、船の全形が色を變ずる。卽ち、船體も帆柱も帆も、黑に――綠を帶びた黑に――なる。

と見るつぎの瞬間に、太陽も船も共に姿を消す。菫色に夜が遣つて來る。そして前檣の綱索が月の面に十字を切る。

二

二日目、朝。海は素敵な青さてある、――自分には菫色のインキのやうなものに見える。水泡の雲が湧いて居る、船のつい横の處ては、美しい斑點を有つてゐて――美妙な脈理と星雲模樣とがある青色大理石の觀がある。……風は微溫て、綿のやうな白い雲が――卷雲が――四方の海の端から立ち昇る。空はやはり淡青て、水平線は稍ゝ白い靄に充ちて居る。

……グアドゥループから來た、上品な老佛蘭西紳士が、この水の色は青ては無いと無遠慮に言ふ。――綠がかつて居る(ヱルダートル)と斷言する　自分にはその綠が見分けら

れぬので、青い水といふものはどんなものか、君は知らぬのだ、と自分に言ふ。アッタンデー　アン　プー！少しお待ちなさい、今に判かりますよ！……

……空の色調が、日の昇るに連れて濃くなる、――美妙に濃くなる。かの暖かい風が催眠的な事が判つて來る。自分は顏へ青い光を――眞晝の空の強い輝かしい青い光を――受けたまま眠に陷る。まどろんで居る間、眼瞼を通して、冷たい火の如くに燃え込むやうである。はつと驚いて眼を覺ますと、一切の物が――自分の身も込めて――青になつて居るやうな氣がする。『これを本當の熱帶的青と仰しやるのでせう？』、と自分は彼の佛蘭西人の同船者に言ふ。自分の質問を驚いたやうに、『モン　デュー！ノン！どうしてどうして。これは青ぢやありません』、と彼は叫ぶ。……彼の青といふ觀念は一體どんなだらう！

馬尾藻の塊が――薄黃色の海草が――浮いて通る。船は馬尾藻の海に近づきつつあるのである、――貿易風の通路に入りつつあるのである。長い大うねりがあり、船は前後にまた左右に搖れ、そしてどたりどたりと推し寄せる水はいつも次第に青くなつて來るやうに思はれる。が、グアドゥループからの自分の友人は、『君が青だといふ』その色はただ黑味てある――ただ素敵な深みの影てある――と言ふ。

今はただ青い空と、そして自分が青だと言ひ張つて居る青い海とのほか何も無い。雲は

輝かしい光に融け去つてしまつた。頭上の瑠璃色の深淵にも、また眼下の奈落の淵にも、生き物の居る氣配さへ無い。――翼一つ鰭一つ眼に映らぬ。夕方、傾く金色の光の下（もと）に、海の色が濃くなつて群青（ウルトラマリーン）になる。それから太陽は銅色の一帶の雲の後ろに沈む。

三

三日目の朝。風は相變はらず穩かて、暖かい。空は青く澄んでゐて、水平線に――プッフと吹く蒸氣のやうな――非常に薄い雲が少し在る。自分の船室（ケビン）の開いて居る採光窓（あかりとりまど）を通して見る海の光の輝きは、窓に厚い青色硝子が篏めてあるのだと思はせる。……紺青衣物ては暖か過ぎるやうになりつつある。……

確に海は前よりか餘程青くなつて來た。空が溶けて水になつたのかと思はせる。その泡は卷雲が壓搾されて成つたものかも知れぬ――と思ふほど、日光を受けた雪のやうに、今日は如何にも法外に白い。にも拘らず、グアドゥルーブからの老紳士は、熱帶の眞の青は斯んなものでは無い、と相變はらず主張する。

……空は今日はその色合を濃くはせぬ。それを冴えさせる。――隅から隅まで燃えてて

も居るやうに青が光る。恐らくは海はその色合を濃くするかも知れぬ。——燃やされなければこれ以上光つた色にはなりやうが無い、と自分は信ずる。……西印度の海は此處の海より少しでも青さが濃い、なんてそんなことが實際あらうか、と自分は船醫に尋ねる。彼は一寸海を眺めて、『そりや青いですとも』と答へる。その『そりや』には、自分が甚だ愚な質問をしたのだ、といふことが見えるやうな驚愕の音調がある。そしてその顔附は、自分が眞面目で居るかどうか、疑を現はして居るやうである。……ではあるが、自分は、此海の水は法外に、馬鹿に、青い、と思ふ。

……一二時間書見する。椅子にかけた儘眠に陷る。不圖眼を覺ます。海を眺める——そして叫ぶ。到底もありさうにない程この海は青い！之を描かうとする畫工は氣違だと罵られることであらう。……でもそれは透明である。泡雲は、それが水に沈むと、空の青に——今は海の色が異常な强烈な光を有つて居るので、それと對照して白く見えて居る一種の空の青味に——變はる。量り知られぬ大きな染物桶を見入つても居るやう、或は、大洋全體が藍を加へて濃くされてもしたやう、に思はれる。海は空の色をただ反映して居るのだ、と言ふのは無意義（ナンセンス）で！ある。——それにしては空の方が百段も！色合が薄いのである。これが——炎々たる一種の瑠璃色が——口にも述べ難い華麗な瑠璃色が——水の本來の色

に相違無い。

グアドゥループからの佛蘭西船客は海が『青くなりかかつて居る』と述べる。

四

今日は四日目。眼が覺めると、云ふに言へぬ程だるい。――これが西印度特有の倦怠に相違無い。空は同じであるが、昨日よりか輝かしい雲が少し餘計に出て居り、――絶えず暖かい風が吹いて居る。長い大うねりがある。人間の氣息のやうに暖かいこの貿易風の下に、大洋は脈を搏つて居るやう――非常に大きな呼氣と吸氣とて、高まつたり降つたりするやう――に思はれる。かたみがはりに、その青い圓圏が、我々の前にまた我々の後に、上がつたり下がつたりする。――我々は非常に高く上がり、非常に低く沈む、――が、いつも緩やかな長い運動てある。それにも拘らず、水は見た處では平らで、眞つ平らてある。我々を持ち上げる大浪は眼には見えぬ。――その大うねりの頂上が幅が一哩もあるからて、――我々の甲板の水平からは見分けが出來ぬほどに幅が廣いからて――ある。

……午前十時。日の光を受けて、海は炎々たる、眼が眩むやうな、天青石である。グア

ドゥルーブからの余の友人は、これが殆ど熱帯の水の色だ、と親切に自白する。……水面一寸下を、浮いて流れて居る海草が、空色になつて居る。だが、グアドゥルーブ紳士は、もつと青い水を見たことがあると言ふ。遺憾ながら――自分はその言を信ずることが出來ぬ。

日中。――空の見事さは不可思議である！頭上には一點の雲も無くて――ただ青い火である！海の圓圏の暖かい濃い色から上の處、天の緣が恰も綠がかつた炎に浸つて居るやうに輝く。赫々たる海の搖れ動く圓盤が、その寶石色を天心まで閃かすやうに思はれる。

着物がもはや堪へられぬほど重すぎるやうな氣がする。そして暖かい風が、誘惑の如くに、一種の倦怠を齎す。……甲板の上で假寐がして見たいといふ、不可抗な欲望を感ずる。――浪の颯々の話し聲、船の長い前後の動搖、風のなまぬるい愛撫、それがまどろみを促す。――が、睡眠を許すには光が餘りに絕大である。その青い力が覺醒を强ひる。そして頭腦は、空と海とのこの二重の瑠璃色の光彩に、到頭疲れてしまふ。夕暮が――その菫色の薄暗がりと、涼しさの希望とを有つて居る夕暮が――來るのがどんなに有難いか！

風と水とに斯く暖か味と力とが肉感的に混合して居るといふ事が、天地五行には心靈があるといふ觀念を――世界には生命があるといふ感じを――段々强く抱かせる。こんな軟

らかい、睡眠を誘ふゆすぶりで、風と水の啜り泣きとのこんな愛撫とて、自然は情慾の或る氣分を表白するやうに思はれる。乘客共は、誘惑的な氣持ちのいゝ物事に就いて――熱帶の果實、熱帶の飮料、熱帶の山風、熱帶の女に就いて――話し合ふ。……夢を見る――希望、欲求、野心の靈的實現と共に、霞の如く輕く穩かに來る所の彼の眼を開けてゐての夢を見る――時なのである。……ギアナの金礦へ船旅の人達は黃金の夢を見る。

風は絕え間無しに段々と暖かくなるやうである。手に觸はる水の飛沫が血のやうに暖かい。日蔽を桁へ引き上げなければならず、風取帆を取り込まなければならぬ。――それても、白波は少しも見えぬ、――夢見る人の胸のやうに大洋が下がつたり上がつたりするに連れて、餘りに廣くて眼には見えぬ、巨大なうねりがあるだけである。……

日沒が、上の方は仄かな幾色の綠を經て褪せて終に菫色の光に沒してしまふ、燃えるやうな盛んな黃色い光と共に來る。――黃昏といふものは無い。日は早、前よりか短くなつて居る。……橫になつて眠らうとすると、開いて居る採光窓から、大きな囁き聲が――海の囁き聲が――來る。小聲での明瞭な話し聲のやうな――祕密を語る女の聲のやうな――音である。……

五

出港後五日目。東南からの貿易風。遠山紫の色をした大浪が盛んに起伏する。――船は帆布を一パイに擴げて居るので餘程傾く。今日は風に春日の感じが――裸樹が初めて淺緑の霧に包まれる折の、北國の森の芽生えを思はせるものが――初めての島の歌を、樹液が日の方へと初めて登るのを、想はしめ、また生の充實の念を抱かしめるものが――ある。……夕暮は西の空を金色の羊毛に似た雲を以て――『金羊毛(フリース・オヴ・ゴールド)』の羊毛を以て――充たす。

やがて宵の明星(ヘスペラス)が月の如くに輝き、星が非常にあざやかに燃える。船はなほもその帆へ萬遍無く暖かい風を受けて傾いて居る。そしてその船跡は一條の火となる。大きな火の粉が、炎の沸騰の如くに、その火の道から絶え間無しに飛び上がる。――そして青白い火から成つて居る幅廣い妙な雲が船の横を渦を卷いて行く。その道から遙か離れた處、水が瀝青(ちやん)のやうに黒い處には、何の光も無い。恰も船が、ただその龍骨て火花を碾き出し、その推進機て火を切つて、居るかに思はれる。

六

出港後六日目。風は微温で、前よりか强くなつたが、空は晴れ渡つて居る。海は藍色で美しい白波を立てて居る。大洋の色が濃くなりつつある。今は頗る濃厚になつて居るのであるが、前ほど不思議には感ぜられなくなつたやうな氣がする。——豐麗な三色菫(パンジー)色である。船の直ぐ横の處では濃藍色——或るケルト人の眼に見られる、人を魅惑する彼(あ)の色——である。

空氣に熱病やみのやうな處がある、——その熱が段々烈しくなる。一寸の力業(ちからわざ)をしても發汗する。甲板の下(した)では空氣は爐中の空氣のやうである。が然し、甲板の上では、この光と熱との效果は必らずしも不快なものでは無い。——偉大な自然力が手近に在るのである、血液はその自然力が近寄つて居ることを氣附いて居るのである、といふ氣持ちがする。

終日、空氣は澄んで居り、海の色は濃くなり、風は微溫。それから素晴らしい日沒が遣つて來る！西の空は雲の繪具て出來て居る一個の繪で——洋紅色の高い絕壁と岩山とが、綠の海に離れて屹立してゐて、その底部を海が金色の泡で打つて居る、のを夢で見て居る

やうて――ある。……

暗くなつた後も、風の肌觸はりは肉の暖か味を有つて居る。月は無い。海の圓圈は幽冥界の如くに暗い。そしてそれを横切つて例の船脚の燐光が震るへて居るのが再び現はれて――果ての水平線まで屆いて居るかに見える。それが今夜は特に鮮かで――大きな點がその中へ、星霧の中の星の如くに、時々ピカピカと出て來て――丁度天の川のやうである。火に縁取られた漣が船首から湧き出て、左へ右へと夜の中へ逃げて行つて――走る時はぎらぎら光つて居るが、それが、斷崖へ落ち込みでもしたやうに、突然消えてしまふ。うねりの波頭は碎けて火花の雨と飛び散り、大きな泡は炎と燃え、燻ぶり、やがて消える。……南洋の『十字星』が――空の穹窿につつぱりをして居るやうに、後ろの方へまた横の方へ傾いて見える。見慣れてゐない人には直ぐとは見つからぬ。能く指示して貰つて始めてその位置が見分けられる。すると、それは十字架を暗示するだけのもの――そのうちの或る物は他のものよりも明かるく輝いて居る、四つの星の稍〻四角形を爲して居るもの――といふことが判かる。

二日の間、船中で對話は餘りなかつた。一つは、暖風の催眠的な力に基づくものかも知れぬ、――また一つは、人聲を消す、波の轟きと綱索の唸りとに由るものかも知れぬが、

それよりかも、空間と渺茫とが與へる感銘に——畏敬に近い或る念を抱かざるを得ざらしめる、海と空との感銘に——基づくもの、と自分は思ふ。

七

カリビ海上の朝。——海は平穩て、非常な濃青色てある。視界に陸地が——鋭い、尖んがつた、珍らしい輪郭を有つた高い陸地が——ある。

闇の中に他の諸島の横を通つた。今自分等のまはりに聳え立つて居る島の形に似たものてあつたに相違無い。此邊の島は、明らかに噴火の所產て——ぎざぎざて、圓錐形て、截ち切つた形をしてゐて、風變はりな恰好をして居るからてある。遥か遠くから眺めると、初めは極淡い鼠色に見えた。ところが今、光が增すと、それが色合を少しく變じて——霞んだ種々な綠と、煙りこめた種々な青と、になる。海から急に突立つて、非常な高さに聳えてゐて——その一番高い處はいつも雲が懸かつて居る。——妙な長い横嶺を突き出してゐて、刳り取つたやうな變な姿の山形を推し立てて居る。——その——非常に遠く隔つた——或る物は、日の光を受けると、金色の水蒸氣から出來て居るやうに見える。また或る

物は茜の色調を有つて居る。それは雲の色なのである。近く寄るに從つて、段々綠の色味が見えて來る。紫がかつた或は青味を有つた海岸に、次第に綠の表面が出來て來て、土地の褶曲と皺波とがより鮮かな翠綠となる。でも、その色は薄い霧を透して見るやうにほのかである。

……熱帶ての初めての客が今しがた自分等の船へ乘つた。それは、恰好は普通の蠅に似て居るが、少くとも五倍は大きい、巨大な蠅である。體軀は光つて居る美しい黑て、翅には銀の筋骨と關節とがあるやうて、頭は寶石の綠、そして眼には巧妙にエメラルドが刻み嵌めてある。

幾多の島が船の横を通つて後ろへ姿を消す。日はもう餘程昇つて居る。空は濃厚な青て、足ののろい月がまだそれに懸かつて居る。水に紫丁香花(ライラック)の色調が見える。南の方に――群を爲して長く飛んで居る鳥のやうな――離ればなれな、小さな、白い雲が幾つか見える。鼠色の大きな山形が、眼前に朦朧と浮き出る。船はサンタ　クルツ指して走りつつあるのてある。

この島は、尖つてゐて高くて、眞の火山的輪郭を有つて居る。その絶壁は殆ど垂直に外(そ)れて居る。色合は紫から鮮かな灰色に至るまでさまざまて、外形はまだ濛として居るが、

然し、峰や横嶺のまともに日光を受けて居る處は、美しい綠の光を放つてくつきり見え、峰と峰との間の峽谷は霞んだ青に充たされて居るやうに見える。

近づくに連れて、日の光を受けた表面は、前よりかもつと光つた綠になつて、現はれ出る。峽谷や隱されて居る谷間は、まだいろんな青と灰色とのまま居るが、日の輝きに充分に照らされてゐる地點は、丁度或る種の蜂鳥の羽毛に燃えて居るのと同じな、焔のやうな綠を見せる。そして此島の光澤のある樣々の色が、光線の變化に伴なうて變ずるが如くに、この島も亦此處其處に――鮮綠色から青に、そして青から灰色に――色を更める。……が、今はその島の近くへ來て居る。前面には輝かしい高い丘陵が美しく重なり合うてゐて、――遙かに續く海岸線は非常に低くて長くて青々としてゐて、それを白い濱邊が緣取つてゐて、蜘蛛のやうな棕櫚の頭が總飾を爲して居る。直ぐその向ひ側に、別な棕櫚が幾本か釣り合ひよく立つて居る。その幹は研ぎをかけぬ銀の圓柱のやうに見え、その葉は唐金の如くに微かな閃きを見せて居る。

……港の水は透明でそして薄綠である。魚が澤山に、そして小さな鮫が幾つか、居るのが見える。白い蝶々が船のまはりを青い空に飛び廻つて居る。赤裸々の黑人の男の子が濱て水浴をして居る。――みんな上手に泳ぐが、鮫が居るから遠くへ泳ぎ出ようとはせぬ。

有色の娘を船へ乘せる爲めに小舟が一艘岸を離れる。その娘達は、丈が高い。そして非常に黑くはあるけれども、見つともなくは無い。——彼等はベーラムや果物や香水を買つて吳れと、いろんな愛想のいい言葉を使つて、船客に口說く。……自分等は小舟で上陸する。港內の水は微かに惡臭がある。

八

入江を見晴らす丘陵の綠蔭の下の、その入江から眺めると、フレデリクステッドの町は——桃花心木、麵麭の木、マンゴ、苔蒲林庻、棕櫚などが一列を爲して居る絕え間から垣間見の出來る、羅馬式の廣小路や敎會やアーチ形の多くの建築があつたりして、——火のやうなエメラルドから薄黑い靑味がかつた綠に至るまでの少くとも五十通りの異つた色合から成つて居る、不規則な一と塊になつて——西班牙風の美しい町の觀を呈して居る。だが、その街路へ入ると、美のその幻想は消えてしまふ。ただ二階建の建物のある、腐れかかつた、崩れかかつた町だといふことが判かる。建物の下の方は、アーチのある西班牙式設計で、普通は、明かるい暖かい黃色に塗つた、溶岩か煉瓦かで出來て居るが、二階は大

抵は塗らずにあつて、輕い材木で粗雜に建つて居る。大きな拱道で街路へ出られるやうになつて居る、重くるしい拱廊(アーケード)や内庭が澤山にある。溶岩は家屋建築にも用ひられまた敷石にも用ひられてゐて、其處の狹い街路で、非常な日の光の中(なか)を山手へ登つて居るのを見ると、火山岩の峨々たるが中(なか)を切り開いて造つたのか、と思はれるのが少からずある。

だがどの建築物も廢頽の觀がある。漆喰(スタツコ)も塗料も到る處落ちかかり剝げかかつて居る。壁には割れ目があり、正面(ファサード)は崩れかかつて居り、屋根は落ちかかつて居る。地震地方にふさはしく堅固に建つて居る地階は、脆さうな木造の二階と對照して、法外に重げに見える。その理由の一つは、この町は、千八百七十八年の黑人一揆の折、燒かれて奪掠された事にあるかも知れぬ。――その際、西班牙風の下階は能く火に耐へたので、家屋の二階だけ建てなほせばいいと判つたのであつた。然し、最初の植民建築家の如くに、堅固に耐久的にやらずに、工作を安價に脆弱にやつたのである。

町は非常に翠綠に富んで居る。キャベツ椰子とココア椰子とが、小屋であらうが公署であらうが、殆ど家といふ家の上に高く頭を垂らして、あらゆる街路を見下ろして居る。――到る處に裂けた青々した芭蕉の葉が見られる。家の内庭には、丁度環虫の體軀のやうに、環節がありさうに思へる程條(すぢ)のついた、銀灰色の幹を有つた立派な棕櫚を、時たま見るこ

ともあらう。

市場へ――二列の苔滿林度樹が横ぎつて居て、一方だけ西班牙風の廣場(ピアツァ)に限られて居る、石敷きの廣い四角な地所へ――行くと、野蠻的畫趣の一光景を研究する事が出來る。腰掛も無く、露店も無く、假小屋も無い。物賣りの人は日當たりの地面か、又は近くの拱廊の段々かに立つか、坐るか、しやがむかして居る。其品物は大抵は足下(あしもと)に積み上げてある。小さなテーブルを有つて居るものも少しはあるが、槪して云つて、食べ物は直かに砂塵の地べたに置いて居るか、廣場の段々に積んで居るかである。形無しに壓し潰した大きな林檎といつた觀(みえ)のある、赤味がかつた黄金のマンゴがあり、バナナの總があり、鮮かな綠のココアナットの金字塔があり、金綠の蜜柑の山があり、北國人の眼には全く見たことも無い、他の種々な果物や野菜がある。……物を問うても無駄である――物賣りの黑人は、西印度外で通じる土語は一つも話さぬ。話すのは、或る亞弗利加語のやうにきこえるネグロ英語で――不慣れな耳は其中から理解の出來る語を一つでも引き離す事が出來ぬほど、非常に早く注ぎかける、母音と子音との轉がり出る一流(ひとながれ)で――ある。或る親切な白人が自分の傍へやつて來て、一と文句自分に覺えさせて呉れた。――『マッサ、ユーヲンコックナーフーバイ?』(マスタ、ドゥー ユー ヲント トゥー バイ ア ココアナット)

その市場は非常な雜沓て、——眞晝の凄じい日の光の下(もと)に、派手な色彩に充ちて居る。買ふ方も賣る方も大概黑人て、——この人混の中には黄色な又は鳶色な人間は殆ど見當たらぬ。其處に居る者の大多數は女てある。いづれも極めて簡單な、殆ど野蠻的な、扮裝をして居る。袴(スカート)一枚または下袴(ペチコート)一枚まとうて居るだけて、その上へキャラコの短衣のやうな物を着て居るが、それは臀部から下へ二吋とは垂れて居らんて、腰のあたりで帶か紐かで締めて居る。袴は、脚部と素足(すあし)とを充分に見せて、踊り子の袴のやうに鐘形に廣がつて居る。そして頭は、頭帕布(タルバン)のやうに見えるやう捻(ね)ぢた、白いハンケチて蔽うて居る。そんな裸足の女黑人が多勢——頭の上へ包か籠か載せて、非常に長い葉卷煙草をくゆらせながら——自分の横を通つて行く。

その女達は、槪して丈が低くてずんぐりて、胸を餘程前の方へ張つて、長いしつかりした足どりて、驚く許り眞直ぐになつて歩く。手足は丈夫て、見事に圓々(まるまる)して居る。歩く折も立つて居る折も、その姿勢は嘆賞すべきものがある、——こんなに詰まつた力強い小さな恰幅に、形の眞の優美が缺けて居るが遺憾てあるが、さうて無ければ優美なといつても宜いぐらゐてある。みんな派手な木綿衣物を着て居る。そして、一番多く用ひられて居る色合は淡紅と白と青なので、多勢集つて居る時の衣裳の眼に映ずる感じは、頗る氣持ちが

好い。女の半數は煙草を喫つて居る。英語の音色とは全く異つた聲の調子て、その訛り英語を使つて、みんな聲高に饒舌る。佛蘭西語の發音と聲の調子とて、英語を口早に發音しようと力めてても居るやうに、時折きこえることがある。

その綠色の蜜柑は、香氣が非常に好くて、驚く許り汁氣が多い。それを一つ皮剝くと、幾度石鹼附けて洗つても、その日一チ日兩手の皮を匂はすに足る。……自分等はポルトリコ葉卷を喫ひ、ラムを大いに加へた西印度レモナードを飮む。煙草の味は濃くて、甘い。ラムは燗はりが好くて、甘くて、飮んだ後の心持ちが氣が和らぐやうて快適てある。兩方とも香氣が强い。この兩產物の風味には衞生上獨得な點があり、その生地の儘の純眞さを保證する無類無比なところがある。何となく、熱帶の果實花卉が有つ汁氣と香氣のやうに、たつぷりした、また淡泊なところがある。

廣場から行ける街路は、强烈な日光にきらきら猛烈に輝いて居る。——地面は、殆ど眞つ白て、眼が眩む。……美しい顏は殆ど見當たらぬ、——街路ては、通る者はみな、黑人てある。だが、開いて居る戶口を透して、時折、可愛らしい——非常に黑い眼を有つた——クアドルーン（白人と黑白雜種人との間に生まれた者）の顏を——熟したバナナのやうに黃色な顏を——瞥見が出來る。

……今は眞晝過ぎてある。丘陵を見上げるか、或は、海岸へなだらに下(くだ)つて居る街路を見通しするかすると、驚く許り種々様々な木の葉の色が眼に逢着する。金綠、サップグリン、種々な色合の青味のあるそして金屬性の綠、赤味がかつた綠、黄味がかつた綠がある。甘蔗畠は廣い一面の美しい金綠てある。それに劣らず鮮かなのは、ポムカネルの簇葉の塊て、レモンとオレンヂとの木立て、ある。が、苔滿林度と桃花心木(マホガニー)とは餘程くすんて居る。到る處、棕櫚の冠が木立の輪郭の上に抽んてて、青い光に一種金屬性の微かな閃きを放つて震るへて居る。苔滿林度の重くるしい密林の中から、教會の尖塔が聳え立つて居る。その教會のむきだしの孔には、どんな硝子戸も格子戸も鎧戸も無くて、方々に口の開いて居る石造建築の骨組みて、全く天津風に開放されて居て、その花崗岩の總ての口で呼吸(いき)をしようと喘いて居るやう――この瑠璃色の暑さの中で呼吸(いき)を切らして居るやう――に思はれる。入江ては、その水はこれ迄に無く綠色に見える。非常に綺麗に澄んて居るので、光が大船小舟の下(した)の、どん底まて入つて行く。だから船は極薄い綠の蔭を投ずるだけて――非常に透明だから、日光から日光へと泳ぎ行く魚を判然と見ることが出來るほどてある。

　日沒は純な色の素晴らしい光景を見せて呉れる。西は一面の黄な輝きて――レモン色の火燄て――ある。が、それが青へ溶け込むと、絶妙な綠色の光になる。……自分等は明日

此處を去る。

……朝。綠の丘陵は青味のある水蒸氣にぼんやり浮いて居る　町の左方の、マンゴ樹や苔滿林度の下の、薄黃色のなだらかな長い濱邊には、早、水浴者が——みんな男か男の子かで、いづれも素裸、黑いの、鳶色の、黃色の、白いのと——群を爲して居る。白い水浴者は、兵營からやつて來た駐馬の兵隊である。彼等の皮膚の北國的な輝かしさは、そのまはりの自然の濃い色彩、併びに土人の暗黑な皮膚の色、と殆ど驚くに足る對照を爲して居る。非常にほつそりした、やさしげな、鳶色の若者が——鹿のやうに輕々しい體格の若者が——幾人か彼等と一緒に水浴をして居る。それは多分クリーオールであらう。黑人の水浴者のうちには、見苦しい顏をした、そして驚くほど長い足を有つたのが幾人か居る。……やがて、小さな男の子達が、馬を牽いて、濱へ下りて來る。——みんな衣物を脫いで、裸で馬の上へ飛び乘つて、——朝日を浴びて、わめきながら、叫びながら、水をはねとばしながら——海の中へ騎つて行く。古い唐金のやうな、美しい鳶色をしたのも居る。跳んだり、相撲取つたり、走つたり、貝殼を投げたりして居る、この唐金色の身體の無意識な姿勢ほど、彫像的なものは世にあり得まい。彼等の單純な美は、そのまはりの自然の綠色な創造物の美と、感心なほど旨く調和して居り、——岸に沿うて釣り合ひ能く立つて居る

棕櫚の申し分無しの自己平衡と、缺點無しに調子が合つて居る。

ドーン！すると木精がまた雷音を爲してドドーン。船は徐に港外へ動き出て、出ると速力を早めて東南に向ふ。……かの島はゆるやかに半廻轉して、それから後退りするやうに見える。船の前途を横ぎつて、かの島の西端がそれで終つて居る所の蜿々たる翠綠の支脈から、色を薄く引き伸ばしたやうに海上へ延び擴がつて、綠に光つた長い帶のやうなものが見える。それは暗礁で、しかも危險な暗礁である。その暗礁の上に高く横たはつて、青い光を背に非常にくつきりと浮き上がつて、眞横になつて居る難破船が――二檣帆船の屍體が――ある。甲板は落ち込んで居り、船室の屋根は取れて居り、檣は根もと短く折れ取れて居り、空な船艙は日にむきだしに大口開けて居り、船體の上部は全體黄ばんだ白い色を――日に漂白された青の色を――呈して居る。

振り返つて見ると、山々はなほも浮かみ退る。そのきらきらした綠が、光の減つた色合に變つて居る。其處此處が青味を帶びつつあるが、その輪郭はまだきつかりしてゐて、その高いなだらな斜面に白い斑點がある。それは村や町なのである。その白い斑點が急速に小さくなり――鹽粒ほどの大いさに縮まり――到頭消える。それから島は萬遍無しに青くなり、霞んで來て、山の夢のやうに濛平となり、――しまひに、煙の如く灰色になつて、

それから蜃氣樓のやうに地平の光へ溶けてしまふ。

又も黄色な日沒て――妙な恰好の、黑い、濃い、異常な雲の爲めに不思議な觀を呈した日沒て――ある。夜が黑ずみ、またも南天の十字星が船首(みよし)の前にちらちら光り、そして天の川が二つ――一つは大宇宙(コスモス)の天の川、今一つは船の後(うしろ)に黑い大海の上に延びて居る彼(あ)の一層靈的な天の川が――現はれる。この方の天の川は、船の節奏的な動搖に伴なうて、規則正しい間を置いて――交互に廣くなつたり狹くなつたりする。船の前では、舳が火を噴く、船の後(うしろ)では、フレゲソン（アケロンへ流れ入るといふ幽冥界の火の河）のやうな火焰と怒號とがある。そして風と海との聲が、我々は互の話が出來ぬほど――大聲出しても互の言葉がききとれぬほど――高くなる。

九

八日目、早朝。また別な青い港に、――黄色な濱の緣から、雲の懸かつた一番高い山頂に到るまで、總て綠の、波と起き伏す高い山に圍まれてゐる、半圓形の大きな水盤に――碇泊して居る。此處の土地は、噴火で發生したものといふことを語る、彼(あ)の投げ上げられ

たといつた姿を有つて居る。妙に扇形をした山が幾つもある。それは裾から頂までエメラルド色をして居るが、でも噴火山たるものの骨相悉くを具へて居る。其側面の尾根は、あんな翠緑ては居るが、下は溶岩に相違無い。西の方、眼もはるかに——濃緑、淡緑、青味のある緑、それから霞がかつた灰色と、順になつて——火口狀の長い山脈が連らなり續いて居る。切り削いだやうなの、丸味のあるの、でこぼこなの、とあるが、その山はすべて皆、曲線を爲して居る窪んだ土地か絲筋かで——極低い谷で——互に繋がり合うて居る。そして距離の遠近に依つて、色を異にして段々と續いて居るこの山脈は、昆虫の形に似た、巨大な蟻の體に似た、體節のある接ぎ目のある、妙な外觀を呈して居る。……これがセント キッツである。

自分達は搖れて居る濃青色の水の上を船て上陸して、長い埠頭を後にし、大きなアーチを潜り、橋のやうなものを越えて、色の鳶色な又は黑い人達の一群の中を、バス・テルの町へはいる。

外觀は頗る熱帶的である。が、フレデリクステッドよりか餘程くすんで居る。到る處に棕櫚が——ココアや、扇棕櫚や、キヤベツ椰子が——あり、麵麭の木、苔滿林度、バナナ、印度無花果、マンゴ、それから黑人が——『サブサブ』とか『ドッールドゥール』とか—

―譯の分からぬ名て呼ぶ珍らしい木が澤山にある。が、サンタ　クルツよりも、色が乏しい、光の反映が乏しい。古めかしさも少い。西班牙風の建物も無く、カナリヤ色の拱廊も無い。その狹い街路は何處も鼠色かニユートラル・ティント色て、地面は濃灰色である。住家の大半は木造て、煉瓦の支柱の上に載つて居るか、溶岩の大きな破片の上に高まつて居るかてある。この町を見下ろして居る、大きなそして何時も雲を纏うて居る山からの呼氣が、一切の物を汚して、植物の色まで黒ずませたのかと思はれるほどである。

此處の人達は畫趣が無い。服裝が平凡であり、女の衣裳の色合が黒ずんで居る。鳶色と、くすんだ青と、鼠色とが、淡紅や、黄や、菫色よりも普通である。時折、美しい雜種兒標型を――海上のスループ船のたをやかさに似たしなやかな身振りをして歩んで居る、丈の高い鳶色の娘を――眼にする。――が、それは屢〻眼に映ずる眺めては無い。途中て出會ふのは大半、黒い人間か、黒味がかつた鳶色の人間かてある。商店のうち、非常に黒い髮と眼とを有つた黄色な人間が――微笑もしない人間が――經營して居るのが澤山にある。それは葡萄牙人なのてある。立派な建造物が少しはある。が、この小さな町が觀光客に提供し得る最も快適な眺めは、その小綺麗な植物園て、其處には榕樹があり、棕櫚があり、素敵に大きな百合があり、非常に珍らしい果樹があり、またうつくしい小さな噴水がある。

そんな樹木に、一種特別なチランドシアの垂れ下がつて居るのがある。我々の所謂西班牙苔に餘程似たものであるが——然し黑い色！をして居る。

……船が南の方へ遠のくにつれて、この島の後すざりする外形が次第に火山的な姿に見えて來る。山と圓錐形な山とが一とつながりになつてゐて、その山々がいづれも非常に綠て、そしてそれが細長い谷て繋がれてゐるのであるが、その谷間が低いので、島の向ひ側の圓い海の緣がその山峽から透見が出來る。船は截形狀の山々の橫を過ぎ、半分どころから切り取つた峰の切株の觀を有つ山々（熱帶の草木に口を塞がれて居る舊噴火口）の橫を過ぎる。

その深綠な連山の上にそして奧に、南に當つて、別な火山形の山々が——非常に遠くに、雲かとまがふほど薄灰色に——聳えて居る。それはネギスの山嶽て——地下の熱火の所產の一つて——ある。

そのネギスが段々近くなり、着々と形體を鮮明にして浮き出る。それは小さな山が二つ橫にくつついて居る一つの大きな山て、頂が三つある。そのうち一番高い頂は、上に雲が高く固つて附いてゐて、今なほ噴煙を揚げて居るやうに見える。——つぎに一番高い嶺は、自分が今まで見たうちでの一番均勢な噴火口形を示して居る。何れも皆まだ灰色がかつた

青か或は灰色かである。その青味の中から次第々々に綠色の高い長いほの光りが出て來る。船が近寄るに連れて、その島全體が、海から空まで、悉く翠綠になる。その大きな死噴火口が、その年中綠で居る巨大な花冠を示す。山腹の裾近い處に、小さな植民部落が白く、赤く、また鳶色にちらばつて居る。その家屋、風車、製糖工場、高い煙突が識別出來る。——甘蔗栽培地が金綠の表面を展開する。

船はその横を通る。その島は、背後に沈むやうには見えずに、幽靈になるやうに見える。その外形何處もが朦朧となる。暫くの間、元どほり綠で居る。——が、それは色の附いた水蒸氣のやうに、ぼんやりした、妖怪的な綠である。海は今日は殆ど黑に見える。西南風が光ある霧を日に罩めて居るからである。そしてネギスの幻は、その絶大な光に溶けて、全く消えてしまふ。……またもや四方陸地が見えなくなり——船は濃藍色の海の圓圏の中心に居る。水線が地平線の絶大な光を背に——襯せて永久の青に融け入る前に非常に高く燃え上がる尨大な白い光輝を背に——きつかりと黑い線を見せる。

一〇

やがて一片の雲のやうな、高い白い恰好の物が――海の紫がかつた暗い縁の上に――船の前に姿を現はす。雲の恰好したその物が、外形は變へずに大きくなり、高くなる。雲では無くて、島なのである！その輪郭が――色の極めて仄かな筆書きを被つて――明らかになりそめる。朦朧たる谷間が見え、妖怪のやうな盆地が見え、薄青や薄綠の幻のやうな傾斜地が見える。眸裡に映ずるその姿が、如何にも蜃氣樓のやうなので、眞實の島を眺めて居るのだ、夢では無いのだ、と思ひ込むことが困難なほどである。光のある霞の中から全く突然に形を爲して現はれたやうてある。その横を過ぎて數哩進むと、その島は再び霞の中へ消え失せる。

……また一つ前よりも大きな幽靈が見える。が、船はそれが實體になるまで、それ目がけて眞直ぐに進む。それはモンスラなのである。目立つて高い山が一つあり、そのまはりに鮮かな噴火口の形したものが圍つてゐて、幾列びの綠色の山が、低い谷で繫がつてゐて――今まで通つて來た島々と、一家內のもののやうに似て居る。その一番高い峰の上には

また、一團の雲が徘徊して居る。プリマスの小さな白い赤い町は、その大きな山の麓に巣籠もつて居るのである。船からの一發の禮砲は、素敵な偏舷齊發のやうな反響の應答を受ける。

　プリマスは驚く許りの皺波がある、緑の丘陵の麓を縁取つて居る、濃密な木の葉に半分以上隱されて居る。前方にはまた棕櫚の幕がある。近寄ると、岸壁に抽んでて建物の正面(ファサード)が一つ二つと、それから、その上には若い棕櫚が砂糖栽培地の甘蔗のやうに密生してゐるその石造海壁の、とある開き口(あくち)から突出して居る、長い埠頭と、だけ見分けられる。だが、砂利が敷きつまつて居る海岸の方へ降(くだ)つて居るその街路へ行つて見ると、非常に狹い石鋪道があり、――險しくて、不規則で、妙な曲り目や角(かど)が澤山あり、――同じくまた、棕櫚の羽毛を聳え立たせたり或は石垣の上へ大きな枝附燭臺の恰好した仙人掌を見せたりして居る内庭が到る處にある――氣持ちのいい程眠氣を誘ふやうな小さな町で――極小規模な熱帶町で――あることが分かる。總てが昔風で、閑靜で、風變はりで、そして小さい。棕櫚すら――細つそりして花車で――小形である。その姿勢と細長さとには、やがて女にならうとはして居るが、まだ子供で居る年若い娘の美はしさに似た處がある。

　素晴らしい日沒である、――濃淡を異にした微妙な薔薇色と緑とになつて星の方へ暈げ

て居る、火のやうな橙色の光耀てある。すると黒人の船頭が船尾へ來て、一船客を陸へ船に乘せて行く特權に就いて猛烈に口論をする。すると、半裸體て、叫んだり色んな手振りしたりする、日沒を背にしての彼等の半面影像は、大きな黑い猿の姿に見える。

……蒸氣と帆とて、東南の暖かい風を――非常に濕氣のある、非常に力强い、そして睡氣を誘ふ風を――受けて、再び南を指して進む。風に向つて居ると、涼しいといつても宜い氣持ちてあるが、風の當たらぬ處へ身を置くや否や、だくだくと汗が流れ出る。船は非常な大うねりに乘つて搖れる。夜になると眞暗てある。驚くばかりの燐光が見える。

二

……朝。藍色の海を昇る金色の日の出。風は暖かい非常な愛撫て、空は一點の汚の無い青。船はドミニカ向けて――小西印度諸島のうちて一番高い島向けて――走つて居る。その島の半面影像が遠くてまだ何處も菫色をして居る間は、それよりか森嚴な美を有つたものは何物も想像だも出來ぬ程てある。山々の峰をその尖塔として、海からすつくと、水平線に屹立して居る、壯大な大寺院（カテードラル）の姿に見えるのてある。

郵便物を陸揚げする間だけ我々はロソーに滯留して、この島の美はしさを嘆賞する。美しい皺波を有つた、綠と靑と灰色との山々の塊て、——妙に突飛な尖峰峻嶺を有つた陸地の隆起てある。綠な山々の背後に、靑い山々が浮き出て居り、その背後に灰色のが——みんな燃えるやうな空を背に尖んがつてゐるのが——山峽の間から或は岬の後から突き出て居る。そのエメラルド色の海岸の襞積塩梅と窪み具合とは筆にも書けぬ程絶妙である　峽にも谷にも、甘蔗畠の色が、溶けた唐金の池のやうに光つてゐて、其邊の山が有つて居る色合に含まれた光の精髓が、滴り落ちて其處て澄み淸まつたのかと思ふほどてある。我々の遙か左の方に、鮮かな綠の横嶺が、今は土耳古玉色をして居る海へずつと突き出てゐて、その先きには、臂のやうな曲線を描いた靑い、美しい山容が、此處其處に綠色の光つた皺を見せて、海へなだらに傾いて居る。そして前景からしては、その輪郭の柔らかな姿の靑を背にして、椰子が——いづれも日に輝いてきつかりと——くねり立つて居る。

……それから一時間經つ。と、マルティニークが眼の前に浮き出る。初には全く灰色に、靄のやうな灰色に、見える。それから靑味がかつた灰色になり、それから全く綠になる。

これ亦この美しい火山家族の一員てある。自分等が既に馴染みになつて居るのと同じ山容を有つて居る。その山々のうち一番高いのは、自分等が見慣れて居る雲の頭巾を冠つて

居り、同じ黄金色の野原が見え、同じ驚く許り變化に富んだ翠綠が見え、海中遠くへ突き出て居る——疑も無く昔の熔岩の流が造つた——同じ長い綠色の橫嶺が見える。が、それがいづれも、今度はもつと堂々と、もつと壯大に、繰り返されてゐて、——これまでに見たどんなのよりか、もつと大規模に出來て居る。土地がそれから巨大な波動を爲して左右に海までなだらに傾斜して居るモンターヌ　ペレ（禿山の意）（その雲の處までも綠てゐるのだから、この名は附け誤りである）の永久に雲に包まれて居る頂が打仰がれる、此半圓を描いて彎曲してゐる港は、人間の眼が見得る最も美しい眺望の一つである。港から斯うして眺めると、全島の容姿は、一と塊の綠で、それに此處其處に紫がかつた條（すぢ）や影が見えるのである。それは窪んだ森の暗がりか又は雲の動き行く影かである。サン　ピエールの町は、その陸の端に在つて、その後（うしろ）の小山からずるけ落ちでもしたやうな觀がある。それ程に街路が、石造の瀧を爲して、港口の方へ妙に轉がり込んで居るので——それには一面に瓦葺き家屋の赤い波が打つて居り、その間から——其處の大敎會堂のクリームがかつた白い、雙子塔よりかも高く——巨大な棕櫚が素敵に高く頭を突き出して居るのである。

　船は澄んだ青い水に投錨する。砲聲は山彥の長々しい雷音に答へられる。

　すると海岸から奇妙な小船隊が自分等の船指して遣つて來る。ボートが一艘と獨木舟が

二三艘居る。が、其船隊の大部分はただ木を組み合はせたもの——船積函かラード箱かて造つた、角を三角にした底の扁たいもの——てある。それには、色は綺麗な明かるい黄からして、濃い赤味を帶びた鳶色若しくはチヨコレート色に至るいろんな——年齢は十から十四の間の男の子が——裸體の男の子が坐つて居る。其奴等は、右手左手どちらにも握つて居る、扁たい四角な小さな木切れを橈にして、漕ぐ。そしてその蓋の恰好した物をば、きちんきちんと、拍子正しく——其一對一對の小さなむきだしの腕が、ただ一つの衝動に依つて動きてもするやうに——左右の水へ浸ける。この漕ぎ方には、熟練のほども見えるが、無意識な優美さが大いに在る。それから、自分等の船を廻つて、この可笑しな小舟共が——衝突するかと思ふ程に近く馳せちがひ入り亂れて漕ぐが、決して觸れもせずに——輪を描き始める。この子供等は、船客が投げて呉れることと期待して居る、貨幣取りに水潜りしようとして、出て來ただけてある。みんなクリーオールを饒舌り、笑ひ、甲高な聲て叫んて居る。どの眼も、鳥の眼の如くに鋭敏て又輝いてゐて、甲板の船客の顏を見つめて居る。『タンション・ラ！』と、十人も一緒のソプラノ聲が叫ぶ。或る船客の指がその胴衣のポケットへ入つたのて、その子供等は目を配つて居るのてある。風を切つて、ヒラヒラキラキラと、英貨シリング銀貨が一つ舞ひ上がつて、其小船隊の向うの深い海へ落ち

る。直ぐと其子供等は飛び上がつて、その小さな盥の中から眞逆様に水へ落ち込み、それを追つかけて潜る、水が青いので、うは向きになつて居る足の裏だけ除いて、それは殆ど白く見えるのであるが――そのしなやかな身體は全く赤に見える。沈んだと思ふと殆ど直ぐとみんなまた浮き上がる。其一人が取り返した其銀貨を水の上へ腕を延ばして持ち上げて、それから保管に口の中へ入れる。つぎからつぎと銀貨を投げる。が、投げるが早いか、直ぐ持つて上がる。小銀貨は雨と落ちるが、一つも無くしはせぬ。此少年共は、魚のやうにたをやかに、見た處何の努力無しに、水の中を突つ切つて進む。其多くは、確に立派な顔をした子で、感心なほど丸々した手足をしてゐて、手先き足先きが實に花車に出來て居る。が然し、中で一番上手に潜り一番迅く泳ぐ子は、皮膚の色の赤い子である。――其顔は寧ろ平凡であるが、其細つそりした身體は、古代の銅像の優美さを有つて居る。

……自分等は、西印度の市邑のうちで、一番古めかしい、一番奇妙な、そして其上一番美しい、サン ピエールへ上陸して居る。家は悉く石造でそして石が敷いてあり、街路は極めて狹く、木造か亞鉛製かの日蔽があり、赤瓦葺きの尖つた屋根を破風附の屋根窓が貫いて居る。建物は大半澄んだ黄色に塗つてあつて、上の熱帶空の燃えるやうな青い紐と氣

持ちの宜い對照を爲して居る。そして絶對に平坦な街路は一つも無くて、その殆ど總てが崗へ上がつたり、窪みへ下がつたり、曲つたり、捩れたり、急な角度を描いたりして居る。到る處に流れの――石敷きの往來と可笑しな程狹い歩道との間にしつらへてある、幅一呎乃至三呎の深い溝を流れる水の――聲高い囁き聲がある。建築は頗る古い。多分十七世紀のものであらう。ニユー　オルリアンズの古風な佛蘭西區域の特徴を爲して居る彼の建築を大いに憶ひ出させるものがある。その種々な色合、種々な形體、種々な通景が、悉く水彩畫研究の爲めに――或る突飛な美術家の氣まぐれを喜ばす爲めに　わざわざ選擇し若しくは設計したもののやうに思へる程である　窓は硝子を嵌めぬ枠無しの孔で、鐵の横棧のあるのもあるが、ヹネチア式の簾同樣に、光線も空氣もそれから入ることが出來る、動かすことの出來る割り板の附いた、重い木製の鎧戸をどれも有つて居る。それは大抵綠か或は青味を帶びた鮮かな灰色かに塗つてある。

港へ――苔蒸した古い石段で――下つて行つて居る街路は實に險しいもので、下の瑠璃色の水の處までそれを見下ろすと、絶壁から下を瞰下ろすやうな感じがする。その大通の――ギクトル　ユーゴー町の――或る跡切れ目からは、船が多く碇泊して居る港内の、鳥目觀といつたやうなものをする事が出來る。下の街路の屋根が脚下に在つて、後ろには山

道に會するやう別な街路が高まつて居る。この街路は非常な急角度で登つてゐて、處々跡絶えて溶岩の石段になつて居るが、その石段には草が叢に生え苔が緣(ふち)に蒸して居る。

市は外貌頗る堅固さうである。それは岩の所産なので　石の上へ石を積んで建造したものでは無くて、山の一と破片(かけら)を斫り切つて造つた觀がある。住宅は、普通は地階一階それに屋根裏とだけから成つて居るが、厚さ三呎の壁を有つて居る。――海に面して居る或る街路では、壁はもつと厚くて、疊壁のやうに外へ傾斜して居るから、窓と戸との垂直な引込み(リセス)の處は扶壁と扶壁との間に開けられて居るかの觀がある。初期の植民地建築者がこんな建て方をしたのは、一つは地震の用心の爲めであつたのかも知れぬが、一つは涼しくしようといふ爲めであつたらう。――兎に角、その名に――「岩の聖者」〔サンは聖者、ピエールは岩〕といふ名に――充分叶つた相貌をこの町に與へて居るのである。

そして到る處、冷たい、水晶のやうに綺麗な、山水(やまみづ)が――街路を洗つて――奔流して居る――時々諸君は、日に銀の圓柱を投げ上げ、或は一群の黑い唐金のトライトンや唐金の白鳥の上へ輝く飛沫を雨降らせて居る、公設の噴水に逢着する。プラース　ベルタンのトライトンは諸君は急には忘れぬであらう。――身を曲げて居るそのトルソは、砂糖入の大樽やラム入の樽を轉がして、非常な暑さの中を、日一日倦まず其處で働いて居る彼(か)の黑

檀色の男の姿をモデルにしたものかも知れぬ。それから諸君は、散歩の途中、とある建物の角(かど)に、或は堡塞の境界の厚壁や公設の四角な遊園を圍んで居る厚壁に、しつらへてある飲料水の小さな噴水に――幾條のきらきらした水が、石の獅子の口から迸つて居るのに――屢々目がとまるであらう。巧に誘導し且つ分岐した或る山の急流が、斯く永遠にこの市街を清爽ならしめ、――その噴水に水を供給し、その内庭を涼しからしめ――て居るのである。……之をグーヤーヴ水と呼んで居る。街路を走り流れてそを清淨ならしめて居る流とは異つた水である。

畫趣と色彩。この二つはサン　ピエールの特別なそして他に類の無い魅力である。『大通(グランドルー)』卽ち――町の長さを端から端まで通つて、山腹へ上つたり窪みへ下りたり、橋一つ渡つたりして居る――ギクトル　ユーゴー町を通ると、諸君は左右の燃えるやうに黄色な壁と、頭上の龍膽青の空(そら)の凹凸のある細長い片(きれ)との、對照に段々と魅せられて來る。その上また心を恍惚たらしめるのは、市街の背後の山の、火のやうな綠へ登つて行つて居る十字路を眺めることである　この大往還の下(した)の方では、他の街路が青へ――水平線と海との暖かい青へ――行き拔けになつて居る。その街路は入江の方へ階段で下つて居るのであるが、その階段は年月の爲めに黑くなつてゐて、兩側とも壁に近く苔が少し生えて居る。上(うへ)の街

路から下の街路へ容易く轉げ落ちることが出來る程で、その階段は恐ろしいくらゐ急である。『大通』から、そんな開き口を透して水の方を眺めると、下町の角屋敷の二階と丁度同じ高さの處で、水線がその青い空間を横に切つて居ることに氣が附くであらう。時には、脚下一百呎の處に、——見た處では空色の中に吊り下がつて、青い光に浮かんで——その瑠璃色の開き口に船が一艘宙に居るのが見える。そして到る處に且ついつもいつも、日當たりにも日蔭にも、この市街の香が——サン ピエールの特徴の匂ひが、——やつて來る。それはクリーオールが好むあの熱帶的な妙な食物に用ふる、砂糖と蒜との混淆を思はせる或る合成の匂ひである。……

二

……實に奇妙な、驚くべき人民である、——『亞刺比亞夜物語』に見る人民である。色は樣々であるが、主要な一般の色合は、市街そのものの色合同樣、黃色で——ムラトレス、カプレス、グリフ、クオーテロンス、メティス、シヤビーヌの特徴を爲すあらゆる色味の混合を爲して居る黃で、——一般の感じは豐かな鳶色がかつた黃である。自分等は雜種な

人民の中に　―西印度中で一番美しい混血人種の中に――居るのである。

棕櫚のやうに眞直ぐで、またたをやかで丈の高い此等有色の男女は、其品位のある態度とゆつたりした優美な擧動とで、大いに感銘を與へる、肩は振らずに歩く。――その申し分無しに出來た胴體はいつも曲げること無しで居るやうである。しかもその歩き振りは、長い一バイの大股で、全身の重さがその素足の極の指尖で彈機のやうに釣り合ひ取られて居るのである。總てが、或は殆ど總てが、靴無しで。日に燒けた鋪石道を多勢が裸足で通ると、連續したサワサワいふ音がする。

……思ふに、あらゆる印象のうちで一番新奇な印象は、女の衣裳の或る物が有つ珍奇と輝かしさとが與へる印象であらう。これは、少くとも百年前に、奴隷と自由な境遇に居る有色人との服裝を取締る、妙な奢侈取締法の爲めに――主として形を規定した、材料と色合とには餘程の自由を與へた、法律の爲めに――發達した衣裳である。然しその樣式の或る物は東洋を思はせる。それは美しい思ひ切つた色の對照を示すもので、就中その盛裝の頭飾は、著しく東洋風で、回々教を奉じてゐた奴隷がこの植民地へ初めて輸入したものと信じたくなるほどである。それはただ、タルバンのやうに、巧に頭のまはりに褶んで居る――色の鮮かな一端を前面の上の處で中からくぐらせて、それを前立のやうにつんと立た

せて殘して居る――馬鹿に大きなマドラス。ハンケチである。それからこのタルバンは、いつも鮮かなカナリヤ色のものであるが、それを金のブローチで――一つは前で、一つは橫で――留めて居る。服裝の他の部分はといふと、それは至つて簡單である。刺繡をした、頸まはり低く裁つた、袖のある肌襦袢(シェミーズ)。後ろの方は中々長いが、其緣(へり)が何處もその長い肌襦袢の裾と同水平になるやうに、まくし上げて、乳の下の處で、前で締めてある、袴(スカート)卽ちジユープ。それから最後に、兩肩の上へ投げかけて居るフーラール卽ち絹の肩掛。が然し、このジユープとフーラールとは、模樣も色も絕妙である。鮮かな洋紅、鮮かな黃、鮮かな靑、鮮かな綠、――藤色、菫色、薔薇色、――時には橙黃と黑、紫と空色の、格子縞や辨慶縞や縞のも交じつて居る。そして、服裝の色は、これは驚くばかり多樣であるが、その色は何であらうとも、頭飾は黃で――花やかな、きらきらする黃で――なければならぬ。て、タルバンは黃色の條(すぢ)か黃色の碁盤縞かがあるに決まつて居る。この派手着物へ、更に見映のする高價な珍奇な寶石を添へる。その垂飾は一つ一つ金の圓筒(圓筒は時に長さ二吋もあり、周圍は少くとも一吋はある)を五つ繫いで出來て居る大きな耳環。――中はうつろな大きな金の(時にはすべすべのもあるが、大抵は彫りがしてある)珠の二列、三列、四列或は五列から成つて居る頸飾――驚くべきコリエ・シユー――である。ところが、此

の赫灼たる寶玉は純金のただの模造では無い。耳環は一對百七十五フランする。或るマルティニークのクアドルーンの頸飾は、五百フラン若しくは一千フランの値を有つて居るかも知れぬ。……それはその戀人の、そのドゥードゥーの、贈物のこともあらう。然し普通には、こんな品物は少しづつ濟し崩しに年月かけて買ひ求めるか、又は、所要の數に達するまで珠を一つ一つ買ひ求めるか、するのである。

が、斯んな高價な衣裳を着けて居る者は多くは無い。頭の上へ重い荷を載せてあるく――野菜、菓子、果物、料理してある食物を戸毎賣り廻はる――女達の大多數は、頸から足までの、そして裳はあるが、身體にきちつと附くやうに、また脚の下の方が半部むき出しになつて全く自由なやうに、大抵は餘程上の方で帶で締めてある、目の覺めるやうな色の、飾り無しの一枚着物（ドゥイレット）を着て居るだけである。こんな女達は、頭の上へ百斤乃至百五十斤の重荷を載せて、靴無しで、暑い日を浴びて、全る一日山を登つたり降りたり出來るのである。そして其仕入荷が、時に平素の重さに達しないと、丁度いい重さにする爲めに、石をいくつかそれへ足すのである。疑も無く、幼年時代からどんな物でも總て皆斯んな風に頭の上に載せて歩くといふ習慣が、此處の人民が著しく强健で身體が眞直ぐだといふことに、與つて大いに力があるのである。……自分はグランド・ピアノを男四

人の頭で持ち運んで居るのを見たことがある。女はといふと、荷物を一旦頭へ載せてからは、手で以て支へるといふことは滅多にしない。頭は殆ど不動な儘で居るが、その黒い、鋭い、射るが如き眼は、顧客の合圖を見逃さじと、窓や戸口一つ一つをぎろぎろ見入る。そして、朗かな、遠くへ屆く、高い調子で口にするクリーオールの物賣り聲は、互に入り交じつて、聞いて非常に氣持ちの宜い偶然の和音（ハーモニー）を生ずる。

……『セ　ムーヌ・ラ、サ　クイ　レ　ベル　マンゴ？』その女の籠のマンゴは確にその女の身の重さがある。……『サ　クイ　レ　ベル　アヺカ？』その鰐梨は切れ鹽梅も風味も美しいグリンチーズのやうである。……『サ　クイ　レ　エスカルゴ？』蝸牛が好きならばその女を呼ぶが宜い。……『サ　クイ　レ　ティティリ？』極めて微細な魚で、其千尾も茶碗一つを充たすに足らぬ。——最も美味なマルティニーク馳走の一つである。……『サ　クイ　レ　カンナ？——サ　クイ　レ　シャルボン？——サ　クイ　レ　ディバン　オーベ？』（家鴨は要りませんか、炭は要りませんか、胡瓜形の麵麭は要りませんか？）……『サ　クイ　レ　パン……？』芭蕉の葉の小切れに包んだ、小さな塔糖の形をした玉蜀黍製の甘い菓子である。……『サ　クイ　レ　フロマッセ』（フアルマシー）『ラポテカイ　クレオール？』この女は滋養煎汁や罨法藥や内服藥になる、クリーオールの草

根木皮やいろんな木の葉を賣るのである。マトリクイン、フユイル・コロソル、バライ・ドゥー、マニオク・シヤペル、マリー・ペリヌ、グレーヌ・アンバ・フユイル、ボア・ドゥロム、ズイーブ・グラ、ボンネ・カレ、ズイーブ・コディヌ、ズイーブ・ア・ファンム、ズイーブ・ア・シヤット、カンヌ・ドゥロー、ポーク、フルウ・バビヨン、ラティヌ、その他これまで見たことも聞いたことも無いものを數々賣る。……『サ　クイ　レ　ディカマン？』（勞働者の外衣）……『セ　ムーヌ・ラ、シ　ウー　レ　アシユテ　カナリ・アダン　ランマン　モアン、モアン　ケ　クラゼ　イ』粘土製の赤い土鍋を賣る女なのである。――たつた一つ賣れ殘つて居る。諸君がそれを買はなければ、毀してしまはう！といふ。

『エ！ザンファン・ラ！――アン　デオ！』子供等よ、うまいライス・ケーキが欲しいなら、その女の處へ走つて行け。……『エ！ジヤン　バ　アンオ、ジヤン　バ　アンバ、ジヤン　ディ　ガルタ、モアン　ニ　ベル　グーウーオ　ボアッソン！』おい！二階の人達、下（した）の人達、屋根裏に住んで居る人達！この女は非常に大きな非常に美しい魚を賣つて居るのですよ！……『エ！サ　クイ　レ　マンジエ　ヨンヌ？』――それは『アクラ』といつて――搗き碎いた鱈か豆かで、或はそれ兩方で、造つて、胡椒で風味を附け、バタで

揚げた、平たい、黄がかつた鳶色の菓子である。……それから黑檀のやうに黑い顏をして居るが、眞白な衣物を着て、佛蘭西の料理人のやうに白い前垂を掛け、白いキャップをかぶつて、クラリネットのやうな聲て、半分クリーオール語、半分佛蘭西語の歌をうたひながら、麥粉菓子を賣る者が來る。——

『セ　ルーヴーイエ　ドゥ　ラ　パテッスリー　クイ　パッス、
クイ　テ　カ　ヹイエ　プー　ガニェー　ソン　エギジスタンス、
　トゥージュール　コンタン、
　トゥージュール　ジョワイユー。
　オー、クイル　ソン　ボン！——
　オー、クイル　ソン　ドゥー！』

〔おかど通るはパン屋で御座い、
暮らしの爲めとて夜の目も寢ない。
　不足言はずに
　樂しく暮らす。

パンは上等！——
喰べておいしい！」

糊口の爲め夜通し起きてゐたといふ——いつも滿足して居る——いつも幸福な——麥粉菓子屋が通るのである。……あゝ、それは（そのパイは）何て上等なのだらう！——あゝ、それは何ておいしいことか！

……街路の兩側を堺して居る古めかしい店には、その大きなアーチ形の戸口の上に、名前も無いし看板も無い。——何商賣をして居るかを知るには、內側をよく眺めて見なければならぬ。見ても、其商賣の性質は確かとは合點が行きかねるであらう。——といふのは、織物や小間物を出して居る店で焙器やフライ鍋を賣つて居り、小道具店で聖像や數珠を、土器陶器店でパン菓子や砂糖菓子を、女小間物店で珈琲や文房具を、瀬戸物店で葉卷や煙草を、寳石店で襟卷やレースやリボンを、煙草店で砂糖やグアヴゼリーを！賣つて居るからである。然し、賣りに出してある品物總てのうちで一番人目を惹く物は、それが最も異國情趣に富んで居るが爲めに、人形で——マルティニークのプーペで——ある。それには二種類ある、——カプレス人種の色を模して、その體軀を滑らかな赤鳶色の皮で蔽うたカ

プレス人形と、黒い皮で蔽うた黒人人形とである。衣物が着せてあると、こんな人形の價は十一フランから三十五フランまでで、——注文に應じての衣物を着せたのは、もつと高いこともある。が、上等なカプレス人形は實に面白い骨董である。人形は兩種ともその國人が着る衣裳をまとうて居る。が、黒人の方は普通より單純な服裝をして居る。人形にいづれも刺繍のある肌襦袢(シユミーズ)をまとひ、鮮かな色合の、趣味深く調(ととの)へた袴(ジユープ)を着け、絹のフーラールを掛け、頸飾(コリエ・シユー)を着け、五つの圓筒(ザンノー・ア・クルー)の耳環を垂らし、黄な縞のある可愛らしい小さなマドラス・タルバンを頭に冠つて居る。そんな人形は完全な衣裳雛形で——材料と色彩との極めて微細な點に至るまで、マルティニーク風俗の完全な縮圖で——ある。玩具には美術的すぎるくらゐである。

マルティニークの斯ういふ衣裳の色彩は——或る宗教的式事の場合に着る菫色の特殊な衣物を除いて、鮮かな黄色の縞か辨慶縞かでいつも目立つた色彩であるが——言ふに言はれぬ或る光輝を——その熱帶的な肉の暖かい美しい色合をあらはに見せる驚く可き或る力を——有つて居る。大自然がその血緣の一番近いものにそしてその最も親しいものに——その蜜の愛好者に——その昆蟲に——與へるあの艷麗な衣裳の色合がこれである、即ち胡(き)

蜂(はち)の色がこれである。その事實がこの奇異な人種の子供らしい空想に浮かんだかどうかは自分は知らぬ。が、自分にその事を初めて思はせたクリーオールの言葉がある。――土語でブーアン　グエプ卽ち『胡蜂をつかまへる』といふ言葉は、可愛らしい有色の娘に戀をする、といふ意味である。……そしてこんな衣裳を觀察すればするほど、ただ大自然のみが、色彩のうちに力と調和との斯んな稀な理解を――色の魔力と色の法則との斯んな知識を――敎へ得たのである、といふ氣がして來る。

……斯うやつて此文を認めて居る今宵は、ペレ山がいつもよりか厚い頭巾をかぶつて居る。その頭巾は、紫と紫丁香花(ライラック)との雲で――沈み行く日が黄色い條(すぢ)を附けて居る華麗なマドラスである。ペレ山は、洗禮か舞踏會かへ行く衣裳をつけたカプレスのやう、コステューム　ドゥ　フエート〔お祭り着〕て居る。そしてその幻のタルバンには、大きな星が一つブローチとして輝いて居る。

一三

ヸクトル　ユーゴー通に隨いて——岩から成つて居るその河床が眼の及ぶ限り遠くまて、石鹼て洗つたのてはないリンネルて、眞つ白なリギエール　ロクサラーヌ一名リギエール　デ　ブランシシューズ〔洗濯女の川〕を渡つて——フォール〔壘場〕の方へ行くと、曲り曲つた狹い街路をいくつか降つて、此町一番の市場[註]へ出る。それは中央に噴水がある——鋪石の立派

註　この文を書いてから後、この市場は、その舊の地面へ大きな新市場を建てる爲め、サヴンヌへ轉居した。そして其處の美しい樹木が伐り倒された。

な樹蔭の多い——四角な辻てある。其處に物賣者は幾列にも坐つて居る。——市場の一半は果實と野菜とに當てられ、他の一半は新しい魚と獸肉とを賣るに當てられて居るのてある。初めてそこへ入ると、雜沓の爲めまごついてしまひ、騷々しいクリーオール語てのお饒舌りて聾になつてしまふ。それからやがてのこと、その渾沌のうちに幾分の秩序があることが見分けられ、珍らしい品物の觀察が出來はじめる。

其四角な鋪石の廣場の中央、市場の噴水のほとりに、魚が一パイに入つて居る――海から人間の肩に擔いて持ち運んだ――或は非常に重い時にはローラーの上で搬んだ――小舟が幾艘か置いてある。……まあ、何といふ魚であらう！――青いの、薔薇色の、紫丁香花(ライラク)色の、深紅の、黄色のがある。それが決して靈的な薄い色合では無くて、火のやうに輝かしい强烈なものである。此處にはまた、頭から尾まで殆ど同じ厚味の――全く眼の眩むやうな――銀の伸べ棒を積み上げたやうな、細長い魚が山と積まれて居る。――そのつい横には、扁たい淡紅いものが積まれて居り、――その向ひにはまた、背が瑠璃色で腹が金色のものが一と山ある。此處の屋臺店では、怪物を――長さ十二呎も十五呎もある怪物を――鮫、ギエルジユ、かぢきとほし、トンヌなんかを、――或は色んな異樣なものを――研究することが出來る。薄い圓い圓盤のやうなもので、鰭の代りに、動く埀れた銀の縁飾のやうに四方八方に震へうごく、地蟲樣の長いきらきらした觸角を有つたものがある――刺が密に逆立つて居るものがある。――磨いた赤い花崗岩のやうな斑點のある、蛇の體軀(からだ)をしたものがある。これはモリングといふ魚である。バラウー、クーリウー、マクリオー、タザー、チヤ・チヤ、ボンニク、ゾルフイ、とりどりに青と菫色との殆どありとあらゆる色合を示して居る。スーリは薔薇色と黄とで。シルージアンは黑くて、黄と赤との條(すぢ)があ

り。バタートは黒と黄。グロ・ズィエは朱色。クーロンネは赤と黒てある。そのまた名前が、其形と色合とに劣らず珍らしい。鉛筆のやうに細長い、エイグイユ・ドゥ・メル卽ち『海針』。——體に指痕のやうなものの附いて居るボン・ディエ・マニエ・モアン（『善なる神我が身に手を掛けられた』）。——大きな海蝸牛のラムビ。——ビスケットとラリーヌ（月）。——危險な背鰭を有つたクラポー・ドゥ・メル卽ち『海蟇』。——ヹルメール、ジャクォー、シャボンス、その他五十も面白い名がある。……日が高くなると、芭蕉の葉かバリジエの葉を魚の上へ掛ける。

　それよりか餘計な位に首をひねらせるものは、恐らくは、不思議なほど樣々の、綠や黃や染め分けの野菜と——あらゆる色合と形とを有つた果實とで——それが陳列されて居るのを見た後で、旨い色んな匂ひと、味のよささうないろんな色との、混雜した一般的な記憶のほか頭に殘らぬ。然し特に憶ひ出の種とならずには居らぬやうな珍奇なものが少々ある。其一つは、圓筒形の大きな、象牙色の物で——形も象の牙に似て居るが、曲つて居ない點だけが異ふ。之はキャベツ椰子卽ちパーミストの頭で——熱帶での一番尊い樹木の一つの腦髓なので、之を得るにはその木一本全く殺して了はなければならぬといふ物である。生までも料理しても、色々にして食へる——サラダにしたり、シチューにしたり、揚げ物

即ちアクラにしたりして。芽生えの若葉が附いて居るこの緻密な堅い圓筒形を取り去つてしまふと、その枯木の窪みに、大きな地蟲が――ヱル・パーミストといふ蟲が――見えて來る。その地蟲を――鉢か鑵かの中を這ひ廻つて居るのを――市場で賣つて居るのを見ることがあらう。生きながらフライにすると、味は巴旦杏のやうだといふことで、大變な贅澤品と考へられて居るものである。

……それから、そのマドラス頭帕布(タルバン)の下(した)から、或は蝙蝠傘ほどもある大きな、茸形の帽子の蔭の下から、じつと珍らしさうに見詰めて居る、黑い、鳶色な、また黃色な人間共の顏を、諸君は身のまはりに見廻はしはじめる。そしてその裸の背中、裸の肩、裸の脚や手足を觀察すると、その肉の色が、果實の色よりかもつと餘計なくらゐ、種々樣々であり且つ驚くべきものである、ことを諸君は知るであらう。が然し、その皮膚の色合の多くを、正確に比較が出來るのは、ただ果實の色合とてである。クリーオール自らが用ひて居る比較の詞も、さういふ種類の詞だけてある。例へば、ポー・シャポティユ、即ち『サポタ色の皮膚だ』などいふのである。サポタ即ちサポティユといふは、人間の表皮のやうな滑らかな皮を有つた、汁氣の多い鳶色な果實て、熟して赤味を帶びると、或る種の雜種兒の皮膚と丁度同じ色になる。が、より鮮かな色をした雜種兒のうちに在つては、その色は、もつ

と果物的である、と自分は思ふ。――バナナの色合があり、レモンの色調があり、蜜柑の色味があり、時にはマンゴが淡赤く熟しかかつて居る時のやうな、赤味が交じつて居るのもある。黒ずんだ色の皮膚は、確に、見る眼に氣持ちが好いし、――唐金のありとあらゆる澄んだ色合が見られて――時に頗る目ざましいものがある。が、より晴れやかな色合は絶對的に美しい。全くの裸體で戸口に立つたり、日の光を浴びて裸で遊んだりして居る驚く可き子供等を――バナナ色や蜜柑色の赤ん坊共を――時折目にすることが出來る。他のものとは全く類を異にした、稀な人種標型（タイプ）が一つある。その皮膚は全くの金色で、絶妙な金屬性な黄色で、その眼は長くて絹のやうな長い睫毛を有つて居る。――その髮は密な、豐富な、光澤のある縮毛で、日の光を受けると青い光を示す。どんな人類が混合して、斯んな美しい標型（タイプ）を造り出したものであらう？――クーリーのでもない、亞弗利加人のでもない、そして此地方には疑ひ得ない美しさを有つた支那人標型があるにはあるけれども支那人のでも無い――[註]或る奇異な血がこの混淆にあるのである。

註　自分はその後、この頗る異常なそして美しい混合人種――その立派な見本をまたトリニダッドで見ることが出來るが――の神祕を知つた。それを構成するのに、非常に異つた三つの要素が結合して居る。卽

ち歐羅巴人種とネグロと印度人とである、――が、言ふも不思議な事に、その特有な妙趣を造り出して居るのは、この三つの血族のうちの最も野蠻なものである。…… 自分はその眉目好いそして異常な標型（タイプ）に就いて語るに當つて、マルティニークの有名な醫者で、西印度の人種學氣候學及び歷史に對して一種の頗る貴重な研究を最近出版された、コルニリヤック博士の著書から一文を反譯せずには居れぬ。――「……そのオリーヴ色の皮膚、優美なほつそりした體軀、目立た眞直ぐな横顏、規則正しい目鼻立が、マドラスかポンディシェリの住民を我々に思ひ出させるあの顯著なメティスを、西印度の人民の間に、初めて認める時――我々は、その一種奇異なそしてやさしい陰鬱（殊に女にあつては）な色に充ちて居るその長い眼と、顳顬の上の處で盛んに縮れて頭の上へ澤山に垂れて居るあの黑い、豐富な、絹糸のやうな光澤を有つた髮毛と、を眺めながら、我々は驚いて斯う自問する。――この特異な雜種は――それには拭ひ去ることの出來ぬやうに思はれ、且つまたその種型が亞弗利加要素を遠ざかれば遠ざかる程層一層有力に見えて來る所の、或る著しい特徴を有つて居るこの變種は――何といふ人種に屬するのであらうかと。それは――その後の幾度の交錯にも拘らず、また二百年以上も更新されては居ないといふ事實にも拘らず、その血がその血管を流れて居る人間悉くの血統にその存在を示す所の人種的特徴をば、それが初めて混合した時と同樣に今なほ判然と保存して居る所の――歐羅巴人と黑人との血を混じて居る――カリブ人の血である」

（『西印度に於ける黃熱病の起原並びに傳播の歷史的研究』コルニリヤック著。一八八六年、政府印行）

が然し自分は、其人種の皮膚の色は、常に、必らずしも『オリーヴ』の語が示すものでは無い、と思ふ。自分には正しく、金色に思はれた。そして髮毛は、或る種の黑鶫の羽毛に似て、青味がかつた光を閃かさ

せて居る。

……この人民はいづれも活氣があつて、優美で、そして强健である。横を通つて行くのが、どれもこれも立派な體格で――病身らしい顔したもの、瘠せた手足のもの、は一人も居らぬ。どうかして稀に手が一つ無い又は足が一つ無い人間に出會ふことがあれば、それはフエル・ドッ・ランスの――その毒は、生きて居る組織を腐らせる、蛇の――被害者を見て居るのだ、と思つて大抵間違ひは無い。……此處の勞働者の筋肉の發達は、之を信ずるには實地に見なければならぬ或る物である、――その立派な表示を研究するには――埠頭で、瓦斯工場や屠獸所で、或は一番近くの栽培地で――腰まで裸になつて働いて居る、黑人と雑種とを視なければならぬ、と斯う自分は、事實を誇張する恐れ無しに、斷言し得るのである。概して、大きいといふ方の人間では無い、恐らくは異常に力强いものでもあるまい。が、彫刻のモデルのやうな、或は解剖學のモデルとさへ思はれるやうな、容貌をして居る。脂肪組織は絶對に之を缺いて居るやうで、人目を驚かすほどの突出を以てしてその筋肉が出ばつて居る。或る糖工場で、十人餘りの黑人が仕事をして居るのを見て居た時、牧神のやうな、いたづらさうな顔をした若いムラットが、腰のまはりには布片（ラン

チヨ）一枚纏うただけて、自分の横を通つた。自分はそれまで一度も、銅像に於てすら、それ程うつくしい筋肉を見たことが無かつた。解剖學の實地指導教師はその男を授業モデルに使ひ得たことであらうし、——立派なマーキュリー神を象どらうと思ふ彫刻家は、こんな肉體を型にとつて、首から踵まで一點の修正をしようとも、思はなかつたことであらう。『質素な食物がこんな肉體を造る原因である』、と或る若い佛蘭西の教授が自分に保證する。『こんな人達はみんな鹽鱈と果實とて生きて居る』と言ふ。然し質素な生活だけて、筋肉の斯んな整齊と突起とを造ることは決して出來なからう。人種混淆、氣候、間斷無き運動、健全な勞働——此等多くの條件が結合してそれを來たしたものに相違無い。それにまた、此處の熱帶の太陽は、不用な肉を分解し、餘計な組織を悉く溶かし去つて、黑檀の如く緻密な堅牢な筋肉纖維を後へ殘す、傾向があるのは確實である。

或る綠の小山の下の、碇泊所に、海浴場がある。岩の多い磯が、熱帶樹の丘陵の下て、圓く曲つて居て、——棕櫚が、その砂濱の上へ、高くくねり出たり、砂濱へ、其半分を斜めに曲り出たり、して居る。船が幾艘か、金色を帶びた黃な地平線を背に、紺碧の水に碇泊して居る。絶大な紺碧の光がある。水はダイヤモンドの如く清く、そしてなまぬるい。

日沒後一時間許りである。ペレ山の上の方はまだ濛とした青い色で居る。棕櫚の下でまた溶岩の石塊の間で、それからまた濱の斜面のずつと上手の小さな小屋で、海浴者が衣物着たり衣物脱いだりして居る。海の水は、水泳者の頭で、斑點を打つたやうである。女と娘の子とは、足から肩まで充分に衣物を纏うて、水へはいる。——男は、極少しの物をまとうて、はいる。——何一つまとうて居ない子供も居る。年の若い男の子は——黄色や鳶色の子供であるが——裸體で水へ走り込んで、その輝かしい水の上へ、黒く突出して居る尖つた岩の處まで、泳いで出る。その子供等は、そこから飛び込んで水潜りする爲めに、一時その一つへ登る。溶岩の黒いその岩礁の上で飛び込む姿勢で居る、そして大空の紺碧の光を背景にして居る、そのしなやかな姿は、一々みな、朝日に鍍金されて、言葉では描かれぬ、影像的趣致と光輝とを有つて居る。彼等の身體は色を射出すやうに思はれ、空の瑠璃色の光がその色合を一層強める。實に田園詩的であり、信じられないほどである。——クーマンス[一六註]はそのボムペーの繪に、それよりも淡い色を使用した。そして氏の描いた人體はこれほど均勢の美を有つて居なかつた。此處の人の肉は、觀たところ肉のやうでは無くて、果實の肉のやうである。……

譯者註　ピエール・オリヸエ・ヨセフ・クーマンス――白耳義の畫家（一八一六――一八九〇年）その畫は色彩殊に濃厚なれども、なほ此處の色彩の强烈なるに及ばじとなり。

一四

……到る處に、十字架、小さな祠、路傍の禮拜堂、聖者の像、がある。大道に陰を與へて居る、樹木の叉やうつろにも、礫像や小石像を諸君は見るであらう。その大道を內地の方へ上つて行くと、一哩毎に或は半哩毎に、禮拜堂があるか、石を積み上げた臺座の上に立てた十字架があるか、或は壁の中にしつらへて、針金の格子で塞いであつて、其格子を透して基督か聖母かの像が見られる小さな神龕があるか、するを諸君は見るであらう。像の前には、終夜、ラムプが點しつづけられて居る。ところが、モルン　ルージユといふ――海から約二千呎の高さて、サン　ピエールから馬車て一時間許りて行ける――村は、主としてこんなものが澤山あるので有名てある。養生地てあると同樣に巡禮地てある。村の上に、前記の山よりかもつと高い山の急な斜面に、小さな建物が、珍らしく連續して絕頂

まて建てられて居るのに氣が附くてあらう。それは十四の小さな聖堂なので、その一つ一つに、基督の受難の或る出來事を現はした、浮彫が納めてあるのである。これをルカルヹールと呼んで居る。此高い山へ登つて、途中一々の祠の前て祈禱を捧げる、といふ宗教的な行を行ふといふのは、生まなかな信心ては出來ぬ。一番上の建物の門から見下ろすと、モルン　ルージュの村は、餘りに遙か下に見えるので、見ると殆ど眼が眩みさうになる程てある。が、不信心な者にても、そこからの美しい眺望の爲めに、登山の價値は充分にある。町を取り卷く附近の山々には、どれにも奉納に係かる禮拜堂か大きな礫像かがある。

サン　ピエールに居を占めて居る像は、モルン　ルージュよりは少い。が、港内の何處からも見える、巨大なのが數々ある。中央部卽ちサントルと呼ぶ區域の上に聳えて居る山には、素敵に大きな基督が、入江を見下ろして居り、町の南を限るモルン　ドゥランジユといふ山からは、白い大きな聖母が——船乘りの保護神ノートル　ダーム　ドゥ　ラ　ガルドが——此の錨地に碇泊して居る船々を上から見張りして居られる。

……日に三たび、白い大會堂の塔からして、一緒に調子合はせて鳴らす一組の吊鐘が、その殷々たる響を町中へ送り出す。大祭日には、その鐘は驚く許りに打ち鳴らされる。——鐘を撞くのは亞弗利加人てあつて、亞弗利加的感情が幾分か、その感銘的てはあるが魔

法的な撞き方(かた)に、認められる。基調を爲すその大鐘は、一と財産を費やさせたものに相違無い。その鐘が物を言はさせられると、その感銘は人を愕然たらしめるものがある。全市が――筆で述べ難い一種不思議な音に――より小さな鐘の諧聲がそれに捉へられて混ぜられるといふと、珍らしい諸音(ハーモニー)を發する、震るへた、底知れずの唸り聲に――震動する。……その午時の音(ベル・ミディ)は、誰れも容易には忘れぬであらう。

……その大會堂の後ろに、尖つた町の屋根々々の上に、林に包まれたドゥランジュ山の麓に、シメティエール　ドゥ　ムイヤージュ〔碇泊所墓地の意〕がある。……美に充ちて居る――この奇異な熱帶の墓地は。低い墓は、大半、丁度將棊盤の四角な市松模樣のやうに、小さい四角な、黑と白との瓦で蔽はれて居る。墓はいづれも、その底部に、黑い十字架が立つてゐて、その十字架の中心に小さな白い牌があつて、それに雅致のある文字で名前が刻まれて居るのである。この小さな墓は如何にも可愛らしいので、玩具の墓地に居るのだ、と思はれるぐらゐである。それからまた、此處其處に、死者の上に――中に白い聖母と基督と天使とが安置してある――極めて小さな大理石製の禮拝堂が建つてゐて、その柱には花の咲いて居る蔓草が、這ひのぼり絡み纏うて居る。死とは、この軟らかな緑の大地から――眼に見えぬ水蒸氣の如くに――ふんわりと立ち騰つて絶大な日の中へ融け入るのだ、と

我れ識らず思ふほどに、此處では死といふものは明かるいもののやうに思はれる。見るものの悉くが輝かしく、淸らで、美しい　空氣はジャスミンの香りと白百合の匂ひとで眠氣を誘ふ。そして不死不滅の象徵たる棕櫚が、靑い光の中へ、百呎も高くその頭を擡げて居る。そんな莊嚴なそして象徵的な樹が幾つもの列を爲して居る。——巨大な二列が入口を護つて居り、——他の幾列かは、白い幹を見せ、その大きな翠綠の日傘をその大會堂の塔よりも高く擴げて、墓の間から聳えて居る。

さういふものの背後に、山の無言な綠色の生物が、死者の安靜を侵さうと、降りて來ようと努力して居るやうに思はれる。壁の上へ綠の手を突き出したり——丈夫な根を下(した)へ押し込んだりして、——辛抱強く、氣が附かぬほど徐々と、然し抵抗出來ぬほど着實に、石造物の節々(ふしぶし)を攻擊する。

……サン　ピエールの此の小さな町に、いつかは大變化があるかも知れぬ。——金が乏しくなり、熱誠が足りなくなり、亡くなつたものの記憶が少くなるかも知れぬ。その時には、山からして、障壁を越えて、綠の大軍が無抵抗で降つて來るであらう。——蔓草が、その可愛らしい墓の位置を外づし、市松模樣の瓦を剝ぎ取つて、進入の道を用意するであらう。——それから、根を深くはびこらせ——心臟の塵土を手さぐりし、骨の間を盲探し

して――巨人が造つて來るであらう。そして、愛が隱し蔽うて居る一切の物は、――吸收せられてその翠綠の豐かな汁となり――再び生を得てその色彩の煥發となり――復活して太陽向けて立ち昇るエメラルドと金とのその擡頭となつて――悉く大自然へ還元することであらう。……

一五

赤く白くまた黃色な此の町は、灣から眺めると、土地の高い此の島の燃えるやうな綠を背にして、種々な色から成つて居る唯だ一本の條としか見えぬ。むき出しの地面は少しも無い。裸な岩は一つも無い。幾つながりの山嶽が、つぎからつぎと脈を爲して內地の方へ高まつて行つて居るが、やはり森林に蔽はれて居る。――熱帶の林が、峰を四五千呎の高さまで登つて居る。そんな林の美しさを――サン　ピエールの直ぐ近くの山々を包んで居る林の美しさすら――描寫することは自分には殆ど不可能に思はれる。――それを言ひ現はすには新語の創造を要するかと思はれるやうな、形があり色がある。殊に色合に關してさうである。――熱帶森林の綠には、北國植物の色調だけ知つて居る者には、その正しい

觀念を抱くことの出來ないものがある。それは綠の炎を思はせる一種の色である。

二十分間歩いて、パルナッス山を前にして、深林の――嘗ては全島を蔽うて居た巨大な鬱林の殘片たる林の――綠の前に立つには、サン ピエールから續いて居る大道を、『臺場の草原(サヴンス・ドゥ・ラオール)』を通つて、隨いてさへ行けば宜い。頭上一千呎はあらうと思ふ高さまで、綠色の種々な恰好のものが登つて居るあの美しい景色をじつと見て居ると、外(そと)から眺めて熱帶の森林といふものはどんな物であるか、畏怖といつたやうな感じを以てして、分かつて來だすことであらう。强烈な色の、見た處では堅固な一つの表面を――絶壁のやうな鍍のある表面を――見せて居るのである。その密集の中に、木の下から上までの全體を見分けることは直ぐには出來ぬ。――認めるものは、暗示であり、木の夢であり、ドレの繪に見るものである。纏はつて居る蔓の重味によろめいて居るやう見える形體のものが、頭上一百呎の高さに立ち上つて居り、――それと同じ樣に巨きな物が、更にそれ等の上に聳えて居り、――更にその物より高く、幾百もの奇怪な形の物が、點頭したり、身を曲げたり、綠の兩腕を差し上げたり、大きな膝を突出したり、背中や肩の丸味に似た曲つた物を突起させたり、手足にまぎらはしい物を絡みつかせたり、して居るのである。或る棕櫚が、日の目を拜まうと皆が爭つて居る中に、一人その頂を突出して居るのは判かるが、どの木も何

處に頭があるのか確かとは分からぬ。他の物は總て——垂れ下がつた重い物に隱されて半ば息詰まりして——面被をかぶつて居るやうな觀がある。燃えるやうな綠の太蔓が、枝といふ枝、幹といふ幹を、蔽うてゐて、——掛布となり、掛毛氈となり、帳となり、あらゆる突起物の上を無言の深い水の如く流れ下つて居る不動の瀧となつて居る。まこと寄生生物の、驚嘆に堪へた大洪水である。……諸君が凝視して居るものは、無氣味なそして恐ろしい美である。しかもその光景は不完全なものである。此處の林は十が一になつて居るのである。——そのうちの一番見事な木は伐り倒されてしまつて居るので、見て居るのは、ありし昔の古跡に過ぎぬ。原始的な眞の森林を見んとには、諸君は餘程內地へ踏み込まなければならぬのである。

が然し、綠の獨裁がいつもいつも此の林に存して居るのでは無い。我々の冬の或る月に相當する短い一時節の間、森林は忽然、攀援莖植物の開花が致す——深紅の、カナリヤ黃の、青の、また白の——色彩の眞の一大火燄を突發する。尤も、他の花も咲かせはする。が、攀援莖植物の花だけが、風景の姿を變ずるに足る色彩力を有つて居るのである。

一六

……苟くも西印度の森林を描寫することが可能であるならば、マルティニークのクリーオールたるルフッ博士がして居るよりも、有力に描寫することは出來なからう。で、自分は氏の著書の一つからして、次記の出色の頁を敢て飜譯して見る。――

……海が、それが地上の觀物のうちで一番巨大なものであるから、海だけが――ただ海のみが、大森林を描寫して見ようとの企てに對して、比較の語辭を我々に供給し得るのである。――が、さうするにしても、嵐の日の海を、その絕大な忿怒を表現して居る最中、突然動かなくなつた海を、想像しなければならぬ。といふのは、その偉大な森林の絕頂は、それが蔽うて居る陸の高低起伏を總てその儘繰り返して居るからで、その高低起伏といふのが、高さ四千二百呎乃至四千八百呎の山と、深さそれに應ずる谿と、であるからである。それが何處から何處まで、軟らかい巨大な波動を爲して――綠色の素ばらしく大きな怒濤となつて――靑綠に隱され、交ぜ合はされ、滑らかにされて居るのである。ただ然し、地平線に青い一線があるので無くて、綠の一線があり、

青の閃光があるので無くて、綠の閃光があり、――そして、どんな色合にも、色のどんな結合にも、――深綠、淡綠、黄綠、黑綠と――綠が目立つて居るだけである。

斯んな恐ろしく大きな森の外面を眺め見ることに眼が疲れたならば――尤も、眼が疲れるといふことがあり得るならばであるが――其内部を見通して見ようと試みるが宜い。それは解きほぐし難い何たる渾沌であることか！海濱の砂粒も、此處の樹木程込み合つては居らぬ。眞直ぐなのがあり、曲つたのがあり、よろよろしたのがあり、――倒れたり、お互に凭れ合つたり、互の上へ高く積み重なつたりして居る。木から他の木へ横に跨いで居る、這ひ上がる攀援莖植物が、帆柱から帆柱へ渡してある綱のやうに、此四ツ目格子のあらゆる隙間を充たす手傳ひをして居る。そして寄生植物が――蔦や苔のやうな小心な寄生植物では無くして、木の上へ自分で接枝した木の寄生植物が――原始の樹幹を我が物にし、それを壓伏し、其枝葉のあるべき處を横領し、大地へ垂れ還つて、捧へ物の枝垂れ柳となつて居る　北の國の大森林に見るやうな、樺と樅との永久の單調は、諸君は此處では見出せぬ。此處は無限の變化の王國である。――全く類を異にした種類の物が、互に肘で押しのけ合ひ、取組み合ひ、絞め合ひ、嚙み合うて居る。あらゆる身分のものが、あらゆる階級のものが、人間の一揆のやうに、混同して居る。柔らかい傷つき易いバリジエが、此植民地での杉たる、護謨の木の横で其葉の日傘を開いて居る。――アコマ、クールバリル、黑檀、タンドル・ア・カイユー、鐵木(たがやさん)、……いや、一々名前を呼び上げることは、一軍の兵

卒の名を！呼び立てるやうなものである。我々の樫に當たるバラタといふ木が、棕櫚に、僅の日光を得んものと、その幹を非常に長く伸べさせて居る　我々一國の臣民が、國王の一顧を得るのが困難なやうに、此處では貧弱な木には、世界の此の『王』の一瞥を享けることは困難だからである。地面はといへば、それを見ようと思ふのは無駄である。恐らくは、それは海の底ほど我々の足の遙か下にあるのであらう。――地面は、昔の昔、山なす崩壞物の下に――天地創造このかた、其處に堆積し來たつて居る肥料のやうなものの下に――姿を隱したのである。踏み込めば、粘土の中へ踏み込むやうに、沈む。歩む足が觸れるのは、腐つた木の幹である。――名の無い塵土である。植物の舊さとはどんな事を意味するか、それが少し理解し得られるのは、實際此處に於てである。――眞晝でも夜中の月光のやうに蒼白い、綠を帶びた青ざめた（羅典語でいふルリダ・ルックス）光が、物の姿を混亂させ、それに妙變な朦朧たる容を呈せしめる。毒氣のある濕氣が到る處から發散する。死の臭ひがはびこつて居る。沈默では無い靜穩が（といふのは、永久に其處で行はれて居る、構成と分解との大運動の聲が耳にきこえるやうな氣がするから）、古代の人が獨逸やゴールの原始的森林で感じた、あの舊い神祕な恐怖を、ともすれば心に起[註]こす。

アルボリブス　スウス　ホロル　イネスト　（その恐怖は森林に存す）

註　この一文、ルフツ博士著『マルティニークの蛇についての研究』（第二版。一八五九年、巴里）から。

一七

が然し、熱帶の森林が鼓吹する畏懼の念は、北の國の樹木鬱蒼たる無人地がこれまで惹起し得た神祕的恐怖心よりか、確に偉大てある。殆ど超自然的と思はれるほどの色彩の鮮かさがあり——葉狀體が造つて居る大海の茫漠さがあり、時たま在る隙間が、その測るべからざる深味を示して、菫色がかつた暗黑を呈するがあり——その無窮のざわつきを構成する千萬の不可思議な音がありして、——それ等が、殆ど人を恐怖させる一種の創造的な力があるのだ、と強ひても人に思はせる。人間は此處では一箇の昆虫のやうな氣持ちがする——多くの殘酷な敵にびくびくして居る昆虫のやうに恐ろしい氣がする。そしてその恐怖がまた根柢の無いものでは無いのである。此處の綠色の底無しへ案内者無しに入るのは愚の至であらう。最上の案内者を連れて居ても危險がある。此處では自然が險難なのである。建設をするいろいろな力が、また腐敗をさせる力となつて居るからである。此處では、生と死とが、いろんな力を、休むこと無しに變形して——同じ大きな坩堝の中で、生きて居る物質を同時に溶かし去り且つまた造り改めて——永久に役目を交換して居るのである。

毒を滴らす樹木があり、牙のある植物があり、腦を犯す香氣があり、觸れれば肉が火に觸つたやうに脹れる綠色の蔓草があり、一方また、引込んだ處や蔭になつた處には、我々の見も知らぬ、美しい或は醜い、生物が——昆蟲や爬蟲や禽鳥が——互に相戰ひ、喰ひ合ひ、奪ひ合ひをして——到る處に群を爲して居る。……が、森林の最大の危險は——博物學者をも遲疑せしめる危險は——西洋のサナトフイディアのうちで一番有毒な奴で、且つ恐らくはこれまで知られて居る世界での、最も有毒な蛇の一つたる、あの恐ろしいフエル・ドウ・ランス（トリゴノセフアラス、ランセオラタス——ボスロップス、ランセオラタス——クラスポデセフアラス）が居ることとてある。

……それには變種が八つはある。一番普通なのは、黑い斑點のある、濃い灰色の奴で——木の出張つた根株の間に居て、ただ、それに絡み附いてゐて、その三角な頭をひつこめて居れば、人目にはかからぬやうな色をした奴で——ある。時には、澄んだ鮮かな黃な色をして居る。その時は、それこ隱れ潛んて居るバナナの總と見分けが出來かねる。或は、黑ずんだ黃な色のが居たり、——黃がかつた鳶色のが居たり、——淡紅と黑との斑點のある、葡萄酒の渣滓の色のが居たり、——腹の黃色い眞つ黑のが居たり、——腹の淡紅い黑のが居たりする。いづれも、熱帯の森林腐土や、古い木の皮や、腐れかかつた木なんかの

色合なのである。……眼の虹彩は――赤い閃きがある――橙黄色である。夜は燠のやうに光る。

そしてこのフエル・ドッ・ランスは山と谿との絶對的君王の權威を以て臨んで居る。日中は森林と寂寥な地處との主君であつて、夜間はその領土を、公道、人の行き慣れて居る徑、公園、遊樂地へ擴げる。市内に住まつて居るので無ければ、日が暮れてからは人は家の内に居なければならぬ。日沒後たまたま他處へ出て居ると、町からただ一哩の處でも、歸途は、路の並木の處は通らずに、出來るだけ路の眞中を歩むやう、友人は心配して警めて吳れるであらう。日の光の一番鮮かな日中でも、熟練した護衞者を連れずに、林の中へ入るやうな無謀は出來ぬ。危險を見出すのに、諸君は自己の眼に信用を置くことは出來ぬ。いつ何時、眼には枝一本と見えるものが、攀援莖植物の一節が、淡紅か鼠かの根一本が、垂れ下がつて居る果實の一塊が、忽然生きて、枉つて、伸びて、飛びはねて、打つて來るかも知れぬのである。……すると、治療の、しかも、最も迅速に治療するの、要がある。といふのは、心臟の鼓動五六度の小時間のうちに、嚙まれた處の肉が冷えて、腫れて、柔らかくなるからである。直ぐに色が變つて、菫色の汚點になりだす。同時に、氷の如き寒けが全身の血にしみわたる。パンスール或は醫者が間に合ふやうに來て、そして血管を嚙

まれて居らねならば、望がある。然し、そんな事は稀て、大抵は足か踝かを直接嚙まれて居るのて——その場合には、どんな事もその被害者を救ふ事は出來ぬ。よしや生命は助かつても、危險は終はりはせぬ。大抵は組織の壞疽が始まる。肉が腐れて、時にはぼろぼろになつて骨から離れ落ちるのてある。そしてその腐爛の色は、植物質の腐敗の色に——木を生み出した黑い土へ木の幹が腐れ還る時の、厭な灰色や淡紅色や黃色に——似て居る。犧牲になつた人間は、木が朽ちるやうに朽ち——死んだ棕櫚やバラダの實質が、ぼろぼろになるやうに、ぼろぼろになる。『森林の死神』がその人を襲ふのてある。

今日は、フエル・ドゥ・ランスて、長さ六呎を越すものは滅多に居らぬ。が、長さ九呎直徑五吋のを見たと述べて居る敎父ラバの頃以來、人間が之と戰つたが爲めに、少くとも此蛇の大いさは餘程小さくなつたやうに思はれる。敎父はまたクーレッスの——これはフエル・ドゥ・ランスを殺すと云はれて居る、無害の美しい蛇であるが——その長さが十呎もあり、太さは人間の脛ほどあるのに就いて語つて居るが、今ては大きなクーレッスは滅多に見かけぬ。ネグロ樵夫は此の兩方を見境無しに殺す。そして、年を經た蛇は人目を免れること最も少い譯てあるから、異常に大きな奴が生き殘る機會は、森林區域が年と共に減少するに連れて、少くなるのてある。

……然し、有毒な蛇の數が、初期の植民時代以來、大いに減じたかどうか、それは疑はれる。一匹の雌が一と腹に四十匹乃至六十匹の子を胎生する。フェル・ドゥ・ランスが好んで棲む處は、大部分は、人が近寄り得ぬ處か未だ行つたことの無い處かで、その繁殖は莫大なものである。甘蔗畠へぞろぞろ出て來たり、日沒後大道を危險ならしめたりするのは、實はその群集の餘りものだけである。――しかも、たつた一箇處の栽培地で、十二箇月のうちに、三百匹以上の蛇が殺されて居る。印度の猫鼬卽ちマングースト（イクニューモン）を輸入したけれども、災害を防ぐ手段としては無效なことが判かつた。マングーストは、フェル・ドゥ・ランスを殺す。が、その上また家禽を殺し、その卵を吸ふので、多くは雛鳥を育てそれを賣つて暮らして居る地方のネグロには、取り返しのつかぬ損害となつて居る。

……人間に飼はれる動物は、その致命的な敵の存在をば、人間の眼が認め得ないずつと前に、大抵は見附け得るものである。諸君の騎つて居る馬が、暗がりで、後足で立つて跳び上がり、身震るひして汗をかけば、途に何物も居ない事を確めるまでは、騎り進んではならぬ。また諸君が連れて居る犬が、吠えて、震るへて、走つて歸つて來る事があるかも知れぬ。其警戒を受け容れるが宜からう。田舍の住宅のまはりに飼はれて居る動物は、普

通は懸命に鬪はうと力める。雌鷄はその雛の爲めに戰ひ、牡牛はそのしなやかな敵を角で突き蹄で踏まうと力め、豚はもつと上手際な格鬪をする。然し、此の怪物を一番恐がらぬ動物は、かの勇敢な猫である。蛇を見ると、早速その子猫を安全な場處へ搬んで置いて、それから大膽にも會戰へと進み出る。蛇の打擊距離の極の際まで歩み出て、――からかつたり、驚かしたり、その打擊を惹き出すやう試みたりして――佯擊を始める。すると、蛇のエメラルドのやうなまたトパーツのやうな眼がどんなに輝くことか！――まるで炎で！ある。その一瞬間後には、その三角な頭は、彈機で射られたやうに、蜷局から颯と音を發して、矢と飛んで來る。が、その恐ろしい奴を横へ投げのけて、滅茶滅茶に土の中へ蹴飛ばす、武裝した爪の打擊は、それよりもまだ迅速である。でも、まだ飛びかゝることを猫は能うしない。――まだ活氣のあるこの敵は、殆ど直ぐと蜷局を卷きなほす。――が、猫は又もその前へ出て――垂直な瞳子と垂直な瞳子と相向き合うて――じつと見て居る。またも眼にも止まらぬ急な打擊。またも見事な格鬪。――またも生きて居る『死』が投げ飛ばされる。そして今度はその鱗のある皮膚は深く裂けて居る――片眼の窩は輝かなくなつて居る。今一度、蛇の攻擊。今一度、輕い迅速な打擊。だが、三角頭蛇は目が見えぬ、知覺を失つて居る。――蜷局まかうとする前に、猫はそれへ飛びかかつて――その二本の筋

力逞しい足で、その恐ろしい扁たい頭を地面へしかと釘附けにして居る。いくら尾を振り動かしても、蜿いても、巻き附いても、絞めようと骨折つても、もう駄目！である。もう二度とその頭を擡げぬ。それから一瞬時で、蛇は早、動かなくなつて居る。——猫の鋭利な白い齒が、三角な頭蓋のすぐ後ろの脊骨を、喰ひ断つてしまつたからである！……

一八

植物園（ジャルダン・デ・プラント）も、蛇がやつて來ない、と絶對に安心は出來ぬ。この三角頭蛇（トリゴノセファラス）は、——椰子の天邊へ登つたり、川を泳いだり、壁を昇つたり、棕櫚で葺いた屋根に隠れたり、甘蔗の搾粕を積んだ中で子を産んだりして、——何處へでも行くからである。だが、自分の言ふことと反對な事が書物には記載されて居るけれども、此の爬虫は人間を恐れ、また光線を嫌ふ。日中、求めて姿を現はすことは稀である。だからマルティニーク植物の莊嚴さを、深林へ入る危險を冒さずに、少しく理解したいと思ふなら、——倒れ木の上へ上がつたり、枯枝の中を踏んで行つたりする折、眼を充分に働かせるやうに注意するだけで——植物園見物を爲す事に依つてそれが出來る。園は市街から一哩足らず、パルナッス山の斜面に在つて、

原始的森林を利用して造つたのであるから、園の大部分は太古からの植物で成つて居る。此處では大自然が、人間の技巧（尤もその技巧が此の場處を魅力あらしむるに與つて大いに力がありはするけれども）よりも、無限に多くの仕事を爲して居るので、――極近い頃までは、その結果を、誇張ではなしに、世界の驚異の一つと考へても宜かつたかも知れぬ。

門を入ると直ぐ――外の白い道路では陽が目を眩ます程でも――諸君は薄暗がりの裡に居る。身邊すべて綠の黃昏で、その黃昏からして上の方へ巨大な樹の幹が立つて居るのが見える。此處の最善な概觀を出來るだけ短い時間に得ようと思ふなら、進むにつれて左手に坂になつて居る、一番初めの小路を辿るが好い。行くうちに、右手の庭が次第に深くなつて、峽谷のやうなものになる。――左手には、木の葉に覆はれた絶壁のやうなものが聳える。そしてそれがいづれも、頭上で出會うて居る大樹の枝葉が成して居る、美しい濛とした薄暗さの裡にある。脚下百呎の處に根を有つて居る棕櫚が、頭上百呎の處にその頭を擡げて居る。それでもそれは、やつと日の目を見て居るのである。……その峽谷は向うの方へずつと擴がつて行つて、小さな湖水を二つ造つて居て、それには、マルティニークと、グアドゥルーブと、ドミニカとを縮小した、人工の島が點綴して居る。その島は、此處でさへ、その多くは全く珍奇な、熱帶植物で蔽はれて居る。印度、セネガムビア、アルジエ

リア、その他ずつと東の方の東洋の土産（どさん）のものなのである。見たことも無いほど優雅な、喬木のやうな羊歯が、路の際から或は湖水の縁から、外（そ）り曲つて聳え立つて居り、大きな『旅人の木』（アルブル・ドゥ・ヴォヤジュール）が、その巨大な扇を擴げて居る。素晴らしく大きな攀援莖植物が、環になつたり花綵になつたりして、路の上に垂れ下がつて居る。尖の次第に細くなつた緑色の綱が、それは根を下ろさうとして降つて居る蔓草なのであるが、それが到る處に懸かつて居り、莖が錨索ほども太い寄生植物が、樹木へ蟒蛇のやうに卷き附いて居る。頭上の緑の曠野へ、眼の屆かぬ處まで、そゝり立つて居る木の幹が、その木膚を少しも見せて居らぬ どんな木なのか推量が出來ぬ。いづれも、葉の柱かと思へる程に厚く、蔓草に包まれて居る。一切の物が日に當たらうと爭うて居る所の、諸君と空との間には、殆ど隙間無しの、葉で出來た圓天井があり、何物も確かとは見分けの出來ぬ、雲のやうな緑色の混亂がある。

左手の緑の懸崖に、時折、割れ目のある處へ出る。それは、鳶色の石から成つた苔の蒸した或る盆地から、他の盆地へと落下する瀧の爲めに出來た口か――或は、苔で緑になつて居る、そして年數の爲めにチョコレート色になつた、石の段々が占めて居る破れ目か、てある。その石段を登ると、更に高い路へ出られる。ところが、そんな石造の物は――洞窟も、橋も、瀧壺も、臺地も、石段も――すべて、歲月の爲めに黑ずみ、苔のやうな物で

天鵞絨のやうになつて居る。……別な世紀のものである、この植物園は。特別な法令が、此の庭に關して、佛蘭西革命（第二年）中に下されたからである。——この庭は頗る古雅である。ヱルサイユと同じほど古い、或はもつと古い、藝術精神を偲ばしめる。が、今でも、筆に描けぬほど美しい。

……到頭、果へ近づくと、淙々と水の落つる音がきこえる。——眼下の河の床の上に、綠の圓天井の間に、破れ目が一と處ある。路の角を不圖曲ると、その瀧が見える處へ出る。眼の前に見えるのが、バルナッス山で、突如として落ち來る日の光を背に、懸崖の端が一つ見分けられる。その懸崖の上から、その頂の綠の一溝から、渦卷く白沫の一條の瀑が、恰も煙が落ち込むやうに、まろび落ちて、下で、つぎからつぎへと幾つもの、苔に覆はれた瀧壺で受け留められて居る。その初の落下は高さ七十呎ばかりである。……横の、あの樹陰に暗い、腰掛の上で、ジョセフィーヌがいつか休んだことがあるであらうか。……彼女は此處の斯んな小徑もみんな記憶してゐたのであつた。後年、確にその夢に往來した！に相違無い。

別な途を通つて歸ると、他の幾つもの瀧を——どれもこれ程壯大では無いが——一見することが出來る。だが、何れも美しい。そしてそのうち一つ——その葉を如何にも高く陽

の光の中へ持ち上げて居るので、その高さが眩暈を感ぜしめる程の、幹の白い棕櫚が、その絶頂の處て左右に生えて居る分——の感銘は、容易に忘れはせぬてあらう。……その瀧から河緣の路を辿ると通る、高さ二百呎のキャベツ椰子やアンゼランの大並樹道の——有名な『アレ　デ　ドゥ　エル』の——莊嚴さもまた眩がするほどである。……

非常な高さ。綠の薄明りの中に太古からの樹が柱なして聳えて居る森嚴さ。寂寥。無言の憧憬、或は勝利、或は絶望の想をほのめかす、半分しか見えぬ物の姿の奇異。——此等が結合して、一種特異な畏懼の感銘を起こさせる。……諸君は其處に一人居るのである。諸君の耳には、人聲は更に聞こえぬ、——その火山質の岩の上を流れる川の淙々たる音と、千萬の蜥蜴や雨蛙や小さな蝦蟇が這ふ音とのほか、何の音も聞こえぬ。人間の顏は更に見えぬ。諸君の身のまはり到る處に、人間の勞苦が自然の爲めに咬まれ喰はれて居るのが——斷たれて居る橋、滑り落ちて居る石段、倒れて居るアーチ、水盤の涸れて居る息の根を止められて居る噴水が——見える。——そして到る處辛烈な腐敗の香が立ち騰る。この遍在な臭は不愉快な感じを與へる。——自然が人を魅するに最も强力なる處に在つては、破壞をするにもまた最も偉大である、といつも諸君に憶ひ起こさしめる。

この美しい植物園は、今は嘗てありしものの廢址に過ぎぬ。佛蘭西帝國沒落以來、不面

目にも濫用され粗略にされて居るからである。共和國が、此處の管理にと派遣した土地經營者は、幾町歩に亙つて巨大壯麗な樹木を――その中には、路の兩側に立ち列んだ莊嚴な棕櫚もあつたが――薔薇の栽培を試驗する目的で、伐り倒して此處の破滅を始めた。ところが、薔薇は此處では栽培されやうとはしないで、そして蛇が、その實驗的庭園に立ち入ることを不安ならしめて、その破壞の復讐をした。――森林樹が伐り倒されてからは、下生えの叢や、灌木林へ、いつもうぢやうぢやと這入りこむ。……その後、この植物園は、暴風と瀧なす猛雨との爲めに、大いに損害され、彼の山川が汎濫して、橋を運び去り、石造物を破毀した。その破損を修復する何等の企圖も爲されなかつた。だが、怠慢だけでは、此處の美しさは荒廢に歸しはしなかつたらう。――暴虐無智が必要で！あつたのである。現在の黑人過激派の統治の下にあつて、その植民地そのものよりか古い樹木を勝手氣儘に伐り倒す命令が下された。――百代の星霜を以てしても元通りにはされ得ない奇觀偉觀が、伐り倒されて、公署用の炭に變つてしまつたのである。

一九

……此の自然の前に在つては、詩人の言辭はどんなに灰色に思へることであるか！海と空との、森と峰との、色と光の（北の國だけ知つて居る諸君は、その色を知つてゐないのである、その光を知つてゐないのである！）絶大な無言の詩は、歎賞の言語を嘲弄し、表現のあらゆる力を蔑視して、想像の力を痲痺させるほどに、想像の力に遙かに超越して居る。それを反映し得る技術なり言葉なりの巧みがないから、描くことも歌ふことも決して出來ないものが、諸君の前に在るのである。實現の希望の全く無い諸君の美の理想をば、子供に玩具を與へるが如くに、自然は實現して居る。そして、創造的魔力の、この無上な地上の表現を見るといふと、人間の思索の力は痺れてしまふ。文明の大中心に在つては、我々は心意の結果だけを――人間の努力の所產のみを――歎賞しまた硏究する。此處では、眼に見えるものは、ただ大自然の作品である――が、天地創造の、あの傳說的な霜無き朝に於けるが如くに、その原始的な力渾てを發揮して居る自然なのである。人間は、此處では、その四圍の綠な生物に對して、昆蟲が有つ以上の關係は殆ど有つて居さうに思はれぬ。

そして、人間の努力の結果は、不可入な森林を峰に着せたり、死んだ噴火口に冠らせたりする、その絶大な盲目な諸力と比較すると、無力無能なものに思はれる。空氣すら人間の思索に敵意を有つて居るやうで、――眠氣を催させるが、どんな大きな樹木でも、それが生命を失ふ瞬間からして、蠟のやうに溶け初める位に、强大な分解の活力を蓄へて居る。人間には、生きて行くといふただその事が、はや一つの努力である。醱酵しないやうに、それを抑へる血液の不斷の奮鬪には、疑も無く、生活力の非常な消耗があるので、心的努力に用ふべき剩餘は殆ど殘らぬのである。

……美術家も、詩人或は哲學者に劣らず、自己の手緣り無さを感ずることであらう、と自分は思ふ。市街に在つては、その筆を誘ふ驚く可き畫趣を見出し得るかも知れぬが、獨り面と向かつて自然に對して立つと、筆に塗るべき繪具を有つてゐない、ことを發見するであらう。熱帶の木の葉の輝きは、ただ炎て之を模倣し得るだけであらう。西印度の森を――西印度の風景を――描かうと思ふ者は、――その不思議な空氣の爲めに、靑味か紫味て薄められて――距離の爲めに、色彩が眼へ和らいて減つて遣つて來る、何處か非常に高い處から眺めなければならぬ。

……自分がこの數行を書いて居る今は日沒時で、色が魔法を演じて居る。入江へ開いて居る、狹い峻しい街路を見下ろすと、全く緑な海の上に――ライラック色の空の下に――絕大な橙色の光を背に――汽船の動かぬ影繪が見えて居る。

二〇

この熱帶地方では、夜は、『落ちて來る』やうに――多くの峰を有つた陸地の上へ降つて來るやうに――は思はれぬ。蒸發氣のやうに、地面から立ち騰るやうに見える。海岸線が先づ暗くなる。――それから傾斜地と低い山と谷とが蔭になる。――それから、頗る迅速に、その暗がりが山へ登つて行く。そのうちの一番高い峰が、島の他の部分が暗黑に蔽はれ、星が總て現はれ出た後まで、その天邊の處だけ、噴火山のやうに、數分間、輝いて殘つて居ることがある。……

……熱帶の夜は、北の國の人の眼には不思議に思へるやうな、一種の光耀を有つて居る。空は、見る目には――北國で見る程高くは――あれほど遠くは――思はれぬ。が、星はも

つと大きく、その光はもつと強い。

月の昇ると共に、空の菫色が何處も赤らむ。――北の國の夜明けの先驅となるのと殆ど同じやうな薔薇色になる。

それから月は山の上へ、非常に大きく、非常に明かるく――北の國の十一月に見られる、霧に包まれた太陽よりか確に明かるく――現はれる。妙な磁力を有つて居るやうである――この熱帶の月は。夜啼く鳥、昆蟲、蛙――啼くことの出來るものは悉く――月の大きな晩には、みんな頗る低い聲で歌ふ。熱帶の森林生活は暗黑と共に始まるのである。滿月の白い非常な光では、此の夜の生物は、いつもの如くに大聲立てる事を恐れて居るやうである。それからまた、この月は神經に一種特異な影響を與へる。そんな明かるい夜は、眠る事が甚だ困難である。暴風が襲ふ時感ずるやうな、漠とした一種の不安を感ずる。……

二

サン　ピエールから汽船で、一時間半許りで諸君は、マルティニークの首府フォール・ドゥ・フランスへ着く。……陸路が――ラ　トラースが――ある。が、馬に騎つて二十五

哩の路で、その高い道路から見晴らす景色は筆の及ばぬほど美しくはあるけれども、こんな氣候の處では人を疲勞させる。

……嘗ては綺のやうに美しい石造の町であつたのを、地震の爲め全く破壞されて後、木で建てなほしたので、フォール・ドゥ・フランス（舊稱フォール・ロワイヤル）には、サン ピエールと比べると、外觀に於て興味あるものは餘り無い。低い、濕つぽい平野に在つて、そして目に立つ建築物も多くは無い。この小さな町は、半時間許りで隅から隅まで歩かれる。然しサヴンヌは——巨大な苔滿林匝やサブリエーが生えて居る、綠色の大きな公設辻庭園は——ジョセフイーヌの大理石像の爲めに、浪漫的にされて居らんでも——其處だけは見物の價値があらう。

名彫刻家の創造物たる、其處の彼女の白い夢を見に、自分は行つた。……自分には絕對的に麗はしいものに思はれた。

海風がそれを嚙んで居る。熱帶の雨がそれを條文にして居る。顯微鏡的な或る植物が、その喉の微妙な窪みを黑くして居る。それでもその姿の人間的な魅力は、生きて居る者を眺めて居るのでは無いか、と思はせる程である。……恐らくは、その横顏は——鑿の痕が見えるほどまでに彫像じみて居て——藝術的に現實味が乏しい。が、その美しいクリーオ

ール顔を眞直ぐに見上げるといふと、生きて居る、と信じられる。この婦人の、西印度式な驚く可き魅力が、渾てそれに存して居るのである。

彼女は、第一帝國時代の風の衣物を着て、しなやかな腕と肩とをむき出しにして、サヴンヌの丁度中心に立つて居る。片方の手は、那翁の鷲に似た横顔が浮彫になつて居る、メダリオンに倚りかかつて居る。……高い棕櫚が七本、熱帶の日の紺碧な光にその典雅な頭を擡げて、像のぐるりに環になつて立つて居る。魔力のあるその圓圏の裡に居ると、靈地を――美術家と詩人との聖地を――踏んで居るやうな氣がする。――此處に立つて居ると、言行錄記者の追想は消え去り、歴史の雜談は聲を鎮め、彼女が述べたこと或は笑つたこと或は泣いたことの、どんな噂があるか、最早知りたい氣にはならぬ。ただ、その女らしい棕櫚の、淡い、和らかい、ゆらゆら動く蔭の下に、彼女の魅力だけが生きて居る。……彼女は、菫色の漫々たる夏の海を越えて、赫灼たる瑠璃色の光を透して、その生れ故郷を、眠氣を誘ふ美はしいトロア・イレを――いつも、同じ、半ば夢を見て居るやうな、半ば物哀れな――口には言へぬほど人の心を動かす――微笑を以て、振り返つて見て居るのである。……

二二

こんな短い滯在の後でも、マルティニークを去る時は誰れしも殘り惜しく思ふ。此島では、熱帶的自然が見せて吳れるものに劣らず、その古い植民生活そのものが、これまで見たことのあるどんなものとも異つた、或る類無しの性質を、或る特殊な魅力を、有つて居るからである。……船はまつしぐらにバルバドスに向けて進む。――途中の島々には歸航の折にだけ寄港するのである。

……いつも美しさを深め行く空の下に――著い南風に向つてである。夕方黑雲が前方から昇り出す。夜になる迄に、それがペンキを塗つたやうに空一面に擴がる。すると、ビユウビユウと盛んに風が吹いて來て、浪を揚げる――が、矢張り妙に暖かい風である。船は暗い中で、一時間或はもつとの間、非常に搖れる。――すると、瀧と降りそゝぐ生ぬるい雨が、海を再び平らにする。雲は通り過ぎて、菫色の透明な熱帶の夜がまた――星をきらきらさせて――現はれる。

朝早く、低い長い――今迄見た他の陸とは全く異つた――陸が地平線上に現はれる。目

にとまる火山形の山は一つも無い。それが――燃えて居る、珊瑚質の水平な海岸の――海に瀕して、緣の白い、綠色の帶と細い地面の――バルバドスである。が、その綠色の線が、樹木の輪郭を見せ出す迄には、幾時間か經つ。

……港へ近づく頃、空に懸かつてゐた一團の黑雲が、俄に崩れて光のある雨となつて落ちて來た。その雨を透して、港に舫つて居る船が、金色の霧を透して見るが如くに、廓大されて見える。降り出し同樣急に歇む。雲は全く消え去つて、汚點無しの、目を眩ますやうな、不思議な青空が現はれる。……この旅行全體に値する觀物である――バルバドスの此の眞晝の空の光耀は。――地平線の輝きは殆ど眼が眩むほどで、海を限る水線は剃刀の刃の如く鋭い。そして青玉色（サファイア）の水の上に、殆ど一百の船が――帆柱、帆桁、綱索を、壯麗驚く許りの青空に、くつきり浮かせて――少しも動かずに碇泊して居る。……その間にこの島の海岸は、その美觀總てを發露した。先づ、長い、白い、うねうね曲つて居る――珊瑚ときらきらした砂とから成つて居る――糸のやうに細い濱邊があるに氣が附く。――それから、それに深綠な植物の緣飾があつて、その間から其處此處に屋根や尖塔が突き出して居るが見え、幹の白い棕櫚が、羽毛の頭を震るはして突立つて居るのが見える。此處の翠綠の一般の色調は、光輝に充ちては居るが、黑ずんだ綠である。それには金屬の輝きに

似た輝きがある。この海岸正面の先きに、濛とした淡緑の長い波動が――低い岡と谷との、遙か遠くまでの起伏が――見える。その一番高い曲線には、卽ち此の島の脊梁には、一列に椰子が生えて居る。それが餘りに遠いので、その幹は殆ど眼に見えぬほど小さくなつて居る。樹の頂だけ――陸と空との間の宙に浮いて居る蜘蛛のやうに――明らかに見分けられる。が、森は一つも無い。海岸線から向うは、眼の屆く限り、陸はただむき出しの、蔭の無い、綠である。バルバドスには荒蕪地は少しも無い。恐らくは世界中で一番人口稠密な（一平方哩千〇三十五人の住民）場處の一つであらう。――毎年他の英領植民地へ幾千といふ黒人勞働者を――その人口の過剩を――送り出す。

……其處の市街のブリヂタウンは、建築若しくは風習の異國的な特色を何か發見しよう、と期待する外國人を失望させる、――此點に於ては、他のどの熱帶開港場よりか、恐らくは、餘計に失望させる。その主要な街路は、英吉利の市街を――それも古い市街では無く、ネルソン記念碑がありはしても殆ど平凡なほどに色彩の無い、新しい市街を――歩いて居るのだ、といふ印象を與へる。棕櫚すら眞に熱帶的な風丰を此の土地に貸す力を有つてゐない。――街路は、畫趣があればてあるが、それが無くてゐて狹く、石灰の道のやうに白く、そしてきらきらした光に充ちて居る。――風俗、服裝、生活の樣式、商賣の仕組み、

全然英國風てある。——人民は眼につくほどの獨創力を缺いて居る。そして、他の西印度の人民達の靜穩な遊惰とは妙に違つて、その人民の非常な活動が殆ど不自然に思はれる。人口多數が致す壓迫が主として此の特徵に貢獻して居るのである。が、バルバドスは、兎に角、位置だけの理由でも、繁華な植民地なのてある。西印度中て一番風上（かざかみ）にあるから、自然とその重要な港となつた計りて無く、アンテリィーズの貿易中心地ともなつたのてある。鐵道、電話、乘合馬車、火災及び生命保險の會社、上等な旅館、圖書館及び讀書室、それから立派な公立學校がある。その年々の輸出貿易額は約六百萬弗を算する。

外國人が初めて此の市街を見た時、最も奇妙に思はれる事は、その商活動の過半が、黑人によつて——黑人の商人、黑人の商店主、黑人の番頭によつて——營まれて居ることてある。黑いといへば、バルバドス人は、全體として、西印度中て一番黑い人間だと、思はせる。黑人の——ヅーアヴのやうな軍服を着けた——聯隊が、英國の音樂の音に合はせて行進する。白いヘルメット帽をかぶり、白リンネルの制服を着けた、黑人の巡査が秩序を維持して居る。黑人の郵便脚夫が郵便物を配達する。黑人の馭者が一時間一シリングて御客を待つて居る。決して人目を惹く人民ては無い、肉體的には。寧ろ、その反對てあつて、その上——マルティニークの有色人とは無限な相違て——平氣て殘忍な事をする。が、元

氣は非常なもので、そして立派な英語を話す。バルバドスの黑人（ネグロ）が、舊時代の强いアクセントを使つて英語を話して居るのを聞くと、誰れも殆ど仰天する。話して居る人を見ずに居て聞くと、黑い唇からそんな英語が出るとは信じられぬ位である。そして港附近の黑人の極普通な勞働者すら、倫敦人ほど立派な發音をする。バルバドスの英語が純粹なと云ふ事は、疑も無く、バルバドスは他の多くの島と異つて、初からずつと大英國の所領で居る、と云ふ事實に一部は因るのである。遠く千六百七十六年の昔にあつてすら、バルバドスの繁榮の狀は他の植民地とは餘程違つてゐて、――白人は五萬人も居て――全然異つた社會狀態を呈してゐたのである。その時分には、此の島は二萬の步兵と三千の騎兵を集めることが出來、八萬の奴隷が居り、ブリヂタウンには千五百の人家があり、非常に澤山な商店があり、そして二百艘を下らぬ商船が年々砂糖收穫だけを輸出するにも必要であつたのである。

　だが、バルバドスは、その上に地質的にも、多くのアンティリーズ諸島と異つて居る。そしてその土壤の性質が、その住民の肉體的特質に餘程影響を與へて居る、ことは否むべからざることである。バルバドスは、これまた噴火的起原のもの――といふ事實は、非科學的な觀察者には、その低い、波動を爲して居る地表が、さう想像させないのであるが―

—噴火的起原のもの、と今は知られて居るけれども、その表面は石灰質から成つて居るのである。そして、石灰質の土壤が國民の肉體的發達に及ぼす著しい影響は、他の處に見るに劣らず、此處でも目立つて居る。アンティリーズの多くの島では、白人は氣候と環境との爲めに、退化し且つ小さくなる。然るにバルバドスのクリーオールは——丈は高く、筋肉は强く、骨は太く——この熱帶地に在つて、その祖先の英國人の體力と嚴乘さとを保持し永續して居る。

二三

……夜。英領グィアナ向けて汽走。——デメララへ着くまでは何處の港へも寄港しない。……日覆や風取帆を悉く取り入れなければならぬほどの、暖かい强い風が吹く。なまぬるい雨が後ろから吹きつける。そして全くの暗黑で、そを破るものはただ海の燐光だけであるが、それが今夜は異常な光を放つ。

船の通つた跡は、大きな幅の廣い——强烈な月光の如くに白い——沸き立つ火の川である。それて物が讀める程の鮮かな光である。船が曳いて居る尾は、その中心の處が一番鮮

かて、――南端に至るに從つて、燐の煙のやうに渦巻いて、雲のやうに薄らいで居る。時折大きな鋭い光が、流星の如くに、その中でパッと一瞬時光る。この不思議な船蹤よりも奇怪なのは、外の暗い處で、少し離れて、船のまはりに燃え續いて居る、長いゆるやかな火である。星雲のやうな白熱光が、底から昇つて來て、形を變じて、そして消えて行く。――蛇のやうな炎が、のたくり廻つて逼つて行く。――うねりを爲した長い火の冠がある。全く一度に燃え上がり、暫くの間光つてゐ、消えてまた現はれ、そして長い間燻つたまま渦になつて流れ去るそんな光は、幾百萬といふ微小な火花から成つて居るやうである。

毎晩暖かい烈風が吹いて盛んな雨が降る――暴風季節なのである。――遠く南へ進むに從つて、段々激しくなるやうである。だが、我々は、自然の靜穏が決して強風の爲めに擾されない彼の晝夜平分地方へ、近寄りつつあるのである。

……朝。無邊際の青い日の中を、なほも南を指して汽走しつつある。空の瑠璃色が始終濃くなりつつあるやうに思はれる。地平線には、青味がかつた白い――殆ど眺めて居れぬほど輝かしい――光がある。藍を流したやうな海。……一點の雲も無い。光輝は日沒まで續く。

するとまたも、非常に明かるいそして穩かな、夜になる。南天の星座が白々と燃える。

……我々は南亞米利加海岸の大淺洲に近づきつつある。

二四

……バルバドスを去つてから三日目の朝であるが、熱帶の海へはいつてからこのかた初めて、一切の事物が變つたやうに思はれる。大氣は妙な霞で重くるしい。そして蒸氣の爲めに非常に廓大されて居る、橙色の太陽の光が、綠を帶びた黄な――澱んでても居るやうに、汚れた不透明な――海を照らす。……墨其古灣に面したルイジアナの海岸で、丁度斯んなやうな日の出を見たことを、自分は想ひ出す。

船は淺い處に居るので、進行が甚だ遲い。水深を測る男が、規則正しい間を置いて、言ひ續ける、――『四尋四分の三！』『四尋半！』……水深には餘り變化が無い――一尋の四分の一か、一尋の二分の一か、の相違である。暖かい空氣が、沼の空氣のやうに、むかつく程重くるしい。水はオリーヴ色と緒色(オーカー)とを交互に見せる。船が通つた跡の水の泡は黄色である。淡水の洪水の折の色が斯んなである。……

手欄に靠れて居ると、同船者の一人が、このねばねばした灰綠色の海が――その人が見

物に行つた――ケーエンヌの大懲罰島を洗ふのだ、と言つてきかす。罪人が死ぬると、死骸を袋に入れて縫ひくゝり、海へ持つて行つて葬の大鐘を鳴らす。すると、水の靜かな表面が、突然、無數の鰭に――その忌まはしの葬式へ突進し來る鮫の黑い鰭に――掻き亂される。そいつらに鐘の音が判かる！のである。……

視界に陸地がある、――非常に低い陸で――沼澤地だらうと思はしめる、黑い薄い線を爲して居る。そして海のむかつくやうな色が始終濃くなる。

その陸が近寄るにつれて、熱帶的な美しい外觀が見えて來る。その黑ずんだ綠の線が、色が冴えて來て、棕櫚の頭が密立した、奇妙な常綠の枝葉から成つて居る、見事な緣飾に形が判然として來る。それから苔蒸した防波堤が見えて來る。石と石との接ぎ目は何處も綠色のものが附いて居る、くすんだ灰色の石壁である。それから要塞が一つある。我が汽船が鳴らす汽笛を、丁度その通り妙な反響が眞似をする。砲聲は一度――たつた一度響き返る。一つの音を增して響かす山々が、此處には無いからである。その間絕えず、海の水は段々濃くなり、濁つた綠になる。船轍は層一層赭色になり、泡はより粘著いてより黃色になる。凪で動けぬ船が、鏡の上にくつついて居る蟲のやうに、眞つ平らな海の上に到る處に點在して居る。すると、突然に、車軸を流す雨が降り出す。その矢と射る雨滴の白い

嵐を通して、何物も見分けることが出來なくなる。

二五

チョーヂタウンでは、その川へ入つて來る汽船は、埠頭に横附けが出來る。――我々は濡れずに政府の倉庫へはいられる。十五分でその驟雨は歇む。そこで我々はその倉庫を立ち去ると、我々の航海中これまで遭つたことが無い程の非常な日光が輝いて居る、棕櫚が縁に植わつて居る、幅の廣い街路へ出る。雨が空氣を清め、靄を解かしたのである。日の光の强さ驚くべきである。

デメララの自分だけの記憶は、いつも絶大な光といふ記憶であるであらう。日の光は、電火といふ考を齎すほどの、何とも言ふにいへぬ、眼を眩ます力を有つて居る。――地平線は、動かぬ一面の電光の如くに、眼をつぶす。天心は、よう見上げることが出來ぬ。……北の國での、どんな光の强い夏の日でも、之に比べれば薄暗がりである。人は、蝙蝠傘をさすか、又は眼を下に向けるか、してだけ步く。そして、既に乾き切つて居る石鋪道は、殆ど堪へられぬほどぎらぎら光つて居る。

……ヂョーヂタウンには――我々がこれまで見た西印度のどの都會のとも異つた――其處に特有な一種の異國的な風丰がある。そして、それは主として棕櫚が在るからである。この都會は、建物も、設計も、總體の理想も、近代的である。その白い街路は、海風が吹き掃ふやうに頗る廣く建造され、その中心を走り流れる幾多の堀割で排水され、十字路には橋が架かつて居て、美觀を與へると同時に涼しくしよう、といふ目的を以ての家屋建築に關する、十九世紀知識の眞價を發露して居る。その建築は、熱帶化した瑞西式だと云つてよからう――瑞西の家の檐が、涼み緣(エランダ)の屋根に發達し、瑞西の家の車寄(ポーチ)が、長くなり廣くなつて、美しい廊下(ピアツツア)と張出緣(バルコニー)とになつて居るのである。大きな涼しいこんな廣間や、感心なほど空氣の流通の好く出來たこんな部屋や、天井まで開(あ)いて居る格子の嵌まつたこんな窓を工夫した人は、印度に住まつて居た人かも知れぬ。だが、此の町の外形は、その設計者が立派な審美感念を有つてゐた、といふことをも現はして居る。熱帶植物に見られる奇妙なそして美しい物が、いづれもみな自己の占むべき位置を工夫されて居り、自己の住地を與へられて居るのである。住宅にはいづれも庭園がある。庭園にはいづれも奇妙なそして綺麗な色が燃えて居る。が、到る處に、そしていつも、棕櫚(パーム)が聳えて居る。棕櫚の柱廊があり、棕櫚の木立があり、棕櫚の森があり――棕櫚といつてもサゴ椰子(パーム)もあり、キャ

ペッ椰子（パーム）もあり、コーコー・パームもあり、扇椰子（ファン・パーム）もある。此處では棕櫚（パーム）は、女のやうに、大事にされ、その美しさの爲めに可愛がられて居ることが分かる。到る處、發育のあらゆる時期の棕櫚を――軟らかい緑な羽毛のやうな初めての葉束を地面へ出して居るのからして、屋根から百呎も上にその頭を有つて居る驚くべき巨人に至るまで――見ることが出來る。棕櫚が柱廊になつて、庭園の歩道を境して居る。棕櫚が噴水の水盤のまはりに、絶妙な姿勢で群を爲して居る。棕櫚が門の兩側に、壯麗な圓柱のやうに立つて居る。棕櫚が公署や旅館の一番高い窓を覗き込んで居る。

……幾哩も幾哩も幾哩も、棕櫚の並木路を――奇妙なクーリー村落を横切つて、豐饒な甘蔗畠へ出て行かれる並木路を――馬車を驅る。その棕櫚は道路の兩側に、同じ水平に、聳えてゐて――際限無しのムア式拱廊の夢のやうなものを造つて――濃緑の羽毛の總飾が上に附いて居るきらきらした高い柱から、燻し銀の柱から、成つて居る、長い、途切れ目無しの、二重柱廊の通景（みとほし）を示して居る。時には、たつぷり一哩の間、木はやつと高さ三十呎か四十呎。それから、一層古い小徑へ曲ると、半リーグの間も、高さ百呎に近い巨木の間を馬車は走る。我々の前方でも後方でも、相合して一種の銅緑色の暗がりを造つて居る、その頸飾の、遠小近大の二重の線は、少しでも色の異つた處を見せるのは、餘程長い距離

を置いての時たまのことで、それは枯葉が非常に大きな黄色い羽毛のやうに垂れて居る處である。

二六

この棕櫚は、その樹皮の環がみんな確かと見える程の素敵な日の光を浴びて居ると、時時、それは肉があり感性がある微妙な生物である、といふ不思議な感銘を起こさせ――其横を馬で通つたり車で走らせたりすると、密かな靜かな運動をして動いて居るかのやうに思はれる。じつとそれを見詰めて居れば居るほど、其感じが強くなり――段々と、生きて居るやうに思はれて來――段々と、その關節のある銀鼠色の長い胴體が、じつと立つてゐたり、うねうねしたり、伸びたりするやうに思はれて來る。……デメララの田舍道の棕櫚は、マルティニークの植物園の素敵に大きな棕櫚が起こすやうな、あんな眞實な感情は、確に起こしはせぬ。暖か味を得よう、色を得よう、力を得よう、と熱帶の森の中から日に向つて伸び上がつて居る、植物園のあの美しい崇高な無言な生物は、――自分は記憶して居るが、これまで經驗したどんな畏懼の念とも異つた、一種の畏懼の念を自分に充たした。

……が、グイアナの此處でさへ、天空の下に獨りで立つて居ると、棕櫚は矢張り樹木では無くて動物のやうに思はれ――個性を有つて居るといふ念を抱かしめる。――そのしなやかな形が一々みな、思索をする或る力に生かされて居るのだと信じられる程で――傳說が超自然的な物に與へるやうな、あんな冷靜な穩かな心で、みんな自分を眺めて居るのだ、と信じられる程である。……これに似た空想が、雄のキャベツ椰子に佛蘭西植民人が附けた名前を――アンゼラン〔天使〕といふ名前を――思ひつかせたのでは無からうか知ら。……

此處の植物園は實に驚くべきである。新しい。木立も無く、巨大な材木樹も無く、樹陰も無い。が、立派に設計された地面が――芝地と花壇と交互になつて居る地面が――到る處に驚くべき觀物を提供して居る。橙色の妙な叢が目にとまる。四通り異つた色の斑點がある植物が目にとまる。綠色の髮毛で造つた假髮のやうに見える植物がある。色水晶で出來て居るやうに思はれる非常に廣い葉を有つた植物がある。天然の植物とは見えないで、植物の理想化かと思へる植物が――彫刻家の想像に成るあの美しい妙不可思議なものが――ある。そんなもの總てを――黃色い、それから藍色の、それから黑い、それから深紅の植物を――馬車の窓から瞥見する。

……我々は、ギクトーリア　レジア〔大鬼蓮〕の――睡蓮中のあの怪物の――綠色な艦隊を池中に眺める爲めに初めて馬の手綱を控へる。それはどの池をも、また多くの堀割をも、蔽うて居る。岸近くではその葉は異常に大きくは無いが、水の深さに比例してその圓體を太くするかのやう、遠く浮いて居るものほど、大いさが增して居る。二三間離れた處のはスープ皿ほどある。ずつと遠いのは、晩餐用の盆ほどもあり、池や堀割の中心では、喫茶用の食卓ほどもある面を有つて居る。そしてそれが何れも端を上向きにして、綠を垂直にして居る。此處其處に、葉の上に抽んでて、その壯麗な花が見える。……傭うた馭者が親切な案內者なら、多分『蛇の木の實（スネーキ・ナット）』を――グィアナの森林に固有な或る不思議な木の果實を――見せるであらう。この――殆ど蛤貝同樣の形をしてゐて、同樣にその尖つた方の端で眞半分に割れる――暗黑色な果實は、殆ど眞實とは思はれぬものを包んで居る。核のまはりに淡色の包があるが、それを剝くと、指につまんで居る物は、頭の三角な、三重に蜷局（とぐろ）を卷いた、頭から尾まで微細の點に至るまで完全な、一個の小さな毒蛇である。この不可思議な擬物は、保護の目的て、斯く進化したものであらうか。これは並外づれの畸形變態では決して無い。どの果實を開けて見ても、蛇姿の核が蜷局卷いて居るのである。

……だが、そんな珍らしい感銘を百と得ても、市街の方へ又も棕櫚の並木路を通つて、

あのしなやかな、丈の高い、無言な、優雅な姿をした物に、愛憎の情無しに、見られて居るのだ、といふ思を又も抱くのは、何といふ愉快であるか！

二七

印度人。苦力（クリー）。男、女、子供——それが、日を浴びて、棕櫚の樹陰に、立つたり、歩いたり、または坐つたりして居る。兩手を其黒い膝の上で組み合はせて蹲つて居る男共が、其白い頭帕布（タルバン）の下（した）から——稍々蹙め顏して、じつと——我々を見つめて居る。此印度人共の顏には、嚴格な堅くるしさうな、同じ表情があり、眉の同じやうな八の字がある。その銳い凝視は氣持ちのいいものでは無い。敵意に近い顏である。見測つて居る——肉體的にまた精神的に、人の價値を見測つて居る顏附である。印度では人間が非常に多く居るので、この男共は、我々西洋人は稀にしか知らぬ、生の法則の意味と力とを充分に知つて居るのである。その暗憺たる据わつた蹙め眉の下（した）に、その眼は蛇の目のやうにきらきらして居る。

殆ど總てが印度風の同じ衣物を着て居る。普通は白い、厚く卷き込んだ頭帕布（タルバン）と、膝と脛とをむき出しにして、太股の半分どころ迄しか無い白ずぼんと、それから白いジャケッ

とてある。紺の長い外袍を着て、色ものの頭被を冠つて居るものが少々居る。それはババジー即ち僧侶である。男子は大抵は丈が高く見える。ほつそりして居て骨は小さいが、手足は恰好よく出來て居る。眞面目て――低い聲て話し、滅多に笑顏を見せぬ。濃い黑い鬚を有つて居るのは恐らくは回々教徒であらう。その會堂(モスク)が此處にあつて、祈禱を促がすムエッチンが多くの栽培地て一日に三度呼ばはる、といふ話てある。他の者は鬚を剃るが、回々教徒は鬚を生えるが儘にして置く。……柔らかい短い、身にしつくり合つた衣物を着、人をじらすやうな面紗をつけて居る――肩も腕も踝もむき出しな衣裳をつけて居る――その女共のうちには、隨分眉目うるはしいのが居る。その黑い腕は必らず末細で、丸々して居り、銀の環を嵌めた踝は乾度輕い眞直ぐな足に上品に接合して居る。立つてゐても、歩いて居ても、休んてゐても、優美の粉本になれさうな、花車な女の子が多い。その態度は、眞直ぐで居ると、休止して居る踊り子のやうに、いつも輕やかさとしなやかさとを思はせる。

……苦力の人妻が、その腰に非常に可愛らしい裸の赤ん坊を負うて、前を通る。微妙に花車な手足をして居る。その小さな踝にはぎらぎら光る、薄い、銀の環が嵌まつて居る。唐金の小彫像のやう、印度のエロスたるカマの小彫像のやう、てある。母の腕は、肘から

手首まで、いくつもの銀の腕環に包まれて居る——その或る物は、扁たくて裝飾が施してあり、或る物は、平らな、圓い、がさがさなもので、兩端が槌つて毒蛇の頭の形に合はせてある。兩耳に、金の大きな花をいくつも附け、その頗る花車な小さい鼻に、小さな金の花を一つ附けて居る。この鼻の飾は可笑しくは見えぬ。こんな黑い皮膚には、珍妙ではあるが、同時にまた快感を覺えしめる位である。この粉飾は全く金屬だけである。——苦力は斯うして——銀貨金貨を溶かして、それを腕環や耳環や鼻飾に鑄なほして——その貯蓄を持ちあるくのである。

……宵は短い。此處へ來るまで、日は段々短くなつて來た。午後六時には暗くならう。誰れもそれを遺憾には思はぬ。——こんな熱帶の日の光輝は、十二時間は殆ど堪へられぬ。太陽は既に低くて、橙色を帶びた黃である。それが棕櫚の木立の中へ落ちると、その凝視は、世界を一種奇態な色に——殆ど燃え盡くした或る太陽ならこんな色をと思はれるやうな、如何にも幻のやうな色に——染める。空氣は嗅ぎ慣れぬ妙な香に充ちて居る。自分等は炎色の藪を通る。すると一種異常な——甘い、濃い、不思議な——香氣が、愛撫の如くに、自分等を包む。赤ジャスミンの精なのである。……

……此處の——赤道から汽船で二日路內の此處の——日沒は、何たる熱帶的なものであ

らう！空は殆ど天心までも海から燃え上がるのてある。それは一面の橙色の非常な熾熱光て、陽(ひ)が沈むと、それが迅速に朱と濃くなる。この絶大な燃燒が、言語に絶して强烈なのて、それが忽然と沈んだ光景は、全く意外に感ぜられる。見る眼には、その洪大な光全體を、海の後ろへ曳きずり下ろすやうてある。……瞬時に世界が藍色になる。空氣は蒸發氣て濕つぽく、重くるしくなる。蛙が妙なブクブクいふやうな音を立て始める。何だか分からぬ或る動物が木の上て變な音樂を始める。それは蟋蟀の音色のやうな、震るへる音では無くて、蒸氣が擠を細く洩れ出る時のやうな、鋭い、高い、連續した一音てある。植物性の强烈な、馨しい奇異な、香が立ち騰る。自分等が泊つて居る旅館の木の下に、ぽたぽたと絶え間無しの音がきこえる。その點滴は、無恰好な蟲の體軀(からだ)のやうに、重く落ちる。が、それは露ては無い、蟲ても無い。濃い透明な果漿て——大きな滴となつて落下する、果肉の液てある。……夜は、露て、植物の呼吸て、冷たくなる。て、自分等は、窓を殆ど皆閉めて、眠る。

二八

……グイアナを出港する時、またも世界が猛火に包まれたやうな、日沒である。——またも無雲の夜である。そして本土に近寄つて初めて慕はしいものに思はれた、彼の海水の冴えた青を、翌けの朝が持つて來て吳れる。一日中、長い大うねりで、風は微溫。が、夕方近く、水が又も色を變へる——オリーヴ色を帶びる。オリノコの大河が近いのである。海の緣へ、微かに淡紅い、微かに灰色な形のものが——船の進むに連れて大きくなり長くなる、ぼんやりした形のものが——立ち現はれる。船はトリニダッドへ近づきつつあるのである。

初には、長い、高低のある、淡灰色の山脈と——鋸歯の輪郭と——なつて、はつきりした形に見える。段々近寄ると、その山脈の後ろに、背を圓うしたり肩を聳したりして、別な山々の頂が見分けられる。そのうち、一番近い方の山々が——頗る徐々と——仄かな綠になり始める。一番外側の横嶺の眞前に、變な恰好の岩が、海面から急にそゝり立ちつつある。幾分か綠て、その表面を蔓草や灌木が包んでゐない處は幾分か赤味を帶びた灰色で

ある。その岩と岩との間、海が跳ねて白ずむ。
……それから船は、素晴らしく見事な熱帶海岸に沿うて――海から頂上まで森に――日の光を通さぬ、どす黑い、濃密な、驚く可き森に――包まれた山々がうねつてゐて、その山々の間隙はインキのやうに黑い、のを前に見ながら、進んで行く。そのより濃密な木立の上に、此處其處に、棕櫚が突立つて居り。奇妙な巨大な樹木が、森の頂線の上に、青空を背に――攀援莖植物が塊になつて垂れ下がつて居る大きな扁たい頭冠をふくらがして――ぬつと立ち出て居る。この森林の正面は、見たところ、堅牢な壁のやうであるが、それが四十五哩の長さに亙つて跡切れずに、横に起伏して居て――段丘になつて高まつたり、小塔の連立の如くに突出したり、大會堂（カテードラル）の形に似たものや、城砦建築を思はせるものになつて屹立して居る。……が、此等の森林の神祕は發かれずに居るのでは無い。――現代の最も氣高い作家の一人が、他の如何なる人にも述べる餘地を殘さぬまでに、美しくまた充分に、此等に就いて書いて居る。チャールズ・キングズリの『終に』（譯者註）の名文を知つて居る人は、多分、日々その森林を通る多くの人よりか、遙かに能くトリニダッドの森林を知つて居るのである。
汽船の甲板から觀てさへ、トリニダッドの山と森とは、他の西印度諸島のそれとは、餘

程異つた樣子をして居る。山がそれほどに高くは無く——頂上は圓味を有つてゐて、それほどにぎざぎざでも無く突飛でも無い。マルティニークやドミニカの嶺は、正味此處の山よりか二千呎は高い。この陸地もまた——古昔は大陸の一部であつたもので——全然構成を異にして居る。そしてその植物その動物は、南亞米利加のものである。

……一陣の涼風が強く吹いて來る——また吹き、また吹く。——それから今度は盛んな呼吸(いき)が——オリノコ河がつく〲呼吸が——實着に吹きはじめる。……世界で一番靜穩な——一度もこれまで颶風に煩はされたことの無い——港の一つて碇泊すべく、『猿の口』の海峽を通過しないうちに暗くなる。漣も立てぬ水の上へ、ポート・ヲヴ・スペインの燈光が、黃な靜かな長い光を射て居る。……夜に入つて冷たくなる。——彼(か)の巨大な河の氣息と大森林の蒸發氣とて、空氣が冷やされるのである。

譯者註　キングズリの著『エストワードホー』第十七章中の、『終に』の語以下の、熱帶の風物を描いて眞に迫れる、文を指す。

二九

……日の出。此の世とも思へぬ美はしい朝——お伽噺の空——戀愛詩の海——である。

平らな海が何處から何處まで、言ふに言へぬ柔らか味のある青い天空の下に、光のある、全くの鳩羽色で——地平線は餘程の高さまで、緑を帶びた金色の靄が——口には云へぬ麗はしい色合の、どんな水彩で模しても、ありうべくもないものだ、と大聲でけなしつけられるであらうやうな色合の、霞が——罩めて居る。日はやつと昇つた計りで、我々との間には水蒸氣が面紗のやうに懸かつて居るから、まだ山々は殆ど全く灰色で、それを包んで居る森も亦灰色で濛として居る。やがて、鏡の如く平らな海の水の上に、紫と菫と薄青と溶けた金との、幾つもの帶がさつと走り、震るへ、幅廣くなり始める。それは、日が濃くなり潮が上ると共に、變つて行く色を映す、朝の海流なのである。

やがて、日がより高く昇ると、灰色の山々の處々に、緑色の塊が微かに見えて來る。この大きな耀光の右と左とに、濛とした光を透して、森の頂の輪郭が自づと判然とし出す。ただ市街だけは依然として眼に見えぬ。市街は、陽光の落下と船との丁度間に在るので、

其處の靄が餘りに强い光を得て居て、市街の在り場は、火の霧に隱されて居るやうに、眼には見得ぬのである。地平線の金緑色が次第に純粹の黄に變はる。丘や山が、和らか味のある、豐麗な、肉感的な色彩を呈する。遠い方の山の一つが、不思議な色調に——見た處では透明な金色に、正に黃金の精に——變つて居る。が、しまひには、その山々がみんな青々と判然として來て、その靄を透して、綠色の鮮かな襞や尾根を見せる。谷間は、青い煙のやうなものに充たされてても居るやうに、暫くは霞んだ儘て居る。が、絶壁や山腹の出張つた部分は、その霞んだ綠をば、急により暖かい色合に變へる。その種々な色合には、妖魔の如き魅力があり、超自然的な麗はしさがある。總ての物が、和らげられ、弱められ、半ば氣化されたやうに見えて——輪郭の極めて判然として居る半面影像は、いづれも朝風を受けようと色のある翼を擴げて、西の水面に點々散在して居る、凪に動かぬ小さな船の半面影像だけてある。

太陽が昇るに從つて、濛とした青からの風景の發展が層一層急に進む。山や岡が悉く綠の顏を見せ、葉狀體の委細を露はす。待つて居る帆を——白い、赤い、黄な帆を——風がふくらませ、水に漣を打たせて、それを綠にする。小さな魚が跳び始める。乳光色の飛沫の如く、飛び上がつては、きらきらした雨と、落ち込む。そして最後に、褪せ行く水蒸氣

を透して、露にきらめく赤瓦の屋根が見えて來る。市街を閉ざす幕が揚げられたのである。見ると、色彩に充ちた、稍〻古風な、稍〻西班牙風な——少しサン　ピエールに似た、少しニユー　オルリアンズの舊市街地に似た——町である。到る處に、高い美しい棕櫚が見える。

三〇

黒い人間が群れて居る間を、クリーオールで盛んに饒舌つて居る騒ぎの中を、通つて上陸。……燃えるやうな青い空の下の、温かい黄色な狹い街路。——日光と黄色な塗料とを浴びて居る、多少古雅な、低い小綺麗な家と田舍家との、長い通景(みとほし)、——それから日蔭樹の並木路、——それから波打つて居る芭蕉の葉と棕櫚の葉とが其上に抽んでて居る低い庭壁、——といつた、ごちやごちやした印象。……マルティニークのサン　ピエールの街路て我々の眼を樂ましめた彼(あ)の畫趣に富んだ人間が此處には居ないので、漠とした失望の念が加つて居る——眠を誘ふ暖かさと非常に强い光線と異國的な植物、といふ一般的感念。佛蘭西植民地の、あの鮮かな衣裳は此處では見られぬ。英領諸島では、何處にもあんなや

うな物は少しも無い。にも拘らず、此の驚くべきトリニダッドは、他のあらゆるアンティリーズ諸島の間にあつて他の點に著しいが如くに、人種學的に見て無類である。此處には——獨逸植民人及びマデイラ植民人の外に——英國人、西班牙人、それに佛蘭西人と、三通り異つたクリーオール人が居るのである。そのクリーオール人の各〻に對當する、そして各〻別な言語を話す、一種の黑人或は半混血人の要素がある。印度人苦力が五萬人居り、支那人の數も夥しいものである。だが、人種的要素が斯く異常に種々樣々であるといふことは、外來人に直ぐとは明白には分からぬ。埠頭に居る黑人の群集の中を通る時の第一印象は、バルバドスの人民のやうな殆ど亞弗利加種の人民の間に居る、といふ印象である。そして實際また、街路では、對照の爲めに白い顏が奇異に見える程までに、黑の要素が優勢なのである。白い顏が出て來るといふ場合は、印度風なヘルメット帽の影に隱れてて、そして濃い鬚を生やしてゐて、嚴肅な顏である。人を支配するに慣れて居る者の人相なのである。此處の植民地生活の、異樣な人種的背景で眺めるといふと、鬚を蓄へた逞しい英人の容貌が、何となく雄々しげに浮き上がつて見える。——白い皮膚といふものの威嚴を、全く今迄に無く新規に、誰れしも感じるのである。

……一番近い苦力村へ連れて行つて貰ひに、自分は馬車を傭ふ。——愉快な車行(ドライヴ)である。

……時には、白い滑らかな路が、森に蔽はれた山の斜面を曲線に廻る。——時には、表面の緑が二十通りも異つた色合を爲して輝いて居る、谷間を瞰下ろす。——時には、高さ五十呎もある竹が組み合ひ入りちがつて出來て居る、不思議な天然の拱廊（アーケード）を横切る。大きな塊になつて立ち伸びて、地面から空向けて禾束のやうに擴がつて、その關節のある美しい幹の曲線が、如何にも完全な角度を爲して路上高く、且つ路の兩側　、出會つて居るので、古い修道院の廻廊の、精緻なゴシック式アーチ細工を殆どその儘模倣したやうな觀がある。高い山の斜面を暗くして、通つて行く路の上へ、翠緑の眼の眩む程の懸崖を爲して、森が突出して居る。それは、寄生して居る緑の蔓草や葛に蔽はれた緑で——燃えるやうな、きらきら輝いて居る、緑で——ある。異常な形を——物神的なまた驚く許りな、形の夢といつたやうなものを——見せて居る。芭蕉の葉が、路に沿うて震るひをののきまた羽ばたきして居る。棕櫚が、白い金屬の圓柱の如くに、非常な高さへすつくと立つて居る。そして、黄ばんだ緑から橙色へ、赤味を帶びた緑から紫へ、エメラルド・グリンから黑ずんだ緑へと、木の葉の色の間斷無しの移り變はりがある。が、背景の色は、主たる色調は、緑色鸚鵡の羽毛に似た緑である。

……プランテン樹[譯者註一]や、芭蕉や、フラムボイアント[譯者註二]や、幅の廣い大きな葉のある見慣れぬ

灌木が左右に立ち並んで居る、前よりか狹い路に沿うて、目ざす苦力村へ馬車を乘り入れる。此處其處に椰子がある。兩側の小さな溝の向うに、天然の垣根の間隙を占めて、人の住み家が――相互の間が餘程かけ離れて居る、木造の小屋が――ある。道路へ出られる狹い小路にも、兩側に、半ば芭蕉に隱れて、住家がある。日の光が素敵て、暑さが酷烈である。その木々の又その家々の屋根の上に、何處見ても遠くの山の姿が、或は鮮かな綠に、或は濛とした青に、或は鼠色に、聳えて見える。道路も小路も殆ど人氣が無い。日陰も少い。ほんの時たま、ほつそりした鳶色の女の子か、裸の男の兒が、門口に姿を現はす。とある壁につつかかつて建つて居る、納屋のやうな小屋――竹の柱を繫ぎ合はせて支へられて居る上へ、棕櫚の草を葺いた單簡な屋根がある小屋――の前で馬車は停まる。

それは小さな苦力寺である。疲れて居る印度人勞働者が四五人、その陰で眠つて居る。裸體の可愛らしい、踝に銀の環を嵌めた、子供が其處で白い犬と遊んで居る。壁の表面には、白地の上へ赤や黃や鳶色や青や綠の模樣て、いろんな男神女神の異常な姿が描いてある。幾對もの腕を有つてゐて、不思議な物品を振りかざしてゐて――踊つて居るやう、仕方話して居るやう、嚇して居るやう、に思はれる。が、何れも頗る無邪氣なもので――子供が初めて貰つた繪具で初めて描いた物を想はしめる。自分がそれを眺めて居るうちに、

苦力が（彼等は輕く眠るので）つぎからつぎと眼を覺まして、自分が神の像を物珍らしげに見て居たと殆ど同じに物珍らしげに、そして多分自分よりも、もつと不親切な心を以て、自分を眺め始める。「ぼんさん（バガジー）は何處に居られる？」と自分は尋ねる。その問が誰れにも解らぬらしい。その黒い顏の眞面目さが誰れも元通りで少しも弛まぬ。自分はシヴの神へお供物がしたかつたのであつたが。

……その印度人の金細工屋の小屋の外では、棕櫚の影が、袋蜘蛛の形に似て、閃く白光にあつちこつちへ緩やかに這うて居る。內は、地と平らに埋めた厚い木片の中へ嵌めた、滑稽なほど小さな鐵床の横で、赤々と光つて居る小つぽけな炭火の爐があるが爲めに、暑さが非常に増して居る。名を知らぬ花や濃綠の涼しさうな芭蕉葉の香が、裏戶からはいつて來る。……一分（ぶん）ばかり全く無言で待つて居る。——すると、手足むき出しの金細工屋が、幻の如くに音無しに、裏戶からはいつて來て、——その小さな鐵床の横の小さな蓆の上へ、一と言も言はずに、坐つて、——そして、黑い鬚で半分蔽はれて居る顏を——きつい、いかめしい、そして表情の稍ゝ不愉快な、頭帕布（タルバン）を頭（あたま）にした印度人顏を——物問ひたげに、自分の方へ向ける。自分のクリーオール馭者は、この金細工屋のお客を指さして「ヴレ（譯者注三）

ベラス！』と說明する。すると初めて唇を開いて、人を呼ぶ語調で『ラ』と、ただ一と言發言して、それから腕を組む。

呼んだと思ふと殆ど直ぐ、若いヒンドゥー女が入つて來て、この店唯一の家具たる腰掛の端に近い、地べたに坐つて、自分がこれ迄に見たことの無い――子鹿の眼のやうな――黑い美しい眼を自分へ向ける。その女は、腕と踝とを露はに見せて、そして優美な襞で身に絡みついて居る苦力衣物で、服裝は極めて單純である。皮膚の色は淸らな鮮かな鳶色で、――出來たての唐金のやう。顏は美しい楕圓で、ほれぼれするほどの中高（なかだか）である。むき出しのその兩足とも、その細い二番目の指に、捩れた蛇の恰好した小さな銀の環を嵌めて居ることに自分は氣が附く。兩腕とも、重い銀の環を少くとも十は嵌めて居る。その踝にもまた大きな銀の環を嵌めて居る　一つの鼻の孔へ、小さな鉤て、金の花を着けて居り、耳には、三日月形の、大きな銀の圈が輝いて居る。金細工屋は印度言葉でその女に囁く。するとその女は立ち上がつて、極めて優雅な態度で腰掛の自分の横へ坐つて、環を一つ擇ぶやう、鳶色の美しい片方の腕を自分へ差し出す。

腕の方が環よりも遙か注目の價値がある。立派な彫像師の手に成つた金屬細工のやうな、色合と滑らかさと均勢美とがある。――上腕は、唐草模樣の靑味がかつた輪の黥（いれずみ）がしてあ

るが、それを除いては飾り無してある。腕環は總て前腕にあるのである。能く見るといづれも無細工な粗末なもので、皮膚が黒い爲めに、色の對照て、そんなに綺麗に見えたのであつた。自分は外側のを一つ、端が毒蛇の頭の恰好した圓い環を一つ、擇ぶ。――金細工屋はその兩端の間へ火箸を推し込んで、ゆるく且つ強く外の方へ推すと、その環は外づれる。不快ては無い、仄かな麝香めいた香が――それにこびり附いて居る熱帶人の肉の香が――する。自分はその儘それを受け取りたかつたが、細工屋はそれを自分の手からひつたくり、炭火の小さな爐て赤く熱し、元通りに殆ど完全な圓形に槌て打ち、それを和らげ、それを研く。

それから自分は、子供がはめるベラスを、卽ち腕環を、と頼むと、その若い母親はその赤ん坊娘を――やつと歩ける可愛らしい子を――伴れて來る。その子は異常な眼を有つて居る。――母の眼をずつと大きくした眼である。（父の眼は小さくてそして鋭い）自分はその子が小さな手頸に一對しか嵌めてゐないのを約定する。――細工屋がそれを外づして居る間、その子はじつと眼を据ゑて自分の顏を見入つて居る。その時自分は、その眼の特性は、眼球の大きさては無くて、虹彩の大きさだ、と觀察する。要するに、その眼は母の眼のやうに和やかては無い。美しいには美しいが、優しく無い眼である。それには大きな

鳥の——肉食鳥の——眼のやうな、黒い見事な焔がある。

……この子は、この小さな女の子は、ほつそりした、たをやかな、また頗る美しい女に、なることは疑ふべくも無い。少々危險な女になるかも知れぬ。固よりのこと、結婚するてあらう。今はや、印度の習慣に從つて、許嫁になつて——友人の息子の、やはり鳶色の男の兒に、約定されて——居るのかも知れぬ。その騷々しい婚禮までに、さう大した年數は經つまい。エメラルドを震るはせて開いて居る戶口を塞ぐ彼の濶葉の美しい姿同樣に此處の女の子は、此處の日の光の下に、迅速に伸び育つから。そしてこの女の子は、その眼の魔力を知つて來るてあらう、それを使用しようといふ——恐らくは、人間の生死を左右する力のある、彼の微笑を一つ試みてやらうといふ——誘惑を感ずることてあらう。

それからその老苦力の物語！或る日、黃ばんて來た甘蔗畠て、面紗をかぶつたり頭帕布を冠つたりして居る勞働者の群集の間て、言語一つ立ち聽きし、横目一つ邪魔をする。——短刀の刄がくるくると閃く。日が當たつて居る首無しの胴體のまはりへ女が大勢叫び喚いて集まる。ヘルメット帽を冠り武器を有つて居る男に、左右を警められて、偶像のやうなきらきらした眼を見据ゑて、裁判官のやうな莊重な態度て、眞直ぐに、頗る落ち着いて、

血に紅く染みて、町の方へとつとと歩いて行く、捕へられた印度人の姿が見える。……

譯者註一　プランテンは、バナナに酷似して居るが、葉に紫の斑點があり、實が長いので區別が出來る。バナナはその實の熟したのを生食するのであるが、プランテンの實は、未熟の折に料理して食ふ。學名 Musa paradisiaca.

譯者註二　フラムボイアントとは、鮮かな色の花を有つ種々な植物に（Caesalpinia pulcherrima, Poinciana regia, Erythrina Corallodendron のやうなのに）與へる名。

譯者註三　旦那さんが『腕環を欲しいて』仰しやる。

三

……我々の船は、全く無言て、グレナダのセント・ヂョーヂ港へ、極めて緩やかに入つて行く。此處ては大砲て入港合圖をすることを許されて居らぬ。……此の港は反響が激しいので、大砲の發射は危險だらう、といふ者がある。此町は、大砲の爆聲に搖れ崩れる程に、荒廢の狀態に在るから、といふ者もある。

……此處の暖かい空氣には、糞土のやうな、或は新たに捏ねかへした濡れた粘土のやうな、重い濕つぽい臭がある。

此處の港は、何處も眞綠な大きな火山性の山々に取り圍まれ、またその影を沾して居る、水の綺麗な、深い盆地である。船が入つて行つた口は、或る海角と、その海角の向うの山山とて、視界から斷たれて居る。――船は、二重火口の內輪の中に居るやうである。山のうち一番高いのの影は、港の水の半部處まで來て居るが、その影の水面を魚が絕え間無しにポシヤポシヤ跳び上がつてきらきら光る。

市街は、その大きな山の裾を急角度で登つて居るから、船の甲板に居ながら、殆ど鳥目觀的に見ることが出來る。老朽した町である。大抵は――重くるしい拱廊（アーチエイ）があり、耐震的墻壁があつて――古風な西班牙式建築である。波止場の先きの、船に面して居る、黄色な建物は半ば腐れて居るやうである。妙に綠色な橫線が附いてゐて、長い間水に沒してでも居たやうに見える。小舟で岸へ着いて、無精らしい顏した無言な黑人の一群の中へ上陸する。

……何たる古めかしい、ぐづぐづした、眠氣を誘ふやうな處であるか！その狹い街路は總て頹廢に陷りつつある。洪水が殘した粘泥の綠と、同じ色の汚染が到る處壁に附いて居

る。到る處、煉瓦で出來た物は接ぎ目が離れて居り、屋根は崩れさうになつて居り、黴の臭が強く鼻を打つ。でも、此の西班牙風の建築は、永く持ち耐へるやうに建てられたもので、その黄色い、青い、或は綠色の墻壁は、要塞工事同樣に堅固一方に構築されたものであつた。階段すら石で、欄干や柵は質の良い鍛鐵で造られたものである。北の方の國でなら、こんな建築物は五百年の消耗摩損に堪へることであらう。ところが此處では、崩壞の諸力は實に非常なもので、空氣そのものすら酸が有つ破壞力を具へて居るかと思はれる程である。物の表面と角とは總て、歲月と風雨と顯微鏡的有機物との攻擊に降服しつつある。ペンキは剝げ、漆喰は落ち、瓦はめくれ、石はずれ、隙間々々には小さな綠色の物が巢くつて、接ぎ目の中へはびこつて石造物に狂ひを出かす。其處には――人間が遺棄した市街の神祕であり陰鬱である所の――ぞつとするやうな黴臭さと、法外な苔深さとがある。大きながらんとした、看板の無い古い商店が、毎日幾時間も、規則正しく戶を開いて居る。だが、中に居る、年のいつた商人の營む商賣は疑問でありさうである。――その白髮の老人共は、一代も前に出帆した、そして多分歸つては來ない、船を毎日々々待つて居るのだ、とも想はれるのである。時折黑人の物貰ひがはいるだけて、お客が店へはいるのを見ることは無い。そしてそんな物總ての上に高く、どんな乘物も通らぬほど峻しい街路を見下ろ

して、廢頽の綠が此處其處に斑點に見えて居る崩れかかつた要塞の赤壁が、勾配を爲して遠く延びて居る。

市街の先きへ次第に高まり行く道を辿ると、諸君は墓地に達する。諸君がそれを入つて行く、入口のよろよろした鐵門は、その蝶番の處から殆ど銹びて居り、墓地を取り卷く低い壁は、殆ど何處も綠である。內側は、珍らしい雜草や蔓草や矢車にはびこつて居る妙な灌木が生ひ茂つてゐて、その綠の混亂に抽んでて棕櫚が四五本聳えて居る、荒地である。——ただ此處其處に、半ば擦り消えた銘がある、版石の碑が幾つかほの見えて居るだけである。諸君が讀み得るのは、年代が一八〇〇、一八〇二、一八一二の、水夫の碑銘である。その上を蜥蜴が走つて居る。雜草の起伏が蛇に用心せよと警める。歩む足先きを蛙が飛び去る。そして到る處に蟋蟀が——ルビイの小點二つを眼に有つた、草色のその蟲が——止つて居るのが認められる。その蟲は、大理石を切る機械のキーキー聲のやうな、銳い音を立てる。この墓地のずつと向うの端に、嘗ては教會の一部であつたらうと思はれる、巨大な廢址がある。近くへ寄つて見て、やつとその石造なのが見分けられる程に、今は匍匐する雜草に蔽はれてゐて、おまけにその內部に大きな木が生えて居る。

總じて熱帶の廢址には、特にそして恐ろしく感銘的な處がある。この繁榮な、いつも綠な、いつも華麗な自然は、人間の努力の結果を如何にも迅速に消してしまひ、記念の事物を如何にも深く埋めてしまひ、幾代の勞力を如何にも奇怪に扭ぢ歪めてしまふので、人間といふものは如何に蜉蝣的なものか——あらゆる安定に、あらゆる技巧的な平衡に、敵對する絕大な無意識な諸力に侵されぬやう、ほん一時でも、そのか弱い作物を保存するに必要な努力は、如何に强烈であり如何に倦むこと無きものであるか——他では何處でも感じないが、此處熱帶では誰れしも胸にひしと感ずるからである。

……薄暗い道路が、灣の窪みを見下ろす一つの絕壁のぐるりに、高く紆曲して居る。それを辿ると、非常に暗い樹陰の下を通つて、上から落ちた美しい、冴えた綠の果實が散らばつて居る、黑味のある地面を過ぎる。その果實は觸つてはならぬ、指尖ででも！それはマンチニールの實なので、古昔のカリブ土人は、その牛乳のやうな汁で、その鸚鵡羽の矢の鏃に毒を塗つたのである。その腐土の上で、その有毒な果實の間に群を爲して、無數の蟹が、流れ川の囁きに似た音を立てて居る。或る物は柄の尖に附いた巨大な突出眼と、象牙のやうな白い爪と、赤い甲と、を有つて居て、非常に大きい。また非常に小さくてその

運動が非常に敏活な他の物は覆盆子の色をして居る。それからまた或る物は、林檎綠で、それに黑と白との妙な斑點がある。空氣には腐敗の――植物の腐敗の――不快な臭がある。このマンチニール樹の陰から出て、道を上へ、上へ、上へと辿ると、通路へよろけ落ちさうな、火成岩から成つた、突出した絶壁の下へ出る。その岩は、道路に近い處は、むき出して黑い。上の方は、攀援莖植物や蔓草や見慣れぬ葛の、綠色の厚い織物に覆はれて居る。身のまはり何處にも、物の這ふ音、雫の垂れる鈍い反響、がする。ずつと上の方の濃密な茂みは、何かがその中をうねりくねつて動いてでも居るやうに、微風すら無い空氣に搖らめいて居る。そして、始終、濕つぽい腐朽の臭がして居る。遙か向うを見ると、道は木の葉の不思議な圓天井と、夜のやうに黑い陰との中を、黑い岩石を左右になだらに下つて、次第に荒れて居るやうてある。物淋しさが胸を壓する。銹びて居る門を潜り、よろけかかつて居る壁に沿うて、日の光に腐れ行く彼の古い西印度市街へ歸るのを、誰れも遺憾には思はぬ。

……でもグレナダは、その首府が崩壞し、その四周が見る眼に荒廢して居るにも拘らず、アンティリーズ諸島のうちで一番不繁榮な島では無い。もつと不幸な島が他にある。グレナダには不景氣時代は殆ど過ぎ去つてしまつたので、その第二位の耕作物――珈琲とココ

アーーの急速な發展に依つて、砂糖業の衰頽によつて蒙つた大損失の幾分を、回復しようといふ尤もな希望を抱いて居るのである。

それでも、崩れ行く街路の此の無言には、遺棄された住宅の此の陰氣さには、植物の此の侵略には、西印度のどんな港でも、その島の財源が盡き、その貿易が廢れた場合、どうなるものかを思はしめるものがある。産業と企業との他の方面を求める程の資財があり活動力がある人が悉く立ち去り、栽培地は放棄され、商賣は永久にその門を鎖ざし、人聲のせぬ埠頭は綠の水に腐れるに委された後は、自然は、過去の外面的な、眼に映ずる、形跡悉くを抹消するほどに、直ぐとその場處を蔽ひ包むことであらう。最後の商船が島を後にした時から一代も經てば、旅人は、曾ては人口稠密で繁盛であつた市場を、探して探し當てられぬことにならう。植物が其處を呑み盡くして居るであらうから。

……黑人が使ふ英語とクリーオールとの混合した言葉に、誰れも或る言語的轉移の證跡を識別することが出來る。本來の佛蘭西語起原の土語は迅速に忘れられつつあるか、認め得られぬ程變形しつつあるか、して居る。

ところで、殆どの島でも、其處の黑人（ニーグロ）の語風がそれぞれ異つて居る。その上に、アンティリーズ諸島のうちには屢々その所有者を變じたものが隨分あるので、そんな島では、

黑人は眞の土語を造り得ないで今に迨んで居る。その最初の主人の國語をやつと少し了解したかと思ふと、他の支配者と國語とを押し附けられたので——それが三度も四度も！あつたかも知れぬ。その結果は色んな言語形式の全く聯絡の無い聚結で——耳にしたことの無い人には、到底想像も及ばぬ程の、妙變なそして不可解な滅茶苦茶言葉(バラグアン)である。……

三二

……美しい奇妙な形をしたものが一つ、朝の光を通して浮いて居る。初は地平線同樣、濛とした金色であつたが、それから眞珠やうの灰色になり、それから青に變つて、段々綠の光を增して來る。——セント　ルシアなのである。此の火山家族全體のうちで、一番不思議な形を爲して居るもので——到る處、山が壞れた水晶のやうに、鋭く突立つて居る。遙か遠くに、パイトンの峰が——高い此の海岸の双兒の峰が——その尖(さき)を空へ向けた、黑い二つの乳房の如くに、他の峰よりか和らかい外形を見せて居る。……

……船がカストリースの港へ入ると、陸地が描いて居る線は、その濃厚な翠綠にも拘らず、遙か離れて眺めた時に劣らず、絶妙な奇異な形に見える。——その線にはどれも一種

特別な勾配の角度がある。……此の群島の他の島々は、多少家族的類似を示して居る。——遠くから眺めると、數回印度旅行を試みた後でも、甲の島の半面影像を、乙の島の半面影像だと容易に見誤ることもあらう。ところがセント　ルシアは、その奇異な恰好で、直ぐに諸君に深い印象を與へる。

カストリースは、その彎曲した港——多分太古の噴火口であつたらう——の端に、棕櫚の葉陰に眠さうに横たはつてゐて、町といふよりも、寧ろ村といつた觀がある。低い田舍風な家々と、小さな熱帶庭園とがあるだけである。人民は、眉目美しい混血種である。その昔の佛蘭西植民時代の風俗が、此處では、セント　キッツやその他の處で見るよりも、英國の影響を蒙つて居ることが少い。——服裝は變つて居るけれども、今なほクリーオールを話して居る。……此の島よりも美しい位置は——いくら此の熱帶世界でも——殆ど想像が出來まい。この小さな町のまはりに、簇々とそゝり立つて居る綠の山々の間に、その先きに棕櫚の木立を見せて居る間隙がある。が、峰の頂は雲を捉へて居る。背後はと見ると、鋼鐵の青味を有つた洲が幾つも、港口に横に亙つて居るやうに思はれる。それは海流の線なのである。遠く、兩側に、火山性の山々が波と起伏して、模糊として見えぬ遠くまで延びて居る。そしてその山々の近い方の窪みには、色の美しい深味がある。透明な青い

色調か紫色がかつた色調かの溜つて居る陰影なのである。……自分は此の異常な陰の色を初めてマルティニークで氣附いた。あそこでは、あの島にはあの島特有の特別な大氣があるのだ、と人に思はせようとする程までに、それが濃い。……或る友人は、この現象は多分空中に浮游して居る有機物の——空中に擴がつて居るその物質の各々が、みな別々な光線屈折率を有つて居る有機物の——然らしむる所だ、と自分に告げる。水蒸氣の爲めに斯く空中に吊られて居る物質は、異つた島々のその土壤の性質如何に依つて異るであらうし、從つてまた大氣の色合の、特殊の地方色を造り出すのかも知れぬ。

……船はカストリースには唯だ半時間滯在する。それから別な港で貨物を取り入れる爲め、海岸に沿うて走る。進むにつれて、新しい珍らしい姿の山々が眼界へ出て來はするが、色が與へる感銘はいつも同じ氣持ちの好いものである。海へ下つて居る近くの傾斜地は、きらきら光る綠で、それに濃綠の斑理(すぢ)や斑點がある。——遠く聳えて居る山々は薄青で、日の光を受けて綠に突出した部分がある。——そしてその先きには、地平線の銀の光にきつかりと浮き出て、光つた灰色の——眞珠性の灰色の——隆起が幾つか見える。……此の風景全體が與へる一般的印象は、運動が突然に石化したのだといふ感じ——地震の折の前後波動上下運動が、突然阻止されて固定したのだといふ感じ——である。圓錐形のもの、

頂の尖つた嶺、一端を截り斷つたやうな奇怪な恰好の山、があばれて居るのである。……船はバイトンの峰に近づく。

遙か遠くから見ると、初には、——青空を背に赤裸々な黒い——乳房狀の嶺二つに見えた。が、今は少しく輝きそめ、また色を見せ出し——その上に形を變へはじめる。兩方とも、間々に鼠色と綠との光があつて、薄紫色を帶びる。そして、もつと近寄ると、形も色合も双方異つて居ることが判かつて來る。……やがて兩者は、船の進路を横切つて金字塔狀の長い影を二つ投じて、船の前方に別々になる。それから、船が進むに從つて左右に遠のいて、その間に海の入江が——燃えるやうな綠の、窪んだ絕壁に取り圍まれた、カーヴを描いた非常に美しい入江が——自づと見えて來る。その破れ目の左と右とにバイトンは巨大な塔門の如くに聳える。そして氣持ち宜ささうな小さな村が、美しい砂糖栽培地が、其處にその二つの間に、入江の極の端に、巢籠もつて居る。

このバイトンは、より濃い綠葉のオアシスが點綴して居る翠綠の輝かしい海からして、陸の方から黑ずんだ木を茂らせて聳え立つて居る。二つのうち近い方のに、餘程上の方に、木の茂つた山腹の裡に、家が幾軒か載つて居るのが見える。そして其處の色に、鮮かな跡切れ目が幾つかある——それは、綠色の絹天鵞絨の補布を當てたやうに見える、小さな牧

場なのである。

……船はパイトンの双兒山を過ぎ、別な噴火口樣の小さな港へ入つて、ショアシュール村の前で投錨する。村は濱邊へ突き上がつて居る岩層の上にあつて、後ろには高い山がある。我々は、岸打つ大波を犯して上陸して、その端艇は黃ばんだ軟らかい砂濱の、水際からずつと上手へ引き上げて置く。海草の氣持ちの好い鹽辛い臭がする。

村は人を失望させる。黑くなつた木造の住家が兩側に並んで居る、十文字の短い街路に過ぎぬ。消燈器のやうな形の尖端が聳立してゐる、屋根の勾配の急な、風變りな古い佛蘭西教會のほかには、見るに値する建物は一つも無い。區域の幅廣い熔岩の上を、淺い川が一つ、蒼滿林廈の陰の下を淙々と、村から海へ流れて居る。それは市場の横を通つて居る。市場といつても、小屋も、露店も、腰掛も、鋪石も無い市場で、肉や果物や野菜が、ただ其處の木へ吊るして置いてあるのである。その流で、女が洗濯をして居り、子供が水浴びをして居る。いづれも唐金色の皮膚をしてゐて、赤味が微かに加つて居る美しい黑い色である。……ほかには殆ど見る物は無い。木の茂つた峻しい山が、內地の展望を遮つて居るのである。

ところが海の綠の上には、美しい黄色な雲のやうに浮き出して、何だか妙な物が段々と見えて來る。「七つの町の島」(譯者註)の幻かと思ふほどに、光つた、幻影のやうな、高い、一個の島である。それはただ、太陽の爲め濛乎たる金色に浸つて居る、セント ギンセントの姿である。

……ラ スーフリエールでの晩。これもまた、綠の山に圍まれた窪みの中に在る半圓形の灣である。峽谷は青味がかつた影を有つて居る。山々の色は非常に和やかである。が、水路たること、また頗る嶮岨な表面たることを示して、長い斑點(しみ)と補布(つぎ)を當てたやうな濃綠な處とがある。西側から非常に大きな影が、谷を横切つて、そして棕櫚の多いその町の屋根の半分以上を横切つて、跡絶え跡絶え射して居る。左手に、灣へ流れ注ぐ小さな川がある。そしてその西に、壁で仕切つた墓地が見え、その內側から記念碑のやうな棕櫚が一本、素敵な高さに聳えて居る。その頂は、侵し來る陰を抽んでて、まだ日光を浴びて居る。夜が近づく。山々の陰影がその山水總てに漲り、彼(か)の棕櫚の頂へすら昇る。すると、日沒の金色の光耀の中に黑く聳えて、土地はその色すべてを失ひ、その妙趣悉くを失ふ。樹樹の姿も、色合の變化も、見えなくなる。セント ルシアはただ巨大な一個の影繪になる。

その巨濤の如き山々、その噴火口的入江入江、その圓形劇場やうの谷々、すべて黑檀のやうに黑くなる。

すると眼の前に、地質學的な夢が、原始の海の幻が、見える。群島が突と出來上がつた折の、何處も山が突立つてゐて裂け目があつて赤裸々て物凄い、初めて海から跳り上がつた儘の土地の姿である。

譯者註　『七つの町の島』とは、十四五世紀の頃、歐洲の西、大西洋にある、と想像されてゐた島で、當時の地理學者はアンティラともアンティリアとも呼んでゐたものである。

三三

歸航。

再び瑠璃色とエメラルド色との絕大な詩篇が眼前に展開する、が順序が逆さてある。再び島の『聖者連禱』が繰り返される、が今度は後ろ向きにてある。親しみのある輝かしい港々がまたも自分等を迎へに口を開く、――愛らしの姿が、一々どれも、またも自分等へ

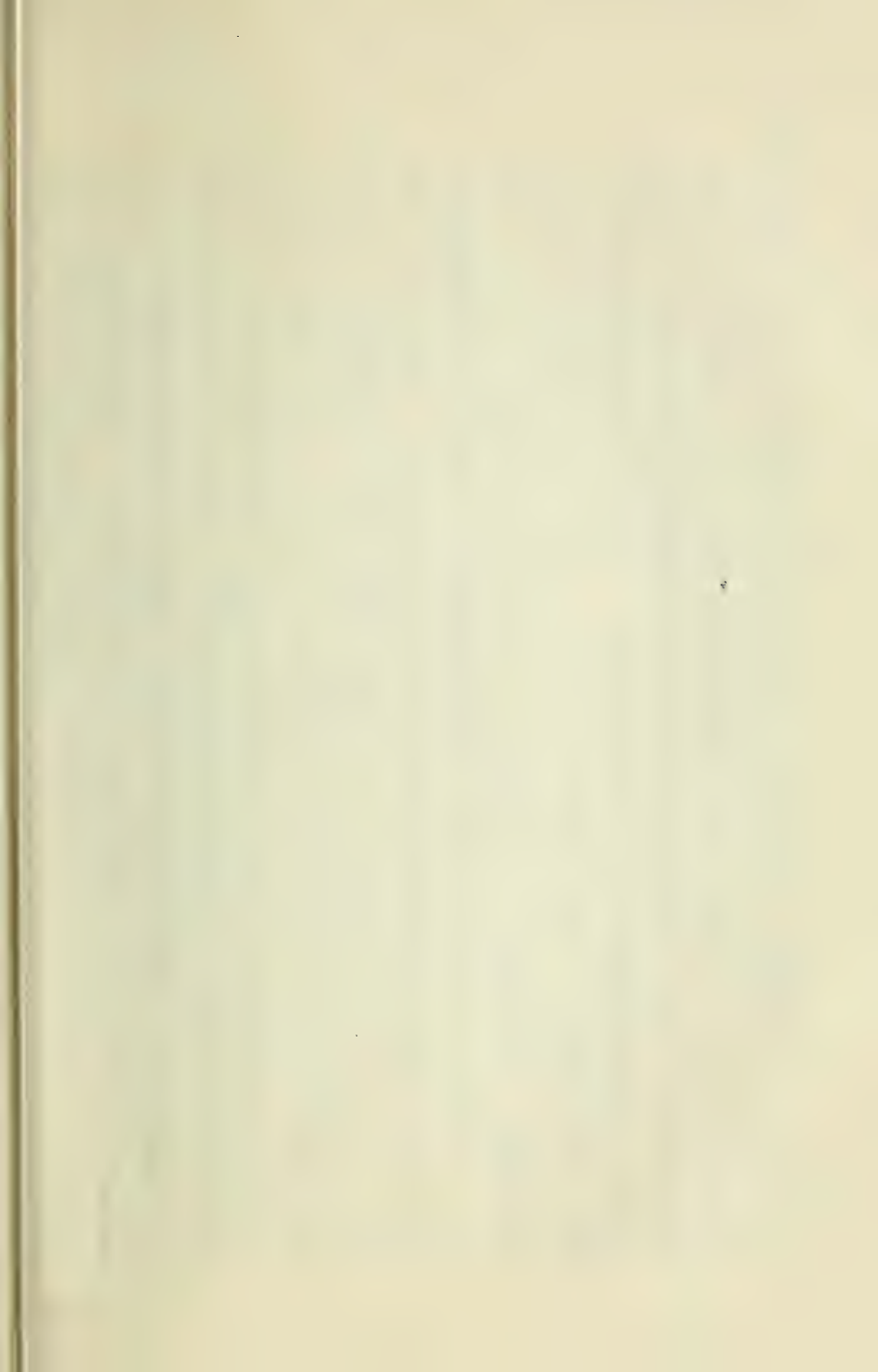
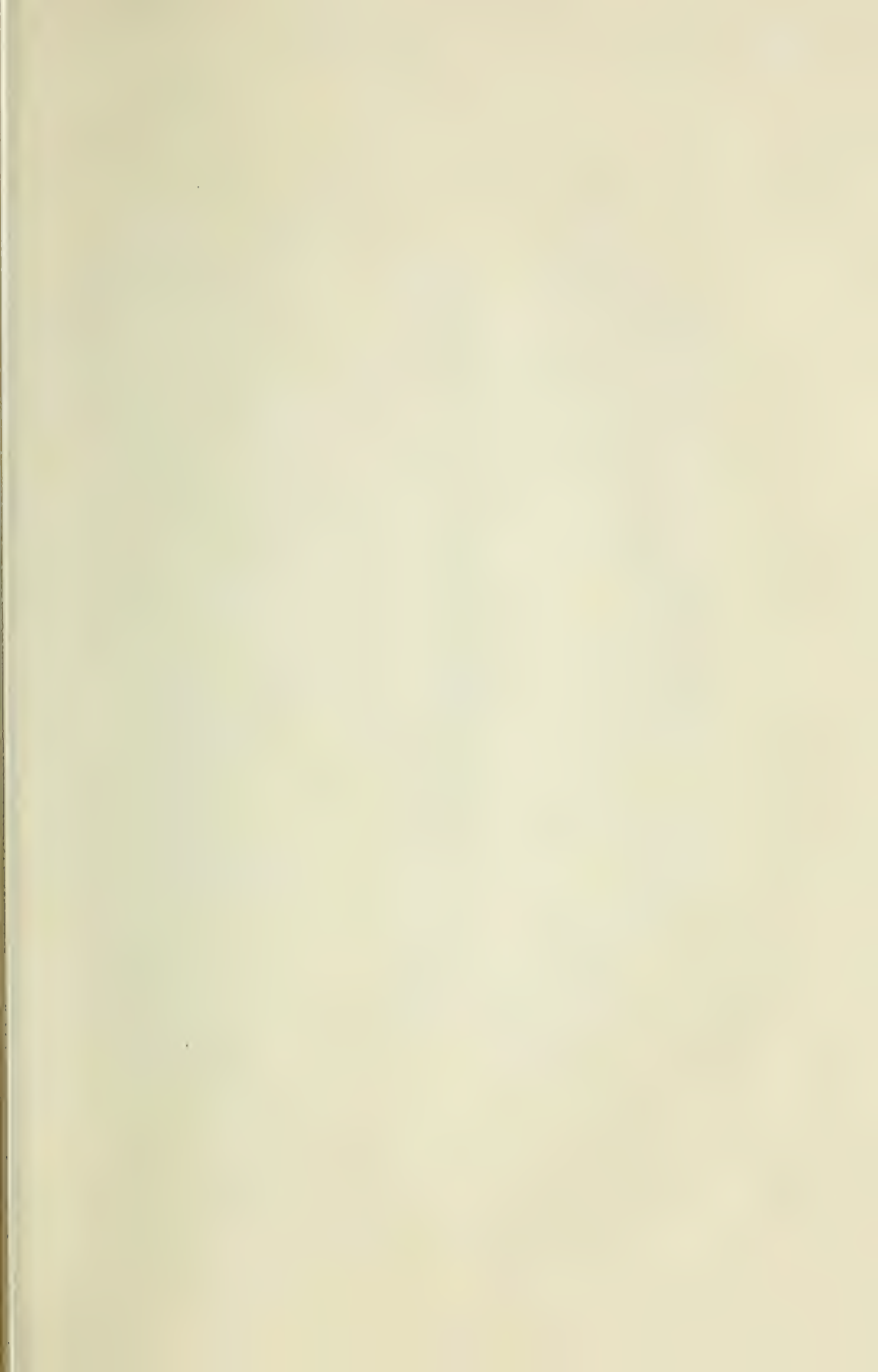
浮いて出て來る。初めは金色を帶びた黄て、それから濛とした灰色になり、それから靈の如き青になるのであるが、いつも最後にはくつきりと光を放つて、どれもこれも均勢に絕好て、恰も紫水晶やエメラルドやサファイアを鐫り刻んだやうてある。火山性の山々の前同樣な驚くべき皺を見、死滅した噴火口に坐つて居る市街を見、天まで聳えて居る林を見、一々の島の生命の呼吸かと思はれる――その生活の表現かと思はれる――あの明かるい雲を絕えず纏うて居る峰を再び我々は眺め見る。……

……ただ今度は、前に受け入れたつぎからつぎの長い異國的な物珍らしい印象が、集合し混淆して、同質同種の成果を產み――一般的觀念或は信念を造り――はじめる。そのうちで一番强烈な信念は、あれほど莫大な血と財寶とを費やして獲得し且つ保持した此の島から、白人が漸次消滅しつつある、といふ信念である。經濟の上から、氣候の上から、人種の上から、政治の上からの――そしてその總てに眞理が含まれて居るが、そのうちの唯だの一個では此の事實を十全に說明の出來ない――殆ど枚擧に遑の無い理由が提出されて居る。早既に西印度の白人は、殆ど信用が置けかねる程の割合て、減少しつつある。樂園島たるマルティニークには、千八百四十八年には、一萬二千の白人が居た。今は、黑人幷びに混血人の十六萬以上に對して、人種的抗爭を持續すべく殘されて居る白人は五千ぐ

らゐのもので、しかも其數は年々少くなりつつある。英領の島々のうちには、其元の開拓者が殆ど見棄ててしまつて居るのが多い。セント　ギンセントは無人になりかかつて居る。トバゴは廢墟である。セント　マルティンは半ば放棄されて居る。セント　クリストフアーは崩れかかつて居る。グレナダはその白人を半ば以上失つて居る。嘗ては西印度諸港中、最も繁榮な最も活氣のある最も世界的であつたセント　トマスは、全く衰微して居る。そして白人要素が消滅しつつあると同時に、黑人諸種族はこれ迄に無いほど增加しつつある。――黑人(ニーグロ)と半混血人との增加は、到る處、黑人解放の驚く可き結果の一つとなつて現はれ來たつて居る。小アンティリーズ諸島のクリーオール白人間に行はれて居る一般信念は、過去の奴隷種族が末來の主君になるに相違無い、といふ昔の豫言を確めるやうに思はれる。此處や其處で。その鬪爭は時期が大いに延びることはあらうが、現在の貿易と製產との狀態が異常な變動を見ぬかぎり、到る處その究極の結果は同一なものに相違無い。アンティリーズ諸島の絕滅した印度人には、その四周の自然の――北の國の民族の精力を消耗し、その勇敢が或はその罪惡が成し遂げた一切の物を破壞し、その市街を抹殺しその文明を排斥する、彼(あ)の熱帶の花々しいそして恐ろしい自然の――諸力と頡頏するに同じく適して居る人民が、早、取つて代つて居る。人種上の無上權に對する――既に始つて居る――競爭

ての勝利の機會は、生理的に此の自然と調和して居る人種に、全然屬するのである。

然し、白人が消滅しても、人種問題は依然未解決の儘で居るであらう。黑人と混血人との間には、過去に於て白人と被解放人との間にあつた人種的僻見よりも、もつと持久的なもつと激烈な憎惡が存在して居る。——無上權を得ようとしての新規な鬪爭が、人數の絶え間無しの增加と共に、次第に增加するばかりの生存競爭と共に、必らず始まらずには居るまい。そして、數の上に於てより有力な、より多産な、より奸智に富んだ、發熱的氣候と熱帶的環境とにより適合して居る眞の黑人要素が、確に勝ちを制することであらう。あの混合人種共は總て、あの果物色の美しい人民共は總て、絶滅の運命を有つて居るやうに思はれる。未來の傾向は、現在の狀態が永續するなら、普く黑人になるといふこと——恐らくは普く野蠻になるといふこと——に相違無い。到る處、過去の罪惡が同じ結果を產んで居る。立法者の智慧を馬鹿にして居る社會的謎を——近代のどんな政治學も之を處分するに堪へる事をまだ示してゐない、(譯者註)鬪爭の根源になる諸問題を——植民地へ供給して居るのである。未來の社會學者が、自然が——罪を決して許さぬ自然が——三百年間のあらゆる罪惡と愚行とに對して、課し得る限りの極上の復讐を强請したらん後、之に答へることが出來ようとは、希望すら出來るであらうか。

譯者註　原英文 dragon-crop（龍の收穫）といふ語は希臘の傳說に基づいたもの。古昔 Ares の井戶を守つて居た龍が居た。それを Cadmus が殺して、その齒を土中に埋めたところ、その齒からして武人が生まれ出て、互に殺し合つたと云ふ。即ち、殺されたものが更にまた新しく鬪爭を生み出した譯なり。

マルティニーク・スケッチ

荷運び女

一

諸君が初めて、影の無い日に、あの愉快なサン　ピエールの西印度町に身を置けば——諸君は詩の感念を有つて居り、學者が感ずる回想を有つて居ると假定すると——非常に遠い古昔に、何處とは言へぬが、前にその總てを見たことがあるといふ印象が、ともすれば諸君の空想へ忍び込んで來る。全部は想ひ出せないが嬉しく思つた或る夢の感じ、それへこの感情を喩へる事が出來よう。その古風な建築が素朴で堅固であるといふ點に於て——溫かい色彩に燃えて居る輝かしい狹い街路が度外づれに奇異であるといふ點に於て——色んな綠色と色んな灰色との黴の斑理と斑點とて時代がついて居る屋根と壁との色合に於て——窓枠、硝子、瓦斯ランプ、煙突が驚くほど此處には缺けて居るといふ點に於て——青空が花のやは味を有つて居り、熱帶の日光が素晴らしく明かるく、また熱帶の風が暖かい

といふ點に於て、――諸君は其處が今日の一光景であるといふ印象よりも、嘗ては在つたが、今は世に無い物といふ感じを受ける。この感じは――衣裳の燦爛たる色に――過ぎ行く人の姿の半裸體なのに――金屬の像のやうに赤味がかつた黑いトルソ〔頭及び手足のない像〕の力強い釣り合ひの好さに――熱帶の果物のやうに黃色な手足の圓々とした輪郭に――姿勢の優美なのに――取り合はせのおのづからな調和に――束縛の無い臂を振るにつれてゆらめく輕い衣物が重なつたり褶まつたり垂れたりするのに――靴を穿いて居ない足の影像のやうに均勢なのに――愉快を覺えるに從つて徐々と強まつて行く。諸君はレモン色の街路を上手下手と眺め見――相會ふ空と海との眼が眩む程瑠璃色に輝いて居るのを見下ろし、山々の林の永遠の青綠を見上げ――調子（トーン）の軟らかなのを、日を受けて居る物の線の際立つて居るのを、色のついて居る影の透明なのを、不思議に思ふ。そして『いつであつたらうか？……何處でこれを――ずつとの昔――見たのか知ら』と、いつも記憶に問ひ尋ねる。

すると、恐らく、諸君の凝視は――此の町の上に高く聳えて居る、此の町の何處からも見える、そして、その青空指してのその太古の煙の靈の如くに、淡い極みの雲の渦卷が或は影を與へて居る――あの死んだ火山の靑い、そして陰が菫色の、偉大な姿の壯大森嚴な美に突然に鋲附けにされる。そして忽然として諸君の夢の神祕が、輝かしい幾多の記憶が

――田園詩人の夢想が、シシリアの歌の花が、ポムペイの壁に描かれた空想が――浮かび出て來るとともに、自づと顯はれて來る。一瞬時そのイリッジョンは實に氣持ちが好い。今は世に無い一世界の妙趣を――古代の生活を、發掘されたテラコッタや彫刻のある石や優雅な品物の物語を――これまでに無いほど理解する。太陽すら今日のものでは無くて二十世紀むかしのものである。――斯んな風にして、こんな日光を浴びて、古昔の世界の女は歩いてゐたのだ、と想ふ。其空想は馬鹿げて居る事は諸君に分かつて居る。――其天體の力が人間のあらゆる時代を經ても眼に見えて滅じたところ少しも無い事は――その絶大な光耀の年代の數は幾百萬であることは――分かつて居る。が、妄想の一瞬間には、それがより大きなものに思はれ――夢の金色の光を以てして、過去の言葉を彩り、過去の藝術家愛好者の作品を彩つて居る、あの有り得べくも無い太陽にさへ思はれるのである。

　その幻想は耳にきこえる近代の音聲によつて、眼にうつる近代の光景によつて――その船へと降りて行く水夫共の亂暴な歌聲に――郵便汽船の號砲の轟音に――亞米利加馬車が通つて行く音に――餘りに早く破られ、消されてしまふ。直ぐと諸君は、前を通つて行く人群が使つて居る調子の好い言葉は、希臘語でもなければ羅典語でも無く、佛蘭西奴隷の子供らしい美しい言葉なのだ、といふことに氣が附く。

二

が、今の此の自由な世代の人々の祖先はどんな奴隷であつたか。我が人類學者、我が人種學者はこの解釋に苦しんで居るやうである。亞弗利加人の特性が變形してしまつて居るからである。亞弗利加人の特徴が、僅二百年以上も經たぬ年月の間に――血の混淆の爲め、習慣の爲め、土壤太陽及び人種の型を形成するあらゆる自然力の爲めに――變更されてしまつて、人種學的斷定の證明物を求めようとしても徒勞なぐらゐになつて居るからである。……見給へ、その踵は突出しては居ないのである。――足は美しい弓形になつてゐて、平たくは無いのである。――四肢は大きくは無いのである。――手足は皆尖が次第に小さくなつて居り、筋肉は皆發達して居り、そして突顎は幾箇月の穿鑿も、その著しい例をたつた一つも與へないぐらゐに稀になつて居るのである。……見給へ、この人種は、其處の山の恰好が獨得なるが如くに、この島に獨得な、特別な人種である、――山國人種である。ところが山國人種といふものは眉目美しいものである。……亞弗利加の海岸人種の型のあの猿的な下品さが昔に變はらず永存して居る黒人部バルバドスの人民とこの人民とを比較

して見たまへ。――その對照は大いに諸君を驚かすであらう！……

三

重荷を運ぶ女の眞直ぐな態度と、しつかりした迅速な歩き方とは、特に藝術的觀察者に印象を與へさうである。その最初の感じに、他に勝して、古風な調子と色とを與へるのは、そんな通行者を眼にするからである。――ところでこの混血人種の女の方の大部分は練習の積んだ荷運び人なのである。內地へ或は內地から、肉類果實野菜並びに食料の輸送もであるが、輕い商品の輸送は殆ど總て、人間の頭の上で行ふ。或る港では定期の地方郵便船の荷積み荷揚げは――どんなトランク若しくは箱でもその目的地へ運ぶことの出來る――女や娘がする。フォール・ドッ・フランスでは、大西洋汽船會社（コンパニイ・ゼネラル・トランスアトランティーク）所屬の大蒸氣船の石炭積み込みは女がする。それは幾百人と列を爲して、行つたり來たりする間歌を歌つて、頭の上で石炭を運ぶのである。しかもその作業を信じられぬほど迅速に行ふ。ところで、このクリーオール（黑人出の西印度人）のポルテゥーズ即ち荷運び女は確に世界中で最も顯著な體格を有つた型の一つである。そのしとやかな樣子、そのしなやかな歩き方、或はその半野蠻な美

しさが、諸君にどんな藝術的感奮を起こさうとも、諸君が若し全くの外來人であるなら、その女がどんなに實際不思議な人間か、到底如何なる觀念も抱くことは出來ぬ。……職業的荷運び女のうちで、シャルボニエール卽ち石炭積み女に比すれば恰も純血種の競馬用馬の牽用馬に於けるが如き最も高級な型の者に就いて——內地の村々へ貨物を配達したり、或は非常に遠い處で委託販賣をしたりに、迅速と耐久との點で選擇された荷運び女の型に就いて——自分は少しく諸君に話さう。新開栽培地の產物や果實や野菜——より近い港とその女達が住んで居る內地の村との間の——荷運び女として働くことの出來る田舍の仲仕も當然この部類に屬する。……大なる肉體的耐久と肉體的勢力(エネルギイ)とは熱帶には存し得ないと信じて居る人達は、クリーオールの荷運び女を知つて居ないのである。

四

年齡(とし)のまだ非常に若い時に——多分五歲ぐらゐの頃に——女の子は頭の上に小さな品物を——米の入つて居る椀とか——水が一パイ入つて居るドバンヌ卽ち赤色の土製の罎とか——或は蜜柑が一つ載つて居る皿と言つたものすら——置いて步く稽古をする。間も無く、

それを落ち着かすのに手を使ふことをしないで、それを完全に釣り合ひ取ることが出來るやうになる。（自分は、頭の上に水の入つた鑵を載せて本當に走つて居て、一滴も滾さぬ子供を見たことがある）九歳十歳になると、かなり重い籠を、或は二十斤乃至三十斤の重さのものが入つて居る盆（外側に斜な深い縁のついて居る木盆）を、斯ういふ風に運ぶことが出來る。そして長途の行商の旅に母か姉か從弟かに隨いて——跣足で一日に十二哩も十五哩も歩くことが出來る。十六七歳になればもう——しなやかな、元氣な、丈夫な——身體中腱と硬い肉との——丈の高い逞しい娘である。——大いさの一番大きな盆もしくは籠を、それも重さ百二十斤乃至百五十斤の荷物を運ぶ。——はや、一かどの行商人として、一日に五十哩歩いて、一箇月三十フラン（六弗許り）ばかり儲けることが出來る。

その階級のうちに、諸君をしてアタランタを夢想せしむる姿がある。——どの女もみな、目鼻立は醜いか、或は人目を惹くかどちらにしても、身體と四肢とは見事に出來て居る。環境の異常な必要に依つて存在して居るのだから、その型は特に地方的な型で——優雅の眞の祕訣を卽ち力の節約を見せて居る、人間の純種（ソローブレッド）の一つの型なので——ある。長の內地の道筋の間、肥滿した荷運び女は一人も居らぬ。總て競馬馬のやうに輕くまた堅く出來て居る。老人の荷運び女は一人も居らぬ。——四十になつてもまだ仕事をするといふことは、

驚くばかり嚴乘な體質を意味して居る。青春と健康との全力を費やした後では、その氣の毒な荷運び人はより輕い勞働を求めなければならぬ。――最早、若い女の子と競爭が出來ぬのである。それといふのは、この職業では、年若い身體が、力と耐久と迅速な運動とのその極度の能力まで無理に消費されるからである。

一般に云つて、その運ぶ重さは、一パイに荷積みして居る荷運び女であれば、手傳つて貰はなければ『積みも』『下ろしも』(クリーオール言葉で『シャゼ』も『デシャゼ』も)出來ぬほどのものである。手傳つて貰はずにしようと力めたなら、血管を破裂させ、神經を損ぢ、筋肉を斷ち切るであらう。荷物を載せたまゝで坐らうとしてさへ、頸の骨を折る危險を冒さずには出來ぬ。釣り合ひの絕對な完全が自己保存に必要なのである。ただ他人の荷下ろしを手傳はうとしただけのことに不注意にも急いだが爲めに、その腕の筋肉が斷ち切れた女を自分は現に見たことがある。

ところが畜生で無いもので、女がその重荷を上げるか、下ろすかするに手傳ふ事を拒むものは一人もありはせぬ。――諸君はどんな富有な商人でも、どんな氣位の高い栽培地の主人でも、喜んでそれをするのを見るであらう。――拒むことの、或は、一寸した親切を行ふのに何か條件を附けることの、卑劣さは、クリーオールの口傳への未蒐集の文學がそ

れに富んで居るあの奇異な[註]悪魔の物語のうちに想像されて居るだけてある。

註　人が言ふのを書き取つた『マリーの物語』から抜萃を左に。

……そのかあちやんは家（うち）に大きな瓶を有つて居ました。その瓶はマリーには重過ぎました。水汲みにいつも行くのはこのかあちやんでありました。或る日のこと、その瓶を水汲みに持つて行きました。このかあちやんは、その泉へ行つて見ますと、頭へ乘せてくれる人が一人も居ませんでした。立つて居て大聲で呼びました、『誰れか心の善い耶蘇信者の方、來て載せて下さいよ』と。

……かあちやんは其處に立つて居ましたが、頭へ載せるのを手傳つて呉れる心の善い耶蘇信者は唯だの一人も居ませんでした。立つて居て斯う大聲で言ひました、『それでは、心の善い耶蘇信者の方が一人もおいでにならぬなら、心の惡るい耶蘇信者が居られませう。誰れか心の惡るい耶蘇信者の方、來て載せて下さい！』

さういふ間も無く、惡魔が來るのが見えました。その惡魔は斯うその女に言ひました。『載せてやつたら何を呉れる？』このかあちやんは答へて曰ひました、『私には何もありません！』惡魔はかう返事しました、『頭へ載せて欲しいならマリーを私に呉れなければ』と。

五

その旅行の用意に、年若いマシャンヌ（マルシャンド）〔女行商人〕は、その所有品のうちで一番下等な一番短い襦袢(シュミーズ)を着け、その輕いキャラコの衣物のうちで一番擦り切れたのを羽織る。身に着けるものはそれだけである。その衣物は上の方へまた前の方へ引きあげて、膝の少し下の處まで屆くやうにして、腰帶で、卽ち腰のまはりにしかと卷いた長い手巾で括る。マドラス卽ち色染めの頭帕布(タルバン)はかぶらずに、無地の手拭(ムーシヨワール)を小綺麗にきちんとその頭に卷きつける。そして髮が長いと、後ろへ梳いて、集めて後ろの處で一束にする。それから、地のもつと粗い今一枚の手拭で、絲切れを輪に捲くやうに、四本指のまはりへその手拭を捲き附けて當(あて)を、土地の人の言ふ言葉で曰へばトセを、造る。——その軟らかな塊を、手で敲いて、平たくして、頭の上へ、髷の上へ置く。この上へ荷物の入つて居る大きな盆を載せるのである。

　靴は穿かぬ。靴を穿いてゐて、こんな山國で迅くまた上手に仕事をすることは不可能なことであらう。每日幾千呎を昇り幾千呎を降り——その地方の馬が似よつた旅を四五年す

ればみんな倒れるほど急な坂を上がつたり下りたりしなければならぬのである。同じ重さのものを運びながら、女の子の方が馬よりも永生きする。靴は、非常に上手に造つて無ければ、歩行中、登りから降(くだ)りへ、或は降りから登りへと變はる度毎に、少し處がはりがするであらう——力の入れどころが絶えず變はるからそれにつけて緩みが出來るであらう——指を締め——魚の眼が出來、母趾内の炎腫が出來、擦れて皮のむけた處が出來るであらうし、やがてその荷運び女を不具にしてしまふであらう。忘れてはならぬ、夜明けから日暮れまで、蝙蝠傘の保護無しに唯だの一時間でもそれに當たればどんな歐洲人、どんな米國人にも危險なほどの日光——あの恐ろしい熱帶の日光！——を浴びて、多分五十哩は歩かなければならぬのである。荷運び女のやうな職業の人に適するもので、思ひ附けるただ一つの穿き物は草鞋(サンダル)である。だが彼等は草鞋を要しはせぬ。足の裏が堅くなつてゐて痛みを感じないからで、且つまた尖つた小石に對して、硬い護謨(クーチヨーク)のクションのやうに、同時に凹(へこ)みもし抵抗もする面(めん)を觸れるからである。

荷物のほかには、腰帶の右側の處に結ひつけた帆木綿切れの財布と、左側にラム酒か白いタフイアか（普通は後者。餘程廉いから）入つて居る非常に小さな罎一つ、それだけ身に著ける。……それは、飲めるグーャーヴ水——水力機械の見事なまた驚嘆すべき工夫に

頼つて、非常に高い山からサン　ピエールの泉へ運ばれて居る冷たい綺麗な純粋な流れ水――をいつも見出すことが出來ぬかも知れぬからである。卽ち、遠く距つた大道の藪の泉のただの水を時折飮まなければならぬてあらう。これは、若し酒精を一匙加へないて飮めば赤痢を起こすことてあらう。だからして火酒を少々有たずには決して旅をせぬ。

六

……さあそこで！――彼女は出かける用意が出來て居る。『シャジエ　モアン、スウプレ、シエ！』その重い盆の端を持ち上げに屈む。誰れかが片方の端を持つてやる。ヨン！――デ！――トゥア！てその頭の上に乘る。恐らくは一瞬間ひるむ。――その重荷が完全に釣り合ひが取れて居らぬのてある。兩手てそれをなほして――丁度宜い處へ落ち着かせる。それから、もうしつかりとして――しなやかに、輕く、半裸體て――長い彈力性のある足取りて出かけて行く。その荷物が決して搖れぬほど、その歩き樣が如何にも一樣てある。だがその運動は如何にも迅いから、諸君は自分をどんなに上手な徒歩家だと思つてゐても、上り道を其女に隨いて十五分努力を續けたなら諸君は疲れ切つてしまふ。十五分！

――ところが、彼の女はその歩調をゆるめずに――正午に飲み食ひの一分間を除いて――少くとも、西印度の日中の長さの極度たる、十二時間と五十六分の間、續けることが出來るのである。夜明け前に出立する。日暮までに、その休み場所へ達しようとする。暗くなると、その國人誰れもがさうのやうに、ゾムビに遭ふのが恐ろしいのである。

百二十五斤といふ普通の重さ――これは一つには自分の觀察に基づき、一つにはそれを雇用して居る信用の置ける商人の明言に基づき、また一つには名指された市邑の住民數名の主張に――その陳述が總て全然一致して居るその主張に――基づいての見積であるが――その普通の重さの下にあつてのその普通の速力に就いて、讀者諸君に少しく知らしめたいと思ふ。サン　ピエールからバス・ポアントまで、國道で、距離は二十七基米と四分の三に少し足りぬ。それを通つて行くことを三時間半に樂にしおほせて、八時間を殆ど越さぬほど家を留守にした後で、午後には歸つて來る。サン　ピエールからモルン　ルージュまで――山上二千呎の（車馬代が拂へる人であれば誰れも歩かうとは夢にも思はぬほど險しい坂路である）モルン　ルージュまで――距離は七基米と四分の三である。それへ行くには一時間以上はかからぬ。が、それはその旅行のほん始めてである。彼の女はそれを通り過ぎて、二十一基米と四分の三彼方のグランド　アンスへ行く。ところが其處で休みはせ

ぬ。同じ歩調で後戻りして日が暮れぬうちにサン　ピエールへ到着する。サン　ピエールからグロ・モルンまで、二度通り行く距離は、三十二基米より上てある。殆ど毎日、六十四基米の――四十哩の――旅行てある。もつと長い旅行を――三日若しくは四日に亙る旅行を――する女商人(マシャンス)は澤山居る。――さういふのは途中幾つかの村て休息する。

七

斯んな國ての斯んな旅は立派な國道が無いなら不可能なことてあらう。それは堅固な、幅の廣い、缺點無しに勾配が好(よ)く出來て居る、石灰石の大道て、――町から町へ、小村から小村へ、山を越え、谷を越えてうねつて居り、或る處では二千五百呎の高地へ之の字形に昇つて居り、或る處ては内地の千古の深林を横ぎり、其處ては眼が眩むほどの絶壁の裾を傳ひ、此處ては麗はしき極みなる谷間へと降つて行つて居る。そんなやうな堂々たる道が三十一筋あつて、全長四八八、〇五二米突（三〇三哩以上）に及び、その築造には最高級の土木技倆を要したものて、橋梁の架設は無數てあり、暴風洪水地滑りの危險に對する防備の設計は巧妙を極めたものてある。その多くは殆ど規則正しい間隔を置いて道に沿う

て飲料水の泉を有つて居る。大抵は黑人(ニーグロ)が造つたもので、黑人は湧泉の水を竹の筒で道路へ引く簡單ではあるが優れた設計をするのである。道路といふ道路にはいづれも一哩塚が、いな寧ろ一基米塚が備へてあり、その表面がかなり良い狀態に維持されて居る限りは、どんな豪雨の後でも十五分內に大道が屹度乾くほどに排水が完全である。能く手入れされて居る土の堤防（普通は苔や蔓草や羊齒が見事に茂つてその上を蔽うて居る）か、或は石を積み上げた堅牢な壁かが、危險な深みへ出張つて居る側に沿うて築かれて居る。そしてその大道が悉く驚くばかり美しい風景の中を――わざわざ人間の驚嘆を强ひようといふ目的て創造されたものかと殆ど思はれるほど、それほど色合がいろいろ異つて居り輪郭が如何にも奇異な山々の眺望の中を――通つて居る。この熱帶の自然は尋常一般な物は何一つ生み出さぬやうに思はれる。自然が呼び出す物の恰好は、いつも優美であるか奇妙であるかてあつて――そしてその奇矯には、その突飛には、一種の空想的妙趣あり、藝術的氣まぐれの一種の畸形がある。山水の眺望が高い林の爲めに遮ぎられて居る處でも、老木の姿が――猛烈な花の色で全く火と燃えて居る蔓草の無限の纒絡が――長さ十呎乃至十三呎の葉を有つたバリジエの偉大な綠色の迸出が――大きな棗椰子の圓柱を立てたやうな森嚴さが――竹のしなやかな、震へて居る美妙さが――咲き狂うた薔薇の、烈火の如き光彩が―

—地平線の見えぬ憾を償うて餘りあるのである。時々、初め一目見た時には綠色の上等な毛皮と正しく同じに見えるものが一面に生えて居る絶壁に近づく。それは若竹の生えたてなのである。或は、丘の横腹が巨大な綠色の羽毛で蔽はれて居て、その羽毛が言ふに言はれぬ或る鳥の尾に見るやうに、みんな垂れ下がつて重なり合うて居るのを目にする。それは赤ん坊羊齒なのである。そして道が白い石の二重又は三重の橋で深い谿を跳び越えて居る處では、兩側とも、その黑い深所からして何たる美妙な恰好の物が日光に飛び出して居るか、十分に心留めて見給へ！人手形と諸君は輕率にそれに名づけるかも知れぬ——が、人手形の棕櫚でこれほどほつそりした優しいものはこれまでありはしなかつた。人手形の棕櫚でこんなに美妙な、レースのやうに輕い！綠の羽毛の頭を着けて居たものはこれまでありはしなかつた。これも亦羊齒で（多分、人間の出現する前に生えて居たあの化物のやうな植物の時代の、今は世に稀な殘存物であらう）——その一々の若葉が、芽から螺旋形にほぐれる時、初には僧正が持つ權標の——綠玉石の權標！の——形になる美しい木羊齒なのである。この種類に屬するもののうちに『大僧正の木』といふのがあるのは、乾度その爲めであらう。……だが、斯んな山道で目にする物については百年も書くことが出來るであらう。

八

どんな季節にも、殆どどんな天氣にも、荷運び女は――雨なんか決して氣にせずに――旅をする。品物は盆を蔽うて下の方でしかと括つてある二重三重の防水の覆ひ物で保護してあるのである。それでもその熱くなつて居るそして殆ど裸の身體へ、寒風を伴なうて突然に來る、あの熱帶の雨は恐れなければならぬ。歐羅巴人或は風土に馴れて居ない白人には、盛んな發汗中氣孔が皆開いて居る處へ、そんな雨に濡れることは恐らくは致命のものであらう。白人奴隷にすらその結果はいつも重いそして長引く病氣である。だが、荷運び女はその爲めに病氣に罹ることは滅多に無い。熱病やリウマチスや尋常の風邪には罹らぬやうに出來て居るらしい。が然し一旦弱り込むと　その疾病はおそろしい疾病で――四十八時間內にその犧牲をあの世へ持つて行く肺炎の一種で――ある。幸にも、彼の女の社會では、これで死ぬるものは甚だ稀である。

かやうな突然の死亡の稀なのに劣らず稀なことは、時間通りに來ないといふ實例である。或る場合に、それを傭うて居るサン　ピエールの一商人が、そのマルシャンド〔女行商人〕がい

つもよりか一時間以上遲いと知つて、乾度何か頗る異常な事が出來したに相違無いと確信して問ひ合はせに四方八方へ使者を送つた。ところがその女はその歸途やつと半分道のところで母になつたのだといふことが判かつたのであつた。……生まれた子は生きて居て丈夫に育つた。――チョコレート色した可愛らしい。今は八歳の女の子て、その山の扠小屋(アジューパ)から町へ下り、また山の上へと――小さな盆を頭の上へ載せて――毎日、その母に隨いて歩いて居る。

强奪の目的を以てしての殺人はマルティニークには無い犯罪ては無い。が、荷運び女は決してそれに惱まされはせぬといふことてある。でもその女共の中には價格數百フランの商品を擔いで居るものがあり、それにみんな金を――賣つた品物に對して受け取つた、時にはかなりな額に上る、金を――携へて居る。かく被害を免れて居る事は、一つには一年の大部分ただ日の中だけ――それも普通は侶と一緒に――旅するといふ事實に由るのかも知れぬ。非常に美しい娘を保護者無しに旅させることは滅多に無い。男の護衞者があるか、又は幾人もの經驗のある有力な女が一緒に居るかする。ココアの季節には――荷擔ぎ人夫が、夜明けまでにサン ピエールへ着くやう、朝の二時に早グランド アンスを出かける

時分には――みんな二十人か二十五人かの優勢な仲間をつくつて、途中歌をうたひながら旅をする。概して、より若い娘はいつでも――二頭立の純種の牝馬の如く完全に步調を合はせて――二人づつ一緒に步く。ただ老巧者か、異常な肉體的能力を有つて居るが爲めに特殊の仕事に選拔されて居る女かが一人で步くだけである。フォール・ドゥ・フランスやサン ピエールの麵麭製造の大工場に傭はれて居る或る種の女共は前述の後者に屬する。さういふのは正銘の女像柱(カリアチツド)である。恐らくは一番重い荷を擔ぐものなのであらう、朝早く新鮮な麵麭を田舍の家々へ供給出來るやう、日の出前に山の中のずつと奧まで、驚く許り大きな籠を運んで行くのである。そしてその勞働に對して一箇月四弗許り(二十フラン)と日々麵麭の一と燒きの塊とを貰ふ。……フォール・ドゥ・フランスから二哩許りの、小山の中の或る友人の家に滯在中、自分は或る朝、家の門の前に立ち停まつた地方の麵麭配達人を見たが、この人種の典型で、それよりも立派な典型を想像することは彫刻家に困難だらうと思つた。丈六呎――首から踵まで全身に力强さと優美とが結合して居り、無智な眼又は僻見を有つた眼ならばいざ知らず、どんな眼にも美しいあの綺麗な黑い皮膚をして居り、――それが、亞弗利加を象徵する像の如くに、金色の光を浴びてにゆうと立つて居た時、スフィンクスの滑らかな氣持ちの宜い嚴かな姿に、自分にはその女が思はれた。ブ

ーといふ名の、あの長い細いマルティニーク製の葉卷を一本自分が喫して居るのを見て一本吳れと言つた。ところが、生憎そのほかには一本も持つてゐなかつたので、二十本一束(たば)の代價を――十スーを――吳れてやつた。その女はにつこりともせずにそれを受け取つて去つた。一時間半ばかり後にその女は歸つて來て――自分がそれまでに見たことも無いほどの非常に見事な大きなマンゴを、素敵なマンゴを吳れに――自分に會ひたいと乞ふのであつた。それを喰べるのを見たいと言つて、見物しに地面に坐つた。喰べながら自分は、感謝のその僅な贈物を持つて來ようばかりに、火のやうなその空の下を、その行く道からたつぷり一哩は橫へそれて步いて來たのだ、といふことを知つた。

九

一日に四十哩から五十哩、いつも百斤以上の重さを頭の上にして！――といふのは、籃が空になると、底荷(バラスト)として石を入れるから。――その傭主の商品と金とを、山脈を傳ひ、峰を越え、谿を橫ぎり、熱帶の森を通り拔け、時にはフェル・ドゥ・ランスが棲んで居る間道を步いて！――しかもそれが夏も冬もて、降雨期でも暑熱期でも、熱病の時節でも暴

風の時節でもで、一日に一フラン！……その金でどうして暮らすのであらう？
　一フランは二十スーである。その女は朝早く荷を載せてサン　ピエールを後にする。第二の村のモルン　ルージュで、一片一スーでビスケットを一つ二つ又は三つ買ひに立ち停まる。それから午後遲くアジユウパ　ブイヨンへ着いてからまたビスケットを一つ二つ買ふこともある。グランド　アンスへ行き着けば、大抵食事が彼女を待つて居るが、それへ行くまでにビスケットか麵麭か五スーがところを食ふものと期待されよう。それで――殊にそのラグー（シチユー料理）に肉があれば――十スー要る譯になる。といふことは、喰べ物に對しての費用全體が十五スーといふことになる。それから、藥飲料といふ附け足しの出費がある。その熱して居る狀態に居て冷たい純な水を飲むのは危險どころでは無いから、その飲み水へそれを混じなければならぬのである。で、二スーか三スー。これで殆ど一フランになつてしまふ。が、斯んな輕卒なそして實際間違つて居る見積は住居と衣物との出費を含んで居らぬ。――時には何も無しの床の上に眠ることもあらうし、一年二十フランで衣物が着て行かれるかも知れぬ。が、その毎日の一フランから、その床の借り賃も拂はなければならず、衣服代も出して行かなければならぬ。實際はといふと、その一日の二十スーて一切をやつて行くばかりで無く、年をとり力が衰へた時、自分で商賣を始めることが出

來るほどの幾らかの金を節約して蓄へさへ出來るのである。ところがその節約は、此の土地の幾千といふ人が――牡牛や獅子のやうな筋肉の大きな人間が――平均一日五スーの費用で暮らして居ることを自分が諸君に斷言すれば、さう驚くべきことには思はれぬであらう。麵麭一スー、マニオク粉二スー、干鱈一スー、タフィア酒一スー、――彼等の食事は斯んなものである。

一日に一フラン以上儲ける荷運び女が――物を賣りつける特殊の技術を有つてゐて、一割乃至一割五歩の口錢を貰ふ女が――居る。さういふのはしまひには多くの場合一本立になる。――相變はらず自分自ら賣りもし、取引もするのであるが、品物を運ぶ年若い女を傭ふ。

一〇

……『ウー　レ　マシヤンヌ！』と、自分とところの庭を閉ぢ込めて居るバリジエの後ろから、銅鑼の音のやうに響き渡る太いアルト聲が鳴りひびく。彼等が二人――いや三人――マイヨットとシエシエルとリナとが居るのである。マイヨットとシエシエルとは今しが

たサン　ピエールから着いたばかり、——リナは果物と野菜と持つてグロ・モルンから來る。三人とも呼び入れて、何を有つて居るか見るとしよう。マイヨットとシエシエルとは口銭を貰つて賣り、リナはその母がグロ・モルンに小さな庭を有つて居るので、其處で出來る品を母の爲めに賣るのである。

……『ボンジユー・マイヨット。——ボンジユー・シエシエル！クーマン　ウー　カレ、リナ、シエ！』……その大きな盃を通す爲めに觀音開きを開け放つ。……早三人とも年寄りのテレザと若いアドッに手傳つて貰つて荷を下ろして居る。——荷物は總て床(ゆか)の上に置いて居て、防水の蔽ひ物の綱を解きつつある。その間養女のアー・マムゼルがその丈高い歩行者にラム酒と水とを持つて來る。

……『あゝ、何といふごちやまぜだい、マイヨット！』……印氣壺と木製の牛、財布と紙製の犬と猫、人形とコスメチック、留針と縫針と石鹼と齒刷子、罐詰の果物と喫煙用の帽子、絲毬と平打紐(テエプ)とリボンとレースとマデイラ酒、カフスと襟(カラア)と舞踏靴と煙草袋。……が、その小さな平つたい包には何があるのだい？『蜂女(グエープ)』があるのなら、その『蜂女』への贈物である。……ジエシ・マイア！おや！——綺麗な肩掛(フーラール)だねい！辨慶縞の處が空色と黄、縞が橙色と深紅色、市松が薔薇色と猩々緋、そして、唐金の色味、黑と綠の甲蟲の色

味。

『シニシエルよ、この盃を落としてもしたら、何といふ毀れ物（ブルークトウーム）が出來る事だらう——アイ　ヤイ　ヤイ！』陶器と磁器との至る一軒店がものがある。——皿、大皿、盃、——土製のカナリヤとドバンヌ、それからクリーオールの娘の名が——いづれもイーヌで終はる名が——書き入れてある贈物の湯呑と茶椀。『ミシユリーヌ』『オノリーヌ』『プロスペリーヌ』〔シエシエルよ、これは賣れないよ。サン　ピエールのこなたに、プロスペリーヌ〔富み榮ゆる女〕は一人も居ないから〕『アザリーヌ』『レオンティーヌ』『ゼフリーヌ』『アルベルティーヌ』『クリサリーヌ』『フロリーヌ』『コラリーヌ』『アレキサンドリーヌ』……それから小刀と肉叉（フオーク）、それから廉物の匙、それから錫製の珈琲壺、それから赤ん坊に持たす錫製のガラガラ、それからいやな小さな男の兒への錫製の笛——それから鉛筆に書翰用紙に封筒！

……『おゝ、リナ、何て素敵な蜜柑だい！——まはり十二吋はたつぷりある！……それからこれは自分等の國の橘（こうじ）に少し似たものだが、これは、何といふ名なんだいこれは？』

『ゾランジュ・マカク！』（猿蜜柑）。あゝ、アヺカドがある——實にうつくしい！——異つた三種類のグアヴ——熱帶の（種子が一つては無くて四つある）櫻實——白絹のやう

なものが裏に附いて居る、彈力のある一と切になつてその食へる處全體が取れる熱帶の覆盆子。……あゝ、新しい肉豆蔻（ナトメッグ）がある。その厚い綠色の莢は一寸觸はると眞半部に裂ける。中の美しい心（しん）を見給へ――枝の分かれて居る血管のやうにその上に編まれて居る、血の色の平たい纖維の鮮かな網細工に全部包まれて、光澤のある黑ずんだ濃い赤い色なのを。……この大きな重い赤と黃との物はポム・シテールである。膽汁のやうに苦いその滑らかな表皮が、木綿絲のやうに見える物で縫ひ込まれて居る汁氣の多い甘い肉を蔽うて居る。……此處にポム・カネエがある。その鱗形の皺ひの内側に、思ひもつかぬほど美味な黃色いカスタードがあつて、小さな黑い種がそれに浮いて居る。それよりも大きなこのコロソルは内部はそれと殆ど同じ美味てあるが、そのカスタードが黃色て無くて白いだけが違ふ。……此處にクリストフィーヌがある。梨の形をした大きな物で、種類に從つて白いものもあり綠色のもあつて、皮は刺があり蝦蟇の皮のやうに瘤がある。が、蒸し煮すると非常に旨い。それからメロンジエーヌ即ち茄子。それからパアミステピス、それからシヤデーク、それからポム・ダイイティ――それから初め見た時にはどれも同樣のやうに見えるが同樣では無い根物（ねもの）。カモニオクがあり、クークーがあり、シュー・カライーブがあり、ジグナームがあり、それに交じつて種々な種類の芋（パタート）がある。年寄りのテレザの魔術が、晩になら

ぬうちに、この泥のついた不恰好な物どもをば、湯氣立つ黄金のピラミッドに融けた琥珀と液體になつた眞珠との混物(まぜもの)のやうに見える匂ひ馨しいポリヂに變形することであらう。――といふのはリナが隨分と買はせるから。

それからシエシエルが錫製の珈琲壺一つと大きなカナリヤ玩具一つと賣りつけおほせる。……それからマイヨットが一番多く賣りつける。といふのは、可笑しなビスケット人形を見て、アー・マムゼルが同時に泣きもし笑ひもしたから、それを買つてやらなければ、自分はこれから一生の間不快を感ずるであらうと思ふほどである。その六フランで釣錢が來る筈だと自分は知つて居る。――そしてマイヨットは、ケダルの天幕(テント)の如くに、ソロモンの幕(カーテン)の如くに黑くはあるが優美なマイヨットは、その事に氣附いて居るやうである。

あゝマイヨットよ。さういふ時の顏が――屈むとお前の兩耳の金の環がきらきらしぶらぶらして――見る眼に美しいといふことを自分で知つて居るやうに、――今、横半面を見せて居る、そのお前の可愛らしいスフィンクスのやうな顏は、どうして悲さうなのだい！それから、そのみすぼらしい小さな帆木綿財布を、なぜそんなに長い間かかつて、そんなに長い間かかつて、ほどかうとして居るのだい？――それをいぢくつたり、ひねくつたりして？――その盆の重さとお前が歩かなければならぬ六十基米とを、それから暑さを、そ

れから砂埃を、それから賣れぬ折の失望とを、わしに考へさせようと思ふからの事かい？
あゝ、お前はずるいよ、マイヨット！いや、わしは釣錢は要らぬよ！

二

……一緒に旅して居て、荷運び女が續いて幾時間も無言で歩いて居る事が屢ゝある。——それは疲勞して居る時である。時折　その目的地に近づく時は大抵——歌をうたふ。そして饒舌る時は、反響と高地とが多い此の土地では、その聲が餘程の遠くまできこえる程の高調子である。

ところが獨りで旅して居る者は無言で居ることは稀である。自分に向つてまた無生物に向つて談話（はなし）をする。——木に、花に物言うて居るのを、　色が變はつて行く空高（そらたか）の雲や遙か遠くの峰に物言うて居るのを、——沈み行く日に物言うて居るのを、——聞くことがある。

朝など幾哩か向うに、日の光に紫水晶の圓錐なす、あの偉大なピトン。グレを多分眺める。するとそれに斯う話しかける　ニ、ウー　ジヨジヨール、ツイ！——モアン　ニ　アン

ギ　モンテ　アッスー　ウー、プー　モアン　ウエ　ビアン、ビアン！』（おまへは美しいね、本當に美しいね　——お前を登ることが出來るとなあ、遠方を、ずつと遠方を眺めに！）

棕櫚の大きな森の横を通る。非常に密生して居るから、その入り交じつて居る頭が太陽に對して跡切れ目無しの一枚の綠の日蔽を造つて居る。帆柱のやうに眞直ぐなのが幾本もある。美しい角度に曲つて居て、奇妙な舞踏にその蒼白い長い一本足を交ひ合はせて居るやうに思へるのがある。弓のやうな曲線を描いて居るのがある。尻で突立つて居る巨大な蛇のやうに、下から頂までうねうねになつたのが、一本ある。その一本を眺め見ることを好む。ジヨリ・ビエ・ボア・ラ！——横を通る時、それに物を言ひ——今日は、と挨拶する。

或は、登る時振り返つて見ると、海の靑い大きな夢が——道を登れば登るほど大きくなるあの永久の附きまとひ物が——見える。するとそれに物を言ふ。『ミ　ランネ　カ　ガデ　モアン！』（あの大きな海が私を見て居るよ！）『マシエ　トッジュウ　デイエ　モアン、ランメ！』（私の後から歩いておいて、海さん！）

或は日を陰らせて、その眼に見えぬ頂上から灰色に擴がつて居るペレの雲を眺める。す

ると雨を恐れて、それに物を言ふ。『バ　ムイエ　モアン、ラプリ・ア！クィッテ　モアン　リゾ　アヴン　ムイエ　モアン！』（私を濡らしなさんな、雨さん！濡らさぬうちにあそこへ着かせて下さいよ！）

時に犬が吠えかかつて、そのむき出しの足を噛まうと嚇す。するとその犬に物を言ふ。『シアン・ア、バ　モデ　モアン、シアン――アン！モアン　バ　フエ　ウー　アリアン、シアン、プー　ウー　モデ　モアン！』（私を噛むんぢやないよ、え、犬！私を噛まなきやならんやうなことを私はいままでおまへにしたことは無いぢやないか、え、犬！私を噛むんぢや無いよ、お前さん！私を噛むんぢやないよ、好い子好い子！）

時に向うから旅して來る、荷を頭にした同じ身分の女に遭ふ。……『クウマン　ウーイエ、シエ？』（どうなの機嫌は、おまへさん）と叫ぶ。すると相手は返事する。『トゥート　ドゥース、シエ、――エ、ウー？』（丈夫でゐます、有難う――あんたは？）そしてどちらも休みもせずに行き違ふ。時間が無いのである。

……それが或は最後で、それから幾哩と人聲を耳にせぬ。それから後は、雑草の――グライー。グラ、グライー・グラ！の――私語、――それから甘蔗の――シューウーア、シユーウーア！の――雑談、――それからカ　バビエ　コンム　ヨン　ギエ　フアンムの―

―年寄り女のやうにぶつぶつ言ふ、ボア・アンゴールの嗄れた言葉、――それから洗濯女の川のつぶやきの如きフイラォ木（ぼく）のつぶやき、だけてある。

二

……日沒が近づく。光が濃い黄色に變はつて居る。――長い黑い恰好の物が弓と曲つた道路を横ぎつて存して居る。それはバリジエと棕櫚との影てあり、苔満林度（タマリンド）と印度葦との影てあり、シーバと巨人羊歯との影てある。すると荷運び女どもが、この小村で一寸休みに、遠いグランド・アンスから道路の明かるい處、暗い處をと通りぬけて下りて來る。此處の麵麭屋の家の前て、路傍に坐らうとするのてある。ところで此處にはその家に傭はれて居る大きな黑人の職人のジャン・マリーといふが居て、その荷を下ろしてやらうと待ち構へて、來るのを門口から見張つて居る。……ジャン・マリーはこのシャム・フロールきつての一番力の強い男てある。腰の處まで裸にして其處に立つて居る時、どんなトルソか、見て見るがいゝ！……自分の一日仕事は濟んだのてある。が、自分は早、年がいつて、自分と同じ背丈の息子があるのだけれども、女の子等を待つことが好きなのてある。それは

習慣である。或る人が言ふのは、彼には嘗て息女が一人——今やつて來よる荷運び女共のやうな荷運び女があつて、今立つて居るその門口で、斯んな風にその歸つて來るのをいつも待つて居たが、或る夕暮れ待つて居ても姿を見せなかつた、そして家へ歸つたのは彼の腕に抱へられて死體となつてであつた——誰れも介抱するものが居らぬ或る山道で蛇に嚙まれたのである、と。……道路は當時は今ほど良くはなかつたのである。

……さあ遣つて來る、娘どもが、——黄色いの、赤いの、黑いのと。その黄色い足が日の光を受ける時の閃きを見よ！その赤色の手足が變はり行く日の輝きに何といふ不可能な色合を見せることか！……フィノット、ポーリーヌ、メデル、いつものやうに三人一緒だ——後から、非常に疲れて、チョコチョコ隨いて來るティ・クレを連れて。……氣にしなくともいいよ、ティ・クレよ——もう四五年するとお前の從兄弟達はくたばつてもお前はまだ歩かれるやうになるよ——可愛い子だよ、おまへティ・クレ。……や、シリリアとザベット、それからフエフエとドドットとフェブリエットとがやつて來る。そしてその後ろからシャビーヌが二人——金色の娘が——來よる。絹物と絲とハンケチとを賣る雙子姉妹である。いつも一緒で、いつも似寄つた色の着物と手拭と着けて居るから、どちらがロンニーてどちらがエドゥアリーズか誰れにも見分けがつかぬ。

そして自分共を待つて居るジャン・マリーの姿を見、その太い親切な聲が『クゥマン　ウー　イエ、シエ？クゥマン　ウー　カレ？』（どうだい機嫌は？達者かえおまへは？）と呼ぶのを聞くと皆ほゝゑむ。

すると、大抵はみんな斯う返事する、『トゥット　ドゥース、シエ、――エ　ウー？』（丈夫で居ます、有難う――あなたは？）。だが、非常に疲れて居る誰れかが彼れに叫ぶ『アー！デシャジエ　モアン　ギット、シエ！モアン　ラス、ラス！』（早く荷を下ろして、あなた。非常に、非常に疲れて居りますから）。そこで彼はその荷を取り下ろしてやり、麵麭を持つて來てやり、皆を笑はせるやうな馬鹿げたことを言ふ。するとみんな、丁度子供のやうに、喜んで笑つて、路上に直かに坐つてその乾いた麵麭をむしやむしや喰べる。

……こんな光景を自分は幾度も幾度も見た！……眼を一寸の間閉ぢる、すると――幾千哩距つた此處で――幾十日の日を葬つた今――直ぐ自分に歸つて來る。……

棕櫚の影が帶と筋を引いて居る、黄に輝いたその山道が自分には又見える。その輕い足が――或る時は日陰を或る時は日南を――落葉のやうに音を立てずに來るのが自分には又見える。今なほ、自分には『アー！デシャジエ　モアン　ギット、シエ！――モアン　ラ

ス！』といふ聲がきこえ――荷物を取り下ろさうと差し伸べるあの巨きな兩腕が見える。

……ただ、一つの變化がある、――それは何だか自分は知らぬ！……その道路が、それから木々のその枝葉が、それから荷運び女の歩いて來る可愛らしい足が、それから日沒の――恰も死が生よりも大きく又近きが如くに、我々には黎明よりも常に大きく又近い日沒の――この光すら、濛乎と霞んで居る。そしてその不思議な路は、その塵土は幾代の塵土たる路のやうに見える。――そして待つて居る姿形はジャン・マリーでは無くて、もつと黑いもつと力强い者である。――そしてその聲は確に、『アー！デシヤジエ　モアン　ギット、シエ！――モアン　ラス』と汝に對つて――汝色黑き、永遠の休息を授與する者よ、汝に對つて――叫ぶ、疲れて居る魂の聲である。

ラ　グランド　アンス

一

モルン　ルージュの村に滯在中、自分は、東北海岸から出て來る若い娘が——みんな荷運び女で、グランド　アンスからサン　ピエールへ、それからまた歸途と——總體で三十五哩の旅を——する途中、殆ど毎日通るその若い娘が——殊に美しいのに屢〻感心させられた。……自分にはそれがグランド　アンスから出て來ることが分かつて居る。その店でみんながいつも少時立ち停まる麵麭屋の主人が——その一人一人の名を知つて居る主人が——彼等に就いて自分にいろいろと語つて聞かせたからである。特に目立つて人目を惹く娘が出て來て、そして自分がそれは何處の者かと尋ねる度毎に、いつも定つて（大抵はあの獨得な抑揚を有つた佛蘭西語の『あゝ』——『おや、あなたは確に知つておいでの筈ですが』といふ意味の『あゝ』を前に置いて）の返事は『グランド　アンス』であつた。……

…『アー！セ　ドゥ　グランド　アンス、サ！』。そして平凡な、面白味の無い型の娘だと如何なのでも、何處か他から——多分グロ・モルンか、カポートか、マリゴーかから——だと符牒附けするが、決してグランド　アンスからだとは言はぬのであつた。グランド　アンスの娘は、その黃もしくは褐色の淸らかな皮膚と、しなやかな輕い姿と、衣物の着かたに一種特別な優し味があるのとて、他の者と見分けがつくのであつた。その短い着物はいつも氣持ちの宜いそして晴れやかな色で、そのむきだしの手足と顏との熟した果物の色合と申し分無しの對照を爲して居た。杏色を帶びた黃色の條がある白地が好きなこと、青と菫色との格子縞が好きなこと、淡紅色と艶紫との色んな模樣が好きなことを自分は識り得たのである。その大盃を頭にして歩くのに一種特有の優し味があつて、頭の後ろで兩手を組み合はせ、兩腕は女像柱のやうに張つて居る。さういふのをスケッチする機會があつたなら美術家は狂喜したことであらう。……全體から言つて、この首府或はその附近の人種とは餘程異つた一種特別な人種だといふ印象を與へた。

『グランド　アンスの者はみんなバナナ色なのかい？そしてみんなあんな女のやうに可愛らしいのかい』と自分は問うた。

その小男の麵麭屋の主人は『私しや一度もグランド　アンスへ行つたことがありません、

マルティニークには四十年も住んでゐますが。だが、あそこには、若い娘の美しい一部族があることは知つて居ります。イル　イ　ア　ユヌ　ベル　ジェネッス　ラ、モン　シエル！』と答へた。

それから自分はどうしてグランド　アンスの若い者が他の地方の若い者より少しでも美しいといふことがあるのだらうかと怪しんだ。そしてその麵麭屋の主人が一度も其處へ行つたことが無いと自分で述べたことがそれが若しかしたら手掛かりになりはせぬかといふやうに考へられた。……サン　ピエールとその郊外との住民三萬五千のうち、其處へ行つたことの無い、また多分これからも一度も行くまいと思へる者が少くとも二萬はある。西海岸に住んで居るもので東海岸を訪れるものは多くは無い。事實、白人クリーオール、これは全人口のほんの僅の歩合を占めて居るものであるが、その白人クリーオールのうちの者を除いて、自分が生まれたこの島の各部悉くを知つて居る者には滅多に遭へぬ。村を隣りしてゐながら、互に會ふ爲めに途中の山脈を登らずに生きて死ぬる者が頗る多からうと思ふ程に、それ程に山が多く、また旅行が疲れ易いのである。グランド　アンスは此島一番の町から僅二十哩許りてある。が、馬に乘つてその旅行をするには隨分の勸誘を要する。そして、ただ職業の荷運び女、栽培地の使者、それから殊に頑健な體質の有色人だけが徒

歩てそれを試みる。砂糖とラム酒との運送があるだけのことで、西海岸と東海岸との間には——海が餘りに危險なので——海上では實際何等の交通が無い。それで此の島の兩海岸の人民は、そのそれぞれの州を横斷して居るより小さな山脈に依つて更に細かく分かたれ遮斷されて居るほかに、互に多少孤立の狀態となつて居る。……そんなことを考へて、斯く離隔されて居る地方民が、二百年內に特殊の特徴を帶びるやうにならぬものか——原の人種交叉の優勢な要素に從つて黃色い、赤い、或は褐色の典型（タイプ）の人民に發達し來るやうにならぬだらうか——と怪しんだ。

二

自分は荷運び女のその河を見たいものと久しく渇望して居たのであつたが、或る重要な用事があつて共處へ行かなければならぬ一友と共に旅行を試みる機會が自づと出て來た。——單身それを企てようといふ氣にいつかなつたらうとは自分は思はぬ。道路が平坦ならば、その距離は極早く行けようが、山々を越えてては、この永久の熱帶の暑さではその旅はのろくまた疲れ易い。馬に乘つてても馬車に乘つてても、サン ピエールからグランド

アンスまで四五時間かかり、歸りは、路が殆ど全く上り道だから、それよりも長い時間を要する。年若い荷運び人は殆ど同じほど速く旅する。そして跣足の黑人郵便遞送夫は、これは棒の端の四角な箱に入れて郵便物を擔ぐのであるが、それはモルン　ルージュを午前四時に立つてアジュウパ。ブイヨンへ六時少し過ぎに着く、そして、途中幾度も停まつたり遲れたりすることを含めて、アジュウパ・ブイヨンを六時半に立つてグランド　アンスに八時半に着く、と時間が計つてある。

この島一番の町からグランド　アンスへ行くのに、サン　ピエールで馬なり馬車なり傭ふことも出來、或は公共運輸機關でモルン　ルージュへ登つて、其處で乘り物なり馬なり得ることも出來る。馬の方がより廉く且つ樂な方法である。モルン　ルージュを越して一哩許り、昔のカレバス〔意味は、瓢簞。譯者註〕道路が公道へ入る處で、此旅行の最高地點に――東北海岸と西海岸とを分かち、また貿易風を遮ぎつて蒸し暑いサン　ピエールへ行かしめない巨大な山の背の頂上に――達する。此頂點に石造の高い十字架があり、丁度此處シャム・フロールを見渡す其小山を登ると、此島の兩側の海を――瑠璃と青い海を――同時に眺める事が出來る。この高みから道は百と數多いくねり廻はりと次第に小さくなるうねりとで東海岸へと下つて行く。或はその絶頂まで樹の茂つたモルン〔小山〕の間へ沈み込み――或は

無數の激流と谷底とを跨がり——或はその綠の冠頂を莊嚴な薄暗がりへ交じへようとして、垂れ下がつて居る攀援莖植物の中を突きぬけて、巨大な樹が頭上遙かに聳えて居る隘路を過ぎる。時折、銀笛の一番深い音のやうな低い長いうるはしい音がきこえる、——それは鳥の聲で、シフルール・ドゥ・モンターニュ〔山の口笛の意〕の囀り聲である。それからは全く森閑となる。幾時間も二度と白人の顏を見さうには無い、が、間を置いて、非常に早く歩く荷運び女が、或は、重い荷を擔いて居る野働きの者が、通る。そしてそれ等は言葉をかけるか、頭へ手を擧げるかして禮をする。……ところで斯く通つて行く者共の——大盆を頭にして居る褐色の美しい娘や、バンブー・グラスの大きな重荷に腰を曲げて居る色の黑い勞働者の——ボンジュー、ミシエ！といふ——挨拶を聞き、そのにこにこ顏を見るのは頗る愉快である。其の時、さう言うた者が女で可愛い女なら、『ねえさん、こんちは』（ボンジュー・シエ）と、或は『こんちは、我が息女よ』（マフィ）——よしやそれが年寄りでも——と返答しなければならぬ。が、通つて行く者が男なら、至當な返事は『こんちは、わが子息よ』（モンフィ）である。……古昔程に今はかけることが少い、この深切な挨拶の言葉を。が、なほ眞の且つ善良なクリーオール作法の一つとなつて居るのである。

小川といふ小川は總てそれて陰らせて居る木羊齒の羽毛のやうな美しさ、また、竹と樹

に似た草との優美さは、道が下るに從つて減るやうに思はれる——が、棕櫚は前よりか高くなる。道はしばしば、驚くべき豁の眺望を恣にする絶壁の裾に沿うて居る。と思ふとまた、眼界を斷ち切る高い綠色の土手か灌木の茂つた坂かで圍はれて居る。そしていつも路は蛇行して居るから、行く手に白い路筋を二三百呎以上は見ることが出來ぬ。約十五基米目の處で素晴らしい風景が右手に開けて大西洋に達して居る。——道はまだ非常に高い處をうねりくねつて居る。森林が眼下幾百碼に大波と起伏して居り、幾哩遠く小山の側面を登つて居り、その先きには、此處其處に、妙な恰好の山が幾つも——霞のかかつた綠から菫色へまた非常に仄かな鼠色へと段々に淡らいで——浮かび出て居る。そして丘と峰との色彩多樣なこの波浪の壯大な一つの開口を通して、空色爲す海に接して黄金色の甘蔗畠が見える。グランド　アンスは何處か其の方向の處に在るのである。……十八基米目の處で、小さな田舍家と寺一宇と日蔽ひ木に縁取られた一二軒の大きな建物とが一と群になつた處を通る。それがアジュウパ・ブイヨンの小村である。が、も少し行くと、林はすべて背後になつてしまふ。でも道は相變はらず迷はしい曲線を畫いて、籐やココアが上を蔽うて居る低い岡について廻はつたりその中を通つたりする。ずつと低い處へ沈むかと思ふと、また浮かび出て、またもや沈む。——そして土壤が色を變へつつあることに氣が附く。亞米

利加の木綿帯の地面の色合に似て赤味を帯びる。それから――その水晶のやうな綺麗な淺い早瀬が非常に岩の多い深い水路の中を流れて居る――リギエール　ファレーズ（古い地圖にはフィラースと記してある）〔斷崖川の意〕の横を――それからカポート川や他の流川の横を通る。すると甘蔗の小山の黄色な緣の上に、陸の方に眼の眩むほど白い泡の端を有つた海の青い長い横棒が見える。通つて來た高地はもう綠色には見えないで、紫がかつた色か灰色かになつてゐて――雲に包まれた巨大なペレ山が總ての上に抽んでて居る。非常に强い風が吹いて來て居る――いつも雲を西へ西へと追ひ拂ふ貿易風である。これが卽ちマルティニークの日南側で、灰色な日と非道い雨とが少い半面である。その後一度か二度か、いつも甘蔗の上に、海が姿を消したり現はしたりする。それから、橋を一つ渡り最後の曲線を廻ると、道は突然に下つて海岸へ出てグランド　アンスの町の中へと入る。

三

朝八時頃にモルン　ルージュを出立して友と自分は十一時半にグランド　アンスへ到着した。我々を氣持ち好からしめるやうに萬事取計ひがしてあつた。自分は、自分を迎へ入

れる準備がしてあつた、町の大通と海との眺望を同時に恣にすることの出來る、角の風通しの宜い部屋が――貿易風に明けつ放しになつて居る、天井の非常に高い部屋が――嬉しかつた。が、熱帶の六月の日の暑さに長の馬車乘りをした後では、誰れしも必らず身體の運動を少しく試みる必要を感ずる。自分はその家にほん一二分居ただけて、この小さな町とその四圍を見に出かけた。

　公道から眺めると、グランド　アンス市は海岸の綠と海の瑠璃色との間の黑い長い地面に見える。殆ど全部が黑と綠とで――エチングをやつて見たいといふ念を起こさすのに適して居る。甘蔗畠と牧場との高い斜面が其後ろと兩側とに高まつて、山脈の紫色や灰色の絶頂の處迄波と浮き臥して高まりつつ遠くまで續いて居る。北と南とは、左側と右側とへ、土地が伸び出て、二つの高い海角を――殆ど全部綠色な、そして一哩許り互に離れた、海角を――爲して居る。一方がポアント　ドゥ　ロシエで、片方がポアント　ドゥ　セギナウ叉の名クロシュ・モールてある。此後の方の名は、此處の絶壁で射殺された有色人てあつた、謀叛をやつた奴隸の傳說を傳へて居る。此二つの海角がグランド　アンスの半圓を描いて居る灣を形成して居るのである。此グランド　アンス卽ち「大きな入江」の谷は全部が玄武岩の洪大な盆地である。そして狹くはあるけれども、水流が五筋も、リギエール

ドゥ　ラ　グランド　アンスもその一つであるが、それへ水を供給して居るのである。

この町には短い街路が三つあるだけてある。一番主もなの、即ちグランド　ルーは、ただ國道の繼續てある。その下に、より狹い街路がある。前にはその左右の田舍家が悉く甘蔗藁て屋根が葺いてあつたが爲めに、ルー　ドゥ　ラ　ペイユ〔藁の町の意〕と呼ばれてゐた。それから上手にも街路が一つあつて、それはモルンと空とが相會うて居る處まで、波の如く起伏して行つて居る甘蔗畠に接して居るのである。建築的興味を有つたものは何一つ無い、そして總てが——壁も屋根も石鋪道も——薄暗い。が、市街を通り拔けて、セギナウの海角へ登る南方の路に隨いて行くと、——上が圓くなつて居る岡が、偉大な波浪を爲して續いてゐて、甘蔗の一番高いゆらめきの上に、地平線にその頭を擡げて、頂が平面になつたり角のやうに突立つたりして居る菫色の峰が遠くに見える——うるはしい風景を眼にすることが出來る。そして町の上を振り返つて眺めると、——他の海岸から見る時とは違つて、横が急斜面になつて居り頂が殆ど眞四角て、透明かと思ふほど淡い、靈のやうな絶大な横顏を見せて——全く雲を纏はぬペレ山を見ることが出來る。それからその海角を南へ横切ると、同じその道が、岩だらけの幅廣い早瀬が流れて居る、非常に美しい別な谷へ——リヰエール　ドゥ　ロランの谷へ我々を導く。この淸らかな流は、小山の中の大きな

開口を通つて海へ注ぐ。そしてその小山の間を西の方を眺めると、その背景を成して居る青い高い山脈の處まで、綠色の山容が重なり合うて、後から後から突き出て居る絶妙な通景に——歯の恰好をした奇妙な姿の山々の——殆どこの全島を横ぎつて南北に走つて居る中心の大連山の一部の——眺望に、諸君は恍惚とすることであらう。『ラ　トラース』と呼ばれて居る驚嘆すべき道路が、原生林の障壁の間をうねりくねつて居るのは、その青い山頂を越してゞある。

が、この小さな町そのものの顏に馴染みになればなるほど、この花やかに展開して居るまばゆい色合總ての裡にあつてそれが保持してゐる不思議な黒い調子に段々つよく感銘を受けて來る。此處には眼に見える色は二點しか無い。石で出來てゐて、黄色に塗られてゐる教會と病院とである。が、甘蔗に蔽はれて居る小山小山の冴えない金色と海の美妙な瑠璃色との間に存在して居るこの風景中の一と塊として、それは光の絶大な輝きの下に、やはり黒く見えて居る。その木造住家の骨組みが載つて居る、高さ三四呎の、土臺の火山岩が黒い。そして海風が、此處の木造物はすべて、どんな色の上塗りがあつても、それを貫いて色を黒くする力を有つて居るやうである。屋根も正面も、多分グランド　アンスて石炭を見たものは誰れもあるまいが、石炭の煙に長年曝されたやうな觀を呈して居る。そし

て小石とセメントでの石鋪道が雲母のやうなきらきら光(ひかり)に充ちた濃い灰色で、厚い上等な靴で保護せられた足にすら不快を覺えるほどに堅固である。やがてのこと、黒い石の壁に氣が附き、黒い石の橋に眼が留まり、黒が身邊の一切の風景の一要素を成して居ることを知る。町から通じて居る道路を行くと、大きな巉岩か巨大な漂石が山の斜面の綠の中から突き出て居るのを度々認める。それがインキのやうに黒い。その黒い表面がまたきらきら光る。附近の川はどの川も河床は黒ずんだ鼠色の石で充たされて居る。そしてその石は多くは――谷々を溢れしめ、底地（フォン）へ蛇の死骸を撒き散らし――岩と岩とを突き當たらすあの猛烈な洪水の爲めに破れて居るが、それがその黒い心(しん)を見せて居る。此處其處に綠の懸崖から出張つて居る裸岩は煤色をして居り、海岸の飛び離れ岩がまた似よつた姿を呈して居る。また濱邊の砂が葬式のやうに黒い――殆ど粉炭の觀がある。そしてその上を歩くと、一歩一歩三四吋も沈むが、銀の微妙な沸騰のやうに、それには微細な閃きが非常に多くてまた光の强いのに諸君は愕かされる。

　此異常な砂は天然鋼を九十パーセント含んで居るので、之を工業的に利用しようといふ努力がこれまで幾度も試みられた。數年前或る會社が出來て、或る機械が――砂を雨と降らせて居る下(した)で運轉さすとそれへ粗金(あらがね)を吸ひつける大きな旋回磁石が――純粹の砂から金

屬を分離させる爲めに發明された。斯くして鋼鐵の固着で出來た外被が或る厚味になつた時、電流を中止するだけの事で其金屬を適當な容器へ落下せしめるのであつた。見事な棒が此火山鋼鐵で出來、上等な刄物がそれから製造された。佛蘭西の鑛物學者は其製品を特に優秀なものと鑑定したのであつたが、其會社の計畫は放棄された。事情がもつと良好であつたなら此企圖を援助したかも知れないが、普通選擧が實施されてそれに因つて生じた政治上の紊亂が資本家を嚇した。それで大資本の缺乏が、それに遠隔な市場への運送費の事も加はつて、國内工業を創設しようとのこの感心な企圖を竟に敗亡せしめたのであつた。

大嵐の後に、輝かしい鳶色の砂が、時々海の底から打ちあげられる。が、いつも重い黑い砂がまた出て來て、この濱邊の普通な色になる。

四

自分がその一室を占めたその手廣い木造家屋の後ろに、竹の柵で圍められ、ロゼイユ・ボアの花が爛漫と咲いて居る生垣が取り圍んで居る小さな庭がある。ロゼイユ・ボアといふのはベゴニアに似た草のクリーオール名で、その閉ぢた莟は正しく淡紅と白との優美な

雙殻貝に似て居り、開いた花は蝶の形に肖せて居る。此處其處に、芝生の上に網が乾かしてあり、魚梁(やな)が――細かに割いた竹で編んでミビ・ミビとは銅線のやうに重い折れにくい一種の蔓である）の莖で恰好の崩れぬやうにしてある妙な魚捕りの係蹄が――乾かしてある。そしてその生垣の直ぐ後ろに波の白い閃きが見えるのであつた。自分のグランド　アンス行と關係しての最も强い憶ひ出は、初めてその庭の端へ行つて、其處の小さな竹の門を開けた時、前に濱邊を――その上に此處其處に（甘蔗の萎き草の屑、昔の潮が擴げて行つた腐れかかつて居る廢り物がつくつて居る）淡綠色の斑(まだら)や條(すぢ)が幾つもついて居る非常な幅の煤の如くに黒い砂地を――見渡したその時の憶ひ出である。この部落所有のたつた一艘の端艇が自分の前の處に、陸地の上に高く乾いて、据わつてゐた。時は午後の暑い時期て、町は眠つて居り、生きた物一つ眼界に居らず、岸打つ波の洞聲は他の一切の音を消して居り、强い暖かい海風の香が他の一切の臭を滅してゐた。その時、頗る突然に、その黒砂の濱邊の上に怒號して居る荒海を看まもつて居る間に、全く以て奇妙極まる感じが――現實で無い物を見て居るのである、その存在は夢に劣らず覺れ知り難い或る物を眺めて居るのである、といふ感じが――自分を襲うた、竹垣越しに白浪を初めて眺めて起きたのか――それとも荒涼たる黒い砂濱の上について居たその綠色の昔の潮の筋を眺めて起きたの

か――それとも海の物言ふ聲の或る調子の爲めに起きたのか――それとも生きたものが觸るやうな風の觸感の爲めに起きたのか――それともそれ等總ての爲めか、自分は言ふことが出來ぬ。――が、次第次第に、ずつとその昔に、それは何處であつたか言へぬが――憶ひ出が段々とうすれて夢と區別が附かなくなるあの幼年時代に、――丁度斯んなやうな海岸を見たことがあるといふ考が心の裡にはつきりとして來た。

　暗黑がグランド　アンスを襲ふと直ぐと教會の塔の時計の面に灯がともる。それが突然に屋根と椰子との上に――丁度燈明臺の如くに――ぱつと黄色い光にともるのを諸君は見る。自分の部屋では、海風の爲めに、蠟燭をともして置くことが出來なかつた。が、その幅の廣い大きな窓の――マルティニークの硝子無しの何處の窓もさうのやうに、固よりのこと、窓枠の無い窓の――鎧戸を閉めようといふ念は浮かばなかつた。――微風が餘りに氣持ち宜いのであつた。人の心をより暖かならしめ、また人をして滿足の念に充たしめ――人生は全くの歡樂だと信ぜんとする熱心に充たしめる、生氣を與へて吳れる或る物に充ちて居るやうに思はれた。同じくまた、自分は催眠的だと思つた――この純粹な、乾いた、暖かい風を。そして、窓といふ窓悉く開け放つて――南半球の十字星が自分の枕の下から

見られ――そして海風が床の上を流れ――そして寄せてはかへす浪の騒々しい囁きつぶやきが耳にきこえるのを味ひながら――夜横になつて、そして、黒砂のその濱邊へ白く砕けるあの青玉(サファイア)の奇異な海の夢を見るのに優さる人生の愉快はあり得まいと自分は考へた。

五

グランド　アンスは、國道の込入つた紆曲によつてすら二十哩に足らぬ距離の處に、サン　ピエールの殆ど反對の處に在ることを思ふと、兩地の自然的狀態の差違は頗る顯著なものがある。サン　ピエールでは誰れも日の昇るのを見ぬ。町の直ぐ後ろの山々が、東海岸は光と熱とに溢れて居るずつと後まで、その屋根を長く陰らして居るからである。グランド　アンスでは、之に反して、西海岸の住民を歡ばせるあの素晴らしい日沒を全然眼にすることが出來ぬ。そして西印度での日の短い時節中には、グランド　アンスは四時半には早――即ち、橙黄色の光が、海からサン　ピエールの街路を燃え立たせなくなつてしまふ殆ど一時間前に――全く暗黑に包まれる。ペレ山が、その上に載つて居る、あの大山脈が東の谷々からの斜な光線を總て遮ぎるからである。そしてサン　ピエールでは皆早く起

きはするが、グランド　アンスではなほ早く――太陽が大西洋の縁から現はれぬ前に――起きる。四時半頃には、家々の戸は開かれつつあり、珈琲の支度は出來て居る。サン　ピエールでは、太陽が一番早く昇る時節でも、七時または、七時半まで海浴を樂むことが出來る。それは小山の影が、まだ入江へずつと射して居るからである。――ところが、海浴者はグランド　アンスの黒い濱邊を六時までには立ち去る。一度太陽が顔を出すと、眼へ眞直ぐに來る光は眩しい程になるからである。それからまた、サン　ピエールでは、少くとも一年の大部分、殆ど二十四時間毎に一寸の間、雨が降る。グランド　アンスでは降り方がもつと程合て、また度數も少い。サン　ピエールの大氣はいつも多少水蒸氣を含んで居り、大抵は身體を弱らす暑さが烈しくて、努力を不快ならしめる。グランド　アンスでは、かなり運動をしても、暖風が皮膚を比較的に乾燥ならしめる。サン　ピエールでは怒濤を見ることが甚だ稀てあるが、グランド　アンスではそれを見ない方が遙かに稀である。……習慣に關して珍らしい事實は、素晴らしい立派な濱邊があり、見事な大波があつて、サン　ピエールの深い靜かな海と、石ころの荒い岸とに慣れて居る者には、兩方とも如何にも心を唆るものがあるのに、町の前て水浴しようと思ふ白人クリーオールは多くは無い。クリーオールは實際に浴場として海よりも、川を擇ぶ。そして海浴をしたいと思ふ時は、

後て淡水て洗へるやうに、何處かの川口へ行く爲めに、幾基米と岡を登つたり下つたりして歩いて行く。海の鹽が皮膚に及ぼす效果はブートン ショウ（我々の所謂『汗疣（ブリクリヒート）』と呼ぶもの）を出かすと曰ふ。自分にそんな二重浴の經驗を有たせに、或る朝ロランの川口まて友人が自分をずつと連れて行つた。が、その生暖の海を出た後、その川へ飛び込んだのは恐ろしかつた——氷のやうな刺戟を感じて、もう二度と川浴びをしたいとは思はなくなつた——と自白せざるを得ぬ。身體について居る海水を干るにまかすのを自分が好きなのは、奇矯だと考へられた。

六

この海岸到る處、大洋は絶えず貿易風の吹くが爲めに動搖して、決して休まぬ——決してその唸りを鎮めぬ、と云つてよい。グランド アンスの街路に居てさへ、微風の吹く天氣の日には、人に聞こえるやうには、生得の調子よりも聲を高めなければならぬ。その上に、白波が、ポアント ドゥ ロシエとポアント ドゥ セギナウとの間を、長さ一哩以上の列を爲してやつて來て、一波一波が落雷の音を擧げる。海での旅は出來はせぬ。大き

な船は總てみなこの危險な海岸の餘程の沖を行く。殆ど何等の漁獵も無い。そして此處の海は魚が密集して居るけれども、グランド　アンスでは新鮮な魚は稀らしい贅澤品てある。サン　ピエールとの交通は主として高さ二千呎の山脈を紆出して居る國道に賴つててある。そして商品の大部分はこの一番の町から年の若い荷運び女の頭の上て運送される。道の嶮しさは直ぐと馱馬を死なせ、どんな强健な騾馬をも廢物にしてしまふ。一つ時、グランド　アンスの或る大きな地所の支配人が、サン　ピエールへ、五頭の騾馬が牽く鐵製の荷車て砂糖を送る實驗を試みた。が、この動物はその仕事に堪へ得なかつた。ココアは荷運び女てサン　ピエールへ運ぶことが出來るが、砂糖とラム酒とは海に賴らなければならぬ。それが出來なければ送らぬよりほか無い。そして此の二品を船積する冒險と困難とが北海岸及び東海岸全體の繁榮に痛ましい障害を與へて居る。長びく荒天の魔力の間、その生産品を市場へ送ることが出來ないが爲めに、實際にこれ迄破産をした栽培者が幾人もある。鐵道が提案されまた設計されて居る。今よりもつと繁榮な時代に、それが建設せられて、この島の大西洋側全部を發展せしめ、知られぬ村落を富裕な市邑に變更せしめる結果を齎すやうになるかも知れぬ。

砂糖は船積が甚だ困難てある。ラム酒とタフィアとは其取扱ひが砂糖よりも冒險が少い。

グランド アンスからサン ピエールへのタフィアの船積は見て居て實に氣を昂奮せしむるものがある。

小さな船が非常な用心をして海岸へ近づいて、入江の中で岸打つ波から百碼許りの處に投錨する。此處で『ピローグ』と稱する船であるが、合衆國でピローグ〔刳船〕と呼ぶものとは全く違ふ。船身は細長く、帆柱は二本で、甲板は無い。普通は乘組は五人で、タフィアの樽三十は積める。そのピローグ乘組の一人が唇へ大きな貝を當てて、小山の間の上の方遠くへ、浪の音を抽んでて、きこえる非常に軟らか味のある深い音を吹く。その貝は、重さ七八斤の螺旋形の大貝で――渦卷のやうに卷いて居て、端の處が襞になつて扇形に開いて居り、内側は淡紅の眞珠色をした――煖爐棚裝飾として亞米利加で賣つて居るやうなあんな――ラムビの貝である。此處では、その背の上へその眞珠母色の家を脊負つて匐ひ廻はつて居るラムビを屢〻見ることが出來る。黃ばんだ背と薔薇色の腹をした巨大な海蝸牛で、大きな角があり、その兩方の角のどちらにも尖に眼を――金色の虹彩のある非常に美しい眼を――有つて居る。この動物は普通の食品となつて居る。が、その厚い白い肉は殆ど軟骨のやうに質が緻密だから、料理する前に充分に搗き碎かなければならぬ。

註　イ　バット　リ　コム　ラムビ——「あいつはラムビのやうにあいつをなぐりました」——といふ言葉は、毆打や打撲の事件にクリーオールの法廷で證人が證言する時能く聞く言葉である。此文句が實に眼覩るごとき巧みな言ひ現はしであることを知るにはラムビの搗き碎いたのを見てからでなければならぬ。

ラムビ貝を吹く音を聞くと、荷車が、騾馬の横に走りながら有色の若い男が伴なうて、濱邊へ下りて來る。荷車一つ一つが一定數のタフィア樽を卸す。そして同時に、その若い男は素裸になる。いづれもすらりとした、好い體格て、概して立派な筋肉を有つて居る。銘々一樽を取つて、前へ、岸打つ波の中へ推し進み、それから——前へその樽を推し遣りながら——ピローグへと泳ぎ出す。自分は泳ぎ手が一時に一樽以上運ばうとするのを見たことが無い。が、三樽も——一樽の頭をつぎのの尻へ附けて、一線に推し遣つて——取扱ふ熟練家があるといふことてある。一樽若しくは一桶でも、それを取扱ふには實際餘程の手練と實習とを要する。泳ぎ手は前進する時——浪が碎ける度每に、樽にその中を潜らせて、續け樣に全力を以て前へ推しやることが出來るやうに——出來るだけその擔任の荷物に身を近く置いて居る。若し、碎ける波の中に居る間に、樽が一たび手の屆かぬ遠くへ滑り出れば、その樽は彼の敵となるので、その傍へ寄らぬやうに注意をしなければならぬ、——浪がそれを彼へ打ちつければ、或は彼の上へ轉がせば、彼は重傷を蒙るかも知れぬか

らである。が、熟練家は櫓を見棄てることは滅多に無い。非常に有利な狀態の時でも、碎けぬ浪の處まで達するまでに人間も櫓も共に三十度は姿を見せぬことがある。それから後の進行は困難ては無い。船の者が綱をピローグから下ろす。それをその櫓の下へ泳ぎ手が通す。そして船の中へ引き上げる。

……かういふ男達は岸打つ波を泳ぎ切る不思議な熟練家てある。――彼等は非常に荒れて居る海へ、浪が此處の入江の獨得の構造の爲めに異常に脹れて、三十呎も四十呎もの高さに捲いて來る時、ただの慰みに遠くまて泳ぎ出ることがある。時折、大うねりに登らうとする迅速な推進力て、それが身の下を通る時、その向うの波凹へ飛び込まないうちに、泳ぎ手が宙に浮いて居るやうに思はれることがある。泳ぎの一等上手なのは、體重百二十斤以上はあり得ぬ年の若いカブル〔白人と黑人との混血兒たるムラットと黑人との混血兒〕てある。グランド　アンスの人間て身體が重く出來て居るものは少い。荷揚場て、多忙な午後なら何時ても、その黑い兩腕を殆どせい一パイ擴げて重い櫓を持ち上げて居るのを見ることが出來る。あのサン　ピエールの埠頭人足とは、身長に於ても筋肉に於ても比べ物にはならぬ。

……グランド　アンス全部落に、その所有の舟は一艘しか無い、――海が絶えず荒いのに基づく事實である。小さな帆柱と帆があり、三人しか乘れぬ。海がいくらかいつもほど

には荒れてゐない時、有色の連中が漁獵の遠出にそれを取り出す。これはいつも頗る面白い。一群の男が濱邊へ集まる。そして本職の泳ぎ手が手傳つてその小舟を碎ける波の向うまで持つて行つて遣る。その船が幾時間か姿を隠した後で歸つて來ると、誰れも彼れもそれを迎へに村から走り出る。年若い有色の女共はその外衣を臀のあたりまで捲りあげて、船を迎へに水の中へ歩いて出る。斯んな場合にはあらゆる色の手足を見せる。それには美しい様子が――藝術家の鉛筆を誘ふあの野趣のある美はしさが――無いても無い。下女(ボンヌ)といふ下女すべて、家婦といふ家婦すべて、その魚を買ふ最初の機會を得ようとして爭ふ。――若い女の子や子供は、みんな『ラレ　ボア・カノー！』と叫んで、嬉しさに水中で踊る。……それから船が浪の中を曳かれて砂の上へ引き上げられると、推したり叫んだり喚いたりが癇に障るやうになり耳を聾するやうになる。漁夫共も辛抱しきれ無くなつて非道い事を言ふ。だが、この一般の叫喚と押し合ひとブーエッソン・ウーウージユ、鯛(ドラド)、飛魚(チラン)（腹が銀色の、蜻蛉の翅のやうに透明な鰭を有つた、背の紫色の美しい飛魚(フライイング・フイッシユ)）への猛烈な値付(ねづけ)とで、誰れもそれを氣に留めもせぬ。若い鮫に對してすら――これはクリーオール風に料理すると非常に美味な食べ物になる――大した値付をする。一度一度の漁の遠出が村に取つて記念すべき事件になるぐらゐて、漁夫は滅多に險を冒して出ることをせぬ。

サン ピエールの漁夫はこの入江に近寄ることは殆ど全く無いが、その數哩向うの處で、殆どポアント ド ロシエとロッシユ ア ブルガウの前で、中々の漁獵をする。其處で一番上等の飛魚が捕れる――そして食べられる動物のほかに、いろんな奇妙な物が屢々網で引き上げられる。殆ど箱のやうな恰好をして居て、その蓋がその顎の異常な構造で出來て居る函魚（コツフル・フイツシユ）だとか、――骨の無い圓い軀をしてゐて、丁度葡萄酒の滓（おり）のやうな分泌液を奇妙な小胞で分泌するバリーク・ドゥ・ブン（『葡萄酒樽（ワイン・カスク）』）だとか、――ファベル鉛筆ほども太さは無いがその倍以上の長さの『針魚』（エグィユ・ドゥ・メール）だとか、――巨大な烏賊や並外づれて大きな鰻だとか、――いふ怪物が捕れるのである。この海岸の沖で捕獲した或る海鰻鱺（あなご）は長さ二十呎餘り、重さ二百五十斤あつた、――正銘の海蛇である。……が、グランド アンスの淡水に棲んで居る物も驚くべきものがある。實際計つて見て長さ五十サンチームの川蝦を自分は見たことがあるが、それは異常なものとは思はれてゐなかつた。尾から爪と角の尖まで二呎よりずつと越すのが澤山あるといふ。さういふのは鐵の黑味を有つた色をしてゐて、端が鋸齒になつて內側に寄り集つて居る尖端のある恐ろしい鋏を有つて居る。それはざら蟹の武器のやうに壓し潰しはせぬが、肉を切つて小さな醜い傷を殘す。初め見た時には、この地方の蝦を見慣れぬ人には、東海岸の普通の

淡水蝦を見て居るのて、一種巨大なざら蟹を見て居るのては無いとは殆ど信じられぬ。茹ててからその頭、尾、脚、甲、悉く取り除いた後ても、その曲つた胴がなほ大きなポークソーセージの大いさと重さを有つて居る。

かういふ動物は提燈の光て騙して捕る。大きな漂石に堅く括つて川へ沈めて置く幾片かのマニォクの根がその唯一の餌てある――蝦は暗い夜ならばいつもそれを食ひに群れ集まる。そして抄ひ網て抄はれて蔽ひのある籠の中へ落とされる。

七

此の地方の若い荷運び女の、島の他の側へ行く途中なのを観察しただけて、グランドアンスの人達は斯んなてあらうと想つて居る人は、その小さな町へ着いた時、その人民が支那人町の人民のやうに黄色なのを見るてあらうと期待するかも知れぬ。ところが、その混合して居る要素は到る處に見ることが出來はするけれども、その優勢な要素は遙かによい黒いのてある。て自分は乾度餘程數が多からうと思つたあの明かるい冴えた皮膚が稀なのに初めて驚いた。美しい可愛い子供て――殊に著しいのは或る雙兒の姉妹と、八歳から十

歳までの學校通ひの女の子五六人ぐらゐてあつたが――自分がグランド アンスの成人の荷運び女に認めて居たその特徴を現はして居たものが少々ありはした。が、この町そのもののの中ではこのより明かるい要素は少數てある。全部落の優勢な人種要素は確に有色のものてある（グランド アンスは五十年許り前のその有色人種（ナンム・ドウ・クールール）の叛亂の故を以てして記念されさへもするのてある）――だが有色な人間はこの町に集中して居るのでは無い。むしろこの首府（シエフ・リウ）を取り巻いて居る谷や高地のものである。荷運び女は多數は田舍娘なので、村に住んで居る娘てさへも、旅へ出て行く時か旅から歸つて來る時かて無ければ、街路て見ることは滅多に無いことを自分は知つた。が然し、この人種の典型（タイプ）を研究しようと思ふ美術家は、そんな荷運び女はみんな朝晩一定の時刻にそこを通るから、リギエール ファレーズ川の橋の上て有利に一日を過ごすことが出來よう。

だが自分の友人の麵麭屋が「美しいむすめ（ラ・ベル・ジュホッス）」と呼んだものを觀察するに此上無しの一番好い場合は――主教が山越えしてグランド アンスへ馬車を驅つて來り、町中の者が晴衣て出て來、教會の鐘がタムタムのやうに叩かれ、凱旋門が（見るも嫌な拵けた！）拙劣極まる「ヸーヴ モンセニユール」と歡迎の文字を揭げて大道を跨ぐ――堅信禮の日てある。その場合に、堅信禮を施される若い女の子の――いづれも白い服をまとひ、白い面紗（ヹール）をか

むり、白い繻子の上靴を穿いた――長い行列は、數の上の驚異である。その上にまた――少くとも外國人には――倫理上の驚異である。それは、異常な貧窮と、高價な拘禮の我れと我が身に課した義務との、苦鬪を示すからである。

白人の子供は一人もこの行列に姿を見せはせぬ。約七千の生靈を有する此市邑の住民のうちで白人の家族は五六も無い。そして彼等はその宗教的訓練及び教育にその子息や息女をサン　ピエール　かモルン　ルージュかへ送る。ところが有色な子供達のうちで、堅信禮の服裝をして居ると非常に可愛らしい觀を呈するのが多い。――諸君はその一――が、毎朝珈琲一パイ持つて來て呉れるその小さな下女であり、今一人のが栽培地の宰領（コンマンドユール）（支配人の輔佐）の息女――多分二度と靴を穿くことの無い、褐色の下袴を着けた女の子――である、とは容易に認めることは出來なからう。そしてその白い靴とその白い面紗は、多くは貧乏な兩親と「内（みうち）の者との――蛇が澤山に居る甘蔗畠で彎刀と鋤とを持つて仕事する父と兄と母と――一箇月數フラン儲けに毎日サン　ピエールへ跣足で歩いて行つては歸つて來る姉妹との――非常に苦しい肉體的勞働と克己とに依つて初めて得られたものである

……この行列を見て居るうちに、その年若い受禮者の顏と姿とに、或る優逸な型と色合とを稍〻見分け得られるやうな氣がしたので、自分の印象を正しいと考へるかどうかと、

横に居た老栽培者に尋ねて見た。

彼はかう答へた。『少しはさうです。此處では人目を惹く肉體的な型の方へと進む傾向が確にありますが、その傾向自らが、あなたが想像されるよりも安定さの少いものです。最近の二十年に、私が記憶して居る間にも、變つて來て居ります。この島の方々で、特殊な型が一代で出て來てまた失くなります。人種醱酵といつたやうなものが行はれてゐて、それが少しでも長い年月に亙る、積極的な一定の結果を生じさせないのです。或る某々の要素が或る某々の部落で引き續いて優勢を占めては居りますが、その特殊の特徴が不可解的に現はれては消えます。正確などんな分類も、特に外國の方で、出來るものかどうか私は疑ひます。あなたの眼は、赤色人の型、黄色人の型、褐色人の型に就いて一般的な概念をあなたに與へはしませうが、田舍地方で暮らすことに慣れて居るクリーオール人の、もつと經驗に富んで居る眼には、混血人種の一人一人がそれ獨得の或る特別な色を有つて居るやうに見えます。例へば、所謂カブル型、一番立派な體格の見本を見せて呉れるあのカブル型、を取つて考へて御覽なさい——あなた方外國人は、この變種が一般に赤い色味を有つて居るといふ印象をお受けになる。が、異つた一人一人にその色合の相違があることにお氣が附かれんので、その相違は觀察するのに黄か褐色かの濃淡の差違を觀察するより

もむつかしいのです。て、私には、カブルは男女とも一人一人個人的な色を有つてゐます。マルティニーク中て、——父と母とが同じいのて無くて——その色合が正しく同一なといふ混血兒は二人とは無いと信じて居ります』

八

自分は自分がこれまて訪ねた土地のうちてグランド　アンスは一番眠氣を催す土地てあると思つた。世界中て一番眠氣を催す土地の一つてはないか知らと思ふ。サン　ピエールのクリーオールをも、この村ての滯在四十八時間以内に、不自然な鳶色に日焦させるあの風がまた一種特別な催眠的效力を有つて居る。別に何もする仕事が無いのて、顔へ微風を受けて徒に坐らうとする刹那に睡氣が襲ふ。だから、そんな時間をこしらへることの出來る人は誰れも午後長い間の坐睡をする。そして閑さへあれば、時刻構はず、折々、短い假寢をする。にも拘らず、東海岸の暑さは、サン　ピエールの暑さのやうに、元氣を衰へさせはせぬ。日の光を浴びてかなりな運動をしても、それて大して身體を痛めはせぬ。狩獵の遠出、川狩の會、岸打つ浪ての水浴、附近の栽培地への訪問、これが唯一の娛樂てある。

だがグランド　アンスでの生活を非常に愉快ならしめるのにはこれだけて足りるのてある。自分だけの經驗て一番面白かつたのは、この村の近くの小山の上にある舊植民地の一地所て、招待されて過ごした一日のそれてある。

　クリーオールの家の、それが市内のてあらうが田舍のてあらうが、その内部の妙趣を記述するのは容易ては無い。其處には驚くべき植物ときらきら光る山水（やまみづ）の噴水とがある陰深い涼しい内庭か、或は祖先來の樹木が生えて居る芝生かがあり、――その氣樂な兄弟のやうな態度が直に家庭に在るが如き思あらしめる主人の嬉しい歡迎、――昔風に、接吻して貰ひに銘々褐色の天鵞絨のやうな頰を差し出す、挨拶にやつて來る子供達、――棕櫚や斑枝花（シーバ）の下（した）て、冷たい飲料を口にしながら、形式離れての閒談のローマンス、――客を悦ばせよう、閑靜な幸福のその大氣のうちに客を包み込まう、とするみんなの眼に見えての熱心さ――此等が結合して一生決して忘れられぬ記憶を作る。そして或は此等總てをば、或る絶好な場所で、――百と色を異にした綠の傾斜地が――遙かに青と眞珠色との幽かな影に蜿蜒として居る山々を――樹木なす葦と竹との帳（とばり）の後ろに海の方指して歌うて居る幾つもの川を――そして、恐らくは、地平線に、その濛氣の頸巻の下に、菫色の夢を見て居るペレ山を、――そして、それ等總てを取り卷いて、日の際まで屆いて居る瑠璃なす漫々た

る静かな大洋を——見はるかす或る火山の絶頂で、味はふことも出來よう。

……主人は外國人に興味あらうと思ふ一切のものを自分に見せて說明した。自分にカルージュの巢を持つて來た。カルージュといふは、ハンモックのやうに、バナナの葉の下へその家を吊るす鳥である。——その島の働き手の一人が殺したばかりの小さなフエル・ドゥ・ランスを自分に見せた。それから、サン ピエールの家の屋根に棲む蜥蜴のやうに綠では無くて、色合が變つて行く、美しい褐色がかつた唐金色の野蜥蜴（クリーオール語でのザノリ テ）を。それから、殼を破ると直ぐと小蜥蜴が生きて走り出るであらう楕圓形の柔らかい小さなものだが、そのザノリの卵を。それから、成長しきると赤か或は殆ど黑かで、若い時には靑味がかつた銀色で——大きさは袋蜘蛛ほどは無いが、等しく毛澤山で又有毒な、二種類のマトゥトゥ・フアレーズ即ち絶壁の蜘蛛を、それから、非常に短い爪を一本と非常に長い爪を一本と有つてゐて、罪を悔いて己が胸を打つて、『わが罪により、我が罪により、我が最も深き罪により』といふ加特力（カトリック）の懺悔の聖禮の語を述べて居るといふ考を思ひ浮かばせたやうに、その長い方のをその胸に當てて褶んで持つて居るクラブセ マ フオート（『わが罪により蟹（スルーマイフオルトクラブ）』）を。……實際、それへ自分の注意が惹かれた珍妙な鳥、珍妙な蟲、珍妙な爬蟲、珍妙な植物の半分も想ひ出すことが出來ぬ。が、植物の

ことを云へば、ゼーブ・モアン・ミゼが澤山あるのに感銘させられた。それは西海岸では稀にしか見たことの無い小さな鋭感植物である。グランド　アンスの岡の側面には、その傾斜にその植物獨得の綠がかつた褐色を與へて居るほどの程度にはびこつて居る。長さは僅一吋半乃至二吋であるが、普通の或る種の羊齒の形を想ひ出させる、澤山に分岐した葉を有つて居る。それが殆ど平たく地面に附いて居る。その葉が、一寸でも觸ると、中心の莖から上の方へ一緒に縮まつて、その植物は殆ど眼に見えなくなつてしまふ。——如何にも生きて居るやうに思へるので、葉一枚捲つても殺人の罪を犯したやうな氣がする。これは、ずるを極めたり、使に行つて必要以上に手間取つたりするいたづら子に、鞭て打たれるに値するかしないか、言うて呉れると想はれて居るので、ゼブ・モアン・ミゼ卽ち『遊んだか木』と呼ばれて居る。惡るい事をしたと思ふ子はこの木に觸つて、『エス　モアン　アミゼ　モアン？』（私しや遊んでたか）と尋ねる。そしてその木が直ぐと葉を閉ぢれば『さうです。遊んでました！』を意味する。固よりの事、この木の葉はいつも必らず閉ぢる。が、有色の子供は總て、少くともグランド　アンスでは、仕事するより遊ぶのが餘程好きてあるから、此の木はいつも必らず本當の事をきかせるのだと自分は思ふ。

　その親切な老栽培者はまたその地所へ自分を案內した。砂糖製造場の中を連れあるいて、

もつと近時の發明品のうちに、殆ど二世紀前に彼の器用なそして怖ろしい教父ラバが工夫したもので、砂糖製造に於けるあらゆる近代の改良あるに拘らず今なほ充分に役に立つ或る機械を見せた。――ラム酒製造場即ち蒸溜所の中を連れあるいて、非常に味の好いチンの香がしてそれに稍々似た味のする無色の或るラム酒を味はせた。――そして最後に――颶風中避難の場所として建てた――カース　ア　ヴン即ち『風家』へ自分を連れて行つた。颶風は稀である、この世紀には、前世紀中にあつたよりも、遙かにより稀である。然し此島のうちでも此の邊はそんな天降り物に殊に曝露されて居るので、昔の栽培地は殆ど殘らず一軒か二軒のカース　ア　ヴンを有つて居たものである。土地の水平以下に、自然か人工かの窪みの中にいつも建て、何呎と厚い岩の壁があり、非常に丈夫な扉を設け、窓は一つも造らぬのであつた。主人は自分に、その記憶に殘つて居る或る颶風中、或るカース　ア　ヴンでのその一家族の經驗に就いて語つた。丈夫な綱を用ひて內側でその扉を堅く縛る必要を認めたのだといふ。ところがその扉を支へて居るといふだけの仕事に力の强い男十二人の全身の力を込めざるを得ざらしめた。その恐ろしい風の壓力で――扉の横側のやうに膨らんで――外づれやうとする。その板がさはぐるみのやうに撓まぬ木材で出來てゐなかつたなら、細片に吹きちぎられたことであらうといふ。

自分は長い間、栽培地で使ふ鼓を手に取つて眺め、また、その娯みが餘りに屢〻ヴーム（全般の喧嘩）かグーマージュ（重大な闘爭）に終はる、村でのお祭のカレインダで興奮して居る時で無く、もつと好都合な事情の下にそれを奏するのを見たいものと願つてゐたのだつた。――それで自分がこの希望をその栽培者に述べると、彼はその宰領の、この部落きつての最も上手な鼓打ちに使を遣つて、その樂器を携帶して來るやうに命じた。自分は斯くして必要な觀察を爲すことも出來、その上にその鼓打ちが奏樂して居る所を早取りに寫眞することも出來たのであつた。

昔の亞弗利加舞踏のカレインダとベレ（これには單調な歌ひ方の卽興の歌が伴なふ）とは、この島の殆ど何處の栽培地でもこの鼓の音に合はせて日曜日に踊る。尤もこの鼓は――タムブー！といふ語は驚愕若しくは懊惱のあらゆる尋常な場合に口にする呪咀で――此地の者は、それに依つて誓ふほど重きをそれに置いて居る樂器である。だがその樂器は、四つ割入りの樽（クヮータ・バレル）、卽ちクヲータ――方言で『カ』――から造るので、タムブーと呼ぶと同じく屢〻『カ』とも呼ぶ。樽の兩端を外づしてしまつて、二た箍のまはりを充分に包みめぐらして、一方の口を蔽うて濡れ革を貼る。そしてそれを乾かすと張りつめたその皮がなほ一層張つて來る。カの他の端はいつも明け放してある。その皮の表面を斜に、絃を一本

堅く張り渡して、それへ互に一吋許りの間隔を置いて、非常に短い細い竹片か切つた羽毛の莖かを着ける。これがその音調に一種の振動を與へるのである。

教父ラバ時代には黑人の鼓はこれとは少し異つた形をして居つた。當時は鼓に二種類あつて——一つは大きなタムタム一つは小さなので、それを一緒に打つのであつた。兩方とも木製の圓筒か、または中が空ろな木の幹を切つたのかの一方の端へ、皮を堅く張つたものであつた。大きい方は直徑十五吋乃至十六吋、長さ三呎乃至四呎で、小さい方の「バブーラ」[註]と呼ぶのは、長さは同じであつたが、直徑は僅八九吋であつた。教父ラバはまた、その西印度旅行中、當時のマルティニーク奴隷の間に頗るはやつて居た別な樂器のことに——葫蘆即ちクーイを半分に斷つたのへ何かの皮を蔽うて出來て居る「ギイタアのやうなもの」のことに——就いて語つて居る。それは絹糸かてぐすかの絃が四本あつて、竿は甚だ長いものであつた。この亞弗利加樂器の傳統は近代の『バンザ』（バンザ　ネグ　ギネ

註　モロー　ドゥ　サン・メリーはサン　ドミングの黑人の鼓のことを斯う書いて居る。『かういふ太鼓のうち、長さの短い方は、時々非常に太いバムブウ（竹）で出來て居るが爲めに、バムブーラと呼んで居る』（『サン　ドミングの佛蘭西領區記』第一卷四四頁）

ー）となつて殘存して居るといふ。

熟練な鼓手は（ベル　タムブーエ）は腰まで衣物を脱いてそのカへ跨つて、――その振動する絃が水平の位置を占めるやうに注意しながら――同時に兩手の指尖で打つ。時折、音色に變化を與へるやうに、その踝足の踵をその鼓の皮へ或は輕く或は强く推す。これを鼓に『踵を與へる』――ベール　イ　タロン――と呼ぶ。その間男の子が一人、カタカタといふ涸れた伴奏をするやうに、鼓の皮が張つて無い端を杖で打ちつづける。鼓そのものの音は、上手に打てば、――一種特異な大浪の上がり下がりがある、複雜な二重のとどろきがあつて――舞踏の興奮を起こしまた支配する盛んな力を有つて居る。クリーオールの擬音のブリブ・ブリブ・ブリブ・ブリブでは充分にそのとどろきを現はさぬ。――といふのは、その一つ一つのブリブ若しくはブリブは、口の聲では眞似が出來ぬほど急速に指彈きする一聯の音から實際は成つて居るからである。カを打つ音は驚く許り遠い處まできこえる。そして老練な鼓手は少しも疲勞を見せずに、少くとも己が打ち出す音の量を減らさずに、一時に幾時間と續けて打つことが屢〻ある。

打ち方は幾通りも、――他の人には、容易にその區別がつかぬが、此處いらの有色人は誰れも能く知つて居る異つた曲調が――あつて、大競技が時折　有名なタムブーエ間に行

はれる。

鼓を打つて居る時にその肖像を自分が撮影したそのコムマンデが、一度そんな競技へ出たことを自分に話した。相手は隣の町のマリゴーから來た鼓手であつたといふ。……『アイ、アイ、ヤイ！モン　シエ！――イ　フエー　タムブー・ア　バレ！』とそのコムマンデは己が敵手の打振りを述べて言つた。『旦那さん、そいつはその鼓に全く物を言はせました！私しや、屹度敗けるんだと思ひました。私しやその間ぢゆう震るへて居りました――アイ、ヤイ・ヤイ！それからそいつはその鼓を離れました。私しが今度はそれに乘りました。一寸考へました。それから「蜥蜴の川」の曲を打ちました――メイ、モン　シエ、ヨン　ラリギイ・レザ　トゥット　ピ！實にうまい蜥蜴の川でありました、嗚呼！實に申し分無しの純無垢なものでありました！私しやその力に踵を與へました。私しやその力をいぢめました、――それを氣ちがひにしました、――それを狂はせました、――それに物言はせました、――私しが勝ちました！』

或る舞踏をやつて居る間に、はやしのやうなものがその音樂に伴なふ。七八秒間を置いては口に發する、長い好い調子の叫び聲て、鼓のとどろきの或る特殊な拍子に完全に拍子が合ふものである。それは何か或る唄の疊句かも知れぬ、或はただの卽興の文句かも知れ

ぬ。

『オー！ヨイ・ヨイ！』

(此の間鼓　とどろき)

『オー！ミシエ・ア！』

(此の間鼓のとどろき)

『イ　ベル　タムブーエ！』

此の間鼓のとどろき)

『アイ、ヤ、ヤイ！』

(此の間鼓のとどろき)

『ジョリ　タムブーエ！』

(此の間鼓のとどろき)

『ショツフエ　タムブー・ア』

(此の間鼓のとどろき)

『ゼネ　タムブー・ア！』

此の間鼓のとどろき)

『クラゼ　タムブー・ア！』　等、等、等。

……叫び手(クリエール)、即ち囃し手は、兼ねてまたその舞踏の指揮者である。カレインダは男子だけ踊るもので、みんな腰まで衣物を脱いて、打ち合ふ眞似をして重い棒を振り廻はす。ところが時々――特に、血がタフィアの爲めに熱し過ぎて來る村中の大集會の折には――その眞似事の闘爭が眞物(ほんもの)になつて、彎刀さへ持ち出されることがある。

が、古昔は、その爲めに一種の舞踏にベレ(佛語のベル　エアから來た)といふ名を與ふるに至つたその即興文句は、自然の單純な情緒を以てうたつた、綺のやうな比喩が澤山ある、中々立派な無韻の詩のことが毎度あつた。自分はフォール・ドゥ・フランス近くの普通の野働きの男が口にするのを書き取つたものの一部分を引用する。その即興詩の形式を示す爲めに、先づクリーオール語での數節を掲げよう。これを歌ふ時は一行一行の終りに舞踊の休止があるのてある。

トゥツト　フオア　ランムー　ギニ　ラカッス　モアン
ブー　パレ　モアン、モアン　カ　レポンヌ。
『ケ　モアン　デジャ　プラセ』
モアン　カ　クリエ、『セクー!レ　ヂアジナージユ!』

モアン　カ　クリエ、『セクー！ラ　ガアド　ロワヤール！』
モアン　カ　クリエ、『セクー！ラ　ジャンダムリー！』
ランムー　プーアン　ヨン　ボアニャ　プー　ボアニャーデ　モアン！』

この作の一番好い部分は、これは中々長いが、つぎのやうに飜譯されよう。

穢しい男が　戀語らひに、
小屋へ來るたび　私の返事、
『わたしの心は　きまつてゐます』
私しや聲立て、『助けて、誰れか！』
私しや聲立て、『衛兵さん、來てよ！』
私しや聲立て、『巡査さん、來てよ！
穢しい男が　殺そとします。
斯していのちを　とらうとどして
そんなつめたい　心の筈か！』
眞實如何にと　私へききに、
穢しい男を　縛りに此處へ、

巡査のかしらが　私へ來れば、——
いとしその人　縛りに衛兵が
來るを見る時　わたしは衛兵の
足の眞下に　身を投げ伏せて
慈悲と情を　お願ひします。
『あの人赦して　代りにわたし！』
やさし心の　私がどして
縛られるのを　見て居られうか！
いえ、いえ、私は　死ぬるがましよ！
枕並べて　互が胸を
語り合はせた　忘られやうか？……』等、等。

主人に別を告げた時には星がみんな出て居た。——彼は提燈を携へ且つその山路を蛇によく氣を附けるやうにと黒人下男を一人つけて吳れた。

九

……たしかにサン　ピエールの町は、自分が歸つて來た時、物の影が一番長くなつて居り、海と空とが藤色に變はりつつあつたがその時見たよりも、もつと奇妙に美はしく眺め得られた事はそれまでになかつたらう。絶大な橙黄色の日沒を背にして、棕櫚の頭は震へて居り、帆柱はゆるやかに振れて居つた――でも、その光景の美しさは自分を感動させはしなかつた。入江の深い平らなきらきらした水が、自分に初めて、死んで居る水のやうに思はれた、――これが、泡の稻妻と不斷の雷鳴とに充ちて居る、自分がその横に住まつてゐたあの生きて居る潮海の一部分になれるのか知らと怪しんで居る自分を見出した。自分は身のまはりの空氣が――重いそして著いそして仄かな藥の臭に充ちて居る空氣が――日出づる方より吹き來る風のあの壯大純潔快適な呼吸にいつか接したことがあり得ようかと怪しんだ。そしてあのむき出しの東海岸にある眠氣を誘ふ小さな黑い村――其處には森といふものが無く、船といふものが無く、日沒といふものが無く……て、あるはただその黑い砂の濱邊に永久に唸つて居る大洋のみの、その村――に對して、深い理由の分からぬ、馬鹿らしい哀惜の念を感じた。

歸り來る者

一

初めてマルティニークにその詩的な名『ル・ペイ・デ・ルヴナン』といふを與へた人は、この不思議な島をば、自然の得も言はれぬ魅力が恰も妖女サーシーの愛撫の如くにさ迷ふ人の魂を惑はす『歸り來る者の國』とだけ考へて――幽靈の國とは考へなかつた。〔ルヴナンは再び來る人といふ意のほかに幽靈化物の意もあり〕 だがこの名をどつちに飜譯しても正しさに異はりは無い。幽靈の土地なのである、この驚くべきマルティニークは！殆どどの栽培地にも其處に能く知られて居る靈が――其處の妖怪が――居る。空想が其地で初めてそれを存在せしめたその特殊の地方外では知られて居らぬものもある。――が、一般の歌や物語に出て來て居る――人民全體の想像的生活に屬する――ものもある。殆どあらゆる岬と峰とに、海岸に沿うてのあらゆる村と谷とに、その獨得の民間傳説があり、その特別の口碑がある。栽培地の家の、

人間の力では塞ぐ事の出來ぬ或る窓から惡魔が入つて來て、棺の中から身體を持つて行かれた、ペリネュのトマソーの傳説がある。——百年よりもつと前に埋められた友人を探しに暑い明かるい日に山を登つて行く、馬に乘つた幽靈のデマルシュ傳説がある。——其の持ち主が或る夜或る宴會から不思議に呼び出されて永久に見えなくなつたアビタシオンディョンの傳説がある。——海に永久の不安を呪つたアベ　ピォの傳説がある。——バーバリの海賊に虜になつて賣られて土耳古女皇ヴリデ（シドニー　ダネー氏の『マルティニーク史』にその肖像に相違ないとして載つて居るのを見る事が出來るけれども、そんな人は存在してゐなかたのである）となつたといふエーメ　デリヴリ　ヲヴ　ロバートの傳説がある。こんな話やこれに似寄つた多くの話は、サン　ピエールからフォール・ドゥ・フランスへ行く途中、或はラマンタンからラ　トリニテへ行く途中ででも、或る峰が聳えて居るのが眼に映ずるとか、又は船が近寄る向う側に入江が一つ突然開けて見えるとかして、道伴れのクリーオールにその傳説を思ひ出させると、それを聽くことが出來るのである。

それからまた新規な傳説が今でも製造されつつあるのである。といふのは、白人の移住が止んでから久しきを經て居る斯んな僻遠な植民地では——自分が生まれた故郷の山から出て三四時間の旅をするほか、共處の者は町といふものを一生見ずに同じ谷で生まれて同

じ谷で埋められる程に、そして三リーグと互に隔つてゐない處で人種の特殊な型が出來つつあるほどに、それ程に山の多い國では——一つの反響を峰と火口との四十九哩中へ送るに足るほどの力のあつた事件なり名前なりの記憶は、ともすれば一代のうちにも傳說を創造するのである。恐らくは世界中で、人民の想像力が此處ほど妙に天眞で且つ迷信的なところは何處にもあるまい。實際の事實が此處ほど早く誇張され或は歪められて原の姿が全く認められぬやうにさるゝ處は何處にもあるまい。そしてまた、そんな風にして創造されるどんな傳說でも、その傳說が住處を得るその個々別々の地方で更にまたその形が分化されるのである。そんなやうな或る傳說なり口碑なりを跡どつてその最初の根源へ溯つて見ると、單簡極まつた事實がこの人民の子供的な空想によつて迅速に執り得る變態變形の多種多樣なるに誰れしも吃驚する。

自分は『ミシエ　ボン』といふ異常な物語を聽いて初めてこの方面に努力をして見ようといふ氣になつたのである。傳說に因んだ言葉で、タム　クードヴン　ミシエ　ボン（ボン様の大風の時に）といふ言葉ほど國中に擴まつて居るものは無い。颶風の來る惧れがあると、ミシエ　ボンの大風のやうで無ければ宜いが、と黑人が口にするを聞くことであらう。それから數年前には、何處のクリーオール法廷でも、自分の年齡が言へぬ老年の黑人

證人は、法官に向つて、決して忘れられないミシエ　ボンの大風の時を引き合ひにして、その年齢を知らせようとしたものであつた。

……『タム　クードヴン　ミシエ　ボン、モアン　テ　カ　テテ　アンコ』（私はミシエ　ボンの大風の時には乳呑兒でありました）とか、『タム　クードヴン　ミシエ　ボン、モアン　テ　トッツト　ピティ　マンメイユ――モアン　カ　スーギニ　イ　プーアン　カイ　マンマン　モアン　ポテ　アレ』（私はミシエ　ボンの大風の時には非常に非常に小さな子供でありました――が、母の小屋を吹き飛ばしたことは覺えて居ります）當時の法官はその大風の精確な年月を知つてゐたのである。

が、自分がこの地方民の間でミシエ　ボンに就いて知り得た總ては斯うであつた。ミシエ　ボンは盛んな奴隷所有者でありまた殘酷な主人であつた。甚だ心のよからぬ男であつた。そしてその奴隷を非道い取扱ひをしたので、到頭善なる神（ボン・ディエ）が或る日のこと、大風を送つてミシエ　ボンとミシエ　ボンの家とその家の中のもの一切と吹き飛ばした。それで人も物もどうなつたか、その後耳にしたものが居らぬ。

自分は随分と搜索をやつた後で到頭ムシユー　ボンの眞實の事實を言うて呉れることの

出來る人を見出した。その眞相を語つて具れた人は、サン　ピエールの町で紕育の或る會社の代表者となつて居る人で、またその生れ故鄕のこの島の歷史にクリーオール人が普通有つ以上の興味を有つて居る人で、非常に愉快な老紳士であつた。自分が見つけ出したこの傳說を笑ひはしたが、この傳說は、輕微の相違はあるけれども、マルティニークの殆どあらゆる郡にこれを跡附けることが出來ると言つてきかせて具れた。

かう言ひ續けるのであつた。「ところで、私はその「ミシェ　ボン」の眞實の身の上をお話しが出來ます――それは私の祖父の舊友でありましたし、その私の祖父が私に話して聞かせたのでしたから。

「千八百九年だつたらうと思ひます――必要なら古い書類を調べて精確な年月が申し上げられますが――ボン君はサン　ピエールの稅關の收稅吏でありました。そして私の祖父はグランド　アンスで仕事をして居りました。私の祖父がその委任を受けてゐた船の船長の某といふのが、祖父とこの收稅吏とをその船室へ朝食に招待したのであります。祖父は非常に多忙だつたのでその招待に應ずることが出來ませんでした。――が、ボン君は船長と一緒にその船へ行つたのであります。

……「丁度今日のやうな朝でありました。海は丁度こんなに青く、空も丁度こんなに晴

れて居ました。すると突然に、みなが朝食をやつて居るうちに、風も無いのに海が非道く荒れて來て、雲も出て來るし、颶風の徴候が何處見ても見えるのでした。船長はその錨を犧牲に供せざるを得ませんでした。お客を上陸させる閑なんかありません。リッル・ジッブとトプ・ガラントと帆二つだけ揚げて、ボン君を乘せた儘、外海むけて出ました。すると颶風[註]がやつて來ました。そしてその日から今日に至るまで、その船がどうなつたか、ボン君がどうなつたか、分からぬのであります』

註　颶風として西印度で知られて居るものは幸にも稀である。旋風ほどの力で吹くが、常に必らずしも圓形にでは無い。一つの方角から吹いて來て、幾日も漸次力を強めて、その最大速力と最大破壞力に達する迄吹くこともある。敎父ラバの時のは、城砦の壁を吹き掃つた。千七百六十年のはマルティニーク、セント・ルシア、セント・ヸンセント、バルバドスの四島で二萬二千の人の生命を奪つた。
斯んな天災が近寄る前には、動物はそれが地震前に示すと同じ恐怖の狀を現はす。家畜は一緒に集つて、地踏みして唸る。海鳥は內地へ飛ぶ。家禽は一番手近な、中で隱れて居れる隙穴を探し求める。それから、空がまだ晴れて居る間に、海が荒れ立つて來る。それから暗くなつて來て、その後で風が襲ふ。

『だがボン君はその國人の間に殘して居る評判に値するやうな事を何かしたのか』と自分は尋ねた。

『あゝ！ル　ポーヴル　ギユー　コール！……人間に手荒い言葉一つ口にしたことの無い――内氣な――優しい――當時の昔風な時代にさへ昔風な――親切な老人でありました。……一生一度も奴隷を使つたことはありません！』

二

『ミシエ　ボン』の傳説は、まだもつと珍らしい口碑の――叔父ラバの口碑の――委曲を自分に驚かずに聞かしめる豫備となつたのであつた。……自分は自分の案内者と山の散歩を終へて、アジユーパ・ブイヨン道を通つて、歸る途中であつた。日は沈んでしまつて、西の方に血と赤い夕燒けが殘つて居るだけで、それを背景に山々の半面影像が、何とも云へぬ柔らかい天鵞絨様の黑さになつて居り、星が菫色の空から到る處にちらつき始めつつあつた。不圖自分は近くの或る岡の――それは日の中に自分が竹と木羊齒とバリジエと生えて居る、確に人間の住まへぬ荒地だと見た記憶のあるその岡の――横腹に、迅く動く黄色い光の一點を認めた。自分の案内者も同時にそれに氣がついたのであつた。彼は身に十字を切つて叫んだ。

『モアン　カ　クーエ　セ　ファナール　ペ　ラバット！』（屹度あれは叔父ラバの提燈であります）

『あそこに暮らして居るのかい』と自分は無邪氣に問うた。

『あそこに暮らして？――なあにあなた、あの人は死んでから何百年になります！へえ、あなたはペ　ラバットのことを聞いたことは無いのでありますか？』

『マルティニークのことに就いて書物を一冊書いたあれては無いのかい？』

『さうであります――あの人てあります。……夜歸つて來ると言ひます。母に尋ねて御覽なさい。――母は知つて居ります』……

……自分は歸宅するなり年寄りのテレザに尋ねた。すると『ペ　ラバット』に就いて知つて居る總てを話して吳れた。自分はこの叔父は『ミシエ　ボン』の追憶よりも遙かに廣く擴まつて居る名聲を殘して居ることを――かれの靈は、事實、マルティニークの民間傳説全部のうちて一番感銘的な傳說を創造したのてあることを――知つた。

老テレザは言つた。『あなたが御覽になつたのが本當のペ　ラバットの提燈てあつたかどうか、私には分かりません。この邊の岡には日が暮れてから見える妙な明りが澤山あります。ゾムビの火のもあります。生きて居る人間が提げて居る提燈のもあります。また、

時折木の間を透して洩れて來る微かな明りがやつと見える位に、ずつと高い處のアジューパに燃えて居る火のこともあります。ペ　ラバットの提燈は誰れにも見えるとは限りません。見えるのは不吉なのであります。

『ペ　ラバットといふのは何百年か前に、此處に住まつてゐた僧であります。そして自分が見た事を書物に書きました。奴隷をマルティニークへ輸入したのは此人が初てあります。夜歸つて來るのはその爲めだとみんな思つて居ります。此の土地へ奴隷を設けた罪滅ぼしてあります。

『千八百四十八年より前には、奴隷が廢止になればペ　ラバットの明りはもう見られなくなるだらう、とみんな言つたのてした。ところが私は奴隷が廢止になつた時を能く覺えて居りますが、その後幾度もその明りを見ました。晴れた夜は毎晩モルン　ドランジユを登つて行くのてした。私がサン　ピエールに住んて居た時、窓から能う見えました。ペ　ラバットだといふことは分かるのてあります。人間が歩けぬ場所をその明りは登つて行くのてしたから。が、ノートル　ダーム　ドゥ　ラ　ガルドの像がモルン　ドランジュの上に建てられてからは、もう其處てはその明りは見えぬと人が申します。

『が、何處にても見られます。それが見えるのは幸運てはありません。誰れもそれを見

ることを恐がります。……それて子供がいたづらをしますと、母はその子供に「ミ！モアン　ケ　フエー　ペ　ラバット　ヰニ　ブーアン　ウー――ウイ！」（おまへを取りにペラバットを來さすぞ）と言ひます』……

教父ラバがマルティニークに奴隷を初めて設けたといふことに就いて老テレザが述べた事は、これは研究の要は少しも無い事が分かつて居る。今一人のドミニク宣教師で兼ねて歷史家で、ラバが生まれない前にその書物を――古い佛蘭西語で書いた珍妙な書物を[註]――

註　フレール・プレシュール・ドゥテルトル著『イストアール・デ・ゼネラール・デ・アンティール……アビテ・パール・レ・フランセー』巴里。一六六一――七一年。四折判（繪入）四册本。

書いた教父ドゥテルトルの時に早、奴隷制度は盛んに行はれて居たからである。だが、教父ラバの罪と贖罪とについての一般の信仰は上述の如くであることを見出すには、またその名がいたづら子供を嚇かすのに實際用ひられて居ることを突き留めるには、長い時間を要しはしなかつた。エー！ティ　マンマイユ・ラ、モアン　ケ　フエー　ペ　ラバット　ヰニ　ブーアン　ウー！――これは、おとなしい子供はみんな床へ入つて寢てゐなければならぬ時間の頃　アジユーバの近處で毎度耳にする叫びである。

……この傳說の少し變つて居るもので自分が聞いた最初のものは、アジューバ・ブイヨン近くの或る栽培地てあつた。其處て聞かされたのでは、教父ラバは蛇に——それまでマルティニークて見たうちの一番大きな蛇に——嚙まれて死んだのだといふ。教父ラバはフエル・ドゥ・ランス蛇を根絕やしすることは可能と信じてゐて、その絕滅に異常な手段を採用した。致命の傷を受けた時、彼は斯う叫んだ。『セ　ペ　トゥット　セパン　クイテ　カ　モデ　モアン』（私を嚙んだのはあらゆる蛇の父である）そしてその蛇の一族を絕やしに歸つて來て、一匹も殘らぬやうになるまでこの島に憑いて居る、と誓つた。それて夜、峰のあたりに動く明りは今なほ蛇狩りをして居る教父ラバの提燈である、と。

　自分に話をきかせた男は、『ウー　バ　ペ　スイヴ　ティ　リミエ・ラ　ピエス！』と言ひ續けるのであつた。『あの小さな明りには到底も隨いては行けません。初めて見える時は、多分ほん一基米離れた處にあります。と思ふと早二、三、或は四基米遠くへ行つて居ります』

　なほ話を聞けば、その明りは、この島の反對の側の、グランド　アンスでも——それから、ラ　トリニテの港の南方の海へ三リーグも延び出て居る、妙な形の長い岬、[註]ラ　カラヹルの山々でも屢〻見られるといふことてある。それから自分がサン　ピエールへ歸ると、

註　カラヱルで見えた明りの一つは確に家畜盜人が――魔法使（クイムボアジュール）だといふ評判のある巨大な黑人が――携へて居るものであつた。ラ　カラヱルの岬を成して居る山地の大部分は、當時は、たゞ家畜飼養の目的にだけ其處を使用してゐた、ユースタッシユといふ人の所有地であつた。ユースタッシユはその動物を山地を走り廻はるに任せてゐた。數が非常に殖え、また非常に獰猛になつた。が然し、その獰猛にも拘らず、提燈を携へてゐて、しかも確に他人の力は藉らずに、家畜竊盜の術を行ひよる誰かが、夜間その多數を何處かへ連れて行つて、私かに賣るか殺すかするのであつた。番人が置いた。そしてその盜人は捕へられた。その男は裁判官の前で、自分は貧乏人のものは何一つ盜んだことは無い――その家畜の數の勘定が出來ぬほどのユースタッシユ――ヨン　リシヤール、モン　シエ！――あれからだけ盜んだのだと言ひ張つて平氣でゐた。『幾頭盜んだのか』と裁判官が訊ねたら、『エス　モアン　ペ　サーヴ――モアン　テ　プーアン　ヨン　サヴーヌ　トウツト　プレーヌ』（どうして言へるものですか？サヴンナ（草原）に居るだけみんな盜りました）と、犯人は答へた。……その自白に拠つてそれは罪せられて牢へ入れられた。『モアン　パ　ケ　レテ　ラ　ジエオール』（牢にじつとしては居らぬよ）と其奴は言つた。手枷をはめて置いたのだつたが、翌朝見たらその手枷は獄房の床の上にあつて、當人は逃げてゐた。その後マルティニークでその男の姿を見たものは無い。

その傳説が全然異つた風になほされて居ることを知つた。今度自分に話してきかせた者は、あの嶮岨な友情町の近くに小さなブーティク・ラパコット（料理した食べ物を賣る小さな

露店）を有つて居る親切な老人、マム・ローベルてあつた。
……『あゝ！ペ　ラバット、ウイ！』と自分の最初の質問に答へて叫んだ。『ペ　ラバットといふは、ずつとの昔に此地に住まつて居た人の善い偕てありました。ところが、此處の人達はその人に大變不法な事をしました。――その人に怪しからぬクー　ドゥラング（舌の傷）をつけました。ところで不善な舌が負はす傷は蛇が嚙んだのより惡るう御座います。土地の人達はまたその人のことについて虛言をいひました。誹り謗つて、この國から追ひ出されるやうにしました。が、政府がその人を「船へ積み乘せる」前に、あの波止場へ着いた時、その靴を脫いで、靴の砂をその波止場へ振り落として、斯う言ひました。
「あゝ、マルティニーク、私はおまへを呪ふ！[註]食物が一つも無いやうになり、おまへの人人はそれを買ふことさへ出來なくなる！衣物の材料が少しも無いやうになり、衣物一着さへ手に入れることが出來なくなる！それから子供がその母を打つてあらう！……おまへは私を追放する、――が、私はまた戾つて來る」』

註　イ　スクーエ　スーエ　イ　アッスー　クエイ・ラ。――イ　カ　ディ。『モアン　カ　モーディ　ウー　、ランマティニーク！――モアン　カ　モーディ　ウー！……ケ　ニ　マンジエ　プー　アンニヤン。ウー　パ　ケ　ペ　メム　アシュテ　イ！ケ　ニ　トゥウエール　プー　アンニヤン。ウー　パ　ケ

『ペ　メム　アシュテ　ヨン　ローブ！エビ　イシュ　ケ　バット　マンマン……サー　パンニ　モアン！
――モアン　ケ　ギニ　アンコ！』

『それでそれからどんなことが起こつたのだい、マム・ローベル？』

『エー！フーアンク！シエ。ペ　ラバットが言つたことがみんな本當になりました。殆ど食べる物は何も無いやうになりました。此處のサン　ピエールの者は饑死しかかつて居ります。殆ど着る物は何も無いやうになつて、貧乏な女の子は衣物一枚買ふほどの儲けが出來ません。一米突が二フラン半しよりました綺麗な更紗のキャラコ（印度更紗）が、今は一米突を十二スーで買へます。が、金を有つて居るものは居りません。それから新聞を――レ　コロニーでもラ　デフアンス　コロニアールでも――讀んで御覧になれば、母を打つほどに心の惡るい子が居ることが御分かりでありませう。ウイ！イシュ　カ　バット　マンマン！ペ　ラバットの呪咀であります』

マム・ローベルが自分に語り得たことはこれだけであつた。誰れがそんな話をその女にしたのであらうか？その母から。彼女の母は何處からそれを聽いたのであらうか？彼の女の祖母から。……その後自分は――正しくマム・ローベルが話した通りに――この咀ひの

傳說を確だといふ人に澤山出會つた。

この小會談後ほん暫くして、自分は招かれて、モルン　ドゥランジュ——殊に教父ラバが能く出ると想はれて居る地方——に住まつて居る一紳士の家庭で午後を過ごした。M君の家は、高さはたつぷり五百呎はある小山の中腹に、樹木の林の中に在るのである。土臺石は城砦の壁のやうに嚴乘て、石造の幅の廣い大きな張出緣(バルコニイ)のある、古風な邸宅である。その張出緣の一つから町と港とペレ山とが眺望出來る。これはナポリを見たことのある人でも、世界で一番美しい眺めの一つであると自白するであらうと自分は信じて居る。……夕方近く自分は或る機會を得て、其附近の傳說について二三の質問を主人に試みた。

……M君は斯う語つた。『私の子供の時分から、教父ラバが此の山へ出ると人の言ふのを聞いて居りますし、その明りだと人が言ふものも屢々見ました。山へ登る誰れかの手でぶらぶら振れて居る提燈のやうに見えました。妙な事には、いつもカルベの方角から來て、道路から三四百呎高い處をモルン　ドゥランジュの横を傳つて行つて、それから眞直ぐな絕壁かと思へる處の表面を上つて行くことであります。固より誰れかがその明りを提げて居るのでありませう——多分黑人が。そして恐らくはその絕壁は見る程にさう近寄れぬも

のでは無いのでありませう。でも、その人間が誰れであるか一度も見つかつたことはないのでありましたし、何の目的であつたか、想像も出來ないのでありました。……が、その明りは此處ではもう見られぬやうになつてから何年にもなります』

三

ところで教父ラバといふのは――その人の記憶が、不思議にも傳説に變裝されて、有色人の口頭文學に斯くも長く殘つて居る、この奇異な僧は――どんな人であつたのか？色んな百科全書がこの質問に答へる。が、それはマルティニークの歴史家ドクトル・ルフッよりも遙かに不十分であり、遙かに興味が乏しい。傳記の大家は――消え去つてしまつた人物をば、現に生きて其處に居る者のやうに讀者に思はせて――魔法使のやうなものたることを示すものであるが、さういつた同情的理解の魅力を、氏が彼に就いて語つて居る『統計的ならびに歴史的研究（エチウド・スタチ・チーク・エ・イストリーク）』中の一文は有つて居る。だが人名辭典が與へる無味無色な素材でも、ジャン・バプティスト　ラバはその世紀の異常な人士のうちに置かれなければならぬ人物であつたといふことを、多數の讀者に悟らしむるに足るものがある。

二百年許り前に――千六百九十三年八月の二十四日に――ドミニク教派の白衣を纏ひ、その上の一部を黒い呉羅(ごろ)の上着で蔽うた旅人が一人ロシエルの町へ入つた。非常に丈が高くて丈夫さうで、偉大な精力と犀利な洞察とを示す、嚴肅であつて同時に敏捷な、顏を有つた男であつた。それが巴里生れの、當時三十歳の、教父ラバであつた。半僧半俗、斯う誰れしもその服裝からして推察する氣になつたかも知れぬ。そしてその判斷は不當ではなかつたであらう。ラバの性格は――牧師生活の固定された範圍を生まれながらに越えて發展して――その職業には大き過ぎるのであつた。だからその奇異なる一生の活動的な部分全體に通じて、我々は彼にこの俗人と僧侶との二重性格を見出すのである。彼はマルティニークへの船に乘らんが爲めにロシエルへ來たのであつた。もと彼はナンシーで哲學と數學との教授であつたのである。或る夕暮れその書齋の窓からじつと日沒を眺めて居ると、佛領西印度のドミニク僧侶が送り出した、自ら進んで布教に當たらんと欲する者を求むる、回章を誰れかが彼の手中に置いた。死亡の爲めにその隊伍に幾多の廣い間隙が生じ、またいろんな不幸の爲めにその西印度の施設總てが沒落する惧れがある程に、その財政が窮地に陷つたのであつた。ラバは、その心には餘りに狹小な生涯の束縛に惱んでゐたこととて

咄嗟に決心して、直に教授の職を辭して、宣教に身を投じたのである。

……當時は、西印度との交通は遲く、不規則で且つまた困難であつた。ラバは船一つ待つのに亙る六箇月ロシエルに滯在せざるを得なかつた。ロシエルで彼が滯留してゐた僧院に、同じ機會を待つて居るものが——その中にはドミニク僧も居たがまたジェズイットとカプシンとが幾人も居た——他にあつた。それ等が一致して彼をその指導者に選んだ、——その時代の種々な宗派の相互の嫉妬を思ふと、これは意義のある事實である。ラバの性格の鋭氣と淡白さとは、他人の信頼と早速の服從とを自づと彼に贏ち得さしたやうに思へる、或る物があつたのである。

……一同、十一月に出帆した。そしてラバは船中でもやはり首長の地位に居た。彼の航海記は面白い。——實地の航海のことを除いて殆ど他の一切の事に彼は船客と乘組員との生活を左右してゐたやうに考へられる。彼は船長に數學を教へた。そして二箇月に亙る航海の單調を救ふいろんな娛樂を發明した。

……船が北の方からマルティニークへ近づいた時、ラバは初めて地面の高いその海岸の一番物凄い部分を——マクーバの地方を——眺めた。そしてそれが彼に與へた印象は氣持ちの宜いものでは無かつた。かう書いて居る、『その島は、到る處斷崖で斷ち切られて居

る、ただ一つの恐ろしい山のやうに見えた。到る處眼に映ずる、そして寒い此の季節にと思ふと自分には珍らしくも、愉快にも思はれた、青々した色を除いては、自分の心を喜ばすものは何一つ無かつた』

到着後殆ど直ぐと彼は其の僧院の院長の命で、風土に馴れしめに、マクーバへ派遣された。マクーバは當時この島中での一番の健康地と考へられてゐたのである。誰れでも今日サン　ピエールから其處へ馬に乘つて旅する人は、ラバがやつた旅行の氣持ちのいい記事が正確なことを證言が出來る。この島のあの邊は三百年前から殆ど全く變つて居ないから、千八百八十九年のマクーバの騎馬旅行の記述に、それをその儘全部採用しても訂正を要しないほどである。

マクーバでは誰れも彼れも彼を歡迎する、彼を寵愛する――しまひには彼のことに熱狂する。彼は殆ど始めの一日でその小地方民を蠱惑し左右する。ラバの記述のこの部分に論評を下してルフッは斯う言つて居る。『人と人との間のこの物珍らしい關係には口に言へぬ妙味がある。誰れ一人それまで感情を損ねたものが無い。それまで嫉妬を起こしたもの一人も無い。――早晩、君が惹起せざるを得ぬあの惡意なるものが何處から來ようとして居るのか推察することさへ殆ど不可能である。――競爭者は一人も居らぬ。――敵は一人

も居らぬ。君は誰れも彼れもの友人である。そして多くの人々は君が相變はらず全く彼等のものであることを望んで居る』……ラバはこの好意を適法に利用することを知つてゐた。——彼はその景慕者に勸めて、自分が造つた設計通りに、マクーバに教會を建築させた。

が然し彼は、その小さな町の善良な人達が正當だとすら思つたてあらうほども長くマクーバに滯留することを許されなかつた。彼は彼の教團がカプステル即ちキンドワード海岸に有つてゐた大栽培地サン・ジャックに彼が居ることをば望ましいどころでは無い緊急なことと思はせた程の或る才能を見せたのであつた。砂糖七〇〇、〇〇〇斤の負債に——當時にあつては膽の潰れるほどの事態に——なつてゐて、しかも一季一季といよいよ負債を重からしめる運命に陷つて居るやうに思はれた。ラバは一切の事物を檢分して、啻に總取締としてて無く、土木技師として、建築家として、機械師として、發明者としてその栽培地の爲めに仕事に取りかかつた。實際彼は驚くべき事業を爲した。諸君はいつかマルティニークへ行くなら、自分でそれを見ることが出來る。この古いドミニクの栽培地は——今は政府の所有で、年々五萬フランの借料で貸下げになつて居るが——ラバがそれに加へた仕事の爲めに、今なほ植民地のうちで一番貴重なものの一つとなつて居る。彼が指導して造つた水路は今なほ近代の水理學の教授達の驚歎を博して居る。彼が建てた、或は發明し

た工場は今なほ使用に堪へて居る。——砂糖製造に就いて彼が書いた論文は百五十年間依然としてその種の最上なものであり、佛蘭西栽培者の必携書である。ラバは二箇年ならずしてその栽培地を破産から救つた許りでは無い、それを富有ならしめたのであつた。若し僧侶共が彼をば眞に感に堪へて眺めて居たとしても、この男の才能に對するその驚歎に對して、歳月の試驗が一毫の嘲笑をも投じて居らぬのである。

今でさへ、千七百二十年の遠き昔に彼が組織的に述べた——副產の耕作物に就いて——建設すべき工場に就いて——輸入、輸出並びに特殊の貿易方策に就いて述べた——助言は、その價値をあまりに失うては居らぬ。

斯んな手腕は廣く四方に賞讃を惹起せずには居らず——方々の植民地に先例を見ぬ名聲を彼に贏ち得させずには居らなかつた。到る處に彼は要せられた。グアドループの知事のオーガーは彼を迎へて、其處の植民者を助けて、英人の侵入に對してその島に築城し、また防備せんことを乞うた。するとこの傳道者は、サン・ジャックの栽培地に對してさうのやう思はれたと同じく、稜堡や內壁や外岸や半月堡を建造して、この新規な役割に馴れ切つて居るのを我々は見る。戰爭に與つて居るのをすら——自ら砲兵の對戰を指導して——他の佛蘭西方の砲手が殺されるか、又はその位置から追はれるかした後、十二度も裝塡し、

狙ひをつけ、發射して居るのを我々は見る。英人方からの恐ろしい一齊射擊の後、敵の一人が佛蘭西語で彼に叫ぶ、『白人教父よ、今のは效いたか?』（ペール　ブラン、オンテイル　ポルテ?）彼は敵のよりも、もつと狙ひ好く砲火を返した後やつと返事する、しかもその時、敵の嘲弄の問を繰り返して『今のは效いたか?』と。その英人は驚きあわてて自白する、『おゝ、效いた。が、それを戻してやるぞ』……

……新しい榮譽の稱號を得てマルティニークへ歸ると、ラバはその一島の、その教團の院長に任ぜられ、兼ねて傳道監督に任ぜられた。サン　ピエールで碇泊所の僧院や他の多くの建物を建ててから、彼はドミニク僧に利するところあらしめん爲め、その記行は大册六卷を充たすほどの一續きの航海を企てた。旅行家として教父ラバは、彼自らの分野に在つては、匹敵する者を餘り有たぬ。――實際、彼の功績の或る一部を繰り返し得たらうと思はれるものは一人も無い。佛領植民地は悉く、また英領植民地も數々、彼は實に行つて見ただけでは無く、備にそのあらゆる地理上の細密に亙つて研究した。西印度での旅行は、異國人には殆ど分からぬほどに困難である。然し教父ラバ時代には、道路といふものが餘り無かつたし、――それよりも遙かに大きな種々な障碍があつた。自分はマルティニークに居る白人で自分の島を何處から何處まで知つて居るものは――その道路總てを旅したも

のでさへも――五人とは思はぬ　がラバはこの島を己が手の掌を知つて居るが如くに知つて居り、道路といふものが嘗てなかつた處も旅行した。と同じやうに能くまたグアドゥループや他の島々を知つてゐた。そしてその他の植民地の産物と資源とについて、當時知ることの出來た一切を探究した。彼は――その限られた科學が與へ得る限りに於て――フムボルトの如き大膽を以て旅行し、彼の如き徹底さを以て調査した。若し彼にして近代の博物學者と地質學者との知識を所持してゐたならば、恐らくは彼の後に發見すべきものを他人に殆ど殘さなかつたであらう。現時に於てすら西印度の旅行者は、彼から知識を得るを喜んで居るのである。

如上の職務は、歐羅巴人に致命的な氣候にあつて、實に非常な肉體的並びに精神的努力が籠もつて居るのである。その上また、不法外征者や海賊が出沒する海上での長い航海が含まれて居るのである。が然し何物も、ラバの勇氣を挫くやうには思はれぬ。不法外征者はといふと、彼はその仲間となり個人的友となる。――彼はその附屬牧師になりさへして、共に遠征を試みるに躊躇をせぬ。彼は幾度もの海戰に身を投じて居る。或る時の如きは、彼は英船二艘の捕獲に力を貸して居る。そしてそれからその捕虜を、そのうちには幾人もの婦人も居るが、それをしてその事件を祭日の如く樂ましめることに骨を折る。或る他の

航海てはラバの船が西班牙の船に捕獲される。一刹那、彼の頭上にサアベルが振り翳され、裝塡された小銃が彼の胸に向けられる。――と、つぎの刹那には、西班牙人悉くが、ラバがその捕獲者の眼の前に捧げる十字架に畏怖して、彼の膝下に伏す。異端糺問の役人が有つて居る十字架――宗教裁判所(ホーリー・オフィス)の恐ろしい表號――だからてある。彼はいふ『それは自分のものでは無かつた。自分の同胞の一人が有つて居たもので、偶然、自分の品物の中へ置き忘れたのだつた』彼はありとあらゆる如何な危急に際しても、どうにかしてそれに應ずる用意をいつもして居るやうてある。決して卑しい臆病な僧では無い、此の僧は。彼は胄でも、法冠でも同樣の無頓着を以て着け得た彼(かれ)の中世時代の僧院長(アボット)の體格と氣質とを具へて居る。彼はどうも僧といはんより寧ろ武人てある。英吉利の海賊が、マルティニークの海岸へ來てサント・マリーを襲はんと企つる時、その船へ追ひ返すべくと、サン・ジヤック栽培地の黑人全部を引き連れて教父ラバが待ち構へて居るのを海賊共は見る。

他の危險には彼は絶對に無關心てある。彼は、同船の仲間の者が望を棄てて居るのに、颶風の諸現象を殆ど愉快といふに近い興味を以て研究する。當時『暹羅病』(マル ドゥ シヤム)として知られてゐた黃熱に罹つた時、彼は所定の時間、病床にじつとして居ることを否んて、起きて彌撒の祈禱を唱へる 彼は祭壇で氣を失ふ。が、三四日經つと、一

年のうち、最も惡るい最も暑い季節に、再び馬に跨つて、山中の旅行をして居ることを、我々は耳にする。……

……ラバがアンティールへ行つた時は三十歳であつた。――彼がその事業を爲し終へた時はやつと四十二であつた。十二年足らずで、彼はその教團を西印度でのどんな教團にも、勝さる最も有力な、最も富裕なものとし――その財産をば破産の狀態から高めて異常な繁榮の根柢の上に再建するに至らしめた。ルフッが誇張無しに述べて居るやうに、アンティールに於ける教父ラバの經歷は、ハアキュリーズの努力の古代の物語を實現する以上のものに思はれる。何處へ行かうと――英國植民地は除いて――彼の通過は――工場、堡壘並びに製錬所と共に――教會、僧院並びに學校の設立に依つて記念せられた。都市すら彼をばその建設者だと主張して居る。彼の建築的創設は、その設計の優秀なるに劣らず、その堅牢なるに顯著であつた。――彼が建てたもので今なほ殘つて居るものが多い。失くなつたものは、人間の力がそれを取り除いたのであつて、頽廢したのでは無い。サン ピエールの昔のドミニク教會を、なほ大きな建物を造らん爲め毀たざるを得なかつた時、積み上げられてゐた石を離すことが出來ぬ――その壁は岩の一枚の塊のやうに思はれる、と職人は滾した。その上また、彼はその當時植民地の生活に感化を與へ、その工業並びに商業の

能力を發展せしめたことは少しの疑もあり得ない。

　彼は斯かる事業を爲し終へた後、羅馬へ或る使命を帶びて送られて、それから遂に歐羅巴から歸らずにしまつた。歐羅巴で彼は後年多少旅行をしたが、最後に巴里に居ついて、自己の幾多の航海の浩瀚な記述や奇妙な他の書物にも筆を執つて出版した。それによつて彼は著作家としても、他のあれほど多くの方面に於て示したと同じ倦むこと無き精力を有つてゐたことが窺はれるのである。が然し、幸福であつたやうには思はれぬ。再三再四彼はその愛好せるアンティールへ歸らせられるやうに願つたが、何とも分からぬ或る原因があつて、その願は常に拒まれた。斯んな性格の人には、修道院（クレイスタ）の拘束は緩漫な苦悶となつたに相違無い。が、彼は長の多年それを忍ばざるを得なかつた　彼は千七百三十八年、齢七十五にして巴里で死んだ。

　……こんな人が酷しい敵をつくるのは避けられぬことであつた。その偏好、その地位、その活動、その仕事の機敏さ、その必然的な自己主張、これが、公然たる惡意は能う現はれ得ない時にも、秘密の嫌惡と嫉妬を產み出したに相違無い。そして個人的敵對若しくは反抗のそんな自然的結果へ、後更に、この叔父の著作家としての率直な皮肉が起こした種種な——恐らくは不合理な、然し非常に猛烈な——遺恨が加はつて來た。彼は彼等だけの

小さな世界でこ高貴な人物だと考へられて居る種々な植民者の、家族の素性や個人的缺點について率直に語つた。それて今日に至るも彼の書物は、その古いクリーオールの地方民には、一家の不面目を公に述べることはどんなことも許すこともせず、忘れることも決してせぬのだから、不相應な惡評を蒙つて居る。……が然し多分その著書が世に現はれない前に早、その歐羅巴への使命を終へた後、マルティニークへもグアドゥループへも決して歸らしめない、といふことが總督に決定されて居たのであつたらう。こんな策を執つた政府の眞の目的はどうであつたか——どんな器用な著作家がさうでは無いと言ひ張らうとも——依然とし不可解である。我々が知つて居る事はただ、マルティニークの信頼するに足る歴史家アドリアン・デサル氏が、かの古い『海軍記錄保管所（アルシーヴ・ド・ラ・マリース）』で古文書を捜索して居るうちに、次記の陳述がその文中にある、長官からブークレソンの知事宛てに出した書翰を一通發見したといふことである

……許可を得んとて如何なる努力を爲さんとも、教父ラバを決して植民地に歸らしむること勿れ。

四

『亜米利加諸島への新航海』(ヌー・デー・テアヤージユ・オー・イル・ドウ・ラメリーク)を閲讀すると誰れしも哀惜に近い感じを覺える。といふのは、其一書を成して居る――奇妙な繪や、圖面や、地形圖を見せようとしての變な試みが澤山にある――緻の寄つた小さな六冊は、冗長な筆の人だと思はせはするけれども、敎父ラバはいつも讀者を面白がらす事が出來る人である。昔風な精密な、悠長な、談話家は一語一語の重さを量つて決して何物をも聽く人の想像力に殘して置かぬけれども、それでも驚く許り深味のある反省とか、或は全く新規な理論とかを以てして、其聽者の忍耐力に早晩必らずや報ゆる所があるものであるが、ラバの文はさういつた談話家を思はせるものがある。が然し其六冊本を讀む人を殊に感銘させる事は、珍らしい事件や事實を續々と枚擧して居る處では無くて、むしろ此著作家の人格をおのづから現はして居る點である。彼を讀むと、――天稟の才能を授つては居るが、其釣り合ひが正しく行つて居ない、浮世の事には珍らしい程樸徹で拔け目が無くてゐて、他の點では驚くほど輕信的で人に騙され易い、迷信的であつてゐてしかも皮肉で、その積極的獨斷的なるが爲めに思ひ遣りが無かつたが、

生得愉快を與へたがる心が深いので氣持ちの宜い、生來は正直でゐてしかも無情な苛酷な事も爲し得る、非常に敬虔であつたが同時にその職業とその時間とには寛容な　絶大な力を有つてゐた一性格を綜する事が出來る。異教徒を使用する事にかけて其同胞が躊躇するのをからかふほどに、つまらぬ頑迷さは全く脱して居る。彼がマルティニークのフォン

　サン・ジャックの栽培地へ第一流の精糖家を傭ひ入るゝに至つた次第を語つて居る記事は、その書卷中、中々に面白い頁である。から書いて居る。『グアドゥループの僧院長に任命せられたその信心深い男は自分に手紙をよこして、その精糖者はルーテル教派の男だから使用は出來ぬと言つて來た。自分はその男をフォン　サン。ジャックの自分共の栽培地へ傭ひたいと長い前から希望してゐたのであるが、どうそれを取り計つて宜いか分からずに居た事だから、その躊躇は自分には愉快であつた。自分は直ぐと僧院長へ手紙を送つて、その男をこちらへ送ることとさへして貰へばよろしい、その男が製造する砂糖がカトリックの砂糖てあらうがルーテル派の砂糖てあらうが、砂糖が白くさへあれば、自分は構はぬ事だから、[註]と言つてやつた』彼は過失を或は失敗を自白するに同様の淡白さを示す。彼

註　第三卷、三八二――八三頁。千七百二十二年版。

は、數學及び哲學の教授をしてゐた時分、熱帶地方には潮汐は無いといつも教へたと白狀して居る。それからディアブロタン（西印度の夜中鳴く鳥で今は殆ど絶滅して居るもの）は魚か禽獸（フレッシュ）か、從つてまた四旬齋の時分、食つて宜いか宜くないかの議論があつた折、彼は（『バーナクル・グースのあの有名な無稽談を、ディアブロタンの本性を疑ふ權利の辯明に、『事實』として彼は引證し得たけれども）したたか敗北したと我々に語つて居る。

　教父ラバは、ディアブロタンは鳥では無いといふ教會の決定に對して斯く言ひ及んでは居るけれども、心中では鳥であると充分に確信してゐたと怪しんで然るべき理由がある。この論諍を述べて居る彼の物語には、こすい滑稽味があるので、それから察すると、その決定には充分滿足をしてゐながら、自分ではディアブロタンのことは委細承知して居たやうに思はれるのである。その上に、この教父は禁慾者たる職業とは全然一致しないところの美食の嗜好が確にあつたことを露はして居る。……當時は佛領のアンティールには殆ど何處にも鷓鴣[註]が居た。そして教父ラバは隱さうとはしなかつた――料理した鷓鴣が好きな

註　マルティニークの鷓鴣は、頭の頂に、少し赤味が交じつた板石色（スレート）の羽毛があつて、翼と喉と尾とに赤い毛が少しある、と彼は記載して居る。

ことを。（飼うて可愛がるものとしては大して好いては居なかつたらしい。上手に物を言はぬと、早速彼は鍋に投じたから）彼は斯う書いて居る、『みんな果實と種子とで生きて居るから、その肉はそれが食として居るその特別な果實或は種子の香氣と色とを帯びる。グアヴが熟する時期には非常に肥える。そしてボア　ダンドの種子を食ふ時分には實に氣持ちの好い、肉豆蔻と丁香の香氣になる（ユヌ　オードゥール　ドゥ　ムスカード　エ　ドゥ　ジローフル　クイ　フエー　プレージール）』他の鳥もであるが、鸚鵡も之を食膳にのぼす上等の料理法四種を彼は吹聴して居る。その第一のそして最上の方法は『生きながらその毛を捲り、それから酢を呑ませ、それからその酢がまだ喉に在る間に首を捩ぢて絞め殺す』のである。そして第四の方法は『生きながら皮を剝く』（ドゥ　レ　ゼコルシエ　トゥット　アン　ギ）のである。……尚ほ彼は續けて書いて居る、『上述の方法が最良のものであること、また、急いで料理しなければならぬ鳥は、斯くすると肉が感心するほど軟らかくなる（ユヌ　タンドルテ　アドミラーブル）事は確實である』それから彼は讀者に向つて簡單な辯解をして居る。自分の處方の不人情な事に對してては無くて、料理の知識を示すのは僧侶に不似合であるが、熱帶での植民地生活が誰れにも同じやうに負はす所の特殊の必要に迫られて初めて得たのである、といふのであつた。此文で見えて居る

殘忍な點は、その全體の事業に見て、之を修正することが出來ない或る印象を起こす。ラバは利他の念は極めて少量しか有つて居なかつたやうに思はれる。動物の難儀といふ題目についての彼の冷笑は、人間の苦痛に對しての何等眼に見える同情で相殺されては居らぬ。――彼は決して同情を寄せるといふことが無い。彼が書いた頁の何處を見ても、黑人の境遇に痛烈な憐憫の念に滿たされて、神の愛の爲めにその奴隷に對して慈悲であれ、正義であれと奴隷の主人に祈る、溫順な教父ドゥ　テルトルの仁の一微光をも求めても徒勞であらう。ラバは、これとは反對に、奴隷制度は黑人を迷信から救ひ出し、また其靈魂を地獄から濟度する良手段であるとほのめかして居る。彼はサン　ジャック栽培地の爲めに自ら奴隷を選擇し購求し、決して見損ひをせず下手買ひをせず、奴隷の身の上に對して一毫の同情も感じないやうに思はれる。實際、教父ドゥ　テルトル（彼は時折內々で嘲弄して居るのである）が現はして居る情念は、彼には賞讚に値するとよりも寧ろ非難すべきものと思はれてゐたに相違無い。といふのはラバは黑人をば惡魔の私生兒であり――生まれながらの魔法使であり――玄奥な力を使ふ邪惡な者である　　と考へて居たからである。

恐らくは黑人の魔法に就いて述べて居る章が、他の點では冷酷な實際的な此の性質に殆ど際限無しの輕信があることを示して、書中で一番驚くべき章であらうと思ふ。自國から

追はれた黑人て『少くとも惡魔そのものが知ることが出來て、そしてそれを彼に洩らし得たのだと思はれる程に——船の到着やその他の未來のことを豫言する』者を配下に得た仔細を物語つてから、彼は魔術に就いての自己の信念を、つぎのやうに明から樣に述べて居る、——

> 魔法使のことまた魔法使と惡魔との約束のことに就いて語られて居る總てを、純粹の想像であると考へ、また馬鹿な話である或は全くの虛構であると思ふ人が多いことは自分は知つて居る。自分も亦多年その意見を抱いて居つた。その上また、この題目に對して言はれて居ることは屢〻誇張されて居ることにも氣は附いて居る。然し自分は、これまで物語られて居ることは、或は全部は眞實で無いかも知れぬけれども、全部が虛僞では無いと認めざるを得ぬと今は確信して居る……
> ……

から述べてから彼は當時一點非難の無い權威と思はれてゐたらしいいろんな物語を語りはじめる。語つて居る一番目の出來事は、彼は我々に斷言して居る、彼がこの植民地へ到着する少し前に、マルティニークのドミニク修道院で起つたのであつた。これより先き、敎父の一人ペール　フレーズといふが『ギニーのジユダ（？）王國から』九歲か十歲の子

供黑人をマルティニークへ連れて來たのてあつた。その後間も無く非常な旱魃があつて、僧侶達は雨乞をしたが徒勞てあつた。するとその黑人子供が、やつと佛蘭西語が少し分りまた話せもしだした許りてあつたが、自分は雨つくりてある、欲しいだけの雨を造ることが出來る、とその主人に語つた。教父ラバは言ふ、『この提言は非常に教父どもを驚かせた。一同相談して、終に理性が好奇心に壓せられて、この洗禮を受けてゐない子供にこの庭へ雨を少し降らせることに同意を與へた』その洗禮を受けて居ない子供は『大きい雨か小さい雨か』どちらが欲しいかと皆に尋ねた。一同は程合の雨なら滿足すると答へた。するとその子供黑人は蜜柑を三つ取つて來て、それを互に短い距離を置いて一直線に地面へ置いて、順番にその一つ一つの前に屈んで、分からぬ言葉で何か言語を呟いた。それから小さな蜜柑の木の枝を三本持つて來て、蜜柑一つ一つに一本づつ刺して、平伏と呟きを繰り返した。――それをすませてその枝を一本拔いて、立ち上がつて、じつと地平線を見て居つた。小さな雲が現はれた。子供はその方へその枝を差し向けた。雲は迅速に近寄つて來て、庭の上の方で立ち停まつて、驟雨をしたゝか降らせた。それからその男の兒は地面に穴を開けて、蜜柑三つと枝三本とを埋めた。その庭以外には一滴も雨が降らなかつたのを見て教父は仰天した。皆はその男の兒に誰れがその魔法を教へたかと問ふたら、その

子は此處へ自分を乘せて來た奴隷船中に居た黑人のうちに幾人か雨つくりが居て、それが教へたと答へた。敎父ラバは此の事件が眞實なことについて何の疑も無いと宣言して居る。彼はこの事件の信賴すべき目擊者として——何れも自分の敎團のものたる——敎父フレーズ、敎父ロシー、敎父タムプル及び敎父ブルノーの名を擧げて居る。

敎父ラバはドゥ　ジェーヌ伯爵夫人が話してきかせた、もつと法外な物語を述べて同樣の輕信を示して居る。その夫人の夫で、佛蘭西の一艦隊の司令官であつたドゥ　ジェーヌ伯爵が千六百九十六年にゴレアの英國要塞を略取して、其處に建つてゐた工場に傭はれてゐた英國の奴隷全部を捕虜にした。ところがそれを乘せて出帆した船が、立派な風があるのに、海岸を去ることが出來なかつた。その船は魔力にかかつて居るやうであつた。到頭その奴隷のうちの或る者が、船中にこの船を魔力にかけて居る黑人女が居る事、その女はその命に從ふ事を拒む者はどんなものでもその『心の臟を乾上がらせる』力を有つて居る事、を船長に語つた。黑人間に多數の死者が生ずるのを見て、船長は死體解剖を命じたところ、死んだ黑人共の心臟が乾からびて居ることが分かつた。そこでその黑人女を捕へて、身を銃に縛りつけて、鞭うつたが、一聲も叫びを發しなかつた。——船の醫者がその剛情に腹を立てて、處罰に手を藉して、『カ一バイ』その女を鞭打つた。するとその女が、理

由無しに自分を虐待したことだからその心臟は『乾上がる』とその醫者に言つた。その醫者は翌日死んだ。そしてその心臟は豫言の通りの狀態になつて居ることが分かつた。その間、船はどんな方角にも動かすことが出來なかつた。するとその黑人女が船長に向つて、自分とその仲間の者共とを上陸させる迄は決して船を動かすことは出來なからうと言つた。そしてその力を納得させに、進んでその女は、箱の中へ新しい甜瓜を三つ入れて、その箱に錠を下ろして、そしてそれに番人を置けと乞うた。自分がその錠をあけよと言ふ時、箱の中には甜瓜は無からうといふのである。船長はその實驗をやつた。箱を開いた時、甜瓜は其處に在るやうに思はれた。が、それに觸つて見たら、外皮だけ殘つてゐて、內部は――醫者の心臟同樣――乾からびて居ることが分かつた。そこで船長はその女とその仲間の者共とを上陸させた。そしてそれからは何の困難も無く船出して行つた。

敎父ラバが、それを眞實だと熱心に保證して居る亞弗利加魔術の今一つの物語は、つぎのものである。

千七百〇一年、サン トマて、或る黑人が魔法を使ふといふので、生きながら火に焚るといふ宣告を下された。その男の主もな罪は『土を燒いて造つた小さな人形に物を言はせた』といふのであつた。或るクリーオールが、その黑人に處刑場へ行く途中で遭つて、嘲

弄して『おい、もうあの人形にお前は物を言はすことは出來ぬよ。——毀れて居るから』と言つた。罪人は之に答へて『あなたがやつても宜いと仰しやれば、その人形が手に持つて居る杖に物を言はせませう』と言つた。クリーオールは大いに好奇心を起こした。護衛の者に四五分(ぶん)立ち停まるやう、そしてその罪人にその實驗することを許容するやうにと、說得した。黑人はするとその杖を手にして、それを道路の眞ん中の地面に突き刺して何かそれに呟いた、そして何が知りたいかとその紳士に尋ねた。『——號はもう歐羅巴から出帆したかどうか、何時ここへ着くか知りたい』とその紳士は答へた。『この杖の頭へ耳を當てなさい』とその黑人は言つた。そのクリーオールは、言はるゝ儘にすると、その船は斯く斯くの月日に佛蘭西の某港を出帆したこと、三日以内にサン　トマに着くこと、航海中暴風に遭つて前檣帆と後檣帆とを奪はれて遲延したこと、船中にはこれこれの(と一々名を擧げて)乘客があつて、いづれも壯健であること、……を言うてきかす微かな聲がはつきりときこえた。……この事があつて後、その黑人は生きながら火烘りになつた。が、三日以内にその船は到着した。そしてその豫言といはうかト(うらなひ)といはうか、詳細な點に至るまで絕對に正確であつたことが知れた。

……敎父ラバはこの哀れな黑人に加へた殘忍な宣告に一向不贊成の意を見せぬ。彼の意

見てはそんな豫言は惡魔の力に由りまたその個人的幇助を以て爲される。だから、知つてゐながら惡魔と關係を維持して居る者共に對しては彼は如何な處罰をも苛酷過ぎるとは考へ得なかつたからである。彼は自分自らも頗る苛酷であり得たことは、魔法使だと言はれてゐた者に對しての彼自らの個人的經驗の種々な物語にも充分示され、また、殊に、或る魔法使——たしかに亞弗利加の醫者といつたやうなもの——それは附近の或る栽培地に居る奴隷であつたが、窃かにその術を行ひにサン ジャック方面へ能く遣つて來た者であつたが、それに對して自分の處置を語つて居る文にも示されて居る。ラバの教團が使用して居る奴隷の一人、女黒人が重病に陷つたので、その妖術使を招いた。彼は夜中そのごたごたの諸道具を——小さな陶器の壺だとか物神とか色んなものを——携へて來た。そして教父ラバが戸の隙間からじつと見て居るとは露知らずに、その魔法を行ひ始めた。そしてその物神に伺ひを立ててから、病人に向つて四日以内に死ぬると告げた。丁度その際に教父は突然戸を開けて、有力な奴隷幾人も從へて、飛び込んだ。その豫言者の道具を粉微塵に碎いて、喫驚して居るその女黒人に、その豫言は惡魔が言はせる虛言だと斷乎と公言した。それからその魔法使の衣物を剝ぎとらせ、その面前で鞭打たせた。

彼は平氣で言うて居る、『鞭を約（アンギロン）三百食はせてやつたが、其奴は肩から

膝の處まで皮が剝けた（レコルシエー）。其奴氣違のやうに叫んだ。黑人等總てそれを見て身を震るはせて、惡魔が自分を殺すだらうと自分に確言した。……それから自分は、ビマンタードで――即ち、胡椒と小さなレモンとをそれへ潰し入れてある鹹水で――其奴の身體を洗はせてから、その妖術者に手枷を掛けさせた。かうすると嘗て皮が剝けた者には恐ろしい苦痛を起こす。然しこれは脫疽に罹らせぬ治療には確になる……」

それから彼はその奴隷の主人にその處罰を繰り返すやう請求する手紙を持たせてその憫れな男を送り返した、――この請求は、その奴隷の持主は『神を恐るゝ人』であつたから、是認されたらしく思はれる。だが敎父ラバは、そのあらゆる努力にも拘らず、その病人の女黑人は、魔法使が豫言したとほり、四日目に死んだことを自認せざるを得ぬ。この事實は、惡魔が事件全體の根柢に居るのだとのその信念を強く確定せしめたに相違無いし、また約三百の鞭打ちを以て、それにつぐにビマンタードを以てしても、その憫れな黑人に充分な懲罰であるかどうか、彼に疑はしめたに相違無い。恐らくはマルティニークのこのドミニク僧の名に今なほ附隨して居る恐怖には、この怖ろしい鞭打ちの傳說が稍ゝ與つて力を有つて居るかも知れぬ。適法な極度の處罰は二十九鞭打てであつた。

敎父ラバはまた、當時黑人はそれが觸る人體のどんな部分へでも非常に劇しい慢性の疼

痛を與へる力のある杖を携帶するが習慣てあつた、と斷言して居る。彼は曰ふに、彼はこの疼痛はただ僂麻質斯性のものであると初は信じてゐたところが、僂麻質斯性に對する世に知れて居る療法總てを試みても無效なことが分かつてから、そんな杖を使用したり製作したりする上に、何か玄妙なまた惡魔的なものがあると彼は自信するやうになつた。……注意に値する事實はこの信仰が今なほマルティニークに廣く行はれて居る！ことてある。

杖か又は彎刀か、或は其兩方を携帶してゐない黑人に田舍て會ふことは殆ど無い。林中て又は栽培地で仕事する者には彎刀は必要缺ぐ可からざる品で、杖は蛇に對する護身用として、且つまた村の喧嘩ての攻撃と防禦との武器として誰れも携帶する。黑人は非常に醉つぱらつて居なければ、己が同輩を彎刀で打つことは無いのてある。杖は普通、目の詰んだ丈夫な木て造る。一番に欲しがるのは、英吉利のさはくるみほど强靭だが、それよりももつと輕い『ムードング』[註]と稱する材料のてある。斯く皆が携帶して居る杖のどれが魔力

註　『ムードング』といふクリーオール語は、食人蠻人だといふ評判のある亞弗利加海岸の或る種族の名のモンドングの轉訛だといふ。栽培地へ來て居るモンドングの奴隷は、他の種族の同じ黑人仲間にも一般に恐れられて居る。それでこの食人蠻人の名が恐るべき、また驚くべきものを現はす形容詞に變形して來た。前記の木で造つた杖で打たれることは非常に怖ろしがられてゐたため、その語が初めその杖に用ひら

れ、後木材そのものに用ひられるやうになつた。

を有つて居ると思うてゐるのかいと自分が尋ねたら、それをどんなに輕く觸つてても、しかもどんなに厚い衣物の上からでも、長續きする恐ろしい疼痛を起こすやうに杖を『取計らふ』特別の方法を知つて居る者が居る、といふ事を自分は多勢の人から斷言された。

こんな事柄を信じてゐて、そして其上太陽が地球のまはりを廻轉するのか、地球[註]が太陽のまはりを廻轉するのか決定する事が出來ずにゐても、それにも拘らず敎父ラバは、其時代の尋常普通な宣敎師程に輕信でも無く無學でも無かつた。他の事にかけての彼の實際的な聰明と對照して、彼の世間的な合理的行動と實行的機敏と對照して、初めてこの迷信的無邪氣さが變妙だと人に思はれるのである。そして歳月の皮肉は時々どんなにか奇異なものである事か！ドミニク僧が成しとげた驚く可き事業は、總て世人に忘れられてしまつて居る。然るに彼がそれと戰つた妖術は總て皆殘存してゐて公然と榮えて居る。そして彼の名すら、迷信との關係のほか口にするものも殆ど無い――實際、ただ迷信のお蔭で、ゾムビと怪物との信仰の爲めに、黑人間に殘つて居るのである。……『ミ！ティ　マンマイユ・ラ、　モアン　ケ　フエー　ペ　ラバット　ギニ　プーアン　ウー！……』

註　貿易風の起因を說明して彼は書いて居る、「貿易風が熱帶に存在しないのは全く偶然の機會に由つてである。といふのは、貿易風を生ずる原因は、太陽のまはりを地球が廻轉するか、地球のまはりを太陽が廻轉するか、兎も角その結果であるから、必然的なものであり、頗る確實なものであり、また全く繼續的なものであるからである。廻轉をするのは、この二つの天體のうちどちらであらうとも……」

五

サン　ピエールの住民のうち、大聖堂(カテドラール)の後ろの美しい公園を元『白い敎父の草原』と呼び――ロクスラーヌ川の横の蔭深い長い牧場を元ジェズイット卽ち『黑い敎父の草原』と呼んで居たことを記憶して居るものは多くは無い。大なる宗教敎團は悉くずつと以前にこの植民地から失せてしまつた。その建築物は他の用に供せられて居るか或は破壞されてしまつて居る。その地所は他の人の手に渡つてしまつて居る。……それでは、彼等の勞力は單に蜉蝣的な結果を産んだのであつたか？――敎父ラバの偉大な事業は、將來といふことだけについて言つて、全く徒勞であつたか。この質問には容易に答へられない。が、考察には値する。

固よりの事、かかる人達がその教團の爲めに得ようと骨折つた物質的成功は、彼等の眼にすらも、自己維持の手段に過ぎぬもの、また僧院住者の將來の布教努力に對して必要な力の蓄積に過ぎぬものと見えて居たのである　眞の究極の目的は、教派の爲めにては無くて、その教派はただその戰鬪的な力の一部分たる教會の爲めに權力を獲得しようといふのてあつた。そして此の目的は首尾能く成就した。教派が此島に失くなつた時は、丁度その努力が完全された時てあり、――人間界の物質をその支配の下に捏ね上げ、また捏ね直す上に於て宗教的熱心なるものが爲し得る限りの一切を宣教師共が爲し終へて、マルティニークが（少くも、外面的には）羅馬そのものよりも、もつと加特力になつた時てあつた。此等の人達は、未來が植民地の爲めに取り除けて置いた所の、そして牧師の如何なる聰明を以てしても、とてもそれに對して準備することが出來なかつた所の、あの社會的及び政治的變化を殆ど豫想することが出來なかつたのてある。我々がこの布教團が成し遂げた眞の事業は如何なる性質のものか、またどの位永續しさうてあるか、それを觀察し且つ評價し得るのは、此等の地方民の現在の宗教狀態に於てである。

……長い間マルティニークに住居した後でも、その眼に映ずる宗教的狀態は蜉蝣的なもののやうな感銘を相變はらず人に起こす。外國人て、この人民の家庭生活に立ち入る好機

會を有たぬ人は、恐らくはその宗教感念の程度を十分に見分けることは出來なからう。が、それにも拘らず、その滯在がどんなに短くとも、その崇拜の法外な象徴を驚愕の念に滿たさるゝほどに觀察することであらう。馬に乘つて或は徒歩で何處へ行かうが、祠度、禮拜堂か聖者の像か巨大な耶蘇磔像に遭遇する。雲を抽んずる峯に登れば途中この三つ悉くを見出すことであらう。——それが高山の霧を通して朦乎と浮き出して待つて居るのを認める事であらう。そして非常に美しい山峽を通ると、自分の上にも下にも、火山質の岩石に龕が刳り抜いてあつたり、懸崖に垂れ下がつて居る木の幹に、屢ゝどうしてそんな細工を爲し遂げ得られたかと驚かしめる程に接近の困難な場處に、工夫されたりして居るを見るてあらう。これは悉く國中の種々な財産家が造つたものである。さうするのが傳統的な慣習てある——幸運を齎す！といふのてある。少し長く此の島に滯在して居ると、その上またどんな住家でもその部屋部屋に——石造の住邸であらうが、木造の百姓家であらうが、或は棕櫚の葉葺きのアジユーパであらうが——禮拜所がある事を誰れしも發見する。それは壁に固定されて居る大きな棚承といつたやうなもので、その上に十字架か形像かを安置し、花瓶も置き、また夜點すやうラムプか蠟燭も置く處である。その上また、たまたま彫像が窓に置いたり、戸口の上に置いたりしてある。——そして通行者は總てそれに對して

脱帽する。自分が數週間暮らした山の村の百姓家の玄關の上には、可笑しな小窓がしつらへて――全く裝飾的な屋根窓がしつらへてあつて――それに高さ五吋許りのマリアが置いてあるのであつた。少し離れた所で見ると玩具のやうに――其處に置き忘られてある子供の人形のやうに――見えた。そして人形だと自分はいつも想つてゐたのだが、或る日長い行列をして家の前を通る黒人勞働者が、いづれも皆それに對して脱帽するのを見て、それと知つたのである。……その百姓家の自分の寢室は宗教博物館に類似してゐた。禮拜所には、高さ一吋より十六吋に至る大小のマリアが八つもあり――セント　ジョセフが一體あり――セント　ジョンが一體あり――耶蘇磔像が一つ――心臓や十字の形をした、一々或る特殊な宗教的意義を有つて居る小さな品物が澤山あつた。――そして一方また壁は、洗禮、『最初の聖餐拜受』、堅信の額縁入りの證明書や、その家族の二代に亙る宗教生活全部を記念する他の書類で蔽はれて居つた。

……確に斯くも絶え間無しに十字架や彫像や小規模の禮拜所を見せつけられて起きる第一印象は――殊にその細工が奇怪に近い程度にまで非藝術的なのが多くて、藝術に類するものは何物も何處にも見られぬのであるから――愉快なものでは無い。こんなものを――中古藝術の粗野があつてその感情的眞摯の無いもの、そして、熱帶の自然の麗はしさ、棕

櫚の優美、攀援植物の花の種々な色彩の炎の裡に在つて殆ど殘忍な猛烈さを以て審美感念に障るもの――を造るのに幾百萬フランを費やしたものに相違無い。が、それでもそんな漆喰や木や石の無言な人間共に隱密に窺はるゝ詩美がある。それ等の物は中世時代よりも古い、基督教よりも古い――尤も、不思議なほど扭ぢ曲げられ變形されはして居るけれども、一々の家庭にそれぞれ愛せられてゐる靈魂があり、一々の林に丘に或は泉にそれぞれ優雅な神があり、あらゆる野原の境界は神の像によつて表はされまた護られてゐた時代の、その太古の時代からして羅甸民族が如何にもと頷かるゝほど保存してゐる所の――或る物を表明して居るのである。

偶像破壞の實例は、如何なる土人も――富めるも貧しきも、白人も混血兒も――偶ゝその前を通る禮拜堂十字架又は彫像の一々に對して脫帽せずには居らぬやうな國では、固よりのこと極めて稀てある。市外僅數哩の地に住まつて居るサン　ピエール又はフォール・ドゥ・フランスの商人は、商賣に行つたり歸つたりの途中、確に莫大な數の敬禮を行はなければならぬ。――自分は一人の老紳士が、十五分の徒歩の間に二十度ばかりその白頭を露はすのを見た。自分はマルティニークで偶像破壞者が一人あつたことを耳にしただけて一度も話に聞いたことが無かつた。そしてその一人の男の行爲も、迷信の結果てあつて、

民間信仰或は慣習に何等敵意を挾んで居た結果ではなかつた。それは伊太利の漁夫をして時にセント　アントニーを呪はしめたり、天氣が惡るい時その形像を水の中へいれていぢめさせたりするのと同じ子供らしい感情に促されてであつた。このマルティニーク偶像破壞者は、或る日、多分タフィアが一杯非常に飮みたかつたのであらう、預つて居た動物をマリアの漆喰像に、威嚇（その文句は記錄に殘つて居る）の上て託して其處を去つた、家畜追ひの黑人てあつたのてある。かう言つたのてあつた。

『モアン　カ　クィッテ　ベフ・ラ　バ　ウー　ブー　ガデ　バ　モアン。クアンド　モアン　ギニ、シ　モアン　バ　トゥルーヹ　コムト・モアン、モアン　ケ　フーテ　ウー　ヷン・ネフ　クードフーエット！』（この牛をお預け致しますから私の代りに番してゐて下さい。戻つた時、みんなが此處に居なければ、鞭て二十九度あなたを打ちますぞ）

それから半時間ばかりして歸つて來ると、その牛が四方八方に散亂して居るのを見て非常に怒つた――そこてその形像の處へ走つて行つて、臺座から挽ぎ取つて、地面へ投げつけて　牛を打つ鞭て二十九度それを撻つた。この爲めにその黑人は逮捕され、審問されて、苦役附きの終身禁錮！の宣告を受けた　當時は有色人の裁判官は無かつたものて――判事は總てベケてあつた。

「少し苛酷な宣告だ」と、その話をして聞かせて呉れた、其處でしたといふ瀆神のその場處へ案内して呉れた一栽培者に、自分は評言を與へた。

その男はかう返事した、「苛酷であります、さうであります。——そしてまたその行爲は犯罪といふよりもむしろ馬鹿げたことのやうにあなたには思へるだらうと想ひます。然し此處マルティニークでは、そんな罪には大きな問題が含まれて居るのであります。私共は、いつも或る程度まではさうして居るやうに、社會の秩序を維持する一要素として宗敎の力に手緣つて居りますから、その黑人の行爲は危險な模範となりはせぬかと思はれたのであります……」

敎會が今なほマルティニークでは富裕且つ繁榮であることには何の疑問もあり得ない。が然し、それが社會の秩序を保つ上に於て何等有力な影響を引き續き與へるかどうかは甚だ疑はしい。黑人及び有色人民に見るポリネシア一流の道德の弛緩を思ひ、また人種的嫌惡の歷史や人種嫌惡が鼓吹した革命を思ふといふと、倫理に於てもまた政治に於てもそれが何等有力な權威を有つて居るとは考へられないのである。いろいろな宗敎敎團を放逐したり、——俗人の小學校、官立高等學校及び其敎育には加特力の思想に攻擊的反抗の特徵を大いに具へて居る他の敎育的學校を設立したり、——公立の建物から耶蘇磔刑像や形像を

取り除いたりしても、佛蘭西の過激主義は教會の仲間のものに何等重大な打擊は蒙らせはしなかつた。白人だけに就いて、また（かう言つてもよからう）富有な者だけに就いて言へば、教會の方が政府の學校に對しての其敵對行爲に勝利を占めて居るのである。そして或る程度までは教會の方が教育上の獨占權を獲て居るのである。白人クリーオールは一人としてその子供を俗人の小學校や官立高等學校へ――此方が教育主義に於て無論優秀であるに拘らず――送らうとは夢にも想はぬ。――また、主もな納稅階級のものとして、さういふ學校を維持する負擔を負はざるを得ぬのであるが、白人はそんな學校を非常に恐れ嫌うてゐて、政府の教員は社會的に絕交されて居る程である。混合の學校を忌み嫌ふこの偏見若しくは自負心がこの點に於て教會を助けて居ることは疑も無いことである。教會自らが人種感情を認めて居り、その學校は黑白混同で無いやうにして居り、またその僧院に在つてすら有色人の尼僧をして白人尼僧に仕へさせて居るといふ事である。二世紀以上の間も、白人は悉くその思想を神學校や僧院で固められて居る。そして土人白人のうちにあつて自由思想の意見を公然と吐くものは嘗て聽かぬところである。政府の學校の教授のうちにあつてすらも、我れこそそれと口にする自由思想家は一人も居らぬ。――そしてこれは、巴里で教育を受けたのが多數に居るクリーオール白人が、生まれながらに偏狹な心を有つ

て居るとか、或はまたその時代の心的發展に共鳴することが出來ぬとかいふ理由によつてでは無くして、マルティニークの宗教問題は、それに關しては全然何等の和解もあり得ない社會的併びに政治的問題と緊密に混和して居て、兩者を分離することは不可能なほどになつて居るが爲めてある。羅馬加特力はクリーオールの社會を結合して居るセメントの一要素てある。そして他の信仰の者は見えて居らぬ事は注目すべきである。自分は此の島中てたつた一人の監督派(エピスコパリアン)の人と、たつた一人のメソヂスト派の人とあることを知つてゐた——また、何處に居たのか自分は發見することが出來なかつたが、たつた一人の猶太人が居たといふ口碑のやうなものを耳にしたことがあつた。——だがそれ等は外國人てあつた。

　羅馬加特力が何か少しても重大な損害を蒙つたのは、それは全く、白人をばその以前の奴隷の左右する所たらしむるに至つた普通選擧の開始によつてであつた。地方的な地位は悉く黑人か有色人かが占めて居る。白人のクリーオールは一人も公な職務を得ることも立法に與ることも出來ぬ。そして黑人投票の力全部は不寛容にも斯く政治的に相續權を奪はれた階級の利益に反するやうにと使用されて居る。從つて教會が苦痛を感ずることになる。その權力は富裕なまた優勢な階級との親密な結合に賴つてゐたのてあつた。そして今や權力を有つて居る者共は、多年その階級に對して同情的援助を爲した事に對して教會を許さ

らとは決してしないからである。政治は年ごとにこの敵意を强めて行く。そして白人をして再び權力を恢復せしめ、且つ教會をしてその昔の地位を占めしむる唯一の希望は、再度帝國を建つるの可能如何に、或は王國を復興するの可能如何に存するのであるからして、白人クリーオール及びその教會は、共和主義幷びに今の共和國に對して反抗の態度を執らざるを得ざらしめる。そこで政治的新聞紙は絶えず羅馬加特力を攻撃し――その教義教條を嘲弄し――その宗義と儀式とを嘲笑し――その僧侶を諷刺する。

市邑では教會は實際より貧しい階級の愛情の中に大なる地歩をまだ保つて居るやうに思はれる。――その儀式にはいつも多人數が出席する。金(かね)はその金庫の中へ流れ込んで來る。そして『改宗者』の年々の奇妙な行列を――年の行つた有色の女達や黒人女達が、其日の爲めにいづれも雪と白い頭帕布(タアバン)を着けて、初めて聖餐に赴くのを――今なほ離れても目撃する事が出來る。が、革命の危險な力が存在して居る田舍の人達の間では、基督教的感情は亜非利加起原の忌まはしい信仰の爲めに、殆ど呼吸の根を止められて居る。――神像や耶蘇磔刑像は今なほ尊敬を縱にして居るけれども、其尊敬は全く呪物崇拜の感情が鼓吹して居るのである。白人が政治的に驅逐さるゝと共に、前には隱れて居たか抑へられてて居たかした或る黒い力が、恐ろしく發展し來たつた。教父ラバの舊敵が、妖術者(クイムボ

アジユール）が、既に早、僧侶に勝さる權威を振るひ、裁判官に勝さる恐怖心を起こさせ、醫者に勝さる信賴を恣にして居る。敎育あるムラット〔白人と黑人の混血兒〕階級は、妖術者を輕蔑せんとするかも知れぬ。――が、妖術者は暗中私かに彼等の滅亡を謀つて居る。驚くべきは、數世紀の間、敎會があれほど熱心にそれと戰ひ、法廷があれほど無慈悲にそれを罰した、あの信仰と實行とに亞弗利加人が執着する頑强さである。彼れ亞弗利加人は彌撒（みさ）に參集し、その子供を僧侶の處へ送る。が然しそれ以上に屢〻クイムボアジユールと『磁氣（マグネティーズ）つかひ』との處へ行く。彼はその信仰を兩方とも有用と思つて居るが、――丁度、サヴンヌドッ　フォールの軍樂隊の音樂よりも自分のタムタムを打つ音が好いと思ふと同じで――野蠻的信仰の方を一方の信仰よりも特に優れて好む。……若し萬一マルティニークがその白人住民に全然見棄てられるといふやうなことが出來すれば――これは現今の有樣では決してありさうに思へぬことでは無い事件であるが――僧院敎團があれほど辛苦して建設した敎會の建物が有つ運命は、推測するに難くは無いのである。

六

あの古いルー ドゥ ボア・モラン通――高い石段をつぎからつぎと幾つもモルン ラベルの岡を登つて行くこの通――の自分の窓から、この市の南端全部が鳥瞰圖のやうに能く見られる。眼下には、――此處其處に綠色の明かるい雲が、苔滿林度と蕃茘枝（コロソリエ）との簇葉が浮いて居る――赤瓦の屋根と破風と屋根窓との、長きに亙る幾つもの突起がある。西の方は、カリビア海の大きな圓が紫色に燃えて居る。東と南とは、裾から頂まで綠に包まれて、火山性の山々が曲線を描いて菫色の空へ聳え立つて居る。そして右手に、眼の前に、全山棕櫚に飾られ林に包まれた、美しいモルン ドランジュが、海の方へ南の方へと傾いて居る。そして夜毎夜毎、星が出てから、其處に動く光を――山に住む人達をその家へと導く提燈の火を――自分は眼にする。然し教父ラバの明りは見ようとするが見えぬ。

が、それにも拘らず――自分は幽靈を信ずるものでは無いけれども――時折まざまざと汝が見えるのである。汝、古怪な白い教父よ。今の世紀ならぬ世紀に、今のよりも狹い巴里に、冬の霧の中をとぼとぼと歩んで居るのを。熱帶の空の下に汝の命のまにまに建つた

多くの教會を默想して居るのを。汝の意志の力に依つて甘蔗綠の黃金の海に變つた原始的谿谷を――また二百年の間（今日に至るまで堅固て居る）汝の名を保たん堅牢な場を――また棕櫚が多い氣持ちの宜い處て汝の同胞の爲めに造られた住所を――また汝のマルテイニーク僧院の光り輝ける平和を――ボア ダンドの穀粒とグアヴの實とて肥えて居る鸚鵡を杂る眞ひを、『ロドュール ドゥ ムスカード エ ドゥ ジロッフル クイ フエ プレージール……』を――夢見て居る汝の姿を。

鳴呼、教父ラバよ！汝の日このかたどんな變化が其處に在つたことか！白い教父は今は此處に何の場處をも有つて居らぬ。そして黑い教父も亦この土地から追はれて、ただその記念としてペリネニ栽培地建物の完全な重くるしげな建築と、今なほリギエール デ ペール（教父の川の意）として知られて居る川の稱呼とを殘して居るだけてある。それからまた、ウルスリーヌも亦失くなつて、その名を附けかかつて居る街路の隅に殘して居るだけてある。それから最早奴隸も居らぬ。其處には汝の眼には美しくはあるが汚辱だと見えるてあらう新しい有色人種が居る。最早鸚鵡も居らぬ。最早ディアブロタンも居らぬ。そして、世界の朝に造物主が手を觸れて新たに生まれ出たかの如くに、その原始的な汚無き美を發揮して居るのを汝が見たあの大森林は失くなりつつある。幾千年の樹木は木炭に改つたり、焙

船建造者の爲めに木材に挽かれたりしつつある。森林の巨人をば、皆が『惡魔』（ヨンディアーブ）と呼んで居る、輪を二つ有つた　軋つてクリク・クラク！クリク。クラクと叫ぶ物に載せて、皆一緒に

ソー・ソー！――ヤイ・ヤー！

ラレ　ボア・カノー！

と囃して海へ曳き行く二百の人を汝は見るであらう。そして蜉蝣のやうな人間がそれを變化する力のある總ては――思想も道德も、信仰も社會組織全體も――變つてしまつて居る。が然し永遠の夏は殘つて居る――そして瑠璃色の空と菫色の海とのヘスペリディズの華麗さは――永遠の山々の寶石なす色彩は――殘つて居る。――二百年前汝の甘蔗畠に漣を打たせたあの微温な風は今なほサント　マリーを吹いて居る。――同じ紫色の影が太陽の廻轉に連れて長くなり短くなり廻つて居る。神の魔術は今なほこの國に充ちて居る。そして外來人の心は猶ほ且つその美に捕へられて居る。そしてこの國を棄て去る人の夢は――教父ラバよ、汝の夢がさうであつたと同じく――そのエデンの夏の記憶に煩はさるゝことであらう。熱帶の夜明けの光り輝ける中に百千の峰の上へ光が忽如として飛び出た記憶に―

ー瑠璃なす絶大な日中の芳香薫ずる平和の記憶に――壯大な日沒の燃ゆる光の中に風にゆらめく棕櫚の恰好の記憶に――母がその子を『ミ　ファナール　ペ　ラバット！――ミペ　ラバット　カ　ギニ　プーアン　ウー！』と家へ呼ぶ頃、生まぬるい暗黑の中を大きな螢が無言でピカリピカリと飛んでゐた記憶に

魔　女

一

夜は、何處の國でも、或る種の想像力に恐怖を與へる、氣味のわるいものや幻想をそれと共に齎すものである。――ところが熱帶では特に印象的なそして特に氣味の惡るい感銘を起こす。日がてかてかそれに照つて居る時でもびくりとさす恰好をした植物は、日が沈んだ後は、一種の物凄味を――一種の怪異を――それに何と名の附けようの無い一種の暗示力を――執る。北國では木はただ木である。――此處ではそれは自己を感知させる一人格である。漠とした或る人相を具へて居り、何とも言ひやうの無い或る『我れ』を有つて居る。(横に朱點をつけた)一個人であり、(括弧で括つた)『物』である。

月が昇ると、高い森から、不思議な黑い物が――黑い扭けたもの、物を眞似た形のもの、惡夢のやうなものが――化物の果てし無しの行列が――道路へ下りて來る。棕櫚の樣々な

形が投ずる影はその最も恐ろしくないものである、それは直ぐと、それと認められるからである。――でも、路上に、開いたり閉ぢたりする大きな指に似たものを見せたり、何とも口に言へぬ蜘蛛が黑く這ふやうに見せたりする。……

が然し、そんな幻影は、夜に入つて獨り道行くビタコの心を恐ろしがらすことは滅多に無い。道に沿うて密かに這ふ黑い物は、彼には怖ろしい意義は少しも有つて居らぬ、――彼の想像力に何の訴ふる處も無い。――若し彼が突然びくとして立ち停まつてそして眼を据ゑて見るならば、それはそんな恰好が目に附いたからでは無くて、二點の橙黃色の光が見えて、それがただ螢であるのか、それともトリゴノセフアラスの眼か、まだ誰かと分からぬからである。彼の空想裡の魔物は、そんな不分明なそして怪異な陰影なんかと共通な點は少しも有つて居らぬものである。致命的な蛇に次いで彼が最も恐れるものは人間の魔術である。白いぼろ切れ一つ、途に横たはつて居る古い骨一つ、それが、若しかして踏むと、其足を黑くならせ、象の脚の大きさに膨らませる呪咀かも知れぬ。――路傍に落としてある、甘蕉(プランテン)の葉か竹の剝ぎ皮かの封じた儘の包は、或はスウクウヤンの皮を包んだものかも知れぬ。が然し、意の儘に其皮を脫いだり着たりする此物凄い物も――それからゾムビも――それからモウン・モも――祈禱の力で鎭め又は祓ふ事が出來る。それにまた禮拜

堂の燈明や、十字架の白いほのあかりが、絶えず道行く人をして、助けて呉れる力に對するその義務を思ひ出さしめる。道に沿うて、間を置いて、それも大して遠くは隔てずに、禮拜堂がある。或る龕の燈明の光の中に立つて居ると、其處の道路が平坦で眞直ぐであれば、恐らくはつぎの龕の光を遠くに見分けることが出來よう。禮拜堂は――森の裾に沿ひ、谷の入口に、絶壁の端にと――殆ど到る處に在る。この島の一番高い峰の絶頂にさへ十字架がある。それて夜歩く者は、物を穿かぬその足が、白いマリアか白い基督かの燈明の點つた神殿から射し出て居る黄色な光の和やかな流に觸れる度毎に、一度一度その帽を脱ぐ。これが彼の善良な靈的な道伴れである。彼はそれ等に會釋し、それ等に話しかけ、それ等に自分の苦痛や心配を告げる。マリアと基督との晒したやうに白い顔は同情に充ちて居るやうに彼には見えるのである。彼が暗がりから暗がりへと、星の下に黒檀の如く黒く聳えて居るその林の妖魔の下を、大股でとつとと歩いて行く時、聲は立てずに彼を慰めて呉れるやうに思へるのである。……それから彼には他の道伴れがある。他の國での暗黒の最も大なる恐怖のうちの一つが――無言といふ恐怖が――日が沈んだ後は此地には存在しないのである。……熱帶の夜は聲に充ちて居る。――異常な數の蟋蟀が聲を震るはせて歌つて居る。幾國民の數なす木蛙が吟誦をして居る。[注] カブリ・デ・ボア即ちクラ・クラが、その

註　クリーオールではカプリツト・ボア（『木の子山羊』）といふ。巨大な蟋蟀である。夜明けの正四時半に默る。掛時計を有たぬ程の貧乏な、幾千の早起者には、その聲の止むのが起床の合圖になつて居る。

爲めそのクリーオール名を貰つて居るその小羊の啼くやうなゼイゼイ聲で殆ど耳を聾（つんぼ）にする。鳥が囀る。りんりんいふもの、わんわんいふもの、ぶんぶんいふもの、かあかあいふもの、ごろごろいふもの、總てがその絕大な合奏に加はる。だから、一切の物の影がこの聲の嵐の力に震動して居るのが見えるやうな氣持ちがする。熱帶の自然の眞の生活は暗黑と共に始つて、光明と共に終はるのである。

そして恐らくは、黎明が來ても、超自然なものを恐れる一切の恐怖心が消滅しないのは、一つはさういふ事情の爲めてあらう。イ　ニ　ペ　ゾムビ　メム　グラン・ジュー（彼は眞つ晝間にさへ幽靈を恐がつて居る）といふ言葉は、こんな地方では誇張した言葉とはきこえぬ文句で　　少くとも、氣味の惡るい信仰を育てたり起こしたりする此處の有樣を少し知つて居る者には、さうとはきこえぬ文句である。熱帶の日中の畏ろしい平靜には、林の沈默、山の（夜にはきこえぬ流れ川の聲に破らるゝだけの）森嚴な無言には、驚く許りの光の輝きにすらも、妖怪的なそして氣味の惡るい或る物があり――無量無限の物の怪（け）の

如くに世界を壓して居るやうに思へる或る物がある。自然の部屋々々は如何にも靜かで、聲高く物を言ふと、聖殿でわつと笑ひ聲を立てると同じやうに、如何にもいやに耳に響くぐらゐである。あの絢爛たる色を有ちながら、あの猛烈なる光を有ちながら、この熱帶の日中にはその日中の幽靈氣味があり、またその日中の幽靈があるのである。有色人のうちには、眞晝でも——それは市の背後の並木の大道が一番人通りの少い時分であるが——獨りで其處をぶらついて居るとゾムビが出る、と信じて居るものが多勢居る。

二

……此處に疑が——或る語の精確な性質に就いての疑が——念頭に浮かぶ。そこでその說明をアドウに賴む。アドウといふは、自分が部屋借りをして居る、この山の中の小さな田舍家の、親切な年老いたカプレスの息女である。母は殆ど肉桂同樣の色をして居る。この息女の顏色はもつと冴えてゐて——蜜柑の熟した時の色合である。……アドウは自分にクリーオール物語やティム・ティムの話をして吳れる。アドウは幽靈の事は何でも知つて居り、また幽靈は居るものと信じて居る。アドウの途方も無い程丈の高い兄のイエベ——

自分の山案内——も亦さうてある。

『アドウ。ゾムビつて何だい』と自分は尋ねる。

アドウの美しい白い歯を見せてゐた微笑は忽ち消えた。そして、ゾムビは見たことが無い、また見たくも無いと、非常に眞面目な顔して返事する。

『モアン　パ　テ　ジャンマン　ウーエ　ゾムビ——パレ　ウエ　サ　モアン！』

『が、アドウよ、私はお前がそれを見たことがあるかどうかと聞きはしなかつたのだ。——それはどんなものか聞かして呉れと頼んだだけだ』……

アドウは少しく躊躇して、それから答へる。

『ゾムビ？メー　サ　フエー　デソード　ラヌイット、ゾムビ！』

あゝ！『夜騒動をする』或る物なのである。が然し、それは滿足な説明では無い。『死んだ人間の幽靈なんかい、アドウ？歸つて來る者なんかい？』

『ノン、ミシエ、——ノン。セ　パ　サ』

『では無いといふのかい？……それぢや、こないだの晩、[illegible]に墓場の横を通るのを恐がつた時、お前何と言つたのだい　サ　ウー　テ　カ　ディ、アドウ？』

「モアン　テ　カ　ディ。「モアン　パ　レ　カ　カルレ　ボ　シミティエ・ラ　パ　ウア

ッポ　モウン・モ。――モウン・モ　ケ　バレ　モアン。モアン　バ　セ　ペ　ギニ　アンコ」』（私申しました『死んだ者が居るからあの墓場の横を通りたくはありません。――死んだ者が道を鎖めます。そすると家へ歸れなくなります」』）

『お前それを本當だと思つてるのかい、アドウ？』

『えゝ　みんなさう言ひますもの。……あなただつて夜墓場へおいでになりや、歸つて來られはしません。死んだ者があなたを止めます――モウン・モ　ケ　バレ　ウー』

『だが、死んだ人間がゾムビなのかい、アドウ？』

『いゝえ、モウン・モはゾムビではありません。ゾムビは何處へでも行きます。死んだ者は墓場にじつとしてゐます。……萬靈節の晩だけは違ひます。あの晩には何處へでもその人達の家へ行きます』

『アドウよ。戸や窓に錠を卸して閂かけてから、夜の夜中にお前の部屋へ入るのを若し見るとしたら、丈が十四呎ある女を？』……

『アー、パ　パレ　サ!!』……

『言ふなだつて！話してきかして呉れよ、アドウ？』

『え、それぢや話します。それがゾムビであります。夜、何とも分からぬあんな色んな

騒ぎをするのはゾムビてあります。……それからまた、夜、私共の家へ、これ位の高さの〔彼女は床の上五呎ばかりの處へ手を浮かせて言ふ〕犬が入つて來るのを若しか見れば、私はミ　ゾムビ！と大聲出すてありませう』

……すると、その母がゾムビのことを少し知つて居るといふ考が突然アドウの頭に浮かぶ。

『ウー！マンマン！』

『エティ』と老テレザの聲が、炭火の竈て、土器のカナリて晩の食事を料理して居る小さな離れ小屋から返事する。

『ミシエ・ラ　カ　マンデ　サーヴ　サ　サ　イエ　ヨンヌ　ゾムビ。――ギニ　ティブーアン！』……その母は笑つて、そのカナリを打ち遣つて置いて、その不思議な言葉に就いて知つて居る事總てを自分に話しに出て來る。

『イ　ニ　ペ　ゾムビ』といふは――自分は老テレザの説明で知つたのてあるが――『幽靈が恐い』『暗いのが恐い』といふ我々の曖昧な言葉同様、漠然とした文句てある。が、『ゾムビ』といふ語はその上に特別な妙な意味を有つて居る。……『ウー　パッセナン　グラン　シマン　ラヌイット、エピ　ウー　カ　ウーエ　グーオ　ディフエ、エピ

プリウー カ ギニ アスー ディフエ。ア プリ ウー カ ウーエ ディフエ・カ マシエ。セ ゾムビ カ フエー サ……アンコ、シユッヴル カ バッセ、ーシユッヴル カ ニ アニ トウーア バット。サ ゾムビ』（あなた夜大通をお通りになります、すると大きな火が見えます、その方へ行かうと思つておあるきになればなるほど、それは遠くへ動いて行きます。それはゾムビがそんな火をこしらへるのであります。……また脚がたつた三本ある馬があなたの横を通ります。それはゾムビであります）

『ゾムビがこしらへるその火といふのはどの位の大きさ？』と自分は問ふ。

『道一パイに塞がります、リ カ ランプリ トッツト シミン・ラ』とテレザは答へる。『その火を私共は惡火と――モッゴイ ディフエと――呼んで居ります。そしてそれに隨いて行くと、その火は地の割れ目へ連れて行きます。――ウー ケ トムベ アダン ラビーム』……

それから彼の女は自分につぎにしるす話をしてきかす。

『サン ピエールの、絶壁町に住んでゐた有色人で氣の狂つてゐたベードーといふがありました。危險な男ではありませんでした――決して何の害もしませんでした。その妹が

その世話をして居りました。ところで私がこれからお話しようとして居ることは本當のことでありますーーセ　ジストゥエ　ヱリターブル！

『或る日ベードーがその妹に「モアン　ニ　ヨンヌ　イシュ、ヴ！ーーウー　バ　コンネート　リ！」「私に子供がある、嗚呼！ーーお前はまだそれを見たことが無いのだ！」と言ひました。妹はその日その兄が言つたことに何の注意も拂ひませんでした。が、翌日もまたさう言ひ、またその翌日も、また其翌日も言ひ、それから後毎日言ひました、ーーそこで、しまひには妹は、それに非常に惱まされて、斯ういつも呶鳴りました、「アー！メー　ペ　ジオール　ウー、ベードー！ウー　フー　プー　アムベテ　モアン　コムサ！ーーウー　ビヤン　フー！」……が、ベイドーはそんな風にして幾月も幾年も妹を苦じめました。

『或る晩ベードーは外へ出て行つて、やつと夜半に歸つて來ました、子供の手を曳いてーー街路(とほり)で見つけた黑人子供の手を曳いて。そして妹に斯う言ひました。

『「ミ　イシユ・ラ　モアン　ムネ　バ　ウー！トウー　レジユー　モアン　テ　カデイ　ウー　モアン　ティニ　ヨンヌ　イシュ。ウー　パ　テ　レ　クーエ、ーーエー、ベン！ミ　イ！」「連れて歸つたこの子を見てお吳れ！私には子供があると毎日私は言つて

ゐたぢや無いか。お前はそれを本當だとは思はなかつた、――どうだい、能く顏を見てお呉れ！」

『妹は一目見て叫びました、「ベードー、オティ　ウー　プーアン　イシュ・ラ」……といふのは、その子は見る見るずんずん丈が高くなるのでしたから。……そしてベードーは――氣が狂つて居るのでありますから――かう言ひ續けて居りました、「セ　イシュ・モアン！　セ　イシュ　モアン！」「私の子だよ」

『そこで妹は鎧戸を推し開いて近處の人達みんなに叫びました、「セクー　セクー　セクー！　ギニ　ウーエ　サ　ベードー　ムネ　バ　モアン！」「助けて！助けて！ベードーが連れて戻つたものを見に來て！」するとその子がベードーに言ひました、「ウー　ニボンエ　ウー　フー！」「お前は氣違て仕合せだ！」……それから近處の者みんな走つて遣つて來ました。が、何も居ませんてした。ゾムビは行つてしまつたのであります』……

三

……自分が言つてゐたやうに此處では光が一番强い時刻に不氣味なものが出る。自分が語りたいと思ふのは、太陽の眼の下に、眞つ晝間にさへ、外を歩く或る物に就いてである。それが最近にその姿を現はしたと言はれて居る場處へ或る朝行つて見た印象が、自分の記憶にまだ生き生きと殘つて居る間に。

諸君は、牧場になつて居る海拔二千呎の長い平地の上のカレバッスから續いて居る山道を辿ると、ラ　クーレスの森へ入る。其處の處で道は、濃い綠の蔭深い中を、大きな之の字形になつて、ゆるやかに降り始める。すると、とある曲り角で、不圖見ると、木羊齒の羽毛のやうな葉の群れを透して、耕作されて居る谷が、一つ眼下に見える。下の其表面は金綠の水を湛へた淵水のやうに――長い呼吸をつく山風が、幾哩に亙る熟しかかつた甘蔗を際から際まで、漣打たせて居る時は、殊にさうのやうに――思はれる。其イリウジョンは、光に滿ちた其平原を横ぎつて蛇行して居る、兩側に若い椰子の植わつた大道があるのて破られるだけである。東も、西も、北も、地平線は波と起き伏しする小山で殆ど全く隱

されて居る。一番近い小山の連續は軟らかな恰好をしてゐて絶妙な綠の色である。その上の方に、より高い山の波が、それよりもより仄かな綠とより濃い影とを見せて居る。その向うにまた、青い或は菫色の調子の半面影像が聳えて居て、その眞ん中から、乳房の恰好した美しい峰が一つ突き立つて居る。――一方また西の方はといふと、總ての物の上に、ピトン山さへ、その下にして、不思議な恰好したものの――皺があり、裂け目があり、角だつて、怪異なほど高い――濛としたごちやごちやしたものがある。……少くともこれは朝の色合である。……此處其處に、火山性連山の間隙に、土地が窪んで峽谷となり、傾き降りて山谷となつて居る。――そして、土耳古玉色の海の大圓盤が、其間を貫いて燃え立つて居る。南の方は、諸君が辿つて居る道が之の字形に下つて行く、其深林が眼界を閉ざして居る。……稍ゝ進んで谷間へ入るまでは、栽培地の建物は目に見えぬ。――その建物は土地の褶の爲めに隱されてゐて、其處で道が曲る小さな窪みに在るのである。大きな四角な灰色の低い古風な建物で、控壁の附いた厚い壁があつて、屋根は赤いタイルで葺いてある。それが造つて居る内庭は、巨大な拱廊で表の大道に面して居る。其大道に沿うてずつと遠くにアジューパが道の横に列なり始める。それは野働きの男の住家で――木羊齒の莖か竹の幹で建てた小さな小屋で、屋根は甘蔗葉で葺いてある。一軒一軒小さな庭の中に

建つて居て、その庭にはバナナや薯蕷やクークーやカマニオックやショウカライブや他の物が植わつてゐて――ローズ・ダンドや花を附ける色んな灌木が生垣を爲して圍んで居る。

それからは、兩側ともさやさやいうて居る甘蔗の高い曠原と――搖れ傾ぶく左右のココア樹の間をうねうねして居る白い無言の大道と――それから、進むに連れて眼前へ滑り出るやうに思はれ、また午後の光の強まると共に、透明にならうとして居るかのやう、紫水晶の色になつてゆく山々の尖頭と――それだけである。

四

……無風無雲の眞晝である。眼が眩むばかりの光の落下に山々は青く燻つて居るやうに見える。黄色い淡い霧のやうなものが――廣大な反射なのである――幾哩と續く熟しかかつて居る甘蔗を暈して居る。蔓の面紗を冠つて居る森の綠色の神祕な正面全部がそよとも動かぬ。道路の棕櫚は、謹聽してても居るやう、その頭を靜かに保つて居る。甘蔗はただの一言もサッサツと言はぬ。甘蔗が斯んなに絕對的に靜肅て居ることは稀である。どんなに穩かな日にも、いつもはサラサラといふ音、弱いパチパチいふ音、微かなスクスクいふ

音が聞こえる。それは何か小さな獸か爬蟲が――鼠かマニクーか、或はザノリかクーレスか――が、それよりも頻繁に、無害の蜥蜴や蛇では無くて、あの致命的なフエル・ド・ランスが――通つて行くのだと肯かしめる音なのである。今日は、そんな音が總て眠つて居るやうである。甘蔗の中で、雜草を捲り取つたり――ピエ・トレツフやピエ・プールやピエ・バライやゼーブ・アン・メを根扱ぎにしたりする勞働者が一人も居らぬ。休憩の時間なのである。

或る女が道をすたすたと這つて來る――若い、非常に淺黑い、非常に丈の高い、そして跣足で居る　そして黑い衣物を着て居る女が。黑筋のある白地の高い頭帕布を冠つてゐて、白い肩掛（フーラール）をその美しい肩のあたりに投げかけて居る。荷物は何も持たずに、非常に速くまた音立てずに歩く。……總じてかういふ跣足の人達の運動は影のやうに音無しである。道が曲つては曲つて居る、山道の靜かなどんな處でも、諸君が自分一人だと思つて居る處で、諸君の後ろの方に、聞こえるといはんよりも、感ずる或る物に――無音聲の跫音、しなやかな長い身體の彈力のある運動、着物の無言のゆらめきに――屢々びつくりすることがあらう。――そして諸君が振り向き得ないうちに、心を魘うたその物は『ボンジユー』とか『ボンスエ・ミシエ』とかクリーオール挨拶をして速に横を通つて行く。白晝に、眼に見

えぬ或る生きた物が居ることに斯う不意に『氣が附く』ことは、全くの暗黒の裡にあつて、それが身近に在ることが、ただ力の或る無言な盲目な發射に依つてのみ自づと知られる大きな堅固な物體の前に、人をして全く呼吸の根を止めて立ち停まらせるあの感じよりか、もつと心を不安ならしめさへするのである。が然し、黒人や半混血兒はそんな驚きを感ずることは極稀のことである。彼等は或る分化された感覺で――動物と同じく――物の到來を先見し、また、どんな遠方からでも、或はどんな掩蔽の下からでも、自己へ向けて投じた一瞥を感知するやうに思はれる。――その鋭い眼力の到達する範圍内を彼等に氣づかれずに通り行くことは不可能である。……だから今この女の近寄つて來ることはアジューパに棲まつて居る者共には早既に認められてゐたのである。――黒い顔が窓や戸口から覗き出る。――或る一人の半裸體の勞働者は、その來るのを見ようとて、太陽の下に、路傍へぶらつき出さへもする。彼は一寸見やつて、またその小屋の方へ向いて、斯う呼ぶ。

『ウー・ウー！ファファア』

『エティ！ガブー！』

『ギニ　ティ　ブウアン！――ミ　ベル　ネグレッス！』

ファファアが飛んで出る、手に大きな藁帽を提げて、『オティ、ガブー？』

『ミー！』

『アー！クインベ　モアン！』と、熱心に、黑いフアフアは叫ぶ、『フーアンク！リベル！——ジエシ、マイア！リ　ドウー！』……

二人のうちどちらもその女を前に見たことは無かつた。そして二人ともいつまでも見守つて居ることが出來るやうな氣がする。

眉目好くて、そして自分は眉目が好いと知つて居る、丈の高い年の若い、山國のグリフオヌ卽ち女黑人の樣子には、何となく立派な點がある。それは技巧無しの品格、原始的な優雅、運動の野蠻な狂喜、の黑い詩である。……『ウー　マルシエ　テート　アンレーコム　クーレス　クイ　カ　パツセ　ラリギエ』（お前は、川を泳ぐクーレス蛇のやうに、頭を空にして歩く）といふ言葉は、女黑人の首と頸との位置を完全に描いて居るクリーオールの比喩である。そしてその歩行には、其上に蛇的な優美さが、彎曲の妙趣が、あるのである。肩は振らぬ。この上反して居るトルソは不動のやうである。——が、一度一度の長い一パイの大跨と共に、腰から踵へ、踵から腰へと、交互に、言ふに言はれぬ波動が傳はつて行くやうに思はれる。同時にまた、そのゆるやかな衣物の襞が、臀の充分の振り廻しと共に、完全な搖動を爲して、背後で左右に振搖する。我々にとつては、見事に訓練さ

れた踊り子だけがこんな歩き方を企てる事が出來る。――マルティニークの有色の女にはそれはその皮膚の色合同樣に自然である。そして何の束縛も無い運動の此の魅力は、靴を一度も穿いたことの無い、そして古代の婦人のやうに輕い衣服を――非常に薄い單簡な衣物を二枚だけ――シュミーズとローブ・ダンディエンヌとを――着けて居る者には殊にいちじるしい。……が、この女は何處の女であらう？――何處の村のものであらう？ヺークランのものでも無し、ラマンタンのものでも無し、マリゴーのものでも無い――カス・ピロートのものでも無く、カス・ナヸールのものでも無い。ファファは何處の者も皆知つて居るのである。サント・アンヌでも、サント・ルースでも、サント・マリーでも、ディアマントでも、グロ・モルンでも、ガブーの生れ故郷のカルベでも、一度も見かけたことの無い女である。その女は、說敎師の敎區にあるアビスムの村のものでも無ければ――また、聖靈の郡にあるドゥッコのものでもフランソアのものでも無い。……

五

……その女はそのアジューパに近づいて來る。その二人の男はその大きな藁帽を脫ぐ。

二人は同時に『ボンジユー、マンツエル』とその女に挨拶する。

『ボンジユー、ミシエ』とその女は、――ガブーには注目して居るやうには思はれない

が、通つて行く時フアフアには、その顏へ眞ともに向けたその大きな眼で微笑を與へて―

―好い調子のアルト聲で返事する。……その男の淫蕩な血がその一瞥に燃え上がる。――

一瞬時、黑い稻妻の光に包まれたやうな氣持ちになる。

『サ カ フエー モアン ペ』と、ガブーは眼をそのアジユーパの方へ轉じて叫ぶ。

その見ず知らずの女の眼に潛んで居る何とも云へぬ或る物が彼を恐れさしたのである。

『バ カ フエー モアン ペ――フーアンク!』(あの女は私は恐くは無い)と、フ

アフアは笑ひながら、大膽にも嬉しげに意氣揚々と女の後に跟いて行く。

『フアフア!』とガブーは愕き恐れて叫ぶ、『フアフア、パ フエー サ!』

がフアフアは少しも氣に留めぬ。その見ず知らずの女はその步調を緩めた、恰も後から

來るのを誘ふがやうに。――と思ふつぎの瞬間に彼はその女の橫に居る。

『オテイ ウー カ レテ、シエ?』と、自分はその人種の立派な見本だと思つて居る

者が有つ大膽さを以て、彼は尋ねる。

『ザフアイ カブリツト パ ザフアイ ラバン』と、愚弄するやうに女は答へる。

『メー　プーキ　ウー　ラビレ　トウツト　ヌエ　コム　サ』
『モアン　ポテ　デイル　プー　ナーム　モアン　モ』
『アイ　ヤ　ヤイ　！……ノン、ヴーエ！――サ　ウー　カレ　アトゥーエルマン
？』
『ランムー　パティ。モアン　パティ　デイエ　ランムー』
『ホ！――ウー　ニ　グエプ、アン？』
『ザノリ　バイル　ヨン　バル。エピ　マボヤ　ラントレ　ラダン』
『ディ　モアン　オティ　ウー　カレ、ドウドゥー！』
『ジョーク　ラリギエ　レザ』
『フーアンク！――ニ　プリ　パッセ　トラント　キロメット！』
『エー　ベン？――エス　ウー　レ　ギニ　エピ　モアン？』

「何處に居ます、あなたは？」
『山羊の知つて居ることは兎の知つて居ることではありません』
『だが、どうしてそんなに黒い衣物を着て居るのですか？』
「私の死んだ魂の爲めに喪服を着て居るのです」

『アイ　ヤ　ヤイ！そんなことは、本當！……何處へ今行くのです？』
『戀が去つてしまひました。私は戀の後を追うてゐます』
『ホ！あなたには蜘蜂（戀人）があるの？——エー？』
『ザノリが舞踏會をします。マボヤが來いとも言はぬのに入ります』
『何處へ行くのか言つて下さいよ、我が思ふ人！』
『蜥蜴の川まで』
『フーアンクー——三十基米もつともありますよ！』
『それが何です？——あなたは私と一緒に行きたいのですか？』

女は斯う問をかける時、立ち停まつてその男の顏をじつと見る。——その聲は最早愚弄するやうでは無い。別な調子に——彼等がシフリュール・ドゥ・モンタアヌ即ち山口笛と呼んで居る鳶色の小鳥の、長い黄金のやうな囀りのやうな和らかな音色に——なつて居る。が、ファファアは躊躇する。仕事へと彼を呼び返す栽培地の明瞭な鐘の音がきこえる。——道路の遙か下に（まあ！どんなに迅く二人は歩いて居たことか！）日の光を受けて白と黒との一點が見える。兩手を組み合はせて窪をつくつて、丁度法螺貝を吹くやうに、吹いて、ウークレを、再び集まれの合圖の聲を、出して居るガブーなのである。彼は一寸の間、監

督の怒を——その遠さを——眞晝の暑さにぎらぎら光つて居る白い道路を——思うて見る。
それからまたその見知らぬ の黒い眼を眺めて、答へる。
『ウイ。——モアン　ケ　ギニ　エピ　ウー』
いたづららしい大笑ひを、それをフアフアも一緒になつてする大笑ひをして、女は歩き出す——フアフアはその横になつて大胯に歩む。……するとガブーは、遙か遠くて、二人を見て居る——そして二人が一緒になつて仕事してから初めて、その伴れがそのウークレに返事しないのを不思議に思ふ。
『クウマン　ヨ　カ　クリエ　ウー、シエ?』と、女の名を知りたがつて、フアフアは尋ねる。
『シヤシエ　ノム　モアン　ウー・メム、ドゥギネ』
ところがフアフアは推察の上手な男では無かつた——一番簡單なティム・ティムすら推察することが出來なかつた男である。
『エス　サンドリーヌ?』
『ノン、セ　パ　サ』
『エス　ギタリーヌ?』

『ノン、セ　パ　サ』
『エス　アズラ？』
『ノン、セ　パ　サ』
『エス　ニニ？』
『シヤシエ　アンコ』
『エス　ティテ？』
『ウー　パ　サーヴ——タン　ピ　プー　ウー！』
『エス　ユーマ？』
『プーキ　ウー　レ　サーヴ　ノム　モアン？——サ　ウー　ケ　フエー　エピ　イ？』
『エス　ヤイヤ？』
『ノン、セ　パ　イ』
『エス　マイヨット？』
『ノン、ウー　パ　ケ　ジヤンマン　トッルーヹ　イ！』
『エス　スーヌーヌ？——エス　ルールーズ？』
女は返事をせずに、歩調を早めてそして歌をうたひ出す——混血兒が歌ふやうでは無く、

亜非利加人が歌ふやうに——言ひ現はせない程細かな音色に突然に砕ける、低い長い不思議な音調で始つて、それから忽ちにして高まつて朗らかな水の流れるやうな鳥聲となり、それからまたも前の如くだしぬけに下がつて元の深い震るへた調子になるのであつた。

アテ——

　　モアン　カ　ドミ　トウツト　ロング。

ヨン　ペーラツス　セ　フエー　モアン　ビヤン、

　　　　ドゥードゥー！

アテ——

　　モアン　カ　ドミ　トウツト　ロング。

ヨン　ローブ　ビエセ　セ　フエー　モアン　ビヤン、

　　　　ドゥードゥー！

アテ——

　　モアン　カ　ドミ　トウツト　ロング。

デ　ジヨリ　フーラ　セ　フエー　モアン　ビヤン、

ドゥードゥー……

アテ——
モアン　カ　ドミ　トゥット　ロング。
ヨン　ジヨリ　マドラ　セ　フエー　モアン　ビヤン、
ドゥードゥー……

アテ——
モアン　カ　ドミ　トゥット　ロング。
セ　アテ……

……初から女の濶歩と同歩調にその濶歩を長めなければならなかつたので、ファファはその徒歩の最上の力を使ひ過ぎてしまつて、後に殘された。早既にその薄い衣物は汗が浸み透つてしまひ、その呼吸は殆ど息切れがして居る。——が黒い青銅色のその道作れの皮膚は少しも濕り氣を見せぬ。その節奏正しい足取り、その無言の呼吸は何等の努力を現はさぬ。女は自分の横に居ようとするその一生懸命の骨折りをあざ笑ふ。

「マルシエ　トゥージュー　デイエ　モアン——アン、シエ？——マルシエ　トゥージ

ユー　ディエ！』……

そしてこの心ならずも後れる彼は、——その女の歩き振りのしなやかな誘惑に、その眼なざしの黒い炎に、その歌の粗野な美音に全く魅せられて——女がその愚弄的な微笑をして待つて居る間、この女は誰れであらうかと次第に怪しむ。

がガブーは——遙か遠くから後を追うて様子を見て居り、その無效なウークレを時折響かせて居るガブーは——突然飛び上がり、立ち停まり、後ろ向きになり、大急ぎて歸る、一歩毎に恐ろしげに身に十字を切りながら。

彼は彼の女だといふことが、それて分かる標を見たのである。……

六

……誰れもこれまで彼女を夜中見たものは無い。彼女が現はれる刻限は日の光の滿潮時である。彼女は——物の色が全く此世のものならぬ烈しさを帶びるやう思へる時——グレナディラの花の間を此方へ彼方へ矢の如く飛んて居る、生きて居る火に包まれた蜂雀の閃きすらも、土地が緑の恍惚狀態にあるが爲めに、夢のやうに思はれる時——風の無い眞晝

の白い炎と死の如き靜けさの折――に出て來るのである。……

大抵は彼女は、栽培地から栽培地へ、小村から小村へとうねり續き、時には渺茫たる瑠璃色の大海が一眸の裡に入り、時には空までも繁りに茂つて居るモルンの影濃い、山路へ出て來る。が、大きな町の近くへも時折歩いて來る。サン ピエールの大會堂の後ろの、碇泊所の墓地を見渡す大道へ日中に姿を見せたことがある。……質素な衣物着た、丈の高い、不思議な美しさの、光の中に無言で立つてゐて、その眼を太陽へ据ゑて眺めて居る、黑い女である！

七

日が傾く。遙か彼方の西方の高地は、その後方の空が黄ばんで居る處は、その眞珠の如き灰色を濃い青に變ずる。そして近い山々の暗くなりゆく窪みには、奇妙な影が――冴えぬ藍色、煤けた紫色、火山岩爐の赤化が――人目を欺く夕暮れの霞の爲めに一瞬時復活した太古の火山の色が――日の光の變はるに連れて濃くなつて行く。そして甘蔗の休め地は赤味がかつた暖かい仄かな色味を帶びる。遠くの或る高地の斜面では、それが、日が沈む

に連れて、夕燒けを背に細い金色の髮のやうに——生きて居る山の皮膚に生えて居る金髮のやうに——見える。

なほもかの女とその追從者は一緒に歩く——高聲で無駄口ききながら、笑ひながら、時折一くさりの唄をうたひながら。はや今は谷は餘程二人の後方になつて居る。——二人は東方の連峰を横ぎる嶮岨な路を——煩さく絡む纏繞植物に呼吸が詰まりさうに思へる林の中を——登つて行く。その女の影とその男の影とが——その脚下から擴がつて——素敵に長くなつて——時には變じり合つて——道を一パイに充たす。時には、曲り目の處で影は高まつて木へ上る。木の葉の大きな塊が、薄れ行く光を捉へて、火のやうな不思議な色になる。——太陽の緣が、西方に行列をつくつて並んで居る火山性の峰々の半面影像のうちの菫色の一つの瘤に觸れさうになる。……

熱帶の日沒は日出よりも壯大である。……海から迅速に燃え上がつて來る黎明は、北國の如くに、何等先驅の赤らみが無い、何等素晴らしい榮えが無い。その一番美しい色といつても、鹿子色か鳩羽色か黃かて——地平線と海とには、古い冴えぬ金のやうな淡黃色があるだけてある。然し非常な暑さの一日が靑い空氣を遍く半透明な水蒸氣て飽和した後て

は、日が再び眼界の縁の下へ落つる時、物の色が不思議に縺つて居り、誇大されて居り、超越的になつて居る。日が死ぬる殆ど一時間前、その光は色合を變へ始める。そして地平線全體がレモンの色に黃ばむ。それからその色合が、口には言へぬ莊麗な幾多の調子を經て、濃くなつて橙黃色になる。そして海はライラックになる。暫時は橙黃色が世界の色である。そして圓盤が沈むと、藍色の暗がりが　降りて來るのでは無くて、恰も大地からの如くに昇つて來る、――それも四五分のうちにである。そしてその短い四五分の間に、峰々山々が、非常に濃厚な天鵞絨のやうな紫に黑ずんで、半ば天心まで燃え立つ猛烈な火を背に――絕大な强烈な朱(ヴアアミリオン)の炎を背に――輪郭を明らかに示して浮かんで見える。

……かの女は突然大道を去つて――大道から反れて左手の森の中へと通ずる嶮しい細道を登り始める。ところがファアファアは躊躇する――一寸立ち停まつて振り返る。太陽の大きな橙黃色の顏が沈むのが見える、――行列をなして居る不思議な峰々が喪の如き黑さを身にまとふのが見える、――その峰々の後ろに怖ろしい程空が朱に燃えるのが見える。そしてその左手の暗くなり行く小徑を再び見上げる時、或る漠たる恐怖が彼を襲ふ。何處へこの女は行かうとするのか知ら？

『オティ　ウー　カレ　ラ？』と彼は叫ぶ。
『メー　コム　サ！――シミン　タラ　プリ　クートー――クーマン？』
それは或は一番近道かも知れぬ。――でも、フエル・ド・ランス蛇が！……
『ニ　セバン　シャーアン　ピル』
いゝや、一匹も居はせぬと彼女は斷言する。その道は彼女は毎度通つて居るので能く知つて居る。
『バ　ニ　セバン　ピエス！モアン　ニ　クーティーム　バッセ　ラ。――バ　ニ　ピエス！』
……彼女は先きになつて進む。……二人の後ろには素敵な夕榮えが深くなる。――二人の前は薄暗がりである。シーバやバラタやアコマの節瘤だらけな巨大な形が、通つて行く時、朧に隈に映る。垂れ下がつて居る蔓の物の塊が、薄れ行く光に、血の色調を帯びる。暫くの間は、フアフアには前に立つて行く女の姿が明らかに見分けられる――それから路が之の字形に日蔭へ入つて行くと、その白い頭帕布と白い肩掛とが見えるだけである。――それから木の枝が頭上て出會ふ。もう女の姿が見えぬ。驚き恐れて彼女に呼ばはる。
『オティ　ウー？――モアン　バ　ペ　ウーエ　アリヤン！』

尖が分かれて居る、垂れ下がつた蔓の端が冷たく彼の顔を横に綱張りする。大きな螢がピカリピカリと横を飛ぶ——風に吹かれて、炭火の小さなのが飛ぶやうに。

『イシットー——クインベ　ランマン・モアン！』……

その手を捉へて道案内するその手が何と冷たいことであるか！……女は、その道を宙に覺えて居る者のやうに、速かに着實に歩いて行く。またもや雁木形になる。そして白熱の色が再び木々の間に燃える——木の葉で編んだ高い圓天井が頭上で裂けて、其處から最初の星の光を洩らす。カブリット・ボアが歌ひはじめる。二人は明かるい空の下にその山の絶頂に達する。

森は今や二人の足下に在る。道は東の方へ曲つて、薄暗がりに眞つ黒な羊齒が長く搖れて居る中へ——素敵に大きな黑い羽毛が波打つて居る中へのやうに——入つて行く。その先きの紫色の中を透して、其處よりも高い土地が朧氣に浮き出て見える。そして眼には見えぬ或る深みから、大きな鈍いざあざあいふ音が夜へ立ちのぼる。……それは走り流れる水の言葉であらうか、或はただ、其處から夜が始まる峽谷から發する蟲の聲の嵐に過ぎぬのであらうか？……

女の顔はその立つて居る暗がりにある。ファファの眼は西の空の鐵色がかつた深紅色に

向けられる。彼はなほ女の手を捉へて、それをあやして、――低い聲で何か女につぶやく。

『エス　ウー　アンマイン　モアン　コム　サ？』と女は、殆ど囁き聲で尋ねる。

あゝ、さうとも、さうとも！……生きて居るどんな物にも優して彼は彼女を戀して居るのである……どの位にだつて？このぐらゐに！グーオ　コム　カーズ！……だが彼の女は彼を疑つて居るやうである――幾度も幾度もその問を繰り返す。

『エス　ウー　アンマイン　モアン？』

そしてその間――おとなしく、あやすやうに、氣のつかぬほどに――路の傍へ少しづつ近く、羊齒が黑く搖らめいて居る處へ近く、その向うから湧いて起こる大きな鈍いざあざあいふ音の方へ近く、彼を引き寄せる。

『エス　ウー　アンマイン　モアン？』

『本當、本當』と彼は答へる、『ウー　サーヴ　サ！――ウイ、シエ　ドゥードゥー、ウー　サーヴ　サ！』……

すると彼女は、突然に――彼と最後の赤い日の光とへ、怖ろしいその變つた化物顏を向けて――ワッと物凄い笑と共に

『アト　ボー！』(註)

と叫ぶ。

ほんの一刹那彼にその女の名が分かる。――その姿を見て仰天して、眼を廻はして反り返ると、後ろへ、二千呎の崖から山の早瀬の岩の上へと、落ちて砕ける。

註　『さあ接吻なさい』といふ意味。

疱瘡

一

千八百八十七年、サン　ピエール

謝肉祭の季節に田舍から此町へ歸つて來る者は、居心地の宜い貸し間が見附からば仕合せである。自分は稍ゝ邊鄙な街路でも——非常に急な坂で、身體の釣り合ひを失つて町を横に轉がり落つる惧れがあるから、それを降る途中嚔するのも實際危險なほどの街路であつたが——一部屋手にすることが出來て幸福であつた。當世風な街路では無い、このルー　ドゥ　モルン　ミライルは。が、といつて、この異常な町には、特にこれと言つて當世風な街路はありはせぬ。それに、近處が貧乏であればあるほど、其處の人間の本性を幾分か知る機會は層一層多い譯である。

一つの慰藉は、隣家にマム・ローベルが居ることとである。此の町で一番上等のブー（外

來人は直ぐそれが好きになるあの長い細いマルティニークの葉卷煙草）を店にあきなつて居り、この島に行はれて居る古昔の話や傳說の、自分が知つて居る他のどんな人よりか珍らしいのを話してきかせて吳れる女である。マム・ローベルはヨン　マシャンヌ　ラバコットてある、即ち、それて貧乏人が暮らして行くやうな廉い食べ物を賣る女である。果實と熱帶の野菜、マニオクの粉、『マカダム』（鹽魚を添へたシチュー・ライスの妙な馳走――ディリ　エビ　クーブーヨン　ラモリ）アクラ其他の品てある。が、ブーが多分一番利益になるものであらう――ベケがそれをみんな買ふ。マム・ローベルはまたお醫者といつたやうなものである。近處て誰れか病氣になると　いつも此女を迎ひに來る。そしていつも行つてやつては、大抵は治す　モルンへ行つて自分で採集するのだが、藥草の知識と用法に長けて居るからである。が、この勤勞に對しては決して何等の報酬を受け取らぬ。彼女はその直ぐ近邊での貧乏人の母といつたやうな者である。どんな人をも助ける、どんな人の心配事にも耳を貸す、どんな人にも何かの慰藉を與へてやる、どんな人をも信賴する、そして人間の性質の無感謝な方面を隨分と見てゐるが、それが爲め惡るく思つて居る様子は一向見えぬ。自身も實際貧乏てあるに相違無いが、どんな人もが要するもの悉くを身に有つて居るやうに思はれる。鋏刀と箒と除いては、これは貸せるのは緣起が惡るいと

思はれてゐるからて、それを除いてはどんな物ても近所の人に貸す。そして、最後に、若し誰れかが魔法にかかつて居はせぬか（クイムボアゼ）と氣遣ふと、マム・ローベルはその魔法をほどく物をその人に提供してやる。……

二

二月十五日

……撒灰水曜日。てはあるが、最後の變裝舞踏の人達が今日午後出かける。謝肉祭はマルティニークては他の處よりか一日だけ長く續くからてある。

一月の初週このかた、田舎地方は到る處、毎日曜日に――大道てタムタムの音に合はせて踊つたりして――それも、サン ピエールてこれまて見たことの無いやうな、亞非利加踊りを踊つたりして――盛んな祝祭があつた。が然し此の町ては陽氣さ加減は前二三年ほどには無かつた。――この人達の生得の快活さが、恐ろしいそして馴染みの無いお客が――疱瘡が――此島へ到來した爲めに限に見えて影響を蒙つたのてある。そのお客は汽船てコロンから來たのてあつた。

……九月のことであつた。附近の英國植民地が擧つてマルティニークに對して交通遮斷を宣した時は患者は二人しか無かつたのであつた。すると他の西印度植民地も同じく交通遮斷をした。疱瘡の患者がたつた二人。多くの憤慨しての抗議に知事ども、領事どもは答へて言つた、『が、一と月經つと二千人になるかも知れぬ』と。西印度の人民には、この病氣は英吉利や合衆國には分かつて居ない或る意義を有つて居るのである。撲滅的な疫病を意味して居るからである。

二箇月後には、フォール・ドゥ・フランスの小さな町は、死の風に拂はるゝが如くに、この流行病の爲めに一掃された。それからこの惡疫は擴がり出した。十二月に、クリスマス頃にサン　ピエールへ入つた。先週は患者百七十三名と報告された。だから重大な流行病なること殆ど確實である。フォール・ドゥ・フランスには住民は僅に八千五百人あつたのである。その郊外を含めないで、サン　ピエール本市の三區には二萬八千人居る。この病がどんな荒廢を此處て働くか分かつたものではない。

三

……三時、晴れて居て暑い。……遠くに、鼓の重い音がして、段々と近寄つて來る。タヽム！――タヽム！タヽムタヽムタヽム！グランド ルーの街路は待つて居る群集が兩側に立ち列んで居る。そしてその小さな四角な廣庭――バテリー デスノッツ――にはベケが群れ集つて居る。タヽム！――タヽムタヽムタヽム！…… 自分の街路にも――その行列の先頭がちらと見えたなら、直ぐその大通へ下りて行かうと待ち構へて――人々が戸口に集まり、また窓から顔を出しはじめる。

『オティ マスク・ア？』覆面の踊り手は何處？

それはミミ坊やの聲である。この女の子は、その横に居る、何處に覆面の踊り手が居るのか、その子同樣に知りたがつて居る、二人の子供に尋ねて居るのである。一人は、綺麗な髮毛の、眼の青い小さな、三歳になる弟のモーリス――今一人は四歳になる、二つ年下の、妹のガブリエルである。

この三人が、街路で、家の門口で遊んで居るのを自分は毎日觀て居る。輝かしい白い皮

眉と、黒い髪と、笑を含んだ黒い眼とを有つて居るミミが一番可愛らしい――三人とも普通はづれて可愛らしい子供てはあるが。その母の美しい褐色の髪毛が大抵は菫色の肩掛て蔽はれて居るといふ事實が無いなら、諸君はこの三人を世界中のどんな子供に劣らず白皙だと必らず思ふ事てあらう。ところて、此處から大して遠く無い處に住まつて居るが、もつと閑靜な街路に、しかも召使を多勢使つて居る富裕な家に住まつて居る、誰れもそれを白人だと知つて居る子供が――フリュール・ダムールの一つの花が他の一つの花に似て居ると同じほど、この三人の子供に似て居る子供が――居る。實際、　――衣物を見れば分かるがさうて無いと　　どつちがどつちと何うしても見分けられぬほどにこのミミに似て居る今一人のミミ（尤もその家庭てはその名は斯うては無いが）が居るのてある。ところが、繻子の白い上靴を穿いて居るミミの最も不幸な經驗は誰に、決して靴といふものを穿かぬこのミミと、街路て遊んて居る處を或る時見つかつて頂いた、その處罰なのてある。どんな不運が二人を斯く一緒にならせたのてあらう？――しかも最も困つたことは、一目見るなり二人が互に好き合つたことてあつた！……片方のミミは可愛らしい小さな有色の女の子に物を言つてはならぬとか、又は、このミミは同じ年齢ごろの白色の子供と遊んては宜くないとか、いふ爲めては無かつた。患者があるからてあつた。……自分が今それに就い

て語つて居る他の子供が、今眼の前て遊んで居る子供等よりも一層可愛らしいとか一層美しいとか一層利口だとかいふ爲めては無かつた。――また、世界一番の精巧な檢鏡家が、此繻子のやうな美妙な皮膚の間に、想像し得べき何等かの人種的差違を發見し得たとか得なかつたとかいふ爲めては無かつた。ただ、人間の本性なるものが、ハガー〔埃及人。アブラハムの妾。イシユマルの母〕がサラ〔アブラハムの妻。イサツクの母〕の嫌惡を知り、またその子の爲めに事がアブラハムの眼には重大に映つた日このかた、餘り異つて居らぬが爲めてあつたのてある。……

……この子供等の父は彼等を非常に愛してゐた。彼等に家庭を――要塞區に家一軒――備へてやり、月々二百フランの扶持を與へてやつた。そしてその未來は心配無いと確信して死んだ。ところが親類の者共が、種々な手段を講じ拔け目の無い辯護士の助を藉りて、法廷て爭つて勝ちを制した。……母のイゾールは家を失ひ一文無しになり、しかも養ひ育つべき三人の子供を抱へる身となつた。が、彼の女は雄々しかつた。――彼の女は永久に上流社會の服裝を棄てて、ドゥイレットと肩掛（フーラール）を――人種を自白する衣裝を――着けて仕事に從事した。今なほ眉目うつくしい女て、その菫色の肩掛と長いゆるやかな上衣を着けて、白い覆面をして居るのだとしか思はれぬほどに顏が白い。……

『ギニ　ウエ！――ギニ　ウエ！』と子供は互に叫ぶ。――『見に行かう！』鼓の音は

近寄つて來る。――誰れも彼れもグランド　ルウへ走つて行く。……

四

タム！――タム！――タムタムタムタム！……その光景はバテリー　デスノッツから眺めるのが面白い。上手（かみて）のルー　ペイセットに――岡を上（のぼ）つて居る嶮岨な街路すべての上手に――遙か遠くに、派手な色の群れが見える。薔薇色や青や硫黄色の衣物着た覆面の踊り手の塊なのである。……それから何たる轉げ落ちが始まることであるか！――その團體々々が坂路を下る時、色の何たる轉がりが、跳び上がりが、注ぎ流れがあることかよ！同時に、北から南から、ムイヤージュとフォールとから、非常に多人數の樂隊が二つグランド　ルーの通（とほり）へ入る。舞踊の大きな組合なのである。この二つは――サン・スーシ組とアントレピット組といふ。兩者は競爭者である。彼等は、あの謝肉祭の唄を――十中八九は殘酷なあてこすりて、その地方的意味は、その卽座の文句を思ひつかせた出來事を知つて居ない者には分からぬ唄であるが――そしてその唄の文句は大抵は野卑か猥褻なもかて――そしてその囃し文句は直ぐと人が覺えて、この島の町々村々で唄ひ囃すことになるのである

が――そんな唄を作る者なのであり、歌ふ者なのである。その動機は、そのあてこすりは、その惡意は下劣にしても、その囃し唄そのものは、節廻しが殊に勝れて旨いので幾代の間も殘る。だから謝肉祭の唄の槍玉にあげられた者は、自分の缺點なり自分の非行なりを人が忘れて呉れるやうにと希望は出來ぬ。墓へ入つたずつと後まで、その唄を人が歌ふからである。

……それから十分經つと、其街路の全長が、喚いたり、叫んだり、身振りしたりの無數の覆面舞踏者で一パイになる。人混は層一層非道くなる。――鼓は無言で居る。みんな總踊りの開始の合圖を待つて居るのである。冗談や惡るじやれが到る處で行はれる。金切り聲、喚き聲、おしやべり聲、笑ひ聲から成る大喧噪がある。此處其處て、謝肉祭の唄の一くさりを歌つたりして居る。『カムブロンヌ、カムブロンヌ』の歌だとか、或は『ティファム・ラ　ドゥー、リ　ドゥー、リ　ドゥー』……『あの子可愛や蜜よりも』を。――此囃し文句は、其歌の他の處が流行らなくなつても人は覺えて居る事であらう。褐色の手が、其澤山の覆面の中からぬつと出て、見物して居る白人の鬚を引張つたり顏を撫でたりする。……『モアン　コンネート　ウー、シエ！――モアン　コンネート　ウー、ドゥードゥー！バ　モアン　ティ　ドゥミ　フラン！』と言ふ。さういふ半フランは斷るが宜い

――今日其覆面の踊り手共が何をする積りて居るか分からなくとも。……すると、其太鼓が總て突然に一緒に鳴り出す。どの樂隊もはやし始める。其氣狂はしいごたまぜ物が五色眼鏡式に固まり合つて秩序めいたものを造る。そしてそのどえらい大行列ての舞踏が始まる。ムイヤージユからフォールまで音と色との全く絶え間無しの一と流れてある。上の尖つた帽の上がり下がり、手の振れ搖り、足のちらつきて、見て居る者は眼が眩む。――そして總てこれが大うねりをして――右へ左へと規則正しい動搖を爲して――進んて行く。……みんなが通つてしまふには少くとも一時間はかかる。そしてその一時間は通るのに充分値する一時間てある、樂隊の後から樂隊と渦巻いて行く。樂手はすべてカナリヤ色の服裝ての女のやうな或はまた僧のやうな扮裝て居る。――その前には踊り手が氷滑りする者のやうな運動をして、踊り戻りしつつある。その後ろには、みんなが、その後を追ふが如くに跳びあがつたり手を振つたりして居る。樂隊の多くはクリーオールの曲を奏して居る――が、サン・スウシ組の樂隊は目下流行の最近の佛蘭西歌――『[註]プティ　アムウリユーオー　プルーム』（羽毛のある小さき戀人）――の節をやつて居る。この歌は今誰れも彼れも諳記して居るやうてある。やつと五つか六つになる子供がそれを歌つて居るのを耳にする。その四節のうち二節は頗る平凡てあるが、好い文句がある。が、斯く突然に人氣

に投じたのはその文句の爲めては爲くて、確にその節に賴るのてある。

註

プティ　アムウリユー　オー　プルーム、
　アンフアン　ダン　プリラン　セジユール
ヴー　イグノレ　ラメルトウーム、
　ヴー　パーレ　スーヴン　ダムウール……
ヴー　メプリゼ　ラ　ドルール、
　レ　サロン、エ　レ　ビジユー。
ヴー　シエリセ　ラ　ナトユール、
　プティ　オアゾー、ペクエテ・ヴー！

ダワイエ　ラバ、ダン　セツト　エグリース、
　オーブレ　ダン　コンフエツシヨナール、
ル　プレートル、クイ　ヴー　フエール　クロアール　ア　リーズ、
　クアン　ペイゼ　エ　アン　グラン　マル。——
プール　プルーヱ　ア　ラ　ミニヨンヌ

クアン　ペーゼ　ピヤン　フエー、ピヤン　ドウー、
ナ　ジヤメ　ダム　ペルソンヌ
プティオアゾー　ペクエテ・ヴー！

〔反　譯〕

小さき戀人　　翼を有てる！
光りまばゆき　　空なる子等よ！
戀を求めて　　汝は語る。
負はん悲み　　汝は有たじ。
金きせ安逸、　　時好の珠玉、
うつくしの部屋、　　汝(な)は顧みず。
汝(なんぢ)が戀ふは　　自然のまこと。
可愛き小鳥よ、　　戀ひ啼け媚びて！

リズの懺悔を　　聞く僧見よや。
祝福されざる　　男女のキスは

いと歎くべき　罪にてありと、
思はしめんと　その子に語る。
無念ならめど、　我れ明かすべし、
こころからなる　キスせる爲めに
天罰下りし　ためしはあらじ。
可愛き小鳥よ、　戀ひ啼け媚びて！

五

……この行列が通る街路街路に異常な事が出來しつつある。疫病に取りつかれて居る女共が、起き出てて衣裳を着け――この怖ろしい病氣の爲めに早それと見分けられなくなつて居る顏に面(めん)をかぶり――踊り手に加はらうとして足許危く街路へ出る。……ルー　ロンシャンでもさう、ルー　サン　ジャン・ドゥ・デューでもさう、ルー　ペイセットでもさう、ルー　ドゥ　プティ　ゴルサイユでもさうである。そしてルー　サント　マルトではこの病に罹つて臥て居た若い女が三人あつた。それが角笛の音を聞き、歌に合はせて足を

バタバタ言はせ手をたたく音を聞く。――窓の條板越しに外の覆面踊り手を見ようとして起き上がる――するとクリーオール生得の踊りの熱情が彼等を捉へる。一人が叫ぶ、『アー！ヌー　ケ　ビヤン　アミユーゼ　ヌー！――セ　ザツフエー　シ　ヌー　モ！』（私達も勢一杯樂まう。後で死んでも構やせぬ！）そして三人とも假面をかぶり、その群集に加はり、踊りながらサバヌへ下り、川の橋を渡つて、フォールの高い街路へ上る、病毒を感染させながら！……決して異常な實例では無い、それは。踊り手の隊伍には疱瘡に罹つて居るものが澤山に、澤山に居るのである。

六

……服裝は稍〻見物を失望せしめる――尤も、人眞似の衣裳には非繪畫的でも無い或る一般的特徴がありはするけれども。――例へば、色の選擇に深紅とカナリヤ黄が優勢なこと、先きが尖つた頭巾と高い冠り物とが目立つて好かれて居ることがそれである。眞似しての宗教的服裝が――普通は深紅又は黄色、稀に紫色の――フランス僧、ドミニク僧又は悔悟僧の服裝が――またこの見世物の一般的色調の著しい要素を成して居る。歴史的な服

裝は一つも無い。度外づれのもの法外なものは多くは無い。ただ三四の『吸血蝙蝠』の冠り物が、山の高い帽子と頭巾とだけ續いて居るので殊に目立つ。……でも衣裝に、思ひ切つて地方的な趣向のもので、注目に値するのが少々ある——コンゴ・べべ（卽ちティ・マンマイユ）、ティ　ネグー　グーオ・シロップ（『小さな糖蜜黑人(グロ)』）それから女惡魔などそれてある。

コンゴといふは、栽培地の勞働者が着て居る衣物をその儘模したゞけのものである。女には、鼠色のキャラコの襯衣(シャツ)とペルカリヌの粗い袴(ペチコオト)。それに地の粗いハンケチ（ムウショア　ファアタ）二枚。一枚はその首への、一枚はその頭への。その上に素敵に大きな稈帽をかぶる。——跣足か、または手製の粗末な草履を穿くかして歩く。そして鋤を手にして居る。男には、その服裝は、粗い地質の鼠色の襯衣(シャツ)、青い帆木綿の股引、腰のまはりを結はへる大きなムウショア　ファアタ、それにバクエシャッポ　卽ち、マルティニーク特有の棕櫚藁編みの巨大な帽。跣足で歩く。そして彎刀を提げて居る。

赤ん坊衣物の（アン　べべの）若い娘の一團は見て實際美しい。この服裝はたゞ、刺繡のあるだぶだぶの襦袢(シュミーズ)、緣にレース飾のある寬い股引(パンタレット)、子供のキャップ、これだけて成つて居る。そして全體が樣々な色の派手なリボンで飾つてある。衣物は短くて脚の大部分が

露はに出て居るから、色染めの靴下と華美な上靴を見せつける充分の機會がある。

『糖蜜黑人(ニグロ)』はその腰のまはりに布片(きれ)一枚附けて居るだけで何も着て居らぬ。――その全身と顔とを、煤と糖蜜との非道い混ぜ物で塗つて居る。それは原(もと)の亞弗利加祖先を見せて居る積りなのである。

女惡魔(ディアブレッス)は數は多くは無い。女惡魔に扮するには非常に丈の高い女でなければならぬからである。いづれも黑い衣物で、白い頭帕布(タルバン)と白い肩掛(フーラール)を着けて居る。そして黑い面(めん)をかぶる。彼等はまたボム(錫製の大きな鑵)を手に持つてゐて、始終それを石鋪道へ落とす。そして彼等は跣足で歩く。……女惡魔(本當のビタコ言葉では『ギャブレス』)はマルティニークの珍らしい迷信を現はして居る。時折眞晝に、美しい女黑人が無言で或る孤立した栽培地を通つて――甘蔗畠に仕事して居る者に微笑を見せて――後に隨いて行くやう男を誘惑する。が、その後を追ふ者は二度と決して歸つて來ぬ。だから野働きの男が不思議にも見えなくなると、その伴れの者共は『イ　テ　カ　ウーエ　ラ　ギャブレス!』と言ふ。……この女惡魔のうちで一番丈の高いのが先頭に立つて歩いて、『ジユー　ウーゼ?』(もう夜明けかな?)といふ問を歌ふ。すると他の者みんなが『ジユー　パンコ　ウーゼ』(まだ夜は明けぬ)と合唱して返事する。

この群集が着けて居る面のうちには怪異なものは極めて少い。大抵は單に、橢圓形の規則正しい人間の顏の形をした、針金製の白い面である。——そして、内からは充分能く透し見が出來るが、着けて居る人の顏は絕對に分からなくする。針金で出來て居る面のこの特別な型が、この觀物全體に言ふに言へぬ靈的な色調を與へるのだなと、自分は直ぐと感じた。少しも滑稽味は無い。見好くもなければ醜くも無い。霧のやうに色無してある——表情無してある、空虛である、死である。——それは蒸氣の如く、雲の如く、顏の上に存在してゐて——その背後は妖怪的に空虛であるといふ考を起こす。……

七

……今度は、ブーエネをやりながらアントレピードの組が來る。ブーエネといふのは舞踏の歌であり——同時にまた、獨得なそして無拘束な踊り方の名でもある。——踊り手は顏と顏と向かひ合つて前進し又後退する。互に抱き合うて、締め合うて、離れてはまた抱き合ふ。非常に古い踊りてある、これは——亞弗利加起原の。多分敎父ラバが千七百二十二年に斯う書いて居るものであらう。——

それは穩當なものでは無い。にも拘らず、亞米利加の西班牙領クリーオールに非常に好かれ、非常に流行するやうになり、今ではその娯樂の主たるものとなり、その禮拜にすら入つて來て居るほどである。教會ですらそれを踊り、行列にも踊る。そしてクリスマスの夜には、教會の唱歌席の、しかもその鐵格子の直ぐ前に建てられる舞臺でそれを踊らずには居らぬ。救世主の誕生に對して、この善人達が現はす歡喜にこの國の人達も與り加はるやうにといふのである。……

八

……毎年、謝肉祭の最後の日に、『ボアボアの埋葬』と稱する道化儀式があつたものである。ボアボアといふのは市生活に於て或は政治に於て一番不人氣なものを諷刺した木偶であり形像である。このボアボアは、サン ピエールの街路総てを嚴肅を裝はうて練り歩いてから、土に埋めるか『水に沈めるか』――海へ投げ込むか、されるのであつた。……ところが昨日、踊り手の仲間の者共が、疱瘡のボアボアを――今度の疫病を表はす一寸法師を――埋める考で居ると吹聽したのであつた。だのにそのボアボアがその姿を見せぬ。

泡沫(ラ・エレット)はそれを茶化すには餘りに怖ろしい訪問者である、我が友よ。――君等は嘲笑(あざわら)はぬのであらう、よう嘲笑へぬのであるから。……

いや、さうでは無い。そんな勇氣のある者が一人居る。――マシャンヌの眞似して、その針金の面の後ろから大聲出して居る黄色い化物が居る。から叫んで居る、――『サク イ レ クアトーズ グレーヌ ラ ヱレット ブー ヨン スー?』(誰れか買ひませんか、痘痕(あばた)十四を一スーで?)

その冗談の後て一と笑ひもきこえぬ。……今日から丁度一週間目に、可哀相に眞似の化物よ、お前は痘痕を十四よりかもつともつと澤山に貰ふてあらう。お前は一スーだつて出さんて宜いのである、そしてお前が今かぶつて居る面(めん)よりか無限により能くお前を扮して呉れるてあらう。――お前にもう一度此の街路(とほり)を――七フランの棺桶に入れて――通らせる前に、お前の身體(からだ)へ皆が生石灰を潛びせることてあらう!……

九

それから雜多な色をした騷々しい流が横を囂々と通り――終にルー デ ウルスリーヌ

を通つてサヴンヌへ曲り――ロクスラーヌの新しい橋を渡つて、フォールの古い區へとなだれて行く。

　すると突然にひつそりする、皆が立ち停まる。――鼓を打たなくなり、歌聲が歇む。すると化物や惡鬼や女惡魔が俄に四方八方へ散らばるのが自分に見える。家の中へ入つたり、小路を驅け上つたり、――戸口の裏に潛んだりする。そして群集も四散する。するとその中を眞つ直ぐに、非常な早足で、小さな鐘を鳴らす小僧を前に立てて、法衣をまとうた僧が一人來る。セ　ボン・ディエ　カ　パセ！（『今通るのは善なる神だ！』）その敎父は疫病の或る犧牲に對して『臨終の聖餐』を携へて居るのである。ボン・ディエの面前へ惡魔や女惡魔の面をかぶつて出てはならぬのである。

　僧は通り過ぎる。覆面の踊り手の流はその不吉な者が通つた後へまた塊まる。――鼓がまたどんどんと鳴る。踊りがまた始まる。そしてその奇怪な人眞似の行列は急に退いて見えなくなる。

一〇

夜になる。――その覆面の踊り手は、時間の經つに從つて段々と亂暴になる熱帶地方の妙な舞踏を踊りに、舞踏室へ群れ集まる。そして暗い街路を、惡魔が最後の謝肉祭の巡回をする。

往來を横ぎつて吊るしてある舊式な石油ランプの明かりで、その服裝の細かしい部分を少し自分は見分けることが出來る。赤い衣物を着、血の色をした忌まはしげな面をつけ、その四方が鏡で出來て居る帽をかぶつて居る。――そしてその冠り物全體の上に、赤い提燈が載つて居る。不氣味にまた年寄りに――惡魔は世界よりも年が上なのだから――見えるやうに、馬の尾で造つた白い假髮をかぶつて居る。街路を下つて來る、殆どその丈の高さほど跳び上がりながら――人間界の意味を有たぬ言葉を唱へながら。そしてその後に三百人許りの男の兒が跟いてゐて、惡魔の唱へる文句に對して――みんな手を打いて、そして節奏といふ感覺が亞弗利加人の生來の音樂的感情に、西班牙亞米利加全體を壓へるに足るほど力强い感情に、どんなに强く入つて、そして其處に所謂『クリーオール音樂』なる

ものの紛れも無い特徴を造つて居るか、を證明するほど、同時に一齊に聲を立てて——合唱をやる。

『ビムボロ！』
『ジマボロ！』
『ビムボロ！』
『ジマボロ！』
『エ　ジムボロ！』
『エ　ボロ・ポ！』

——斯う惡魔は歌ひ、その合唱隊は囃す。惡魔の聲は洞からのやう、奈落からのやうであり、——井戸の底で打つて居る鼓の音のやうにその胸から響き出る。……ティ　マンマイユ・ラ、バイル　モアン　ラヺア！（聲呉れ私に、子供！——聲呉れ私に！）するとみんながその後で、幾つもの流川が走り流れるやうな歌ひ聲をして、そして三度手を打つて、囃す、『ティ　マンマイユ・ラ、バイル　モアン　ラヺア！』と。……すると惡魔はルーペーセットの或る住家の前へ立ち停まつて、雷音を揚げる。

『エー！マリー・サン・ダン！――ミ！ディアーブ・ラ　デルロ！』

これは確に惡意あつての仕業である。彼が遺恨を抱いて居る者が誰れかその家に住まつて居るのである。……『おい！齒無しのマリーよ！見よ！惡魔が居るぞ外に！』すると合唱隊はその言ひ終はるを待つて直ぐ囃す。

惡。『エー！マリー・サン・ダン！』……

合。『マリー・サン・ダン！ミ！――ディアーブ・ラ　デルロ！』

惡。『エー！マリー・サン・ダン！』……

合。『マリー・サン・ダン！ミ！――ディアーブ・ラ　デルロ！』

惡。『エー！マリー・サン・ダン！』……云々。

到頭惡魔は、いつも同じ歌を歌ひながら、大通へ下りて行く。――自分は合唱隊の後を追うてサヴンヌへ行く。其處でその一團は、フォールの古い區の高い街路を登るべくと、ロクスラーヌに掛かつて居る新しい橋を指して進む。ところが、橋を渡ると、歌が變はる。

惡魔。『オティ　ウエ　ディアーブ・ラ　バッセ　ラリギエ？』（惡魔が河を渡るの

を何處て見た？）

するとその男兒總てが、前とは別な拍子て、然しみんなきちんと合つた樂な聲て、その言葉を、『オティ　ウエ　ディアーブ・ラ　パッセ　ラリギエ？』を繰り返す。

惡。『オティ　ウエ　ディアーブ？』……

合。『オティ　ウエ　ディアーブ・ラ　パッセ　ラリギエ？』

惡。『オティ　ウエ　ディアーブ？』……

合。『オティ　ウエ　ディアーブ・ラ　パッセ　ラリギエ？』

惡。『オティ　ウエ　ディアーブ？』……云々。

夜中頃に惡魔とそれに隨いて居る者共が歸つて來たので自分は睡眠から覺まされる。――みんな別な節（ふし）を歌つて居る。『惡魔とゾムビは何處ても、何處にも眠る』（ディアーブ　エピ　ゾンビ　カ　ドミ　トゥ・パトゥット）といふのである。男の兒達の聲はなほも明らかて、甲高くて、爽かて――蛙の歌のやうに明らかてある。――みんななほも、全く以て不思議なほど精確な節奏（リズム）を以てしして手を打つて――一度々々殆ど全く大波の碎けるに

似た音をたてる。

惡。『ディアーブ　エピ　ゾムビ』……

合。『ディアーブ　エピ　ゾムビ　カ　ドミ　トゥ・パトゥット！』

惡。『ディアーブ　エピ　ゾムビ』……

合。『ディアーブ　エピ　ゾムビ　カ　ドミ　トゥ・パトゥット！』

惡。『ディアーブ　エピ　ゾムビ』……云々。

……が然し要するにこれは、勞働に歌ふ昔からの亞弗利加人の歌ひ方に外ならぬのである。荷物を頭の上で運ぶ習慣になつて居るが爲めに、歌に節奏正しく合はせて手が打てるやうに兩手が空(あ)いて居たのである。だから今でも、大西洋通ひの汽船に石炭を積み込む女共が、斯ういふ風に歌をうたひ、手を打つのを見ることが出來る。……

確に惡魔は非常に早く歩いて居るらしい。子供等が走つて居るから。――石鋪道を跣足がパタパタ言はせて居る音は、非道い夕立のやうである。……そのうち歌の聲が遠くに次第に微かになる――惡魔の大きなバッソ聲が聞こえ無くなる。――規則正しい間を置いて、囃し文句の漸次强音(クレスセンド)が――何百といふ男の聲が一緒に湧き上がる、荒々しいうねりが――

突風となつて、中音（コントラルト）の降（おろ）し風となつて耳に漂ふ、拍子正しい歌の引いて行く嵐が――きき分けられるだけてある。……

一

二月十七日

……イゾールはカランデユーズてある。

カランデユーズといふのは、美しいマドラス頭帕布（タルバン）を造つて、それに色を着ける女をいふ。といふのは、この冠り物の驚く許り花やかな黄色は染めて出來たものでは無くて、總て手て繪具で描いたものだからである。買つた時には、マドラス〔經が絹、緯が木綿の一種の織物〕は、地は淡綠か淡赤て、濃い青か紫か深紅か又は海老茶の太い筋が縱横に交はつて碁盤縞に卽ち格子縞になつて居る、ただ大きな長方形のハンケチである。カランデユーズはそのマドラスを兩膝の上に載せた廣い板の上へ置く。――それから、駱駝の毛の筆を手にして、その太い筋の間の四角い處をば、いつも亞刺比亞護謨が混ぜてある硫黃色の繪具て塗りはじめる。これを上手にするには、確實な眼と、頗る手堅い手と、長年の經驗とが要（い）る。……そのマ

ドラスが『光澤出し』（カランデ）されて、十分に硬くなり乾いてから、それを買ひ求める人の頭のまはりに、マルティニークの――グアドゥループやカエヌに流行つて居る型とは餘程異つて居る――優雅な型に折り褶んで、そして出來上がつた形に固着させてしまふ。だから其後は、帽子同樣に、褶んだり解いたりせずにその儘に脱いだりかぶつたりが出來る。マドラス一枚の光澤附け代は目今二フラン十五スーである。――そして、頭帕布（タルバン）を造るのに更に六スー。尤も謝肉祭時分や祭禮の折は別て、其節には値が上がつて二十五スーになる。……マドラスを頭帕布（タルバン）に造り上げることを『頭を結ふ』（マレ　ヨン　テート）と稱する。て、綺麗に折り褶んである頭帕布（タルバン）のことを『上手に結うてある頭』（ヨン　テート　ビヤン　マレ）といふ。……が然し、カランデューズの職業はなかなか儲けにはならぬ。マドラス一つ上手に光澤出しするのは二三日仕事である。……

がイゾールは暮らして行くのに光澤出しだけに手緣つて居るのでは無い。マドラス頭帕布を色どりするよりも、モレスクやシノアーズを造る方で餘計に儲ける。……マルティニークの者でそれが買へるほどの者は一人殘らず、モレスクとシノアーズとを着る。モレスクといふのは、薄い更紗（アンディエンヌ）の大きな寛濶な穿き心地の宜い股引て――鳥とか蛙とか木の葉とか蜥蜴とか花とか蝶とか小猫とかを現はした模樣があつたり――或は

恐らくは別に何も現はしては無くて、ただ唐草模樣（アラベスク）だけであつたりする。シノアーズといふのは、寛濶な胴衣て、本當の支那風の上衣（ブラウズ）に頗る能く似て居るが、いつも奇妙な模様のついた花やかな色のキャラコで出來て居る。この二品は、家（うち）て午睡をする間、執務時間後、また夜間、着用する。普通の衣服を着て日の中假睡をするといふことは、汗の爲めに恐ろしく濡れ浸るといふことてあり、そして眼覺めてから殆ど言語に絶した——恐らく、コール エクラゼといふ地方言葉が一番能くそれを言ひ現はして居る——疲勞を覺えるといふことになる。だから、誰れでも、午睡しにその部屋へ入るなり、輕いモレスクとシノアーズとを着て、心地よくまどろむ。こんなのの一着は頗る小ざつぱりして居り、時に中々綺麗て、そして非常に廉い（ただ六フラン許りである）——色は洗濯をしても褪めぬ、そして上等のが二着あれば一年は保（も）つ。……イゾールは機械縫（ミシン）ひで一日にモレスク二着と、シノアーズ二枚造ることが出來る。

……此處ては足踏み機械（ミシン）に對して偏見があることを自分は前に述べた。——クリーオールの女の子は、機械（ミシン）は健康を害すると思はせられて居る。裁縫機械の多くは、此處の人達の間ては、手て——曲肱（クランク）のやうなもので——動かされて居るのを自分は見た。……

一二

二月二十二日

……年老いた醫者達は實際それを豫言したのである。だが誰れがそれを信じたか？……遲鈍な人目には見えぬ、そして眠つてゐて死んだやうな或る物が、飜る衣物の風と萬千の踊る足の跫音とで――鐃鈸の凄い響と鼓の重い轟きとで――突然に目覺まされて猛烈な生を得てもしたやうである！四五日も經たぬうちに、病疫は恐ろしく增加し、その眼に見えぬ病毒は殆ど信じられぬほど傳播した。新患者と死亡者との數は連續的に二倍となり三倍となり四倍となつた。……

……人口が他よりも稠密な街路では、約百歩づつ間を置いて、今大きな釜でタアールを夜の間燃やす、市の費用で印度人が一人づつ附いて居て。それは空氣を淸める考で行ふのである。こんな不吉な火は、疫病の時と暴風の時とでなければ決して燃やさぬ。暴風の夜、巨大な波浪が底知れぬ大海から、世界中で最も恐ろしい海岸の一つたる此處へ、なだれ込んで、大きな船が岸へ打ちつけられる時、斯ういふ風に大火を燃やして、その明かりを手

緣りに此の海岸の勇敢な男子が、難破船の人達の生命を助けようと死物狂ひの努力をする。そしてその爲め屢々自己[註]の生命を捨てる。

註　數年前、暴風中に、西印度の汽船が、この島の海岸から危險な程近距離で、その推進機に綱が絡んで進退の自由を失つた。何處かで破れた船の索具が漂うて來てその船を包んだのであつた。その時乘組員の一人たる、マルティニークのムラットが、腰のまはりに綱を結はへ、口に小刀を啣へ、海へ飛び込んで、そしてその恐ろしい荒海の中で、推進機に絡んで居る索具を外づすといふ困難な仕事を成し遂げ、さうしなければその船は確に破滅するのであつたが、斯くしてその船を救つた。この勇敢な男はレジョン・ド・ノール十字勳章を貰つた。……

一三

二月二十三日

黑人の頭の上に落ちぬやう釣り合ひとつて載せられて、棺桶が一つ通る。それには——生石灰が上を蔽うて居る——バスカリーヌ　ズ——の屍體が入つて居る。

彼女は、確に、グランド　ルーの店の美しい女貢子のうちで一番美しい娘で——サンメ

レの稀な標型(タイプ)で――あつた。如何にもその若々しい顏は愛嬌があるので、一度それを見ると、その追想とその街路(とほり)の記憶とを離すことが出來ぬぐらゐであつた。が、昨夜、生石灰をそれへ注がないうちにそれを見た者は、元のその眼鼻立が見分けられなかつた――思つてもぞつとするやうな、或る茸のやうな、濃い鶯色のただ塊であつた。

……ところがみんなさうなりつつあるのである、有色の美しい女達が。醫者の意見では當代のもの悉く運命づけられて居るのである。……が、奇妙な事實は、オクトルーン〔八分の一の黑人血を有つ雜種兒〕の子供が一番この病に罹らぬといふことである。オクトルーンの母は――自分は種痘をして貰はうとはせぬが――その子供には種痘をして貰ふ。晴れやかな色をした子供で、この病氣に罹つて治りかかつて居るのを幾人も自分はまた見た。より黑い皮膚した階級のものと異つて、その皮膚には痘痕が殘らぬ。そして薔薇色の個處もしまひには全然無くなつて、些の痕跡も殘さぬ。

……此處では患者をば、或る軟膏を塗つてから、芭蕉の葉で包む。……芭蕉の葉の需用は非常なものである。平素は芭蕉の葉は――殊に、まだ解(ほぐ)れずに居る、人間の手で出來るどんな織り地よりかも軟らかい、若葉は――色んな芭布(ばつぷ)に使ふ、そして、大小と品質に依つて、賣價一枚一スーから二スーてある。

一四

二月二十九日

……白人は依然この病氣には罹らずに居る。

だから、感染の程度は白人の血が亞弗利加人の血より多ければ多い程ど少いのだらう、と輕々に想像する人があるかも知れぬ。が、それは實情を去ること甚だ遠い。――サンピエールはその最も眉目好いオクトルーンを失ひつつある。マムルークと稱する標型（タイプ）に於けるが如くに、白人の血が黑人の血に對する比例が一一六對八の場合、――或はクオートロンネ（クオタロン又の名クアドルーンと混同しないやう）に於けるが如くに、一二二對四の場合、――或はサンメレに於けるが如くに、一二七對一の場合に於てすら、病魔の攻擊を受ける難易に於ては同一てあつて、一方病氣恢復の機會は黑人の場合よりも著しく少いのてある。免疫の少數の著しい實例が議論の別種の根據を提供するやうてある。然し其等は何等體質の如何に基づくのては無くて、その個人の社會的地位に基づくのかも知れぬ。富と慰安とが、こんな時には少からざる豫防的價値を有つて居る事は記憶しなければなら

ぬのである。が然し――混血人種は原の父母の體質の强さに劣らぬ體質の强さを有つて居るかどうか、これは疑ふべき理由がありはするけれども――此の階級のものがこの病氣に罹る難易は、人種的特質に依つて決せられるのでは無くて、恐らくは祖先來の經驗に依つて決せられるのであらう。世界の白人種は、幾世紀の經驗に依つて、實際に種痘され、牛痘されずみになつて居る。――が一方、眼に見えるほど血が雜じつて居る或は全く黑い此等の人達のうちには、この惡疫の種子は、其處で發芽の出來る絕對に新しい土壤を見出して居るのであるから、だからその齎す荒廢は、舊時亞米利加印度人やポリネシア人に爲した荒廢に比して恐ろしさは殆どそれに讓らぬのである。その上に、不幸にも此處では種痘に對しての偏見がある。人々は今でも、種痘された者共がこの疫病の爲めに種痘をされてゐないものと丁度同じく早く死ぬる、と公言して居る。――そして彼等は證據に幾多の實例を擧げることが出來るのである。死疫の平均數や、羅病百分率やその他を彼等に語つても駄目である。――立派に種痘された者が痘瘡で死ぬるのを幾人も彼等はその眼で見て居るので、それがこの豫防法に對する彼等の信仰を覆がへすに充分である。……彼等の集會に出て、この病氣に對するこの唯一の世に知れて居る保護を採用するやうにと神に祈る僧侶すら、この懷疑には殆ど何事をも爲し得ぬのである。

一五

三月五日

……この昔風な區では、街路が如何にも狹いので、向う側での聲がさゝやき聲でもきこえるぐらゐである。だから日が暮れると、色んな物が自分の耳にきこえる——或る時は苦痛の聲、啜り泣き、死がその夜の巡回をすると絶望の叫び——或る時はまた、怒りの言葉、笑ひ聲、また歌ひ聲さへ——いつも一色の陰鬱な歌ひ聲さへ、きこえる。年の若い女黑人だと分かるあの金屬性の特別な音色を有つた聲である。斯う歌ふ——

ポーヴ　ティ　レレ、
ポーヴ　ティ　レレ！
リ　ガニン　ドゥーレ、ドゥーレ、ドゥーレ——
リ　ガニン　ドゥーレ
トゥ・パトゥット！

自分はリレ子といふのはどんな人であつたか、それからどうして苦勞が『無くなつた』か、知りたいと思ふ。――といふのは、そんなクリーオールの唄は、どんなに飾り氣のない子供らしいものでも、いつも何か實際にあつた事件に起因して居るからである。到頭誰れかが、『可哀相なリレ子』といふは、先年サン　ピエール中で一番不仕合はせな娘だといふ評判のあつた女だ、といふことを自分に話してきかす。すること爲す事、不幸に終はるだけであつた。――眠つて忘れられるやうにと、朝になると、晩だと宜いのにと思つた。が、夜になると、その日の中にした苦勞のことを考へて眠られなかつた。だから朝だと宜いのにと思ふのであつた。……

もつと面白いのは、日が沈んで、星が出てから、イゾールの子供達が饒舌るのを道越しに聞くことである。……ガブリエルはいつも星は何だと知りたがる。

『サ　クイ　カ　クレーレ　コム　サ、ママン?』（あんなに光るものなあに?）

するとイゾールが返事する、

『サ　マフイ、――セ　ティ　リミエ　ボン・ディエ』（心の善い神樣の小さな明かり）

『うつくしいね、――え、かあちやん。數へて見たいな』

『おまへ數へられはしないよ、お前』

『ひい――ふう――みい――よう――いつ――むう――なな』ガブリエルは七つまでしか數へることが出來ぬ。『モアン　ペイド！駄目！かあちやん！』

月が上る。――彼の女の子は叫ぶ、『ミ　ママン！――ガーデ　ダーオ　ディフエ　クイ　アダン　シエル・ラ！』（空のあの大きな火ごらん）

『あれはお月様だよ、おまへ！……あれにサン　ジヨセフ様がおいでになるのが見えないかい、薪の束を持つておいでになるのが！』

『あゝ、かあちやん！見えるよ！……薪の大きな束が！』……

が、ミミは月の知識には妹よりも長けて居る。『お月さんに見せに』母から半フラン借りる。そしてそれを月の銀の光へ向けて捧げて、かう歌ふ、

『美[註一]しいお月様、わたしの小さなお金を見せますよ。――いつも私に金のあるやう、あなたが照り照る間だけ』

それから母は子供を寢せに二階へ上がる。――すると暫くすると、開いて居る窓から、子供等の夕の祈禱のつぶやきが自分の耳へ漂うて來る、

[註二]アンジユ、ガルディアン、
ヱイエイ　スール　モア。
……………………
エイエ　ピティエ　ドゥ　マ　フエーブレス。
クーシエ・ヴー　スール　モン　プティ　リ。
スイヱ・モア　サン　セッス。……

あつちこつち一行ぐらゐしか自分には聞きとれぬ。……みんな直ぐには眠らぬ。――床の中で饒舌り續けて居る。ガブリエルは守護の天使樣はどんなやうなものだらうと知りたがる。するとクリーオールで返事するミミの聲がきこえる、

「ザンジユ・ガディエン、セ　ヨン　ジエーヌ　フイ、トゥットベル」（守護の天使樣つて、若い女の子で、大變うつくしい人）

暫くすると、森（しん）とする。やがて跣足で、その小さな部屋の、月の光が射して居る露臺へイゾールが出て來るのが見える。靜かな街路を上手（かみて）下手（しもて）と見渡し、海を眺め、時々、高くちらついて居る星を仰ぎ見、――祈禱をするやうに唇を動かす、……そして、その澤山の

黑い髮をだらりと垂らして、白い衣物て、其處に立つて居ると、その姿には、佛蘭西の宗教的版畫に見る、守護の天使のすらりとした丈高い姿を思はせる、一種不思議な優美さがある。……

註一『ベル　ラリーヌ、モアン　カ　モントレ　ウーティ　ピエス　モアン！——パ　モアン　ラジヤン　トゥツト　タム　ウー　カ　クレーレー』……この短い祈禱の言葉は、新月が初めて出た時唱へると一番效力があると想はれて居る。

註二『守護の天使樣、私を守つて下さい。——私の弱さを憫れんで下さい。私と一緒に私の小さな床で橫になつて下さい。私の行くところ何處へでも隨いて行つて下さい』……祈禱はいつも佛蘭西語でする。形而上學的なまた神學的な言葉は、それを土語に飜譯することが出來ぬ。だからクリーオールの問答(カテキズム)を著した人は、いつもその本文を理解出來るやうにする爲めに、佛蘭西語の宗教語を藉りまたそれを說明せざるを得ぬのであつた。

一六

三月六日

今朝マム・ローベルが或る變妙なものを――首のまはりに吊るすやう紐の附いた、小さな黒い布片(きれ)に堅く括つた物を――持つて來て吳れる。それを身に着けて居なければならぬ、と言ふ。

『サ　サ　イエ、マム・ローベル？』

『プー　アンペシエ　ウー　プーアン　ラ　ヱレット』と彼女は答へる。自分を疱瘡にかからぬやうにするもの！だといふ。……ところで何がその中に在るのか？

『トゥーア　グレーヌ　メー、エビ　ディカンフル！』（玉蜀黍が三粒、それに樟腦が少し！）……

一七

三月八日

……この町中の富裕な家庭では召使が不足なので殆どどうする事も出來んで困つて居る。いくら金を出しても手傳ひを得ることが出來ぬ。尤も若い田舍女が死んだ者の地位を充たす爲めに町へ始終來るには來る。が、そんな新參者は、その前に居た者共よりも遙かに早

く病氣の犧牲となる。そしてさういつた死亡は家庭生活のからくりを單（た）だ紊亂せしめるだけの事では無いのである。クリーオールの下女（ボンヌ）はその一家に對して全く以て特別な關係を――『下婢』といふ言葉ではその微かな觀念すら現はさない一種の關係を――有つて居る。實際に於てその家庭の一員なのである。その下女とその家庭生活との結合は、幼年時代に、その腕力がやつとのこと水のドバンヌを二階へ持つて上がられる時代に、始まるが普通で、――その上更に、その家で生まれたといふ權利主張を有つて居るものが多い。子供の時分には、白人の子供と一緒に遊ぶ――白人の子供の愉快と貰ひ物とに自分も與かる。荒々しい口を利かれる事は滅多に無く、また從僕の身だといふ事實を思はせられる事も殆ど全く無い。可愛がりの呼び名を貰つて居る。――餘程の親しみを許されて居り――他に人がその場に居らぬ時は家内の談話に加はる事を屢々容され、家庭の事に關して意見を述べることも容されて居る。置いて置くには金は少ししかかからぬ。一年四五弗でその必要な衣服總てを供給が出來るであらう。――靴は稀にしか穿かぬ。――床板の上に敷いた小さな藁（ペイ）布團（ラッス）の上で寢るか、或は恐らくは、『象』（レファン）――即ち、長方形になるやうに寄せ固めて堅い布團の厚い四角い二枚――の上に支へられて居る藁布團の上で寢るかする。家庭に取つて費用とは實は名ばかりで、信賴の出來る使者であり、子守であり、小間使で

あり、水汲人であり——要する處、料理人で無い洗濯女で無いだけで、一切の者である。本當に善い下女を有つて居る家族はどんなことがあらうとそれを手離さうとはしはせぬ。その家庭で育て上げられたのであるなら、殆ど貰ひ兒のやうに思はれて居る。自己の一家庭をつくる爲めにその家を去つて、後で不運になると、何の遠慮無しに赤ん坊を連れて歸つて來る。そしてその赤ん坊は、受け入れられて親と同じく、その古昔の屋根の下で育て上げられることであらう。外來人には初めこの事態が變に思はれるかも知れぬ。が、その原因は不明では無い。これはクリーオール社會の構成の昔に——奴隷制度の初期に——跡附けることが出來る。羅典民族の——殊に佛蘭西民族の——間では、奴隷制度は、太古の世界の、家内の奴隷はその一家へ入ると實際その一員となるのであつた時代の、あの奴隷制度の一番寛容な特色を、今代に於て保存してゐたのである。

一八

三月十日

……イゾールと彼女の子供達はみんなマム・ローベルの店へ來て居る。——彼女は自分

の難儀を――新規な難儀をくどくど話して居る。四十七フランが仕事を時間違へず持つて行つたのに、金は一文も貰はぬ。……『ブー』を一包み買ひに、その小さな店へ入る時、自分はそれだけ耳にする。

『アシーズ』と、彼女の椅子を自分へ渡して、マム・ローベルは言ふ。――いつも自分に會ふことを喜び、クリーォールの民間傳説に就いて自分と閑談することを喜んで居る。するとミミとが微笑を取り換はすのを見て、子供等に自分に今日はを言へと言ふ。

『アレ　ディ　ボンジユー　ミシエ・ア！』

つぎからつぎと、銘々がキスしに天鵞絨のやうな頰を差し出す。それからミミは、少くとも五分間繰り返し繰り返し同じ問を母に尋ねて返事を得ることが出來ないでゐたミミは、この紹介を力に、自分に尋ねる、――

『ミシエ、オティ　マスク・ア？』

『イ　ベン　フー、プーロス！』と母は吸鳴る。『なんだね、この子は氣が狂はうとして居るに相違ないよ！……ミミ　パ　ンベテ　ムーヌ　コム　サ！――パ　ニピエス　マスク。セ　ラ・ヱレット　クイ　ニ』（そんなに人様にうるさいことを言ふもんぢや無いよ！……今、踊る人は一人もありやしないよ。疱瘡のほか何もありやしないよ！）

〔ミミ坊よ、お前はちつともうるさくは無いのだよ。だがお前の問に本當に答へることは私はしたく無い。踊り手が――その多くが、何處に居るか、私は知つて居る。が、お前に知らせるのは善くあるまいと思ふ。今は面は冠つて居ない。が、若しお前が、ただの一瞬間でも、何か異常な偶然な事で、その顏を見たら、――可愛いミミよ――今迄に無いほど非常に怯ぢることとであらうよ〕……

『トゥット　ラヌイット　イ　カンニ　レヱ　マスク・ア』と、イゾールは言ひ續ける。――賺して自分は、ミミの見る夢はどんなやうなものであるか、それが非常に知りたい。それを自分に話させることが出來るか知ら。……

一九

……ミミの最近の夢をその子が語るが儘に自分は書き取つた。斯ういふのであつた。

『私は舞踏(おどり)の會を見ました。夢を見て居るのであります。見ると誰れも彼れも面(めん)をかぶつて踊つて居りました。――私はみんなを眺めて居りました。すると、俄に、その踊つて

居る人がみんな板紙で出來て居ることが分かりました。すると指圖の人が見えました。その人が私に此處で何をして居るかと訊きました。「え、私は舞踏を見て居ります。見に來たのであります、――それがどうしたといふのです？」と言ひますと、――その人がかう返事しました、「お前はそんなに他人の事を見に來たがるなら、此處に居てお前もまた踊らなければならぬ！」私はその人に「いやです。私は板紙で出來て居る人と踊りたくはありません――そんな人は恐いから！」……それから私は走つて走つて走りました――そんなにも私は恐ろしかつたのであります。それから私は大きな庭へ入りましたら、葉ばかりある大きな櫻の樹がありました。そしてその櫻の樹の下に坐つて居る男が見えました。その男が「お前は此處で何をしようとして居るの」と訊きました。私は「私の出口を見つけようとしてゐます」と言ひますと、その男が「お前は此處に居なければならん」と言ひました。私は「いやです、いやです」と言ひました。――そして、其處を出ることが出來るやうに、斯う言ひました、「あつちへ行つて御覽なさい！――見事な舞踏が見られますよ、板紙の人が踊つてゐて、板紙の指圖が指圖して居る！」……それから私は非常に恐ろしくなつて、眼が覺めました』…………

……『どうしてお前はそんなに恐ろしかつたの？』と自分は訊く。

『パースヨテ　トゥット　ギード　アンドゥダン！』(みんな内側が空(くう)だつたからであります)と、ミミは答へる。

二〇

三月十九日

……サン　ピエールの死亡率は今や一月に三百五十と四百の間である。自分の居る街路(とほり)は住民が絶えさうになつて居る。毎日人夫が、誰れかを隔離所(ラザレット)へ運びに――帆木綿製の日蔽のやうなもので蔽うた――大きな擔架を提げて來る。その上また、間短く置いて、棺桶を家へ持ち込む、そして、その啜り泣きが非常の遠方まできこえるほどに聲高々と泣く女を後にしてまた運び出す。

……疫病の到來前には、これほど人間の込んで居る區は少かつた。小さな一軒の家に時に、五十人といふ多勢が暮らして居る處があつた。より貧しい階級の者は、――殆ど衣物といふほどのものは着けずに、むき出しの床板の上に眠つて、天氣のあらゆる變化に身を曝して、一番廉い一番粗惡な食物を食つて――生まれ落つるから動物同樣な單簡生活をす

るに慣れて居たのであつた。でも、そんな不運な狀態の下に住んでゐながら、恐らくは世界中で、これほど健康な——またこれほど淸潔な——人民は發見することが出來なかつたのである。何處の內庭にも噴水があるから、殆ど一人殘らず每日沐浴することが出來た——そしてその幾百といふ人が、每朝未明に川へ入るか、入海で水泳するか（此處の若い女は男同樣上手に泳ぐ）するが慣習であつた。……ところがこの疫病が、そんなに人の混んで居るそしてそんなに無保護な生活へ入つて來たので、異常に迅速な荒廢を來たした。そして身體の淸潔といふことが感染には餘り利するところが無かつた。今や——隔離所が汚物で入江に病毒を染ませるが爲め、また病人の衣物をロクスラーヌ川で洗ふが爲め、沐浴場は總て人氣無くなつてしまつた。

……姉妹植民地たるグアドゥループが今や救助金を送つてよこす。——その總額は、亞米利加の一人の商人が何かの慈善事業に寄附することのある額よりも少い。が然し、寄贈するといふのはグアドゥループには大したことなのである。それから遠くのカエンヌがまた金を送る。そして母國が十萬フランを送るであらう。

二一

三月二十日

……此處の有色人の相互の無限な好意は、世界の大都市の我利我慾を見慣れて居る者を、驚嘆に堪へざらしめるものがある。その上で寢られる床(とこ)を有ち、そして治療の世話をする親類なり親友なり一人でもある者は、一人として病舍へ入らさぬ。――隔離所を通つて行く多勢の者は外來人である――他國から來てゐて此處にその一家を有つて居ない人達か、或は傭用者の家で病氣で居ることを許されない傭人達かである。が然し、主婦が――殊に子供の無い家庭では――その下女(ボンヌ)に病舍へ入る危險を冒さしめないやうにする實例が多い。その奴婢を丁寧に看護してやり、醫者を傭つてやり、治療の品を買ひ求めてやる。……

が、有色人の間で、彼等が示す勇俠な行爲は美しいものである、人を感動せしむるものである、――人類の生得の自我心を說く世間承認の學說悉くを疑はしめ、冷酷極まる厭世家をして人類に就いてより高い觀念を抱かざるを得ざらしむるものがある。病氣に罹つた者を訪ねてやるのに決して一刻も躊躇をせぬ。親戚のもの一人殘らずが、そして一人殘ら

ずの親戚の最も親しい友人までもが、急いで病床へ駈けつけるのを見ることがある。順番に看護に當たり、夜通し起きて居り、醫者を呼びに行き藥を取りに行き、身の危險には絶えて一顧も拂はぬ――否、殆ど必らず傳染するに決まつて居ることさへ意に留めぬ。その病人に金が無ければ、皆が出し合ふ。兄弟姉妹が、叔父叔母が、教父教母が、從兄弟が、義兄弟義姉妹が與へる事の出來ぬものを、與へることが出來る場合もあらう。金なりリンネルなり葡萄酒なり或はどうかして與へるか貸すか信用で手にするか出來るどんな品でも、それを拒むことは一人として夢想だもせぬ。女は、その美しいことを、その若いことを、人に愛されて居ることを忘れて居るやうに――彼等が義務であると信じて居るものの感念のほか一切の事を忘れて居るやうに――思はれる。諸君は、非常に高雅な風采の若い女が――立派な教育を受け且つ[註]エレヹー・アン・シャボーの（即ち、白人クリーォールの娘のやうに育てられ、それと同樣な服裝し同樣な藝の出來る）若い有色の娘が――その病人がたまたま遠縁に當つて居るといふが爲めに、自ら進んで富裕な家庭を去つて、この町の貧民區に住んで居る貧乏なムラットかカプレスの看病に當つて居るのを見る。自己に代つてこの事をすることを他人に依頼しはせぬ。――躬ら之を爲さなければならぬものと思つて居る。そんな危險に身を曝す（その女はまだ種痘をせずに居たのである）ことに就いて或

る熱心な抗議に答へて、そんな女の一人が、斯う言ふのを自分は聞いた、――『アー！クワン　イル　サジ　ドゥ　ドゥヺアール、　ラ　ギ　ウ　ラ　モール　セ　プール　モア　ラ　メーム　ショーズ』〔義務を行ふ時には、生きるも死ぬるも、私には同じ事です〕……が然し、この自己犧牲を阻止する何等の衞生法規は無し、そして、義務の、或は義務だと信じて居るものの、前では『生も死も同じ事である』若しくはさう考ふべきである、といふ信念が有るのだから――全市が如何に早く一大病院にならなければならぬか、諸君は直に想像が出來る。

註　文字通りでは『帽子で育てられる』マドラスを着て居ることは、自己を有色人と自認することである。――歐羅巴風の髮の結ひ樣に從ひ、また白色クリーオールの服裝を用ひることは、白人社會に加入したいといふ願を示すのである。

二二

……大抵、九時迄に、サン　ピエールは靜かになる。此處では誰れも彼れも早く休んで

日と共に起きる。が時折、夜が並外づれて暖かい時、人々はその戸口に坐り續けて、餘程遲い時刻まで無駄話をする。そしてそんな夜には、この疫病の時節には、珍らしい物を見たり聞いたりする。……

夜、犬の吠えるのは此處では何等靈的な意義を有つてゐない（どんなに凄じくとも、誰れもその聲に少しの注意をも奪て拂はぬ）のに、猫の唸り聲、叫び聲は死の前兆だと信ぜられて居るのは確に奇妙である。だから此の節、猫の啼き聲を聞くが早いか、誰れも睡いとは思はぬらしく、どんな時刻にも起きてそれを追ひ拂ふ。……今夜、――病人で無いものは誰れも起きて居るほど重苦しい夜である――殆ど恐慌ともいふべきものが猫の啼き聲の爲めに自分の街路で起こつて居る。――そしてその動物を狩り立てて、見えぬところ、聞こえぬところへ追ひやつた後長い間、この流行病を煩つて居る親類のあるものは、誰れも彼れもその前兆を恐怖を以て話し續ける。

……やがて自分は、その小さな圓々した兩腕を上へ差し伸ばして、頭の上で手を組み合はせて、月光を浴びて跣足で立つて居る有色の子供を認める。其子がさういふ姿勢で居ると、これよりも優雅な小さな像は見出し難いやうに思ふ。が、全く無意識に、その子はその姿勢その物で、今一つの迷信を犯して居るのである。そこで其母が怒つて叫ぶ、――

『ティ　マンマイユ・ラ！――ティレ　ランマン・ウー　アッスー　テート・ウー、フートト！ピス　モアン　アンコ　ラ！……エスペレ　モアン　アレ　ラザレット　アヴンメッテ　ランマン　コム　サ！』（おい、おまへの手を頭から下ろすんだ……私はまだ此處に居るぢや無いか！私が隔離所へ行つてから、そんな風に手を上げるのだ！）

それは哀悼の　非常な絶望の――野蠻な、自然な、原始的な身振であつたからである。……それからみんながその不運を比べはじめ、その不幸を話しはじめる。――奇怪極まることを言ひ――自分達の苦勞を冗談にしたりしさへする。一人が斯う言ふ、――

『シ　モアン　テ　カ　ヅンヌ　シャポー、ア　フォス　モアン　ニ　マレ、トゥットマンマン　セ　フエー　イシュ　ヨ　サン　テート』（私が帽子を賣りでもして居れば、みんな頭無しの子供を生むんでせう！そんなにも店の物が賣れないんですよ）

戸口に坐る者は定つて、それが木造のものでも、階段の上には坐らぬ、ことを自分は觀察する。そんなことをさせぬ迷信がある。『シ　ウー　アッシーズ　アッスー　パ・ラポート、ウー　ケ　プーアン　ドゥレ　トゥット　モース』（戸口の階段に坐ると、前を通つて行く人みんなの苦勞を身に引き取る）

二三

三月三十日

受苦日(グッド・フライデー)。……

鐘は――死者の爲めの鐘すら――鳴らされなくなつて居る。時刻は大砲の發射で示されて居る。港内の船舶はその圓材で十字架を造り、その旗を逆さに揭げて居る。そして有色人は總て喪服を着けて居る。――これは彼等の間で幾世紀昔からの習慣である。

諸君は今日は派手な衣物は唯だの一つも、光澤(つや)出しされて居るマドラスは唯だの一つも、見はせぬであらう。サン ピエールのどの通路を通つて見ても、眼に立つ色は唯だの一點も見ることは出來ぬ。着て居る衣服は、總て皆親類が死んだ時に着るのに似て居る。全喪服か――卽ち、菫色の肩掛(フーラール)と黑い衣物と、それに濃い菫色の太い條(すぢ)のあるハンケチか、或は半喪服か――卽ち、黑い肩掛と頭帕布(タルバン)と、それに濃い菫色の衣物かである。――そして半喪服は、それよりももつと地味な衣裳を買ふ餘裕の無い者だけが着て居る。自分の窓からして、聖殿や耶蘇磔像へ參詣しに、そして疫病の終止を祈願しに、この町ちかくの岡へ

登つて行く長い行列が見える。
……三時。三發の砲聲が岡を震るはす。救世主の死の刻限だと想はれて居るのである。信者は悉く――教會に居る者も、大道に居る者も、或はその家庭に居るものも――跪いて三たび十字架に接吻する。十字架が無ければ、地面か石鋪道かへ三たび脣を推し當てて、丁度此傳來の刻限に唱へると屹度叶へられると思はれて居るその願ひを三つ口にする。山山の十字架の前には、それからノートル　ダーム　ドゥ　ラ　ガルドの聖像のあたりには、莫大な人群れが集つて居る。
……街路には何等の喧騷も無い。棺桶が通つて行く時聞こえる、いつもの聲高い泣き聲さへ無い。誰れも今日は不平を言うてはならぬ、また怒つてはならぬ、また不親切な言葉を口にしてはならぬ――受苦日に犯した罪は、神の眼に、特別なまた恐ろしい大いさを有つと考へられて居る。……此地に流行つて居る妙な諺がある。子息か息女かが長じて不身持ちになり――その一家への恥辱となり、その兩親への呪咀となると――それは『サ、セヨン　ペシエ　ヴンドルディ・サン！』（受苦日の罪に相違ない！）だと言ふ。
受苦日に關した奇異な信仰が他に二つある。一つは、その日はいつも雨が降る――空が救世主の死の爲に泣く。そしてその雨を器に受け容れると、その水は蒸發もせず惡るくも

ならず、一切の病氣を治す、といふのである。
今一つの信仰は、耶蘇基督だけが正三時に死んだのである。正確にその時刻に死んだものは他に一人も無い。――三時一秒前に或は一秒後に死ぬることはあるが、正三時に死ぬるものは決して一人も無い、といふのである。

二四

三月三十一日

……聖土曜日の朝。――九時。總ての鐘が突然鳴り出す。低音調(ブルドン)の唸り聲が一百の大砲の雷音と混和する。それは頌榮なのである！……この合圖で、海岸地方の住民は悉く皆海へ入る、そして濱邊に遠く住んで居る者共は川で沐浴をするのが宗教的慣習である。が、川と海とは今や同じく病毒に感染して居る。――隔離所のリネンは總て其處で洗ひ來たつて居る。で、今日はいつもよりか沐浴者が少い。
ところが埋葬は二十七ある。今は死者を二人づつ一緒に埋める。墓地は脊負ひきれなくなつて居るのである。……

二五

……石造の古い多くの家で、恐ろしく大きな——壁につかまつて居る時、伸ばして居る一本の脚の尖から反對の脚の尖まで、多分六吋もある　蜘蛛を時折見ることがあらう。自分はそれに咬まれた者があることを耳にせぬ。そして貧乏人の間では、それを害したり追拂つたりするのは緣起が惡るいと考へられて居る。……處が、今朝早く、イゾールが家の掃除をして、そんなやうな大きな奴を澤山戶口から逐ひ出した。マム・ローベルは全く魂消きつて居る、——

「ジエシ・マイア！——ウー　レ　マレ　アンコ　プー　フエー　サ、シエ？」（おまへはもつと不運になりたいのかい、そんなことをしてさ？）

するとイゾールは答へる、——

『トゥット　ムーヌ　イシット　パ　ニ　ヨン　スー！——グーオ　コム　サ　フィルザグラナン、エ　モアン　パ　メム　マンジエ！エピ　ラ　ゴレット　アンコ……モアン　クーエ　トゥット　サ　カ　ポテ　マレ！』（此處には一スー有つて居るものも一人

もありません！――蜘蛛の巢は斯んなにも澤山あるのに、それにもう喰べる物何もありやしません。おまけに疱瘡があるし。……こんな物は不運を持つて來るのだと思ひます）
『あゝ、まだお前は喰べないのかい！』とマム・ローベルは叫ぶ。『ギニ　エピ　モアン！』（私と一緒においで！）
するとイゾールは――蜘蛛に對してのその處置に幾分の悔恨を早既に感じて　道を横ぎつてマム・ローベルの小さな店へ行く時、辯解的につぶやく。『モアン　パ　チユウエヨ。モアン　シヤツセ　ヨ――ケ　ギニ　アンコ』（私しや殺しはしませんでした。外へ出しただけです。――また戻つて來るでせう）
がその後大分經つてから、蜘蛛は戻つて來ぬと、マム・ローベルが自分に語つた。……

二六

四月五日

『トツツト　ベル　ボア　カ　アレ』（美しい木はみんな死にます）と、マム・ローベルが言ふ。……何の事か自分には分からぬ。

『トゥット　ベル　ボアー――トゥット　ベル　ムーヌ　カ　アレ』（『美しい木』はみんな――眉目の好い者はみんな――無くなります）と、註釋的に彼女は言ひ足す。……世界の原始的詩人の言葉に見るが如くに、クリーオールの土語では、美人を恰好の好い木に喩へる。否、それどころか、物品の名を生き物の名に實際に代用する。『ヨン　ベル　ボア』は美しい木を意味することもある。もつと一般には、しとやかな女を意味する。ユリセスがナウシカを眺めて述べたあの比喩は、もつと飾り氣無い言ひ現はしてはあつたが、これである。……そこで今自分は、その文句の使用を實證して居るクリーオールの物語歌(バラツト)を――ドバンヌ[註]を仕入れに父の命でサン　ピエールへ行つたところが、美しい有色の娘と戀に落ちて、父の金全部を、その女への贈物や結婚支度を買つたりに用(つか)つてしまつたフォール・ドゥ・フランスの或る青年を歌つた物語歌を――思ひ出す。――

モアン　デスサンヌ　サン・ピエ
アシユテ　ドバンヌ
オーリエ　セ　ドバンヌ
セ　ヨン　ベル・ボア　モアン　マンナイン　モンテ！

（私しや下(くだ)つて行きました。サン　ピエへ。ドバンヌ買ひに。ドバンヌは買はずに、一緒に歸つたのは美

しい木――美しい娘――でありました）

『おや、誰れが死んだのだい、マム・ローベル？』

『マリー子です、あの荷運び女の、疱瘡にかかつてゐました。隔離所へ行つて居ります』

註　飲み水を冷たくして置くのに使ふ赤い土器の壺である。この語の起原は多分それを製造する、マルセイユ近くの町の、『オーバニユ』に求むべきであらう。

二七

四月七日

トゥツト　ベル　ボア　カ　アレ。……ティ　マリーが昨晩フォールの隔離所で死んだといふ音信（たより）が今しがた來た。ヹレット・プーフ―　この疫病の一種で、その犧牲の呼吸（いき）の根を數時間のうちに止めるもの――に罹つてゐたのである。

ティ　マリーは自分が知つて居るうちで確に一番小綺麗なマシヤンヌであつた。眞實綺

麗なといふのでは無いが、其顔を見ると氣持ちが宜い、子供らしい魅力があつた。——そしてチョコレート色の赤い淸らかな皮膚をして居り、輕さうな締まつた身體で、靴の壓迫を感じたことの無い小さな足は著しく均勢の美を有つて居つた。毎朝自分は、丁度夜明けごろに、『クイ　レ　カフエ？——クイ　レ　シロップ？』（珈琲は要りませんか？——シロプは要りませんか？）と、呼んで通るのをいつも聞いたのであつた。『あれの亭主は何處に居るのかい？』と自分は尋ねる。『ノンム・イ　モ　ラヅレット　トゥー』（あの女の男も疱瘡で死にました）『それから小さいのは、あの娘のイシェは？』『イ　ラザレット』（隔離所に居ります）……だが、この町に友人も親類も無いものだけが隔離所へ行かせられるのである。——ではティ　マリーはサン　ピエールの者の譯は無い？

『さうで御座います。あれはヅークランの者で御座いました』と、マム・ローベルは答へる。『サン　ピエール生れの赤い色の娘で大變美しいのといふのはあまり御覽にならないでせう。サン　ピエールには美しいサン・メレは居ります。赤い色したので美しい娘の子は大抵ヅークランの者であります。黄色いのは、それは本當にベル・ボアでありますが、グランド　アンス生れてあります。あそこの者はバナナ色をして居ります。グロ・モルンの者は一般に黑う御座います』……

二八

……此處の赤色人種は――カプレス人種は――特にこの病氣に罹り易いやうに思はれる。カプレスを下婢に使つて居る家族はいづれも皆その下婢を亡くする。――つぎの角に住んで居る一家族は續け樣に四人亡くした。……

色合は肉桂かチヨコレート色かである。――皮膚は生まれながら清潔で、滑らかで、光澤がある。『サポタ皮膚』（ポー・シヤポティ）といふ語を――美しいものを言ひ現はすあらゆる珍らしいクリーオール形容詞、例へば[註]ヨヨールとかボーヨルとかいふ形容詞、と一緒に――使ふのはカプレスに就いてである。髮毛は長いが、むしやくしやして居る。手足は輕くて丈夫で感心するほど好い恰好をして居る。……より寒い氣候の處へ移すと、カプレスは男女ともその赤味を少し失ふと聞いて居る。此處では、熱帶の太陽の下では、金屬でだけ模倣の出來る美しさを有つて居る。……そして寫眞ではこの特殊の色についての如何なる觀念をも傳へることが出來ぬから、カプレスは寫眞を嫌ふ。斯う曰ふ、『モアン バ　ヌーエ。モアン　ウーウージユ。ウー　フエー　モアン　ヌーエ　ナン　ポトレー・

ラ』（私や黒かありません。私は赤う御座います。――それで姿を撮ると、あなたは私を黒にします）カメラの前で姿勢を取らせるのは困難である。その公言するが如くに、赤いのである、美しいほど赤いのである。が、この意地惡るの機械は鼠色か黒かに――スエコム　ブール・ゾ・ヌエ（『黒骨の雌鷄のやうに黒く』）――する。

……ところがこの赤色人種はサン　ピエールから――疫病に見舞はれて居る中心地點からも疑ひ無くさうであるが――　無くなりつつある。

註　これに關係して、サン　ピエールで大いに流行つて居る――小さなカプレスの容色を讃へた――クリーオールの歌の一くさりを掲げてもよからう。――

モアン　トゥツト　ジエーヌ、
グーオ、グーア、ゼーヤン、
ボー　ディシヤボティ
カ　フエー　プレージ。――
ラポー　モアン
リ　ピヤン　ポリ。
エ　モアン　カ　プレー
メム　トゥツト　ノンム　グラーヴ！

これは斯う自由譯してよからう。――

髯があつて、年わかく、
手足まるまる、身に丈夫、
肩にはサボタで
見てうつくしい。
私のこの肌
艶すべすべと。
私を見たいと、
眞面目な人も。

二九

四月十日

……マム・ローベルは、亞米利加汽船が――彼女の所謂ボム・マンジェが――來ないの

て大いに困却し當惑して居る。それは馬鈴薯と大豆とのあんなに多くの樽を、あんなに多くのラードとチーズと大蒜と乾豌豆とを——彼女がその仕入をして居る殆ど總ての物を——規則正しく持つて來て呉れたのであつた。紐育汽船の砲聲がこの港に反響を起こさせてからもう八週間近くになる。毎朝マム・ローベルはその小さな下婢のルイを、亞米利加汽船の來る氣合は無いか見に——『アレ ウーエ バットリー デスノッツ シ ボム・マンジエ・ア バ ギニ』に——出すのであつた。がルイはいつも同じ悲しい返事を以て歸つて來る。——

『マム・ローベル、バ ニ ビエス ボム・マンジエ』(ボム・マンジエの破片(かけら)さへ見えません)

……『マルティニークへは亞米利加汽船はもう行かぬ』これは電報で得た消息である！病氣は船中にも起こつたのである。港々は病毒が感染して居ると宣言された。合衆國の郵便船はマルティニーク行の郵便物を、サン キッツかドミニカで卸して、通つて行つてしまふ。今や獨木舟乘(カノティエール)や、沿海航海者(カボテユール)や、船荷を積んだり卸したりして食つて居る者總ての間に苦しみが起こつて來ようとして居る。——大きな倉庫が閉ざされつつあり、爲(さ)せる用事が無いが爲めに丈夫な男が解雇されつつある。

……この市では一日に二十五人の疱瘡死亡者を埋めつつある。

ところがこの熱帶の空がこれ程美しいことはこれ迄に一度も無かつた。――この圓く取り卷いて居る海がこれ程不可思議に青かつたことはこれ迄に一度も無かつた。――山々が、もつと金色な日の下に、もつと澤山に光り輝く緑に裝はれて居たことはこれ迄一度も無かつた。……そして自然が依然として斯んなに麗はしくあるとは不思議のやうである。……

……不意に自分は、この三四日イゾールにもその子供等にも會はぬ、といふことに氣附く。何處かへ轉居したのか知らと怪しむ。……夕方近く、マム・ローベルの店の前を通つて、どうしたのかと尋ねる。その老婦人は非常に眞面目に答へる、――

『アト、モン　シエ、セ　イゾール　クイ　ニ　ラ　ヱレット！』

彼の母親は到頭疫病に取つかれたのてある。が、マム・ローベルは彼女を世話するてあらう。實際、マム・ローベルはその三人の子供を引き取つて居る。知らぬが宜い事を誰れかが子供に饒舌る恐れがあるので、子供は今、家から外へ出さぬやうにしてあるのてある。

……ポーヴ　ティ　マンマイユ！

三〇

四月十三日

……でも、疱瘡は本來の白人は襲はぬ。だが空氣が全體に毒せられて居る。市の衞生狀態は空前に惡るい。そして新規な傳染病が――窒扶斯が――現はれる。そして今度はペケが、殊に年が若くて丈夫なのが、亡くなりだす。そして鐘が彼等の爲めに鳴り續き、弔ひのブルドンが、日一日そして夜遲くまで、その巨大なウンウン聲で市を滿たす。といふのは彼等は富んで居る。彼等の埋葬は――棺は桃花心木であり、打ち鳴らす鐘は三度であり、日の光を浴びて帽子無しで立つて居るサン　ピエール全市民の最後の敬禮を受けて、棕櫚の下にその永眠に就く時、その前に黃金の十字架を捧げて貰ふのであつて――高價な嚴肅な葬禮である。……

……抑も人が奇妙な夢を見がちなのは、一切の事態が熱性を帶びて居る斯んなやうな時に於てであるか？

昨夜自分はまた彼の謝肉祭の舞踊を――僧の頭巾を冠つた樂手や、山が尖つて居る帽の

奇怪な流れや、妖異な假面や、身體の搖れ動きと手足の波を――見たやうな氣がした――だが煙が通るやうに何の音もしなかつた。自分の知つて居ると思ふ姿があつた。――差し伸ばして無言で自分に觸つた何處かで見たことのある手があつた。――すると、全く突然に、眼に見えぬ或る物が、その姿を、葉が風に吹かるゝやうに、散らすやうに思はれた。……そして眼を覺ますと、謝肉祭の最後の午後に聞いたと同じやうに明瞭に、あの恐怖の奇異な叫び聲、『セ　ボン・ディエ　カ　バッセ！』がきこえるやうに自分は思つた。……

三一

四月二十日

……昨日の朝極早く、イゾールは生石灰の上掛けに蔽はれて搬ばれて行つた。子供等は知つて居らぬ。見させぬやうにマム・ローベルが用心したのである。おつかさんは養生に田舍へ行かされた――今にお醫者が連れて歸る、と言ひきかされて居る。……家財は總て、負擔を拂ふ爲め、競で賣ることになつて居る。――家主は辛抱强かつた、四箇月待つた。醫者は懇切であつた。が、今は二人とも貰ふべきものを貰はなければならぬ。マリアと瀨

戸製の天使とが在る禮拜所だけ除いて、――ヨ バ カ ペ ヱ ン ヌ ボ ン・ディエ（善き神の物は賣つてはならぬから）――物悉く附け値で始末してしまはうといふのである。そしてマム・ローベルが子供の世話をするといふのである。
寢床は――前の幸運時の一遺物は――土地で出來た材木に彫りをしたマルティニーク流の大きな寢床は――多分殆ど船のやうな恰好をして居るからさう呼ぶのであらうがリト・ア・バトー（船床）は――確に三百フランは齎すであらう。――鏡戸の附いて居る押入は、二百五十フランは下るまい。價値のあるものは他には餘り無い。全體の品物が、死者が負うて居る總てを拂ふほどの金を得はせぬであらう。

三二

四 月 二 十 八 日

かゝ・タム・かゝ・タム・かゝ・タム！――かゝ・タム・かゝ・タム・かゝ・タム！……プラースからきこえる競賣の鼓の音である。イゾールの家財が持ち手が變はらうとして居る。
三人の子供はその音に飛び上がる。謝肉祭の觀物と――面白い妙な大行列の舞踊と――

その音が心の中て如何にも生き生きと結びついて居るからである。三人は日の當たつて居る街路へ走り出て、ボニ　ウーエ！と互に呼び合ひながら、上手下手を眺め見る。が、ルウ　ドッ　モルン　ミライルは森閑として居る。——その街路に入つ子一人居らぬ。

……マム・ローベルは非常に疲れて入つて來る。競賣へ行つて、子供等の爲めに何か殘してやらうと力めたのてあつたが、値が餘りに高かつた。彼女は無言て、その小さな店の磨り切れた店臺に、そのいつもの座を取る。三人の子はそのまはりに集つて、彼女にじやれる。——ミミはその親切さうな褐色の顏を笑ひながら見入つて、何てマム・ローベルが微笑もしないのかと怪しむ。そこてミミは、何處に假面舞踏の人達が居るか——何ぜ來ないのか——尋ねるのを恐がる。が、モウリス坊は、より大膽て、感じが姉ほどに無いから、叫ぶ、——

『マム・ローベル、オティ　マスク・ア？』

マム・ローベルは返事をしない。——きこえないのである。その膝のあたりに集うて居るその年若い顏をぢつと見入つて居る——が、見えてはゐないのである。彼女は先きを、顏よりずつと先きを——今は見えぬ未來の年月を——見て居るのである。すると突然に、

荒々しいがやさしみはある聲て、その心中の暗い思ひ總てを子供に向つて口にする、――『トッア ティ ブラン サン ルスー！――クイッテ モアン シャシエ パパ・ウー クイ アダン シメティエ プー ギニ プーアン ウー トー！』（お前等、一文無しの、小さな三人の白い人達！墓場に居られるお前さん達の父さんに、來てお前さん達も亦連れて行くやうに、私に言ひに行かせてお呉れよ！）

洗濯女

一

サン　ピエールに二三箇月滯在する者は誰れでも、早いか晩いか、マルティニークの用無し男どもが好んで行く彼の氣持ちの宜い場所で、――あの美しいサヴヌ　ドゥ　フォールで――のらくら半時間を過ごすに決まつて居る。そして一度其處へ行くと、護岸の滑らかな欄干の上から少し身を屈めて、仕事して居る洗濯女を眺めるに同じくまた決まつて居る。妙な面白味があるのである、此原始的な勞働の光景は。棕櫚を冠として居るフォールの岡の下をうねり流れて居るロクスラーヌの深い河底、幾哩に亙つて斑岩と柱狀玄武岩との巨大な漂石の上へ漂白しに置いてあるリンネルの眼の眩むほどの白さ、顏は大きな稈帽に隱し、足は膝まで走り流るゝ川水に浸けて居る、唐金の手足した色黑の女、――此等が人に最も古い文明を思はせる一場面を構成して居る。此近代の植民地の此處でさへ、殆ど

三世紀も經つて居る。が、今後たつぷり三百年の間、洗濯女の川は多分この儘で居るであらう。それが諸君に——殊にこの町がまだ眠つて居る夜明け前にそれを見ると——想ひ出させる或る不思議なブレトン傳說のやうに古めかしい風變りなものではあるが——この洗濯方法は變はりさうには無い。新しい方法に對して、新しい發明に對して、新しい思想に對して、地方的僻見があるのである。——もつと野蠻で無い洗濯の仕方を輸入しようとしての幾度もの努力が不成功であつた。そして蒸氣洗濯を設けようとの或る企ては失敗に終つた。一般の者が舊式の洗濯方法に十分甘んじて居り、それを棄てて得らるべき利益を少しも見なかつたのである。——そして一方、前に貰つたことのある賃金よりも高い賃金で洗濯工場持主が傭うた洗濯女と熨斗掛とは、直ぐと戶內生活に厭き、その地位を捨て、その足を山水に浸け、その頭を恐ろしい日の光に當てて、靑い空氣と山の風との中で、外(そと)で仕事するその古昔の遣り方に歸つて安堵の吐息をついたのであつた。

……それはサン ピエールの觀物の一つである——この洗濯女の川での每日の光景は。誰れも彼れもそれを眺め見ることを好む。——男は、その洗濯女のうちに、確に美しい娘が少からず居るからで、女は、多分、女といふものはいつも女の仕事には興味を有つからである。ロクスラーヌの白い橋はどの橋も、晴れた日には、殊に何處の家の下女も市場へ

行く途中か歸る途中か一寸立ち停まつて、眺めたり自分の知つて居る洗濯女に挨拶したりする、朝のうちは、見物の人で點々を打つたやうである。その折こんなやうな呼び聲やわいわい騷ぎを——橋から川へ、川から橋へ、叫び聲の斯んな取り換はしを——誰れも耳にする。——『ウィル！ノエミ！』……『クーマン　ウー　イエ、シエ？』……『エー！バスカリーヌ！』……『ボンジユー、イウート！——デデ！——フイフイ！——アンリリア！』……『クーマン　ウー　カレ、シリリア？』……『トゥット　ドユース、シニ！——エ　ティ　メーム？』……『イ　ビヤン。——オティ　ニノット？』……『ボ　ティマンマイユ　ブー　モアン、シエ——ウー　タンヌ？』……が、フオールの市場へ行ける橋は見物場所としては一番貧弱である。といふのは、好い部類の洗濯女は其處に居らぬからである。横着なの、弱いの、本職で無いのが——その家庭の勤めの一部として一と月に二三度川で洗濯をする下女が——多くはそんな遠くへ下りて行くのである。熟練な本職なのと早起きの者は一番好い場所と上等な岩とを占領する。だから幾百と仕事して居る者の中に、肉體的等級といつたやうなものを見分けることが出來るのである。そのつぎの橋では、其處の女は前のよりも好い顏であり、より强壯でもある。顏が前のよりももつと若さうに見える。それから進んで川の道筋を辿つて植物園の方へ行くと、洗濯女の容貌が前よりも

好くなつて居る――だから一哩の間に、人生の競爭の一つの自然法が――最もよい體格のものに最もよい機會が――實例で示されて居るのを能く見ることが出來る。

また諸君は、餘程長い間眺めて居ると、その洗濯女の中には、花やかなムラトだと分類が出來る程、色の淡いのが少くて、大部分は黑か、或は恐らくは力に於て大きさに於て黑人クリーォールに勝さつて居るあの銅赤人種かである、ことに氣が附くかも知れぬ。それは洗濯女になるには、非常に頑健な體質でなければならぬと共に、太陽に無感覺な皮膚でなければならぬからである。荷運び女なら、九歳か十歳で長旅をし始めることが出來るが、どんな女の子も十二歳過ぎなければ、洗濯商賣を敎はるほど丈夫では無い。洗濯女は此處の住民全體のうちで最も苦しい働き人である。――その日々の勞働は十三時間を下ることは稀て、しかもその時間の大部分は、山の峰から全く冷たいまゝに落ちて來る水に膝まで浸つて立つてゐて、太陽に照らされて仕事をするのである。その勞働は盛んに發汗せしめる。が、胸膜炎となる重大な危險があるから、膝から上を浸けて身を冷やすことを決してしない。この職業は、或る年數以上續けると、皆死ぬといふ。問に答へて或る女が自分に『ヌー　カ　モ　トゥット　ドロー』（私共はみんな水で死にます）と言つた。弱い者或は皮膚の白い者は危險無しには一日だつて此種の仕事をすることは出來ぬ。だから　弱い

娘は自分で洗濯をしなければならぬ必要に迫られても、滅多に川へ行くことを敢てせぬ。だが或る日自分はそんな向う見ずな實例を一つ見た。可愛らしいサンメレて、恐らく十八歳か十九歳かてあつたらう――自分は後て知つたが、丁度母を亡くした許りの處て、全く人手が足りなかつたのてある――それが、頭の上に小さな包を載せて、川へ行ける幾段もの石段を一つ下りはじめた。すると洗濯女が二人三人その娘を見に仕事の手を休めた。丈の高いカブレスがいたづら半分に斯うきいた、――

『ウー　ギニ　ブー　ブーアン　ヨン　バン?』（水につかりに來るの?）といふのはこの川は大沐浴場だからてある。

『ノン・モアン　ギニ　ラヱ』（いゝえ。洗濯ものしようと思つて）

『アイ!アイ!アイ!――イ　ギニ　ラヱ!』……そしてみんながそれのきこえる處て一緒に大笑ひした。『氣が狂つてるの、おまへさんは?エス　ウー　フー?』そして、其丈の高いカブレスは、その包を彼女から奪ひ取つて、それを披いて、一枚の着物をその一番近い隣人に、今一枚をそのつぎのにと、その仕事をその一團の友達て分けて、その見知らぬ娘に斯ういふのてあつた、『ヌー　ケ　ラヱ　トゥット　サ　バ　ウー　ビヤン　ギット、シエー――ヴ、アミゼ、ウー!』（あなたの代はりにみんなて早く洗濯して上げませ

う――行つて遊んでおいでなさい！）その親切な女共はその哀れな娘に對してそれ以上のことさへ爲した。――喰べ物賣り（マシャンヌ・マンジエ）が、油揚げの魚や玉子やマニオク粉やバナナを荷に、そのお定まりの行商をして來た時、銘々金を出し合うて、その娘に結構な朝食を買ひ求めてやつた。

二

川で衣物を洗濯する群集の總てが本職の洗濯女では無い。貧乏で洗濯代が拂へぬ幾百といふ女が自らその仕事をロクスラーヌでやる。――そして夥多の下女がまたその家内の常の義務の一部としてその主婦のリンネルを共處で洗ふ。が、本職の者がこの水路の誰れも能く知つて居る或る場所をいつも占めはせぬにしても、他の者とは、その迅速なそして順序正しい仕事の爲方と、非常な嵩のリンネルを取扱ふ手易さと、それから就中それを岩に當ててたゝく打ち方とて、容易に見分けることが出來よう。その上また、本職の者の大多數は兼ねてまた教師であり主婦（ブージョアズ）であり、その横に弟子を――十二歲から十六歲までの女の子を――連れて居る。土語でいへばそのアプランティのうちには、橋の

上の用無し男が見たがるやうな、人目を惹く型の女が多數に居る。

若し、一年の指導の後、その弟子が立派な洗濯屋になつてゐなければ、いつまで經つても立派な者になれさうには無い。それにこの商賣には、長期の教授と練習とが要る幾つかの部門があるのである。若い女の子は初めにはただリンネルに石鹼を附けて川で洗ふことだけを習ふ。此仕事を『擦り』（クリーォールでフロッテ）と呼ぶ。――これが可なり上手に出來るやうになつてから、それを打つ（フエッセ）妙な業を教はる。諸君は遠方のそのフエッセの音が、山々に反響しまた更に反響して、來るのがきこえよう。その名が示すやうに思はれるやうに、鋭いパチリパチリいふ音では無くて、乾いた材木を割る斧の音そつくりの重い窪ろな音である。實際、如何にもその音に能く似て居るから、初めてその音を聞くと、其處に樵夫が仕事して居るのが見えるだらうと思つて、ともすれば諸君は其處の山を見上げる。何かでリンネルを打つて出る音では無くて、ただそれを岩の横腹へ打つて出る音なのである。……一と品を充分に擦り濯いでから、それを或る獨得な束の形に褶んで、堅く絞つた端をフエッセしに握る。それから其褶み方を反對にして繰り返して、他の端を打つ。斯くすることに因つて、濯いだのでは除れない石鹼液が取れてしまふ。地質を裂いたり損じたりしないやうに、頗る手際能く行はなければならぬ。熟練な手ではリン

ネルは決して裂けぬ。そして眞珠や骨製の鈕が想つたよりか破れる度數が遙かに少い。その奇妙な反響はフェッセしに品物を褶む、その褶み樣に全く基づくのである。

それが濟んでから、その品數みんなを、『初めの晒し』（プーエミエ　ラブラニー）に、日當たりへ、岩の上に擴げる。晩方にそれを大きな木盆か籠かへ取り集めて、――向う側のフォールの川土手の一點から、サバヌのより高い端まで川を見渡す――『灰汁家』（ラカー　レシヴ）と呼ばれて居る處へ持つて行く。此處に洗濯女は何れも大か小かの桶一つ――爲した仕事の量に應じて――二スー三スー或は十スーで借り受けて、夜の間、その洗濯物を灰汁（クリーオール語ではクーレといふ語を使ふ）に浸して置く。それを番する番人が居る。夜明け前にそれを湯で濯ぐ。それから川へ持ち歸つて――また濯いて、また日に晒して、青染めにして糊附けをする。さうすると火熨掛けがされるやうになつて居る。上手に壓しを掛けて鏝當てをすることは、この商賣の一番困難な部分である。弟子が男子のシャツ一枚と、白股引一着と、巧妙に鏝當てが出來れば、年季は終へたものと考へられる。――かくしてそれは日傭女（ウーヴィエ）になる。

賃銀が殆ど信じられない程低い國でても、洗濯女は隨分金儲けをする。値段の定つた階梯は無い。こんな女共にも前以て掛け合ふのが習慣にさへなつて居る。シャツと白股引が

洗濯勘定書では、六セント乃至八セントと書いてある。が、他の洗濯物はもつと廉い。自分は品數三十三が——幾枚ものシート、幾枚ものベッドカヴー、それに澤山のドウイレット（頸から足まで一枚布片のマルティニーク一流の長い裳引き衣物）といつた大きな品も其中にあつたが——僅三フラン請求されて居るのを見た。川へ洗濯に出す下女が品物を盜んだり失くしたりすることが毎度ある。然し本當の洗濯女がそんなことをすることは滅多に無い。衣服に附けてある所有主の標が讀め書け或は分かるものは少い。だから諸君が川て、一面に澤山散らばつて居るリンネルを、見たところ異常な混亂を、見ると、そんな女達がどうしてそれを分けたり分類したりするか了解が出來ぬ。でも彼等は感心に旨くそれを遣る——それで、恐らくは他のどんな理由よりかその理由で、相應な賃銀を請求し得るのである。——洗濯物を下女にさせるのは經濟を誤つて居る。——本職の者に任せれば諸君の財産は安全である。ところでその賃銀は廉くはあるが、上手な本職者は一週に二十五乃至三十フランを儲けることが出來る。一月に平均たつぷり百フランにはなるから——白人の多くの番頭がサン　ピエールの商店で儲けるのと同額であり、（金の購買力の地方的差違を思へば）合衆國で一月六十弗貰ふのと全く同額である。

多分澤山の勞銀が儲かるといふことが屢〻洗濯女を誘うてその爲め死ぬるまでこの商賣

を續けさすのであらう。所謂『水病ひ』（マラディ・ドゥ ロー）が中年後に現はれる。足と下肢と下腹とが異常に膨れて、顔は殆ど肉無しになる。——それから、次第に、組織が崩れ、筋肉が無くなつて、全體の肉體構造が崩潰する。

　が然し、洗濯女は本來酒を用ひずに暮らす——決して醉つぱらはぬ。實際、嚴乎たる必要の上から、酒を用ひぬのである。足を冷水に浸けて仕事して居る間は、敢て口一パイの酒精を呑むことをせぬ。——マルティニークの他のものは誰れでも、小さな子供でさへ、ラムを飲むことが出來る。洗濯女は、充血で死なうと思ふので無ければ、飲むことが出來ぬのである。その最も强烈な飲料はマビで——糖蜜（モラッス）から造つた、輕い、沸騰性の、そして自分の思ふには少し不味な、ビールで——ある。

三

　彼等はいつも夜明け前に、山々（モルン）の蒸發氣が、空氣を朽ち腐れる耕作地の匂ひで——粘土の香りで——草の臭ひで——滿たす時、仕事に起き出る。まだ灰色の仄かな明かりがして居るだけで、川の水は非常に冷たい。岔の上に塔のやうに積み上げたその荷を頭（あたま）にして、

裸足で一人一人遣つて來る。――幽靈のやうに無言で段々を川床へ下りて、その洗濯物を解いて浸け始める。彼等は來ると互に挨拶する。そしてそれからまた無言になる。殆ど少しも話しをせぬ。皆の心はその時刻の重くるしさに重いのである。が、灰色の明かりが黄に變はる。太陽が峰の上へ昇る。明かりが黒い水を生きて居る水晶に變へる。するとみんなが少しは饒舌り出す。すると町が目覺める。その日常生活の流が――初は微かに、又ゆるやかに、それから早く又强く――あらゆる黄色な街路の上下に、サヴヌを通して、そして川の橋々の上に――再び循環する。通行者が立ち停まつて見下ろして『ボンジユー、シエ！』と叫ぶ。用無し男は或る美しい洗濯女をぢつと見て居る、と其女はその男達へ指さしして、『ガデ　ミシエ・ア　カ　グエッテ　ヌー！――アン！――アン！――アン！』と叫ぶ。すると、他の者が皆見上げて、見て居る男達が退却するまでその『アン！――アン！――アン！――』の唸り聲を繰り返す。空氣が暖かくなる。空の青が火になる。其大なる光明が洗濯女共を歡喜させる。皆互に遠方から遠方へ叫び合ひ、冗談を言ひ、高笑ひをし、歌をうたふ。言葉が疾風のやうてある、此の女共は。流の轟々鳴つて居る中を互に呼び合ふ長い間の習慣が、其聲に一種特異な高音と力とを與へて居る。その歌ふのを聞く價値は充分に在る。一人が歌を始める――つぎのがそれに加はる。するとも一人、も一人

と、終にその水路總てが植物園からポン・ボア橋まで妙音て鳴り響く。

セ　モアン　クイ　テ　カ　ラヱ、
ハッセ、ラッ　コンモーデ。
イ　テ　ネフ　エ　ディ　スーエ
ウー　メッテ　モアン　デルロ、――
イシュ　モアン　アッスー　ブーア　モアン。――
ラブリー　テ　カ　トムベ――
レファン　モアン　アッスー　テテ　モアン！
ドゥー　ドゥー、ウー　マパンドンネ！
モアン　パ　ニ　ペソンヌ　プー　ソワネ　モアン。

洗濯物して、火熨をかけて、繕ひしたのは、わたくしでした。――夜の九時頃、子供を抱かせ、あなたはわたくしを、追ひ出しなされた、――雨が降るのに――裸帽かぶせて。…… 棄てなさるのか、こ　わたくしを！……思うて吳れるもの他に無い。

……陰氣な歌である――原(もと)は或る殘酷な行爲を行つた者を公に恥ぢしめようとして作つ

た謝肉祭時分の卽席の歌てある。――が然しこれにはさういふ女共の多くの者の身の上話が――正式な結婚は稀なこんな國で、殘忍な無價値な男と一時一緒になつてゐた勤勉な情愛深い女の身の上話が――含まれて居るのである。この島に二年近く住まつてゐた間に自分が蒐集し得たクリーオール歌の半分はこれと同じ悲哀な題目に關して居る。そのうちで、今でも年寄りの洗濯女が非常に好んで歌ふ『シエ　マンマン　モアン』といふ歌は、自分は思ふに、此の國民の口傳文學中、他に類の無い純眞な哀感（ペエツス）を有つて居る。つぎに掲げるのは、その押韻の無い三節を散文に飜譯して見ようとしたものである。だが、その土語の原歌の子供らしい美はしさは失はれて居る。――

シエ　マンマン　モアン

一

……かあちやん、一度はあなたも私のやうに若かつたのですね。――とうちやんあなたも亦若かつたのですね。――それから大兄（にい）さん、あなたも亦若かつたのですね。あゝ、私はこの好い交（まじは）りを大切にしましよ！ほんとに痛んでゐます、私の情（こゝろ）は、――さうですよ、本當に、本當に、病

んで居るのですよ、この私の情は。戀が、戀だけが、私を回復させませう。……

二

あの人の處へ私を行かせた、あの人が賞めたこの眼が、あゝ、呪はしい！いつもあの人の名を繰り返させた私の唇が、あゝ、呪はしい！もはや戀を知らぬあの恩知らずへ私の情を與へたあの時が、あゝ、呪はしい。……

三

あゝ、あなたは神かけて私に誓ひましたね！あゝ、あなたは自分の信仰かけて私に誓ひましたね！……だのに今あなたは私の處へ來ることが出來ぬ？……あゝ、私の情は苦しさに凋れかかつて居ります！……私は墓地の横を通りました。或る石に私の名のあるのが見えました——私の名だけが。白薔薇が二つ見えました。すると直ぐとその一つが萎れて私の前へ落ちました。……丁度そんなに私の忘れられた情はなるのでせう！……

が然し、その節は、クリーオールは誰れも彼れも知つて居る、そして今でも川で屡〻聞

くことの出來る、短い歌の節(ふし)のやうにあんなに魅惑的では無い。自分はクリーオールの曲調總ての中で最も美はしいものと思ふ。『ト・ト・ト』（佛蘭西語のコツコツ(トク)の土語）は戸を敲く音の擬聲(オノマトーペ)である。

ト、ト、ト！――『サ　クイ　ラ？』
『セ　モアン・メンム、　ランムー。――
ウーヱ　ラポット　バ　モアン！』

ト、ト、ト！――『サ　クイ　ラ？』
『セ　モアン・メンム　ランムー、
クイ　カ　バ　ウー　ケ　モアン！』

ト、ト、ト！――『サ　クイ　ラ？』
『セ　モアン・メンム　ランムー。
ラブリー　カ　ムイエ　モアン！』

『敲くは誰れぢやい？』トン、トン、トン。
『惚れたわたしのこの身です。
　わたしの爲めに戸を開けて！』

『敲くは誰れぢやい？』トン、トン、トン。
『惚れたわたしのこの身です、
　あなたにこころを差し上げる！』

『敲くは誰れぢやい？』トン、トン、トン。
『惚れたわたしのこの身です、
　雨に濡れます――戸を開けて！』

……が、もつと普通に耳にする洗濯女の歌は、――亞非利加人の節奏的諸調の感念がもつと目立つて居る――陽氣な、快活な、あてこすりの俗歌――謝肉祭時分の作曲――である。『マリー・クレマンス　モーディ』、『ロエマ　トムベ』、『クアン　ウー　ニ　ティ

マリ　ヨヨル』など、それてある。[註]

註　クリーオール音樂の見本は附錄を見られたい。

正午にマシャンヌ・マンジエが――盃に載せた干魚やアクラや、料理した大豆や、マビの饅を持つて――その女の子を連れて遣つて來る。洗濯女は買うて、岩を食卓にして、足を水に浸けて居て食ふ。銘々マビを飲むに使ふ錫の小さなコップを有つて居る。……それから洗濯と歌とフェッセの音とがまた始まる。午後も傾く。――學校の時間が終はる。すると美しい多くの有色人の子供達が川へ來て、石段を飛び下りながら、その姉や母や教母に向つて叫ぶ、『エティ！マンマン！』――『セセ！』――『ナンネーヌ！』と。小さな男兒は衣物を脱いで裸になつて暫く水の中で遊ぶ。……日沒近くなると、より迅速なより活動的な女が、そのリンネルを寄せ集めて、盃の上へ積み上げ始める。むき出しになつた岩の大きな地面がまた方々に見える。……六時までには川床の殆ど全體が露出する。――女は大抵皆歸つた。二三人が、最後に來るのを待つて、暫時サバヌに居殘る。一番最後にその水路を去るものに對して皆がいつも大笑ひをする。『川に錠卸すことを』忘れなかつたのかい、と皆が問ふ。

『ウー　フエメ　ラポート　ラリギエ、シエ――アン？』
『アー！ウイ、シエ！――モアン　フエメ　イ、ウー　タンヌ？――モアン　ニ　ラクレ・アー！』（えい。錠卸しましたよ――聞こえたでしよ？――そら、鍵を有つてます！）

が然し幾日幾週、彼等が歌をうたはぬ時がある――其谷の靜寂がただ岩に打つリンネルの音と、十萬年の古昔歌つたと丁度同じにこの町そのものが存在しなくなる時にも、歌ふてあらう所のロクスラーヌの大聲と、に破られる、貧窮の時と疫病の時、とがある。……『今日はどうして歌はぬのだい』と、千八百八十七年――疫病の年――の夏、自分は嘗て尋ねた。『ヨ　カ　パンセ　トゥット　ランミゼ　ヨ――トゥット　ラペーヌ　ヨ』（みんな自分達の苦勞を、自分達の難儀を、考へて居るのであります）といふ返事を得た。ても、どんな季節にも、若々しさと力とが在る間は、生きて居るもの死んだもののリンネルを――生まれ出たものを包む白い切れを、花嫁を飾る白い衣裳を、大なる靜寂へ去つて行くものへの白い經帷子を――洗濯して、風にも晴れにも、霧にも雨にも、彼等は働く。そして永久の山々の肋骨を持つて行く急流が彼等の生命を――時には黑い玄武岩が磨り滅らされるやうに徐に、徐に――時には突然に、瞬く間に――持つて行く。

といふのは不思議な危險が絕えず洗濯女を脅かして居るからである——その流の不信義がそれてある！……仕事して居る彼等を注目して居給へ、彼等が幾度その眺めを東北の高地へ、ペレ山を眺めに、向けるか氣が附くであらう。ペレは彼等に警戒を早く與へて吳れるのである。サン　ピエールでは日がかんかん照つて居り、港内は瑠璃と靑く澄んで居る時、高山の大森林大谿谷の地方に豪雨が降つて居るのかも知れぬ。淺い流川が、高地からして突發する激流に俄に嵩を增して、岩や木や破壞された森林を流し下り、巖を持ち上げ、山腹を荒廢せしめる。そして時折、ロクスラーヌの峽谷をば、動いて居る山壁のやうな泡立つ水の突進と共　、噴火の時のやうな轟聲が下つて來る。そして橋と建物とがその通ると共に消えてしまふ。千八百六十五年には、河床からあんなに高い處に在るサヴヌが激流に襲はれた。そしてその橋梁は全部海へ攫はれた。

だから年のいつたそして賢い洗濯女はいつもペレに注意を怠らぬ。若し黑雲がその上に集つて、電光が其間を走れば、——サン　ピエールではどんなに日が雲無く照つて居ても——警報が傳へられ、幾哩の晒しリンネルは三四分間に岩から消え、一人殘らず其水□を立ち去る。ところが、河水が高まらぬうちに、ペレがそんな友誼のある信號を與へなかつたことが時々あつた。洗濯女は大抵は泳ぐ、しかも上手に泳ぐ——自分は彼等女の子の一

人が、用の無かつた折、港で、殆ど見えなくなる遠さまで泳いで出たのを見たことがある。
——が、如何な水泳者もロクスラーヌが水嵩を増した時には如何なる機會も有たぬ。それに出逢うた者は總て岩と漂流物とに打たれる、——クリーオールの言葉が——碎く、搗く、粉々(こなごな)に碎くといふ意味の言葉が——言うて居るやう、ヨ　クラゼされる。

……時々、短時間家(うち)へ歸つてゐて居なかつた者が、川へ歸つて來ると、その朋輩が川から——多くはそのリンネルを後にして——丁度逃げて歸る時だといふやうなことがある。が、依託されたリンネルを放棄することはせぬ　それに向つて——行くなと警戒の叫びがあつても——親切な粗暴な手が捉へても——突進する。河床に達する。——水は早その腰に達して居る、が彼女は強い。そのリンネルの處に達する。——散らばつてゐても、一つ一つ、『一つ！——二つ！——五つ！——七つ！——』と、摑み上げる。——耳はごうごうといつて居る——『十一！——十三！』到頭みんな摑み上げる。……が、もう足の下の岩が動いて居る！一瞬時彼女は、つい三四ヤード距つて居る石段へ屆かうと一所懸命走る。——が、つぎの瞬間に、雷音爲してその洪水は彼女を襲ふ——すると、ぶつつかりながら流れ落つる大石——くるくる舞ひをして流れ走る樹木……

恐らくは日沒前に、小船漕ぎの誰れかが彼女を見出すかも知れぬ、入海の遙か遠くに浮

いて居るのを――深さ一千呎の水にうつむけに漂うて居るのを――死んだ忠實な手でその傭用者の財産をなほもしかと抱へて居るのを。

ペレ山

一

マルティニークに植民しようとの最初の試圖は殆どその開始と同時に放棄された。その遠征の先導者がこの國を『餘りにてこぼこで、餘りに山が多い』ことを見、また『その土地を蔽うて居る蛇の數の異常なのに恐れを成し』たからである。オリーヴとドゥプレッシとは、千六百三十五年六月二十五日に上陸して、數時間の踏査の、否、むしろ觀察の後に島を去つて、グアドゥループ向けて出帆した——と、フライアース・プリーチャー教團の、教父（ペール）ドゥテルトルが書いた、妙な古めかしい、然し極めて眞實な歷史に載つて居る。

マルティニークの地形地圖をただ一目見ただけでも、この國をトロ　アシエ　エ　トロ　モントウユーと思つたこの教父の斷言を確認するに足るものがあるであらう。その三分の二以上が峰や山である。——今日と雖も、九八、七八二、クタール〔一ヘクタールは我が一町二十五歩餘〕あ

ると想はれて居るその地面の僅四二、四四五ヘクタールが開墾されて居るのである。そして最近の『年鑑(アンヌエール)』（一八八七）の四二六頁に、内地にはその面積『精確には知られ居らざる』廣大な政府所有地があるとの記述がある。だが、——長さ殆ど四十九哩を出でず、平均して幅が二十哩でありながら——殆ど三世紀間の文明の後、一部分はその島自らの住民にも知られぬ儘で居る（全島を旅行したことのあるクリーオールは五六人と無い）といふ國は、山が多いのに相違はないけれども、マルティニークの高地二つだけが『山(モンタース)』といふ名を有つて居る。それは北の方ではペレ山(ラ・モンタース・ペル)と、南の方ではヺークラン山とである。佛領西印度植民地を通じて、噴火起原の或る高所を名ざすに用ひられて居るモルンといふ語は、これは或る字書には『小さき山』と稍々不滿足に飜譯されて居る語であるが、マルティニークの大多數の小山には正當に使用されて居るけれども——異つた人々の心にそれが起こす程度を異にした尊敬心に恐らくは應じてであらうが『モルン　ペレ』とか、或は『モンターヌ　ペレ』とか、或は單に『ラ　モンターヌ』とか呼んで——その最も偉大な高山にすら時々不正當に使用されて居る。が、普通の命名に於てすらも、他の西印度諸島の山嶽誌にもさうであるが、マルティニークの山嶽誌にも、山はピトン、モルン、それからモン或はモンターヌと、規則正しく分類されて居る。モルンといふは、非科學的な觀察者にも

噴火起原のものといふことが分かるあの美しい、そして珍らしい形をして居るが常である。大抵は或る高さまで金字塔形卽ち圓錐形である。が、絶頂は圓くなつて居るか又は截形されて居るかする。――その側面は、非常に多くの樹木が綠を爲してゐて、谷の地平や海岸線から著しくだしぬけに聳え出て、多くは尾根や皺が妙な形を爲して居る。ピトンといふは、數は遙か少いが、形はもつと妙變で、――殆ど直角を爲しての裂けた地層の火山的圓錐狀か又は火山的隆起て――時に尖塔のやうなきつたつた線を爲して居るがあり、多くは人間が住めぬ程急峻てある。時に乳房狀を爲して居て、それを――殊に對になつて存して居る場合には――人工的創造物かと人に想はせるほどに均齊な形を爲して居る。その餘程重要なものだけが『モンターヌ』の尊稱を頂戴して居る。自分は旣に述べたやうに、さういふ尊稱を得て居るものはマルティニーク中に、ただ二つしか無い。この島の頭であり絕頂てあるペレと、東南部のラ　モンターヌ　ドゥ　ヺークランとてある。ヺークランは高さに於ても大きさに於ても北部並びに西北部の幾多のモルン及びピトンに劣つて居る――それが有名なのは、一聯の山脈の中心にその地位を占めて居るからであらう。が然し、高さに於て大きさに於てまた威嚴に於て、ペレは此島のどの山にも遙か勝さつて居り、その特別の稱號『ラ　モンターヌ』に充分に値して居るのである。

マルティニークはどんな處かといふについて、それは最長五十哩に足らず、平均の幅二十哩に足らぬのに、この小さな島に山が、或は少くとも他處で山と名づけ得らるゝものが、四百以上あるといふ單簡な記述ほど、形狀を正しく讀者に傳へ得るものはあるまい。その四百の山がまた幾つかに分かたれて居り、間々に峰になつて居り、その斜面に小山を有つて居る。――マルティニークの一番低い小山でさへ高さ五十米突である。峰のうちには全然登られぬと言はれて居るのがある。モルンの中にも、一方、若しくは二方、若しくは三方すら、さうのが多い。主要な山のうち名を有つて居るのは僅九十一しか無い。そしてその中似寄つた名稱のが幾つもある。例へば、モルン・ルージユが、一つは北方に、一つは南方にと、二つある。グロ・モルンといふのが四つか五つある。高地の全部は、太古の六個の噴火中心點のまはりに群らがつて居るか或はそれから射出して居るかして、六つの大きな集團に屬して居る。卽ち、(一)ラ ペレ、(二)ピトン ドゥ カルベ、(三)ロッシユ[註] カレ、(四)ヷークラン、(五)マラン、(六)モルン ドゥ ラ プレーヌ、これである。明らかに山塊を成して居るものが――ペレ系はただ十三を含んで居るが カルベ系だけに四十二ある。そしてカルベの全面積は――ペレのそれよりもずつと多くて――周圍一二〇、〇〇〇米突に及ぶ。が、其中心は、『ラ モンターヌ』のそれの如くに一個の巨大な金字塔狀の山塊

註　また「ラ　ペル　ドゥ　リル」――とも呼ばれて居る。北方山系と南方山系との連鎖になつて居る、長い高い山壁で――頂上は幅僅に二米突である。ロシュ　カレは、その地質構造は、グレナダの外除いて、他の西印度系に發見せらるゝどんなものとも異ふ。卽ち、柱狀玄武岩である。……マランの平原には妙な化石がある。――眼に見ただけではその變態が覺られぬほどに完全な蜂の巢を自分は見た。

ては無くて、五個の著しい斑狀圓錐の一群に依つて――カルベのピトンに依つて――示されて居るだけである。――然るにペレは、一切のものを見下ろし、北方を滿たして、殆どエトナの外貌と面積とに劣らざる外貌を呈し、面積を占めて居る。

　時折自分は、ラ　ペレを仰ぎ見ながら、富士百景を物した日本の偉大な畫工の企圖を、同じくその本國の山嶽を誇り、またその平原の暑さと山腹の蛇とを恐れぬ、誰れかクリーオールの美術家が眞似をすることは出來ぬものかと訝つた。ペレ百景は確に物することが出來るのである。この巨大な山塊はこの島の北部の住民には遍在であり、南部のモルンの殆ど總ての絕頂から見ることが出來るからである。サン　ピエールの――岩だらけの裾の一と褶(ひだ)の中に巢籠もつて居るサン　ピエールの――殆ど何(ど)の部分からも見ることが出來る。島内の山脈悉くを見渡し、カルベの大ピトンの頂上を抽んずること更に一千呎である。――

ー峽谷へ入るか、南部の谷間の中を旅行する時、それが見えなくなるだけである。……が、この國全體が幾つも峰を尖らして居ることと、氣候が暑くて濕氣が多いといふことが、自分が提議したやうな美術的企圖の如何なるものにも反抗する。寫眞師でさへ、深く入り込んだ內地でも、東方の海岸でも、其處の風景を撮影することを夢想だもせぬ。その上、旅行といふことが、困難でもあるが、それに劣らずまた費用が嵩む。旅行家が泊まることの出來る宿屋や休息所が一軒も無い。そして、殆ど每日、突然の、そして猛烈な降雨があつて、（暑さの爲め氣孔が膨脹して居る時に、全身濡れる事は、胸膜炎を起こすかも知れぬから）これは大いに恐るべきである。そして蛇が居る！そんな困難と危險とを冒して、二三週間の旅行と研究とをペレに捧げんと欲する藝術家は、マルティニークにこれまでまだ出現して居らぬ。[註]

註　ティボール　ドゥ　シャンヴヨンは、千七百五十一年に、マルティニークの事を斯う述べて居る。「此處では研究を阻害するありとあらゆるもの（トゥツ　ソッポーズ　ア　レテュード）に遭遇する。亞米利加クリーオールが調査に身を委ねないとも、それは唯だ單に冷淡とか、怠惰とかに歸すべきでは無い。一方には、壓倒的な間斷無しの暑熱があり――モルンと上坂との絕え間無しの繼續があり――あらゆる開き口を塞ぎつて互に絡み合うて居る攀援莖植物と、博物學者に防寨を造つて居る刺だらけの植物とがあ

つて、殆ど近寄れぬやうにして居る森林へ入る困難があり——その上、蛇が起こす不斷の心配と恐怖とがある。——そして他の一方には、單身仕事をしなければならぬといふ勇氣を挫かせる必至事があり、自己の思想や發見を同じ趣味を有つて居る人に傳へることが出來ぬといふ氣落ちさせる事態がある。そして最後に、さういふ落膽と危險とが——そんな研究は、誰れ一人そんな研究を企てない國では、必らずや尊重も競爭も伴なはぬことであるから——個人的に尊重を蒙るといふ極僅の希望によつても、また競爭者があつて張り合ひがある樂みによつても、緩和されるといふことが決して無い、といふ事を記憶してゐなければならぬのである」——（「マルティニーク旅行記」——）政府が造つた道路が出來、森林が稀薄になりはしたけれども、上記の事情はシャンヴョン時代後殆ど變つてゐないのである。

この山はサン　ピエールから見ると巨大に見えはするけれども、眼で見ただけてはその大いさを低く見つもりをする。此町に近いモルンに、ラベルなり、ドランジユなり、或はもつと大きなパルナッスなりに登ると、その頂上から眺めたペレがより偉大に見えるので諸君は驚く。一體、火山性の山は、嶮峻な爲めに、實際よりか高く見えるものである。然しペレは別樣に人目を瞞す。その四周の谷から眺めると、本當よりも低く見え、近處のモルンから眺めると、本當よりも高く見える。前者の幻想は、その外形が特殊の傾斜を爲してゐて、この島の北端の殆ど全部を占めて居るその基底が異常な幅を有つて居るに因るの

てある。そして後者の幻想は、諸君が登つた高處が、その側面の勾配が急な爲め諸君を錯した高さと比較して考へて、實際以上に高く誤解させるが爲めてある。が、ペレは高さの點に於てはさして顯著なものでは無い。モロー　ドゥ　ヨンネの測定では一六〇〇米突てある。他の人の測定では四四〇〇呎四五〇〇呎の間てある。これまで行はれた多くの不完全な測定の總計は、最高點は海拔五〇〇〇呎以上て――或は五二〇〇呎で[註]――あるといふ

註　フムボルトは山高八〇〇トアズ（一トアズ＝一六呎四、七三吋）即ち五一一五呎許りよりも少からぬと信じてゐた。

コルニヤック博士の意見を是認して居る。頂上の雲は北方の國々の山の風景を見慣れて居る眼には何等の指示をも與へはせぬ。こんな暑い濕氣の多い地方では、天氣の好い折でも、雲は頗る低い處に懸かるからてある。が、大きさに於てはペレは實に壯大なものてある。それはカリビア海から大西洋へ島を横さまに跨つて居る。そのあたりのモルンの大連鎖はただ控壁に過ぎぬ。ピトン　ピエロー　やピトン　パン・ア・スークル（砂糖塊の峰）や他の八〇〇呎より二一〇〇〇呎に至る山々は、その子供火山てある。その横腹から――含有鑛物質を異にして居る多くの温泉のほかに――三十に近い川が生まれて居る。この島の頂點

を爲して居るから、ペレはまたその氣象生活の統治者で、——雲の牧者で、稻妻の鍛冶で、雨の製造者である。晴天の時に、この土地の白い蒸氣總てを——より低い山々の肩掛や冠り物を奪ひ取つて——自分の方へ引き寄せつつあるのを諸君は見ることが出來る。——尤もカルベのピトン（三七〇〇呎）はいつもその中腹に一片の雲布を——ランチョを——失はぬやうにして居る。それからまた、多くの雲がペレのまはりを——他の點から絶えず到來する爲めに、廻はりながら、その量を增して——圓を描いて廻つて居るのを諸君は見るであらう。若し噴火口が朝のうち全部露出して居て、そのてこぼこの端が青空を背に非常にきつかりと見えれば、天氣が好くなるよりも惡るくなる徵候[註]である。

註　地震の起こる前に、この山がどんなに厚く雲に蔽はれてゐても、地震の最初の衝撃と同時に、その雲が必らず消える、といふ奇妙な信仰が民衆間に行はれてゐたのであつた。が、ティボール　ドゥ　シャンヴョンは、さうだと言はれて居る此の現象の眞僞如何を骨折つて研究して見た。そして幾度もの地震に、雲は正しくいつもの通り噴火口上に懸かつて居るのを發見した。……が然し、今なほ存して居る、今一つの民間信仰には、もつと根據がある。——それは、ペレ附近の大氣が絶對的に純潔であること、從つてまた可なり長い間その絶頂が全く露出して居ることは、颶風の前兆と思つて宜いといふことである。

恐らくは大きさに於ても、亞米利加山脈の素晴らしく偉大な風景を知つて居る者には、ペレは感銘を與へぬかも知れぬ。が、誰れしも形と色との感念に訴へる特殊の魅力をそれに否むことは出來なからう。その形狀には幾月の美的研究に値する、素敵な風變りな點があるのである。北の空を背にして波打つて居るその斜面を――妙な刻み目をつけて居るその嶺續きを――續きに續いて居る臺地が崩れて更に新たな臺地を爲し、それが更にまた碎けて此處其處に峽谷を爲して、それを玄武岩の巨大な控壁が跨ぎ繫いで居つて、熔岩形成物の狂亂的に急に高まつてはまた俄に頽れ降つて、遠く海と平野とへ浪なして流れて居るのを眺めて、誰れしも容易に見疲れはしない。そしてそれが、表面が日の光を受けて居る處は何處も、綠てある。その骨骼が何であるかは、その急流の黑い巨大な岩を檢べて見て初めて察することが出來るのである。そしてその百と類を異にして居る綠が、それがその風景に存する色彩の唯一の妙趣を爲して居るのでは無い。山腹を遠くまで續いて居る、甘蔗の長い斜面――それから、遠く見ると苔の帶のやうに見える、一層高い所の森林帶――それから、その上方の、皺になり褶になつて、末終に絕頂の霜と白き雲に迨んで居る、もつと柔らかな色を爲して居る處、それ等は美はしくはあるが、諸君は蔭の色に、――豐富な、透明な、蔭の色に、なほ一層悦ばされることてあらう。皺を緣取つて居る蔭、窪みに

溜つて居る蔭、突然の突起から斜に筋を引いて居る蔭、之が諸君の眼に、恰も日本の團扇の山水の色彩の如くに、幻の美はしさに見えて來ることであらう。――それが大抵日の中は、藍青から、幾段の菫色と淡い青とを經て、最後の紫丁香花（ライラック）色と紫色とに移つて行く。そして過ぎ行く雲の影すら、それがペレに落つる時は、青い灰かな色味を帶びる。

……この大火山は死んで居るのか？……誰れにも分からぬ。四十年足らず前に、サンピエールの屋根へ灰を降らした。今から二十年にならぬ前に、つぶやき聲を發した。今の處、眠つて居るやうである。そして雲が其一番上の噴火口のコップへ滴くを落として、それが周圍幾百ヤードの湖水になつて居る。この――『レタン』即ち『水溜り（プール）』と稱する――湖水は、人間の記憶のうちに活動をしたことは無い。他に――恐ろしい或る峽谷の横面に開いて居るので、行つて見ることは困難であり危險である――噴火口が幾つかある。千八百五十一年に全市に灰を降らせたのは屹度、そのうちの一つの、いつも『ラ　スーフリエール』と呼ばれて居るのであつたらう。

爆發は、五月の央ばに始まり八月の第一週に終つた――マルティニークよりもグアドゥループの方が遙かに劇しかつた――と續きの地震の最後のものに殆ど直ぐ續いて起こつたのであつた。ペレの西側の斜面の麓に在るオー　プレシュール村の者は、暫くの間、硫

黄の――即ち、化學者に云はせれば、硫化水素の――息苦しい臭氣に愚痴をこぼしてゐたのであつたが、八月の四日に、凄まじい長い音が――其附近の山腹の栽培者が、汽船が蒸氣を吹き出す時のやうであるが、無限にそれよりも聲高い、底深い唸り聲に、喩へて居る音が――山からきこえて來たので非常な恐怖を起こした。その音響は、或る時は雷のやうな轟きに深まるのであつたが、休み休みして、翌晩まで續いた。山の案内者は『セ　ラ　スーフリエール　クイ　ブー！』（スーフリエールが煮え立つて居る）と宣べた。そして恐慌が其近處の栽培地に居る黒人を捉へた。午後十一時には、其音が非常に恐ろしくなつて來て、サン　ピエール全市に驚愕を充たすほどであつた。そして六日の朝は市は、外國で暮らした事のあるクリーオールが非常な高霜に似て居ると言つた程の、常ならぬ光景を呈した。屋根、樹木、露臺、日蔽、石鋪道、すべてが灰の白い層で蔽はれてゐた。その降灰がまたモルン　ルージュの屋根々々、またこの首府のまはりの――カルベ、フォン・コレ、オー　プレシュール、などの――村々總てを白くし、附近の地方をも白くした。山は煙か蒸氣かの大圓柱を立ち騰らせてゐるのであつた。そして、いつもは灰色を帯びた綠の色をして居るリギエール　ブランシュ川が、インキの迸りの如く黒く海中へ流れ出て、一哩の間もその青色を染めて居た。調査をして、公の報告を書く爲め任命された委員は、澤

山の裂け目が、山の横腹に、新しく出來たか、或は突然活動したのかといふことを知つた。その裂け目は、いづれもみな、今『モルン　ドゥ　ラ　クロア』として知られて居るあの地點から西に傾いて居る大きな峽谷にあるのであつた。その幾つもを多くの困難を冒して行つて見た――委員の者共は、つぎからつぎとある絶壁を、攀援莖植物の綱を傳はつて、下りて行かなければならなかつた。そして其調査は、更にまた一つ爆破があつて起こつた一時の恐慌にも拘らず、推して遂行されたといふ事は注目に値する。其爆發の主力は、周圍一千ヤード許りの裡に行はれたのであること、種々な溫泉が突然噴出してゐて――其うち一番ぬるいものの溫度が列氏三十七度（華氏百十六度）であること、――山の形狀には些の變化も無いこと、――そして、その怖ろしい音響はその裂け目の或る物から蒸氣と灰とを猛烈に噴出した爲めに起こつたのに外ならぬこと、を滿足に見屆けたのであつた。クリーオールの一僧侶は、一般の驚愕を鎭めん目的て、この火山の頂點に登つて、其名を此高山に與へて居り、且つ今もなほその當時を記念して居る、大きな十字架を其處へ建てた。

　高地の森から、そしてより高い栽培地からより低い栽培地へ、蛇が異常に多く移住した、――そして幾千と殺された。ペレはそれから引き續き長い間、白い蒸氣の非常に大きな圓柱を立ち騰らせてゐた。が、もはや降灰はさせなかつた。そして山は次第に鎭靜して、そ

の現今の靜止狀態となつた。

二

サン　ピエールからペレへ登るには幾つもの道で出來る。——最も普通なのは、モルン　ルージュとカレバッスとを通つて行く路である。が、オー　プレシュールへ行く海岸道路に沿うての幾つもの地點から——モルン　サン　マルタンとか、或はそれよりもつと北の、あの著名な溫泉（フォンテーヌ　ショード）の近くを通る或る有名な路のやうな、あんな地點から——登山する方が、少い時間で頂上に達することが出來る。諸君はオー　プレシュールに向けて車を驅つて、そして甘蔗栽培地の中を、徒歩で登山を始めるのである。……諸君がペレの裾を廻つて西北海岸を辿るその道は實に繪を見るやうである。——ロクスラーヌ、リギエール　デ　ペール、リギエール　セッシユ（この川床は今はただ岩石の動かぬ流に占められて居る）を渡る。——初め、ココアの林があり、鐵灰色の砂の幅廣い濱邊（海浴場である）があるフォン・コレの郊外を通る。——それから、ペレの熔岩外衣の緣の襞を占めて居る眠さうな村の、ポアント　プランスと、フォン　ドゥ　カノンギー

ことを過ぎる。その車道はしまひには絶壁の起伏して居る上を上がつたり下がつたりして、その行路の大部分は充分日蔭になつて居る。諸君は、多くの巨大なフロマゼ卽ち絹木綿の樹、種々な太い列を爲して居る苔滿林庋、それから厚い黑い羽毛のやうな葉をして居るフラムボイヤンの群、それからその一本一本の枝から垂れ下がつて曝うして居る長い莢のある旃那の樹、それからカムペシユ卽ち蘇芳木の生垣、それから葫蘆の樹、それからクリーオールてレーザン・ボ・ランメ卽ち『海岸葡萄』と稱する實を結ぶ綺麗な灌木の群、を賞讃するてあらう。それから諸君はオー　プレシユールに達する。石造の教會と、中に噴泉が一つある公設の小さな四角い遊園とを自慢にして居る、頗る古めかしい小村てある。リギエール　ドヲ　プレシユールを溯つて少し行つて見る時間があるなら、海岸の見事な眺めを得ることが出來る。海岸は其處ては、急に素晴らしい高さに高まつて居て、半圓形を描いて奈落の村（オー　アビーム）をぐるりと見渡すやうになつて居るのてある。この名はその地點て海が非常に深くなつて居るが爲めに思ひ附いた名に相違無い。……同盟州巡洋艦アラバマが、魚が岩蔭に潜むやうに寄てその身を隱して、その追跡艦イロクヲアの眼を脫れたのは、この絕壁の蔭てあつた。アラバマは――佛蘭西の領海を去つた刹那に跳びつく機會を今か今かと待つて居る――北軍軍艦の爲めに久しくサン　ピエールの港に封鎖

されてゐたのであつた。――そして港内の幾多のヤンキー船が、アラバマが夜暗を利用して脱出を企てたなら、火箭信號を揭げる事にして居つた。ところが一夜この武裝私有船はクリーオールの水先案内者を船に乘せて、其燈すべてを蔽ひ、煙も火花も沖なる敵船に見えぬやうな裝置を煙突に施して、南方さして汽走した。が然し、暗黑を透してその行動が見分けられる程近くに居た或るヤンキー船が、早速南の方向に火箭を射上げた。そこでイロクォアは追跡した。アラバマは、カルベまでは、その陰になつて全く姿を見られぬやう、その高い岸に接近して進んだ。それから不意に方向を轉じて灣を再び横ぎつた。が、またもヤンキーの火箭がその行動をイロクォアに洩らした。が、オー　アビームに達して、その巨大な黑い絕壁に近く身を置いて、見分けのつかぬやうにじつとして居つた。イロクォアは其處に居るのが分からず、北へと汽走し去つた。そしてこの同盟州巡洋艦は充分に敵の視界外にあると見てとるや否や、その水先案内を上陸させて、ドミニカの水道へ脱出した。その水先案内は貧乏なムラットて、五百フラン貰つて過分の報酬だと思つて！居つた。

……モルン　ルージュを通つて行く、ペレへのもつと普通な道は、他の點に於て興味がある。……熱帶の太陽を餘り恐れない人ならばどんな人も、町から內地へ通じて居る山道を辿るのを愉快な經驗と思ふに相違無い。その山道が横ぎるモルンは總て皆異常に美しい

風景を見晴らすからである。道の之の字形にうねり行くに從つて、風景がパノラマ式に移り變はる。或る時は諸君は眼下一千呎の谷を見下ろして居る。或る時は諸君は、日の照つて居る幾哩の牧場、或は甘蔗畠を越えて、――鋸の齒のやうに鋭く、また青玉の如く青い――圓錐を爲して噴火口の形を具へたものが遠くに固つてゐて――更にそれよりも遠くに高山が眞珠色に列なつて居り、更に又それよりも遠い高峰が濛乎たる黄金色に薄らいで居るのを見る。モルン ラベル街道とか、モルン ドランジユ街道とかいふやうな紆曲した道を辿ると、町は幾度も姿を沒し又姿を現はして――常に小さくなつて行つて、終には將棊盤の大いさぐらゐにしか見えなくなる。同時に遠くの山の形が伸びて來、長くなつて來るやうに思はれる。――そして諸君の登るに連れて、海が常に、常に高くなる。町の屋根を見下ろす並木路（ブールヴール）から初め眺めると、海の地平線は直線で、小刀の刄のやうに鋭いやうに思へた。――が、諸君がより高く登るに從つて、それは延長して來て、曲り始める。そして次第にその漫々たる瑠璃色の水面全體が、圓盤のやうに丸く廣がる。ずつと内地の或る非常に高い絶頂から眺めると、諸君を取り卷いて、空に接して居る絶大な青い圓を――もつと高さの高い峰が、ペレとかピトンとかの峰のやうなものが、其環を跡絶やすので無ければ――諸君は眼にする。そして、海が斯く高く見える事は、筆には述

べ難い感銘を、そして大氣が水蒸氣を含んで居るが爲めの、幻を見るやうな感銘を與へる。町から眺めた時でも、大洋の緣が妖魔のやうに、濛として居る晴れた無雲の日がある。然し、海を一千呎の下に見下ろす地點へ登れば、どんな季節の、どんな日にも、眼に映ずる世界の緣が、我々を驚かしむる一種の靈的な色を帶びる、――それは、非常に强い日の光が、近くに在る物の形すべてに、非常に鋭い輪郭と非常に烈しい色とを與へるからである。

　サン　ピエールの町がいつも眺められる、そんな山道の遠近畫的風景美は驚くべきてはあるが、モルン　ルージュへの道路は、殆ど直ぐに町を後にして、それを見えなくしてしまひはするけれども、山道に遙かに勝さつて居る。ラ　トラースだけを――南の方フォール・ドゥ・フランスへ山の尾根の上を又原始的森林の中をうねりくねつて居るあの長い路を――除いては、此島の國道のうちで、恐らくモルン　ルージュ道路ほど面白い部分はあるまい。公共の交通機關でグランド　ルーを去つて、ロクスラーヌに沿うて、マンゴや苔滿林度の亭々たる大木があるサヴヌ　ドゥ　フォールを馬を驅つて通り抜ける。それから並木路（ブールヴァール）に達して、高いモルン　ラベルを通過し――それから右手に、幹の白い棕櫚が二百呎の高さにその頭を擡げて居る植物園を――また、頂上まで木を茂らせて居る美しいパルナッスを眺める。――左手には、ロクスラーヌの谷が淺くなつて行き、ペレが其巨大な基

底を段々見せなくして行く。それから諸君は、眠さうな小綺麗な、棕櫚の多い三橋村（トロア　ポン）を過ぎる、――此處は、華氏寒暖計がサン　ピエールよりも溫度が三度低いことを早も示す。――それから國道は、急に右へ曲つて、突然頗る急に――馬が並足で無ければ登れぬほど急に――なる。木の生え繁つた小山について廻つたり、その中を通つたりして、路は之の字形に――時折海を見渡し――時々峽谷の緣に沿うて――登る。諸君が半時間前に通つた道路が、テープの絲のやうに狹く見えて、遙か下手に起伏して居るのが――ロクスラーヌの山峽が――それから、今や綠と紫との長い支脈を海中へ突き出して居る、次第に高くなり行くペレが――折々瞥見される。諸君は山林の涼しい木陰を――綠に染めた巨大な駝鳥の羽毛のやうな竹が風にうねつて居る下を――三十呎乃至四十呎の絕妙な木羊齒の下を――妙な控柱を有つた幹の、堂々たるシーバの下を――色んな闊葉樹、カシブー、パリジエ、バナニエなどの下を――馬を驅る。……それから諸君は甘蔗に蔽はれた高原に達する。その黃色な廣漠は、右方、水晶のやうな銳い角度の幾つかの小山の半月形を爲したのに限られ――左方は、海に向つて傾斜して居る。そして諸君の眼前に、途中の幾つものモルンの肩の上に、ペレの頭が聳えて居る。强い凉しい風が吹きつつある。そして馬は暫くの間速足が出來る。二十分經つ、すると道は、その高原を後にして、またも

や峻しくなる。――昔はその素敵に大きな一つの支脈の尾根の上を、その火山に近づきつつあるのである。路は半圓を描いて廻る――之の字になる――今一度或る谷の端に接する――其處の障碍無しの懸崖は約千五百呎はあらうか。が、その谷は、次第次第に狹くなつて、昇りになつて居る峽谷となる。そしてその地隙の向う側に、反對の側の絶壁の縁に、鳥の巣のやうに、見たところその際(きは)に巣籠もりして、尖塔一つと家幾軒かが眼に映る。それがモルン　ルージュ村である。海拔二千呎である。そしてペレは、その村の上に高く聳えはして居るけれども、今は高さがほん少し低く見えて居る。

　モルン　ルージュに就いて誰れしも抱く第一印象は、其本門に面して胴の太いパーミスト（なつめやしに類した棕櫚の一種）が四本ある質素な教會が見下ろして居る、灰色に塗つた田舍家と店（といふよりむしろ假小屋）とがちらばら建つて居る一本筋の街路、といふ印象である。にも拘らず、モルン　ルージュは、その位置を思へば、小さな處では無いのである。――約五千の住民がある。が、それが住まつて居る處を發見せん爲めには、尾根にあるその國道を去つて、其處から兩側に下(くだ)つて居る生垣高き小路を踏査しなければならぬ。すると諸君は木造の小さな田舍家の――一つ一つバナナや印度葦や林檎薔薇で目隱しされて居る――紛れも無い正眞の市街を發見さるゝであらう。そしてまた、夥多の綺麗な私邸を――富裕な

商人の田舎屋敷を――も見らるゝてあらう。そしてその教會は、外面的には無趣味であるが、中は興味あるものが多くまた印象を與へるところ深いことをも知らるゝてあらう。それは、幾多の奇蹟が行はれたことがあると人の云ふ、有名な聖殿なのである。非常に多人數の行列がサン　ピエールから――日が充分に昇らぬうちに到着するやうに、朝の三四時に出發して――年々定時に此處へ遣つて來る。……が、此處には一つも森が無い、――野があるだけである。所謂ロゾー・ダンドと稱する、濃い赤い葉を附ける木を生垣に結ぶ地方的慣習がある爲めに、其小路の色調が甚だ奇妙である。深紅の葉のある裝飾的植物を植ゑるのが好きなことが眼に見えて分かる。それを他にしては、この山頂は稍ゝむきだしてある。樹木はみすぼらしい姿をして居る。諸君は、登つて行くうちに、バーミストが高い處にあるのほど、次第に小さくなつて居ることに目を留めたてあらう。モルン　ルージュては――丈が短くて、幹が非常に太くて――いぢけて一寸法師になつて居る。

此處モルン　ルージュは、海と高い山々と廣い谷々の美しい眺望があるに拘らず、何となく荒涼たる觀がある。恐らくはこれは、建物が普遍的に板石(スレート)色を帶びた灰色を――サン　ピエールの壁を色取つて居る杏やバナナの黄色と比較して著しく陰氣な色を――して居るのに大いに因るのてあらう。が然し、この物淋しい灰色が、モルン　ルージュの――そ

この人は文字通りに雲の中に住まつて居るモルン　ルージュの――氣候に抵抗し得る唯一の色なのである。この雲は、ペレから白煙のやうに轉び下りて、屢々陰鬱な霧を造る。それにモルン　ルージュは確に世界中で一番降雨の多い土地の一つである。他の何處もが乾いて居る時、モルン　ルージュでは雨が降る。一年の少くとも三百六十日と三百六十夜雨が降る。殆どいつも、二十四時間毎に一度雨が降る。が、五度又は六度降る方が多い。濕氣は眼に見えるほど顯著である。鏡は悉く斑點が出來る。リンネルは一日に黴びる。革は白くなる。羊毛の品物は水に浸けたやうな手觸りになる。新しい眞鍮が綠になる。鋼は赤い粉に崩れる。木細工物は驚く許り迅速に腐る。鹽は直ぐと鹽水に變形する。そしてマッチは、非常に暖かい處に置いて置かなければ、點火しようとせぬ、物悉くが朽ち、皮剝け、腐れる。教會內部の壁畫すら膨れ上がつて大きな水腫れになる。そして、綠色か褐色の顯微鏡的植物が、材木或は石の曝露して居る表面全部を襲ふ。夜は時に非常に寒い。――だから、斯んなに濕氣があり、寒くまた黴び易いのに、どうしてモルン　ルージュが健康地であり得るか、了解するのが困難である。が、少しの疑問無しに、健康地なのである。病身者にとつてマルティニークの大養生地である。トリニダッドやカエンヌの氣候の爲め衰弱した外國人は元氣恢復に此處へ來る。

この村を去つて尙ほも登りになつて居る道路を辿ると、北の方へ二十分徒歩した後、諸君は素晴らしく美しい眺望に——幾多の急流が流れて居り、南と西とは二重にも三重にも四重にも波打つて居る山々に——跡絶えたり、峰と聳えたり、拷問にかかつて居るやうな姿したりして、そして距離が西印度の大氣に與ふるあのあらゆる寶石の色調に色どられた（クリーオール語のイリゼされた）山々によつて境せられて居るシャム・フロールの巨大な谷の眺望に驚くであらう。特に感銘を與へるのは、この幾多の光彩を有つた連山の中央なる或る一つの紫色の圓錐の美しさである。それはピトン　グレなのである。この廣漠たる肥沃な地面の谷は、牧場と甘蔗とココアとが交互して碁盤縞を爲して居る——ただ西北の方だけは別て、其處は森が曲線を越えて見えなくなる遠くまで大波を打つて續いて居る。この風景に面して居ると、諸君の左手に、種々な高さのモルンがある——そのうちに、その背後に抽んでて居るペレを除いては他のいづれの山よりも高いラ　カレバスに氣が附くであらう。——そして雜草の繁つて居る道が一筋、國道から岐れて、その火山の方へ、西の方へ上つて居る。これがペレへのカレバス道である。

三

ペレへ登山を企てる前に、能く能く天候を確めなければならぬ。前以て閑な特別な或る一日を擇ぶだけのことでは、絶頂からして物を見得る機會は、このつぎに金星が太陽面を通過するのを滿足に觀測が出來るかどうかの天文學者の機會よりも餘程少いのである。その上に、高峰に一部分でも雲が懸かつて居れば、モルン　ドゥ　ラ　クロアに――噴火口そのものの上の圓錐形地點で、下からは普通は見えぬ峰に――登るのは安全では無からう。そして午後が無雲なことを、人を瞞し易いペレの外貌で豫言することは、決して出來ないのである。夜明けに、噴火口の端が空を背に全くきつかりと見えて居る時は、その日の中は天氣が惡るいであらう。そして日沒時に、それが隱されずに何處も見えて居る時は、翌朝それが隱されずに居るであらうと信ずべき充分の理由は一つも無いのである。幾百の登山家が、そんな外見に欺かれて、くたびれる旅を無駄に爲し來たつて居る――何も見ずにただ冷たい白い濃霧を見ただけて歸路に就かざるを得なかつたのである。四方八方、幾週間も、空が眞つ青な儘てゐて、そしてペレの頭はいつも隱されたままて居ることがある。

登山に成功せんが爲めには、晴天の時節を待つて居てはならぬ ― それでは幾年も待たなければならぬかも知れぬ。待たなければならぬのは、一日間幾度の降雨の或る定期時間で ― 太陽と雲との規則正しい交替である。これは、朝と夕方とは完全に澄み切つてゐて、日中に突然の豪雨がある、夏季の雨期の或る一時期の特徴を爲して居る、それを見計らはなければならぬのである。晴れ間を見込んでそれを當てにして居ては無效である。書物には乾燥期が毎度出て來て居るけれども、本當に乾燥した天氣は全く無いのである。事實、マルティニークには、判然と指示の出來る季節は無いのである。――十月から七月までは暑さと雨とが少し少い、七月から十月までは雨と暑とが少し多い。著しい區別は殆どこれだけ！である。豪雨と颶風の季節は七月十五日に始まるといふ、大砲發射によつての公式通報は、恐らくは、熱帶の季節の漠として人を迷はす限界を定めようと企てた、マルティニークの當事者が發表したそれと反對な宣言同樣、信ずるに足らぬのである。でも、この問題に關しての政府の報告は、如何なるものよりも一層滿足なものである。『年鑑』に據ると、次記の季節がある、――

一、涼しい季節（セイゾン・フレイシユ）。十二月から三月まで。降雨、約四七五ミリメートル。
二、暑くて乾燥する季節（セイゾン・シヨード・エ・セツシユ）。四月から七月まで。降雨、約一四〇ミリメートル。

三、暑くて雨の多い季節（セイゾン・ショード・エ・プルヴィユーズ）。七月から十一月まで。降雨、約一一二一ミリメートル。他の當局者は暑くて乾燥する季節を二期に分かつて、そのうちの五月頃始まる後半を、「春」（ルノヷー）と呼んで居る。そして、斯く指示して居る時節に、植物が俄に盛んに發育するといふ事は少くとも眞實である。が、いつも雨が降り、殆どいつも雲があり、氣壓計が殆ど無用で寒暖計が日當りでは日陰での度數の倍にも騰る國では、天候の始めと終りとを指示したり日附けしたりすることは不可能である。が、長年の辛抱強い觀察で、夏季の降雨期中、豪雨が——日中若しくは午後の暑い時刻に降つて——或る一定の定期時刻を有てば、朝早くにはペレは大抵晴れて居る、といふ事實が確められた。だから夜明け前に出發すれば、絶頂から充分の觀望を爲し得る機會が大抵はある譯である。

四

暖かいそしてまだ星の出て居る九月の或る朝、五時に、全體のうちで最も距離の短い路を採つて——ペレの西側の控壁の一つの、モルン　サン　マルタンの路を採つて——登山すべく、數多の友と共に馬車に乗つてサン　ピエールを出立する。海岸に沿うて半時間許

り馬を驅る。それから、海岸を後ろにして、左右幾哩もの甘蔗の間なる、上部の栽培地へ通ずる、うねうねした山道を辿る。空は登るに連れて明かるくなり、鋼のやうな一種の輝きが、日が旣に此島の他の側に始つて居ることを知らす。數哩上に、この火山の頂が、増し行く日の光を背に、鋸の齒のやうにきつかり切れ目を見せて居る。一片の雲も眼に映らぬ。すると光がこの偉大な圓錐の後ろに黄ばむ。そして自分がそれまでに見た一番美しい未明の一つが、川が三つ流れて居る廣大な谷を右手に見せる。その谷は馬を驅り行くにつれて非常に速に深まる。サン　ピエールのあたりのモルンが、日の光を浴びはじめて、我我の背後遙か遠くに沈む。そしてその幾つものモルンの上に、南の方に驚くべき　すべて眞靑な――半面影像が姿を現はしはじめる。打見たところ中央部はペレほども高さのある、上に角形や圓錐を冠つて居て、西の方海へなだれ傾いて居る、一大山壁である　澤山の異常な尖頭がある。が、最も感銘的な形を爲して居るのは最も近くにあるもので、一群の峰を頂いて居る素敵に大きな圓錐形の山塊である。その峰のうち二つ、他よりも高いのが、形の美しさですぐとその名を知らせる。卽ち、カルベのピトンなのである。ペレは今日は裸なのに、その二つの峰は雲の帶を纏うて居る。みな眞つ靑である。増し行く日の光はその色を深めるだけで、それを消しはせぬ。……が、より近い谷間には和らかい黄ばん

だ森の輝きが見え始める。まだ日はその姿を見せることは出來ずに居る。——日がペレを去るにはまだ少々時間がかからう。

最終の栽培地に達して、小さな木造の田舍家のある——野蠻人の部落の——小村で馬を止めて、自分の友人共の一親友たるその持ち主に、非常に懇切な待遇を受ける。その人の家で一同衣服を更めて登山の用意をする。——彼は我々の馬に食物をあてがつて與れ、また我々の爲めに經驗に富んだ案内者を——この栽培地附きの有色人の青年二人を——出して與れる。それから我々一同は登山を始める。案内者は前に立つて、跣足で歩む、銘々手に蠻刀一つと、頭の上に包み一つ——我々の食料、寫眞機その他——を持つて。

山は二千五百呎の處までは諸處開墾されて居る。だから、栽培者の住處を去つてから一時間の四分の三經つた後も、我々はなほ甘蔗とマニオクの畠の中を横切る。光は今は谷に強く照つて居る。が、我々はペレの陰に居る。栽培地は到頭終はる。登山道は野生の甘蔗、野生のグアヴ、荒れ狂うて居るギニーグラス、中には美しい花を附けたのがある他のなかなか折れぬ植物——そんな物の中を通つて行く。森が前面にある。我々の近寄るのに驚いて、小さなフエル・ドゥ・ランスが一匹、一束の枯れた甘蔗から、一番先頭の案内者の跣の足の殆ど下へ、滑り出る。と、その男はその蠻刀で早速その頭をちよんぎる。長さ十五

時も無いもので、それまで潜んでゐた黄ばんだ葉と殆ど同じ色のであつた。……森の端て第一回の休息をする時、話しが蛇の事になる。

幾百といふ蛇が我々の四周に隠れて居るかも知れぬ。が、突然物に驚いて已むを得ずて無ければ、蛇は日中は顔出しをせぬものである。一行總ての意見では、我々はもう蛇には會ふことはあるまいといふのである。自分を除いて、一行の誰れも彼れも、語り得る珍らしい經驗を有つて居る。この三角頭蛇は、その敵を去ること、その身長の三分の一を下らざる距離に居なければ傷をつけることは出來ぬものだ、といふことを自分は初めて耳にする。植物園の長をしてゐたことのある甲君は、蛇が居ることとの分かつて居る穴へ大膽に腕を突込んで、頭のつい後ろの處を握つて尾はその腕に卷きつかせて引つぱり出す、そして罎の中へ生きた儘入れるのであつたが、一度も嚙まれたことは無いといふ話。――乙君は或る日狩りをしてゐるうち、非常に大きな三角頭蛇の蜷局(とぐろ)巻いて居るのを踏み附けたが、怖ろしさの餘り非常に早く走つたので、足に捲き附いてゐた其蛇は嚙むことが出來なかつたといふ話。――フエル・ドゥ・ランスの尻尾を捉へて、蛇の頭がちぎれて飛ぶまで『鞭のやうにパチパチ振り廻はす』事が出來た丙君の話。――シャム・フロールに住んでゐた年寄りの白人で、蛇肉を食料にして居るのがあつて、其アジユーパにはいつも『鹽漬けの

蛇が入つて居る小さな檻」（コン　カ　セバン。サレ）を有つてゐたといふ話。――捲きついてからあとでその猫の爲めに自分も殺されはしたが、モルン。ルウジユ近くで　シヤール・フアーブル君の白猫を殺した、長さ八尺といふ大きな奴の話。――鼠を捕らへて、爲めに砂糖黍とココアの木とを鼠害に遭はしめぬやうにしてくれる、保護者としての蛇の價値の話。――グアドゥルーブで鼠に惱まされた折、フエル・ドゥ・ランスを輸入しようとして不成功に終つた話。――クラポー・ラードルといふ大きな蟇はそれを呑む蛇を死なせる力を有つて居るといふ話。――それから、最後に、マルティニーク文學に田園詩的牧歌的要素が全然缺けて居るのは到る處に長蟲が居るが爲めだといふ話　など聞いた。最後に話しをした、サン　ピエールの、人好きのする年寄りの醫師は斯う言ひ足す。「此國の植物と動物とさへ、餘程まだ未知の狀態の儘て居る。それはフエル・ドゥ・ランスが居るので、眞面目な研究を極端に危險ならしめるからである」

自分は經驗が乏しいから斯んな會話に加はることは當を缺ぐ。――自分は三角頭蛇の非常に小さな奴の標本を二匹見ただけて、生きたのは一度も見たことが無いのである。マルティニークで隨分の年月を過ごした人て、アルコールの罎に入つて居るか、或は黑人の蛇捕りが竹に括りつけたのを見せるかしたもののほか、一度もフエル・ドゥ・ランスを見た

ことが、無いといふ者もあらう。が、それはただ、外國人はこの國の內地を旅行することが稀な爲めか、或は日が暮れた後、田舍道へ出ないが爲めてある。蛇はサン　ピエールの附近にすら稀だと想像するのは正しくは無い。市の後ろの並木路やサヴヌの縁で屢〻殺される。豪雨の時、街路へ流されて來たことは毎度ある。ロクスラーヌの洗濯女で、それに咬まれたものが多い。暗くなつてから並木路のあたりを歩くのは非常に危險だと考へられて居る。――といふのは、夜だけ出あるく蛇は、夜になつてからモルンから川の方へ下りて來るからてある。植物園が爬蟲を多數にかくまつて居る。自分の文章のこの邊を執筆して居るつい三四日前、その植物園に居た有色人の勞働者が一人、長さ一米突六十七サンチのフエル・ドゥ・ランスに咬まれて死んだ。內地ではもつと大きいのを時たま見る。長さ六呎五吋、眞ん中の太さ人間の足ほどもある、殺された許りのを自分は見た。この島の栽培者のうちで甘蔗を刈つたりココアを摘んだりする季節中に、手の何處かを咬まれたことの無いものは少い。――蛇に咬まれたのだけで勞働者階級中での年平均の死亡率は多分[註]五十てあらう。それもいつも、若い盛りの美しい青年男女てある。富裕な白人の間にあつてすらも、この原因によつての死亡は想像するほど稀では無い。サン　ピエールの金有ちの市民たる或る紳士を自分は知つて居るが、十年のうちに三角頭蛇の爲めに――傷はいつも

血管近くてあつた――親族三人を失くした。血管を貫かれると、治療は不可能てある。

註　海軍軍醫、オーグスト・シヤリエ著「マルティニークの蛇の咬傷について」一八七五年巴里、モクエー出版。

五

……我々は振り返つて、黄な扇子を展べたやうに延び廣がつて居る甘蔗の野原や、扭れ歪んて紆曲して居る谷や、西の方の或る開き口の向うに展開して居る海を眺める。早驚く許りに擴がつて居るのてある、海は、――水平の平面としてて無く、計るべからざる瑠璃色の絶壁の如くに立ち上つて來て居るやうに思はれる。頂上に達した時、それがどんなに觀えることてあらう？遙か下に、一線を爲して野働きの者が――一栽培地の、所謂、アテリエ全體が――徐に傾斜地を下つて、下りながら甘蔗を伐つて居るのが見分けられる。男二人づつに女が一人、括り手（アマリユーズ）が一人居る。男が伐り倒す甘蔗を寄せ集めて、それをその甘蔗の强靱な長い葉て束のやうなものに括り、それを頭に乘せて持ち去る。

――男はその彎刀を、それを見て居るのが樂みなほど、實に見事に使用する。目今はそんな光景を屢〻眺め樂むことは出來ぬ。賃請け仕事の制度が輸入された爲め、稀な例外はあるが、此島到る處に、栽培地勞役の繪のやうな美しさを無くしてしまつたからである。前には甘蔗刈りの仕事は一軍の行進に似て居つた。――初め、腰まで裸の、彎刀連が横隊を爲して進むのであつた。それから括り手が、括つて運び去る女共が進む。そしてその後ろに――歌の音頭を遣る、金出して傭うた男か女の歌ひ手と一緒に――カ郎ち鼓が進む。――そして最後に、大將として、黑人の采配振りが行くのであつた。そして舊時はまた、英國の海賊が不意に海岸を襲擊して、この勞働の兵士を正銘の軍人に變へることは、珍らしくは無かつた。栽培地のアテリエの彎刀の爲めに、擊退された攻擊は、一度ならずあつたのである。

斯んな高地ては、一語一語はしかと聽き取れはせぬが、話し聲や歌ひ聲は能くきこえる。不意に、喇叭のやうな力强い聲が、鳴り響く、――その采配振りの聲なのである。手に彎刀を提げて、打見ながら、その横隊に沿うて歩んて居る。何と叫んだのかと、自分は案內者の一人に尋ねる。

『イ　カ　クーマンデ　ヨ　プーアン　ガド　プー　セパン』（蛇に用心せいと言つて

居るのであります」と、案内者は答へる。

彎刀連がその仕事の終りに近づくに從つて、危險は多くなる。追はれ追はれて甘蔗の最後の茂りへ退却しつゝある蛇は、其處に固まつて、死にもの狂ひに戰ふからである。成熟の時期が決まつて居るやうに決まつて、死はその人間の生命の稅をその勞働者のうちから徵收する。が、一人が倒れると、他の一人がその空位へ――恐らくは隊長自らも――進んで出る。この黑い劍客は決して退却をしない。殆ど何等の感情も現はさぬ。勞働者は宿命論者なのである。[註]……

註　グランド　アンスの、プレプール栽培地監督のフランカー　ベーヤデル氏は蛇の咬傷への最も有效な療法は、局部に強く吸角子(すひふくべ)を掛けて出血せしめることであると自分に語る。二三十匹の（それが手に入る時は）蛭を直かに附けることと、內服藥としてアルカリを用ひることである、といふ。この方法で氏は幾多の人命を救つた。

黑人の手當人(パンスール)の方法は遙かに七面倒なもので、或る程度までは神祕なものである。硝子玉の代はりに小さなクイ卽ち半分にした瓢簞を使つて、血を吸ひ出させる。――それから藥草での――蜜柑の葉、肉桂の葉、丁香の葉、さんとり草(シャルドン・ベニ)、シャルペンチエ、恐らくは此上二十種も、皆混ぜ合はせたものでの――罨法を施す。――この罨布を一と月も每日續ける。その間患者はタフィアや酸い蜜柑汁で、いろんな途方も無いも

のを飲ませられる。例へば、粘土製の古い煙管を砕いて粉末にしたものとか、フエル・ドゥ・ランスそのものの頭を炙り焦がして搗いて粉にしたものとか。……栽培地の黒人はこの手當人の方法外の療法には信用を置かぬ。――醫者に治させようとはせぬ。そして經驗のある白人監督にすら、その治療に服さうとは殆どしない。

六

……我々はグラン・ボアへ――原始的森林へ――『大深林』へ入る。

サン　ピエールから雙眼鏡で眺めると、この森林はこの火山の帶を爲してゐて、そしてその皺襞通りになつて居る苔の帶のやうにしか見えぬ。それほど木々の葉の頂が密に交じり合つて居るのである。が、實地それへ入るといふと直ぐと自己は、蔓に包まれた巨大な柱のやうに到る處に屹立して居る大きな樹の幹に取り圍まれて、綠色の薄暗がりの中に居ることを見出す。――そして、いろんな攀援莖植物といろんな寄生性纏繞植物が――中には異常に大きな　正銘の寄生性樹木が――　あらゆる角度を爲して匐ひ昇つたり、一番高い頂上からして更に根際からとして眞直ぐに垂れ下がつたりして、その巨大な樹幹の周あ

ひだの空間は全部占められて居る。この朦朧たる光の中に居ての眺望は、大さを異にする無數の黑い網とケーブルとが、地面から木の絶頂迄で、また枝から枝へ、帆綱の如く、ピンと張りつめられて居るといふ盛觀である。此處には珍奇な異常な樹木がある。アコマット、クールバリル、バラタ、シーバ即ちフロマゼ、桃花心木、護謨樹があるのである。——幾百と無く木炭製造者の爲めに伐り倒された。然し此森林は依然として壯大である。今や、全島到る處に行はれて居る、木炭製造者が行ふ樹木の野蠻なる絶滅に對して政府が何等の制限を置いてゐないのは洵に憾むべきである。貴重な多くの林が急速に無くなりつつあるのである。木理の細かな、重い、チョコレート色の木材を見れるクールバリル、それよりももつと重く、もつと緻密な、もつと黑いくらゐな木材を與へるバラタ、杉の匂ひの強い、濃い赤味のある木材を産するアカユー、鐵刀木（ボア・ドウラエル）、ボア　ダンド、それからあの素敵なアコマ——いづれもこんな火山傾斜地に——其生産力は歐洲の最も肥沃な土壤よりも十八倍多いこの火山傾斜地に——幾十萬と無く繁茂してゐたのであつた。マルティニークの家財は悉くこの土産（どさん）の材木で造られたものであつた。現に有色人の箪笥製造者は、多分紐育若しくは倫敦の製造者を驚かすであらうやうな細工を今なほ造り出して居る。が、今日はもはや堅木を輸出はせぬ。却つて近隣諸島から多くを輸入するの必要を見て居る。しか

も森林の破滅はなほ行はれて居る。森林樹木での木炭の內地製造は年額一、四〇〇、〇〇〇ヘクトリートル〔一ヘクトリートルは百立方呎〕に逹んで居る。それでも原始林はなほこの島の二一、三七パーセントはある。が、貴重な材木を發見せん爲めには、ペレやカルベのやうな高山へ登るか、又は深く內地の山へ入らなければならぬのである。

こんな傾斜地に前に最も普通であつた木は護謨樹で、その木一本、長さ四十五呎幅七呎あるのから、幾つも幾つも獨木舟(まるきぶね)が造れたものであつた。今でも護謨樹は澤山に在る。が、それを海岸へ運搬するの困難が近來護謨樹をドミニカから求めしむるに至つた。當節この木から造る獨木舟の大いさは、長さ十五呎、幅十八吋を越ゆるは稀である。その製造法は古昔のカリブから傳來のものである。初に樹の幹を獨木舟の恰好にして、兩端を尖らせる。それからそれを刳るのである。窪みの幅は一番廣い處で六吋を越えぬ。が、その空所を今度は濡れ砂で滿たす。幾週間か經つうち、その砂が重さて刳りを廣くして、その船に完全な形を與へる。最後に板で舷側上部を附け、座席――普通四つ――を中へ設ける。すると、これほど長續きし、またこれほど早く走るものは無い船が出來上がる。

……我々は登る。步道と云はんより寧ろ踏み跡があるのである。土壤は眼に見えぬ、ただ、物の根があらゆる方向にその上で編まれて居る植物の頹廢があるだけである。足は決

して平らな表面へ附きはせぬ、――根の表面を踏むだけてある。そしてその根が、路に沿うて突き出て居る枝と同様に、氷のやうに滑る、綠色のぬるぬるの苔て蔽はれて居る。熱帶の林の中を歩くに慣れて居ないと、一步毎に轉ぶ。間も無く自分は前進が不可能になる。自分が難儀して居るのを觀て、一番近くの案內者が振り返つて、その頭上の包みを動かしもせて、その彎刀て伐つて、二た刪り三刪りて上等な杖を造つて吳れる。この杖は危く滑るのを防いて吳れるだけては無い、時には道を探る用を爲して吳れる。進めば進むほど、路が曖昧になるからである。その路はシャシュール・ドゥ・シュー（キャベツ採り）が――若いキャベツ棕櫚の頭部を市の市場へ供給して暮らして居る山住み黑人が――造つたものてある。彼等はいつもその路が塞がらぬやう注意して居る――さうしなければ林が一と月てその上へ出來るからである。我々が前進する間に、摘つた計りの棕櫚の生菜(サラド)を、カシブーかバリジエの葉かにくるんて、蔓て括つたのを頭に乘せて、シャシュール・ドゥ・シューが二人大膀で横を通る。パルミスト・フランは容易に一百呎の丈(たけ)に達する木てある。然しシャシュール・ドゥ・シューがその若木を熱心に探すから、此處の森て、伐られる迄に十二呎の高さにすら達するものは少い。

……步行が一層困難になる。――このグラン・ボアには際限が無ささうだ。いつまて經

つても同じ綠色の仄かな明かりであり、同じ滑り易い木の根の——時々羊齒の葉や蔓で隱されて居る——ごつごつの自然の階段である。アムモニヤ的な鋭い匂ひが空氣にある。氷水のやうに冷たい露が衣物をびしよ濡れにする。見慣れぬ昆蟲が暗い處で震るへ聲の音を立てる。そして時折、殆ど鵯の囀り聲のやうな、軟らかい朗らかな音が續け樣に鳴り響く。木に棲む小さな蛙の歌なのである。路は草木が次第に多く生ひ茂つて來る。キャベツ採りが絶えず往來するので無ければ、蔓や莢の中を通り行く路を、一歩一歩我々は彎刀で伐つて進まなければならぬに決まつて居る。際限無く絡み合うて居る物の根がまた層一層我々を驚かす。この森林全體が斯く——地の下もさうであるが却つて地の上に多く——編み合はされて居るのである。この熱帶の樹木は、斑岩や玄武岩の急峻な斜面を登つて行くことが出來るのであるけれども、深くは根を張らぬ。横に遠く延びる、根の大きな網を出すのである。そしてそんな網一つ一つがそのぐるりの他の網と結び合うて、それが今度は更に遠い網と結び合ふ。そしてその網目々々の間を攀援莖植物が昇つたり降つたりし、それにまた、護謨のやうに硬い、名も無い夥多の灌木が、苔や草や羊齒と一緒に、間から突き出る——斯くして數平方哩の上へまた幾平方哩の木が、互に結び合ひ、互に絡み合うて、颶風の壓力に抵抗し得るほどの堅固な一と塊になる。だから、これまで路が出來て居ない處は、

それへ入るには非常に巧妙に彎刀を揮ふことによつて始めて成し遂げられるのである。

無經驗の外國人はこの彎刀使用をどういふ風にして遣るのか了解に苦しむかも知れぬ。人間の腕の太さの攀援莖植物をたつた一つ打ちで切り離すのは容易ならぬ業(わざ)である。訓練を經て來て居る彎刀使用者は、見たところ何の困難も無しに、それを遣る。しかも、切つた尖が鋭角になつて、後危(あぶ)ない物にならぬやうに、水平に伐る。彼は決して強くは打たない――動く時に絶え間無しにきらきらして居るその刃でただ輕く敲く――やうに見える。彎刀を揮ひ揮ひ行く我々の案内者は、少しもその荷物の爲めに不自由を感じて居らぬ。彼等は眞直ぐになつて歩き、決して躓かず、決して滑らず、決して躊躇せず、そして汗さへかかぬやうである。その跣足は物を掴むことが出來る。我々の一行に加はつて居る、この森に慣れて居るクリーオールで、跣足の時と殆ど同じやうに、靴を穿いてゐても上手に歩けるのが居る。が、彼等は荷は持つて居らぬ。

……終に我々は樹木が小さくなりつつあるのを見て喜ぶ。――巨大な幹のものはもはや無い。――空が時折、瞥見出來る。太陽が峰の上へ餘程昇つて居るので、木の葉越しに時たま光線を送る。十分(ぶん)して、木の生えて居ない場處へ――非常に險しい地面で、その上(うへ)の方に、更に高い樹帶が見える、荒れた草地へ――達する。此處て一同またも、暫時の休憩

をする。
北の方は眺望は草本植物で蔽はれて居る尾根の爲めに斷たれて居る。――が、南の方は開いて居て、下に峽谷があつて、その峽口の兩側は黑ずんだ綠の衣に――太陽を遮ぎるしつかりした帳になつて居る木々の頂上に――覆はれて居る。外側の、そして低い方の絕壁の向うには、谷の表面が遠く幾哩も見えて、甘蔗の黃金色の幅廣い閃きを射出して居り、更にその向うは、色んな綠が色んな靑の中に消えて、そしてカルベの妙不思議な形の山塊が、前よりか遙か高く聳えて居る。海岸が一と乙曲線を爲して居る處に在るサン ピエールは、赤と黃との小さな半圓の、長さ二吋に足らぬ條文である。遠くの山脈の――金字塔や、圓錐形や、一つ又は二つの瘤や、布團の下で膝を上げて居るやうな妙な靑い角ばつたものやの塊の――間々の場處は、霧が籠もつて居る潮水に似て居る。水氣が充ちて居るのである。――海上の水平線は全く消えて無くなつて居る。ただ地平線だけが、異常に高くなつて居る地平線だけが、ピトンの絕頂と殆ど同高に――オーロラのやうに、靈のやうに――黃ばんだ仄かな光の圓い紐として、見分けられる。この濛とした地平線と海岸との間の海は、もはや海とは見えずに、空な空を逆さにしたもののやうに見える。あらゆる景色が此世ならぬ美しさを有つて居る。――するどい線は一つも無い。物の始めと終りとがし

かとは見えぬ。色がただ半分の色である。峰が水の中からのやうに、青味のある霧の神祕の中から突然に突立つて居り、陸は同じ色合に海の中へ溶けて居る。或る大きな――調子を深めない、また部分々々を描かないうちに放棄した――水彩畫では無いかと思はせる。

七

我々は此の高みから幾多の川の誕生地を見渡して居る。ところがこのペレの川は此島中で一番清い、一番冷たい川である。

どんな方角から登山をするにしても、この火山へ登るには、頂上からして西へ、北へ、東へ、海の方へ――長さ八哩乃至十哩の控壁の如くに――傾いて居る、古昔の溶岩奔流が造つたあの多くの巨大な尾根の、どれか一つの上を通つてしなければならぬのである。尾根と尾根との間の峽谷を、雲に養はるゝ川が――下るに從つて、尾根の兩側から流れ落つる無數の小さな流川の水を受け入れて――流れ下るのである。また冷泉がある、――その一つがサン　ピエールにそのオー・ドゥ・グーヤーヴ（グアヴ水）を供給して居るので、この水は非常に暑い天氣の折にも、いつも旨くて綺麗でそして冷たい。が、マルティニー

クの主もな川七十五の、殆どどの川の水も冷たくて綺麗でそして旨い。そしてその河川が珍らしい流れ方をして居る。その平均の傾斜は六呎毎に九吋と計算されて居る。――奔流を爲して居るのが多い。――リギエール ドッ カス・ナギールはその上流では五十碼毎に殆ど百五十呎の傾斜を有つて居る。當然此等の流は非常な深さの水路を自分で掘る。森林の中やモルンの間を流れる處ではその岸は――川床へは行けぬほどに――千二百呎から千六百呎の高さに及んで居る。そして高さ百五十呎から二百呎に至る垂直な壁を有つた岩の水路を通つて海へ注ぐのが多い。水は必然的に尋常な天候の時には淺い。が、風雨の時には、言語に絶した雷音を發する恐ろしい急流になる。どんなに早く高まるかを理解する爲めには、熱帯の雨はどんなものかを知らなければならぬ。千八百二十三年に、ボイエペエルロー大佐は、此植民地での一年の雨量は、海岸では百五十吋、山地では三百五十吋と測定した。一方、巴里での一年の降雨は僅に十八吋である。こんな雨の性質は温帯の雨とは全く異つて居る。滴くが異常なもので、霰のやうに重い――コップの臺皿の周圍を跳ね飛ぶ!――そして非常な音を立てるから、大聲で喚かなければお互の話し聲がきこえぬ。本當の暴風雨の折には、どんな屋根もその瀧の流を防ぐ事が出來なさうで、どんなに丈夫に建つた家でも、あらゆる方向に雨漏りがする。そして少し遠くの物體は、その厚い水

幕に遮ぎられて見えなくなる。そんな雨が來たす荒廢は想像が出來よう！道路は一時間で切り離される。木は吹き倒されたやうに覆される。――それは、根を二呎も下へ張る西印度の木は少いからである。根はただ大きな直徑の上を横に延びて居るだけである。だから一本立の木は雨が降ると實際横滑りするのである。川の高まるのは實に急激て、ロクスラーヌや他の川て仕事して居る洗濯女が、その危険を知らせる暇も無いうちに、水に掃はれてこれまで屢々死んて居る。その驟雨は七哩も八哩も遠い處で起こつたのである。

此川には大抵は魚が多く棲んて居る。其主もなるものは、杜父魚（チタール）、バナーヌ、ロッシュ、それからドルミュールである。杜父魚（チタール）（これが一番の魚てある）とロッシュとは激流を二千五百呎の、時には三千呎の、高地までも遡る。空氣入の一種の吸盤があつて、それて岩に吸ひ附く事が出來るのである。下流では石の下で素敵に大きな鰕が捕れる。爪から尾まて三十六吋もあるのが居る。それから何處の川口でも、七月と八月には、莫大なティティ(註)りが――茶々椀一つに千尾は入る程の、白い小さな魚が――捕れる。油でいためると非常に旨い――サーディンよりか無限により美味である。或る人はこれは一種特別な種類の魚だと思つて居る。他の人は――それが時期を定めて出てまた無くなるのが示すやう思はれるやうに――より大きな魚の仔（こ）魚だと信じて居る。市街を清めて呉れる山水の流と共に、

サン　ピエールの町へ幾百萬となく時に流れ落ちて來る。其時は、溝にも、噴水にも、沐浴盤にも、群を爲して居るのを見る。――そして送水管を掃除する爲め一時送水が斷たれる土曜日に、空氣がいやな匂になる程澤山に、このティティリが溝の中で死ぬことがある。

山蟹が、それが時期を定めて轉住するので有名な山蟹が、また隨分の高處に居る。その數は黑人の馳走の一品として切りと用ふる爲め非常に減つて來たやうに思はれる。が、或る某々の島では、昔の著作家が書いて居るやうな蟹の大軍勢を今なほ時たま見ることが出來る。千六百四十年に、サン　クリストーフて、三十名の移住民病人が一時その海岸へ揚げられたところ、夜間、似よつた種類の蟹に襲はれて生きながら食はれた、と教父ドゥテルトルは語つて居る。かう書いて居る、『群を爲して山から下つて來て、家よりも高いほど重なり合うて、その哀れな者共の身を蔽ひ……その骨を綺麗につつき食つて、一點の肉も殘さずに居つた』

註　七八月の夜光る稻妻を、クリーオールでは、「ゼクライ・ティティリ」即ち「ティティリ稻妻」と呼んで居る。――この稻妻は、ティティリが川に澤山出來だしたといふことを知らすのだと信ぜられて居る。有色人の間では、電と此小魚の出生との間に奇妙な關係があるといふ考が存して居る。普通「ザクライ・アカ　フエー　ヨ　エコレ」（稻妻があれを孵す）と云ふ。

八

……我々は上部の森林帯へはいる——またも綠の薄暗がりになる。相變はらず澤山の攀援莖植物がある。が、莖の太さが前よりも細い。——樹木は、いぢけて居て、一緒に固まつて居る。そして、根の網細工が前よりか細かで、もつと厚く出來て居る。此處は、グラン・ボア卽ち大きな林と對照して、『プティ・ボア』（小さな林）と呼ばれて居る。非常に澤山のバリジエ、一寸法師の棕櫚、木羊齒、野生のグアヴ、此等のものが徑の左右の低い草木と一緒になつて居る。徑は車輪の轍の幅に狹まつてゐて、道へはみ出て居る雜草や羊齒の葉で殆ど隱されて居る。足の裏が、それと同じ大きさの地面を踏むことは一度も無い、——火山岩か輕石かの角立つた破片の上へ、輪係蹄のやうに、色んな角度に組み合つて居る、根の滑り易い背を踏むだけである。不意に下りになつて居る處があり、突然上りになつてる處があり、泥穴があり、また裂け目がある。——落ちないやうに兩側の羊齒を摑む。と、羊齒の中には、裏側に釘のやうなものがあつて、手を突き破る。が、跣足の案內者は、例に依つて荷物を頭に、眞直ぐになつて——短く掛かつて居る枝はどんな枝でも

彎刀でちょん切りながら――さつさと大胯で進む。此邊には美しい花が――見慣れぬ種々な山梗菜が――咲いて居る。同行のクリーオール醫師が『鳳梨科』と呼ぶ植物に屬する、綺麗な赤と黄との花である。それから、菫色がかつた赤い花瓣を有つた、ブラジルのギルッサシアに似た植物がある。種々様々な、筆には書けぬ羊歯がある――羊歯の博物館だと言つても宜い！かの醫師は、山林通であるが、山へ入つて何か新種の羊歯を發見せぬことは無いと言ふ。氏は既に幾百といふ蒐集をして居るのである。

路は絶えず次第に急になつて、何十度も曲つたりうねつたりする。又別な草原に達する。今度は鐵滓に似た、上が黒く尖つた石の上を歩かなければならぬ。――それから、又しても小さな林を、前よりも一層低い木の林を、ぬけて、又別な草地へ出る。ペレの赤裸々の頂上が、緑の筋のついた、黒ずんだ赤味を帶びた、上の尖つた絶壁となつて、左手の狹いけれども恐ろしく深い裂け目の上に、聳えて見える。我々は其噴火口と殆ど同高に居るのであるが、それへ達するには、いぢけた木と藪との荒地を通つて、長い廻り道をしなければならぬ。クリーオールはこの下生えの木を『ラジエ』と呼んで居る。實は下の大森林に敷い　やうに生えて居る低い叢の延長に他ならぬのであるが、蔓のものが少くなつて、羊歯が非常に多くなつて居るといふ相違があるだけである。……突然我々は、途中に、幅三

十時ぐらゐの――半ばは絡み合うて居る葉に隠された――黒い裂け目に到達する。それはラ　フエントである。此尾根全體を二分して居る火山的龜裂なので、底無しだと云はれて居る。若しか滑り落ちはせぬかと恐いので、それを跨ぐ時、案内者は手を持つて呉れようと言ひ張る。幸にもそんな裂隙はもはや無い。が、泥穴と、枝株と、根と、動く岩とは、數へられぬほど多い。それへはまると、黒い或は灰色の粘泥へ膝まで落ち込む泥だまり(プールビエ)が、そのうちで一番不愉快で無いものである。それから路は又も打開いた明かるみへ下(くだ)る。――すると我々はエタンへ――三本のパーミストの噴火口へ――着いたのである。

それは非常に大きな池て、遠望を全く遮ぎつて高い綠色の岩壁が完全に四方を取り卷いてゐて、此處其處にそれが圓錐形に突立つたり、高い妙な恰好の瘤に高まつたり、して居るのであつた。向う側のそんな隆起の一つは鈍角の角(つの)といつた恰好をして居る。それがモルン　ドゥ　ラ　クロアである。景色は壯大であつて同時に無氣味である。此湖水の上に聳えてその穩かな表面へ影を映して居るその形には、月の寫眞に見る物の姿の無氣味さがある。その上をまたその間々(あひだ)を、雲が循つて居る。その一つは湖面へ下(お)りて、一切の物をぼかして一寸の間我々を襲ふ。そしてまた立ち騰る。我々は登るのがのろかつたので、雲

が集まる閑があつたのである。
この噴火口にその名を與へて居る三本のパーミストを見ようとするが見えぬ。それはずつとの古昔無くなつたのである。が、湖水の傾斜地の密生した羊歯の覆ひ物の中から――濃い綠の大きな羽の總のやうに、やつとその頭を見せて――其處此處に點在して、その澤山の若木はある。
千八百五十一年にルフッ博士が爲した測定も、この湖水の周圍に關する最近の『年鑑』の測定も、共に確に誤つて居る。百五十米突といふ、『年鑑』のは大誤りてある。周圍は三百歩と少しだと測定したルフッに從つて、――その直徑を意味してゐたに相違無い。我我の見る處では、殆ど正圓を爲して居るこのエタンは、縱橫いづれも二百碼はあるに相違無い。――或は、此夏は異常な降雨があつたから、餘程膨らみを增してゐたのであらう。水際から二碼許り離れて水中から突出して居る小さな鐵十字架は、この前の季節には、水を離れて岸に高く立つて居たと案內者は言ふ。今は、この噴火口の水と壁との間には、我我の休息し得る、草の生えた岸は狹い地面が一とこあるだけてある。
湖水の水は澄み切つて居て、底は黃ばんだ淺い泥である。その泥は――千八百五十一年の調査に據ると、處々鐵分を含んだ砂と交じつて、輕石の厚い層の上に載つて居るので、

その黄色い泥もまた輕石の岩屑である。我々は泳がうといふので衣物を脱ぐ。
　此の水は、約五千呎の高地にありながら、ロクスラーヌの水ほども冷たく無く、西北及び東北海岸の他の川の水ほども冷たく無い。露のやうな爽かな氣持ちの好い味を有つて居る。それを見下ろして見ると、マラングアン即ち大きな蚊の幼虫は澤山見えるが、魚は一匹も見えぬ。マラングアンはこれは――我々のまはりを飛び廻つて刺して――實にうるさい。湖水の中程へ泳ぎ出ると、水が少しく暖かになつて來るのに驚く。千八百五十一年の探險委員は、北風であつたにも拘らず、空氣の溫度はただ十九度なのに、湖水の溫度は攝氏二十度五（水は華氏の六十九度許り、空氣は六十六度二）であることを知つた。
　岸へ泳ぎ歸つて、モルン　ドゥ　ラ　クロアへ登る支度をする。それへ登るのに普通採る廻り道は今は水の下になつて居る。て、我々は腰まで水に浸けて徒歩渉り（かちわたり）をしなければならぬ。白雲が絶えず頭上を、ゆるやかに大きな旋回をして、通つて行く。白くて半透明なのもある。不透明で濃い鼠色なのもある。――白い雲の中を通る黒い雲は化物のやうに見える。向う岸へ着くと、路は刺々（とげとげ）な石の上について居るてこぼこて、想像の出來ぬほど密生して居る羊齒の中を登つて居ることが分かる。この羊齒の一般の色調は濃綠である。が、黄味や淡赤味を帶びた、もつと色の淡い處が其處此處にある。それは葉の年齢が異ふ

が爲めて、それを上から抑へると、厚さ三四呎の布團になつて、上へ坐ることが出來るほどにしつかりして居る。噴火口の端から二百五十碼進むと、路はこの藪の上へ拔け出て、モルンを之の字形に登つて居る。モルンは、湖水からは、妙に縮かめられて見えるので、此處からは、湖水から見た倍の高さに見える。前には百呎もありさうには見えなかつた。今はその倍以上である。その圓錐の嶺は、苔や、低い草や、小さな羊齒や、洋紅色の大きな花を附けて居る菫に似た可愛らしい匍匐植物で、頂點まで綠である。路は一本の黑い線である。路の横のむきだしの岩は心まで燒け焦げて居るやうに見える。登るのに早、手を使用しなければならぬ。が、厚い低い羊齒が丈夫な掴まり處を提供して吳れる。息を切らして、そして汗にびしよ濡れになつて、頂點に——マルティニーク島の最高地點に——達する。が、四方には雲の幕が——白と鼠色との濃密な塊になつて動いて居る雲の幕が——下りて居る。五十呎遠くが見えぬ。

嶺の頂上は、二十碼平方ぐらゐの、輪郭の非常に不規則な、稍〻傾斜した表面を有つて居る。南の方はこのモルンは、この噴火山の四方の控壁を爲して居ると前に述べたあの波を爲した長い尾根のうちの二つが聚まつて居る處に、恐ろしい間隙を爲して眞直ぐに下へ落ち込んで居る。雲の割れ目を透して、二百呎下にある——我々が先刻去つたエタンより

五倍大きいと云はれて居る――別な噴火口湖が見える。これはエタンよりも輪郭がもつと不規則でもある。雨の少い季節には乾いて居るが爲めに、エタン　セック即ち『乾いて居る池』と呼ばれて居る。それが在る處は、エタンよりも古い噴火口で、稀にしか人は訪ねぬ。それへ行く途は――いくらも絶壁の上を這うて居る根と攀援莖植物の天然の梯子を傳つて行く――困難な危險な途である。背後の三本のバーミストの噴火口は此處からは今我我が立つて居る地面ほども無い大きさに見える。――その向うの分界の先きに、其處にまた一つ噴火口湖のある、別な峽谷の壁が見える。西と北とは、いくつもの綠の峰と尾根と、城砦のやうに急峻な高い熔岩の壁である。以上は雲が通つて行く間に、ただちらりと見えるだけである。まだ南の方は景色が少しも見えぬ。――我々は坐つて待つ。

九

十字架が二つその絶壁の殆ど際に立つて居る。小さな方は鐵ので、大きな方は――噴火後、千八百五十一年恐慌中アベ　レピナスが建てたあれて多分あらう――木のである。この方は雷に打たれて片々に裂かれてあつた。そして其破片を不細工に綱で結へてあるので

ある。それから黑い杙の裂け目へ挾み込んである錫の小さな牌がある。それには――千八百六十七年四月八日、と年月日が書いてある。……千八百五十一年に活動した噴火口はこの嶺からは見えぬ。此處から降つて居る峽谷の、エタン　セックと殆ど同高の一地點に在るのである。

地面は、敲くと、妙な空な音がする、そして珍らしい――魚の鱗のやうに硬い、淡綠な、直徑一吋の八分の一ぐらゐの圓い重なり合うて居る葉て出來て居る――地衣て蔽はれて居る。此處其處に、綠色の珊瑚の塊のやうな、枝分かれのして居る美しい植物が見える。それは巨大な一種の苔てある。カバヌ・ジエズ（『耶蘇の床』）といふがその土語ての名てある。クリスマスの折、何處の敎會ても、子供救世主の像を其中へ入れるあの裝飾した秣槽には之を一パイに詰める。這うて生える深紅の菫も亦此處に在る。唐金の綠の軀をした螢がそこいらを腹這うて居る。――自分は、小さな蛙と、灰色な大きな蟋蟀と、殼の黑い一種の蝸牛が居ることを認める。靑玉のやうに閃く、靑い美しい頭をした、蜂鳥が一匹横を翔けつて行く。

突然この嶺が、何處か下からの恐ろしい音に震動する。……雷鳴なのてある。が、山が時折どろどろごろごろと響くので、初めは驚いた。湖水のあたりの羊齒の荒地から、低い

長いうるはしい囀り聲がきこえる――三度。――シフリュール・ドゥ・モンターヌが其處に巣を有つて居るのである。

眼下の森林を驟雨が襲うて居る。我々が休んで居る地點を除いて、雲が今一切のものを隱す。パーミストの噴火口が見えなくなる。が、斯く霧に包まれるのはほん一つ時である。風が來る、頭上の雲を吹き去る、それを推し上げて反物のやうに褶む、そしてゆるやかにそれを北の方へ卷き去らす。その時初めて、途中にある峽谷が――今、火箭を射上げたやうな完全な虹が一つその上に架かつて――はつきりと上から眺められる。

……幾つもの谷と幾つものモルン、幾つもの峰と幾つもの峽谷――それがつぎからつぎと恰も大風の折の、浪に續く浪の如くに速に後を追うて――氣味が惡るいほどのたうち廻つて居る――氣味は惡るいがそれほどまた美しい――世界を爲して居る。前景は、あらゆる色合の綠て、何處も綠て、それが次第に薄らいで、遙かに遠くの山波は全くの青になつて居る。海上の水平線は舊に依つて目には見えぬ。空と大洋との二つの球を緣取つて居る淡い光の帶が見えるので、やつとその在り場が知れるだけである。そしてその二つの青い空虛の中に、この島は宙宇に懸かつて居るやうな感じがする。遠くの峰々は、無有から浮かび出て――蜃氣樓の物の姿のやうに――空に留まつて居るやうに思はれる。寫眞をとら

うとしても徒勞である。――遠方の物は海と同じ色になつて居る。ヅークランの截形された山容だけ、その藍色の影の恰好で、やつと見分ける事が出來る。總てが朦朧で、ふらふらして居る。――大地は今なほ、それを擡げたあの絶大な力で戰(をのの)いて居るやうに思はれる。

この波と起き伏して居る山々の上に高く、霞こめた幾哩もの濛乎たるが巾に寶石の菫色を呈して――そのうちの最高峰だけ、白い柔らかな雲の紐をただ一筋頭(あたま)に結(むす)んで――カルベのピトンが聳えて居る。西印度諸島のあの見事な山脈總てに通じて、形の上でこれほど美はしい峰は探しても他には無い。その美しさは、三百八十六年の昔、千五百二年六月の十三日に、その快速船(カラヱル)が初めてその見える處へ帆走し來たつて、その未知の土地と、この不思議な恰好の峰の名を、その印度人案内者に尋ねた時、コロムブスを驚かしたに劣らず、今日なほ旅行者を驚かすのである。その時、ペドロ　マルティル　ドゥ　アンギエラの言ふ處に據ると、その島はマディアナであるといふこと、その峰はこの群島の太古の人々に、邈遠の昔から、人類の生誕地として崇められて居ること、褐色をしてゐた最初のマディアナの住民が、南方の人間を食ふ海賊に――食人種のカリブに――追はれて、その神聖な山岳を想ひ出しまた歎き悲しんで、記念の爲め今度の郷里の最高峰にその名を――ヘイティといふ名を――與へたといふこと、をその印度人は答へた。……確に、この熱帶の太陽の

下に眠つて居る所の——その優しげな女性的な恰好の爲め、あらゆるものを育てる母の眼に見える乳房だと思はれる價値のある——この峰々が青い影を投じて居る谷に勝して、人間の養育所だといふ傳説を戴いて居る美はしい地點は他には決して無かつたのである。

東北の方、淡い光の帶に接して、峰を尖らせて居る或る美しい半面影像が見える、——それはドミニカである。我々はサン　ルシアを遠望が出來ればと希望してゐたのであつた。が、天氣は今日は餘りに多く水蒸氣を含んで居るのである、或る異常な日の、アンティグアからグルナディヌまで——三百哩の廣さに亙つて——見渡される時の、その眺望はどんなに莊嚴なものであらう。が、そんな遠望を許すやうな大氣の狀態は實に頗る稀である。一般には、西印度の一番無雲な天氣の日にも、一番高い峰は、百哩離れてゐては、光のうちに薄れ消えるが常てある。

羊齒で蔽はれて居る或る急峻な尾根が北方の傾斜面の展望を遮ぎつて居る。マクーバを見下ろさうといふにはその尾根へ登らなければならぬのである。マクーバはペレの最も險阻な斜面を占めて居て、海岸のうちで最も凄慘な部分である。その小さな首都(シエ・リユー)は、土産の煙草の製造で工業的に有名て、其處の小さな教會を再建した教父ラバの奉仕で歷史的に有名である。彼が去つてから今まで此教區にはあまり變化が起こつて居らぬ。土地の一作家

が尋ねる、『君はマクーバを知つて居ますか？オッサ山(さん)〔希臘の山名〕へペリオン山(ざん)〔希臘の山名〕を持つて來たのでは無くて、十も十二ものペリオンが十も十二ものオッサと併んで居て、素敵に深い峽谷がこの間を分けて居るのです。互に會ふには、急いで步いて幾時間も掛るやうな處で、見合つてゐてお互に話が出來ます。――其處で旅をするのは、乾いて居る地を踏んでゐながら、海の感じを經驗することです』

　登る骨折で起きた暖かさが減ると共に、其處がどんなに凉しいか氣が附きだす。――緯度が證明することが疑はしく思へる許りである。直ぐ東にセネガムビアがある。我々は――南部印度と同じ線の上に――ティムブクトーやサワラよりも餘程南に居るのである。大洋が風を凉しくして居るのである。こんな高い處では、空氣の稀薄さは北國のやうであるが、下(した)の谷では植物は亞弗利加のものである。最上の食用植物、最上の馬糧、庭園の花ものはギニアのものである。――優美な棗椰子はアトラス地方のものである。その濃い日陰が、その下に生える他のあらゆる植物の息の根を止める、あの苔滿林度はセネガルから來たものである。ただ、空氣の肌觸りに、遠距離の濛とした色に、山嶽の恰好に、亞弗利加ならぬ或る物があるのである、――此島にその詩的なクリーオール名を――『歸り來る人の國』といふ名を――與へて居るあの不思議な魅力があるのである。そして其魔力は、二

百餘年前、敎父ドッテルトルが『その地より歸り來りし者にて、その地へ歸り行かんとの熱望を有するを余が認めざるものに、男にも女にも、一人として會ひたること無し』と書いた時と同じやうに現今もなほ有力なのである。

歳月と慣れ親しみとが、こんな景色の裡に生まれてその生れ故鄕の此島より外へは旅行したことの無い者共にも、巴里の街路とサン　ピエールの街路とを同樣に能く知つて居る者共にも、その魔力を弱めはせぬ。沒落した栽培者が幾百人と無くマルティニークを見捨てて、舊時の樂園生活が單に亡命を傷ましからしめる一記憶となつてしまつた時でも——

——クリーオールは書いて居る——

[註]ココア椶櫚が柱廊のやうに立ち列んでゐて——その柱廊の端に砂糖製造場の煙突が煙を揚げて居るが見え、黑人小屋（カース）の小村がちらと見える、あの通景（みとほし）の一つを突然諸君の眼前に展開せしめよ。——或は單だ、最も尋常な、最も些細な光景の一つを心に描いて見よ。——例へば、漁夫が二列になつて曳いて居る網とか、濱へ押し出さうと荒れの後の快晴を待ち構へて居る獨木舟とか、果實の荷籠の重さに身を屈めて、市場へと海岸を走つて居る黑人とかでも。——そしてそれをば我々の太陽の光で金銀塗をして見よ！何といふ風景であらう！——嗚呼サルヴトル　ロサ！嗚呼クロード　ロラン！——余に汝等の繪筆有たしめば！……二十年の不在の後、そんな美

觀の前に余を見出した日を、余は充分能く思ひ出す、――全身を戰かしめた歡喜の身振るひを、余が眼に浮かばしめた淚を、余は再び感ずる。かくも美はしく見えたのは、余が國で、余自らの國であつたのである。

註　ルフツ博士の『エテユード　イストリーク』第一卷十八頁。

一〇

初め、南を、東を、西をと、世界の緣を眺め見て居る間は、みんな笑つたり、叫んだり、つぎつぎと起こる新しい印象の面白さを言ひ交はししたりしてゐた。誰れもの顏が光つて居つた。……今は總ての顏が眞面目である。――物を言ふ者が無い。群山を眼下に、菫色の空氣のこの地點に自己を見出して居るといふ最初の肉體的な喜悅は、高山からの偉大な眺望と異常な平穩とが起こす他の感情に直ぐと屈してしまふ。自分は思ふに、己が見下ろして居る物は非常に古いものであるといふ意識が――古昔、『約百記』に見ゆるあの恐ろしい問『汝あに山よりも前に出來しならんや』に現はれて居るやうな感念が――それがあ

らゆる感念を壓して居るのである。……そして靑く群れ立つて居る峰々は、永遠に聚まり集うて居るモルンは、――自然は永久に若いのであるといふことを語り、我々のまはりのそして我々の遠くのそして我々の下のものは冷靜に恆久であることを告げて　絶大なる光耀に合唱するやう思はれ、充ち滿ちたる偉大な悲哀のやうなものが、我々の情の上を重く抑へ初める。……この驚く可き美しさは總て、この壯麗な光と形と色とは總て、我々が夢といふものが來ぬ處て、そしてその休息の麗土の中からしてそれを眺めに今一度起きるといふことの無い處で眠つてしまふ後にも　―今と同じく驚く可き觀を具へて――確に永遠にこの儘て居るのだ、と思ふからである。

空船(うつろぶね)乘の子供

一

サン　ピエールの商賣の時間は大砲發射で――汽船の信號砲聲で――計ると言つても宜いくらゐである。その砲聲は一々何れも全市民に極めて重大な事件を告げ知らす。商人には、郵便物と金と貨物とが到着したとの通報であり、――領事と政府の役人とには、手數料と關稅とを徵收せよと通報し、――多勢の艀船船頭、埠頭人夫、あらゆる種類の港勞働者には仕事と賃銀とを約束する。――また總ての者にそれは食物の到着の信號である。この島は自給をしない。家畜、鹽、肉類、ハム、ラード、小麥粉、チーズ、干魚、總て外國から　特に亞米利加から――來る。だから有色人の心には、亞米利加汽船なるものは、合衆國から食料をそれに入れて持ち來るあの大きな錫製の鑵と非常に緊密な關係を有つて居るから、敲けば爲(す)るその音の爲めに鑵に與へて居る擬聲語――ボム！　が、更に船そ

のものにも與へられて居る程てある。英吉利或は佛蘭西或は白耳義の汽船は、どんなに大きくても、ただバケット・ア、バティマン・ラとして知られて居るが、亞米利加汽船はいつも『ボム船』――バティマン・ボム・アか、又は『食物船』バティマン・マンジエ・アてある。……大砲の轟聲が全市を搖らめかすと、女や男が互に『ミ！ガデ　サ　クイ　ラ、シエ？』と尋ね合ふ聲を諸君は耳にする。――そしてその返事が、『メー　セ　ボム・ラ、シエ、――ボム・マンジエ・ア　カ　リヹ』（え、あなた、着いたのはボムてすよ――食物ボムてすよ）だと、その喜びは大したものてある。

また、その汽笛の音の爲めに、これと同じやうに美的な『バティマン・コーヌ――「角笛船」――といふ言葉て汽船を呼ぶことがある。その囃しの文句が

ボム・ラ　リヹ、シエ――
バティマン・コーヌ・ラ　リヹ。
〔着いたはボムよ、
笛船ですよ〕

といふ唄さへある。

……が、市民の種々な階級總てのうちて、大きな汽船が――それが『ボム』であらうが無からうが――來た爲めに一番はずみ込んて嬉しがるのは、ティ　カノティエて、手製の小さな空舟に乘つて多勢出かける。船客がその美しい景色を見て樂まうと、喜んで水の中へ投げ込む貨幣を取りに水潛りする爲めにてある。汽船が投錨するや否や――海が實際非常に荒れてゐなければ――クリーオール語をきいきい聲て叫んて居る裸體の腕白小僧が一パイ乘つて居る、想像も及ばぬほど妙な形の小さな空舟の一群に、船は取り圍まれる。

このティ　カノティエは――その小さな空舟乘の水潛り本職の子供等は――大抵は、有色人船頭即ち本當の船潛の子息どもてある。誰れが始めてティ　カノーを發明したものか自分は分からぬ。この小空舟の形と大いさとは、幾代も昔からの傳統て決まつて居る。そしてその原の型に對して何等の改良も嘗て加へられないで居るやう　思はれる。ただ一と こと昔と變つて居ることとは、パレット即ち非常に小さな橈や他の色んな一寸したものを仕舞ひ込んで置けるやうに、時々その一端に、水の透らぬ小さな箱がしつらへてあることとだけてある。此種の空舟一艘の材料の實費は二十五錢或は三十錢を越えることは滅多に無い。ところが、それても、空舟の數は大して多くは無いのてある――この港に十五艘以上は無

からうかと自分は思ふ。それは、マルティニークの船頭はいづれも極めて貧乏て、空舟一艘有たして置けば、その子息は、一箇月經たぬ間にその費用の五十倍も儲けられるとは確に知つて居ながら、二十五スーの金を節約が出來ぬ程だからである。

　空舟の製造には、その恰好の爲めに、亞米利加製のラード箱か石油箱かを使用することを好む。が、丈夫に出來てさへ居れば、小さなどんな船積箱でもその目的には適ふ。上の蓋は取り除ける。四方と底の四隅とを或る角度に鋸で挽き切る。その挽いて取つた木片は、舳(へさき)と艫(とも)との横へ張るに利用し、――時には棧卽ちパレットを入れて置く小さな箱を造るにも使ふ。棧といつても、葉卷煙草入の箱の蓋のやうな形と大いさの、丈夫な木材で造つた薄い板片に過ぎぬ。それからその小舟にタルを塗つてその上へ假漆(ワニス)を塗る。頗る容易にひつくりかへりはするが、決して沈みはせぬ。腰掛は無い。子供（普通は一般に二人づつである）は――互に向き合つて――その底に坐るだけである。平らな海を驚くばかり迅く漕ぐ。だからその懸賞競漕會（毎年七月の十四日にある）を見るのは太だ面白い。……

二

……午後の五時であつた。港外の地平線はレモン色に變はりつつあつた。——そして暖かい微風が弱い息をついて西南から來はじめた、——それは熱帶の空氣の不動性を破る最初の呼吸なのである。港の入口に靜かに停まつて居る船々の帆が物憂さうにはたはたいひ始めた。日が沈んだなら孕むかも知れぬ。

ラ　ゲイラは、港內餘程沖に碇泊してゐた。その山なす鐵體は、その近處に碇を下ろしてゐたつつましやかな帆船に——バーク船（後檣だけ縱帆の三檣船）やブリグ船（橫帆裝置の二檣帆船）やスクーナー（縱帆式小帆船）やブリガンティン船（後檣の橫帆を缺ぐ二檣船）やバーカーティン船（前檣だけ橫帆の三檣船）に——高く屹立してゐるのであつた。その日午後中、町の前に居て、ティ　カノーの全艦隊に包圍されて居つた。子供等は、船が蒸氣を揚げて錨を卷きつつあるのに、猶も船腹をくるくる廻つて居つた。實際、非常に仕合はせだつたのである、その午後は、——その小空舟乘どもは。——自分で空舟を有つて居るほどに仕合はせて無い、色の黃色な若者で、サルンデッキから雨と降らす銀貨にお相伴しようと思つて、泳いで出て來て居るのさへ多かつた。中には、

疲れて、近くの船の斜に出して居る錨鎖に乘つて休んで居るのもあつた。斯う裸體で——空か水かの青を背に、日を浴びて——止まつて居ると、そのか細い身體は、熟ます日の光の爲めに如何にも橙黄色を帶びて、半ば光を放つ或る物質で——海の妖精の肉でても——出來て居るやうに思へるほどである。……

突然ラ　ゲイラは、その蒸氣の喉を開いて、山々が少くとも一分後に唸つた程の大きな『モー』聲を發した。——そして帆船の錨鎖に乘つかつて居た子供は、其音に海の中へ轉がり落ちて、岸へ向けて泳いだ。すると、其汽船の艫の下から、泡立つ巨大な渦を卷かせて、水が突然に後ろの方へ沸き下がつた。そして其小さな空舟悉くを踊らす程の大波を立てた。ラ　ゲイラは進航しつつあるのであつた。廻轉する時非常な騒ぎを遣つて、初はゆるやかに動いた。それからは頗る堂々と——恰も婦人の衣物の緣が歩く時、踵の處で輕く上下するやうに、背後の水を少し搖り動かすだけで——落ち着いて其旅行の途に就いた。

ところが、習慣に反して、その空舟の幾つかがその後を追うた。大きなパナマ帽をかぶつて、手に幾つも寳石の指環をはめた、眉目うつくしい、色の黑い男が、なほも金を投げつつあつた。そしてなほも子供等はそれを拾ひに水を潛つた。が、今は乘組の一人だけ飛び込むのであつた。それは、ラ　ゲイラはまだゆるやかに運轉しては居たが、その後を追

ふのは劇しい過勞で、そして餘裕が無かつたからである。

その小隊の長――十歳になる、黑人の、マクシミリエン――と、その僚友の――十一歲になる、皮膚の黄色な、細つそりした小さな小供の――光るやうな髮をしてゐた爲め『テイ　シヤバン』と渾名貰つてゐた――ステフアヌとは、追跡の先頭になつて、常に『アンコ、ミシエ――アンコ！』と叫んで居つた。

その眉目うつくしい船客が――貨幣を投げる餘程の達人たることを示して――その最後の祝儀を放つた時は、ラ　ゲイラは充分二百碼は進んでゐたのであつた。貨幣はその二人の子供から遙か距たつた處へ落ちたが、それがくるくる廻つて水へ落ちる時、黄色い閃きがはつきりと分かるほどには近かつた。それは金貨だつたのである！

直ぐとその先頭の空舟はその點に達した。他の空舟乘は故意にその搜索を拋棄したのであつた――前年の七月十四日行はれた空舟競走總てに勝利を獲たマクシミリエン及びステフアヌと爭ふのは無駄だと知つたからである。潛ることはマクシミリエンよりか上手なステフアヌが飛び込んだ。

いつもよりか遙か長い間水中に居て、餘程距つた處へ浮かび出て、空舟へ上がつた時息切れをしてゐた。そして兩腕を突いて休んだ。水は其處は餘りに深かつた。貨幣は見えは

したが、初めはそれに達することが出來なかつた。彼は今一度試さうとして居るのである、——確に、金貨であつたから。

『フーアンク！サ　フオン　イシット！』と彼は喘いだ。

マクシミリエンは直ぐと不安に感じた。水は非常に深い、そして或は鱶が居るかも知れぬ。それに日の入るのも遠くは無い！ラ　ゲイラは沖合に小さくなりつつあつた。

『ブーグ・ラ　レ　フエー　ヌー　ネエ——レッセ　イ、ステフアヌ！』（彼奴おれ達を水ん中で死なさうとするんだよ。レッセ——放つとけよ！）と、彼は叫んだ。がステフアヌはもう元の呼吸になつてゐた、そして確に今一度試めさうと決心して居るのであつた。金貨だもの！

『メー　サ　セ　ロ！』

『アッセ、ノン！パ　ブロンジエ　ンコ、モアン　カ　ディ　ウー！　アー！フート！』とマクシミリエンは叫んだ。

ステフアヌは又も水へ潜り込んだのであつた！

……そして他の者共は何處に居たか。『ボン・ディエ、ガデ　オティ　ヨ　エ！』彼等は——海岸の方へ動いて行く小さな點々となつて——殆ど見えなくなつてゐた。……ラ

ゲイラは今は早、サン　ピエールとフォール、ドッ・フランスの間を通ふ小蒸氣船の大いさ位にしか見えなかつた。

ステフアヌはまた出て來た、前よりかずつと遠い處へ――片手にその黄色い貨幣を持つて。空舟むけて泳いで來るから、マクシミリエンはその方へ橈で漕いで行つて、助けて船へ入れてやつた。その小漕水夫の兩の鼻の孔から血がだくだく流れてゐて、口から吐く水にも血が色どつて居つた。

『アー！モアン　テ　カ　ディ　ウー　レッセ　イ！』とマクシミリエンは怒り且つ驚いて叫んだ、……『ガデ、ガデ　サン・ア　カ　クーレ　ナン　ネ　ウー――ナン　ブーシユ　ウー！……ミ　オティ　レゾート！』

レゾートは、他の者共は、もはや見えなかつた。

『エ　ミ　オティ　ヌー　エ！』と、マクシミリエンはまた叫んだ。岸から斯んなに遠くへ出たことは今迄無かつたからである。

がステフアヌはただ『セ　ロ！』と答へるだけであつた。生まれて初めて彼は一片の金貨をその指に撮(つま)んだのである。彼は腰のまはりに結はへた紐に附いて居る小さなぼろ片に――自分發明の財布に――それを括つた、――そして始終咳しながら眞つ紅なものを口か

らぷつぷと吐きながら、その櫂を取り上げた。
『ミ！ミ！ミ　オティ　ヌー　ヱ！』とマクシミリエンは繰り返した。『善なる神さま　私どもは何處に居るので御座いませう！』
居る場所が不分明になつて居るのてあつた。——半時間前には眞後ろに在つた燈臺が、今は餘程南に見えてゐた。そして其赤い明りが今點もつた計りてあつた。海の方を見ると、沈み行く橙黄色の太陽の圓盤の先きになつて、ラ　ゲイラが地平線へ入らうとして居つた。岸からは何の音もきこえなかつた。二人の身の廻りには非常な靜寂が——一種の恐怖たる、海の無言が——襲ひ來たつて居つた。恐慌が彼等を捉へた。二人は猛烈に漕ぎ始めた。が、サン　ピエールは一向近寄つて來さうに思はれなかつた。それはただ失せ行く明かりの所爲であつたか、或は實際彼等はフォン・コレの半圓形の絶壁の方へ流れ行きつつあつたのか？……マクシミリエンは泣き出した。小シャバンは——血がその胸へまだたらたら落ちつつあつたが——切りと漕いでゐた。
　マクシミリエンは彼に泣き聲で叫んだ、——
『ヴー　パ　カ　バガヱ——アン？——ウー　ニ　ブーソアン　ドミ？』（おまへ漕がんぢや無いか、うん？——おまへ眠らうとするぢや無いか？）

『シ！モアン　カ　バガエ――エビ　フオ！』（漕いてるよ、こんなに非道く！）と、ステフアヌは答へた。……

『ウー　カ　バガエ！――ウー　カ　マンティ！』（漕いてるだつて？――虚言つけ！）と、マクシミリエンは呶鳴つた。……『みんなおまへが惡るいんだ！わし一人ぢや、こんな海では空舟を遣ることは出來やせぬ！みんなおまへが惡るいんだ。水へ入るなと言つたぢや無いか、馬鹿！』

『ウー　フー』と、怒つてステフアヌは『モアン　カ　バガエ！』（おりや漕いて居るよ）と、叫んだ。

『畜生！斯んなおぢや歸れはせん！漕げよ、横着者。――漕げつたら、意地惡る！』

『マカク！――猿！』

『シヤバン！――シヤバンにちがい無い、そんなに頓馬だから！』

『黒猿！――ウイスティティの奴！』

『陸龜……　おまへ、モロコエよりものろいな！』

『なんだ！猿め！わしが、漕がぬと、おまへいふなら、おまへは、漕ぐことを知らんのだ！』……

……が、マクシミリエンの顔は全く變つた。彼は不意に漕ぐことを止めて、身の前の方を身の後ろの方を、見て、海を横ぎつて廣まつて行く大きな菫色の帶が、北の方へ見えぬ處まで續いて居るのをぢつと眺めて居た。彼が斯う叫んだ時には、眼は恐怖のあまり大きく開いて居た、——

『メー　ニ　クイ　ショーズ　クイ　ドゥオール　イシット！』（變なものがあるぞ、ステファヌ！變なものがあるぞ）……

『ふん！やつと今分かつたか、マクシミリエン！——海流だよ！』

『魔物の海流だ、ステファヌ……おれ達は、流れて行き居るんだ。天涯へ、行きよるんだ！』……

天涯の地平線へ——『ヌー　カレ　ロリゾン！』——恐ろしく詩的な文句では無いか。クリオール言葉で『天涯へ』といふは、大海へ——際涯無しの海へ——といふ意味である。

『セ　バ　ラペイヌ　パガエ　アトゥーエルマン』（もう漕いでも駄目）と、橈を下へ置いて、マクシミリエンは啜り泣いた。

『シ！シ！』と、ステファヌは、橈の運びを逆にして、『海流について漕げよ』と言つた。

『海流に隨いて！ラ　ドミニークへ海流は行くよ！』

『ブーロス』と、ステファヌは無神經的に『アンヌー』（ラドミニーク向けて行けば宜いぢや無いか！）と答へた。

『馬鹿！——四十基米突より餘計あるんだぞ。……ステファヌ、ミ！ガデ！——ミ　ク　イ　グーオ　レクエム！』

長い黑い鰭のものがつい二人の横の水を切つて、さつと向うへ消えて行つた——さうだ、レクインだつた！が、この子供は、その土語で、古い敎父ドッテルトルが言うたその名を殆どそのまゝ、反復したのであつた。彼敎父は、二百餘年前、珍らしい魚類のことを書いて、その鱶は、海の眞ん中でそれと二人つきりで居れば、必らずレクイエム（鎭魂の歌）を誦さなければならぬから、レクイエムと呼ばれて居る、と述べて居るのである。

『潛ぐなよ、ステファヌ！——もう水へ手を出すなよ！』

三

……ラ　ゲイラは空の緣の一點であつた。——日の顏は消えてしまつて居た。靜寂と暗

黙とは共に深くなりつつあつた。
『シ　ランメ　カ　ギニ　プリ　フオ、サ　ヌー　ケフエー？』（海が荒れたら、どうしよう？）と、マクシミリニンは尋ねた。
『多分汽船に遭へるだらう。オリノコが今日着く筈だつた』と、ステフアヌは答へた。
『でも若し夜通つたら？』
『おれ達が見えるだらう』……
『いや、見えはせぬだらう、おれ達を　月が無い』
『舳先きに燈をつけて居る』
『いゝや、見えはせぬ、おれ達を、とても――ピエス！ピエス！ピエス！』
『呼ぶ聲がきこえるだらう』
『いゝや――そんな高い聲はおれ達には出ぬ。風や水や機關の音がしてゐては、汽笛か大砲の音でなきや、聞こえはせぬ。……フオール・ドゥ・フランスの小蒸氣に乘つてゐてさへ、機關の音で談話聲はきこえはせぬ。オリノコの機關は「サントル」の教會よりもつと大きい』
『それぢやラ　ドミニークへ行くやうにして見なきやならぬ』

……彼等は今や其大海流が疾走して居るのを感ずる事が出來た。——其聲が——低い深いざはざはいふ聲が——きこえるやうに思へさへもした。長い間を置いて明かりが——ポアント・フランや、フォンカノンギュや、——オー　プレシュールの家の明かりが——見えた。彼の下は、深さは測り知られぬものであつた。——水路圖には底知れず、と印してある。そして二人は、其下に底無しの村がある、あのオー　アビームの大絶壁を通つた。

西の方の赤い輝きが、恰も風に吹き消されたやうに、突然無くなつた。——海の緣が暗黑の空虛の中へ消えてしまつた。——夜が、黑い霧のやうに濃くなつて、二人のまはりに狹まつた。そして海の見うべからざる、抵抗しうべからざる力が、今や彼等を運び去りつつあつた、高い海岸から——知られぬ深みの上を通つて——底無しを越えて——遠く『天界へ』

四

……その空舟の後には一條の淡い火が震るへまた撚れて居つた。輝かしい點が時折下から上がつて、眼のやうにぎろつと光つて、それからまた消えた。——仄かな炎の微光が、

空舟が漂ひ進む時、左右にうようよ這うて行つた。そしてこの小舟はもはや、前のやうに搖れはしなかつた。――別な、もつと大きな運動を――一度に數分間續く、長いゆるやかな昇り降りを――感じた。――大うねりに乘つて居るので――天界に乘つて居るので――あつた。

二度ひつくりかへつた。が幸にもその波は穩かな波であつたし、その小さな空舟は沈むことの無いものであつた。二人は舟を盲探し、見附け出し、なほし、中へ攀ぢ上がり、雨手で水を汲み出した。

時々二人は、出來るだけ高い聲を出して――『スクー！――スクー！――スクー！』と――一緒に叫んだ――誰れか自分達を探して居るのかも知れぬと思つて。……尤も、二人が見えなくなつたといふ警報は與へられたのであつた。そして小蒸氣船一艘を――舳先きに照明燈を輝かせて――二人を搜しに派遣したのであつた。が、それは違つた方向を執つたのである。

『マクシミリエン！』と、大うねりがなほも大きくなりさうなので、ステファヌは言つた、『フォー　ヌー　カ　プリエ　ボン・ディエ！』……

マクシミリエンは何とも返事しなかつた。

『フォー　プリエ　ボン・ディエ！』（善なる神様にお祈りしなければならぬ！）と、ステファヌは繰り返した。

『パ　ラペーヌ、リ　パ　ペ　ウーエ　ヌー　アト！』（したつてつまらぬ。神様には今わし共は見えはせぬ）とその小さな黒人は答へた。……此絶大な暗黒に、マルティニークの朧な影さへ見えなかつた。

『おゝマクシミリエン！――ボン・ディエ　カ　ウーエ　トゥット、カ　コンネート　トゥット』（神様は誰れも御覧になる。神様は何でも知つておいでだ）と、ステファヌは叫んだ。

『イ　パ　ペ　ウーエ　ノン　ピエス　アトゥーエルマン、モアン　ペン　スール！』（神様にはもう私等は見えはせん――おりや能う知つて居る！）と、マクシミリエンは不敬虔な返事をした。

『おまへボン・ディエはおまへのやうなもんだと思つて居る！――神様にはお前のやうに眼はありやせん』とステファヌは抗辯した。そしてこの子は、その教義問答（カテキズム）の――カルベの老教父グーが作つた奇妙なクリーオール語教義問答（その舊弊な妙な僧侶もその舊式な妙な教義問答も今は亡くなつてしまつた）の――本文を繰り返して『リ　パ　カ　ティ

ニ　クーレ、リ　バ　カ　ティニ　ズィエ！』（神樣には色は無い。神樣には眼は無い）

と、續いて言つた。

（モアン　バ　サーヴ　シ　リ　バ　カ　ティニ　クーエ！』（神樣は色が無いか、おりや知らん！）と、マクシミリエンは答へた。『だが、おりや能う知つてることは、神樣に眼が無きや、神樣は物が見えん、ことだ。……フーアンク！——なんて馬鹿な！』

『だつて、教義問答に書いてある！』と、ステフアヌは叫んだ。……『「ボン・ディエ、リ　コム　ヴン。ヴン　トゥー・バトゥー、エ　ヌー　バ　サーヴ　ウーエ　リ。——リ　カ　トゥツシエ　ヌー——リ　カ　ブールヅセ　ランメ」』（善なる神樣は風のやうてある。風は到る處に在る、が我々にはそれは見えぬ。——それは我々に觸る——それは海を波立たす）

『善なる神樣が風なら』とマクシミリエンは『それぢやおまへ風に鎮まれと祈れ』と應じた。

『善なる神樣は風ぢや無い』とステフアヌは叫んだ、『風のやうなものだ、風ぢやありやせん』……

『あゝソク・ソク！——フーアンク！……またひつくらかへつて鱶に喰はれませぬやう

に、つて祈ることをやめる方がいいや』……

……………………………

……この小さなシャバンが風に祈つたか、又は善なる神に祈つたか、それは自分は知らぬ。が、風は終夜極めて靜穩であつた――海を波立たせぬやうにと呼吸を止めて居るやうであつた。ところがサン　ピエールの碇泊所では、狂暴な亞米利加船の船長は、風が帆を膨らまさぬからと云つて、風を呪つた。

五

恐らくは、若しか風があつたなら、ステフアヌもマクシミリエンも二度と日の目を見ることは出來なかつたであらう。然し二人は日の昇るのを見た。

　東の方、大洋の端の上に、明かりが眞珠色になり、空の緣をぐるりと走つて、そして黃ばんだ。それから日の額が現はれた。――一條の黃金が其前に海を斜に漣打たせて迸つた。――そして空全部が一時に、地平線から天心まで、青い炎に燃えた。海から雲まで菫色で、橫に臥して居る大きなペレの姿が遙か後ろに――濛として居る青い山々の上に、淡灰色の

が重なつて居る、蜿蜒たる連山の上に、――浮いて見えてゐた。そして北の方に、別な高い山の姿が――妙に凸凹のある、峰の多い、そして美しい――姿が聳えて居つた。それはドミニカの半面影像て、青玉の鋸の齒を見るやうてあつた！……一片の雲もたゞようては居らぬ。――遙か遠くのベレの上にだけ、ニムビがほのかに固まつて居た。……二人の下（した）には海が紫インキのやうに濃く大搖れに搖れてゐた――素敵に深い標示（しるし）なのである。……まだ非常の靜穩て、見えるところに帆船一つ居らぬのであつた。

『サ　セ　ラ　ドミニーク』と、マクシミリエンは言つた、『アンヌー　プー　ウイヴージュ・ラ！』

二人は夜の中にその小さな橈を失くしたのであつた。――それて二人は手を使つた、そして遠く船を進めた。だがドミニカはまだ幾哩の遠くに在つた。どつちの方の島が近いのか、まだ言ひにくかつた。――朝の海靄て兩方とも濛として居つた――色が異つて見えるのは主として位置に因るのてあつた。……

サーッ！サーッ！サーッ！――と、白い胸の鳥が一羽頭上を過ぎた。二人は船を遣ることを忘れてそれを見上げた――それは鷗てあつた。晴天の標（しるし）てある！――ドミニカ向けて翔けり行くのてあつた。

『モアン　ニ　ベン　フエーム』とマクシミリエンはつぶやいた。二人とも前日の――その大部分をその空舟の中で坐つてて過ごしたのであるが――朝以來、物を食はずに居るのであつた。

『モアン　ニ　アンニ　ソアフ』と、ステフアヌは言つた。そしてその渇きのほかに、段々氣持ちが惡るくなつて、頭が燃えるやうに痛いとこぼした。また咳をしてゐて、咳の度毎、淡赤い血線(ちすぢ)を吐いた。

高くなり行く太陽はいや白く、いや白く燃えた。その眼前の海水の閃きは電光の如くに眼を眩まし始めた。……やがて行手の島はいゝより際立つた線を示し、いゝより強い色を帶び始めた。だからドミニカは確に近よりつゝあるのである。――といふのは、その蒸氣色の半面影像が、種々な角度に、間々(あひだ)が跡絶えて、輝かしい線の筋が見えて來るのに、マルティニークの方は矢張り青い儘で居たからである。

……段々暑く暑く日は燃えた。層一層眼が眩むやうにその反射が烈しくなつて來た。マクシミリエンの黑い皮膚は苦しみは一番少かつた。が、この二人の子供は、裸體で日光を浴びて居ることには慣れてゐたが、その日の暑さは堪へかねた。身を冷やしにその海へ飛び込みたかつたが、鱶が恐ろしかつた。――頭を濡らし、また海水で口うがひするほかは

無かつた。

二人とも空舟のその端から絶えず地平線に眼を見張つて居つた。風が無かつたから、二人とも帆船は當てにはしなかつた。が、汽船の來るのを待つてゐた——オリノコが通るかも知れぬ、て無ければ或は英吉利の郵船が通るかも知れぬ、またマルティニークの蒸氣船一艘を自分達を探しに送り出して居るのかも知れぬ。

だが、幾時間も經つた。空の縁輪にまだ煙一筋見えなかつた——海のぐるりには、何の氣合も無く、ただ、二つの大きな半面影像が、突き出て居るだけてあつた。……が、ドミニカは確に近よりつゝあつた。——その山々の光つた青を透して、綠の光が擴がりつゝあつたから。

……二人が坐つた儘て長く動かずに居たことが——股や臀や腰に鈍いづきづきするやうな痛みを起こして——二人には堪へられぬやうになつて來た。……それから、正午ころ、ステファヌはもう漕がれぬと斷言した。——一パイになつて居る痛みて、今にも、頭がはちきれさうに思はれた。自分の聲さへ、それへ響いて痛かつた——物を言ひたくなかつた。

六

……それから別の壓迫が――非常な苦痛があるのに、眼が眩むほど海が光るのに、日が嚙み附くほど暑いのに――二人を襲つた。眠氣の壓迫である。二人は時々居眠りしはじめた――過勞の騎兵が、鞍の上で、眠りながら乘つて居るやうに――無意識にその空舟の釣り合ひを保つて。

が到頭、ステファヌが、突然發作的の咳に眼覺めて、空舟をひつくらかへすほどに一方へ身を傾けた。その爲め二人は海の中へ落ち込んだ。

マクシミリエンは舟をなほして、またその中へ入つた。が彼の小シャバンは、舷に肱を突いて身を擡げようとして二度も落ちた。殆ど見込みの無いほど弱つてゐたのである。マクシミリエンは、彼の手を引張つて上げてやらうとして、この不安定な小船を又も顚覆させた。そして今度はステファヌを水に沈まぬやうにするのに、その熟練と無二の力とを要した。確にステファヌはもう手助けにはなり得なかつた。――弱り切つて、眞直ぐに坐つて居ることさへ出來なかつた。

『アイ！ウー　ケ　ジエテ　ヌー　アンコ』と、マクシミリエンは喘いだ、『メテ　ウー　トゥット　ロング』

ステファヌはそつと身を屈めて――マクシミリエンの臂の兩側へ片足片足を置いて――空舟に身を一パイに延ばして横になつた。それから長い間じつとしてゐた――餘りぢつとして居るのでマクシミリエンは不安になつた。

『ウー　ペン　マラード？』と尋ねた。……ステファヌにはきこえぬやうであつた。眼は瞑つた儘てゐた。

『ステファヌ！』と、驚いて、マクシミリエンは叫んだ、

『ステファヌよ！』

『セ　ロ、バブート』と、眼瞼も開かずに、ステファヌはつぶやいた、『サ　セ　ロ！――ウー　バ　ジャンマン　ウエ　ヨン　ベル　ピエス　コム　サ？』（金貨だよ、とうちやん。……こんな美しいの、いままで見たことなからう？……私を打ちはしないね、え、とうちやん――ね、バブート！）

『ウー　カ　ドミ、ステファヌ』と、怪しんで、マクシミリエンは問うた、『眠つてゐるのかい？』

がステフアヌは眼を見開いて、如何にも不思議さうに彼を眺めた。ステフアヌがそんな顔をするのを今迄見たことが無かつた。

『サ ウー ニ、ステフアヌ?――何處が苦しいんだい?――アイ!ボン・ディエ、ボン・ディエ!』――

『ボン・ディエ』―― その大御名を聞くと、またも眼を閉ぢて呟いた、――『神様には色は無い。――神様は風のやうである』……

『ステフアヌ!』……

『神様は暗い處でもお分かりになる。――神様には眼は無い』……

『ステフアヌ、パ バレ サ!!』

『神様は海を波立たせなさる。――神様には顔は無い。――神様は死んだものを生かせ……また木の葉を……』

『おゝフー!』俄にすゝり泣きしてマクシミリエンは叫んだ、『ステフアヌお前氣が狂つて居るな!』

すると俄にステフアヌが恐くなつた――その言ふことが恐く――その身に觸つて居るのが恐く、その眼が恐くなつた。……彼はゾムビのやうになりつつあるのである。

だがステファヌの兩眼は閉ぢたまゝで居た。――彼は物を言はなくなつた。

……二人の身のまはりには海の偉大な靜寂が深まつた。――太陽はまたも低く傾いた。地平線は黄ばんで來た。日はうすれ始めたのである。高いドミニカは今は半綠であつた。が、まだ煙一筋、帆船一つ、生きたものの氣合何一つ見えなかつた。

すると、光の綠を尋ねて居るあの二つの巨大な姿の色合が、恰も消え行くやうに變つた――西印度の魚の――ビスケットやコングルの――カリングやグーオ。ズィエやバラウーの――色のやうに變つた。日はより低く沈んだ。――橙黄色の雲の綿が、西の端の上に立ち騰つた。――微かな暖かい息が海をなでさすつた――そして、うねりの横腹に長いライラック色の戰きを與へた。すると色がまた變つた。菫色が濃くなつて紫となり、――綠は和らかに黑ずみ、――灰色はくすぶつて、いぶし金になつた。そして日は沈んだ。

七

かくて二人は一緒に恐ろしの夜の中へと浮かんだ。またも靈のやうな火が、そのまはりにうねうね輝きだした。他に見ゆるものとては、高空の星だけてあつた。

暗に幾時間かが經つた。一分置き位にマクシミリエンは『スク－！スク－！』と叫んだ。ステフアヌは動かず、また物言はずに横になつてゐた。マクシミリエンの臂に觸つて居るその足は妙に冷たかつた。

……何かが不意に空舟の底を敲いた――どんと響く高い音を立てて、重く敲いた。ステフアヌては無かつた。――ステフアヌは石の如くじつとしてゐたから。それは下の海からてあつた。多分通つて行く大きな魚てあつたらう。

それが、非常な打撃のやうに空舟を震るはせて、またやつて來た、――二度。するとステフアヌは不意に動いた――兩足を少し立てた――何か口をききたげに、『ウー……』と言つたが、それから先きが脣から出なかつた。夢に人を呼ばうとする者の唸り聲のやうな音に終つた。――マクシミリエンの心臟は鼓動を止めん計りであつた。……するとステフアヌの足はまた眞直ぐになつた。それからはもう少しも動かなかつた、――マクシミリエンにはその呼吸をして居るのさへきこえなかつた。……海がうそぶき始めたのであつた。

微風が起こりつつあつた。――マクシミリエンは自分の顏へ吹いて來るのが分かつた。突然彼は何も恐ろしくなくなつた氣がした――どんなにならうと構はぬといふ氣になつた。不圖、或る日のこと、――小さな木片に乘つて、潮のまにまに漂うて居る――蟋蟀を滿て

見たことを憶ひ出した、——あれがどうなつたか知らと怪しんだ。と、今の自分が卽ち——まだ生きて居る——その蟋蟀だと思つた。ところがその時、或る子供がその蟋蟀を見つけて、その兩脚を捥いだ。捥がれた脚が——自分の脚が、自分の身體を抑へて、其處にあるのである。それを捥がれた處の痛みはまだ分かるが、その脚はとつくの昔、死んでしまつて、もう全るで冷たくなつて居る。……さうだつた、その脚をもいだのは確にステファヌだつたつけ。……

水が彼に物を言ひつつあつた。繰り返し繰り返し同じことを言つて居つた——きこえぬのかと思つてゐるやうに、一度々々聲を高めて。が、彼には能く分かつてゐた。『ボン・ディエ、リ　コム　ヴン……リ　カ　トッツシエ　ヌー……ヌー　パ　サーヴ　ウーエリ?』（だが何て善なる神様は風を募らせなさるのだらう?）『リ　バ　カ　ティニ　ズイエ』と、水は答へるのであつた。……ウィユ!——ても、神様は海の中へ、人を落とさぬやう守つて下さるがいい!……ミ!……

が、そんな事を考へて居るうちに、鬚のある、不思議な、白い顏が自分を見て居ることに、マクシミリエンは氣が附いた。自分の分からぬ言葉で——身を屈めて提燈で眺めながら——自分に何か言うて居られるボン・ディエ様がおいてなのだ。ところがそのボン・デ

イエ様には確に――決して心の悪るさうには思はれぬ大きな灰色の――眼があつた。自分があなたのことについて言つて居たことを、今は遺憾に思ひます、と斯うそのボン・ディエに話さうとした――が、一言も喉から出て來ぬのであつた。大きな手が自分の身體を星の處へ擡げて、そしてその星の極近くに――丁度その下に――置くのが分かつた。それは青白い光に燃えてゐて、電光のやうにその眼を傷めた。――それが恐くなつた。……あたりに聲が――いつも、自分の分からぬ、あの言葉を使つて居る聲が――きこえた。『可哀相な子供達だ！――可哀相な子供達だ！』すると鐘の音がきこえた。と、そのボン・ディエは、何だか旨い暖かい物を飲ませて呉れた。――すると、また一切のものが暗くなつた。星は消えてしまつた！……

……マクシミリエンは大汽船リオ　デ　ジヤネイロの船中の、或る電燈の下に、死んで居るステフアヌを身の横に、横になつてゐるのであつた。……それは朝の四時であつた。

有色人の娘

一

西洋に於ける佛領植民地の、繪のやうに美しい生活のうちで、有色人の女の服裝ほど、初めて到着した旅客に印象を與へるものは他には無い。それは審美感念に氣持ちの宜い驚きを與へる——それは地方に局限されたものであり、また特殊なものである。諸君は英領西印度の人民のうちには、それに類したものすら何一つ見出さぬであらう。それは——頭飾に就いて殊にさうであるが、その相違を興味あるものたらしめるほどに、處を異にしていづれも異つて居るけれども——マルティニーク、グアドゥループ、デジラード、マリー・ガラント、それからケーエンヌのものである。マルティニークの女の頭飾は頗る東洋的である。——ケーエンヌでの髮の結び方、或はグアドゥループの、あの垂らした綺麗な手拭(ムショアール)、よりか、風變りといふ點に於ては劣るが、あれよりも遙か多く人目を惹く。

さういつた服裝は次第に失くなりつつある。それには色んな理由があるが、主たる理由は、固より、最近四十年間のこの植民地の社會狀態の變化てある。恐らくは、それを着て居る者に肺炎に罹らしめる危險の甚だ多い、あの原始的な奴隸衣服——シユミーズとジユーブ——を、マルティニークて殆ど一般に棄てるやうになつたには、健康といふ問題がまた幾分か關係を有つてゐたのてある。經濟上の理由だけていふと、それには何等咎むべきところは無かつた。金が今よりもつと價値のあつた時分、六フランあれば、それを買ふことが出來た。今は[註]ドゥイレットが——頸から足まて一つなぎになつて居る、裾を曳く長い

註　派手な色のドゥイレットは、その更紗模樣で、此處の者はいろいろに分類して居る。その模樣が竪縞になつて居るか、花物模樣であるか、色んな色合の「虹」の太筋になつて居るか、或は格子縞になつて居るかに據つて、ローブ・ア・バンブー——ローブ・ア・ブーケ——ローブ・アーク・アン・シエル——ローブ・ア・カローなどと呼んで居る。ロンド・アン・ロンドといふのは、輪模樣が、卽ち異つた色が——各々他のものとつながつて——鎖になつて繫がつた模樣が、出て居る地をいふのである。たゞ一色の着物は之をローブ・ユニと呼んで居る。
服裝に於て誰れしも守る對照の一般の法則は、着物の色をきつかり引き立てるやうに、絹のフーラール即ち肩掛を必要とする。つぎのやうである。

着物	フーラール
黄	青
濃い青	黄
淡紅	綠
菫	あざやかな赤
赤	菫
チョコレート（ココア）	淡青
空色	淡い薔薇色

これは固よりのこと、着物にもフーラールにも色んな色合が普通あることであるから、主要な即ち地の色を示すものである。彩色されて居るマドラスは、これはいつも輝かしい黄で無ければならぬ。立派な衣裳についての一般觀念に從へば、皮膚の異つた色味を、着物の色の特別な選擇で引き立てなければならぬ。

例へば、

カプレス（淸い赤い皮膚）は　淡黄

ムラット（皮膚の濃淡次第で）は　薔薇色・青・綠

衣物が——其代はりになつて居る。が、其價格の爲め今は失くなりつつあるこのジユーブ（袴）には、昔は種類が極めて豐富であつた。今はそんなものを見せて呉れる金が、植民地に無いのである。　自分は古昔の植民時代の、寵愛されてゐた奴隸や解放された美人の、あの名高い盛裝を言つて居るのである。盛裝といふは次記のものを含んで居る。卽ち、絹か繻子かの菫色又は深紅色の『袴（ペティコート）』。半袖で、澤山の刺繡やレースの附いて居るシユミーズ（肌着）。花々しいマドラス頭帕布（タルバン）の重ね目へ附ける、金の『震るへるピン』（ヅエバングトラムブラン）。豌豆よりも大きな黃金の玉の三筋、若しくは四筋の大きな頸飾（コリエ・シユー）。玉子の殼ほど大きいが輕い耳環（ザンノー・ア・クルー又はザンノー・シエニーユ）。腕環（ポルト・ボニユール）。飾釦（ブートン・ア・クルー）。頭帕布（タルバン）だけへては無く、飾りの絹フーラール卽ち肩掛の折り重ね目の下の處へも附ける襟止。これて時に五千フラン以上の出費となる。この華美な盛裝が年一年と見る事が出來無くなりつつある。極嚴かな場合——結婚、洗禮、第一回聖餐、堅信の式日——のほか、今は滅多に着

けない。赤ん坊を教會へ連れて行き、洗禮水盤の處でその子を抱いて居り、その一家の友人悉くがその子に接吻するやうに、式後家から家へとかかへて行くダ（乳母）即ち『ポルテューズ・ドゥ・バプテーム』は、さういつた盛装をして居るのである。だが、今日此頃は、それが職業的な女（そんな式日にだけ傭ふことの出來る、職業的なダが居る）で無ければ、普通はそんな寳石類は他から借りる。若しその乳母が丈が高く、年が若く、しとやかで、皮膚の色が濃い金色だといふと、その服装は、ビザンティーンのマリヤのそれの如き、眩惑的な感じを與へる。自分がいつか見た、そんな服裝した若いダは、殆ど下界のものとは思へなかつた。其風采には、言ふに言はれぬ、東洋的な或る物が——ソロモンを訪ねに行くシーバの女王を思はせる或る物が——あつた。その女は、自分が當時訪問して居た家族の愛撫を受けに、洗禮を受けたばかりの、或る商人の赤ん坊を抱いて來たのであつた。自分がその子を接吻する順番になつた時、自分は白狀するが、その赤ん坊へは目が惹かれずに、古色を帶びた黃色の光を放つて、其子を懷き抱へて居る、橙黃色と紫との頭巾を冠つてゐた、その美しい黑い顏だけを見た。……何といふダであらう！……特に奢侈禁制の法律を設けてその蠱惑を防いだ、舊時のあの解放された美人の眞の典型と云つて宜い女であつた。浪漫的にその女は自分に取つて、超自然的な神母であり、クリーオールお伽

噺のシンデレラであつた。といふのは、神母やシンデレラは、西印度の民間傳說では本來のとは變つてゐて――環境に適應するやう、そして地方的理想に叶ふやう、變へられて居るからである。例を擧ぐれば、シンデレラは、四重のコリエ・シユーを着、ダが着けるヅエパング、トレムブランや、その他の裝飾悉く着けて居る、美人のメティス[註]に、變つて居

註……ヴェラ　サンドリヨン　エヱック　ヨン　ペル　ロープ　ヴルー　グランド　ラケ。……サ　テカ　バイユ　ウー　マル　ジエ。リ　テ　ティニ　ペル　ザンノー　ダン　ゾレイユ　リ、クアト・トウー・シユー、ブオシユ、ブラースレット、トラムブラン――トユット　ソート　ペル　ペカイー　コムサ。……（コント　サンドリヨン――ダブレ　トユリオール）

……裳の長い、天鵞絨の美しい着物を着たサンドリヨンが居りました。……その姿を眺めると、眼が痛くなるほどでした。耳には美しい環を着けて居り、頸筋のコリエ・シユー、襟止、トラムブラン、腕環――そのほかそんなやうな美しいものを皆着けて居りました。（トユリオール氏のクリーオール文典の中にあるシンデレラ物語）

る。その眼の眩むやうなダの印象を憶ひ出すと、今でも自分は、シンデレラのクリーオール衣裳を彼のお伽噺作家の文句――サ、テ、カ、バイユ、ウー、マル、ジエ！（その姿を

眺めると、眼が痛くなるほどでした！」——が、繪のやうに描いて正しきを失つて居ない、と思はざるを得ぬ。

……日常のマルティニーク衣裳すら徐々と變はりつつある。年々にカランデューズ——頭帕布に繪具を塗つて折り褶む女——の仕事が減つて來る。——ドュイレットの色彩が麗しさを減じつつある。——一方、有色人の若い娘共が、エレヌ アン シャポー（『帽子で育てられる』）に——即ち、白人の娘同様の服裝をされ教育をされるやうに——なりつつある。それは、白人と全く同じほど色が白くなければ、最近巴里流行の衣服を着せても、昔の衣裳ほど人目を惹かぬ、と自白せざるを得ぬ。之に反して、白人の娘で、ドュイレットやムーショアルを着けて美しく見えるのは少い。それは單に色の對照の爲めばかりでは無い、身體が巨きくて丈の高い混血人種に特有な、あの手足の長大と、胴の特殊な上反とを、白人の娘は有つて居ないが爲めである。或る人足女は人目を惹く美は有つて居るけれども、マルティニーク衣裳を採り用ひて居るものは何れも見た目に醜いことを自分は觀察した。身體が餘りにほつそりして居るので、その衣裳では引き立たぬのである。

さういふ衣裳は、恐らくそれを發明しはしなかつたにしても、それを輸入したのは奴隷制度であつた。そしてそれは、その屬して居る特殊の社會狀態と共に失くなつてしまふ運

命を必然に有つてゐたのである。若し此處の人々が今なほドュイレットやムーショアルやフーラールを捨てまいとして居るならば、それは主としてそんな服裝が安價な爲めである。娘は二十フラン許りで——靴は除いて——實際頗る見映のいい服裝が出來るのである。——そして靴を穿かぬものは幾千人も居る。が、この時好は、いま十年經てば屹度もつと廉價なものになり、また見つとも無いものになるであらう。

が然し、現今は、外來人はまだそんな服裝の珍らしさと花やかさに驚いて、その起原は何處に在るか、と尋ねるほどであらう——その場合、尤も、滿足な答は得さうには無い。自分も長い間穿鑿をしてから、マルティニーク服裝の來歴の摘要でも書き得る希望を、全然放棄せざるを得ぬと思つたことである。それは一つには、書物と歴史とが乏しいか缺げて居るかして居る爲めと、一つには、そんな計畫はただ專門家だけに可能な知識を要するからである。それにも拘らず、こんな服裝は初は佛蘭西の田舍の或る時好から採つたものであること——グアドゥルーブ、マルティニーク、ケーエンヌの時好は、それぞれ母國の或る一地方で今猶ほ着て居る型を基にして造つたものであること——を想像すべき充分の理由を見出した。解放されたものが着てゐた舊時の服は——今でもダが着て居るのは——南佛蘭西の、殊にモンペリエあたりの、女が着て居る衣物を何となく思ひ出さしめる。恐

らくは專門家は、クリーオールの種々な髮の結ひ方をば、今なほ南部及び西南部諸州の佛蘭西の田舍時好のうちに殘存して居る舊式な頭飾へ、溯つて跡附ける事が出來るてあらう。――が、地方的趣味が、本來の樣式（スタイル）をば、この問題を研究したことの無い人には認め得られないぐらゐに、多く變更して居る。マドラスを折り縮んで結はへる、そしてそれに彩色をする、といふマルティニーク風は、これは多分地方的のものてあらう。そして、半野蠻的な妙な寶石のいろんな意匠は、今なほコリエ・シューを地方の金細工人が製作をして居る植民地ていづれも發明されたもの、と自分は信ずる。購買者は、一度に玉を二つか三つか買ふ、そして所要の數に達してから始めてそれを糸て繋ぐ。……以上が自分がこの事に就いて知り得た總計てある。が、知る所あるやうにと、種々な西印度著作家并びに歷史家のものを搜索して居るうちに、ドゥイレットやコリエ・シューの根源よりか、遙かに重大な或る物を發見した。混血人種の進化的歷史を構成するところの、自然と利害との、愛と法律との、偏見と熱情との、あの不思議な鬪爭を示す事實なのてある。

二

近代の有色人の娘(フィーユ・ド・クーリユール)に見られるあの肉體的進化の根源を爲す要素として、ただ佛蘭西の農民植民者と西亞非利加奴隷とだけ考へれば、それは信じられぬものに思はれよう。——何となれば、兩者の交錯だけでは、あらゆる肉體的結果を充分に說明することは出來ないからである。その結果を充分に了解するには、この根源的人種は兩者とも、氣候と環境との狀態の爲めにその血統が、驚く許りの程度に、變更されて居る、といふことを記憶して居る必要があるであらう。

奴隷がいつ初めてマルティニークへ輸入されたか、その正確な年月は、今これを確知することは出來ぬ——何等の記錄がこの問題に對して殘つて居らぬ。が、奴隷制度の創立はこの島の植民と時を同じくして居る、といふことはありさうな事である。千六百三十五年に、今サン　ピエールの市が臨んで居るあの入江近くへ上陸した、サン　クリストーフからの最初の百名の植民者が、奴隷を連れて來たか、或は着後間も無く黑人(ニグロ)の供給を受けたか、した事は頗る信ずるに足ることとである。敎父ドュテルトル　千六百四十年に此邊の植

民地を訪ね、千六百六十七年に佛領西印度のその歴史を巴里で出版した）の頃には、奴隷は早、繁榮な制度と——社會全組織の根柢と——なつて居つた。このドミニク宣敎師に據ると、當時この植民地に居た亞弗利加人なるものは極めて嫌なものであつた。彼はその女を『醜惡』（イデューズ）と書いて居る。その描寫に偏見があると、ドュテルトルを非難すべき立派な理由は一つも無い。あの世紀の著作家のうちで、シャトーブリアンを感心させ、また二百五十年後の今でも、それが語つて居る場處や物事の性質を充分に知つて居る者共をも面白がらすあの『西印度航海記』の著者ほど、自然美に敏感なものは他に一人も無かつたのである。あの時代の他の作家或は旅行家で、あの不幸な奴隷を虚妄的な、殆ど理想的な見樣をして我々に見させる、あの寛大な憐憫をば、あれよりも著しく多く有つて居たものは、一人も無かつた。にも拘らず、女ネグロは、概して云つて、胸が惡るくなるほど醜い、と斷言して居る。——そして、（僧侶になる前に軍人であつたから）人間の性質の多くの奇異な方面を彼は見たのであつたが、種族混淆が早、既に始つて居ることを見て彼は驚いて居る。疑も無く、かかる恩惠に與つた、或は場合に依つてはかかる苦惱を味はつた、最初の黑人女は、ネグロのうちでもより美しい標型のものであつたに相違ない。といふのは、方々の海岸から、そして種々な種族から獲來たつた奴隷のうちに、著しい差

別のあることを彼は認めて居る。でも、其差別は、他の差別では無くして、むしろ醜さの差別であつた。即ち、いづれも皆醜悪[註]であつた。――或る物は他の物よりも一層醜悪であるといふだけのことであつた。で、この植民地に於けるムラットの最初の母は、肉體的に劣等な標型の者よりも優つて居つた――これは洵に當然な想像であるが――と假定して、しかもなほその後裔が、彼の眼には、憐憫以上の感念を起こさしめるものとは映つて居なかつた、ことを我々は見出す。彼は『ムラットの卑しき出生について』といふ章で斯う書いて居る、――

註　が然し、ドユテルトル時分の奴隷は、多くは、より醜い亞非利加種族のものであつたらしい。そしてその後の供給は奴隷海岸の他の地方からして得られたものらしい。半世紀後の教父ラバは、藝術家の心を喚るに足るほど美しい黒人を新たに上陸させる所を目撃したと書いて居る。『自分は、その男女が繪のやうな姿を有つて居るのを、また殊にすぐれて美しきものが居るのを、見た』（第四巻第七章）と言つて居る。なほその上に、その皮膚は極めて美しくて、天鵞絨のやうに軟らかであつた、『ル　ゴロウール　ネ　パ　プル　ドゥー、天鵞絨もこれよりは軟らかでは無い』とも言つて居る。……年々佛領植民地へ船で送られた三萬の黒人のうちには、確により美しい亞非利加種の代表が多く居たであらう。

彼等は――恰も騾馬がそれを產み出した動物の性質を分有するが如くに――その父の或る物とその母の或る物とを有つて居る。といふのは、彼等は佛蘭西人のやうに眞つ白でも無く、ネグロのやうに眞つ黒でも無くて、兩者から出て來た、鉛色をして居る。……

が然し、今日旅行者は、斯く書いてある者共の子孫のうちに鉛色のものを探しても見あてることは出來ぬ。二世紀半足らぬ間に、この人種の肉體的特徴は全く變つてしまつて居る。一番驚くことは、變形の迅速なことである。敎父ラバ後には、歐羅巴人が『ネグロの小さな子を猿と見誤る』ことは決して無かつた。白人と黒人と混血人とを、環境と氣候とに應じて改造することを自然が始めたのであつた。初期植民者の子孫はその父祖に似なくなつた。クリーオールのネグロは其祖先に改良を加へた。[註] ムラットは、後年その植民地それ自らの保全を危險ならしめたほどの、あの肉體的并に精神的諸能力を實地に示し始め

註　千八百十三年に旅行家ドーション・ラヴィズは『彼等の汗はギニーのネグロの汗ほどに臭くない』と書いて居る。

た。こんな變化は、溫帶地方では、長い間人の觀察に上らぬほどに遲々たるものであらう。熱帶では、働いて居る自然力を示して、人を驚かしめるほど急速に、爲し遂げられてあつた。

熱帶の太陽の下では「マルティニークのルフツ博士は書いて居る」、歐羅巴人同樣、亞非利加人も亦その生殖作用に大なる變更を見るやうになる。その人種のどつちもが全く新しい生物を產み出す。クリーオール亞非利加人といふものが、クリーオール白人といふものが生じたと同じやうに、生じて來た。そして、佛蘭西の種と異つた地方からして熱帶へ移住した歐羅巴人の子孫が、原の人種起原を推察する事が不可能なほどの、全く同じい特徴を現はして來たと丁度同じに、それと同じにクリーオール・ネグロが――太つたずんぐりのコンゴーの腹からのも、身丈の長いほつそりした黑いセネガムビアの腹からのも、しなやかなそしてもつと活潑なマンディンゴの腹からのも――全るで改造されて、そして同種類となつて出現して來て、且つまたその環境に如何にも能く適應したものになつたので、その姿形ではその兩親の種類を、その原の血統を、その本來の根源を少しも見分けることが出來ないやうになつた。……その變態は絕對的である。斷言の出來ることは、『これは白人クリーオールである、あれは黑人クリーオールである』――或は『これは歐羅巴白人である、あれは亞非利加黑人である』といふことだけである。――そして、その

上に、或る年數を熱帶で過ごすと、歐羅巴人が元氣が衰へて、色が變つて來るので、それが、その起原を察するのに不確實ならしめることがある。だが、極僅の例外は除いて、原始の亞非利加人、即ち、此處で謂ふ所の『海岸黑人』（ル ノアール ドゥ ラ コート）は一見直ぐと分かる。……

……クリーオール・ネグロは恰好が優美で、釣り合ひが好い。手足がしなやかで、頸が長い。――亞非利加人よりも、顔が花車で、脣が厚くなく、鼻が低くない。――カリーブのやうな大きな陰氣な眼をしてゐて、感情表現にはより能く適して居る。……亞非利加人のむつつりした狂暴を見ることは殆ど無い。無愛想な野蠻な態度を見ることは殆ど無い。勇敢で、お饒舌で、自慢好きである。その皮膚はその父の皮膚の色合と同じでは無い。――もつと繻子風になつて居る。髮毛は依然羊毛やうであるが、もつと細い毛である。……その輪郭が全體もつと丸くなつて居る。――進化した植物同樣に、木質な野蠻な纖維が變態して居る細胞組織が優勢なことを認めることが出來る。

註 この一文はルフッ博士の『マルティニーク人の歷史的並びに統計的研究』（一八五〇年、サン ピエール）第一卷、一四八――五〇頁から。

黑人の體質は西印度の致命的氣候に對して無感じであると一般に想像されて居る。事實はさらでは無くし

て、　規輸入の亞弗利加人で熱病で死んだものは幾千幾萬とあつた。今はあんなに生産力の強いクリーオール・ネグロは、新しい環境へ適合しようとした奴隷要素の、あの長い恐ろしい競爭での、最適最善の殘存者に過ぎぬのである。長年の間、一年に三萬のネグロを佛領植民地へ供給する必要があつた。一七〇〇年と一七八九年の間に、サン　ドミンゴが九〇〇、〇〇〇を下らざる奴隷を輸入した。――でも一七八〇年にはその數の半分も殘つて居なかつた。（ブラシッド　ジャスティンの『サント　ドミンゴの歴史』一四七頁參照）バルバドスの奴隷は、計算に據ると、十六年毎に、すつかり新しいものになるのであつた。奴隷の死亡に因つて栽培者が蒙る損失は（奴隷一人の價値をたゞ二十磅と見積もつて）その時期の間に一、六〇〇、〇〇〇磅（八、〇〇〇、〇〇〇弗）であつた。（バルクの『歐羅巴植民地史』第二卷、一四一頁。一七六七年佛國出版）

この新しい、そしてより眉目好い黒色人種は、當然のこと、その祖先に對して主人が與へ得たよりも、もつと同情のある注意をその主人から贏ち得た。そこでマルティニークその他ての結果が、千六百六十五年の黒人法（コード・ノアール）の妙な條文を制定せしむるに至つたやうである。その第九條は、第一に、自由を得て居る男が女奴隷の腹で一人若しくは二人の子供を有てば、それを許容した奴隷所有者ともども、各々二千斤の砂糖を拂ふべき刑に處すべし、と規定され居り、第二に、若しこの法令に違犯する者が、その子の母の所有者であり、その

子の父である場合には、その母と子供とを病院の利益の爲めに沒收し、終身その解放權を剝奪すべしと、規定されて居つた。が然し、かういふ意味の例外が設けてあつた。若しその父なるものが、その蓄妾中未婚で居れば、『教會の儀式に從つて』その女奴隷と結婚することに依つて、處罰の規定を免るゝことを得、またその女奴隷はそれに依つて解放され、その産んだ子供は『自由の身となり且つ正當の子と認めらる』べしといふのであつた。恐らくはこの立法者 、この條文の第一項が效力の無いものにならうとは、卽ち、此法令の違犯者は但し書きまで提供して或る手段を用ひて處罰を免れようとするであらうといふことを、想像しなかつたのである。が然し、事實は法文の逆になつた。種族混淆は相變はらず繼いて行はれた。そしてラバは、白人と黑人との結婚の二つの實例を見て、その一つの結合の結果は『非常に美しい小さなムラット』となつたと書いて居る。この正式な結婚に確に例外的なものであつた。その一つは、父に投ぜられた嘲弄の爲めに解約になつた。——然し、不適法な結合が、この法律の通過後間も無く頗る普通なものになつたらしく思はれる。後年にはあたりまへのことになつた。法令第九條は確に失敗であつた。そこで千七百二十四年三月に黑人法は新しい法令で强力なものにされた。その第六條は、人種間の結婚は、蓄妾同樣、之を禁じて居るのである。

ところが、公衆道徳の狀態がサント　ドミンゴよりも善いマルティニークに於てすら、この法律は前の法律よりも良い效果は有たなかつたやうである。奴隷人種は、立法者が豫期しなかつた勢力を及ぼし始めたのであつた。この島の植民後やつと一世紀しか經つてゐないのであつたが、この時分には氣候と文明とが黑人女を變態させてしまつてゐたのである。歷史家ルフッは書いて居る、『一二代の後、亞弗利加人は、その子孫が改良され、上品になり、美しくなり、クリーオール黑人に變化し、如何なるものをも得る事が出來るやうな(註カバーブル　ドゥ　トゥ　オブトニール)抵抗の出來ぬ或る魅力を施し始めた』十

註　ルフッ『研究』第一卷二三六頁。

八世紀の旅行者は、サン　ピエールの色黑の美人が見せる衣裳と寶石との贅澤なのに喫驚した。それは歐羅巴人の眼には公然の恥辱であつた。ところがそのクリーオール黑人女郎ちムラットは、己が力を了解し始めるといふと、絹着物や黃金の玉の頸飾より、もつと高い恩惠と特權とを求めた。卽ち、啻に己が自由のみならず、己が兩親兄弟姉妹　進んで友人――の自由をも得ん事を求めた。この方面にどんな成功を收めたかは、若し人間の本性がより善い衝動に從ふやう無拘束にされてゐたなら、奴隷制度はその實際の解放時期の

一世紀前に存在しなくなつたであらう、といふクリーオール歷史家等の眞面目な陳述に依つて想像する事が出來よう。白人の人口がその最大限に達し（一萬五千[註]）、植民地の贅澤がその絕頂に達した千七百三十八年頃には、奴隷任意解放の問題が頗る重大なものとなりつつあつた。混血人の美しさが人を魅するその力の强さは、主人が自己の奴隷の奴隷になりつつある程であつた。自然が利害に對して凱歌を揚げた此の不思議な戲曲に一役を演じに現はれたのは、クリーオール黑人だけでは無かつた。それよりも更に美しい娘共が、母を助けて、一種特別な階級を造るやうに、生長し來たつた。其皮膚の色合は熟した果實の色に匹敵し、その――獨得の異國情味の、そして何とも云へぬ――優美さは彼等をして優良人種の娘等の恐ろしい競爭者たらしむるに至つたその娘共は、確に、近代の有色人の娘よりも肉體的に勝れてゐたのである。彼等は、他の構成物より成つて居る社會であつたならば出來し得なかつた所の自然陶汰の結果であつたのである。――卽ち、彼等は兩人種のいいよりよい標型のものが結合して出來た結果であつたのである。ところが、奴隷制度だけがそれを可能ならしめ得たところのものが、奴隷制度そのものの保全を危くしはじめた。こ

註　今は五千を超えぬ數に落ちて居ると自分　信ずる。

の社會組織全體が賴つて立つて居る制度が、混血の娘共の勢力の爲め、着々とその力を失ひつつあつた。そこて、早、目に見えて居るこの危險を避ける爲めに、或る新しい、苛酷な、極端な方略が確に必要となつて來た。解放を止める爲め、解放の理由、或は動機に制限を置く爲め、特殊の法律が本國政府て通過した。そして、女奴隷の權力が、本國首府て充分に理解されて、それに對して異常な法令が制定された。有色な人を自由な身にする者は、どんな人ても、奴隷としてのその女の價格の三倍を政府に拂ふべし、と決定されたのてある。

斯う重荷を負はされたので、解放は前よりか遙かに進行が遲かつたが、然し餘程の年月の間繼續した。より貧乏なクリーオール栽培者或は商人は、その良心の或はその愛情の、衝動に從ふことが不可能てあつたかも知れぬが、より富裕な階級の人達の間ては、金錢上の考慮は解放に殆ど何の影響も與へ得なかつた。此の國が富裕になつたのてある。そして富の獲得といふことが特別な性質に寛大といふ念を起こしはせぬにしても、或る一階級が全體として富むといふことは、親切を盡くさうといふ前から在る傾向を發展させ、またそれを施す新しい道を拓くものてある。後、十八世紀に進んで、歡待といふことが、紳士たるものの義務として、馬鹿らしい程極端に養成せられた時には——寛大が社會を通じての

規則てあつた時には、――證書作製に招かれる公證人、或は結婚司宰に呼ばれる僧侶が、報酬として金貨五千フランを頂戴することがあるといふ時には、――解放は確に多數あつたのである。……或る歷史家は言うて居る、『[註]植民地ての利害と輿論とは、解放に反對であつたが、各人の個人的感情はその輿論と戰つた。――自然が人間の心情の祕密な場處てその威力を回復した。――それに地方の習慣が一夫多妻を許容してゐたから、富裕な人は德義上己れの血の繫がつて居る者の自由を保證しなければならぬといふやうに自然と感じて來た。……正妻が、教母となつて（サン　フェール　レ　マレーヌ）、その夫の私生兒の世話をして居るのを見ることは稀ては無かつた』……自然はそんな法律總てを、また人種の偏見を、嘲笑して居るやうに思はれた。立法家は智囊を傾けて、――ムラットが白人の侮辱に復讐せんとしての毆打に對して無法な刑罰を課したり――解放された者に、その舊主人夫妻が着てゐたと同じ着物を着ることを禁じたりして――被解放者の境遇をもつと卑しいものにしようと謀つたが、無效てあつた。『解放された美人共は、法律が彼等に加へんと欲するその社會的下位を遁れる手段をば、だらし無く着ると肉慾を唆るやうに思は

註　ルフツ『研究』第二卷三一一頁及び三一二頁。

れる或る衣裳に發見した。——そして彼等は非常に猛烈な嫉妬心を惹き起こしはじめた』

註　ルフッ「研究」第一卷二三七頁。

三

千六百八十五年及び千七百二十四年の立法者達が矯正しようと努めたものは、奴隷制度の廢止に、また、社會的に植民生活を妨げるあの政治的困難に、大して改善を來たさなかつた。有色人の娘は、解放された美人の容色を受け繼いで、引き續き同樣な感化を與へ、殆ど同樣な運命を果たした。道德の弛さ加減は——表面に見える事は少くなりはしたが——依然として變はる事は無かつた。後には、他の或る力に依つてよりも、必要といふ壓力の下に、それが生じて來た。他の地方では社會の保全に必要缺ぐ可からざるものと考へられて居る道德主義が、いつも熱帶では弛緩したものとされるのである。それで——恐らくは、サント　ドミンゴを除いては——マルティニークの道德標準は、他の佛領植民地に於

けるよりも高くは無かつた。外的な儀禮は或る程度までは守られてゐたが、私生活には何等の大なる拘束は一つも無かつた。金有ちが、多勢の『庶出の』家族を有つて居るといふ事は珍らしいことては無かつた。資産のある人は、殆ど誰れも彼れも有色の子供を有つて居つた。人種僻見といふのはその性皮相なものといふことは、到る處て結合によつて示されてゐた。そしてそんな結合は、上品な會話ては決して口に上せはせぬけれども、それにも拘らず、遍く知れ渡つて居るのであつた。そしてその混血人の『抵抗しがたい魅力』は、嫌忌して居る風を装はうて居るのは、實は虚僞だといふことを公然と證明して居るのてあつた。自然は、解放された美人といふ姿を執つて、奴隷法を嘲弄したのであつた。――有色人の娘となつて、今なほ人種的俘言を笑ひ、肉體的墮落といふ作り話を嘲るのであつた。今日もその狀態は大して變つては居らぬ。そして開化して居る方の人種にこんな例があるのであるから、他の人種から何を期待する事が出來たらう？結婚は稀てある。――公には、不適法の出產は六十パーセントてあると述べられて居る。が、七十五乃至八十パーセントといふのが、恐らく眞實に近いものてあらう。地方新聞ては每度こんなやうな廣告を見る。即ち、アンフアン　レジティーム（嫡子）一、アンフアン　ナチュレル（私生兒）二十五。
　有色の娘に就いて語るには、それが屬して居る集團の異常な社會的成層に就いて語るこ

とがまた必要てある。全人口一七三、〇〇〇乃至一七四、〇〇〇（そのうち純粋な白人の數は五〇〇〇にも落ちて居るといふ事てある）に對して「有色人」二〇、〇〇〇といふ表向きの報告は、混血の眞實の比例を少しも表はして居るものては無い。血の混じつて居ない亞非利加血統のものは實際はほんの少ししか存在してゐない。ても、白人クリーオールが有色人（ジャン・ド・クウールホール）と言ふ場合には、ムラットの皮膚より黑いものは意味して居ないのてある。人種分類は、其源を政治に有つて居る感念に依つて、地方的になされて居るのてある。目に見えて有色な、少くとも濃淡が違ふ四種若しくは五種のものが、ネグロとして分類されて居る。が然し、この分類の根柢には、自然的眞理が少しはある。亞弗利加人の血が優勢な場合には、同情が亞弗利加人の方へ傾きがちてある。混血の比例は殆ど對等てあるとしても、現在の政治よりももつと自然的な事態に於て、白人の方が優逸な勢力を有ちたいものだから、それて眞のムラットの處て、分岐點を設けるのてある。そして有色の娘に就いて言ふならば、地方ては、優勢な要素が白人てある女にだけこの名を與へる。白人クリーオールは、一般に言つて、殆ど全く白人の者共と差別する時に、始めて斯く卑下して言ふのてーーもつと普通には、その階級全體をムラットと呼んて居るのてある。富と教育とが社會上の地位に於て、クリーオール白人の娘共の地位と同等に置いて居る女共は、或る場合には、

白人で通ることにさせて居る。或は、惡るくつても、ただ一聲で、有色の人間だと、人に言はれるだけてある。（言ふ必要もあるまいが、如上は現在の考察の範圍を全然越えて居るのである。今は彼等に就いては、熱帶世界全體での、一番上品な一番魅惑的な女と一緒に分類される、といふ外には何も言ふことが無いのである）眞の黑人から最も花やかなサン・メレに至るまで、段階が殆ど無限に在るやうに、肉眼だけで認められるやうな、色の分類を設けることは不可能である。そして種族の間に引き得る分界線は、人種的のもので無くて、社會的のものでなければならぬ。この意味に於て、有色の娘といふ語は、目に見えて際立つた色のある人種の娘といふよりも、生まれ落つるからして舊時代の解放された美人の生涯に似た生涯を營む運命を有つて居る混血の娘、といふ意味を有つて居るといふ、地方的なクリーオール定義を我々は採用するのである。――といふのは、奴隷制度に附屬して居る道德的冷酷は、解放後も殘存して居るからである。

　肉體的に云へば、典型的な有色人娘は、白人クリーオール著作家が分類するに躊躇しなかつたやうに、確に、[註]『人類中最も美しい女』と、分類することが出來る。彼女は父方母方どちらのものより好い身體的特徴を受け繼いて居る計りで無く、元來どちらにも無い所のもので、特殊の氣候と肉體的條件とが造り出した所の、或る他の物を有つて居る。卽ち、

註　「白人と黒人とから出來て來たサン・メレ人種は、殊に文明に導き易い人種である。肉體的標型として、個人中に、一般にその女子中に、人類のうちの最も美はしい標本を提供して居る」スーケー・バシエージュ氏「佛領西印度人種臆說」（マルティニーク、サン　ピエール。一八八三年）六六一——六二頁。

一種の優雅、形體のしなやかさ、手足の花車さ（手足や指の屈曲が描く線が悉く美しい曲線の一部を爲す程である）皮膚の繻子のやうな滑らかさと果實の色合、——がそれて、全く西印度獨得のものである。……道德的には、固よりのこと、彼女を記述することは尙ほ一層困難である。そして大丈夫言うて好いことは、現半世紀の有色人娘に就いてて無くて、寧ろ過去半世紀の有色人娘に就いてである。此人種は今は過渡期に在るのである。公の敎育と政治上の變化とが、その標型（タイプ）を變化しつつあるので、その社會的發展に影響を與へるどんな新しい力がまだこれから出て來るか、それを豫言することは不可能であるから、從つてまたその究極の結果を推測することは不可能である。今の植民地衰微の時期前には、有色人の娘は今のやうなものでは無かつた。全然無敎育であつた時代にさへ、彼女には一種特別な魅力があつた、——どんな粗暴な性質を有つた者からも同情を贏（か）ち得る力のある、あの子供らしさの魅力があつた。此初心（うぶ）なものへ惹きつけられる氣持ちのせぬものは誰れ

も無かつた。幼兒のやうに從順(すなほ)で、同樣に容易く物事を面白がりもし、同樣に容易く心を痛めもする、――どう見ても外觀では、其缺點に於てもさうであるがその長所に於ても飾りが無い、――自分を愛して吳れると――恐らくは其上に、母とか弟とかを世話してやると――いふ約束と引き換へに、誰れにでも喜んで其靑春と其美と其愛撫とを與へようとする――女であつた。些細な物事を非常に嬉しがる其驚くばかりの受納力、其可憐な虛榮と其可憐な馬鹿馬鹿しさ、笑ひから淚への――其情熱的な氣候の突然の降雨と日射とに似た――氣分の突然な轉向、――此等が男の心に觸れ、それを惹き附け、それに打ち勝ち、それを壓制したのである。が、こんなに容易く起こす喜悅や苦痛は、實際は、感情を深く腹藏して居る事を示すものでは無い。髮毛一本觸つても直ぐとその葉を閉づるジェーブ・マミゼ卽ちジェーブ・マムヅエルのやうに――ただ皮相の銳敏に過ぎぬのである。とはいふものゝ、かういふ人間性表現は、それが餘計に人目に見えるから――深く無いが爲めに、魂の流れが餘計に人耳に聞こえるから――一層人の心を惹き勝ちてある。だが、同じ樣に魅せられ同じやうに驚きはしても、外國人には、急卒な觀察では、有色の娘の全性質は露はれ來る事は無かつた。クリーオールの方が一層能く彼女を理解してゐた、そして恐らくは一層眞實な親切を以て彼女を取扱つた。幾世紀の間、當然の權利と希望とを剝奪されて

ゐたといふ事が、彼女の人種に——無拘束な熱情を父に有ち、無際限な服從を母に有つてゐる彼女の人種に——戀愛の持續について遺傳的な懷疑と、天然なことと幷びに避くべからざる事を人が受け納れるやうに、棄てられるといふ運命を甘んじて受け納れる驚く許りの受納力と、を與へたのである、といふが眞相である。だから、人を喜ばせようとするあの願望は——これは有色の娘には、行爲の他のあらゆる動機に（母性愛は除いて）勝さつて居るやうに思はれるが——それは、感情すらなほ且つ奴隷制度の爲めに人工的に養成され來たつたのである事に考の及ばぬ人だけに、絶對に自然的のやうに思ひ得られたのである。

彼女は自ら求むるところは甚だ少かつた、——贈物をば如何にも子供らしい愉悅を以つて受け納れた——愛すると約束をする男の意志には如何にも無抵抗に服從した。其男に子供を——如何にも美しい子供！を——産んだ——その子供を男は滅多に承認しないし、また正子として吳れと乞はれもしなかつた。——そして女は、にも拘らず、永久の愛情を乞ひはしなかつた——二人の關係を、必然的に一時のものであり、自分の子供の父が結婚をすることに依つて早晩解かれるものである、と思つてゐた。一切の事物に欺かれても——絶對的に虐待されて、無一文に放り出されても——人間の本性に對する信仰を失ひはしなかつた。人間は大抵は善人だと信じて居る、生まれ落つるからの樂天家のやうであつた。

――別な人の爲めに一家庭をつくつて、どんな奴隷にも勝して其の男に仕へるのであつた。……或るクリーオールの著作家は言うて居る、――『ネ[註] ドゥ ラムール、ラ フィーユ・ドゥ・クールユール ギ ダムール、ドゥ リイル、エ ドゥーブリ』〔戀に生まれて、有色の娘は、戀と笑と忘却との生を送る〕……

註 テュリオール『マルティニークのクリーオール語に就いての研究』一八七四年、ブレスト出版。……一三六頁に、有色人娘のことを詠んだ次記の謡を掲げて居る。

ラムール プリ ソアン ドゥ ラ フォルメー
タンドル ナイーヴ、エ カレサント、
フエート プール プレール、アンコール プル プール エーメー。
ボルタン トゥー レ トレー プレシュー
ドゥ カラクテール ドュヌ アマント、
ル プレジール スール サ プーシュ エ ラムール ダン セ ジュー。

〔氣に入るやうに　戀もするやうに
出來た彼女を　戀神樣は
優しく可愛ゆく　無邪氣にされた。

戀する女の　　　　あてなる性な
すべて具へて　　　口には喜悅
眼には戀をば　　　湛はしめて」

それから植民地全般の破壞が來たのであつた！……その結果を見れば眞に同情に堪へぬ。到る處の不可思議な美、熱帶の破滅の絕大な悲哀！曾ては甘蔗で金色であつたのが、今は雜草と蛇とに打ち棄てられて居る、壯大な段々畠。――樹木が部屋の中で根を張つて、屋根の處を突き拔けて上へ出て居る、人住まぬ栽培地の家々。――雨の爲めに深い谿になつて居る、草の生えた道路。――攀援莖植物に首絞められて居る果樹。――此處其處に、無慙にも首斬られ、帆柱の如く裸になつて居る、素晴らしいパーミストの幹。――炭造りに伐り倒した百年の森林巨木に徐々と取つて代はらうとして居るバナナや竹の小さなか弱いの。だが砂糖が斤五十二仙で賣れてゐた時代の舊時のこの肉感的樂園はどんなものであつたか、それを語るほどの美は殘つて居る。

そして有色の娘も亦變つて居る。彼女は謙遜で無いもの、服從的で無いもの――幾分もつと几帳面なもの――になつて居る。彼女はその地位の道德的不公平を前よりも能く理解

して居る。舊政治の解放された女が遺して呉れた、その殆ど極端なほどの肉體の上品さ花車さは、失せつつある。その隱れ場を奪はれた溫室植物の如くに、――硬くなつて、手緣り無さは少くなるが同時に美はしさも少くなつて――もつと原始的な狀態に還りつつある。その上また、その人種の危險をも朧氣ながら認めて居る。其愛人であり保護者であるクリーオール白人が他へ移住しつつあるからである。――黑人の支配が層一層可能となつて來る。更にまた、生活の困難が絕えず增し、人口增加の壓迫が募ると共に、社會的冷酷と嫌惡とが、其祖先が知らなかつたほどのものに發展し來たつた。彼女は今なほ愛されて居る。が、彼女の爲めにどんな大きな犧牲を拂うても、彼女は滅多に白人を愛しない、そして其往古その階級の者が得て居た忠實といふあの評判は最早今は得て居らぬ、と言はれて居る。有色の娘は、當然だと想はれ或は要求されてゐた、あの愛情といふ性質を與へる程の能力を、どんな時にも實は有つてゐなかつたのだ、といふのが恐らくは眞相なのであらう。その道德方面は今なほ半野蠻である。その感情は今なほ子供の感情である。彼女が白人の無理な願望どほりに白人を愛しないにしても、白人の受けるに値するだけ白人を愛する事は、少くとも確實である。道德的に墮落したと稱せられて居るのは、眞實では無くて、外見上てある。――彼女は人工的な者からして頗る自然的な者に變はりつつあるのであり、その

受難で、彼女を産んだあの贅澤な社會狀態の眞性質を次第に洩らしつつあるのである。一般に言つて、其忠實さに疑を容れながら、クリーオールは盛んに彼女の親切な心情を賞め、外國人に對し、また機會があつて世話をする子供に對して異常な寛大と獻身とを爲し得るものと許容して居る。實際、彼女の生まれながらの親切は有色人の男の方のより冷酷なより狡猾な性質と對照して、餘りに著しいので、彼女は別人種ては無からうかと疑ひたい氣になるほどである。嘗て或るクリーオールが、自分のきこえる處で、『有色人は丁度トゥ[註]ールールーのやうだ。雌だけ拾ひ取つて、雄は放つて置かなければならぬ』と言つた。恐らくはこの意味は二重に取れるけれども、その言葉は輕々しく言つたものでは無かつた。――有色女の性格は多くの點に於て有色男のそれよりも遙かに優つて居る、といふ奇妙な、然し疑ふべくも無い、事實を指して言つたのである。之を了解せんには、兩性の植民地歷史に於ける差違を記憶してゐなければならぬ。そして、前世紀の末にマルティニークを訪れた[註]ロマネ將軍の文からの引用は、その祕密を探る鍵を與へるものである。解放に對する納金に就いて斯う書いて居る。

註　陸に棲む一種の蟹。――雄は食料となる。適當に料理すると、中々旨い。――雌は殆ど價値が無い。

註 ジエー、アール、ロマネ『マルティニーク旅行記』（一八〇四年、巴里）一〇六頁。

君主が指名した知事が——普通はその奴隷の價値に等しい金額をその奴隷の主人が拂へば——自由の免許狀を與へる。公の利害から考へて見て、その奴隷の價格をその主人が表明する希望なり利害なりに比例させても、正當であると思はせる。女の自由に對する納金は男のそれより高額でなければならぬ、といふことが直ぐ了解出來る。不運者でもこの男の方のは、役に立つといふこと以上の利益を有つてゐない。——女の方は、人の心を悦ばすことを知つて居る。全世界がその性の者に許容して居るあの權利と特典とを有つて居る。奴隷といふ桎梏すらそれを飾るのに役立たせることを知つて居る。その高慢な暴君に、自分が着けて居るその鎖を掛け、鎖の痕をそれに接吻させて、居るのを見ることが出來る。主人が奴隷になつて、たゞ自己の自由を失はん爲めに他人の自由を買ひ求めるのだから。

ロマネ將軍よりずつと前には、有色の男奴隷は、外國の侵略に對して勇敢に戰つた褒美として自由を得ることもあり、或はまた、獨立して自分だけ（黑人と一緒に働くことはいつも拒むのであつた）餘分の時間職工として働いて、非常な儉約をして之を買ひ求める事

もあつた。が、その何れの場合に於ても、その成功は、愛想よいといふこととは逆な性質を所持してゐてそれを實地に行ふといふことに頼つたのであつた。之に反して、奴隷女はその釋放を主として愛情を惹き起こすその力に依つて得たのであつた。兩性の最適者が殘存し且つ永續するのであるから、この大いに異つて居る特徴が、つぎつぎと代を重ねるに從つていよいよ分明になつて來ることとであらう。

千八百三十一年の『マルティニーク行政行爲報告』（第四十一號）に、プール　セルギース　ランドゥ　ア　リュール　メートル〔其主人に對して爲した功勞の爲めに〕で自由を給はつた奴隷の名簿が載つて居る。この項目の下に記載されて居る被解放者六十九名中、男子の成人の名は二つしか見當たらぬ　一人は六十の老人で、——今一人、ローランサンといふ名の男は、或る陰謀を内通したものであつた。殘餘は若い娘か、又は若い母と子供とである。——クリーオール人の間で流行して居る、珍らしい可愛らしい名が澤山ある。卽ち、アセリー、アヴリレット、メリー、ロベルティーヌ、セリアンヌ、フランシレット、アデー、カサリネット、シドリー、セリーヌ、コラリーヌ、などである。そして掲げてある年齢を見ると、一二の例外はあるが、十六歲乃至二十一歲である。が、此自由は、ルイ　フイリップが釋放に對する納金を廢止した時分に、願ひ出でまた許可されたのであつた。……前述の『報

告』には、自由を與へた有色の男の名籍もあるが、その男といふのは、ただ全くブール
セルギース　アッコンブリ　ダン　ラ　ミリース（戦時の勞）に依つてである。
自分が手に入れることが出來、また讀むことが出來た佛領西印度著作家の著書を見ると、
その著作家は多くは有色人を、全體として、酷評して居る、――或る場合には、歴史家は
猛烈な嫌惡の念を以て書いて居る。遠く十八世紀の初に、ラバは――この人は、個人的に
は奇癖もあつたが、人間の批判者としては疑も無く立派な眼識を有つてゐたが――斯う述
べて居る、『ムラットは、概して言つて、身體の恰好がよく、丈が高く、元氣で、强壯で、
勤勉て、想像も及ばぬほど勇敢で（アーディー）ある。頗る快活てあるが、遊びに耽り、心
が變はり易く、高慢て、僞り多く（カシエー）邪まて、大罪を犯し得る人間である』サン
ドミンゴの或る歴史家は、教父ラバよりももつと僻見を抱いて、『道德上白人に劣つて
居るが、肉體上それに優つて居る』と言つて居る。それはこの人種が、恐らくは空前の最
上の劒客二人を――サン・ジョージとジャン・ルイとを――世界へ與へた時分に書いたの
てあつた。
教父ラバの批判を評して歴史家ボールドは『教父ラバが言うて居る邪まなといふのは、
疑も無く、彼等の政治的熱情だけに就いて言うて居るのである。といふのは、有色の女は、

疑問を超越して、世界中での最も美しい最も愛らしい人間であるから、――アクースール、レ　マイユール　エ　レ　ブルー　ドゥース　ペルソンヌ　クイル　イ　エ　オーモンド』[註]と述べて居る。同著者はまた、彼女共の情(こころ)の善さ、外國人幷びに病人に對する

註　ピエール　ギュスターヴ　ルイ　ポールド『トリニダッド島史』第一卷二二二頁。

親切に就いて語つて、『彼等は生まれながらの慈悲團の尼である』と言つて居る。――そして彼女共の道德的性質についてそんな感歎の辭を洩らしたのはこの歷史家だけでは無いのである。マルティニークで千八百八十七年八十八年の流行病の折、自分自ら見た事は、有色の女共についてのこんな讃辭は決して法外では無いことを自分に確信せしめた。之に反して有色の男に對しての現今のクリーオールの意見は、敎父ラバが述べたのよりも遙かに不利なものである。恐らくは、政治上の事件及び熱情が、彼等の性質を正當に評價することを困難ならしめたのであらう。佛領植民地全部での有色人の歷史は同一であつた。――彼等が社會的に對等ならんことを熱望することを恐れて居るから、白人は彼等を信じない。またそれ以上に黑人は（彼等に支配されては居るが、今なほ心私かに彼等を憎んで居

るから）彼等を信じない。だからムラットは、兩人種に敵意を抱いて居り、兩人種に恐れられて、一種のイシュマエル的種族となつたのである。マルティニークでは、或る一定の期間義勇兵を見事に勤めた者には誰れにも自由を與へて、彼等を旨く操縱しようと試みて、稍〻成功した。どんな時にも、黑人と共に働かせることは出來なかつた。彼等は、解放より一世紀も前に、熟練な都市勞働者幷びに職工の一階級全部を造り成したのであつた。

……今日は、有色の娘の一生は『戀と、笑ひと、忘却』とから成つて居る、と斯う彼女に就いて言へばそれは過つて居る。彼女は今は人生に目的を有つてゐて――自分の境遇を改善しよう、自分の子供等に高等教育を授けようと欲し、その子供等が偏見の呪から免れんことを望んで居る。彼女は白人に縋つて居る。白人の力に賴つてその地位を改善する希望を抱き得るからである。他の事情の下に在るならば、彼女は兩人種間の和解といつたやうな事を成し遂げる希望を抱くことすら出來るかも知れぬ。然し兩者の間の溝は、最近四十年のうちに、餘りに廣くなつて、和解は今はもう可能とは思はれぬ位である。そして植民地が失つた財産を、立法上又は商業上のどんな改革によつても、回復することすら今は時機遲れて居るのである。クリーオールの一般信念は、その日々繰り返して居る絶叫『セタン　ペーエ　ペルデュ〔失はれた國である〕』に概括されて居る。年々、失敗の數が增す。て、

段々と白人は移住する。――そして破産或は退去の度毎に、或る有色娘は殆ど赤貧の狀に陷つて、更に生涯の遣りなほしをしなければならぬ。引き續いて幾度も富裕になつたり貧乏になつたりして居るものが甚だ多い。――或る日その財產は負債の爲めに押收される。――恐らくはその翌日、彼女は再び一家を與へて吳れることが出來、また與へようと欲する誰れかを見出す。……どんな事が出來しても、彼女は――太陽のこの息女は――悲歎の爲めに死ぬるといふことは無い。彼女は、小鳥のやうに、歌てその苦痛を吐き出してしまふ。彼女の口に成つた短い卽興の歌を一つ讀者に示さう。――これは、元グアドゥルーブ植民地で作られたものであつたが、マルティニークとグアドゥルーブと兩方で非常に流行つて居る唄である、――

アデュー　マドラス！
アデュー　フーラール！
アデュー　デズィンド！
アデュー　コリエ・シユー！
バティマン・ラ
クイ　スウ　ラブーエ・ラ、

リ　カ　メンナイン
ドゥードゥー・ア・モアン　アレ。

ビヤン　ル・ボンジュー、
ミシエ　ル　コンシニヤテール。
モアン　カ　ギニ
フエー　ヨン　ティ　ペティション。
ドゥードゥー・ア・モアン
イ　カ　パティ――
タンブリー、エラ！
レターデ　リ。

（マドラスさらばよ！
肩掛さらば！
キヤラコさらばよ！
飾りもさらば！

浮標（うき）に今居る
あの船が
いとし男を
乘せて行く。

荷受人さま、
御機嫌いかが。
參りましたよ、
お願ひで。
いとし男が
去にまする。
どうか行くのを
延ばさせてー

「彼は佛蘭西語で親切に返事する。ベケはこんなやさしい子供等にはいつも親切なのである」

マ　シエール　アンフアン
イル　エ　トロ　タール、
レ　コンネイスマン
ソン　デジヤ　シニエ、
ル　バディマン
エ　デジヤ　スール　ラ　ブーエ。
ダン　ユヌ　ユール　ディシ、
イル　チン　アパレイエ。

フーラール　リゼ、
モアン　テ　トゥージュー　ティニ。
マドラ　リゼ、
モアン　テ　トゥージュー　ティニ。
カピテイヌ　スーゴンド
セ　ヨン　ボン　ガソン！

トゥーットモーヌ　ディニ
ヨン　モーヌ　ヨ　エーメ。
トゥーットモーヌ　ディニ
ヨン　モーヌ　ヨ　シエリ。
トゥーットモーヌ　ディニ
ヨン　ドゥードゥー　アヨ。
ジュス　モアン　トゥー　セル
パ　ティニ　サ——モアン！

（いとし子供よ、
そりやもう遅い。
船積證書は
署名が濟んだ。
お前言ふ船
はや浮標に居る。

一時間すりや
出て行く海へ。

肩掛港づけば
私にいつも。
マドラス港づけば
私にいつも、
キャラコ港づけば
私にいつも。
セコンドオフィサ
親切をとこー

誰れもあります
可愛いい人が。
誰れもあります
いとしい人が。
誰れもあります

その戀人が。
それが無いのは
唯だ私一人！

……フエート　デュー、卽ちコルプス　クリスティ〔基督聖體節〕祭の前夜、此處のやうな加特力敎を奉ずる國々では、町の街路に旗を吊るし、花綵や棕櫚の枝で飾りをする。そして、神樣のお休み場の用を爲すやう、その行列の通り道の方々に大きな聖壇を造る。その聖壇を『ルブソアール』と稱する。クリーオールの土語では『ルプスーエ　ボン・ディエ』と云ふ。富裕な人はいづれも、それを人目を惹くやうにと、何かを貸して飾り立てる——貴重な皿、見事な水晶、唐金の器、繪畫、船か汽船かの模型、世界の遠國から齎した骨董とか出して。……行列が果てると、その聖壇は剝ぎ取られて、貴重品はその所有主へ返還される。華麗は全く失くなつてしまふ。——毎年繰り返される、その果無い壯麗さの光景が、この諺好きな國人に、有色娘の不安定な運命に對する比喩を思ひつかせた。斯う言ふ、——
—フォルテューン　ミラトレッス　セ　ルプスーエ　ボン・ディエ（女ムラットの幸運は善なる神のお休み場）。

百足蟲

一

サン　ピエールは多くの熱帶都市よりも或る一點に於て幸運である。――マルティニークの他の地方ては、より高地の山村にさへ、澤山蚊が居るのに、蚊は殆ど少しも居らぬ。そのあらゆる街路を絶えず流れて居る輝かしい水の流が、このうるさい物を比較的に居難くして居るのである。――蚊帳の中て眠るものは一人も無い。

が然し、サン　ピエールは熱帶生活の他の特殊な厄介物を免れては居ない。横になる前に床を、着る前に衣物を、檢べて注意し過ぎるといふことは無い。――色んな嫌な物がそれに隱れて居るかも知れぬからてある。大いさ大きな蟹ほどもある蜘蛛、或は蠍とかマブーヤとか百足蟲とか――或は、それが咬むと赤熱の縫ひ針を刺したやうに燒ける或る種の大きな蟻とか。サン　ピエールて暮らしたことのある人には蟻は忘れられさうには無い。

……どの家にも三種若しくは四種居る。――フルミ　フー（氣ちがひ蟻）といつて、其運動は眼を欺くほど迅い、斑點のある黄色い小さな奴。殺されても咬み附いた處を離さぬ大きな黑い蟻。殆ど眼に見えぬほど小さな、毒を有つた、小さな赤い蟻。それから、少しも咬まぬ小さな黑い蟻。――これ等は普通何處にも居るもので、互に仲よく棲んで居るやうに思はれる。其奴共は、臺所、戸棚、蝿帳の厄介物である。が、皆、掃除屋である。死んだ大きな油蟲や百足蟲の身體を――老練な勞働者のやうに曳きもし又推しもし――その死骸を障害物の上へ或は廻りへ、異常な熟練を以て、導いて行つたりして――運んで行くのは奇觀である。……この植民地を――千七百五十一年であつたが――蟻が殆ど滅亡させた時があつた。蟻の爲め荒廢に歸した栽培地は、火事に荒らされた觀があつたと、歷史家が述べて居る。或る地方の地面の下では、その卵の厚さ二吋の層が幾英町に亙つて見出された。見張人無しに二三時間搖籃の中へ置き放しにしてあつた幼兒が生きながら蟻に食はれた。この海岸の方々で、同時に、生きた蟻の素敵に大きな球が、水で打ち寄せられて來た（東北の村々で、今生きて居るクリーオールが記憶して居る或る年に、其後またあつた現象である）。政府は蟻撲滅の最上手段に賞與を提出したが無效であつた。然しその累は、その來るのが徐々てあつたやうに、徐々と無くなつた。

如上の動物はどれも住宅へ入ることを防ぐ譯には行かぬ。――始終そいつ等に必らず出會ふものと諦めて居るが宜い。大蜘蛛は(毛深い奴は除いて)何等恐慌、若しくは嫌惡を起こす要は無い。――實際、多くの家では、それを害はぬやうにして住まはせて居るほどである。それは一つは、幸運を齎すといふ信仰がある爲めと、一つは、其奴が食へない物は總て臺無しにするあの嫌な大きな油蟲を澤山に殺して呉れるからである。蠍はそれほど普通ては無い。が、床の下に潜んで居るといふ憎らしい癖がある。それが咬むと燒けるやうな熱を傳へる。理由はそれほどでも無いが、マブーヤも殆ど同樣に恐がられて居る。これは長さ六吋許りの、灰色の、小さな蜥蜴である。――輝かしい緑色の蜥蜴は屋根の上だけに住むのに、これは家の内部だけに出沒する。同じ門の他の爬蟲類同樣に、マブーヤは磨いた面の上を走ることも、それへへばりつくことも出來る。そして、それを嚇かすと、人の顏か手へ飛びついて、切れ切れに切らなければ離れぬほど、しかとしがみ附くと一般に信ぜられて居る。その上に、それがくつつく人の皮膚へ、或る青黑い、消せない痕を殘す力をその足は有つて居ると想はれて居る。――サ カ バ ウー ロ タ・と有色人は言ふ。にも拘らず、マブーヤほど臆病な無害な動物は無い。

が、家庭の平和の、最も恐ろしい最も不遜な侵入者は百足蟲である。この市の水道は蚊

を放逐した。が、それは殆どあらゆる住宅へ百足蟲を輸入した。サン ピエールは百足蟲の惱みを蒙つて居るのである。蔽ひのある下水、溝、噴水盤と浴槽の隙間、床と地面との間の空處、何れも百足蟲を宿して居る。だからベート・ア・ミユ・バットはこの素足人民の恐怖である。――子供か下女か勞働者か、この動物に咬まれ無い日は殆ど一日も無い。

充分に成長した百足蟲は、見ると、强い神經を有つた人でもぞつとする程である。十吋乃至十一吋が成長しきつた奴の平均の身長である。が、この大いさに遙か越えて居る異常な奴を、酒造場（ロンムリー）や精糖場附近で時折見うけることがある。年齡に從つて、この動物の色は黃から黑へ變つて行く。――若い方の奴は種々異つた色合をして居る。年のいつた奴は一樣に眞つ黑で、驚く許り硬い――毀しにくい――背甲を有つて居る。偶然に或は求めて、その尾を踏むと、その有毒な頭が直ぐと捲き返つて、上革が普通の厚さなら靴を通して、足を咬む。

概して言つて、百足蟲は、殊に好んで、庭、土臺、下水のあたりに潛んで居る。が、大雨の季節には、躊躇無く上へ上がつて、客間や寢室に平氣で居る。此奴にはモレスクやシノワズ――晝寢したり、夜休んだりする前に、諸君が着るあの寬濶な輕い着物――の中に巢籠もるといふ忌ま忌ましい習慣がある。また蝙蝠傘――熱帶地方では無くてはならぬ品

物――の中へはいるのが好きてある。だから諸君は無用心にそれを開かぬが宜い。壁へ掛けてある、帽子の上に縮み込んで居ようと思つたりさへする（田舍家では三角頭蛇がそれと同じことをするのを自分は知つて居る）それからまた、マルティニークの女が着る、長い、裳を曳く着物（ドゥイレット）の上へ上がつて居て――着る者の頸へ、その足がチクチクするので初めて居ることが分かるが、頗る早くまた輕く昇つて行く、といふ妙な癖がある。時折諸君と一緒に床の中へはいる。そして、諸君には其奴がくすぐつて居る間ぢつとして居る、といふ程の決心が無いから、諸君を咬む。……着る前に、衣物をただ振つただけては其奴は落ちぬ、といふことを記憶して居るが宜い。――頗る根氣よく一部々々を――殊に上衣の袖と股引の脚とを――檢べなければならぬ。

この動物の生活力は驚くべきものがある。自分は罎の中へ一匹、食物も水も與らずに、十三週間置いてゐたが、その後も前同樣活潑で危險であつた。その時自分は生きて居る昆蟲を食はせたら、がつがつそれを食つた。――甲蟲、油蟲、蚯蚓、數種の衣魚、それから、あの危險さうな貌をしてゐる馬陸も一匹。この馬陸は外的構造は百足蟲に似て居るが、身體がもつと瘠せてゐて、脚の數がもつと多い。――それが悉く、この長らく罎に閉ぢ込められてゐた奴には同樣に旨さうてあつた。……長さ殆ど一呎の奴が、蝙蝠傘の中

に四箇月以上も居て、或る日、少しも衰へぬ攻撃力を以て、突然飛び出して、自分では知らずにそれを釋放して遣つた人の手を咬んだ實例を自分は知つて居つた。
此の町では、百足蟲はそれと對抗するに足る自然の敵を唯だ一つしか有つてゐない――それは鷄…である。鷄は喜んで彼を攻撃して、時には、殺すなどいふ手數を掛けずに、頭の方を先きにして、丸ごと呑んでしまう。猫が彼を狩るけれども、猫は用心してその頭を彼の近くへ持つて行かぬやうにする。――彼が失神するほど早く、床の上をくるくる旋らせるといふ計略を用ひる。それから、好機を見て、爪で打ち殺す。が、猫が好きなら、危險を冒させないが宜い。大きな百足蟲が咬むと、その祕藏物に非常に惡るい結果を來たすことがあるからである。百足蟲の運動の迅速さは、正當防衛の猫にさへ、精一パイの迅速さを必要ならしめる。……フエル・ドッ・ランス蛇の尾を摑んでゐて、それをくるくる振り廻はして、鞭をパチッといはすやうに急に彈いてその恐ろしい首を飛ばすことの出來る人を自分は知つて居るが、生きて居る百足蟲を手て扱ふことを敢てする人のあることを、マルティニークでまだ一度も聞いたことが無い。
　この動物に關して、その種族を少くするに效果のある、迷信がいろいろある。百足蟲を殺すと、間もなく屹度金錢を手にする。そして、殺すことを夢に見ても緣起が好い。だか

ら、百足蟲を――普通はそれをするのに重い石か何か鐵製の道具を使つて――殺す機會があるのを誰れも喜ぶ。木の棒は良好の武器ては無い。ベート・ニ・ピエ（百足蟲を土語では斯う言ふ）が殺されに出て來ると、屹度少々騷ぎが起きる。そしてそれを殺す者共が、人間の敵に物を言ふやうに、一と打ち一と打ち惡口の連禱のやうなものを口にするのを、諸君は屢々聞くことがあらう。――クイッテ　モアン　チユーエ　ウー、モーディ！――クイッテ　モアン　チユーエ　ウー、シエレラ！――クイッテ　モアン　チユーエ　ウー、サタン！――クイッテ　モアン　チユーエ　ウー、アボノシオ！』等々。（わしに殺されよ呪はれもの！大惡黨！惡魔王！忌ま忌ましい奴！）

百足蟲の土語は佛蘭西語のベート・ア・ミユ・パットの唯の訛ては無い。[註]讀むことも書

註　千八百八十七年の『マルティニーク年鑑』に據ると、その當時すら、全人口一七三、一八二のうち、讀み書きの出來ないものが一二五、三六六を下らなかつた。

くことも出來ぬ奴隷共のうちに在つては、數の價値に就いては極めて漠たる概念しか無かつた。それて佛蘭西語のベート・ア・ミユ・パット〔千の足を有つ蟲〕といふ語は、黑人の想像力に訴へ得る語ては無かつた。奴隷が、これと同樣に生き生きした旨い名を――ベート・ア

ンニ・ピエ（みんな足の蟲）といふ名を――發明したのてある。アンコはクリーオール語ては『ただ』といふ意味てあるが、斯んな場合には『みんな』てある。その後の使用てベート・ニ・ピエと略されたのてあるが、この稱呼は兩意味があつて曖昧てある。――といふのは、土語には『ニ』といふ語が二つあつて、一つは『有つ』といふ意味て、今一つは『裸の』といふ意味てある。だから、百足蟲といふクリーオール語は、三通りに飜譯することが出來る、――『みんな足の蟲』或は『裸の足のある蟲』或は肯定の旨い皮肉て『足の無い蟲』

二

百足蟲が鼓吹する彼の恐怖心の祕密は何てあるか？……この動物が有毒てあるといふ我我の知識には極仄かな關係しか有つて居ない。……それに咬まれた結果は一時其處が膨れて暫く熱をもつといふに過ぎぬ。――その外貌てこれと同じ嫌惡の念を起こすことの無い他の熱帶の昆蟲並びに爬蟲が咬むよりも、怖ろしさは少いのてある。そして有毒な動物の姿は常に必らずしも醜惡な姿ては無い。蛇は金屬性の色を有つてゐて人目を惹くと共に、

形が優美である。――袋蜘蛛即ちマトゥートゥー・ファレーズには幾何學的な美がある。玉細工人は、いつの時代に於ても、金や寶石に、蛇の優しさを模して、稀に見る巧妙を示し來たつて居る。――王侯と雖も金剛石の蜘蛛を着けることを蔑すみはせぬであらう。然し、どんな藝術が百足蟲の形態を利用して成功を博し得たか。あれは絕對に嫌惡を催さす形態である――半出來の骸骨の姿である。――或る古い爬蟲の脊骨が、その肋骨の破片で這うて、動いて居るのだと思はせる形である。

他の生き物で、百足蟲を見て起こる感情――烈しい嫌惡と特別な恐怖――と丁度同じ感情を起こすものは一つも無い。諸君は百足蟲を目にすると、直ぐそれを殺すのを絕對に必要と感ずる。そんな生物が家の中に存在して居ると知つて居る間は、家の中に平和を見出す事が出來ぬ。恐らくは、蛇が入つて來ても、それ程諸君に不快に感じさせ嫌惡の念を抱かせはせぬであらう。それでこの嫌惡の理由の全部を說明する事は容易では無い。固よりのこと、その形だけでも、それに幾らかの關係はある。――それは殆ど自然の法則から離れて居るやうに思へる形だからである。が、その動物が動いて居るのを諸君が見る時だけに諸君が經驗する、あの感銘全部は、形だけが起こしはせぬ。恐らくは、百足蟲の眞の恐怖は、その運動の――生きた物が後から後からと追ひかけて、互に嚙み合うて居る鎖のや

うな、種々なそして複雑な運動の——奇怪さに基づいて居るに相違無い。腐れたものが突然ウヂャウヂャ出て來るのを見た時のやうに、それには人をして覺えず身を跳ね返らせるところがある。それはごちやごちやしたものである——半分しか見させぬやうにする程早く、縮んだり伸びたり波うつたりの一つながりである。また、絶えず姿を見えなくしようとするやうに思へるから、そして、一瞬間でもその行衛を見失ふといふことは、そのつぎの瞬間に諸君の身の上に——恐らくは皮膚と衣服との間に——それを見出すといふ頗る不快な機會がそれに籠もつて居るから、それて人に恐慌を覺えしめるのである。

だがそれが全部では無い。——百足蟲が起こす感じはまだもつと複雑なもので——この動物の眼に見えて居る構造ほどに複雑なもので——ある。といふのは、追跡中——退却中か攻撃中か、隱れようとして居る時か逃げようとして居る時か、を問はず——それは本能以上と思へる或る物を現はすからである。打算と狡猾とがある、——惡意ある智慧といつたやうなものがあるのである。それは欺くことを、嚇すことを、知つて居る。——伴ることに驚く許り巧妙である。——忌ま忌ましい手品師である。……

三

朝食後自分は部屋を出ようとすると、木盆に載せて食物を二階へ持つて來て呉れるギクトアールが、顚狂な聲で叫ぶ、——『ガーデ、ミシエ！ニ　ベート・エ・ピエ　アッスード　ウー！』（千足の蟲があなたの背中に居ます！）

上衣を脱いて、自分は床へ投げつける。——その下女は、百足蟲が神經的に恐ろしいのて、椅子の上へあがる。ところが、自分の上衣には何も見えぬ。——自分はその襟を捉へて、頗る注意して廻はして見る——何も居らぬ。突然、その下女がまた叫ぶ。その頭が自分の手のつい横に見えるのてある。——忌ま忌ましい、其奴上衣の或る縦襞に隱れてゐたのてある。も少して咬まれる處を、いち早く自分は上衣を落とす。直ぐとその百足蟲は見えなくなる。そこて自分はその上衣を一隅捉へて、頗る早く裏返す。と同じ早さに百足蟲は、反對の方向に衣服の上を走つて、またその下へ隱れる。その時始めてそれを充分に見た。長さ一尺近くあるやうてある、——衣物の黒い地を下にして、緑がかつた黄な色をして居る——脚は淡紅て、頭は菫色てある。——確に、若いものてある。……自分は更にま

た上衣を裏返す。前と同じ忌ま忌ましい動作を遣る。其奴が長くなつたり短くなつたりする時、蒼黑い波動がその全身に傳はる。――走つて居る間は、その恰好は半分しか明瞭には見えぬ。その脚の狼狽がしかと認められるのは、上衣の上を廻つて下へ入らうとする時、半ば立ち停まる時だけてある。充分に人目に見えて居る時には、目に留まらぬ早さで――震動の如くに――動く。――その身體のあたりに淡紅い霧のやうなものがかかつて居るのが、――廻轉して居る圓鋸の緣に見える蒸氣のやうな暈へ、指を向けようとは思はぬやうに、それへ指を向けようとは能う思へぬ或る物が――見えるだけである。更に二度も自分は上衣を返し、裏返しするが、結果は同じである。――自分が手を引込めるまでは、自分の手の方へいつも走つて來る、ことを自分は認める。其奴伴擊を試みるのである。

自分は洋杖で上衣の一部分を擡げ、つぎにまた他の部分を擡げる。と、片方の袖の下に其奴が凹つて居るのが不意に目に附く。――如何にも小ささうだ!――どうしてつい先刻あんなに大きく見えたらう?……が、其奴をたたき得ぬうちに、上衣の上をまたチラチラと走つて、また消え失せた。そして其奴には身を大きくする――意の儘にその姿の醜さを膨らませる――力を有つて居ることを自分は發見する。攻擊に向ふ時にはいつも身を大きくするから。……

拂ひ落とすことは非常に困難なやうである。隱れ潜むべき皺や襞を發見する驚く可き活動と狡猾とを彼は示す。ポケットの中にある色んな品物を毀す危險を冒してまて、自分は上衣を踏みつける。――それから其奴は死んで居らうと期待して上衣を持ち上げる。ところが、今までに無く大きくまた惡意ありげになつて何處からか突然飛び出る――ポタと床へ落ちて、自分の足を攻撃する。逆襲をする！のである。自分は洋杖て打つが、當たらぬ。壁の腰板と床との間の角へ退却して、それに沿うて汽車のやうに早く走る――二突き三突きしたが、巧に身をかはす――扉の縁に達する――蝶番ひの裏へ滑り出て、階段の壁の上を走り始める。其處に居た黒人下男の手が叩き殺す。

――『いつも頭をたたくのです』と、その下男が自分に言ふ、『決して尾を踏んではいけません。……これは小さな奴てす。大きな奴になると、殺し方を知つておいてにならぬと、あなたをこはがらせます』

……自分は鋏てその屍骸を拾ひ上げる。今は縮かまつて居るから恐ろしさうには見えぬ。――長さやつと八吋ぐらゐ――厚紙ほどの薄さて――それほどの重みもないやうてある。實質は少しも無い。重さは少しも無い。――ただの見掛けて、假面て、欺瞞てある。……が、つい先刻、それを大きくならせまたそれを動かした、妖しい、狡猾な、手品使ひ的な

或る物を憶ひ出すと、自分は、或る野蠻人と同樣に、化物が棲まつて居る動物の姿がある、と信じさせられさうな氣がする。……

四

『思想の古い暗い下水に今なほ生きて潛んで居る何か或る物が――何かの頑迷が、何かの偏見が――道徳界に於て、それを百足蟲に比へる事の出來る何か或る物が――あるか』
『實際、僕には分からぬ』と、自分がこの問をかけた友が答へた。『が、似た物を探すなら、植物界へ下つて行きさへすれば宜い。君はこんなものを見たことがあるか』と言ひ足して、抽斗を開いて、其處から何だか嫌なものを取り出した。それは、友がその手で握つて居ると、澤山な干からびた百足蟲の長い厚い束のやうに見えた。
『觸つて見給へ』と言つて友は、關節のある扁つたい身體と、毛の逆立つた脚との、その塊を差し出した。
『いやだ、どんなことがあらうと』と驚いてぞつとして自分は答へた。友は笑つて、その手を開いた。手を開くと、その物體は廣がつた。……

『さあ、見てみ給へ』と、友は叫ぶのであつた。
そこで見るといふと、その身體はみんな尾の處で一緒になつてゐて——太い、扁たい、環狀の一本の莖の上に一緒になつて生えて居る——植物！であつた。——『が、その實は此處にある』と友は言ひ續けて、同じ抽斗から、美しい浮彫のある、卵圓形の木の實を取り出した。家鴨の玉子ほどの大きさで、赤味がかつた色で、指物屋の手から受け取つた許りの花梨木の彫物に似て見えるやう、天然自然に如何にも見事にワニス塗りされて居るものであつた。枝葉の間でのその本來の場處にあると、澤山の百足蟲が咬み附いて居る、何か旨い物のやうな觀を呈して居るといふ。その內側に、たがやさんのやうに堅くて重い、核心があつた。が、それは、聞けば、時期が來ると、落ちて腐れて土になるといふ。その美しい殼はいつも完全に殘つて居るけれども。
黑人はこれをココ・マカクと呼んで居る。

自分の下女

一

自分はシリリアに時計の時間を數へることが出來ぬ。――數へようとして見たが、自分等二人とも堪忍袋の緒が切れさうになつた。シリリアは、いつか時間を言ふことが出來るやう覺えられると、今なほ信じて居る。――自分は、決して出來なからうと、確信して居る。彼女は言ふ、――『ミシエ　レーズエ　パ　アイアン　プー　モアン。セ　ミニット　カ　フーテ　モアン　ヨン　トラヴィル！』――時は彼女に骨は折れぬ。が、分は恐ろしく面倒な！のである。それにも拘らず、シリリアは太陽同様に時間嚴守てある。――彼女はいつも自分の珈琲と蕃茘枝の實一切れとを朝の正五時に持つて來る。彼女の時計はカブリット・ボアなのてある　あの大蟋蟀は、彼女は言ふ、四時半に啼き止む。その歌が歇むので眼を覺ますのてある。……

――『ボンジユー、ミシエ。クーマン　ウー　パツセ　ラヌイツト？』（お早う。昨晩はどうおすごしで？）『有難う。能う休んだよ』――『美しい天氣で御座いますよ。旦那さん濱へお出でにならうとお思ひなら、水浴タヲルが用意してあります』――『結構！シリリア。行かう』……これが二人の朝のおきまりの會話である。

　誰れも十一時かそこいらより前に朝食を攝るものは無い。が、早朝の海浴後には、何か知ら一寸飮食しなければ、少々空腹を感じがちである。シリリアは自分が濱から歸ると、何か用意して居る――爽かなココア水一と罎か、ココヤージユか、マビヤージユか、バヴロアーズか。

　そのうち自分はココヤージユが一番好きだ。シリリアは綠色の椰子の實を一つ取つて、穴をあけるやうにその一端を削いて、それからその乳光色の水をどんぶりの中へ注ぎ入れ、それへ新鮮な玉子一つと、和蘭ジン少しと、擦つた肉豆蔻少しと、砂糖を澤山に入れる。それからその混合物を泡の立つまでバトン・レレで攪き立てる。バトン・レレはクリーオールのどんな家庭にも無くてはならぬ物品である。それは、輻のやうに直角に突き出て居る枝の切り殘しの輪生體を一方の端に殘すやうに、若木から切つた、太い箸である。――その幹を兩手で挾んで揉み廻はすと、切り殘しのその枝が瞬時にその飮料を泡立たせる。

マビヤージュはこれよりは旨く無い。が、より貧しい社會では普通の朝の飲料である。白ラム酒少量と、物の根から製した、苦い、土産のマビといふビール一罎と、から造る。マビの味は、糖蜜に水を割つて、規那の皮少し入れて風味を附けたもののやうだと、言ふほか言ひやうが無い。

バヴロアーズは、新しい牛乳、砂糖、和蘭ジンかラム酒か少々、——それを、細かな濃い泡が立つまで、バトン・レレて混ぜたものである。ココヤージュのつぎには、朝飲む飲料としては、これが一番好いと自分は思ふ。が、こんな調合物には酒精は極少し使用しなければならぬ。日中の食事のつい前になつて、初めて強い興奮物を——ヨン　ティ　ポンシュ——砂糖か糖蜜かを澤山加へて甘くした、水割りのラム酒を——攝ることを敢てし得るのである。

スークルといふ語は——砂糖がなほその主産物であるのに——マルティニークでは稀にしか使用せぬ。——ドゥー即ち『甘味』といふ語を普通其代はりに使用する。が、ドゥーの意味する範圍は廣い。シロップでも、どんな甘味でも意味し、——重ねてドゥー ドゥーとすると、情人の意味にもなれば蕃茘枝の實の意味にもなる。蕃茘枝賣りの呼び聲は『サクイ　レ　ドゥー ドゥー？』である。黒人が食料品店（グレーシリー）へ行つて、ドゥ

ーをと言はずにシク〔スークルの訛〕をと言ふならば、それはシロップが欲しいのだと想はれまいと思つてのことである。――概して言つて、シクといふ語は、所要の砂糖の品質について言ふか、大樽入りの砂糖について言ふか、する場合だけ使ふ。ドッーは頗る顯著に家庭で消費される。新鮮な牛乳に、英國製ポーターに、ビールに、麝葡萄酒に――砂糖を入れる。――色んな野菜を、例へば豌豆などを、砂糖で料理する。それからみんな砂糖水とドッロー・パンとが殊に好きなやうである。ドッロー・パンといふは、麵麭を水で煮て、濾して砂糖を交ぜて、肉桂で風味を添へたものである。外國人は腹も損ねずに斯んな甘い物に慣れて來る。北の方の國でなら、その結果は多分少くとも肝臟病に罹ることであらう。が、普通獸肉よりも鹽魚や果物を好む熱帶では、砂糖か砂糖蜜かを盛んに使用するのは確に身體の利益（ため）になるやうである。

……シリリアは自分のココヤージュをつくり、水浴タヲルを淡水でゆすいでしまふと、市場へ行く支度をしてゐて、朝食に何が食べたいかと自分に尋ねる。『クリーオールのものなら何でもいいよ、シリリア。――おれはこの國ではどんな物を食べるのか知りたいから』この點に於て、彼女はいつも自分の氣に入るやうにと最善の力を盡くす――殆ど毎日のやうに、何かしら珍らしい馳走を、果物か魚かの方面に、何か珍奇なものを、自分に紹

介する。

二

シリリアはマンジエ・クレオール〔クリーオール食物〕の範圍と性質とを能く自分に了解させた。だから一年間の觀察後、それに就いて敢て少しく書くことが出來るのである。マンジエ・クレオールと自分が言ふのは、この本來の人達の、有色人の、食物だけを指して言ふのである。富裕な白人の小階級の料理は主として歐羅巴式なので、地方的趣味を缺いて居る。——が然し、その料理法は巴里風では無く、寧ろ田舍風で——北部佛蘭西のでは無く、南部佛蘭西のである、と述べてよからう。

獸肉は、新鮮なのも鹽漬のも、貧乏人階級の滋養には餘り入つて來ない。これは、疑も無く、一つには、あらゆる獸肉が高價だからである。が、其上に、生得果實や魚を好むのにも基づく。新しい獸肉を買ひ求めると、それは大抵はスチュー即ちドーブをつくる爲めである。——恐らくは鹽肉の方がより普通であらう。それから、地造りの野菜とマニオク粉とを麵麭よりも好く。普通なスープで、クリーオール料理に特有なのは、二種しか無い

――カラルー、即ちルイジアナ州のそれと殆ど全く同一な、ゴンボ・スープと、スープ・ダビタン即ち『田舍汁』とてある。これは、やまいも、胡蘿蔔、バナナ、蕪菁、シユー・カライブ、南瓜、鹽豚、唐辛子――これをみんな一緒に煮出してつくるのである。――金曜日には、そのうち鹽肉だけを拔きにする。

此處の人達の主たる食料は、眞の肉は、鹽鱈で、これを種々樣々に料理する。一番普通なそして一番お粗末なその料理は『亂暴』(フエロース)といふ名のものである。ところが少しも不味なものでは無い。鱈をただ油で揚げて、酢、油、唐辛子で喰べるのである。――マニオクの粉とアヷカードとは、必らず無くてはならぬ添へ物と考へられて居る。このマニオクの粉は、殆どあらゆるクリーオール食物の一部分を成して居るものであるから、それに關して此處で一言するのは失當てはあるまい。

この名を聞いたことがある人は誰れも、マニオクの根は本來有毒であること、それから、粉を造るまでに、その毒素を壓縮と乾燥とに依つて取り除かねばならぬこと、を多分知つて居る。マニオク粉の良いのは、極粗惡なオートミールの觀を呈して居る。そして恐らくは、それと同樣に滋養になるものである。値段が麵麭と同じ時ても、この方を皆好むので、これが、此處の人々の麥粉になつて居るのである。て、此處の人達はフアリーヌ(粉)とい

ふ語をただマニオクの粉だけ意味するやうに使用して居る。小麥粉のことを言ふ時には、いつも前へ形容詞を置いて『佛蘭西粉』（ファリーヌ・フーアンス）と言ふ。或る麥粉を地方新聞紙上でちやんと亞米利加ものと廣告してゐても、外國のものは何でも佛蘭西と呼ぶ此處の人達には、それは矢張りファリーヌ・フーアンスである。亞米利加ビールはビエ・フーアンス。亞米利加の鑵詰豌豆はティ・ポア・フーアンス。佛蘭西語が話せる白人外國人は誰れでもヨン　ベケ・フーアンスである。

普通はマニオク粉は料理[註]せずに食べる。ただ皿の中へ入れて、水を少し加へて匙で掻き交ぜ、濃い糊のやうなねばねばな捏物（こねもの）にする。濃ければ濃いほど上等である。――ドゥロー　パッセ　ファリーヌ（マニオク粉よりも水が多い）は、非常に貧乏な人の境遇を述べる言葉である。魚を副へて出さぬ時には、この粉は時折、水と精製糖蜜（シロプ・バトリー）とが加へてある。この調理は頗る旨いもので、クースカエと呼ばれて居る。糖蜜及び牛乳で煮て、一種のプディングにする方法もある。之をマテテと呼ぶ。子供等は大いに之

註　麥粉三分マニオク粉一分で麵麭を造らうとした記錄がある。結果は優秀であつた。が、マニオク麵麭を市場へ出す眞面目な努力はつひぞされなかつた。

を好む。このクースカエといふ名、マテテといふ名は、共にカリブ起原のものだと言はれて居る。粉そのものをマニオクの根から造る技術は、これは確にカリブ人から繼承したもので、カリブ人は佛領西印度のクリーオール土語へ、珍らしい語を多く遺して居る。

マニオク粉をそれと一緒にして食べる鱈の料理法全體のうちで、自分はラモリ・ブイリが一番好きであつた。過度の鹽氣が脱（ぬ）けるほど長い間水に浸けて置いてから、魚を素煮にして、それから澤山のオリーヴ油と唐辛子とて調理するのてある。自分の家を有つてゐない、又は少くとも料理場を有つて居ない人達は、料理の出來て居る食物を、マシヤンヌラバコットから買ふ事が出來る。これはマカダム（飯附きのシチュー鱈）と、前記の二種とを、專業にやつて居るやうである。が、有色人の家族は何處でも時々次記のやうな馳走をする。——ラモリ・オー・レート、これは馬鈴薯と牛乳の鱈スチュー。ラモリ・オー・グラッタン、これは鱈の骨を取つて、トーストの屑と一緒に搗き交ぜ、バタ、葱、胡椒と一緒に煮込んでどろどろにしたもの。——クーブーヨン・ラモリ、これはバタと油とでの鱈のスチュー。——バシヤメル、これは骨を取つた鱈を、馬鈴薯、唐辛子、油、蒜（にんにく）、バタてスチューにしたもの。

唐辛子は、料理したものにも、生（なま）なものにも、斯んな料理總てに最も須要な附き物て。

どんな品物も唐辛子を澤山に入れて——アン　ピール、アン　ピール　ピマンて——料理する。色々と種類がある中に、自分は次記のものだけ掲げることが出來る。——ピマン・カフエー、卽ち『珈琲唐辛子』、リベリア珈琲の粒と殆ど同じ恰好であるが、も少し大きくて、一端が菫色を帶びた紅のもの。ピマン・ズーエゾー卽ち鳥唐辛子、小さくて長くて深紅色のもの。——それからピマン・カブレッス、非常に大きくて、一端は尖つて居て、他の一端は袋の恰好したもの。熟すると非常に濃い赤になる、そして非常に強いもので、部屋でその莢を破つただけで、部屋中がすぐに激しい臭ひになるぐらゐである。唐辛子を食ふことに、墨其古人ほどに訓練されて居ないと、初めてカブレッスに遭遇したことを諸君は乾度後悔するであらう。

シリリアがこの猛烈な植物についての或る話を自分にして呉れた。

三

ピメント物語（ズイストゥーエ　ピマン）

或る時、大變子供の澤山にあるお母さんがありました。そして或る日のこと、その子供に食べさせるものが何もありませんでした。その朝そのお母さんは大變早く起きたのでありますが、世にも一スーすら有りませんでした。どうしていいか分かりませんでした。心配の餘り氣が顚倒するほどでありました。そのお母さんは或る女友達の家へ行つて、自分の苦勞を話しました。その友達はマニオクの粉を三ショピーヌ（三パイント）與れました。それから、もう一人の女友達の處へ行きますと、お盆に一パイ唐辛子を與れました。その友達は、そのお盆の唐辛子をお賣りなさい、――マニオクの粉があることだから、賣つたら鱈を少し買ふことが出來ませう、と言ひました。心の良いそのおかみさんは『ありがたう、マクーメ』と言つて――お別かれをして、自分の家へ歸りました。

歸るなり直ぐと火をおこして、カナリ（土製の壺）に水を一パイ入れてその火に掛けて沸かしました。それから唐辛子をみんな碎いて、火の上のカナリの中へ入れました。

カナリが沸き立つのを見ると、お母さんは直ぐとパトン・レレを取り上げて　その唐辛子を搔き混ぜました。そしてピメント・カラルーをつくりました。そのピメント・カラルーが旨く煮えますと、お母さんは子供達のお皿を一つ一つ取つて、冷ます爲めにその皿へカラルーを入れました。自分の御亭主へのも冷ましに、自分のも冷ましに。そのカラルーが冷えきりますと、その皿の一つ一つにマニオクの粉を少し入れました。それからお母さんは食べに來いと子供達を呼びました。子供達はみんな來て、食卓に對ひました。

御亭主は初めの一口食べるなり、止めて叫びました、――『アイ！ウーアイル！おまへこりや辛い』おかみさんは御亭主に答へました、『ウーアイル！お前さん、こりや辛い』子供達はみんな叫びました、『ウーアイル！ママー、辛い』そのお母さんは答へました、『ウーアイル！子供達！辛い』……みんな走つて出て、家を空にしました。そして口を浸さうと、川の中へ轉がり落ちました。その子供達は、どんどん水を呑んで呑んで、到頭溺れ死にました。殘つたものはそのお母さんとお父さんだけでありました。二人は川岸に居て、泣きました。丁度その時私は其處を通つたのであります。――私は二人に『何で悲しんで居るのか』と尋ねました。

するとその男が立ち上がつて、私をとんと蹴つて、川の向う側へ飛ばしました。それで、御覧のとほり、そのお話をしに、直ぐ此處へ參つたのであります。……

〔原著には、クリーオール語で此の說話を載せ、その逐字譯を英語で揭げてあるから、譯者の在來の方法では、クリーオール文を假名で併せ揭ぐべきであるが、餘りに長くて煩はしいからそれは省く事にした〕

四

……シリリアがブラース　ドゥ　フォールから毎日持つて歸る魚の、詳しい敍述といつたやうなものは、自分には試みるのは無益である。種類が無限のやうに思はれるからである。が然し、記載する價値がある、奇妙な事實一つを知つた。それは、概して言つて、魚の色が美しければ美しいほど、不味で、そんなのは貧乏人だけが求める、といふことである。赤と黃との鮮かな帶のやうな筋のある、黑いペロケ。靑と黑とのシラルジアン。黃と黑とのバタート。磨いた花崗岩のやうに見えるモリング。石竹色と黃とのスーリ。朱色のグーオ・ズィ。薔薇色のサード。赤いボン・ディエ・マニエ・モアン（『善なる神が私に觸られた』）――これには大きな指の痕のやうな、妙な痕が二つある。その他、鋼色からして菫色に至るまで濃淡の度の異ふ、バラウーとか、コンリウーとかいふ、色んな眞つ靑

な魚――斯んなのは富裕な人の食卓では滅多に見ない。固より、これには、またあらゆる概則には、例外がある。殊に、美しい黑の斑點のある、石竹色のクーロンネ、これは一斤十四錢以下では決して賣らぬ、レッドフィッシュに似た魚であるが――それと、眞珠母の綠と紫との、變化する絶妙な光を有つて居るゾルフィ、――がさうである。が然し、ゾルフィは、ベクンヌのやうに、たまたま毒を有つて居るといふことである。それから、本來は有毒では無いが、危險だといつも考へられて居る魚が澤山ある。教父デュテルトルの時分には、こんな魚は、雨が海へ流したマンチニール樹〔有毒な木〕の實を食ふ、と信ぜられて居つた。――今日では船の銅板に附いて居る茗荷兒(こやすがひ)を食ふから、時折有毒なものになるのだ、と一般に想像されて居る。タザール、ルーヌ、カピテーヌ、ドラード、ペロケ、クーリウー、コングル、種々な蟹、それからトンヌすら――いづれも極新鮮でなければ危險である。ほん少し腐敗しても、一種不可思議な毒を生ずるやうに思はれるのである。ベクンヌやドラードが時折起こす中毒に關して珍らしい或る現象は、初期の徴候たる恐ろしい腹痛、燃えるやうな熱、むづがゆさ、人事不省を凌いで、幸に生き殘る人達の手足から、皮が剝げ落ちることである。幸にもそんな事故は、市場の檢査が適當に行はれるやうになつてからは、甚だ稀である。ルフッ博士時分には極めて普通で――何處で捕つたのか、水を離れて

どの位經つたのか、それを完全に確めないでは、生魚は食はうとはせぬ、と彼が言うて居る程普通て——あつたやうに思はれる。

貧乏人は品質の好いのが安價ては得られない時だけ、鮮かな色をした魚を買ひ求める。が、漁獲は每度非常に澤山て、その半分を海へ投げ返さなければならぬほどである。この濕氣のある暑い空氣の中ては、魚は極めて迅く腐敗する。近距離てもそれを內地へ運送するのは不可能てある。海岸の住民だけが、鮮魚を——少くとも、海魚を——味ふことが出來るのてある。

當然のこと、勞働者階級ては、品質といふ問題は、魚市場が異常に品物澤山て無いならば、量と實質といふ問題ほど重要ては無い。鮮魚のうちて、一番人の好くのはトンヌて、これはその肉が牛肉のやうにしつかりした、青味のある灰色をした大きな魚てある。人が好む順番て言つてつぎに來るのが飛魚（ヴラン）て、時に一錢て四尾といふほど廉い事がある。そのつぎがラムビ郞ちシー。スネールて、非常に目の詰んだ、滋養になる肉を有つて居る。——それからサディーヌ部類の、白味を帶びた小さな魚。——それから、値段の順位て言ふとクーリウー、バラウー、等々の、青い色をした魚。——最後に鱶て、これは普通一斤二錢て賣る。大きな鱶は食へない。肉が堅すぎる。が、若い鱶は實に美味てある。

シリリアは或る朝一切れ自分に料理して呉れた。中々好い味で、殆ど犢の肉のやうな風味であつた。

賣りに出す極めて小さな魚の量は驚くべきものである。勞働者の一家族は十スーで立派な魚肉馳走が有てる。サディーヌ一斤は二スーより高價なことは無い。マニオクの粉一パイントは同價で求められる。そして大きなアヷカド一つは一スーで賣つて呉れるからである。これだけあればどんな人間にも一人には充分以上の食物である。この費用を倍にすれば、それに比例して量が增すことだから——四五人には充分である。サディーヌは炭火の上で炙つて、檸檬と唐辛子と葫とのソースで味を附ける。サディーヌが無い時も、クーリウーが澤山あるに極つて居る。長さ、人間の小指ほどの小さなクーリウーである。これはサディーヌよりも美味で、値段が倍である。四スーがとこクーリウーを買へば、一家の者が素敵なブラッフが有てる。ブラッフをつくるには水煮をして、唐辛子、檸檬、藥味、葱、葫で調理する。が、油もバタも用ひぬ。クーリウーが最上のブラッフになることを經驗が敎へたのである。そしてブラッフは他の魚で調理することは滅多に無い。

五

貧乏人のお祭日の御馳走が四種ある。――マニクー、ヱル・パルミスト、ザンドゥイユ、ブール・エピ・ディリ、[註]である。

註　自分はシャットといふ内證の品を記載しなければならぬ。言ふまでも無く、猫は賣りはしない、盜むのである。尤も、貧乏人の一部のものだけ猫を食ふ。が、サン　ピエールでは猫が稀になつて居るほど、彼等は猫を多く食ふ。その習慣は全く迷信的である。猫を七度食べるか、又は猫を七匹食べるかすると、女魔法遣、妖術者或はクインボアジュールが終に何等の危害を加へ得ない、と言はれて居る。そしてその折の食事が完全に效驗があるやうに、クリスマスの前夜に猫を食はなければならぬ、といふ。……「七」といふ神祕な數字は、別な、そしてもつと善いクリーオール迷信にも入つて居る。――蛇を殺せば七大罪惡が許される。ウー　ケ　ニ　セツト　グラン　ペツシエ　エツフアセ。

マニクーといふは、小さな勇敢な有袋動物で、マルティニークのこもりねずみといつても宜いものである。敗けはするが、蛇と鬪ふ。そして野鼠には大敵である。市場では、一番廉い時でも、一頭二フラン半はする。一般に、料理する前に鹽に漬ける。

キャベツ椰子の頭には、ヱル・パーミストと稱する、大きな地蟲が、卽ち昆蟲の幼蟲が――殊に、その玉菜形のものを伐つて、その木が枯れだしてから――見つかる。それは或る甲蟲のうじで、クリーオールのレフアン卽ち『象』といふその名を思ひ附かせたほどの、それに似た形の鼻先きを有つて居る。この蟲はブラース ドッ フォールで、一匹二スーで賣る。これを串ざしにして、生きながら炙る。はたんきやうのやうな味だといふ。これは事實か、又はさう思ふのか、自分は檢べることをようせずに居る。そしてこの野蠻な食物を好むと自白する白人クリーオールは少い、と自分は言ふことを喜ぶ。

ザン ドッイユは、豚の軟皮で造つた美味な腸詰で――日曜日にだけ市場で見られる。一個一フラン半の値てある。之を造るのが巧妙な爲め、マルティニーク中にその評判のきこえて居る女が幾人も居る。自分は試して見たが、あの有名な倫敦の『ポーク・パイ』よりまづくは無かつた。ラマンタンのが此の島中で一等だといふ評判である。

だが、ブール・エビ・ディリが確にこの四つのうちで一番人が好む料理である。同時にまた一番高價である。だから、貧乏人は稀にしか之を求めることが出來ぬ。ルイジアナでは、これと殆ど同じ料理をジムバラヤと呼んで居る。飯を副へての料理した雛鶏である。マルティニークの者どもは、これを非常な美味と思つてゐて、食物に八釜しい人、或は中

中滿足をしない人は、『サ　ウー　レ　ンコ――プール・エピ・ディリ？』（これ以上のものが何で欲しからう！え、おい！チキン・ライスだよ）と、いふ單簡な問て叱られる。いけず子供は、プール・エピ・ディリを食はしてやると約束されて、本當の善い行狀になる。――

『アイ！シエ、ボ　ドゥー　ドゥー！
ドゥー　ドゥー　バ　ウー　プール・エピ・ディリ。
アイ！シエ、ボ　ドゥー　ドゥー　！』……
（あゝ、善い子だね！可愛のおつかさんをキスなさい！――おつかさんはお前にチキン・ライスを上げるよ！――あゝ、善い子だ！おつかさんをキスなさい！）

上記の料理の成功に、米がどの位加はつて居るか、自分は言ふことが出來ぬ。が、人に好かれる上からいへば、米は一般に他の穀類よりも遙か上位に居る。少くとも需用に於て玉蜀黍の六倍てある。ディリ・ドゥーは、これは砂糖を入れて炊いた米であるが、毎日、素敵な量て賣れる、――殊に市場て、賣れる。其處では、小さな塊をバナナかカシブーの

葉に包んで、一と塊一錢に小賣りして居る。正眞正銘のライス・プディングたるディリ・オーレートもまた非常に好かれて居る。が、米が入つて居るクリーオール料理の十が一を記載しても、讀者は厭いてしまはるゝであらう。

六

誰れも彼れもアクラを食ふ。これは一切れ一錢で賣つて居る。アクラといふは小さな一種の油揚げ煎餅或はパンケーキで、これは五十も異つた品物から造ることが出來る。色んな物のうち、普通な材料はといふと、鱈、ティティリ、大豆、ブレン、シュー・カライブ、小さな黑い豌豆（ポア・ズィエ・ヌーエ、『黑い眼の豌豆』）或は車海老（アクラ・クリビイシュ）などである。胡蘿蔔、バナナ、雛鷄、バームカベージ、などで造つて、甘味を附けたのは、マリナードと呼んで居る。初めて之に接した時には、こんな暑い氣候の處では、やや油つこいやうに思へる。が、熱帶の事情に慣れるといふと、油つこい食物の或る一定の量が健康に好く且つ必要である、ことを知るやうになる。

人々が好む野菜のうちで、第一番は大豆である。赤大豆の方を好く。が、煮た白大豆の

酢と油澤山とて冷たく調理したのは、好ましいサラダになる。好みの順序でつぎに位するのは、シュー・カライブ、バタート。ズィグナーム、カマニオック、クースクーシュである。何れも巨大な根で——熱帯國の眞の馬鈴薯である。カマニオックは、シュー・カライブよりも上等で、煮るとあれよりも白く且つ柔らかい。外見はマニオクの根に頗る能く似て居るが、毒素は少しも無い。クースクーシュが最上等である。煮ると粉がきらきら光る愛蘭土最上の馬鈴薯もこれ程上等では無い。こんな根物は大抵は練物といつたやうなもので、ミガンと稱するもの、に調理する事が出來る。シュー・カライブで造つた、ミガン・シュー。山薯で造つた、ミガン・ズィグナーム。ミガン・クースクーシュ等々である。此最後のものの場合には、蟹か小蝦かを普通はそのミガンに調理する。此處の人はトゥールルー、土語ではトゥールルールーといふ、薔薇色の小さな蟹を特に好む。ミガンはまた、麵麭の實でも造る。非常に大きなバナナ又はプランテンを鱈と一緒に、ドーブ卽ち肉シチューと一緒に、それから鷄卵と一緒に煮る。麵麭の實は立派に野菜の代理をする。充分に能く料理しなければならぬ。すると甘味の無い馬鈴薯の味がする。フリュー・フーイット・ア・パン卽ち『麵麭の實の花』と稱するものは——これは外面はピンの頭を植ゑたやうに密に並んだ小さな種に蔽はれてゐて、內部に非常に彈性に富んだ、抵抗のある髓を有つ

てゐる、莢形の、長い、堅い植物であるが――砂糖掛け（キャンディ）をすると、頗る美味な糖菓（スヰート・ミート）になる。

七

バナナの消費は素敵である。野菜よりもバナナを餘計に食べる。で、バナナの木は年毎に餘計に栽培されつつある。フムボルトはずつと前にそれに注意を呼んで、小麥を植ゑた一英町はたつた三人の生命しか支へ得ないが、バナナの木を植ゑた一英町は五十人を養ふと計算したが、バナナのその經濟的價値を黑人は本能的に認めて居るやうである。

一般人の考では、バナナとプランテンとが果實中で第一位を占めて居る。――種々樣々に調理され、また殆どあらゆる種類の獸肉若しくは魚肉と一緒に皿に盛られる。が然し、我々が合衆國でバナナと呼ぶものは、マルティニークではバナナとは呼ばずに、フイッグ（フイーグ）と呼んで居る。プランテンは『バナーヌ』と呼ばれて居るやうである。時々我々は通俗な呼び名に驚かされる。シューといふは一種の根（シュー・カライブ）を意味することもあれば、キャベツ椰子の頭を意味することもある。『ヤコー』は或る魚を意味

する事もある。『カバーヌ』は船室(ケビン)では無くて、床(ベット)である。クリケットは蟋蟀(クリケット)では無くて、蛙である。そして少くとも、他に五十語がこれと同様に人欺しの使用法を有つて居る。本當のフイッグのことを――乾無花果のことを――言はうと思へば、『フイーグ・フーアンス』(佛蘭西フイッグ)と言はなければならぬ。でなければ誰れも了解せぬであらう。此處にはバナナで、『フイーグ』と名づけられて居るものが幾種もある。――最も普通なのが四種ある。フイーグ・バナーヌ、これはプランテンだらう、と自分は思ふ。フイーグ・マクーアンガ、これは野生のもので、皮は赤い。フイーグ・ポンム(林檎バナナ)これは大きくまた黄色である。それからティ・フイーグ・デッセ(小さなデザート・バナナ)これはサン ピエールでは何處の食卓にも見られるものである。これは小さくて、甘くて他の果物に對して何の食慾も無い折にでも、いつも口に適するものである。

多くの熱帶果實に慣れるまでには、或は、少くともそれを食べようといふ氣になると共に辛抱が出來るまでには、暫くの時間が要(い)る。大多數は、風味は頗る良いが、腹が立つ程石のやうである。例へば、熟したグアヴ、櫻、バルバディーヌの如きそれである。コロッソルやポム・カンネルでさへ、頗る美味な肉(パルプ)の中に包まれて居る、非常に堅い種(たね)の大きな塊に外ならぬものである。サポタ卽ちサポディラは、石のやうなといふ特徴が少いから、

誰れも直ぐと好むやうになる。大きな扁たい種(たね)があるが、指爪で割ると二つに裂ける。そして白い綺麗な皮がその半分になつたものの間にある。その小さな皮、即ち表皮(ペリクル)を、それを破さずに綺麗に全部取り除けるには少々熟練が要る。それをすることは、愛情の試しになると言はれて居る。恐らくは、この一片の民間傳說は、その表皮の恰好が心臓の恰好をして居るので、思ひ附いたものであらう。可憐な有色人娘(フィーユ・ド・クール・ュール)はその愛人に尋ねる、――『エスウー　エーンマイン　モアン?――プーロッス　ティレ　ティ　ラポー・ラ　サン　カッセ・イ』（私を愛するのなら、こはさないで剝いて下さい）。その男がそれを破したら、事だ！……一番厭な果物は、ポンム・ド・アイティ即ちハイチ林檎だらう、と自分は思ふ。外觀は非常に人目を惹く。が、嘔吐を催すやうな强烈な麝香の匂と味がする。白人クリーオールで之を食ふものは殆ど無い。

　蜜柑に就いては、賞讃のほか何も言ふことが出來ぬ。が、蜜柑のやうに見えて、その實蜜柑で無く、遙かに著名な果物が幾種かある。シャデクといふがある。これは此處では周圍たつぷり三呎には生長して、淡赤い甘い肉を有つて居る。『禁ぜられた果物(フォービ・ドン・フルート)』（フーイット・デフアンドゥ）といふがある。これは蜜柑とシャデクとの雜種のやうなもので、そのどちらよりも良い。有色人どもは、この巨大な果物が、エデンであの致命的な木に生(な)つ

て居たのである、と言つて居る。セ　サ　メム　クイ　フエー　ムーヌ　カ　フエー　イシユ　コム　サ　アトッエルマン！このフーイット・デフアンドゥは實に驚くべきものである。が、初めて見た時、自分を最も驚かしたものは、ズアブリコートであつた。

――『ウー　レ　ヨン　ズアブリコート？』（杏はいかがで御座います？）と、或る日シリリアが自分に尋ねた。杏は大好きだ――二つ三つ欲しい、と自分は答へた。シリリアはびつくらした顔をしてゐたが、何も言はずに出て行つて、やがて市場から戻つて來ると、杏を二つテーブルの上へ置いて、斯う言つた、『サ　ケ　フエー　ウー　マラード　マンジエ　トッツト　サ！』（それをみんなお食べになると、病氣におなりになりますよ）。其一つの半分すら自分には食べられなかつた。皮は小豆色の林檎のやうで、赤い胡蘿蔔色の美味な硬い肉があつて、眞ん中に家鴨の玉子よりも大きく岩のやうに堅い種子があつて、どんな大きな蕪菁よりも大きなプラムを想像して見給へ。この果物は、口に味はつておいしいと同時に香氣がある。値段は大いさに應じて、一個一錢乃至四錢である。この木は西印度固有のもので、ハイチの土人はそれに關して奇妙な信仰を有つて居る。その果實は死人の滋養になるもので、どんなに飢に迫つても、靈魂の食物を奪ふ譯になるから、森の中の印度人は食物無しに居ても、決して木からその實一つ捥ぐことをしようとはせぬ、と言

ふのである。……マルティニークの有色人間には、この信仰の痕跡すら存在してゐないやうである。貧乏人仲間ではこんな果物は贅澤品である。バナナを除いては、彼等は他の果物よりもマンゴを餘計に食べる。普通のマンゴは肉のどの部分も核心へ堅く繋がつて居るから、食ふのは少々不細工である。自分一人で居る時は、誰れもそれを嚙ぢる。だが、その果物の大部分が、汚したり吸つたりせずに食べられるやうに、剝ぎ取る事の出來る厚い見事な肉を有つた、栽培されたマンゴがある。接木した變種のうちで、マングといふのは全く蜜柑ほどに美味である。恐らくは、マルティニークのマンゴの種類は、殆ど我々の桃の種類と同じぐらゐ、數が多からう。が、自分の知つて居るのは、ほんの僅である。マンゴ・バッシニャック。――マンゴ・ベッシュ（桃マンゴ）。――非常に大きくて楕圓形のマンゴ・ゴル（綠マンゴ）。――マンゴ・グレッフエ。――まん圓で小さいマンゴティーヌ。――同じくまた非常に小さくて、殆ど卵形のマンゴ・クイネット。――非常に旨いが、少し小さくて、扁つたい形のマンゴ・ズェズェ。――一つ半フランはするマンゴ・ドール（金色マンゴ）。――非常な手入れをして培養した一種のマンゴ・ラマンタン。――それから、マルティニークでさへ一個五錢で小賣りする大きな黄色い、素敵に美味なレイヌ・アメリー（卽ち、女王アメリア）。これぐらゐしか知らぬ。

八

『ウー セ ボンノム カトン？――ウー セ ズイマージュ、ノン？』（召し上(あ)がらないこと！あなたは厚紙で出來て居る人間なんですか、肖像なんですか？）シリリアは知りたいと言ふ。ところが實際は、自分は少々食ひ過ぎて居るのである。が、熱帯へ來て居る外國人は、土人のやうには物が食へぬ。それで自分の節食が驚異となるのである。北の國では、熱(カロリック)を得ん爲めに我々は隨分と物を食べる。熱帯では、身體の運動を――これは爲(す)るのが非常に困難であるが――餘程身體の運動をやる習慣を有つてゐなければ、盛んな食欲なんて以ての外である。シリリアはクリーオール食物だけて自分を暮らさせようとはしない。たまにはビステキやローストを食へと主張し、それと共に種々樣々な美味な妙なデザートで――殊に、外國人は非常に好きになる、彼(あ)のココアナットを擦つたのと砂糖蜜とて造つたケーキ（タブレット・ココ・ラペ）で――自分を誘はうと試みる。それにも拘らず、自分はシリリアの心配を鎭めるほどに食べることは出來ぬ。

充分に食べないといふことだけが彼女の自分に對する不滿では無い。自分は彼女を喫驚

せしめる事を何か知ら絶えず爲しつゝあるのてある。恐らくは、クリーオール人は生活するのに世にも最も用心深い人間てあらう。——蝙蝠傘無して日の光を浴びて歩いたり、風の流を受けて立つたりする外國人は、彼等には、驚異のそして同情の的てある。攝生のことに就いて自分が無頓着なのを見てのシリリアの不滿は、いつも『ヨ　バ　フエー　サイシ』（マルティニークてはそんなことをする者はありません）といふ繰返し句て終はる。汗が出て居るうちに顔や手を洗ふとか、散歩から歸つて來るなり帽子を脱ぐとか、沐浴後直ぐ外出するとか、自分が石鹼て顔を洗ふこととか、それが彼女には無謀な行爲なのてある。『あゝ、シリリア！何て馬鹿な！——どうしておれは石鹼て顔を洗つちやいかんのだえ？』『あなたを盲目にしますから』とシリリアは答へる。『サ　ケ　チュエ　リミエ　ズィエ　ウー』（それはあなたの眼の中の光を殺しますから）シリリアほど淸潔な人間は無い。實際、この市の人達のうちて、每日の沐浴はどんな天氣の折にも規則になつて居る。が、顔を洗ふのに石鹼を使はぬものは幾千人もある。シリリア同樣、それは『眼の光を殺す』と信じて居るからである。

或る日自分は日に照らされて長い時間散歩をして、非常に渇いて歸つて來た。水の無い沙漠て難儀をする旅行者についての古い話が、新しい意義を有つて自分の記憶へ歸つて來

たほど、――渇いてゐた。――毒熱風(シムーム)の幻が自分の前へ出て來た。その縁まで一バイに入つて居るオー・ドゥ・グーヤーヴが滲み出て居るため、露づいて冷たい、あの脣の厚い、赤い、重たいドバンヌを――あの水甕を――目にしまたそれを握つた時の嬉しさは！シリリアの言ふやうに『トゥット ギブン、全るて生きて居る』やうに思はれた。すると、突然叫び聲がして、その水壺を自分の手からシリリアが引つたくつて、『エス ウー レチューエ コ・ウー？――サン ヨーセフ！』（あなたはあなたの身體(からだ)を殺したいのですか』と、尋ねた。……一體クリーオールは、人の身に出來し得るどんな事にても、それを言ふ時に『身體(からだ)』といふ語を使用する。『身體を害ねる』『身體を疲らす』『身體を要る』『身體を埋める』等、等。――この言ひ方は、靈魂といふものを深く信じて居ることを證明しようといふ、熱心な希望にその源を發して居るのであらうか知ら、と自分は怪しむ。……それからシリリアは砂糖とラムとでポンシュを少し造つて呉れて、身體を殺さうと思はなければ、散歩した後(あと)で、生水を決して飲んではならぬと自分に話した。この事には、彼女の忠言は正しかつた。熱して居る間に冷たい物を飲む直接の結果は、冷たい汗を盛んに出すことて、そしてその時風に當たることは眞に危險である。風邪は此處ては恐(こは)がらぬ、それに風邪は稀てある。が、肋膜炎は普通て、そしてそれは身を不謹愼にも曝露する結果

のことがある。

自分は無意識な不謹愼すら、家の中で行ふ機會はあまり屢〻は無い。それは、シリリアが何處へ行つても來てゐて、何か嫌なことが自分に出來しないやうにと、いつも見張りして居るからである。彼女は料理人としてと同樣、家事管理人として驚くべきである。確に、する用事は澤山にあり、彼女の手傳ひは子供一人なのだが、それでもいつも餘暇があるやうである。その臺所裝置は簡單極つたものである。煉瓦で出來て居る炭火の爐、土器の壺（カナリ）幾つか、それに少許の焙器、これだけである。――でもこれだけで、一年の日數ほど數多い馳走を確に彼女は調理が出來るのである。自分は彼女が一時間以上カナリで忙しがつて居る處を一度も見たことが無い。それてゐて總てが完全な秩序を保つて居る。彼女は仕事をしてゐない時は、窓の處に坐つてゐて、街路の生活を見物したり――或は、彼女の言ふことが一々みんな分かるやうに思はれるほど、能く仕附けて居る小猫と遊んだり――して、頗る幸福て居る。

九

暗黑と共に此島の人達は總てその家庭へ引込む。——街路は靜かになり、一日の生活は終はりを告げる。八時までに、窓といふ窓は殆ど皆鎖ざされ、燈は消される。——九時には人達は眠つて居る。夜の集會、夜の娯樂は、稀にしか無い芝居季節と謝肉祭の頃とを除いて、全く無い。晩の訪問といふものも無い。生活の活動はその時間を殆ど太陽の出沒で計つて居る。……外國人に殘してある晩の樂みは、ただ露臺(バルコニー)かその門前で靜かに煙草をふかすことである。讀書は論外である、一つには書物が稀なから、一つには燈が惡るいから、一つには蟲がランプや蠟燭のまはりへ群らがつて來るからである。自分には幸にも、揺り椅子を置くことが出來る程の廣さのある、露臺がある。そして時々シリリアと小猫とが就床前に遣つて來て自分の相手をする。小猫は自分の膝の上へあがる。シリリアは露臺へ直かに坐る。

晴れやかな或る晩、シリリアは雲を眺めて大層面白がつて居つた。雲は高い處に浮かんでゐて、月の光がそれを霜のやうにきらきらさせてゐた。それが貿易風に推されて形を變

へると、シリリアはそれに不思議な物を――羊や帆のある船や、牛や人間の顔や、恐らくはゾンビすらも――發見するやうてあつた。

『トラヴィユ　ボン・ディエ　ジョリ――アン?』（善なる神様のお仕事は美しいてはありませんか?）と、終に彼女は口を切つた。……

『マダム　レミといふ人がありました、サン　ピエールて一番美しい肩掛(フーラール)やマドラスを賣る人てありました。その人はいつも雲を眺めました。その肩掛に、雲の模様を描くのでした。美しい雲や美しい虹を見ると、直ぐとその圖を繪具てかいて、それを佛蘭西へ送つて、丁度そのとほりに肩掛をつくつて貰ふのてした。……あの人が死んてからは、昔のやうな美しい肩掛は御覧になられません』……

『お前、私(わし)の望遠鏡て月を見てみたくは無いか、シリリア』と自分は問ふ。『持つて來よう』

『あゝ、いゝえ、いゝえ』と、喫驚したやうに、彼女は答へた。

『どうして?』

『アー!フォー　バ　ガデ　バッガイ　ボン・ディエ　コム　サ!』（善なる神様のものをそんな風にして見るのは善くありません）

自分は、言ひ張りはしなかつた。暫く默つてゐてから、シリリアは、また、言葉を續けた。――

『が、然し私はお日樣とお月樣とが、或る時喧嘩なさるのを見ました。あれは、日蝕とか人が言ふものでした、――日蝕つて言ふのですかね？……長い間喧嘩されました。私は見て居りました。瀬戸の大皿に水一バイ入れて地面へ置いて、その水に映つて居るのを見ました。お月樣の方が、お日樣よりも强いんですね！――さうです、お日樣が、お月樣の來られるのに後退りされなければなりませんのでした。……どうしてあんなに喧嘩なさるのでせう？』

『喧嘩しはせぬよ、シリリア』

『いゝえ、されます。私はそれを見たのですもの！……お月樣の方が、お日樣より餘つ程强う御座います！』

限てのこの論證に反對しようとは自分はしなかつた。シリリアは相變はらず美しい雲を眺めて居つた。軈て斯う言つた、――

『あの雲へ登れるほどに長い梯子を造つて、何て出來て居るか、御覽になりたくはありませんか？』

『なんだい、シリリア。あれはただ水蒸氣だよ――霧(ブルーム)だよ。おれは雲の中に居たことがある』

彼女は驚いて自分を眺めた。そして一寸默つてゐた後、彼女に出來るとは想つてゐなかつた皮肉を以つて、斯う尋ねた。

『それでは旦那さんは善な神樣で？』

『なあに、シリリア。雲へ屆くことはむつかしくありやしない。お前、ペレ山(さん)の絶頂にいつも雲があるのを見て居るぢやないか――あそこへ行く人があるぢや無いか。おれも居たことがある――雲の中に』

『あゝ、それは雲が違ひます。その雲は善なる神樣の雲ではありません。モルン　ドゥラ　クロアへお登りになつても、空(そら)へお觸りになることは出來ません』

『シリリアよ、手に觸ることの出來る空(そら)なんてものはありやしない。空といふものはさう見えるだけのものだよ』

『アン、アン、アン！空は無いと仰しやるのですか！空といふものは無いと？……それでは、あの、上(うへ)にあるあれは何です？』

『あれは空氣だ、シリリア。美しい青い空氣だ』

『それては、星は何に繋がつて居るので御座います？』
『何にも繋がつてゐやしない。あれは太陽だ、が、私共の見る太陽よりも、ずつと遠いから、小さく見えるんだ』
『いゝえ、太陽ぢやありません！太陽と同じ形をして居ません。……空といふものは無い、なんて仰しやつてはいけません。それは邪まです。ですが旦那さんは加特力信者では無いから！』
『シリリア。その事は空とは何の關係も無いぢや無いか』
『若し空がなければ、善なる神樣は何處にお出てなのです？——そして何處に天國があるのです？——何處に地獄があるのです？』
『空に地獄がかえ、シリリア』
『善なる神樣は空の一處に天國をおつくりになり、惡るい人の爲めに、他の一處に地獄をおつくりになりました。……あゝ！旦那樣は新敎信者です。——旦那樣には、善なる神樣のおつくりになつたものがお分かりにならぬのです！だからそんな事仰しやるのです』
『新敎徒つてどんなものだえ、シリリア？』
『旦那樣がさうてす。新敎徒は宗教を信じません——善なる神樣を愛しません』

『ところが、シリリア。おれは新教徒でも加特力信者でも無いんだ』
『まあ、そんな事が！旦那様がモーディの譯は――呪はれた者の譯は――ありやしません。世には、新教徒と、加特力教徒と、呪はれたものと、だけ居ります。旦那様は、モーディてはありやしません、屹度。ですが、空といふものは無い、なんて仰しやつてはいけません』……
『だが、シリリア――』
『いゝえ、旦那様の仰しやることは聽きません。――旦那様は新教徒です。空が無ければ、雨は何處から降るのです？』
『なに、シリリア……雲が』……
『いゝえ、旦那様は新教徒です。……どうしてそんなことが仰しやられるでせう？三人の王様と三人の從者とがありませう――クリスマスの時に出るあの美しい星が――そら、その邊の處へ出る――みんな美しい、大きな、大きな、大きな！……だのに旦那様は、空は無いと仰しやる！』
『シリリア、おれは呪はれた者かも知れないよ』
『いゝえ、いゝえ。旦那様は新教徒だといふだけのことです。ですが、空は無いなんて、

私に仰しやつて下さいますな。そんなことを言ふのは邪まです！』

『もう言はないよ、シリリア――さあ！だが、ゾンビてものは無いと、おれは言ふよ』

『旦那樣は呪はれた者では無いことは分かつて居ります。――洗禮をお受けになつて居るから』

『おれが洗禮を受けて居ることを、どうして知つて居る？』

『洗禮をお受けになつて居なければ、始終、眞つ晝間でもゾンビを御覽になるてせうから。洗禮を受けてゐない子供には、ゾンビが見えます』……

一〇

シリリアの自分に對する懸念は、攝生や食事の平凡事を越えて、靈的な事柄の不確實な領分へまで擴がつて行く。魔法遣、巫女（ソシエ）、或はゾンビの働きによつて、何事か自分に出來しはせぬか、と彼女は大いに心配して居る。殊にゾンビのことを。シリリアのゾンビに對する信仰は、議論を論外のものとするほどに堅固なものである。その信仰は彼女の內的本性の一部であり――遺傳的な或る物であり、人種的な或る物であり、亞弗利加

の如く古い或る物であり、我々の音樂觀念とは全然異つて居るが、文明人に對しても、說明不可能な情緒的魅力を具へて居る、リズムとメロディとを愛する念の如くに、その國人の特徵たる或る物である。

ゾンビ！——この語は、恐らくはそれを造つた人達にも神祕に充ちて居る語である。最も屢〻之を口にする人達の說明が、一向明瞭で無い。それは、定義を與へることの不可能な觀念をただ朧氣に——他の人種と他の時代との人心に屬して居る空想を——言ふに言へぬほど古い空想を朧氣に——傳へるもののやうに考へられる。恐らくは、我々の國語のうちて、これに一番似て居る語は、『化けもの(ゴブリン)』であらう。だが、あれをこれて充分には反譯が出來ぬ。が然し、兩者は、それが區別が出來なくなる共通の一つの地面を有つて居る、——卽ち、最も原始的で最も曖昧な、超自然的といふ彼(あ)の區域である。そして、野蠻人の空想と文明人の空想との最も緊密な關係は、我々が子供らしいと呼ぶ恐怖に——暗黑の、影の、夢中の物の、恐怖に——見出し得るのである。ゾンビ信仰の——種々な野蠻人種が抱いて居る或る靈的な迷信と同類のゾンビ信仰の——一形式は、惡夢が——惡夢のうちても、自分の親しい人が段々とそして恐ろしく變つて、惡意を有つた者になつて來る、彼(あ)の種の惡夢が——暗示したもののやうに考へられる。ゾンビは——亞剌比亞人の沙漠に出る

靈のやうに、旅連れとか、舊友とかいふ姿をして、――或は時に或る動物の姿さへして――人目を瞞す。だからクリーオール黒人は、暗くなつてから、淋しい道で出會ふものはどんな物でも――離れ馬でも、牛でも、犬でさへも――恐れる。そして母親は、ゾンビ猫を、或は何かのゾンビ動物を呼んで來るぞ、と脅して子供のいたづらを止めさす。『ゾンビ　ケ　ナナ　ウー』（ゾンビがガブッと呑むぞ）といふは、一般に田舍地方での有效な嚇しである。田舍では日が暮れゝばいつ何時でも出ると信ぜられて居るからである。この町では、その定つて出る時刻は、朝の二時四時の間だと、考へられて居る。兎も角シリリアはさう言ふ、――

『デズエ、トッーア・ズェ・マタン。セ　レ　ゾンビ。ヨ　カ　ソティ　デズエ、トッーア　ズェ。セ　レ　ヨ。ア　クアトレ　ヨ　カ　ラントレ。――アンジエルス　カ　ソンネ』（四時に、アンゼルスの鐘が鳴る前に、出て來た處へ歸ります）どうして？

『セ　ブー　ムーヌ　パ　ジョアンヌ　ヨ　ダン　ラルー』（人が街路で會はないやうにです）と、シリリアは答へる。

『人間に會ふことを恐がつて居るのかえ、シリリア？』と自分は尋ねた。

『いゝえ、恐がつてゐはしません。自分のやる事を、人間に知らせたくないからです』

（パ　レ　ムーヌ　ウーエ　ザッフエー　ヨ）

シリリアはまた、夜、犬が吠えて居る時、窓から外を見てはならぬ、と言ふ。その犬はモーゼー　ギヴン（不吉な物）かも知れぬ。『私がそれを眺めて居るのを見ると、それが「ウー　トロップ　クイリエス　クイッテ　カバース　ウー　プー　ガデ　ザッフエーレゾート」（お前は物が見たくて、それでそんなにして床を出て他人の事を見るのだね）と私に言ひます』

『すると、どうなんだえ、シリリア？』

『すると、それが眼を抜いて――イ　ケ　コクイ　ズイエ　ウー――盲目にしてしまひます』

『だが、シリリア』と自分は、或る日尋ねた、『お前は、ゾンビを見たことがあるのかえ？』

『どうして？ えゝ、毎度見ますよ！……夜、部屋の中を歩き廻はります。――世間の人のやうに歩きます。揺り椅子に腰かけて、極輕くからだを揺つて、私を見ます。私はそれへ「此處で何の用があるのですか？ 私は誰れにも悪るい事をしたことは一度もありません。歸つて行つて下さい」と、申します。すると出て行きます』

『どんな顔をして居るの？』

『世間の人と同じです――時々、美しい人（ベル　ムーヌ）のやうな顔をして居ります。私は恐う御座います。燈が點つて居ない時にだけ見えます。燈が聖母様の前について居る間は來ません。ですが時折油がなくなつて、明かりが消えます』

自分の部屋には、棕櫚の枯葉と凋れた花が少しと、壁に結はひ附けてある。シリリアがそれを其處へ置いたのである。それは、此前のコルプス、クリスティ行列の時建てたルポソアール（臨時の聖壇）から取つて來たのである。だからそれは神聖なものになつて居るから、ゾンビを近寄せぬに決まつて居る。壁へ、自分の床の上の處へ、それを結はひ附けたのはその爲めである。

親切な女だらうといつもシリリアは思はせるのであるが、シリリアほど動物に親切な人間は世にもあり得まい。近處に飼はれて居る動物はみんなそれにつけ込んで遣つて來る。――色んな犬や猫が、打たれる心配は少しも無いから、厚かましくも彼女の物を盜む。だから或る晩、燈へ近寄つて來た、飛んで居る甲蟲を彼女が摑まへて、落ち附き拂つてその頭を蠟燭の火で燒くのを見て、自分は非常に驚いた。どうしてそんなむごたらしいことが出來るか、と自分が尋ねたら、斯う彼女は答へた、――

――『アー！ウー　バ　コンネート　ショイ　ペーイ・シ』（旦那樣は此國の物を御存知てはありません）

シリリアが物。といふのは、超自然な物。を意味して居ることを自分は知つた。夜間蠟燭の火のまはりを飛ぶ羽毛のある動物のうちで、或る種のものはアンガジエのもの卽ちアンヲワイエのものかも知れぬ――變形の力を有つて居る邪まな人間かも知れず、或はまた害をしに巫女か魔法遣かが『迷つた』ゾンビかも知れぬ――と一般に信ぜられて居るのである。

『トリコロールに或る女が居りました』と、シリリアは言ふ。『其女は夜、大層澤山に縫物をするのでありました。ところが大きな甲蟲が、よくその部屋へ入つて來て、蠟燭のあたりを飛んで、非常にうるさがらすのでありました。或る晩その蟲を旨く摑まへて、其頭をその蠟燭で焦がしました。翌る日、近處の或る女が、其頭をすつかりくるんで、その家へ來ました。その縫物をする女が「アー！マクーメ。サ　ウー　ニ　ダン　ギオール・ウ?」と尋ねました。するとその女が、大層怒つて返事しました、「ウー　ニ　トゥーペマンデ　モアン　サ　モアン　ニ　ダン　ギオール　モアン！――エ　セテ　ウー　クイテ　ブリレ　ギオール　モアン　ナン　シャンデル・ウー　イエ・スーエ」』（私の口をどうした、と尋ねるなんて白々しい！お前さん自分で私の口を昨夜蠟燭で燃やしたぢや

無いか）

或る朝早く、五時頃に、シリリアは表の門を開けると、大きな蟹が街路を下手の方へ歩いて居るのを見た。多分或る樽から逃げたのであらう。といふのは、蟹を樽の中へ入れて生かして置いて――玉蜀黍、マンゴ、殊に綠の胡椒で養つて――肥えさせるのが此處の習慣だからである。捕らへて直ぐと蟹を料理する事は誰れも好まぬ。河口でマンチニールの實を食つてゐたかも知れぬからである。シリリアは其蟹を見ると、恐怖のけたたましい叫び聲を發した。それから獨り言を言うて居るのがきこえた、――『わたしがそれに觸る？――おゝ、いやいや決して！自分で遣つて行けるでせう。あれが計らひのしてある蟹（ヨン　クラブ　ランジエ）では無い、盜られたものでは無い、といふ事が、どうして分かるものですか、――私が蟹が好きだといふ事は誰れも知つて居るから。二スー出せば立派な蟹が私には買へるよ、素性の分かつて居る蟹が』其蟹は街路を下つて行つた。到る處それを目にしたものに恐慌を與へた。誰れもそれに手を觸れようとする者は無かつた。女共はそれに對して『ミゼラーブ！――アンヺワイエ　サタン！――アレ、モーディ』〔可哀相に！惡魔の使！さあ、行け、呪はれもの！〕と叫んだ――その蟹へ神聖な水をかけたものもあつた。無事に海へ到着したことは請合である。その晩シリリアは斯う言つた、『あの蟹は小さなゾンビだつたと思ひま

すよ。——歸つて來ないやうに、今夜は夜通し燈を點して置きませう』

別な日に、自分の外出中に、自分が二フラン貸してやつてゐた黑人が家へ來て、その負債を返した。自分が歸つて來るとシリリアはその事を話して、丁寧に澁紙の小片に包んであるその金を見せた。が、それに觸つてはならぬと言ふ——市場で使つてしまはうと言ふ。自分は彼女の心配を笑つた。すると斯う言ふのであつた、——『旦那樣には黑ん坊のことが分かつておいててないのです。黑ん坊は邪までです——黑ん坊は嫉妬深いものです！この金を旦那樣の手に觸らせたくありません、これは私は善くは思つて居ませんから』

單純な無敎育な心を有つた者にこれに似た多くの迷信があるのであるが、自分はマルティニーク生活の裏面を多く知つてから、始めてその起原と正常なことゝを知り得た。黑人の魔法遣といふのは、いくら惡るいものでも、毒を盛る者に過ぎぬ。だが、眞面目な硏究を長い間鼻であしらつて居る、そして、前世紀の初には白人に依つてすら惡魔の力に賴るものと思はれてゐた、頗る奇妙な術を有つて居るのである。千七百二十一年、千七百二十三年幷びに千七百二十五年に、惡魔と結託をして居る妖術遣だといふので、黑人が幾人も、杙に縛つて生きながら火炙りにされた。それは比較的無智な時世であつた。が、今なほ、最も懷疑的なまた實際的な醫者を驚かすやうな事を行ふ。例を擧げていへば、或る栽培地

から解傭された勞働者が復讐を誓ふ。すると、その翌朝、使用人全體が——全部のアトリエが——全く仕事が出來ぬ身體になつて居る。其處のものは男も女も一人殘らず歩けぬ。誰れも彼れも片足か兩足か、恐ろしく膨れ上がつて居る。ヨ テ カ ビレ マリフィース。『マリフィース』をみんな踏んだのである。『マリフィース』とは何か？判知し得ることは、素足の勞働者がいつも通る地面全體へ、刺のある小さな或る種を撒いた、のだといふ事だけである。普通の場合には、そんな種を踏んでも何とも無いのである。だが、斯んな場合、特別に——何か毒の中へ、恐らくは毒蛇の毒の中へ、浸して——造つたのに相違無い、ことは明白である。兎に角、その燃衝を蛇に咬まれた時と同様に處理するが一番安全だ、と醫者は思うて居る。すると幾日か經てば、手は仕事がまた出來るやうになる。

二

シリリアは、そのカナリて忙しく働いて居る間、獨り言を言つたり唄を歌つたりする。豐かな低い聲を有つて居て——妙なものを、この時代が忘れて居るものを——確に亞弗利

加風な不思議な節奏と音調の殘りとがある、昔時のクリーオール歌を――うたふのである。が、マルティニークの女が皆さうのやうに、唄を歌ふよりも獨り言を言ふ方が多い。流川のやうに、不斷のつぶやきである。初には、誰れか他の人に物言つて居るのだと自分は思つて、能く自分は

『エピ　クレイス　ムーヌ　サ　ウー　カ　バレ・ア？』

と尋ねた。

が、彼女はいつも――『モアン　カ　バレ　アンニ　コ　モアン』（私は自分の身體に物を言つて居るだけであります）と返事するのであつた。獨り言をいふことをクリーオールでは斯う言ひ現はすのである。

『何をそんなに澤山お前はお前のからだに話して居るのだい、シリリア？』

『私の一寸した事（ティ　ズアフエー・モアン）を話して居るのであります』……これだけしか聞き出すことは出來なかつた。

だが、仕事をしてゐない時は、窓から外を眺めて幾時間も坐つて居る。この點に於て彼女はその小猫に似て居る。兩者とも、街路を眺めたり、その屋根の上に聳えて居る綠色の山――モルン　ドランジユ――を見たりして、同じ靜かな愉快を見出して居るやうである。

そんな時に、折々、自分がさう書類に忙しさうで無いので質問をしても宜いと思ふと、極めて妙な風に、沈默を破ることがある。――

『ミシエ』――おづおづと。

『エー?』

『ディ　モアン、シエ、ティ　マンマイユ　ダン　ペイ　ウー、トゥット　ピティ　ピティ、――エス　サ　パレ　アングレ?』(あなたのお國の小さな子供が――極、極小さな子供が――英語を遣ひますか?)

『うん、遣ふとも、シリリア』

『トゥット　ピティ、　ピティ?』――と驚いて唸る。

『どうして、當たり前ぢや無いか!』

『セ　ドロール、サ!』(不思議ですね、それは!)彼女にはその理由(わけ)が分からぬのである。

『シリリア。マルティニークの小さなマンマイユ――トゥット　ピティ、ピティのが、――クリーオールを遣ふぢや無いか?』

『ウイ。メー　トゥット　ムーヌ　カ　パレ　ネーグ。サ　ファシール』(えゝ。です

けれども、誰れだつてネグロ言葉は遣へます――覺えるのはやさしいんですもの）

一二

シリリアの部屋には何の道具も無い。マルティニークの下女（ボンヌ）は家畜同樣に單純な粗末な暮らしをする。敷布（シート）が一枚蔽うてあつて、レファンの高さだけ床（ゆか）から離れて居る、薄い布團一枚、それがその床（ベッド）である。レファン、卽ち『象（エレファント）』といふは、鉋屑が詰めてある、荒い、堅い四角な厚い布團二枚から成つて居るもので、部屋の一端から他端へ屆いて居る。だが、シリリアは、ブーレ　エピ　フレッシユ・カンヌの　砂糖黍の羽毛が詰まつて居る、上等の枕を有つて居る。蝶番ひの破れて居る安價なトランクがその僅な質素な衣裳を納めて居る。頭飾に使ふムーショアールが卽ち頭布（カチフ）が少し、餘分のドゥイレット卽ち長い衣物一枚、それにぼろぼろなリンネル少々である。でも彼女はいつも清潔に、小綺麗にして、爽かな顔をして居る。見ると、片隅に草履が一そく――田舍の女が時々穿くやうな、足の甲を蔽ふ革帶があり、小さな紐が二つあつて、底は木のが、一そく――ある。が、決してそれを穿かぬ。壁に、佛蘭西製の版畫が――石版畫が――二枚掛けてある。一つは、その鍾

愛の山羊と一緒に牢へ入つて居るギクトル　ユーゴーのエスメラルダを畫いたもの。今一つは、その子鹿と一緒に居るラマルティーヌのローランスである。兩方とも非常に古く、汚れて居り、書物や書類や、出してあるもの何でも害ねる、レピスマの一種の、ベート・ア・シソーが嚙ぢつて居る。棚の上に罎が二つ載つて居る。一つには神聖な水が一パイ入つて居り、も一つのには、タフィア　カムフレー（タフィアに溶かした樟腦）が入つて居る。これは風邪、熱病、頭痛、その他餘程重大で無い一切の病氣の、シリリアの唯一の藥である。それからまた、毛で造つた高さ三吋許りの小さな猿が一匹――大分前に死んだ子供の、埃だらけになつて居る玩具が――載つて居る。――また、それよりも小さな、聖母の像が一體。――それから聖母への花のお供物の、新しい、派手な色の花が入つて居る壊れ罎が一つ。――それから聖母への常燈明。これは小さな心が、小さな硝子の中のオリーブ油に浮いて居る、夜の燈明である。

　その花はシリリアがマルシエ　ドゥ　フォールて――庭で咲かせた花だから――買つたものだ、といふことを自分は知つて居る。あの市場には、他の物は何も賣らず、ただ聖母への花束だけ賣つて居る婆さんが幾人かいつも居る。通行人に、『ガアニエ　ティ　ブーケー　ブー　ギエジユ・ウー、シエ！花束をお買ひなさい、聖母様に。――聖母様は一つ

欲しいと言つておいてになります。――小さいのを一つお上げなさい、シェ　ココット』と叫ぶのである。……聖母へ奉る花はその香を嗅いではならぬ、とシリリアは言ふ。それは聖母のものを盗むことになる、といふ。……その小さな燈明はいつも六時にともす。聖母は六時にサン　ピエールのどの街路も通つて、燈明が自分の像の前に點つて居ると、その家へ入つて、祝福を與へる、と想はれて居る。シリリアは言ふ、『フォー　リメ　ラムプ　ウー　プ！　フェー　ラ・ギエージュ　パッセ　ダン　カイ・ウー』（聖母樣が家の中へおはいりになるやうに、燈明を點さねばなりません）……シリリアは、屢〻その小さな像に、丁度赤ん坊に物言ふやうに、話しをする――いとしんで附けた名をそれに呼ぶ――その花で御滿足ですかと尋ねる。

　聖母の此の像は壞れて居る。聖母の半分で――上半分で――ある。だがシリリアは、旨く手當てをして居るので、自分が甚だしく穿鑿的でなかつたならば、その怪我を察することは出來なかつたであらう。彼女は、蓋の無い、壞れた小さな白粉箱――誰れか金持ちの美人が部屋の窓から多分不注意に投げ棄てたものであらう――を見つけ出した。そしてその小箱へ藁を詰めて、損じて居るその像をその中へ、それに足が缺けて居ることに氣が附かぬやう、旨く眞つ直ぐに立てて居るのである。その聖母は、その小箱の緣から斯く首を

出して居るのだから、觀て甚だ滑稽である、――子供がそれを繕はうとして居る、壞れた玩具のやうである。だがこの聖母は又お供物をされて居るのである。シリリアはその爲めに花を買つて來て、その四方へ、その白粉箱の縁と葉との間へ、挿し込んで居る。要するに、シリリアの聖母は、富裕な人の家庭にある銀や象牙で造つたどんな像に劣らず、頗る重要な物件なのである。恐らくは、それに向つて唱へる祈禱は、贅澤な家庭のシャペルの前で日々つぶやく多くの祈禱よりも、もつと單純な美を具へて居るもので、もつと直接に心情から發するものであらう。それを眺めれば眺めるほど、この壞れた小さな信仰の玩具を笑ふのは殆ど邪惡なことだ、といふ氣持ちになつて行く。

――『シリリア、マフィ』と、此小さな聖母を自分が發見した後、或る日彼女に問うた、『お前にシャペルを買つてやらうと思ふがどうだ?』シャペルといふは、クリーオールのどこの寢室にもある、神像や裝飾が一緒について居る、小さな棚承け聖壇である。

――『メー　ノン、ミシエ』と、彼女は微笑しながら答へた。『モアン　エーマイン　ティ　ギエージユ　モアン、パ　レガニン　ドート。私は私の小さな聖母を愛して居ります。他(ほか)のは一つも要りません。私は大層苦勞を致しました。あの聖母樣は私の苦勞に、いつも私と一緒に居て下さいました。私の祈りを聽いて下さいました。あの方を棄てるのは

悪ることであります。餘分の金が一スー出來ると、私はあの方にお花を買ひます。――一文もお金が無いと、山へ登つて、綺麗な蕾のを摘んで參ります。……ですが、どうして旦那様は私にシャペルを買つてやらうと仰しやるのです？――旦那様は新教徒だのに』

――『お前が喜ぶかも知れんと思つたのだ、シリリア』

――『いゝえ、旦那様、有難う御座います。喜びは致しません。て御座いますが旦那様、他の事で私が非常に喜ぶことをして下さいませんか――何度か旦那様にお願ひしようかと思つたので御座いますが――て御座いますが、あの――』

――『何だい、言つて御覧、シリリア』

彼女は暫く無言て居たが、やがて言つた、――

『旦那様は寫眞をおうつしになりますね……』

『お前の寫眞が撮つて欲しいのかえ、シリリア』

『いゝえ、旦那様、私はあまり見つともなくて。それにあまり年が行つてゐまして。てすが、私に娘が一人あります――娘は美しう御座います――ヨン　ペル　ボア――此處の人達の謂ふ、美しい木のやうであります。その娘の寫眞を撮つていただけば、本當に喜びます……

下手な素人が持つて居る寫眞器械がこの請求をシリリアに思ひ附かせたのである。自分にはさういふ仕事を首尾よくやり遂げることは出來なかつた。が、餘程熟練な寫眞屋への手紙を彼女に與へた。そして四五日して寫眞が家へ屆いた。シリリアの娘は確に眉目うつくしい女で——丈が高く、殆ど金のやうな色をして、氣持ちの好い目鼻立をして居つた。そしてその寫眞は、原物よりか好くは無かつたが、中々好く出來て居つた。一體かういふ人達の美の半ばは色合の——白い顏色はそれとは比べ物にならぬ、と白人クリーオールが言ふのを自分は聞いたことがあるぐらゐで、時には實に絶妙な色合の——美である。餘(あま)の魅力の大部分はやさしさ——運動のやさしさ——である。ところがそのどちらも寫眞では現はれぬ。自分は、彼女の小さな繪の横へ掛けるやうに、その寫眞の額緣をシリリアに造つて與へた。

それが來た時、彼女は家に居なかつた。自分はそれを彼女の部屋へ置いておいて、效果如何にと待つて居つた。歸ると、彼女はその部屋へ入つた。餘り長い間その姿を見せなかつたから、自分は彼女が何をして居るかを見に、そつとその部屋の扉の處へ行つてみた。彼女はその肖像の前に立つてゐて——それを眺めながら、生きて居る者へ言ふやうに、それに物を言つて居るのであつた。『イシュ　モアン、イシュ　モアン！……ウイ！ウー

トゥツト　ベル！――イシュ　モアン　ベル！』（わしの子、わしの子！……うん、お前は本當にうつくしい！わしの子は美しい）突然――恐らくは自分の影を認めたのであらう、或はどうかして自分の居ることが分かつたのであらう――彼女はこちらへ振り向いた。その眼は濡れて居つた。――ぴくつとして、顏を赧らめて、それから笑つた。

『あゝ、旦那樣、私を見ておいでになつたのですね。――ウー　グエッテ　モアン。……ですが、これは私の子であります。どうして可愛がらずに居られませう？……大變美しい顏をしてあそこに居ります』

『美しいね、シリリア。――お前がその子を可愛がるのを見るのがおれは好きだ』

彼女は無言で、なほ暫くその寫眞を眺めて居つた。――それからまた自分の方を向いて熱心に斯う尋ねた、――

『ブーキ　ヨ　パ　カ　フニー　ポトレイ　パレ――アン？……ピッス　ヨ　カ　ティレ　イ　トゥツト　サム　ウー。セ　ウー・メム！……ヨ　ドゥーエ　フエー　イ　パレトゥー』

（どうして寫眞に物を言はせるやうにしないのです？――え、旦那さん。丁度お前のとほりに描いて居るもの！本當にお前なんだから。物を言はせなければならぬ筈です）

――『いまに、そんなことが出來るやうに、なるだらうよ、シリリア』

――『あゝ！そしたら宜う御座いませうにね。そしたら私はこの娘に話しが出來ませう。モアン セ ヨン ベル ムーヌ モアン フエー――イ ベル、ジヨリ ムーヌ！……モアン セ コーゼ エピ イ』……

……そして自分は、彼女の子供らしい美しい感情を見ながら、考へた。――或る魂が他の魂と同じものであらうと、――或る愛情は他の愛情で代はることが出來ようと、――個人個人の善良さは、全く離れた物、固有なもの、雙子的では無いもの、では無くて、意の儘に求めることが出來、見出すことが出來、利用することが出來るところの、或る一階級、或は一標型の普遍的特徴に過ぎぬ、と信ぜんとする彼の冷酷な者に呪ひあれ！……愛の神聖を否定する者に呪ひあれ！幾千億の人間の心情は銘々に、その頭腦は銘々に――悲哀なるものが生存して居ると正しく同じぐらゐ確實に――他のどんなものとも異つた特別な感じかたをし、また考へかたをするものである。銘々の心中の善良さは、他のあらゆる善良さと異る點を有つて居るものである――そして、その爲めに、其無限の貴さがあるのである。といふのは、どんなに卑しくとも、どんなに小さくとも、それはそれだけしか世に無

い或る物であつて、神は決してその作品を繰り返すことは無いからである。どんな心臓鼓動も應いものでは無い、どんなやさしさも蔑しむべきでは無い、どんな親切も普通なものでは無いのである。だから、死が生きた物を取つてしまふのは――單純極る生物は度外視して――生物は一々みな、他の一切の物とは、無限に異つた經驗の一つの鎖の總計であるからして――永遠の永遠に通じて決して再現することの無い物を、取つてしまふ、といふことになるのである。……或る人にはシリリアの嬉し涙は微笑を齎すかも知れぬ。自分には、その微笑は、生の附與者に對して兎すべからざる罪惡に思はれることである。……

『パ　コムビネ、シエ』

一

……強烈な快感が時折與へるところの、そして、或る空想の振動にその全身が震るへる程に想像力がまだ鋭敏且つ有力な子供時分に、最も屢〻又最も強く感ずるところの、——髮毛の尖から足の尖までぞつとする靈的な感觸のやうな——彼の仄かな身震るひは、我が英語のどんな語よりかも、佛蘭西語のフリッソンといふ語が、より微妙に表現するのである。そして、自分は思ふに、熱帶世界を初めて知つて起きる、あの長い間の、驚嘆歡喜の身をののきをば——子供時分に、お伽噺を聞いたり幻の島の話を聞いたりした時の感銘のやうな、不可思議な美があると思ふ念をば——この電氣的な語が最も能く表現する。

といふのは、其處で眼に映るものは、總て皆、現實で無いもののやうに思はれるからである。素晴らしい光と、西印度の海の奇異な蒸發氣との爲めに、一切の物が姿を變へて居

る事、――水と空とが眼が眩むやうな瑠璃色に互に取り圍み合うて居る事、――寶石の色をした海岸が大洋から不意に頭を覗かして居る事、――山々が驚く許りの恰好をして居り虹のやうな色を現はして居る事、――棕櫚が想像も及ばぬ許りに壯麗な事、――エメラルドのやうにきらきら光る蔓物（つるもの）に蔽はれ捲き附かれて居る深林、――此等は、奇妙に、半ば忘れて居る物を――魅惑の物語を――諸君に思ひ出させる。實際それは魅惑である――が、それは諸君がやつとその力を知り始めつつある彼（あ）の大魔術者の――太陽の――魅惑にほかならぬのである。

そして諸君は、熱帯都市の生活へは、死に失せた或る世紀の生活へ夢の裡に入るやうに、入つて行く。其處の建物の光つた黄色い正面（ファサード）の上（うへ）を見ると、燃えるやうな美しい菫色の空が、ただ、三四呎しか離れてゐないやうに思はれるその町の――その雅味のある古めかしい街路の何處へ行つても、熟した果物のやうに、見てうつくしい若々しい男女が眼に映る。そしてその人達の言葉が鳩の聲のやうに軟らかい。そして褐色の女の子の眼が、諸君を愛撫するかに通りすがりの一瞥を與れる。……薔薇子賣りの色黒男のやうに、自然が『サクイ レ ドゥー ドゥー？』といつも叫んで居るやうに思はれる此處では――諸君は噂に聞いたことがあるかも知れぬが――愛の世界に殆ど拘束が無いのである。……

通り行く或る人の姿に、或る理想が殆ど實現されて居るのを認めて、厭くことなく見つめてその後を追ひたいと思ふと、また別なのが、また別なのが、それからまた更に別なのが――口には出さぬ該の賞讃を得ようと――該の美的空想を唆かさうと――出て來るので、やつと思ひ止まる、といふことがそも幾度あることであらう！或る特殊の標型の、直ぐと過ぎ去つてしまふ線を留める、その色を掴む、その異國的な全魅力を捉らへる、藝術家の力が欲しい、と熱望することがそも幾度あることであらう！……その聲の音色にすら――いつもコントラルトにならうとする傾向のある、そして銀を響かすやうに震るへる、あの雜種の聲にすら――奇異な魅力が見出される。歌うて居る者の姿は見えぬ時でも、心臓の鼓動を早からしめる力のある、或る聲に存する彼の神祕な性質は何であるか？……鳥だけが知つて居るのであらうか？

……この繪のやうな生活を見守ることに――胡蝶の花やかな色をして居るその服裝を研究し、勞働をして居る幾百人もの彫像のやうな半裸體を研究し、態度の敎はらずして具はつて居る優美さを研究し、擧動の單純さを研究することに――諸君は決して倦くことはあり得ないやうに思はれる。日々が何か新しい驚喜を齎す。――諸君の住居の窓からでも、斬新なもの何かを、奇怪の念或は美感を悦ばすもの何かを、いつも目にするのである。：

……諸君の部屋の中にゐても、一切の事物が、それが奇妙であるか古雅であるかの爲めに、諸君を興がらす。諸君の身邊の物體が好きになる。――眠りをさそふ彼の大きな、音のせぬ搖り椅子。――床板まで屆くほどに長いその四方に美々しい彫刻のある、重い、磨いた木での彼の巨大な寢床（リタ・バトー）――恰好は似て居るが、もつと幅の狹い、晝寢にだけ使ふ、いつも寢床の附き物の、彼の小さな長椅子或はソーファ。どんな暑い日にも諸君の飲料水を冷たく貯へて居るが、山からの綺麗な水で――『全く生きて居る』ドゥロー トゥット ボヴンで――日出と日沒との間に、いつも三度一パイにされる、彼の赤い厚い土製の器（ドバンヌ）――風が在つても蠟燭が搖れずに點つて居る、青銅の軸のある、彼の高い硝子のゴリース。――部屋の隅の棚承けからして、諸君がどんなに非道い異端者であつても、その爲めに夜毎ともす氣になる油の燈火の上から、諸君を眺める彼の可笑しな小さな天使や聖母。……氣候に對しての幾世紀間の經驗の結果たる彼のクリーオールの家庭の習慣を、諸君は直ぐと、少しも差し控へずに、採用する。――日中前には固形食物は控へること、晝食後休息すること。――そして諸君は一度一度の飲食を、快適なと同時に珍奇な經驗を見出す。砂糖でシチューーにした青豌豆、トマトを混ぜた玉子、牛乳でシチューーにした鹽魚、サラダにしたパーミストの心、濃厚なケーキにした擦つたココア、

油で料理したティティリ、此等に慣れることは少しも困難では無い。ティティリは、千尾でも小皿一パイに殆ど充たぬぐらゐの小さな魚である。就中、想像の及ぶかぎりの、いろんな恰好をした、そして、想像の及ばぬ色んな風味を有つた、野菜と果實との無限の變化に、諸君は驚く。

そして、此古風な靜かな家庭生活の、單純極る繰り返しも、幾月幾年の間每日之を反覆しても、決して厭く事はありさうに思へぬ。有色の子供が、日の出前に諸君の扉を輕くコツコツ敲いて 熱い黑珈琲一パイと蕃茘枝一切れ持つて來て、『ボンジュー、ミシエ』といふ音樂的な挨拶。――派手な頭巾を冠つて居る頭の上へ、釣り合ひとつて載せて居る盆で三度の食事を二階へ運んで來る、そして諸君が食事して居る間、橫に立つてゐて、給仕するあらゆる機會を見て居て、可愛らしい素足で少しの音も立てずにあるく、あの無言な、鳶色の娘の微笑。――果實を持つて來るマシャンヌ、麵麭を配達するポルテューズ、川でリンネルを洗濯するブランシシューズ、――それから盆と頭帕布(タルバン)とを頭にし、肩掛(フーラール)とドゥイレットとを身に着け、其原始的なやさしさを見せクリーオールお饒舌(しやべり)を聞かせて諸君の身邊をあるき廻はる親切な人達總ての、――氣持ちの宜い振る舞ひ。――此等が諸君に魅力を有たなくなるといふ事は決してありやうが無い。また、諸君が外國人であるからとい

ふので、其善良な人達が諸君の健康を氣づかふ其可笑しい程の心配、――外出する時間、家の内に居る時間について、――蛇が居る爲め、どの道路を辿るべきか、どの小徑を避くべきかについて、帽子や上衣を脫ぐ事、身體の暖かいうちに物を飮む事、について――の彼等の助言――これに諸君が感動しなくなるといふ事はありやうが無い。……萬一諸君が病氣をすれば、此心配が嵩じて献身となる。彼等は倦まず撓まず諸君を看護する。――諸君の病氣をなほさうとて、藥草について其驚く可き智識を傾倒する――提燈の明かりて奇異な植物を採りに、蛇の危險を冒し、ゾンビの恐いのを思はずに、夜半にすら山へ登る。生得の樂げな氣質、生得の親切心、人を喜ばせようとの心からの願ひ、子供のやうに些細な事にも嬉しがる性質――此等は此有色人總ての特徵のやうてある。疑ひも無く、其最善な方面を諸君の方へ向けて居るのてある。然し、その本性の見せて居る方面は、見せて居ない方面があるのだと諸君が疑ふが爲めに、それて少しても不愉快に見えるといふ事は無い。諸君が驚くやうな物事を思ひ附かう、何か珍奇な物を――變妙な植物だとか、怪異な魚だとか、奇異な鳥だとか――見せようとして、何たる親切な工夫力を彼等は示すことてあるか！滿足を與へようと骨を折つて、それて、どんなに目に見えての愉快を感ずることか！同情のどんなに無邪氣な率直さを有つて居ることか！……此有色な人種が、直ぐと人

を憐むその素早さは、諸君には子供らしいほど美しく思はれる。それは、その珍らしさの魅力が諸君の心の上にまだある間は、それが一つの野蠻な特性である、事を諸君が反省しないからである。可愛がつて居る動物が死んだ爲めに、ぼろぼろ涙を流すのを誰れも恥と思はせぬ。子供に何か怪我でもあると、大騷動が起きて、みんなが何かしようと早速に申し出る。そしてこの憐憫の念は、時には擴大して、半詩趣的に無生物にも及ぶ。自分は覺えて居るが、或る六月の朝、その入江に入つてゐた三本帆柱のスクーナー船が火事を起こして、沖へ流さなければならぬことになつた。非常な群集が荷揚げ場へ來て居つた。自分は、そのうち妙な悲しみの表現を——それには感情があると想うて居る玩具の不幸に對して、幼兒が感ずるやうな、それも理窟が分からぬのだから幼兒同様本氣な、悲しみの表現を——見た。炎が索具へのぼり、帆柱が倒れたら、何か人間の悲慘事を見てでも居るやうに、その群集はうんうん呻いて悲しんだ。そして到る處——『ポーヴ　マレレ！』（可哀相に運の惡るい）とか、『ポーヴ　ディアーブ！』とか——いふやうな妙な憐憫の叫び聲を聞くことが出來た。……或る娘は、頰へたらたら涙を流して『トゥット　バッガイ。イ　ブーアレ、カッセ！』（持つて行く物がみんな毀れる！）と、啜り泣きして居つた。……船は生きて居るものと信じて居るらしかつた。……

……そしてこの異國情趣に充ちた人間の飾り氣無さが、日一日と次第に諸君を感動さす。――猛烈な色彩を悦ぶところの、この野蠻な、睡氣を誘ふ、華麗な自然が、日一日と次第に諸君を迷はす。何日か此等總てを後にしなければならぬのだといふ期待される必然事が、――之に訣別を告げなければならぬといふ遠くに見えて居る心痛が――早既に、夢の裡にさへ、諸君の心に重く蔽ひかぶさつて來る。

二

讀者よ、若し諸君が、その熱帶世界を――其處が美しいといふ色んな物語が、諸君の幼年時代を魅惑し、また、男の兒の情を牽きつける、あの海の不可思議な催眠力を諸君にいよいよ强からしめたその熱帶世界を――一目見たいと徒に熱望して居られる方々であるならば、諸君と同樣に熱望してゐて、そして、機緣あつて到頭その願望の實現を見た者は、その實際の壯麗さは想像に優さること遙かであると、斯う諸君に證言することが出來るのである。人間の欲求を滿足させる過程は總て、必要といふ恐ろしい刺戟の下に完成され來

たつて居る土地だけを知つて居る人達は、色と光との地帶を支配して居る彼の自然の妖術は殆ど想像する事が出來ぬ。その原始的な區域の圏内では、大地は、その當時から凍はつて居る記憶が神の世の一百の傳説を創造したのだと思はれる、その氷河前の時代にあつたと同じく、依然として輝かしいまた若々しいものである。それから、來たらんとする樂園の——休息と永遠の光明との幻の國の——豫言は、これは思ふに、祖先傳來の地から初めて他國へ放逐された人間の、記憶と憧憬との總計に——血の氣の無いやうな北國へ植民しに、移住する人種共の大なる懷郷病から生まれた夢に——過ぎなかつたてはなからうか？

が然しこの魔力を有つた自然を知りたいといふ希望の實現と共に、現實は、豫て抱いて居た理想と異る處は、その理想よりも優さつて居るといふ點よりも他の點に在る、事を諸君は知る。諸君は、異常な科學的知識を具へてゐてこの熱帶世界へ入るので無ければ、諸君の豫期は兎もすれば誤り勝ちてある。恐らくは諸君は、永遠の夏が及ぼす效果は肉體的愉樂てある——これまて本國て味はつた一番美しい夏の天候が無制限に延長したやうなものてある——と腦裏に描いて居たてあらう。多分諸君は、いろんな熱病のことを、風土に馴れるいろんな危險のことを、激しい暑さのことを、又有毒な動物が群を爲して居ること

を、耳にしてゐたてあらう。が、それにも拘らず、どんな警戒をして宜いか分かつて居ると信じて居るかも知れぬ。そして公表された氣溫の統計表が、其暑さは堪へるのに困難で無いと諸君に思はせたかも知れぬ。熱帶に住んで居る白人が總て蒙るところの彼の衰弱といふのは、一種の氣持ちの好い疲勞てある——他の何處よりも、肉體的努力が必要で無い國に在つて感ずるところの苦痛の無い努力嫌厭である——巨大な樹木の蔭で、ハンモクに乘つて幾時間も無駄に費やしたいといふ隱かな誘惑である——と了解してゐたかも知れぬ。恐らくは諸君は、身體の知覺痴鈍は心の活動には有利てあるといふことを、信用の眼を以つてして、讀んで、そしてその爲め、知力が熱帶の諸力に影響せられて刺戟を蒙り且つ强大にされる、と信じて居るかも知れぬ、——元氣の衰弱は、頭腦をして明徹に物事を考へしめ、或は浪漫的な夢を樂ましめる、彼の至福な不精としてのみ現はれるのてある、と諸君は想像する。

三

諸君は初めのうちは迷が覺めぬのてある。——幻滅は長い間猶豫されるのてある。疑ひ

も無く諸君は、ベルナルダン ドゥ サン・ピエールの彼の美妙な田園詩（これはモーリシャスでは無いが、モーリシャスの舊時の生活は殆どそれと同じであつた）を讀んだであらう。そして諸君は、原生林が暗くして居る山々や、百の小川が縫うて居る谷々、の中に田園詩的光景を求め――諸君の身邊の美しい人達の間に田園詩的人物を求める。諸君が探す人の顔や物の形が諸君の前へ出て來るであらうかどうか、自分は知らぬ。――が、平凡極る山水のうちに田園詩的美はしさの缺乏を歎くことはあり得まい。どんな藝術的知識を諸君が有つてゐようとも、その知識はただ諸君に――海の多分な紫色を、――空の菫色の豐富さを、――枝葉の綠の盛んな美しさを、――夕暮れのライラックの色味を、――また、距離が變光力に充ちて居る大氣で與へる所の色の魅力を、――遙かなる山容の紫水晶と瑪瑙、眞珠と靈的な金色を――一層驚嘆することを敎へるだけであらう。諸君は想像する、そんな不思議な谷々を逍遙することに――エメラルドの蔭が映つて居る靜閑な道路を辿つて行つて、そして其處から眺めると市街は長さ三四吋にしか見えぬ、纜つて居る船は鏡に止まつて居る蚊よりも小さく見える、そんな高山へ登ることに――或は、その淸らかな水は一年中暖かで居る彼の靑い入江で泳ぐことに――決して、人は決して、倦むことはあり得ないと[註]、或は、蜂鳥が寶石の火を降らすが如くに閃き飛んで居る、巨大な棕櫚の柱廊に

註　西印度諸島の氣候の第一の效果は、身體が一般に興奮を覺え、意氣揚々となり、いま迄に無い體力を感ずることである。――そしてそれが、早速仕事をして、あり餘る神經力を漏らしたいといふ希望を生む『するとあらゆる距離が短く思はれる。――非常な疲勞事でも躊躇無く冒して行ふ』（研究）――と、ルフツは述べて居る。

獨り立つて居ると、その白い柱の絶妙な壯麗さを、筆に殘さうとする詩人又は畫工の手腕が、どんなに微弱なものであるか、と諸君は感ずる。――そして、必要上已む無くより寒い國へ追ひやられたクリーオールが、故鄕慕はしさに病氣になる――千八百四十八年の政治的悲劇の後、遠いルイジアナで幾人も死んだやうに、懷鄕の爲めに死ぬる――その理由が諸君には分かつたやうな氣がする。……

……が然し、諸君はクリーオールでは無いから、熱帶の氣候に對して苦痛の貢を捧げなければならぬ。諸君は、熱帶での華氏九十度の溫度は歐羅巴或は合衆國の華氏九十度と決して同じ物では無いことを。――午後のより暑い時刻には山へは安全には登れるものでは無いことを。――長途の步行をすると、熱病に罹るといふ重大な危險を招くといふことを。――深林へ入るには――蛇や毒蟲や、毒草や瘴癘の氣の中を――匍匐植物や蔓草や下草を彎刀で伐つて徑を拓いて進まなければならぬといふことを。……風が齎す非常に細かな砂

埃は、刺戟を起こす、眼に見えぬ敵に充ちて居るといふことを。――草地で、或は木の陰で――殊に苔蒲林度の下で――休むのは馬鹿であるといふことを知らなければならぬやうになるであらう。此等の事實を經驗に依つて充分に確信が出來てから始めて、諸君は西印度の生活狀態に關して肝要的な或る物の理解が出來はじめるのである。

四

……その智識は徐々として遣つて來る。……强壯な歐羅巴人であれば（亞米利加人の體質は此試煉に一層良く堪へる）その活力は此衰弱させる氣候に數箇月間堪へるかも知れぬ。恐らくは外國人は、呼吸の詰まるやうな暑さの處で非常な勞働をするのに慣れて居る人のやうに　鑛山で、鑄造所で、船の機關室で、鎔鑛爐で、汗水出して働いて居る人のやうに――自分も亦、氣孔を絕え間無く乾かし涸らす事に、一日に幾度も衣物を換へなければならぬやうにする此の不思議な凝乎として居る暑さの疲れ切らしめる力に、自分の體力を失ふ事無しに、慣れるやうにならう、と自惚れるであらう。然し、衰弱させるのは暑さだけでは無くて、水蒸氣が籠もつて居り、電氣が籠もつて居り、植物の繁茂に好都合なのと

同程度ほどに人間の生存に不都合な、不可解な働きが籠もつて居る大氣の、重々しさと物を腐敗させる性質とがまた與つて居る事を次第に見出す。若し其外國人が、溫帶地方て大いに役に立つた、その注意深い生活の規則を知つて居るなら、その今度の新しい環境に在つて、それを多く捨てはせぬであらう　そしてその規則は、——殊に、その人が用心深い男て、夜間海岸に居ることを避け、露に濡れたり早朝の霧に打たれたりすることを避け、また激しい身體的無理は絕てしないやう、にするならば——疑ひも無く、役に立つ事てあらう。が然し、異常な變化が身裡に生じつつある事に——特に、日に日に增して來る、そして頻繁に休息せざるを得ざらしめる、頭腦が重いといふ絕え間無しの感じに、——それからまた、大氣の變化に對し、味ひと臭ひとに對し、愉快と苦痛とに對しての、神經的敏感が妙に高まつて來るのに——段々と氣が附いて來る。食慾が全く缺乏して來る爲めに、日中前には固形體は何も口にせぬといふ地方的慣習に從ふ事を覺えて來、北國の人種の食物消費には熱量の必要がどんなに大なる力を有つてゐるものか、といふ事が分かつて來る。節制するやうになり、控へ目に食ひ、そして其味覺が奇妙なほどむつかしくなつて來て居る事が分かつて來——或る種の果實と飲料とは、クリーオールが主張する通りに、一日の特殊な時刻に應じての特殊な肉體的狀態にだけ適當なもの、といふ事を見出す。蕃茘枝は

黒い珈琲を飲んだ後、朝だけ食ふべきものである。——ベルモットは九時と十時半との間にだけ飲むに良い。——ラム又は他の強い酒類は食事前か疲勞後かだけ良い。——クラレット或は葡萄酒は食事中だけ、それも頗る控へ目でなければならぬ——といふのは、より強烈な酒類が生存の無上の必要品のうちに數へられて居る國にあつて、餘程妙なことであるが、葡萄酒は有害だからである。

それから外國人は、惡るくしたところて、怠惰な氣分がするだけてあらう、肉體的勢力(エネルギー)を少々失くするだけてあらう！と期待したのてあつた。ところが、今彼を壓迫し始めるのは單の衰弱では無い。——病氣上がりの難儀のやうな、苦しい活力衰退の感である。一寸した努力をしても、衣物に滲み通るほどの盛んな發汗を惹起して、手足が無理な筋肉仕事をした後のやうに痛む。——輕い極みの服裝が殆ど堪へ切れぬ感じがする、——シート一枚ても上へ掛けて寢るといふことは思つただけでも苦痛てある、絹ハンケチの重さが早、不快なほどだから。野蠻人のやうにして——暑い時裸體で——暮らすことが出來るなら、といふ心になる。鎭めることの出來ぬ渴に燃える——興奮物が欲しい氣がし、呼吸困難な感じがし、びつくりするほど猛烈に心臟の活動が時折早くなるを覺える。それから最後に、肉體的努力を絕對に恐れる念が起きて來る。白人クリーオールは馬に乘る事が出來れば步

かぬ。そして馬車に乘ることが同樣に便利に出來れば、馬を棄てて車に乘る。その白人クリーオールの不精な靜かな風習を早速採用する心になれば、疑ひも無く難儀が幾分か輕くなるかも知れぬ。——然し北國人の性質は、長い間の苦しい奮鬪無くしては、この究極の必要を受け容れることを拒むのである。

……其時すら外國人は、この熱帶氣候の兇惡な力を充分には推測が出來てゐないのである。熱帶の氣候は、——骨骼の形を變じ——漲る光から眼を保護する爲めに、眼窩のうつろを深くし——血液を更め——皮膚を黑くして——二代(だい)のうちに人種の特性を改造するのである。初めの數月間の神經の改造を續けて行くと、なほ一層重大な改造と變化とが起こつて來る。——肉體の勢力(エネルギー)の消失と共に、それに對應する以上の心的活動と體力との消失が續いて起こる。思索の全範圍が減つて來る、縮かまつて來る——肉體的自己を取り卷く彼(あ)の非常に狹い圈内に引込み、ただの物質的感覺の彼(あ)の内側の環のうちへ引込む。記憶力が恐ろしい程弱くなる。——心が——殆ど夢の中でするやうに、——仄かに、遲く、連絡無しに働く。眞面目な讀書、盛んな思索は不可能となる。諸君は非常に重要な計畫をもうつらうつらと考へる。　非常に蠱惑的な書物を見て居てもすぐ眠つてしまふ。

それから、記憶を痲痺させ意志を魅惑する不可思議な力に對しての、無益な反抗をし、

效能の無い一所懸命の努力をする。考へよう、働かう、勉强しようといふ斷乎たる決心に反對して、顳顬へ、眼へ、腦の神經中樞へ、今迄覺えぬ苦痛が敵意を抱いて突進して來る。そして大きな重さが頭の何處かに在つて、いつもそれが次第に重くなる。それから、痲睡劑を飮んだ後のやうに、壓倒して知覺を失はしめる睡氣が襲うて來る そして、この睡眠の、この昏睡に陷る事の强制は、閑な時間に、正午の休息の後に、或は午後の暑さの間に、何か心倚な仕事を試みようとすれば、乾度必らず出て來る。ところで夜は殆ど眠ることが出來ぬ。濃い汗で皮膚が濡れどほしな凝乎とした暑さの爲めに、或はまた、身體の表面到る處が絕えず、何とも言へず、チクチクピリピリする爲めに、休息は熱病やみのやうに斷續する。朝が近づくと空氣が涼しくなつて、まどろみが――疲れ切つての、夢の無い、元氣の無いまどろみが――來る。そして恐らくは、太陽と共に起きるならば、初の五分間は、非常な努力に依つてやつとのこと立つて居れるほどの、非常な眩暈と、非常な痲痺と、非常な感覺遲鈍とを感ずる。生中の死といふ詩人の空想を憶ひ出させ、墓の中から突然立ち現はれたといふ書斷を憶ひ出させる、或る感じを諸君は經驗する。恰も、夜の暑さに意志の電氣が全く退いて行つてしまつたやうで――生活力が全く蒸發してしまつたやうで――ある。……

五

或る種類の病弱者には、この氣候の效能は、或る有力な興奮劑のやうなものである——或る一定の時日内には驚くべき效果を奏することもあるが、その時日を越えて服用すると危險だ、といふやうな强健劑に似て居る、と大丈夫言つてよからう、と自分は考へる。或る一定の月數(つきかず)が經つと、諸君の新環境に對する諸君の隨喜渴仰は死んでしまふ。——自然すら前同樣な感じを起こさなくなる。身をののき(フリッソン)が來なくなる。その間に諸君は、その入つて來て居る異國的生活の一部分と、出來る限り多く、ならうと努力したかも知れぬ——その風俗を採用し、その言語を學んだかも知れぬ。然し諸君は心的にそれと變じることが出來ぬ。——諸君はその水の流の、一滴の油として漂り廻はつて居るだけである。やはり自分は自分ひとりだといふ氣がする。

西印度での一番長い日はただ十二時間五十六分である。——恐らくは諸君の最初の不滿足は日が短いといふことで起こつたてあらう。薄明かりといふものが全然無い。そして一切の活動は日沒と共に歇む。蛇の爲めに、暗くなつてから市外へ出るなどいふことは無い。

——此處では倶樂部生活は、外國ではそれがやつと始まる刻限に終はる。——晩の訪問といふことが無い。七時の夕食後、誰れも皆引込む支度をする。それて、晩を社交の時間とするに慣れて居る外國人は、早く引込むといふ習慣に、身を任せることを少からぬ困難と思ふ。歐羅巴人或は亞米利加人の心意の本然の活動力は、幾分の知的運用を——少くとも同感のある性質の者との思想の交換を——必要とする。正午の後業務を中絶して居る時間、或は、日沒に店を仕舞ふ後の時間、これが多忙な人がそんなくつろぎの暇を見出し得る唯一の時間なのである。ところがその時間は丁度、この植民地始つて以來、土着の人は元氣恢復の睡眠にいつも用ひ來たつて居る時間である。だからして、當然のこと、外國人は暗黑の來るのを——長い幾時間か眠れずに居るといふ避け難い孤獨を——畏れる。そして本國に居た折いつも求めた、孤獨のあの慰安を——讀書を、研究を——若し求めるならば、圖書館といふものが絶無だといふこと、書物が缺乏して居ること、どんな讀み物も少しも手に入らぬこと、それが十九世紀の人間に何を意味するか、これ迄知らずに居たのであつたが、此の地て始めて了解させられる。評論雜誌さへそれを手に入れるには外國へ註文しなければならず、しかもその到着に數箇月待たなければならぬ。そしてこの精神的飢餓が、努力をしたくない氣になりまた努力が出來なくなるに連れて、そして、最初は人をして他

の愉快に冷淡ならしめた彼の唯一の享樂が――熱帶の自然と二人きりで居るといふ愉悅が――段々それに耽りにくくなるに連れて、層一層頭腦を嚙ぢり取る。不活動が全く習慣と目的とを支配して、諸君は自然をば己れが部屋から、或は善くした所で馬車の窓から、眺めて諦めると自白せざるを得なくなると――その時こそ、文學が何一つ無いといふ事は、積極的な苦惱だと分かつて來る。心的飢餓に惱むと同時に氣候に惱んで居るのは、殆ど自分だけである、といふことを見出すのは慰安では無い。年若い女が、強壯な男が、その肩の上へ持ち上げかぬる程の重い荷を頭へ載せて、徒歩でこの島を橫斷してまた日暮れ前に歸る、のを見ると驚かれもし妬まれもする。――その旅行を馬上でやつても今は後幾日も諸君を疲らすであらう。そんな人間共はどんな肉と血で出來て居るのであらうか――恐ろしい日光を浴び、且つ體力を驚く許り費消するに拘らず、見る目にも觸る手にも、蜥蜴や蛇の身體と同じに冷たくて居る！その細い女の身體は、どんな生活力が存して居るか――諸君は不思議に思ふ。そしてこの野蠻な體力と自分の弱さとを對照して、環境に相應して人種なるものを鍛へ、また人種の習慣なるものを形造る諸力の働きはどんなに偉大なものであるか、諸君はより能く了解し始める。

……最後に、若し風土化する運命を有つて居れば、諸君はさういふ特別な事情に苦しま

なくなるであらう。が、さうなり得る迄に、長い時期の神經過敏を堪へ忍ばなければならぬ。そして幾度もの熱病で、血を薄らげ、筋肉を軟らかくし、北國人の健康の色合を眞つ黑に變態しなければならぬ。知的追求は生命を賭して始めて固執し得るといふこと、――世界の此の部分では、甘蔗とココアを植ゑ、ラム酒を造り、煙草を栽培する――或はマドラスハンケチやフーラールを賣る店を開く――そして食つて、飲んで、寢て、汗かくほか、何もすることは無いといふこと――を知らなければならぬやうになるであらう。歐羅巴人種が植民して居る熱帶地は、何が故に科學、藝術、文學を生じないか、――時間（タイム）そのものすら暑さの爲めに弱められてもして居るやうに、徐に動いて居る處では、何が故に他の世紀の習慣や思想が今なほ行はれて居るか――諸君は了解するであらう。

そして諸君の生活の强制的な怠惰と共に、神經系統の長時の刺激昂進と共に、懷鄕病の最初の苦が――熱帶の最初の倦怠が――來るであらう。自然が諸君の眼に美はしくないやうになり得る、といふ事は無い。が、安全な距離を置いて初めて享樂し得る、自然の危險な美が諸君を螫るので、しまひには腹が立つて來るのである。初には心を迷はした色彩が、それが猛烈な爲めに諸君の眼を惱ます。――如何にも單純に如何にも物靜かに見えたクリーオール生活が、夢想もしなかつた遲鈍と不快とを示すやうになる。この絶大な光に、日

も眩む青い日の鎔鑛爐の暑さに、睡眠の出來ぬ夜の空虚な難儀に、昆蟲の呪に、諸君が有つて居る僅しか無い書物を噬む大きな油蟲の顎の音に、自分はどの位長く堪へて行かれよう、斯う諸君は自問するであらう。棕櫚や、いつも雲が懸かつて居る峰々の寶石のやうな色や、攀援莖植物や蔓草や蛇で通過不可能な深林の眺望の、うるはしさに厭いて來るであらう。生暖かい海にすら厭くてあらう、水泳者としてそれを味はふには、朝風がまだ冷たくて瘴氣で重い時刻に起きて外出しなければならぬからである。――就中殊に、熱帶の果實に厭いて來て、汁氣の多い薔薇色の北國の林檎一つにかぶりつく瞬時の愉快の爲めに、欣んで百フランを拂ひたい氣になるてあらう。

六

……然し若し諸君が、この幻滅を永遠のものと信ずるならば――あの昔の蠱惑はその全力を諸君に竭くしてしまつたと想ふならば――諸君はこの自然を知つてゐないのである。自然はまだ諸君を見離しては居ない。――ただ一寸諸君の勢力（エネルギー）を麻痺さしただけてある。欣んで自然に服從しようとの諸君の意をば、自然は少しも認めはせぬ。……自然は人間の

目的を無視して居り、ただ分子を知り分子の結合を知つて居るだけである。そして——北國の濕度と習慣とて濃い——諸君の血管內の盲目な血は、今なほ自然に對して無言な死物狂ひの反抗をして居るのである。

恐らくは自然はこの反抗を永久に鎮めるであらう——斯ういふ風にして。——

或る日、午後の二時間目に、家を出てから數秒の後、これまで一度も覺えの無い感じが——突然に妙に光を恐ろしいと感ずる念が——諸君に起こるであらう。

靑い空の炎が諸君の頭腦の中へ燃え落ちつつあるやう——白い石鋪道と黃色い壁のきらきらした光が、どうかして諸君の生命の中へ貫き入つて——これ迄に知らぬ或る心的昏迷を起こし——思想を朦朧たらしめるやう——な氣がする。……全世界が火に燃えて居るのか、と怪しむ。……海の炎の如き瑠璃色が坩堝の輝きのやうに眼を眩まし痛める。——山山の綠が不思議な風にきらきらしぎらぎらする。……すると言語に絕した眩暈を感ずる。眼を見開いて、またも眩惑するやうなぎらぎらした光が見えるのが恐いから——諸君は兩眼をしかと閉ぢて、——自動的に歩きながら、手探りして——閃きと輝きの外へ行かねばならぬのだ——何處かへ、何處でも、太陽のあの白熱と、山のあの綠な火と、海のあの怪異な色と、から脫せねばならぬのだ、と朧氣に判かつて居る。……それから、眼を開いて

見ると――頭の後の方が堪へられぬ程に重い感じがして――脈が猛烈に搏つて居て――妙な鋭い痛みが時々兩眼を突き刺して――前後の記憶が全く無くなつて居て、身は寢床の中に在ることを知る。……そしてその痛みが增す。擴がる――頭蓋骨一パイになり――叫ばずには居れなくなり――一切の感覺が無くなつて、その代はりに、自分は非常な病氣に罹つて居るのだ、生まれてこれ程非道い病氣のことは無いのだ、といふ弱い意識が、消えたり現はれたりする。

……そして、その長い劇しい熱病がゆつくりゆつくり治つて行くと共に、一切の熱が諸君の血管から去るやうに思はれる。諸君は、以前の如くに、寒さで死んだら氣持ちが好いであらうとは、もはや想ふことが出來ない。――總ての窓を鎖ざしてゐても身震ひする。――天然の狀態では神經に感じないやうな、空氣の流れが、扉の開閉ごとに、冷水が突進するやうに衝動を與へることを感ずる。額を一寸濡らしても、それが氷に感じられる。諸君が今希ふものは、興奮劑と暖かさとである。諸君の血液が變つたのである。――熱帶の自然が、諸君に厚意を有つて居るのである。永久に諸君に、住まはせる準備をして居るのである。

……有色の人達――外國人として、諸君の運命は彼等の間に住むことに多分定められて居るその有色の人達――の親切な介抱を受けて、次第に諸君は元氣を恢復する。そして恐らくは、死の陰に暫く横になつてゐた苦痛は、人間の親切の此の涙を催すやうな無類の經驗に依つて償はれて餘りあるやうに、諸君に思はれることであらう。この國のこの女の性質は、どんなにか倦まず撓まず用心深く――どんなにか無邪氣な同情心に富み――どんなに全然自己犧牲的であることか！彼等の生活は野天に於てであるから、彼等には殘酷な屋ど不自然な、呼吸の塞がるやうな日、睡眠をしない夜、の幾週を通して、辛抱強く――疲勞のつぶやき一つせず、自分等の尋常普通な肉體的欲求を少しも意にせず、報償といふ考へ更に無しに、――醫者が匙を投げれば自分自らの手腕に信頼し――醫藥が無効と知ると藥草求めに林の中へ分け登つて――ひたすら生命を助けようと奮鬪をする。天使の夢といへども、女の親切の、この現實に優して、うるはしいものは有つては居ないのである。

そして體力の恢復と同時に、その病氣が、何か不思議な風に、諸君の五感を――殊に聽く力、視る力、嗅ぐ力を――鋭くしたのではないかと諸君は怪しむかも知れぬ。轉居しても危險は無い程に丈夫になると、諸君は何處か山地へ――變つた空氣を吸ひに――連れ行かれることであらう。そして、恐らくは、香（にほひ）の――色の調子の――聲の色合ひの――快感を

前にこれほど激しく感じたことは無かつた、やうに思へることであらう。諸君は全くそこの風土に馴らされたのである。……すると突然に、熱帯の自然の昔の魅力が、又も諸君を掴む――最初の日よりももつと強く――愉悦の身をのゝき（フリツソン）が還つて來る。その歡びが、血管總てに震ひ亘る――感謝をしようとの口に言へぬ願ひの如くに、諸君の心臓に一パイになつて。……

七

……自分の友のフェリシアンはヴージ地方から新たにこの植民地へ來たのであつたが、その時はその筋肉と元氣とは山國に住まつて居る人のやうであり、その頬は佛蘭西の田舎娘のやうに淡紅であつた。――彼は肉體的にこの地に風土化するに適應して居るとは、自分には思へなかつたのであつた。だから、彼が初めての重病に罹つたことを聽いた時、自分は彼の爲めに大いに心配した。すると、漸次快方に赴くとの消息が、嬉しい驚異として、自分へ屆いた。だが、そこの町が見渡される、綠な或る丘の頂にある、その友が轉地してゐた小さな家へ訪ねて行つた最初の晩、自分は友の容子を見て安心は出來なかつた。友は

緣側の運動椅子（ベルシヱーヅ）に身を置いて居つた。まるで骨ばかりのやうな手を、彼が差し出した時、——その顔がどんなに蒼白であつたことか、また、歡迎のその微笑が、どんなに幽靈のやうであつたことか！

……二人は暫く其處で閑談した。その日は、——理想的平和の夢想をば色の上天的な光輝の中に浸し——生きて居ることの純な喜びのあらゆる空想を變形させて——その魅惑の力が、あらゆるより微妙な感覺生活に浸徹しまたそれと混合して、永久にその生活の光ある一部分となるやうな、さういふやうな熱帶的な日であつた。海の水平線までも瑠璃色で、天空は朝早くから霽れる迄澄み切つて居つた。そして愛撫の如く暖かい貿易風は、峰々の赤裸々な美を包む紗のやうな一片の雲さへ一度も持つて來なかつた。

そして太陽は——熱帶地方の上（うへ）でだけ、その死ぬる時に黄ばむやうに——黄ばみつつあつた。ライラックの色調が西の方から漸次に海と空とに一パイに擴がつた。——日の光に面して居る山々が、光り輝く不思議な色を——その山々の林の濃厚な樹液が、燐火を發して居るかの如く見えるほどに、火のやうな綠の色調を——帶びはじめた。物の影が青くなつた。——遠くの峰々は、殆ど此世のものと思はれぬやうな色合を——金の蒸氣を通（とほ）して交代する、虹のやうな色んな菫色と紫色との色合を——採つた。……恰もカラングの——

熱帶のこの魚が日の光を受ける處で裏返しにされて、その寶石的な綠を濃い瑠璃色と三稜鏡的紫とに變へる時のやうな　あの色であつた。

二人は椅子に凭れて、その小さな田舍家の縁側から、その不思議な光輝を眺めて居つた、——峰と聳えて居る土地が金色の光に浸るのを見、翠綠の山々と一望の海の圓圏とが色を變へて行くのを見て居つた。小さな鳥が、胸に火を宿して、眼に見えぬ手が投げた餘燼の如くに、長い曲線を描いてすうつと通つて行つた。遙か下から、市のつぶやき聲が——嵐のうんうん聲に——我々へ立ち昇つて來た。二人は身動きもせずぢつとしてゐたから、蜥蜴が綠色のや灰色のが、——我々が本當に生きて居るのかどうか怪しんで居るやうに、我我を眺めに——縁側の柱の後からその頭を突き出したほどであつた。自分は、奇妙な二匹の蝶を見ようとして不意に頭を轉じた。するとその蜥蜴がみんなまた姿を隱した。その蝶は、此處の人達の言葉で、パピョン・ニランモ——死の蝶——と呼ばれて居るものであつた。その幅廣い翅は、一番黑い天鵞絨のやうに黑かつた。——そして、その黃色い光を背にして飛んで居ると、蝶の影繪のやうに眺められた。その驚く可き夕方の自分の記憶にはいつも——その時は、自分は、その友人の顏を最後に見て居るのだとは露考へなかつたのであるが——その翼の黑い羽ばたきが、ゆるやかに通つて行く。

……その時自分は、元氣をつけるやうなと思つた色んな物事に就いて、フエリシアンと閑談して居たのであつた。そして一度ならず自分は友が微笑するのを見て幸福に感じたのであつた。……だが二人の會話は勢が無くなつた。二人の眼前の、絶えず募り行く光耀が二人の五感を催眠させて――その美の驚嘆を以つてして徐に二人の意志を壓倒して――居たのである。それから、日の――巨大な――眼の眩むほど金色の――圓盤がライラック色の海面に觸つて、その素晴らしい橙黄色の光が天心まで燃え立つた時、二人は畏懼の念に到頭無言になつて居るのであつた。

西天のその橙黄色は朱と濃くなつて行つた。和らかにそして非常に速に、――谷々を滿たし、峽々を漲らせ、林を黑くし、一寸の間、峰々の頂に深紅の光を捉へさせて――地面からの藍色の呼氣の如くに、夜が立ち昇つた。森と野とが早瀨のやうな、常に太くなつて行く淙々たる音を――無數の小さな動物の器樂と肉聲から成つて居る音を――發しはじめた。槌に打たれる鐵のカンカンいふ音、石の上へ銀を落とすチリンチリンいふ音、カブリット・ボアの涸れたメーメー聲、木蛙のカアカア聲、蟋蟀のキイキイキイキイ、なのである。ピカピカと大きな震るへる光が暗い處で上がつたり下がつたり――チラッと光つては全く神祕的に消える――のが見えだした。それは眼覺めつつある螢なのであつた。すると、

ホア・カノンの枝葉のあたりに、黒い恰好のものが羽ばたき始めた。それは鳥ては無くて、何の音も立てずに、列を爲して素早く飛ぶ物て。その一つ一つが、枝の尖にある何かを咬みてもするやうに、順番に一寸の間休む。――それから他の物に居場處を讓つて、くるくる旋回しては、また他の方面からして戻つて來る。……それはギムボ卽ち大蝙蝠なのてあつた。

が二人は、日沒の感情に――或る人種の繼承の經驗たる彼の靈的な感情に、――數かぞふ可からざる、祖先の經驗の總額に、――幾百萬年の、混合して居る歡喜と苦痛とに――なほも壓倒されて、無言て居つた。……不意に美はしい聲がその靜寂を貫いて……訴ふるが如くに斯う響いた。――

――『バ　コムビネ、シエ！――バ　コンビネ　コム　サ！』（考へ事をなさいますな、あなた！――そんなやうに考へ事をなさいますな）

……その女は、その美はしさ唯だ日沒にだけ劣るやうに思はれた、――その花車な素足て音立てずに歩んて、二人の後から全く眼につかずに來た、このほつそりした混血の娘は、……『それから、あなた』と、優しく叱るやうな調子て、自分に對つて言つた、――『あなたはこの方の御友達なんてせう！考へ事をなさるのを、あなたはどうして默つて見てお

いてになるのです？考へ事をなさるから、この方がお丈夫におなりにならぬのです』

コンビネは、クリーナールでは、烈しく考へること、だから從つてまた、不幸で居る事、を意味する ――飾り氣の無い此の人種には、子供がさうのやうに、何かを强く考へることは、ただ非常な難儀に壓へられた時だけ可能なのだからである。

――『バ コムビネ、――ノン、シエ』と、フエリシアンの髪毛を撫りながら、悲しげに彼女は繰り返した。『私達が年寄りになるのは考へ事をするからです。……さあ、もうお友達に左樣ならを仰しやる時刻ですよ』……

――『この人は實に親切でね』と、喜ばせようとして微笑して、フエリシアンは言つた、『どんなに親切か、君に話すことが出來ぬぐらゐだ。だがこの人には分からないんだ。僕が無言で居ると、苦しんで居るのだ、と信じて居るのだ。僕が笑つて居るのを見る時だけ、滿足に思ふんだね。それで一時間クリーオール話しをいつも聞かして吳れるんだよ、僕を面白がらせに、僕が子供でもあるやうに』……

さう言つて居る時、彼女は友の首を、その片腕で抱いた。

――『ドゥー ドゥー！』と、彼女はなほも言ひ張るのであつた。――その聲は鳩の聲のやうであつた、――『シ ウー エーンマイン モアン、バ コムビネ ― ノン！』〔この文の結尾

の句と同意味」

そしてその奇異な異國的な美に、その野蠻なやさしさに、そのしなやかな愛撫に、その眼の天鵞絨の魅力に――自分には、彼女自らのものでは無い、まただその瞬時のものでは無い、映つて居る或る物が――薄氣味が惡るいほど肉感的な或る物が――金色な肉と身を現じ、誘惑されたさまよひ人悉くに小聲でささやく、熱帶の自然の靈が――見えたやうな氣がするのであつた。かう小聲で、――

『あなた、私を愛して下さるのなら、考へ事はなさらないで下さい！』……

エ

一

殆ど毎夜、丁度就床時前に、一群れの子供が街路で互に物語を話し合つて居るのを自分は耳にする。物語、謎々即ちティムティム、それから唄、それから寄り合つての遊戲、それが――貧富を問はず――此處の兒童生活の悦樂である。自分はその物語を――それまで自分が聞いた物語のうちで一番奇妙なものに思はれる物語を――聽くのが、殊に好きである。

自分は、此處へそれを書く事が出來る程に首尾能くその數多くを書き取る事が出來た。――他の物語は、クリーオール友人が自分の爲めに書いて吳れた。だからなほ更能く書けて居る。こんな物語を、其些末な委細の本來の素朴と初心な氣分とを總て取り入れようとするには、それを話して居る通りの早さに、速記で書き取る事が出來なければならぬ。言

うて呉れるのを書き寫すといふ鈍い過程を踏んでは、失ふ所が甚だ多い。七着の……子供でも成人でも——話家の單純な心は、書取法を用ひては避け難い、中絶や拘束の爲めに、非常な苦痛を感ずる。—— 請誦者は元氣が無くなり、すぐ退屈をし、出來る限り早くその仕事をし終へようと思つて、わざとその說話を短かめる。そんな人には一度以上——少くとも、同じ風に　一と文句を繰り返すのは苦しいやうてある。一方また、頻繁に問を掛けることは、連續的な口授に必要な記憶力の運用と想像力の堅實な抑制とが無訓練な頭腦にはどんなに苦しいものかが見えるぐらゐに、非常に溫和な人間をも怒らせることがある。が然し自分は、口の上の文學の幾多の珍品を——その最初の根源は何んなてあらうと、地方的思想と脚色との爲めに非常に變化されて、明らかにマルティニーク式の民間說話の一團を形造つて居るやうな、一群の物語を——忍耐に由つて手に入れる事に成功した。そのうちには、自分の近處の子供等が殊に能く知つて居るものが幾つもある。そして殆ど何れの說話者も、本來の筋をば本人手製の——本人が勝手に變へる——委曲を以て粉飾する、といふことを自分は認めて居る

自分はそんな物語の一つを——エと惡魔との身上話を——原文に拘泥しないで飜譯して見よう　エの全生涯は、總て書けば大きな一冊子になるてあらう——それ程に彼の冒險の

數は多い。が、これから語る冒險は、自分には、その總ての冒險談中一番特徴を現はして居るもののやうに考へられる。エはマルティニーク民間傳說のうちで最も奇妙な人物である。エは典型的なビタコで――即ち、横着な種類(たち)の山住居の黑人で――市の黑人がそれをからかふことを好む田舍の黑人で――ある。マルティニークの民間傳說の惡魔はといふと、遠くから見るとトラヴィユール〔勞働者〕に似て居る。が、危險なほどその側へ立ち寄ると、赤い眼と赤い髮とを有ち、そのシャポー・バクーエの下(した)に小さな角(つの)が二本あり、猿のやうな足をして居り、その喉に火がある、ことが判かる。エ　カ　サム　ヨン　グーオ、グーオ　マカク。……

二

サ　ク　イ　パ　テ　コンネート　エ？……マルティニーク全島中、エの事を一度も耳にしなかつた者があるか？誰れも彼れも此老惡漢を知つて居つた。彼は日の下(もと)のありとあらゆる罪過を有つて居つた。――この全島切つての一番の横着な黑人であつた。全世界一番の大物食ひてあつた。驚く許り澤山[註]の子供を持つて居つた。そして、その子供達はみんな、

いつも大抵、空腹の爲めに半死半生てゐた。

　さて、或る日のこと、エは何か食べる物は無いかと林へ行つた。そして、殆ど日一日その林の中を歩いて、非常に疲れた。が、食ふものは何も見附からなかつた。て、探索を思ひ止まらうとした時に、バチバチといふやうな變な音が――大して遠く無いところで――聞こえた。それは、何かと見に行つた――それへより近く行つた時、大きな木の後へ身を隱して。

註　土語でいへば、「ヨン　ラフアール　イシユ」――子供の旋風）

　すると直ぐと、その林の小さな窪みの處へ行けたが、其處に大きな火が燃えて居るのが見え――その火の傍に惡魔が一人坐つて居るのが見えた。その惡魔は山ほどある蝸牛の塊を炙つて居つた。そしてエに聞こえた音は、その蝸牛の殼の壞れる音であつた。その惡魔は餘程の老人らしかつた。――麵麭の木の幹に腰かけて居るのであつた。て、エは長い間、能く彼を見ることが出來た。暫くエは眺めてから、その年寄りの惡魔は盲目だといふことを知つた。

　惡魔はその手にフエロースが、卽ち非常に澤山な唐辛子の入つて居る（エビ　アン　ビ

ル　ビマン）鹽魚とマニチクの粉とを煮たものが　一度エのやうな黒人が非常に好きな物が　一パイ入つて居るカラバッシュを持つて居つた　そ！で、その惡魔は餘程空腹と見えて、其食物がどんどん早くその喉を下りて行くので、それが無くなつて行くのを見るのはエには實に情無かつた。餘りに情無くて、其年寄りの盲目惡魔のものを盜んでやらうといふ誘惑に抵抗が出來なかつた。そこで少しも音を立てずに惡魔の側まで這うて行つて、盜み始めた。惡魔が手を口へ擡げる度毎に、エはカラバッシュの中へ指を突込んで、一片摑み上げるのであつた。その老惡魔は怪しいぞと思つたやうな顏をしさへもしなかつた。――何事も知つて居ないやうであつた。で、エは其老惡魔は大馬鹿者だと思つた。段々と膽が太くなつて來て、――カラバッシュの中から、段々と大きな塊を手に入れて、――惡魔が食ふよりも、もつと早いぐらゐに食つた。到頭カラバッシュは小さな切れが一つしか殘つてゐなくなつた。エはそれを取らうと思つて手を出した、――すると不意に惡魔がエの手を素早く摑んだ！エは餘りに怖ろしくて、アイ・ヤイーと叫ぶことさへ出來なかつた。惡魔は、その最後の一切れを食ひ終はり、カラバッシュを投げ棄てて、恐ろしい聲でエに言つた、――『アト　サップ！――ウー　セ　タ　モアン！――さあ捉へたぞ、貴樣大物食ひ奴――貴樣は己れのもんだ！）それからエの背中へ、大猿のやうに、飛び上がつて、

兩足をエの頸へ捲き附けて、叫んだ、——

『貴樣の小舍へ負うて行け——さ、早く步け！』

……エの憐れな子供達がその歸るのを見た時、自分達の父が何を背中に負うて居るのかと怪しんだ。みんなはそれを麵麭か野菜の袋かも知れぬ、或はバナナの鈴生(すずなり)の枝かも知れぬ、と思つた、——といふのは、もう暗くなりかかつてゐて、能く見えなかつたからである。みんな笑つて、その齒を出して見せて、踊つて叫んだ、『さあ、父ちやんが何か食べる物を持つて歸りよるぞ！——食べる物を持つて歸りよるぞ！』ところが、何を脊負うて居るかが見えるほどエが近く來た時、みんなは唸つて、身を隱して飛んで逃げた。可哀相に、母はといふと、怖ろしさの餘り、兩手を上へ上げることが出來るだけであつた。

小舍へ入ると、惡魔は一隅を指さして、エに言つた、——『あそこへ己れを下ろせ！』エは下ろした。惡魔はその隅に坐つてゐて、その夕方もその夜も少しも動かず少しも口を利かなかつた。實際餘程穩かな惡魔のやうであつた。子供達はそれを眺めだした。

ところが朝食時分に、其憐れな母がどうにか都合して子供達の食ふものを——やつと麵麭の實と山薯と——得て來ると、其老惡魔は其隅から起き上がつて、つぶやいた、——

――『マンマン　モ！――パパ　モ！――トゥット　イッシュ　モ！』（母も死ぬる！――父も死ぬる！――子供みんなも死ぬる！）

そしてみんなへ息を吹きかけた。するとみんな倒れて死んだやうに硬く――ラィディ・カダーヴ――なつた。それから悪魔は食卓の上にあるものみんな食つてしまつた。食ひ終はると、その壺や皿に汚物を一パイ入れて、エや一家のものみんなに、また息を吹きかけて、つぶやいた、――

――『トゥット・ムーヌ　レヱ！』（みんな起きるんだ！）

それからみんな起き上がつた。すると悪魔は汚物の一ぱい入つて居る壺と皿とを指さして、みんなに言つた、――

――『コブ・モアン　サ！』

そこでみんなは、言はるゝ通り、それをみんながつがつ食はなければならなかつた。

それからはどんな物を食はうとしても駄目であつた。何かを料理する度毎に、悪魔は同じ事をするのであつた。翌日もさうであつた、その翌日も、またその翌日も、そしてそれから長い長い間、毎日々々さうであつた。

エはどうして好いか分からなかつた。がその妻は、自分には爲る事があると言つた。若し自分が男でさへあるなら、直ぐその惡魔を追ひ拂ふ事が出來るのだが。かう言ひ張るのであつた、『エよ、ボン。ディエ（善なる神）に會ひに行つて、どうして宜いか尋ねて見よ。行ければ自分が行きたいのだが。女はあの大きな山へ登るほどに丈夫では無いから』

そこでエは、或る朝極、極早く、日の出ぬうちに出かけて、ペレ山へ登りだした。彼は登つては歩み、歩んでは登り、到頭モルン　ドゥ　ラ　クロア〔十字架の峰〕の頂へ達した。それから出來るだけ音高く天を敲くと、善なる神が雲から顏を出して、何が欲しいのだとお尋ねになつた。

――『エー　ビヤン！――サ　ウー　ニ、エ？サ　ウー　レ？』

エが自分の困つて居る委細をお話しすると、善なる神が仰しやつた、――

――『ポーヴ　マ　ポーヴ！可哀相だな！私はお前が來ないうちにそれはみんな知つて居つた。エ！どうして好いか私はお前に言つてきかすことは出來るが、役に立たぬだらうかと思ふ――お前は決してそれを實行することが出來なからうから！可哀相にエよ、お前の大食がお前の身の破滅にならうとして居る！でも、やれゝばやつて見よ。さあ、私が言ふことを能く聽け。先づ第一に、お前は家へ歸るまで何も物を食つてはならぬ。それから

お前のおかみさんが子供の食事の支度をしてから、悪魔が起き上がるのを見たら、大聲で呶鳴るのだ、――「タム　ニ　プー　タム　ニ　べ！」と。すると悪魔は倒れて死んでしまふ。何も食はぬ、といふことを忘れてはならぬぞ――ウー　タンヌ？』……

言はれたことを忘れませぬ、下りて行く途中何も食ひませぬ、とエは約束した。――それからボン・ディエに別かれを告げて（ビヤン　コム　イ　フォー）其處を去つた。途々、善なる神が言はれた言葉を繰り返し繰り返ししてゐた。――『タム　ニ　プー　タム　ニ　べ！――タム　ニ　プー　タム　ニ　べ！』――と幾度も幾度も。

ところが家へ着かぬうちに小さな流川を渡らなければならなかつた。するとその兩岸に野生のグアヴの樹が、酸いグアヴを澤山に着けて、生えて居るのが見えた。――酸いといふのは、まだグアヴの熟する時ては無かつたからである。可哀相に！エは空腹であつた！誘惑に抵抗しようと力一ぱい試みたが、その誘惑は彼には餘りに强かつた。彼はボン・ディエへの約束をすつかり破つた。食つて食つて食つて、グアヴの實が一つも殘つて居ないまで食つた――それからズイカクや絲色の梅を食ひ、いろんな厭な酸い物を食つて、もうそれ以上には食へぬまで食つた。

小舍へ歸つた頃には齒が浮いて、夕食を支度せよとその妻に言ふのに、はつきりとは口

が利けぬほどであつた。
そこでみんなは心配が無くなるのだと思つて嬉しがつてゐたが、エは實際は何事も爲し得る有様ではゐなかつた。夕食の支度が出來ると惡魔はすぐと例の如く隅から起きて來て、食卓へ近寄つた。そこで、エは口を利かうとした。が、齒が浮いて居るもんだから、――

『タム　ニ　プー　タム　ニ　ペ』と言はずに、

――『アンニ　トクエ　ディアブ・ラ　カニャン』

と、口ごもつて言へるだけであつた。

これは惡魔には一向何の效果も無かつた。それには慣れて居る！やうであつた。みんなへ息を吹き掛けて、みんなを眠らせて、夕食をみんな食べて、空な皿に汚い物を一パイに入れて、エと家内のものとを起こして、いつもの通り命令した、――

――『ゴブ・モアン　サ！』そこでみんなは、それをがつがつ食はなければならなかつた――一切れ殘らず。

一家の者は空腹と嫌惡とて殆ど死ぬ許りになつた。それから二度もまたエはペレ山に登つた。二度もまたモルン　ドゥ　ラ　クロアへ登つた。二度もまた氣の毒にも善なる神の

お邪魔をしたが、何の甲斐も無かつた!!——いつも、歸る途中、お腹一ぱいにいろんな厭な酸い物を詰め込んで、旨く口が利けなかつたからであつた。惡魔は相變はらず晝も夜も居た。——可哀相な母は、身を地に投げ倒して、髮をかきむしつた——それほどに不幸であつたのである!

ところがこの氣の毒な女に幸にも、鼠のやうに惡る賢い子が一人——如何にもその名に

註　マルティニークの大野鼠は、マルティニークの民間傳說では、あらゆる惡る賢さの記號である。そして恐らくはその評判に相當するものである。

ふさはしいティ　フォンテ(厚かましい子)といふ名の男の子が——居つた。母がそんなにひどく泣くのを見て、斯う母に言つた、——

——『かあちやん。も一度とうちやんを善なる神に會ひにお出しなさい。私にすることがあるから!』

母はその男の子がどんなに惡る賢いかを知つて居つた。その言ふ言葉には或る意味が籠もつて居ることを確信した。——そこで、老エをボン・ディエに會はせに、最後にと出かけさせた。

エは今までいつも『ラヴラッス』と此處ていふあの長い大きな上衣を着て居つた――暑からうが寒からうが、雨が降らうが天氣であらうが、それを着ずに出たことは無かつた。それには非常に大きなポケットが二つ――左右に一つづつ――あつた。ティ　フォンテは父が出かけようと支度するのを見ると、ひよいとその片方のポケットへ飛び込んで、その中へ隱れた。エは何の疑ひも抱かずに、ずうつとモルン　ドゥ　ラ　クロアの絕頂まで登つた。それへ着くと、その子供は――善なる神が言はれることが聞こえるやうに――エのポケットからその片方の耳を出した。

今度は大層立腹された――ボン・ディエが。大變意地の惡るい口の利き方をされた。大いにエをお叱りになつた。それても非常に親切で――やくざもののエに對して非常に寛大で、骨折つて幾度も幾度もあの言葉を――タム　ニ　ブー　タム　ニ　ベを――お繰り返しになつた。そして、今度はボン・ディエは無駄にお話しになつたのでは無かつた。言はれたことを覺えることの出來る者が居たのてあつたから　ティ　フォンテは出來るだけその機會を利用した。――その自分の小さな舌を尖らした。山の下で、空腹の爲めに死にさうになつて居る母と、その小さな兄弟姉妹のことを思つた。その父はといふと、エは又しても前と同じことを遣つた――見つかつた綠な果物で腹を一ぱいに脹らませた。

エが家へ歸つて上衣を脱ぐと、ティ　フォンテはピョンと飛び出して――母の處へ走つて行つて囁いた。――

――『かあちやん、おいしい夕食をたんと支度なさい！――今日はそれをみんな私共だけて食べられるんです。善なる神の仰しやつたことが無駄ではありませんでした――仰しやつたことを殘らず私は聽きましたから！』

それから母は、美味いカラルー・クラブと、トン・トン・バナヌと、マテテ・シリク、――クース・カエを幾皿と、レジーム・フィーグ（小さなバナナの總）二つと、――簡單に言へば、實際、非常に上等な夕食を支度して、つるつると喉へ落つるやうにタフィアの一とショピーヌも添へた。

惡魔は、これまでいつもさう思つたやうに、今日も自分は大丈夫だと思つて、御馳走が一切出來上がると直ぐに起き上がつた。ところがティ　フォンテも亦起き上がつて、出來るだけ聲高に呶鳴つた。――

――『タム　ニ　プー　タム　ニ　ベ！』

と同時に惡魔は、地獄の底まできこえたかと思ふほどの叫び聲を發して――倒れて死んでしまつた。

その間ヱは、實際馬鹿者であつたが馬鹿者らしく、ボン・ディニが話されたことを言はうとしてゐたが、ただ

――『アンニ　トクヱ　ディアーブ・ラ　カニヤン！』

と口ごもつて言へるだけであつた。

彼は何も役には立たなかつたのである。――そこでおかみさんは、坐つてそんないろんな美味い物を食べさすことを止めて、直ぐに床へ入らせようと餘つ程思つたが、元來親切な女であつたから、ヱに坐らせて、さういふ價値は無いのだけれども、子供達と一緒に食べさせてやつた。そこでみんなは食べて食べて、夜が明けるまで食べて腹をふくらませ續けて居つた――ポーヴ　ピティ！可哀相に！

ところが其間に惡魔は非道い臭ひを出しはじめてゐて、そしてヱにはそれが動かせぬほど、非常に大きく膨らんで居つた。でも、どうにかして、それを追ひ拂はなければならぬと思つた。子供達はたらふく食つたので、みんな力が充ち滿ちて居つた、――ヨ　テ　ブラン　ラフォース。そこでヱは綱を一本持つて來て、その片方の端を惡魔の片足にくるくる巻き括んだ。それから彼と子供達と――みんなで曳張つて――到頭その惡魔を小舍から引きずり出して藪へ持つて行つて、死んだ犬同然に其處へ放つて置いた。みんなはその年

寄りの悪魔を逐拂つたので非常に嬉しく感じた。

ところがその三四日後に、やくざもののヱは鳥を狩りに出て行つた。矢をうんと澤山に携へて行つた。不圖悪魔のことを憶ひ出して、もう一日見て見たいものだと思つた。そこて見た。

フーアンク！何といふ光景か！悪魔の腹は山のやうに膨れ上がつて居るのであつた。黄色い處、青い處、緑の處があつて、——今にも破裂しさうに思はれた。そこでヱは、いつも馬鹿者であつたが馬鹿者らしくも、落ちて悪魔の腹へ突き立つやうに、空へ矢を一本射上げた。突き立ててから彼はその矢が取りたかつたので、悪魔の上へ登つて、引つぱつて引つぱつて、到頭その矢を抜き取つた。それから——死んだ悪魔はどんなやうな臭ひがするか見ようと思つて——その矢の尖を鼻へ當てた。

當てると直ぐに、その鼻が脹らんで、砂糖栽培地の製糖所の鍋のやうに大きくなつた。ヱは鼻の重みで殆ど歩かれなかつた。が、又もボン・ディヱに會ひに行かなければならなかつた。ボン・ディヱは斯う仰せになつた、——

——『あゝ！可哀相に！ヱよ、お前は一生馬鹿者て通すのだな！——お前は確に全世界

の一番の大馬鹿者だ！……でも、どうにかしてやらなければならぬ。——兎に角その鼻を捨てるやうに力を藉してやらう！……そのやり方を話してきかさう。明日の朝、極早く起きて、大きなタヤ（鞭）を手に持つて、どの藪も皆それで打つて、そして鳥をみんなロシユ　ドゥ　ラ　カラヱルへ追ひやるのだ。それからお前は、ボン・ディヱさんがみんな嘴と羽毛とを取つて、海の中で充分水浴びせよと仰しやつて居る、とみんなに言ふのだぞ。それて、みんなが水を浴びて居る間に、お前は其處に置いてある澤山の嘴の中から自分で鼻一つ選ぶことが出來る』

可哀相なヱは善なる神が仰しやつた通りにした。そして鳥が水浴をやつて居る間に、澤山の嘴の中から鼻一つ自分にと拾ひ上げて——自分の製糖所の鍋を其代りに殘して置いた。

彼が取つた鼻はクーリギクー[註]の鼻であつた。で、クーリギクーが、今日に至るまでも如何にも恥づかしさうな顏をして居るのはこの爲めてある。

註　クーリギクー卽ち『コリン　ギクー』は、瘠せた長い身體の、素敵に大きな嘴を有つた、マルティニークの鳥である。非常に陰氣な、無口な表情を有つた鳥である。……『メーグ　コム　ヨン　クーリギクー』（クーリギクーのやうに瘠せて居る）といふ比較は、病氣の爲めに瘠せ衰へて居る人の樣子を言ふに能く使ふ言葉である。

三

……憐れなエよ！――お前が屬して居る人種のあの長の奴隷的飢渇を如何にも殘酷に發露して居る、彼の飲食に關する奇異な民間傳說の外に、お前は今なほ自分には餘りに生き過ぎる程生きて居る。といふのは、雲を抽んずる峰の斜面で甘蔗を伐つて居るお前を自分は見たからである。――あらゆる主人に對して幾世紀間の怨恨を抱いて生まれ出てながら、飢餓が主人に從はざるを得なくする時、仕事を求めてぶらつき廻はる折、蛇は居らぬかと氣づかひながら、手に彎刀を携へて栽培地から栽培地へと渡り歩いて居るお前を自分は見たからである。――野原で働くよりも二百斤も重さのあるバナナを、二十哩もある市場へ運んで行く方が宜いと思つて居るお前を自分は見たからである。――死火山の噴火口へ、キャベッパームを探しに、――いつも空腹で――いつも不甲斐無して――蛇の群れ居る林の中を登つて行くお前を自分は見たからである。それからお前は相變はらず大馬鹿者である、エよ。――そしてお前は相變はらずうぢやうぢやと子供を――お前のラファール イシュを有つて居る。――そしてその子供等は飢ゑて居る。それは、お前が儲ける以

上のものを貪食する――お前の心臓や、お前の見事な筋肉や、お前の憐れな無邪氣な頭腦すら貪食する惡魔を――あの惡魔タフィア〔甘蔗燒酎〕を――お前のアジューパへ入れて居るからである。……そして今はそれを追ひ拂ふに力を藉して下さるボン・ディエは一人もおいてにならぬ。といふのは、眞にこれまでお前が有つてゐた唯一のボン・ディエは――お前の昔のクリーオールの主人は――もうお前を世話することは出來ぬ、そしてお前はお前の身の世話をすることが出來ぬ。無慙にも道德的になつて、文明開化の此の世紀の意志は、乏しい食物で以つてお前を强壯に健康に育てあげた彼の家長の權力を永久に廢してしまつて、お前を鞭韃してこの世紀が抱いて居る正義の觀念を與へはしたが、生存競爭の大法について子供のやうにお前を無邪氣な儘にして置いた。だが、お前は其大法を胸に感じて居る。――お前は共和國の一市民さまだ！お前は、投票が自由に出來、仕事が自由に出來、それを欲するなら餓死が自由に出來、また惡事を行つてその爲めに苦しむ事が自由に出來る。――そして、お前が新たに知り得た此事は、お前を唖然たらしめ、お前は今は笑ふことさへ殆ど忘れて居る。

一

まだ四時半だ。明け行く日の、極めて仄かな青い光が射して居る、――だのにヸクトアールは、自分を眼覺めさせる香（かをり）の好い黑珈琲のコップを携へて自分の寢床の横に立つて居る。どうしたのだらう！斯んなに早く？……すると突然心臟のとどろきと共に、今日は自分の最後の西印度日なのだ、といふことを憶ひ出す。そしてその子供は――その內氣さうな大きな眼にやさしい光を漲らせて――自分の手へ何かを突きつけて居る。

バナナの葉の小切れに包んだ華尼爾拉（ワニラ）の豆二つ――彼女の貧弱な餞別なのである！……他の下（くだ）らぬ一寸した紀念品はもう荷に入れられて居る。自分を知つて居る人は殆ど誰れも、何か自分に呉れた。マム・ローベールは、蜜柑の種（たね）――『土産蜜柑（ギフト・オレンヂ）』の種――の小さな包（つつみ）を持つて來て呉れた。これをチョッキの衣嚢（ポケット）に入れて居る間は、決して金に事缺かぬ

といふ。シリリアはブーを一包みと、風が吹いても消えぬといふ保證附きの、佛蘭西マッチの可愛らしい箱一つと、持つて來て呉れた。洗濯女のアザリーヌは小さな懷中鏡を呉れた。マシャンヌのセルボンニーは昨夜自分にグアヴ・ゼリーを小さなコップに一パイ殘して置いて行つた。ミミは――可愛い子よ！――小さな紙製の犬を！持つて來て呉れた。それがその女の子の玩具のうちで一番善い玩具なのである。が、敢てそれを斷わりでもすれば、そのやさしい黑い眼は、涙の瀧を流すであらう。……嗚呼、ミミよ。小さな紙製の犬を、自分はどうしてよいのか？それから、チョコレート棒やココアナットや砂糖黍や肉桂の實、こんなものを自分はどうしてよいのか？……

二

……取引所（ブールス）の大掛時計で五時二十分過である。山影が海岸から退きつつある。――長い波止場が日を受けてぬつと黃色に突き出る。――ブラース　ベルタンの苔滿林度、それからその半分の高さの燈臺、それから入江に沿うて居る赤瓦の屋根、それが日の光を捉へる。それから、燈臺の上へ――信號標の南側の桁端（けたはし）から下がつて居る一番外側の綱の上へ――

大きな黒球が、丁度、蜘蛛が其糸を登るやうに、不意に走り上がる。……南方からの船！てある。その汽船の姿が見附かつたのてある。ところて自分は、特に買ひ求めた木箱の中へ、色んな果物や野菜の珍品や、貰つた妙な小さな品物を、まだ詰め得ずに居る。若し船頭のラディースが手傳ひに來なかつたなら、支度が出來なかつたことてあらう。といふのは、訣別を告げに來る友人や知り合ひの爲めに、荷造りが絶えず邪魔されるからてある。マム・ローベールは可愛らしい小さな娘を――色の白い、そして菫色のフーラールを、その金髪の頭に捲き附けて居る娘を――自分に見せに連れて來る。それはバジリークといふ名の子て、これからそのブーエミエ　コンムユニオンへ行かうとして居るのてある。だから自分は、その柔毛のやうな兩の頰へ一度づつ、この植民地の習慣どほり、接吻してやる。――それにその子は、船が遙かに遠い紐育へ安全に自分を運ぶやうにと、ノートル　ダーム　ドゥ　ボン　ポールへお祈りをして呉れるといふのてある。

　すると丁度その時、その蒸氣船の砲聲が町の上を、また背後の山々へ、響く。何れもその幻の大砲の雷音を以つてしてそれに應へる。

三

……年寄りの女黒人をお伴にして、早も南棧橋へ出て船待ちをして居る、白人の年若い淑女(レディ)が居る。――屹度、自分の同船者の一人となるのであらう。頗る氣持ちの宜い風采の女である。優しい細そりした姿――顔は非常に綺麗とは言へぬが、上品で過敏らしく、黒い睫毛の下(した)の菫色の眼には妙に人を魅惑する力が籠もつて居る。……

自分を見送りに來た一友が、その女に就いて一切のことを話して呉れる。リ孃は家庭教師になりに――永久にその生れ故郷のこの島を去りに――紐育へ行かうとして居るのだといふ。おとなしいクリーオール娘には孃の身の上よりも、もつと傷ましい身のものも澤山ありはするが、孃の身の上も中々に物哀れてである。しかも自分一人で行かうとして居るのである。接吻をして、その年寄りのティティーヌに訣別をして居るのが見えるから。――『アディエ アンコ、シエ。――ボン・ディエ ケ ベニ ウー!』と、可哀相にその下婢は、その深切さうな顔に涙をたらたら流しながら、啜り泣きする。彼女はその青い肩掛を外づして、船が木造の階段からすさり行く時、それを打ち振る。

……それから十五分後には、そのマドモアゼルと自分とは、グアドゥループ丸のサㇾンデッキを覆うて居る日除の下に居る。乗客は少くも五十人はある、――多くは、椅子に腰を下ろして居る。椅子は、下腕の置場になるやう肱掛が非常に長くなつて居る、不精らしく見えるデメララ椅子である。頭上には、日除の枠から吊り下がつて、鸚鵡が入つて居る小さな籠が二つある。――それから、ホヰール・ハッチに繋がれて、栗鼠よりも大きからぬ綠色の小さな猿が二匹――サキキノキが二匹――居るのが見える。それは英領ギアナの森に居たものである。二匹は、輪に歩いたり、登つたり、降りたり、艙口(ハッチ)へ繋いであるその短い綱の丈一ぱいまで進んで出たり後退りしたりして――鋭い細い聲で、鳥のやうに、絶え間無しにキイキイいつて居る。

グアドゥループ丸にはサン　ピエールへ下ろす荷が七百個ある。我々には――菫色眼の娘と自分とは――『歸り來る者の國』を最後に一目見る時間がたつぷりある。

自分はその娘に格別の同情を覺えて、どんな考がその頭を往來して居るのかと怪しむ。といふのは、好きになつた場處や人を後にして去るといふ自然的な情緒が起こしがちな、彼(あ)の同感的氣分に自分はなつて居るからである。そして今將に去らんとするに際して、こ

の熱帶的自然の美を、また自分が別かれを告げんとしつつある生活の單純な妙味を、これまでに無く理解して居るやうに思はれる時の今――斯ういふ間が自分にやつて來る、――『あの娘は自分同様に此島のもの總てを――否、其處で育つて來た事だからして、自分よりも遙かに餘計なぐらゐにも――愛してゐはしないか』だが、この國で生まれた子だから、まだ他國の空を知つてゐないのであらう、――恐らくは、もつと晴れやかな空が世にはあると想つて居るのであらう。……

……此の世の何處を探しても有りはせぬ、菫色の眼よ！――日の下に何處にも！……嗚呼、熱帶の朝の、黎明無しの光耀！――一百の峰々の紫なせるが上へ――モルンの波なせるが上へ――巨大な日の光の、突如としての一と跳び上がり！それから、森の睡眠から覺めた計りの涼しい、そして馬鹿に甘いやうな、汁氣の多さうな、濃い植物性の匂の重々しい――山からの夜明けの微風！――それから、山の斜面の甘蔗の中を、嵐爲す紙音立てて、サラサラガサガサ走り過ぎる荒い强い風！――

それから、纏繞植物が無言に流れ垂れて居るが爲めに、それに綠に濡れ滲みて居る――攀援莖植物のライラック色、黃色、薔薇色の花の泡が、その上に飛び散つて居る――森林の巨大なる夢！――

それから、高みへ登れば登る程、背後に垂直に立ち昇るやうにいつも思はれる——降る時には、眼前に、沈んで扁たくなるやう思はれる——四方を輪と取り巻く海の、永遠な瑠璃色の幻！——

それから、菫色の天鵞絨なす夕暮れの遠距離。——空すべてが、溶けた太陽の蒸氣に充ちて居るやう思はれる時、燃ゆる橙黄色を背に、棕櫚のゆすぶれ！……

四

今朝の寶石やうの澄み切つた透徹さに、山々と空色の影を有つた窪みとは何といふ美しさであらう！ベレすら、その輕い極みの紗の頭飾だけ着けて居る。そして、その綠の衣物のあらゆる襞は、早朝の日の爲め、餘り見かけぬ柔らかい色味を帶びて居る。彩色されて居る此町の古怪な尖りが——一望の眞つ青な入江には赤や黄やクリーム白を點在させて——この清澄な光に、恰もダイヤモンドレンズを透して見るが如くに、鋭どさを帶びて居る。そして能く見知つて居る山々の生きて居る綠の上に抽んでて、彫像の——その白い十字架の上の黑い基督と、モルン　ドゥランジュの白い聖母との——顏すらゆがまぬ棕櫚の間に

今日は見える。……恰もこの島がそのあらん限りの無上の麗はしさを裝はうて、そのありつたけの魔術を施して、居るやうに思はれる、――さまよひ出るその子をば――其處なる菫色の眼をば――最上の魅力で引き戻さうとして。……その娘も亦、見て居るのである。

娘の眼に、ヴァ　ドゥ　パルナッスの大棕櫚が――腰を屈めて居る美人の如くに、我々に別かれを告げに遙か遠くて身を曲げて居るあの大棕櫚が――見えるか知らと自分はいぶかしむ。あの棕櫚は、この娘に何か言はうとして居るのでは無いか知らと自分は怪しむ。そして自分は、その何かが何であらうか想像しようとする。――

――『孃様、あなたは、あなたを愛して居る物總てを、本當に棄てて行かうとするのですか！……お聽きなさいよ！――あなたがお越しになる處は灰色の薄暗い國ですよ、――もつと風の荒い國ですよ、――奇異な神々が居る國ですよ、――自然さへ一年一と廻りの半分も生きて行けなさうに、荒れた堅い國ですよ！あちらでは決して私共を御覧にはなれませんよ。……そして其國で、あなたが長の眠りにお就きになると、お孃様、その土地はあなたを擡げる力はありはしません。――石の非常な重さが、永久にあなたを壓へつけてゐませう。――天が無いものになる迄は、あなたは眼を覺ますことが出來ません！……ですが此處では、いとしいお方！愛する私共の眼があなたを搜します、そして見附けます。

あなたは再生する！ことが出來ますよ――私共は、アズテクの僧のやうに、心の臟の血しほを太陽へ擡げますから！』……

五

……非常に暑い。……自分は紙製の日本扇子を手に持つて居る。その扇子の繪は單純極つたもので、細長い尖つた葉の芽生えがたつた一つ附いて居る、節のある青竹が一本、海上の水平線の積もりの淡い青黑い一線を橫ぎつて居る。それだけてある。我が北國の友人達には此圖案は至つて下らぬものに思はれるかも知れぬ。が、自分には、苦痛に近いほどの快感を惹起す。……その美術家が意味して居ることが自分には能く判かつて居る。これは竹といふものを――特殊な位置に在る竹を――見たことの無い人には、判かりやうが無いものである。自分はこの扇子を眺めて居ると、モルン　パルナッスを、うねうねした嶮しい道を傳うて、降つて居る自分の姿が見える。自分の背後に風當たりの好い山があり、左右に森林があり、眼前には自分の眼と同高に橫へ差し出て居る竹の小枝があつて、空と海との相合した瑠璢色が見えて居る、といふ感じがする。いやそれだけでは無い。――そ

の時のいろんな感情が悉く心頭に浮かぶ、——植物の香（にほひ）、熱帯の異常な日の光、暑さ、再現し難い強烈な色、がまた心眼に見える。……疑も無く、その不可思議な筆でこの扇子へ、この繪を走り書きした美術家は、自分がそれを眺めて憶ひ出しはするが、それを他人に傳へることの出來ぬ經驗と、殆ど同じやうな經驗をしたことのある人に相違無い。

……ところで、この『歸り來る者の國（ペイエ・デ・レヴナン）』に就いて自分が書かうとしたものは總て皆、その國を見たことの無い他人には、この扇子の繪同樣、漠としたものしか傳へ得まい、とやうに今は自分に思へるのである。

六

ブルルルルルルルルルルル！……蒸氣捲揚機（スチイームキンチ）が錨を揚げつつある。そしてグアドゥループ丸は、その鐵鎖の鐵の早瀬が錨鎖孔をゴロゴロ流れ出る時、全身の板悉くを打ち震るはせる。終にその戰慄は止む。——一瞬時の靜穩がある。そして菫色の眼は、埠頭の絶えず増す人群れのうちに、その忠實なボンヌの最後の瞥見を捉へようと試みて居るやうに思はれる。……嗚呼！居る居る、——その肩掛を振つて。マドモアゼル　リも亦之に應へてハ

ンケチを振つて居る。……

突然訣別の砲聲が、我々の心臟を通して、入江の上を亙つて、重く震るへる。そして、港を圍む高い山々が、其羽ばたく雷音を捉へて、すさまじい眞似聲をして四方から撃ち返す。すると我々の汽船の背後に白くなつた水がシューと音して大渦卷を一つ起こし――また一つ起こし――また一つ起こす。そしてその渦卷が一條の泡の流になる。巨大な推進機(プロペラー)が運轉して居るのである！……その青い港全體がゆるやかにぐるつと廻はる。――そして、其の陸の綠色の兩腕が、左の方はずつと突き出て來て、右の方は後へ縮かまる。――そして、山々がその肩を動かしつつある。それから多樣な塗り色の家の正面(ファード)が――プラースペルタンの菩滿林度の樹が――燈臺が――頭帕布(タルバン)をかぶつて居る女共が群れ居る長い波止場が――寺院の塔が――美しい棕櫚が――丘の上の彫像が――いづれも向きを變へ、場處を改めて、浮かび去り始める――着々と、頗る迅速に。

さらばよ、美しき町よ――日の接吻を受ける町よ――噴水數多の町よ！――黄色ほの光るなつかしの街路よ――自分の諳記して居る白色の鋪道よ――いつも求め見た人々の顏よ――いつも好きであつた人々の聲よ！さらばよ、金色の喉もつ鐘がある白い塔！――さら

ばよ、常夏の光を浴びる綠の坂路！——森の寶冠をいただく噴火口！——羊齒アンゼラン幷びに羽毛の如き竹の繁茂せるが下をうねり上る輝かしい山路！——死者の上に首を曲げてまどろむ優しの棕櫚！さらばよ、日の光に身を露はならしめる、和らかな影の壯大な谷——海の際まで熟し茂る金交じへた綠の甘蔗畠！……

……町の姿は消えてしまふ。かの島は徐に綠色の一つの陰繪になる。今を去る約四百年の昔——コロムブスがそのカラル〔十五六世紀の快速船〕の甲板から初めてこの島を見た時斯んなであつたらうか。これ程の距離から見ては、それが初めてコロムブスの眼に見えた時と同じて、それには人の暮らして居る氣合は少しも見えぬ。だが、其處には幾多の町があるのである——勞役があるのである——苦痛があるのである——自分を知つてゐた優しい情があるのである。……だがそれが——その美しい恰好が！——青くなりつつ——一つの夢となりつつあるのである。……

七

やがてドミニカが——非常な日光を背に、紫色の節瘤や彎凸や鋸齒に、その山々をきつかり密集させて居るドミニカが——近寄つて來る。段々と近づいて來て、到頭その山々の線が、その紫を通して　色の閃きとなり畝となつて——此處其處から突き出て來る。それから暫しの間不動で居るやうぢつとして居る。——するとその線の光が又消える、——そして、その姿全體が、南の方に横の方へ退きはじめる。

……そして、それまで北の方に眞珠の灰色をした一片の雲と見えて居つたものが、次第に姿が判然として來て、山のある——背の丸い、或は角形の、或は乳狀の山のある——別な島になる。グアドゥルーブがその二重の横顏を見せ始めるのである。が、マルティニークはまだ見ることが出來る。——ペレ山は南の線の上に今なほ高く覗き出て居る。……日が傾く。——船の影が花と青い海水の上に長く伸びる。ペレ山が到頭姿を更へて——靈の如くに淡くなる——が、消え失せようとはせぬ。……

……日が、いつも熱帶で、その死へと沈み行く時するやうに——迅速に——餘りに迅速

に！――沈み始めて、其光耀はうつろな西方總てを金色にし――ちらちらする波頭總てを唐金にする。だがまだ彼の島のやさしげな幻は――その壯麗な霞を通して我等に和やかに附き纏うて――消えようとはせぬ。そしていつも熱帶の風が軟らかくまた暖かく吹いて居る。――それには何とも言ふに言へぬ愛撫がある！恐らくは斯んなやうな、印度洋から吹いて來る微風が、最後の日の風――精靈の大篩に、正しき者の精を神へと吹き送る、彼の『絹よりも軟らかく、麝香よりも芳ばしい黄色い風』――に關しての回々教の彼の豫言を思ひつかせたものかも知れぬ。……

それから、藍色の夜の中へ、自分の眼から永久に、ペレの幻が消えて行く。そして月が――ハンモクに乘つて居るやうに、背を下に眠つて居る、若い、そして横着な月が――飛び出る。……が、もう四五夜經てば、このほつそりした若い月が――北國の麗はしい娘のやうに冷かに美しく――その道を眞直ぐに辿つて――縱に立つのを我々は目にするであらう。

八

そしていつも微温の夜と瑠璃の日とを通してグアドゥループ丸は――まつしぐらに北指して――その跡に、日の下に雪の川をつくり、星の下に、火の早瀬をつくつて――疾走を續ける。

モンスラの――腰から垂らした極めて綠な天鵞絨の上衣！のやうに、和らかい襞のある、美しのモンスラの――山の陰をば――その棕櫚の――クリーオールの子供のやうにほつそりした優美極つた若い棕櫚の――目隱しの後ろなるプリマス町の美しい眠りを破つて――我々の船は走り行く。――

それから、海の霞を透して紫色に見える三つ組死火山がある、高いネギスの横を通り。――セント　クリストフアーの、雲の懸かつて居る巨山の横を通り。――その聖者自らの第二の夏の或る夢のやうに、黄金の霧の中に遙か遠く浮かんで居る、靈の如きセント　マルティンの島の横を通る。――

蟻が棲んで居り、四方は靑と綠とのごちやごちや固まつた小さな丘に境されて居る――

低いアンティグアの青い大きな港の横を通る。——

殆ど林は一つも無いが到る處翠綠に光つて居る——熱帶の光に、完全な彫像のやうに赤裸々の美を見せて居る——『聖十字の島』、サンタ クルッの横を通る。——

左手にポルト リコの空色に長く延びまた高まつて居るのを見、右手には絶望的なセント トマス島を——遠き昔に己が港を見棄てた貿易の往來を眺め、零落した保護者を見棄てる恩知らずの如くに、嘗ては恭しくその庇護を切望して、今はその西班牙の競爭者の方へ轉じて居る船舶を眺めて居る、老セント トマス島を——見て通る。——

それから濛乎たるセント ジョンの幻。——それからトルトラの灰色の精靈、——それから、もつと遠くに、もつと仄かに、なほもつと凄い程かすかに、ヴージン ゴルダの金色の幻。

九

それからは、ただ空と海との巨大な二重の幻があるだけてある。

空。——眼が眩むほどに青い圓頂閣て、世界の緣の處だけぼけて靈の如き綠に淡らいて

居り――夕方を除いては、一日中全く汚點一つ無い空。それから、日が沈むと同時に、羽毛のやうな小さな雲の、輕い金色の流が――火の雪で點彩するやうにそれを點彩して――現はれ出る。

海。――花のやうな色合といふ語が、その半透明な色の輝かしさを形容することが、もう出來なくなる。その色味を變へて居るのである。――といふのは、瑠璃色の海流へ船は入つて居るからである。燃えて居るシャン以上の華麗な色である。……

だが、夜間、南半球の十字星はもはや姿を見せぬ。そして日につぐに日を以つてするに從つて、他の變化が遣つて來る、――明かるい時間が長くなること、夕燒けが前よりも長い間たゆたふこと、それから風が涼しくなることとである。朝毎に空氣が少し涼しく、少し稀薄になるやうに思はれる――正午毎に空が少し淡くなり、少し遠くなるやう思はれる――いつも高くはなるが、その上にまた、その色が遠のいて距離の爲め、ぼかされるかのやうに――より洪大な高さからして、より仄かに降り來るかのやうに――前よりも濛として。

……マドモアゼルは婦人船客に子供のやうに鍾愛される。そして男子は誰れも彼れも、

その航海を愉快なものたらしむるに力を添へようと心を配つて居るやうである。その多くに對しては、自分は思ふに、孃はその眼に感謝してよからう。

一〇

朝は曇つてゐて寒い。――何も無い空と日の光の無い海と。盲目な灰色な海に圓うなつて居る、色の無い水平線がある、北國の薄暗い天。……その冷たい霧に觸れると、その夜明けの妖異な陰鬱に接すると、何たる突然の重さが情へ遣つて來ることか！――そしてその時、後に殘して來た、消えた瑠璃色を欲する何たる愚かな然し抵抗し難い熱望が起こつて來ることか！

……彼の小さな猿は、冷たい空氣に顫るへて、悲し氣にキイキイ鳴いて居る。鸚鵡は何も言はぬ。麻痺したやうな顔をして、眼を閉ぢて止まり木に坐つて居る。

……左舷遙かに、濛としたものが、海の縁に沿うて形を現はしそめる。陸地が近いことを示す所のあの長い重々しい雲である。すると、それからして、夢の流の如くに光を薄らがせて海を翳らせる何だか靈のやうな冷かさうなものが今浮かんで來る、――ジエルシイ

海岸の霧なのてある。

急に機關がその呼吸を緩める。グアドゥルーブ丸はその警告の汽笛を——規則正しく二分置きに——鳴らし始める、——今や大洋航海の船舶の通路へ來て居るからてある。すると、遙か遠くから、重々しい鐘の音が——大きな鐘のグアングアンいふ音が——きこえて來る。

……一切が白い薄明かりに包まれる。水平線の在り場は消えて居る、——我々は煙の壁に四方鎖ざされて居るやうてある。……その蒸氣の空漠の中から——全く突然に——巨大な汽船が、山の如く聳えて、突進し來たつて、——その人顏が見えるほど近く横を通つて、そして高まりつゝ、沸きつする海水を後に殘して、またもその姿を消す。

……自分はその船跡の渦卷を見に欄干に凭れて居ると、何かが自分の袖を引くのに氣附く。手て——小さな黑い手て——サキキンキの手なのてある。あの小猿のうちの一匹が、その綱を一パイに引張つて、人間の同情に對するこの無言な訴へを爲して居るのてある。——その二匹の鳥と黑い眼は、奇怪極る嘆願の色を浮かべてぢつと自分を眺めて居る。憐れな熱帶の亡命者よ！自分はそれをあやしに屈む。が、直ぐとその衝動を悔む。それは、

その二匹を後にして去らなければならぬやうになると、如何にも懇願するやうな叫びを發するからである。……

……刻一刻とグアドゥループ丸はその白い朦朧の中を――用心深く、恰も手探りてもするやう――滑つて行く。いつもその汽笛を鳴らし、その鐘を響かせて。すると到頭、兩側鳶色の小舟が、水先案内を乘せて、霧の中から飛んで來る。……欄干に凭れて無言で立つて居るマドモアゼルには此等すべてがどんなに奇異であらう！ゴールを冠つて居るこの世界が、己が西印度の空のサファイア爲す光と、己が熱帶の海の偉大なウルトマリン色の輝きとの後で、どんなに不思議に思はれることであらう！

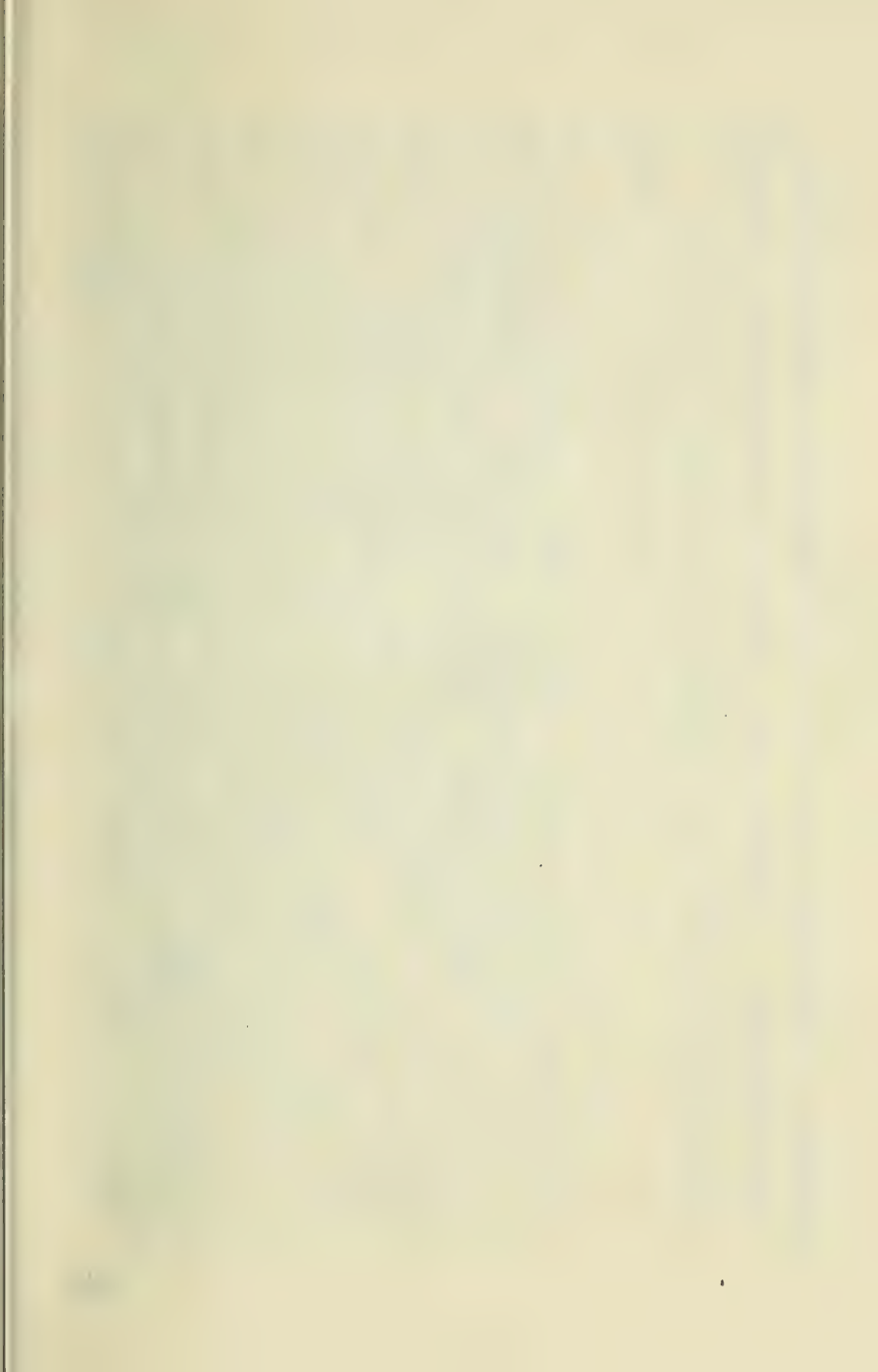
が然し風が吹いて來る！――それが強くなる――非常に冷たい風になり出す。風に吹かれてその霧が薄らぐ。そして、何も無い青白い空が、鐵灰色の海のまはりに鉛色の水平線を着けて、また見えて來る。

……汝、薄暗いそして高い北國の天よ――オーディンの灰色な空よ――汝の風は劇しく、汝の色は總て靈のやうである！――汝の下に住んで居る者どもは、常夏の綠の華やかさを――南國の日の瑠璃色の輝かしさを――知つては居らぬ！――が、人間の眼に太陽と太陽

との間の空間を輝かすところの思想の電光は汝のものである。偉力の幾代は——奮鬪者は、戰鬪者は——自然を我が物と馴らす人間は——汝のものである。——靈感と事業との領土は——より大なる勇壯、永續するより盛んな勞働、より高い知識、そして科學のあらゆる魔術は　汝のものである！……

然しながら我々の銘々には、自我ではあるがしかもその上に自我よりも無限に大きな、不可思議な或る物が——理解の出來ない程種々雜多な要素から成つて居る或る物が——知り得べからざる過去のものたる幾多の感情衝動小心の複雜な累計が——住んで居るのである。それて、熱帶から遣つて來た此の小外國人の唇は眞つ白になつて居る　その心裡の或る物が——此處よりもつと輝かしい或る世界の光と休息と不思議な色とを愛して居た幾代もの人々からの靈的な遺産たる或る物が——この淡色な冷かな北國を恐るゝ念を以つて、今、その娘の心臟のあたりへちぢかみ退いて居るが爲めである。……すると、どうてあるか！——我々の眼前に、夢の灰色の壯麗さに幅一哩に開けて——無數の迷路爲す帆檣を透して、遠く伸びに延びて、水蒸氣に包まれた遠くまで擴がつて——紐育港の偉大な遠景が現はれて來る！……

あなたは御存知てはありません、この私共のまはりの薄暗さを、お嬢さん。――私共が今入りつゝあるのは魔法的な暗がりに過ぎません――いろんな不可思議が、その中で成就されねばならぬ、あの神祕な暗がりに過ぎません！……現はれ出づるあの驚く可き姿のものを――あの巨大なものを、あの怪しむべきものを、御覽なさい！そして今暫くして、この都市の幾百の心臓を有つて居る生（せい）の浪の中に私共が互に永久に沒してしまふ時に、もつと偉大な他の不可思議なものを御覽になることでありませう！……此處の物は、これはみんな影だ、とさう仰しやるのですか？――えゝ、あなたが其處からお出でになつたあの輝かしさと比較すれば、本當に、薄明りであります、リ様、――全く薄明りであります――然し、神々の薄明りで！あります。……アデュー、シエ！――ボン・ディエ　ケ　ベニッー！……

附録

クリーオールのメロディー

一百餘年前、ティボー　ドゥ　シャンヴョンは、マルティニークの奴隷の歌と奴隷舞踊の特徴を寫して居る。妙趣と驚く可き節奏(リズム)とに對して、その驚嘆の念を表明した。黑人の節奏感念が殊に氏を感動させたのであつた。彼は斯う書いて居る、『七八百人の黑人が歌の音に合はせて婚禮の宴會に隨ひ行くのを見たことがある。飛び上がつては一緒に足を落とす。――その運動が如何にも正確で一樣で、足をおとした時の響がただの一音にきこえる程であつた』

サン　ピエールでの謝肉祭の季節には――その折には、囃しの文句の時、手を打ち飛び上がる幾百人の子供が後にして、惡魔が夜々町を廻はり歩くのであるが――それと殆ど同樣の現象を目擊することが出來る。また皆が能くやる、クリーオール語でピャといふ、人いぢめの或る習慣でも之を見ることが出來る。其奴を窘めても大丈夫であり至當であると思ふと、幾百といふ人が街道でその男の後からぞろぞ

ろ隨いて行つて、みんな手を打ち、またきちんと拍子を合はせて踊るなり走るなりする。その踝足が廻面を同時に踏む音が揃つて居る。そのピヤ合奏を、その婢はれて居る當人の邸宅の前に位置を占めて、それから遣り出すこともある。そんなピヤの一例を、後に掲げる『ロエマ　トムベ』といふ唄で知られたい。誰れか一人が歌ふ即席製の文句がピヤの初になる。かうも譯したらよからうか。――

（一人の聲で）　其處な小さい子！川べりに居たお前！
　聞かしてお呉れよ、本當によ――ロエマの落ちるを見たのかどうか？
　聞かしてお呉れよ、本當にさ――
（合唱はじまる）　ロエマの落ちるを見たのかどうか？
（一人の聲で）　聞かしてお呉れよ、本當にさ！
（合　唱）　ロエマの落ちるのを見たのかどうか？
（一人の聲で、前より早く）　聞かしてお呉れよ、本當にさ！
（合唱、前より早く）　ロエマの落ちるを！
（一人の聲で）　聞かしてお呉れよ、本當にさ！
（合　唱）　ロエマの落ちるを！
（一人の聲で）　聞かして、呉れよ、本當にさ！

（合唱はいつも次第に早くなり、次第に聲高くなり、みんなの拍手は小銃の射撃のやうに響く）

同じ節奏的な要素が、マルティニークの兒童の遊戲と圓陣踊りの特徵を爲して居る。――が、概して云つて、拍子といふ感念は、黑人子供よりか有色人子供の方が發達が後れて居ることが認められる。

マルティニーク音樂の見本として揭げる他のメロディーは、亞非利加要素が前のものよりも少い。それに一番近いのは『タン　シロップ』である。が、いづれも皆、多分、混血人種の所產であらう。『マリー・クレマンス』は作つてから四年も經たぬ謝肉祭時の諷刺歌である。『ト・ト・ト』は餘程古い――恐らくは、遠く所謂自由時代のものであらう。舊統治時代の生存者のほか、それを歌ふものは滅多に無い。あんな歌をつくらすやうにした感情のやさしみと眞面目さは――心情の昔の麗はしさと思想の單純さとは――永久に失せんとしつゝある。

音樂講演者であり批評家であり――人種的音樂研究の史實家であつて同時に民俗學者である我が友ヘンリー　エドワード　クレービールと――紐育作曲家フランク　フワン　デル　ストュッケン君とに――歌唱及びピアノフォートに對する此四メロディーの譜作りを負うて居る。『ト・ト・ト』と『ロニヤ　トムベ』のはフワン　デル　ストュッケン君にこしらへて貰つた。

"TO-TO-TO"

(*Creole words*)

MARIE-CLEMENCE

(Creole words)

la-gué moin! Moin ké né-yé cò moin, Moin ké né-yé

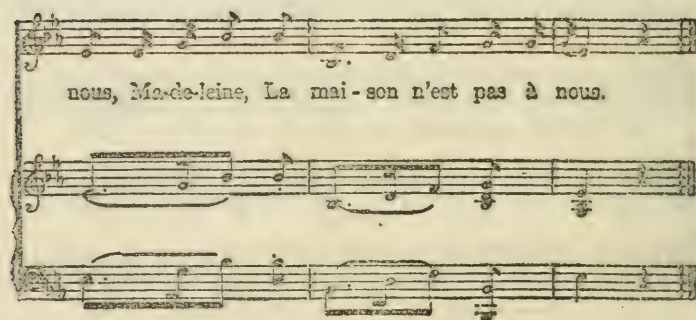
ad lib.

Ped.

D. C. al 𝄋

cò moin, En-ba gouôs pile cuêche là.

TANT SIROP EST DOUX

(Negro-French)

douz! douz! Ne fai pas tant de bruit, Ma-de-leine, Ne
fai pas tant de bruit, Ma-de-leine, La mai-son n'est pas à
nous, Ma-de-leine, La mai-son n'est pas à nous.

LOEMA TOMBE

(Creole words)

あとがき

本書（原名 Two Years in the French West Indies）は、原著者がそのはしがきに述べて居る通り、一度ハーパース雜誌に載せた、佛領西印度の記行文と、後ち物した同地に關したスケッチとを集めて、千八百九十年に出版したものである。本書の單行本には、はしがきの結末の文で知られるやうに、銅版の挿繪が四十四入つて居るが、この譯書にはそれは載せなかつた。

譯文中括弧內の六號二行の文句は譯者が挿入したものであることを斷つて置く。

餘談てはあるが、明治二十九年か三十年かの或る日、譯者は原著者の書齋て、千八百九十年十二月一日キムボール朗讀會館て開かれた朗讀會のプログラムを見て、當日幾多の人士が朗吟したものが悉く原著者の『チタ』の拔萃てあつた事を知つて、驚いたことを記憶して居る。千八百九十年は卽ち本書出版の年てある。前年出版の『チタ』てその文名を謳はれた原著者が本書によつて更にその文名を高めたことは想像するに難くは無い。センチ

ユリイ大字典が語詞の解釋に次いで掲げて居る用例に本書から引用して居るものが鮮くないことを見てもさうと察せられる。例へば frondescence といふ語は時に leafage, foliage の意味に用ひるが、その用例は『熱帶への眞夏旅』の八のうちにある原著者の文一つを掲げて居り、fer-de-lance といふ語を含んだ文例としては同十三のうちにある文一つを掲げて居り、rugose といふ語を含んだ文例としては同十五のうちにある文も掲げて居り、violaceously といふ語を含んだ文例としては同十七のうちにある文を掲げて居り、fantasticality といふ語を含んだ文例としては同二十六のうちにある（書物にされた時には You observe ……plants that do not look like natural growths, but like idealizations of plants, ——those beautiful fantasticalities imagined by sculptors. と修正されて居る。字典に載つて居るのは初め雜誌に出た時の文で後半が but like idealizations of plants, like the fantasticalities of wood-corvers and stone-cutters animated by witchcraft となつて居る）文を掲げて居る。

　原著者は本書の校正その他にフィラデルフィアに赴き、事終つてからニユー・ヨークへ歸つて直ぐとまたなつかしの西印度へ赴く考であつたが、ハーパース兄弟會社は前にその雜誌に本書の内容を成すものの數文を載せて讀者の愛讀を得たのを見て、日本に關して同じやうな文を物せしめようと計つて原著者に日本行を委囑したのであつた。そんな因緣を

思ひ、そして本書と日本渡來後最初の著書たる『知られぬ日本の面影』とを讀み比べるのは興味少からぬ事であらう。

大正十五年十一月

大谷正信

第二卷要目索引

Martinique ſketch	マルティニーク・スケッチ
1. Les Porteuses.	1. 荷運び女
2. La Grande Anse.	2. グランド・アンス
3. Un Revenant.	3. 歸り來る者
4. La Guiablesse.	4. 魔　女
5. Le Vérette.	5. 疱　瘡
6. La Blanchisseusses.	6. 洗濯女
7. La Pelée.	7. ペレ山
8. 'Ti Canotié.	8. 空船乘の子供
9. La Fille de Couleur.	9. 有色人の娘
10. Béte-ni-Pié.	10. 百足蟲
11. Ma Bonne.	11. 自分の下女
12. "Pa combiné, chè!"	12. 《パ・コムビネ、シニ》
13. Yé.	13. エ
14. Lys.	13. リ
15. Appendix.	15. 附　錄
Some Creole Melodies.	クーリオールのメロデイー

（家庭版）小泉八雲全集 全十二卷 內容

第一卷
異文學遺聞。
支那怪談。
チタ。ユーマ。

第二卷
佛領西印度の二年間

第三卷（上）
知られぬ日本の面影

第四卷（下）
知られぬ日本の面影

第五卷
東の國から。
心。

第六卷
佛の畠の落穗。
異國情趣と回顧。
日本お伽噺。

第七卷
靈の日本。
影。
日本雜錄。

第八卷
骨董。
怪談。
天の河緣起。

第九卷
神國日本。

第十卷
文學論。

第十一卷
きまぐれ。
クリーオール小品。
神戶クロニクル社說
隨筆八種。

別冊
小泉八雲。